

横川大林遺跡  
(上ノ平遺跡)

横川萩の反遺跡  
(萩の反遺跡)

原遺跡  
(坂本遺跡)

西野牧小山平遺跡  
(恩賀遺跡)

1997

日本道路公団  
群馬県教育委員会  
松井田町遺跡調査会

よこ 横川 かわ おお ばやし 遺跡  
( 上ノ平遺跡 )

よこ 横川 かわ はぎ の 反そり 遺跡  
( 萩の反遺跡 )

はら 原 遺跡  
( 坂本遺跡 )

にし 西野 牧野 まき お やま たいら 遺跡  
( 恩賀遺跡 )

1997

日本道路公団  
群馬県教育委員会  
松井田町遺跡調査会



1. 西野牧小山平遺跡全景（空撮）



2. 同 遺物出土状況



1. 西野牧小山平遺跡出土石棒



2. 同 石棒製作工具（敲き石）

## 序 文

上信越自動車道の建設に伴い、本調査会が発足したのは昭和62年11月のことでした。発掘調査では、縄文時代を中心に弥生、古墳、奈良、平安、中～近世と、私たちの祖先の足跡が間断なく発見されました。ここに至り、ようやくその成果を報告する次第であります。

縄文時代では、国内初の発見となった石棒製作跡の西野牧小山平遺跡をはじめ、早期土器を伴う横川大林遺跡、クッキー状炭化物が出土した行田大道北遺跡、弧状配石墓群の行田梅木平遺跡など、全国規模の重要遺跡が発見されました。また、縄文時代前期から平安時代までの集落である八城二本杉東遺跡、大型掘立柱建物跡の検出で古代東山道の駅家を示唆する原遺跡も注目を集めた遺跡でした。

本町においては、計11箇所の遺跡が発見された訳ですが、これらはこれまで調査されたものとともに、郷土の生い立ちを示す貴重な遺産であります。今でこそ電車や自動車、また飛行機でと、交通の利便性はとどまるところを知りませんが、古くは碓氷峠の峰が行く者の前に大きく立ちはだかったことでしょう。縄文やそれ以前から人々の地域間の交流があったといわれるようですが、遺跡に見られる祖先達の営みの積み重ねの上に現代の私達の文化が成り立っているということ、このことをあらためて認識することが大切のだと思います。

ここに刊行いたします報告書が、広く皆様に活用されることを祈念するとともに文化財に対する認識を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業を通じて御指導・御協力をいただいた日本道路公団、群馬県教育委員会、実務の全てを遂行された山武考古学研究所、また、調査に従事された全ての方々に厚く御礼を申し上げ、序文とさせていただきます。

平成9年3月

松井田町遺跡調査会  
会長 武田 弘

## 例　　言

1. 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い、事前調査された群馬県碓氷郡松井田町に所在する横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会の指導で、松井田町教育委員会に松井田町遺跡調査会を設置し、実施したものである。
3. 発掘調査及び整理作業は松井田町遺跡調査会より委託を受けた山武考古学研究所が担当した。
4. 本遺跡の名称は、群馬県教育委員会が行った昭和60年度の事業路線内遺跡分布調査に基づくものであったが、大字・小字名に変更する事が妥当と考え、協議の上以下の遺跡名に変更した。

旧　　遺　　跡　　名	新　　遺　　跡　　名
上ノ平遺跡	横川大林遺跡　（よこかわおおばやしいせき）
萩の反遺跡	横川萩の反遺跡　（よこかわはぎのそりいせき）
坂　　遺　　跡	原　　遺　　跡　（はらいせき）※発掘調査時に変更
恩　　遺　　跡	西野牧小山平遺跡　（にしのまきおやまだいらいせき）

5. 遺跡の所在地・面積・調査期間・調査・整理担当は下記の通りである。

### 所在地・面積

横川大林遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字横川字大林980-1他	8,570m <sup>2</sup>
横川萩の反遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字横川萩の反1091-3他	183m <sup>2</sup>
原　　遺　　跡	群馬県碓氷郡松井田町大字原字西浦410-8他	1,588m <sup>2</sup>
西野牧小山平遺跡	群馬県碓氷郡松井田町大字西野牧字小山平1701他	6,640m <sup>2</sup>

### 担当者

横川大林遺跡	高柳正春・荒井英樹・長谷川一郎・福山俊彰
横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡	福山俊彰・桐谷 優

### 発掘調査期間

横川大林遺跡	平成元年6月18日～平成元年11月30日、平成2年8月6日～平成3年7月3日
横川萩の反遺跡	平成元年11月10日～平成2年1月6日

原　　遺　　跡	昭和63年11月4日～平成元年3月15日
---------	----------------------

西野牧小山平遺跡	昭和62年12月9日～昭和62年12月23日、昭和63年5月9日～昭和63年11月15日
----------	--

### 整理期間

平成8年4月1日～平成9年3月31日

### 整理担当

横川大林遺跡・西野牧小山平遺跡	福山俊彰
横川萩の反遺跡・原遺跡	桐谷 優

6. 発掘調査に於いて測量は関成測量株式会社、航空写真は有限会社青高館、自然科学分析はパリノ・サー・ヴェイ株式会社・古環境研究所・立教大学に依頼した。

7. 本書の作成にあたり、出品及び図書整理には以下の方々の協力を得た。

井上とみ子・江口弘子・金子浩美・河村公子・黒田宣子・小山みさ子

田中文彩・藤井陽子・藤曲ひろ子・山口トモ子・樋本時子

8. 本書の編集は福山俊彰が行った。執筆は以下の通りである。

- |                 |                           |
|-----------------|---------------------------|
| 序 章 第1節         | 飯塚 聰（群馬県教育委員会）            |
| 第2・3節           | 田口 修（松井田町教育委員会）・福山俊彰・長井正欣 |
| 横川大林遺跡・西野牧小山平遺跡 | 福山俊彰                      |
| 横川荻の反遺跡・原遺跡     | 桐谷 優                      |

9. 横川大林遺跡の石器については、富里町教育委員会 篠原正氏の御指導をいただき、玉稿を賜った。
10. 西野牧小山平遺跡の石棒・大山周辺の地質・地形については、群馬県立博物館副館長 秋池武氏の御指導をいただき、附録「初鳥屋遺跡」の玉稿を賜った。
11. 本遺跡の記録類・出土遺物は報告書刊行後、松井田町教育委員会が保管している。
12. 発掘調査の実施及び報告書刊行まで下記諸機関・諸氏の御協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（敬称略）

群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団  
青木自由治・天下 明・折原伸二・黒坂周平・小島俊彰・瀧谷昌彦・島田敏男・鈴木徳雄  
早田 勉・大工原農・谷藤保彦・田村公夫・戸田哲也・長谷川福次・早川正一・林 直樹  
三浦京子・水澤祝彦・宮本長二郎・斎藤彰治朗・山口逸弘・山本暉久・綿田弘実  
立教大学・古環境研究所・パリノ・サーヴェイ・青高館・開成測量・新成田総合社

13. 発掘調査参加者（敬称略）

新井美喜雄・浅井芳子・安藤とく・飯塚崇司・石井きち・石井シマ・石井とみ・飯野ふみよ・飯野直・五十嵐昌子・伊丹節子・伊丹松子・入村きよ子・岩井しづ・岩井登美枝・岩井明美・岩井道子・上原はづ・上原好江・上原春枝・浦野美奈子・大井千津代・大塚美恵子・大塚ちよ子・大塚虎雄・大塚守・岡部みや子・尾高小鈴・尾高淑子・大野ひろ子・岡田ウメ・岡田早百合・大手チヨ・大手ふじ江・大手いね・片貝和子・加藤震二・門脇さかゑ・金井綾子・竜島恵美子・金井文子・金井みつる・金井輝秋・金井はる・柏木亀藏・黒田静子・小泉美津子・小板橋静乃・小板橋百合子・小板橋朋子・小坂横守・神小柴エイ・小清水子之吉・小林節子・小林ちえ・小此木敏江・小此木三代子・齊木恒男・齊藤澄野・佐藤イト・佐藤角司・佐藤いさ枝・佐藤友江・佐藤和江・佐藤千代・佐藤千代・佐藤フジエ・佐藤フミ子・佐藤正子・佐藤幸枝・佐藤重雄・佐藤亨・佐藤ハナ・佐藤茂子・佐藤なか子・佐藤はづ江・佐藤幸子・酒井善三郎・桜井きみ江・桜井慎三・桜井真子・猿谷正枝・猿谷光弘・島田可憲江・島田清・清水かず恵・清水きち子・清水文子・神宮千代子・神宮房子・塙谷とめ子・清水千秋・清水路子・白石弘子・鈴木喜代子・鈴木久栄・鈴木弘子・鈴木はな子・鈴木百合子・菅野とみ江・武井數子・武井健・武井イツ子・武井よし江・武井より子・高橋きくの・高橋美代・高橋達三郎・田村たか子・田村成子・田村綾子・田村春子・高橋恒雄・高橋みさ子・高橋好仁・高橋久子・高橋百合子・武田アサ子・武田金作・谷口英夫・田畠益司・田中今造・田中一夫・田中繁次郎・田中実・土屋寅太郎・土屋一大・寺島ハツ子・都丸孝江・富沢昭夫・富沢昭子・勘使河原酉造・中島三代子・中山良子・中沢スミ子・中澤次夫・中島要・中山俊子・中原ケサ・中山寅男・永井千津子・永井禎子・鍋岡久子・新田恒夫・庭種玲子・野田絹子・野田達也・萩原君代・馬場ツヤ子・広木和子・廣瀬成美・平石信好・福安正男・藤巻勝江・藤巻武雄・古谷久子・萩原君代・萩原信子・松本モト子・松本三江・松本博・松本芳・丸山トク・三田今朝次・三浦あさ・黛恒三郎・黛典子・黛正代・毛利ヨシエ・欠野由利子・欠野政次郎・山崎二三子・山口一男・吉川勝哉・横尾はじめ・若島清美

## 凡　例

- 序章第1図・第2図は松井田町誌掲載の地質図・河岸段丘図を加筆転載した。第3図は松井田町役場発行2万5千分の1『松井田町』を6万分の1に縮小して使用した。第4図は松井田町役場発行5千分の1地形図7・10を7千5百分の1に縮小して使用した。
- 横川大林遺跡位置図・空撮対比図には国土地理院作製2万5千分の一「三ノ倉」「松井田」「輕井沢」「南輕井沢」、原遺跡位置図には「輕井沢」、西野牧小山平遺跡と周辺の遺跡図には5万分の1「御代田」、大山地形図・断面図・空撮対比図には2万5千分の1「南輕井沢」を使用した。
- 各遺跡の周辺地形図・調査区設定図には松井田町役場発行5千分の1地形図を使用した。
- 遺構実測図中の方位は座標北を示し、基本堆積土層図及び造構土層図・断面図に示した数値は標高を示している。
- 本書の挿図縮尺は下記の通りである。

### 横川大林遺跡

トレンチ設定図-1/3,000 基本堆積土層図-1/60 調査区配置図-1/200 造構配置図-1/600  
住居跡・土坑-1/60 炉跡・集石・焼土跡-1/30 地割れ跡・畠跡-1/120 溝跡-1/600  
溝跡・畠跡土層図-1/60 土器・石器-1/2・1/3・1/4 小形石器類-2/3

### 横川萩の反遺跡

トレンチ設定図-1/2,000 グリッド設定図-1/800 基本層序図-1/40 造構配図-1/300  
住居跡-1/60 カマド-1/30 上器・石器-1/3

### 原遺跡

トレンチ設定図、1号溝・1号土坑位置図-1/2,000 全体図、グリッド設定図-1/600  
基本層序模式図-1/20 住居跡・土坑-1/60 カマド-1/30 溝-1/120  
1号掘立柱建物跡-1/120 1号掘立柱建物跡土層図-1/80・1/40  
1号掘立柱建物跡の規模の復元と床東想定位置図-1/200 土器・石器-1/3

### 西野牧小山平遺跡

西野牧小山平遺跡全体図-1/300 周辺地形図-1/5,000 トレンチ・調査区設定図-1/1,500  
基本堆積土層図-1/60 道路全体図-1/800 石棒出土状況図-1/60 石棒詳細図-1/30  
石棒-1/6 石棒破片・剥片・敲き石-1/3 1号埋設土器-1/30 1号埋設土器実測図-1/6  
土器-1/3 石器-1/3・2/3 土坑・井戸跡-1/60 石棒製作工程-1/12 敲き石分類図-1/6

- 遺物番号は本文・挿図・写真番号とともに一致している。
- 遺物写真図版の縮尺は基本的に挿図と同縮尺としたが、大形土器・石器は縮尺率を変えて掲載し、石器・原石・石核・剥片等の小形石器類は等倍で掲載した。

8. 横川大林遺跡・西野牧小山平遺跡の石器類に付した計測・観察表は下記の意味を表す。

石器類

西野牧小山平遺跡石棒

長さ×幅×厚さ cm  
重量g：石材

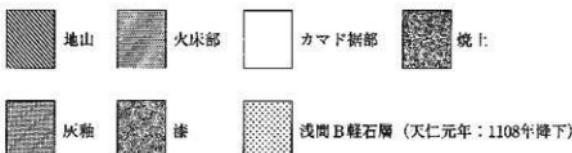
長さ×幅×厚さ cm：重量kg  
製作段階：備考

9. 本書の挿図に使用した記号・スクリーントーンは下記の意味を表す。

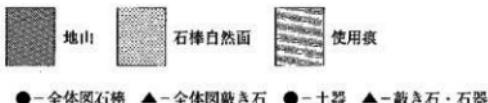
横川大林遺跡



横川萩の反遺跡・原遺跡



西野牧小山平遺跡



## 目 次

卷頭図版  
序 文  
例 言  
凡 例  
抄 錄

## 序 章

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 遺跡の位置と考古学的環境	3
第 3 節 調査会の経過	9
第 1 図 松井田町地形図	2
第 2 図 松井田町遺跡分布図	5
第 3 図 上信越自動車道（関越自動車道上越線）路線図	11
第 1 表 松井田町遺跡一覧表（1）	7
第 2 表 松井田町遺跡一覧表（2）	8
第 3 表 松井田町遺跡調査会組織表1（昭和62年度～平成3年度）	9
第 4 表 松井田町遺跡調査会組織表2（平成4年度～平成8年度）	10

## 横川大林遺跡

### 本文目次

第 1 章 遺跡の立地	1
第 2 章 調査の方法と経過	5
第 1 節 調査の方法	5
第 2 節 調査の経過	6
第 3 章 遺跡の土層	7
第 4 章 検出された遺構と遺物	9
第 1 節 遺跡の概説	9
第 2 節 繩文時代	9
早期前半	10
住居跡	10
土 坑	15
集 石	16
地割れ跡	16

早期後半	17
上坑	18
土坑出土遺物	40
集石炉	48
焼上跡	49
前期・中期	51
住居跡	52
1号埋設土器	56
土坑	57
遺構外出土土器	68
遺構外出土石器	107
大形剥片や自然石を素材とした石器類	107
小形石核の剥片を素材とした石器群	131
第3節 近世	144
溝跡	144
島跡	144
第5章 調査の成果	145

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第19図 早期後半土坑5	26
第2図 調査区設定図	2	第20図 早期後半土坑6	27
第3図 トレンチ設定図	3	第21図 早期後半土坑7	28
第4図 基本堆積土層図	7	第22図 早期後半土坑8	29
第5図 調査区配置図	8	第23図 早期後半土坑9	30
第6図 南調査区縄文早期前半遺構配置図	10	第24図 早期後半土坑10	31
第7図 5号住居跡・出土遺物	11	第25図 早期後半土坑11	32
第8図 6号住居跡・出土遺物	12	第26図 早期後半土坑12	33
第9図 7・8号住居跡	12	第27図 早期後半土坑13	34
第10図 9号住居跡・出土遺物	13	第28図 早期後半土坑14	35
第11図 早期前半土坑・出土遺物	14	第29図 早期後半土坑15	36
第12図 7号集石	16	第30図 早期後半土坑16	37
第13図 地割れ跡	16	第31図 早期後半土坑17	38
第14図 南調査区縄文早期後半遺構配置図	17	第32図 早期後半土坑18	39
第15図 早期後半土坑1	22	第33図 早期後半土坑出土遺物1	42
第16図 早期後半土坑2	23	第34図 早期後半土坑出土遺物2	43
第17図 早期後半土坑3	24	第35図 早期後半土坑出土遺物3	44
第18図 早期後半土坑4	25	第36図 早期後半土坑出土遺物4	45

第37図	早期後半土坑出土遺物 5	46	第70図	遺構外出土上土器14	82
第38図	早期後半土坑出土遺物 6	47	第71図	遺構外出土土器15	83
第39図	1 ~ 6 号集石炉	48	第72図	遺構外出土土器16	84
第40図	2 ~ 6 , 8 , 10 , 11号焼土跡	49	第73図	遺構外出土上土器17	85
第41図	南湖地区縄文前期・中期遺構配置図	50	第74図	遺構外出土土器18	86
第42図	縄文前期・中期遺構配置図 2	51	第75図	遺構外出土土器19	87
第43図	3号住居跡・出土遺物	52	第76図	遺構外出土石器 1	112
第44図	4号住居跡・出土遺物	53	第77図	遺構外出土石器 2	113
第45図	1号住居跡・出土遺物	54	第78図	遺構外出土石器 3	114
第46図	2号住居跡・出土遺物	55	第79図	遺構外出土石器 4	115
第47図	1号理設土器・出土遺物	56	第80図	遺構外出土石器 5	116
第48図	前期・中期土坑 1	60	第81図	遺構外出土石器 6	117
第49図	前期・中期土坑 2	61	第82図	遺構外出土石器 7	118
第50図	前期・中期土坑 3	62	第83図	遺構外出土石器 8	119
第51図	前期・中期土坑 4	63	第84図	遺構外出土石器 9	120
第52図	前期・中期土坑 5	64	第85図	遺構外出土石器 10	121
第53図	前期・中期土坑 6	65	第86図	遺構外出土石器 11	122
第54図	前期・中期土坑 7	66	第87図	遺構外出土石器 12	123
第55図	前期・中期土坑 8	67	第88図	遺構外出土石器 13	124
第56図	3 , 20 , 21 , 35号土坑出土遺物	67	第89図	遺構外出土石器 14	125
第57図	遺構外出土土器 1	69	第90図	遺構外出土石器 15	126
第58図	遺構外出土上土器 2	70	第91図	遺構外出土石器 16	127
第59図	遺構外出土土器 3	71	第92図	遺構外出土石器 17	128
第60図	遺構外出土土器 4	72	第93図	遺構外出土上土器 18	129
第61図	遺構外出土上土器 5	73	第94図	小形石核と石核出土状況濃淡図	130
第62図	遺構外出土土器 6	74	第95図	小形石核と石器 1	137
第63図	遺構外出土土器 7	75	第96図	小形石核と石器 2	138
第64図	遺構外出土上土器 8	76	第97図	小形石核と石器 3	139
第65図	遺構外出土土器 9	77	第98図	小形石核と石器 4	140
第66図	遺構外出土土器 10	78	第99図	小形石核と石器 5	141
第67図	遺構外出土上土器 11	79	第100図	小形石核と石器 6	142
第68図	遺構外出土土器 12	80	第101図	小形石核と石器 7	143
第69図	遺構外出土上土器 13	81	第102図	溝跡・崩跡	144

## 表 目 次

表 - 1	早期前半土坑一覧表	15	表 - 3	早期後半土坑一覧表 2	19
表 - 2	早期後半土坑一覧表 1	18	表 - 4	早期後半土坑一覧表 3	20

表-5	早期後半土坑一覧表4	21	表-17	遺構外出土土器観察表9	96
表-6	前期・中期土坑一覧表1	57	表-18	遺構外出土上土器観察表10	97
表-7	前期・中期土坑一覧表2	58	表-19	遺構外出土土器観察表11	98
表-8	前期・中期土坑一覧表3	59	表-20	遺構外出土土器観察表12	99
表-9	遺構外出土土器観察表1	88	表-21	遺構外出土上土器観察表13	100
表-10	遺構外出土土器観察表2	89	表-22	遺構外出土土器観察表14	101
表-11	遺構外出土上土器観察表3	90	表-23	遺構外出土土器観察表15	102
表-12	遺構外出土土器観察表4	91	表-24	遺構外出土土器観察表16	103
表-13	遺構外出土土器観察表5	92	表-25	遺構外出土土器観察表17	104
表-14	遺構外出土上土器観察表6	93	表-26	遺構外出土土器観察表18	105
表-15	遺構外出土土器観察表7	94	表-27	遺構外出土土器観察表19	106
表-16	遺構外出土土器観察表8	95	表-28	石器集計表	135

## 写真図版目次

図版1	横川大林遺跡 空撮 (国土地理院1991年撮影 KT-91-IX C7-2)		図版6-5	232号土坑 - 6 238号土坑 - 7 241号土坑 - 8 242号土坑
図版2-1	調査前現況 - 2 同		図版7-1	南調査区斜面部 遺物出土状況 - 2 同 遺構確認状況
図版3-1	遺跡遠景(空撮) - 2 トレンチ設定状況(空撮)		図版8-1	南調査区斜面部 遺物出土状況 - 2 II-7グリッド 遺物出土状況
図版4-1	3~5トレンチ - 2 8トレンチ - 3 14トレンチセクション - 4 24トレンチ - 5 29トレンチ - 6 42トレンチ - 7 南調査区 基本堆積上層 - 8 同		図版9-1	南調査区台地上 遺物出土状況 - 2 南調査区 遺物出土状況
図版5-1	5号住居跡 - 2 同 覆土堆積状況 - 3 同 完掘 - 4 6号住居跡検出状況 - 5 同 完掘		図版10-1	南調査区全景(空撮) - 2 南調査区土坑群
図版6-1	9号住居跡 - 2 同 完掘 - 3 7号集石 - 4 南調査区地割れ全景		図版11-1	南調査区遺構遺物出土状況 - 2 同 - 3 同 - 4 同 - 5 同 - 6 同 - 7 同 - 8 同
			図版12-1	H-7グリッド 遺物出土状況 - 2 同 - 3 同

- 図版23-4 南側発区全景
- 5 F-8 グリッド遺物出土状況
  - 6 同
  - 7 I-8 グリッド石皿出土状況
  - 8 トレンチ内石皿出土状況
- 図版24-1 3号住居跡
- 2 4号住居跡
  - 3 1号住居跡
  - 4 同 炉跡
  - 5 2号住居跡
  - 6 同 完掘
  - 7 1号埋設土器
  - 8 同
- 図版25-1 2号土坑
- 2 4号土坑
  - 3 7号土坑
  - 4 11号土坑
  - 5 18号土坑
  - 6 22号土坑
  - 7 23号土坑
  - 8 同 覆土堆積状況
- 図版26-1 24号土坑覆土堆積状況
- 2 24号土坑
  - 3 25号土坑覆土堆積状況
  - 4 25号土坑
  - 5 26号土坑
  - 6 32号土坑
  - 7 33号土坑
  - 8 34号土坑
- 図版27-1 37号土坑覆土堆積状況
- 2 37号土坑
  - 3 102号土坑
  - 4 103号土坑
  - 5 107号土坑 覆土堆積状況
  - 6 107号土坑 ~~覆土堆積状況~~
  - 7 110号土坑
  - 8 115号土坑
- 図版28-1 120号土坑
- 図版28-2 182号土坑
- 3 201号土坑
  - 4 245号土坑
  - 5 1号溝
  - 6 同 覆土堆積状況
  - 7 北調査区基本堆積七層
  - 8 北調査区1号溝跡
- 図版29 早期前半住居跡・土坑、  
早期後半土坑出土遺物 1
- 図版30 早期後半土坑出土遺物 2
- 図版31 早期後半土坑出土遺物 3
- 図版32 早期後半土坑出土遺物 4
- 図版33 前期・中期住居跡出土遺物 1
- 図版34 前期・中期住居跡出土遺物 2、  
土坑出土遺物、1号埋設土器
- 図版35 遺構外出土土器 1
- 図版36 遺構外出土土器 2
- 図版37 遺構外出土土器 3
- 図版38 遺構外出土土器 4
- 図版39 遺構外出土土器 5
- 図版40 遺構外出土土器 6
- 図版41 遺構外出土土器 7
- 図版42 遺構外出土土器 8
- 図版43 遺構外出土土器 9
- 図版44 遺構外出土土器 10
- 図版45 遺構外出土土器 11
- 図版46 遺構外出土土器 12
- 図版47 遺構外出土土器 13
- 図版48 遺構外出土土器 14
- 図版49 遺構外出土土器 15
- 図版50 遺構外出土石器 1
- 図版51 遺構外出土石器 2
- 遺構外出土石器 3
- 図版53 遺構外出土石器 4
- 図版54 遺構外出土石器 5
- 図版55 遺構外出土石器 6
- 図版56 遺構外出土石器 7
- 図版57 遺構外出土石器 8

図版12- 4	I - 7 グリッド	遺物出土状況	図版17- 2	94号土坑
- 5	J - 6 グリッド	遺物出土状況	- 3	97号土坑覆土堆積状況
- 6	J - 7 グリッド	遺物出土状況	- 4	97号土坑
- 7	L - 6 グリッド	遺物出土状況	- 5	105号土坑
- 8	I - 7 グリッド	黒曜石出土状況	- 6	132号土坑
図版13- 1	38・39・40号土坑		- 7	144号土坑
- 2	同		- 8	147号土坑
- 3	38号土坑		図版18- 1	149号土坑
- 4	39号土坑		- 2	同 張り出し部分
- 5	40号土坑覆土堆積状況		- 3	150・151・152号土坑
- 6	40号土坑		- 4	158号土坑
- 7	41号土坑		- 5	164号土坑
- 8	42号土坑		図版19- 1	173号土坑確認状況
図版14- 1	43号土坑		- 2	173号土坑
- 2	48号土坑		- 3	181号土坑
- 3	49号土坑		- 4	185号土坑
- 4	52号土坑		- 5	187号土坑
- 5	53号土坑		- 6	189号土坑
- 6	同 覆土堆積状況		- 7	192号土坑
- 7	56号土坑		- 8	193号土坑
- 8	57号土坑		図版20- 1	206号土坑
図版15- 1	58号土坑		- 2	212・213号土坑
- 2	60・130号土坑		- 3	214・217・218号土坑
- 3	61号土坑		- 4	221号土坑
- 4	64号土坑		- 5	222号土坑
- 5	65号土坑		図版21- 1	225号土坑
- 6	68・69号土坑		- 2	230号土坑
- 7	72号土坑		図版22- 1	230号土坑遺物出土状況
- 8	74・131号土坑		- 2	207・208・209・228・229号土坑
図版16- 1	75号土坑		- 3	234号土坑
- 2	79号土坑		- 4	236・237号土坑
- 3	82号土坑		- 5	1号集石炉
- 4	84号土坑		- 6	2号集石炉
- 5	85号土坑		- 7	3号集石炉
- 6	86号土坑		- 8	6号焼土跡
- 7	87号土坑		図版23- 1	上坑配置状況（前期以降）
- 8	88号土坑		- 2	同
図版17- 1	94号土坑覆土堆積状況		- 3	北調査区全景

# 原 遺 跡

## 本文目次

第1章 遺跡の立地 .....	1
第2章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法 .....	3
第2節 調査の経過 .....	3
第3章 基本層序 .....	5
第4章 検出された遺構・遺物	
第1節 遺跡の概観 .....	7
第2節 純文時代	
土坑 .....	7
第3節 古代	
住居跡 .....	8
掘立柱建物跡 .....	23
溝 .....	28
第4節 遺構外出土遺物 .....	29
第5章 まとめ .....	33

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置図 .....	1
第2図 遺跡の位置と周辺の地形図 .....	2
第3図 トレンチ設定図、1号溝・1号上坑 位置図 .....	4
第4図 基本層序模式図 .....	5
第5図 全体図・グリッド設定図 .....	6
第6図 1号土坑・出土遺物 .....	7
第7図 1号住居跡 .....	8
第8図 1号住居跡カマド・出土遺物 .....	9
第9図 2号住居跡・カマド .....	11
第10図 2号住居跡出土遺物（1） .....	12
第11図 2号住居跡出土遺物（2） .....	13
第12図 3号住居跡 .....	14
第13図 3号住居跡カマド・出土遺物 .....	15
第14図 4号住居跡 .....	16
第15図 4号住居跡カマド・出土遺物（1） .....	17
第16図 4号住居跡出土遺物（2） .....	18
第17図 5号住居跡・出土遺物（1） .....	19
第18図 5号住居跡出土遺物（2） .....	20
第19図 5号住居跡出土遺物（3） .....	21
第20図 1号掘立柱建物跡（1） .....	22
第21図 1号掘立柱建物跡（2）・出土遺物 .....	23
第22図 1号掘立柱建物跡の規模の復元と 床束想定位置図 .....	26
第23図 1・2号溝 .....	28
第24図 遺構外出土遺物（1） .....	29
第25図 遺構外出土遺物（2） .....	30
第26図 遺跡位置と東山道駅路の時越えルート 想定図 .....	32

図版58 原石	図版63 石槍・楔状石核・楔形石器
図版59 石核	図版64 石匙・石錐・削器・搔器・ ノッチ・不定形石器
図版60 石核	図版65 加工がある剥片・使用痕がある剥片・ 石錐チップ・ポイントフレーク・縦長剥片
図版61 石錐	図版66 縦長剥片・横長剥片・チップ
図版62 石錐・石器素材	

## 横川萩の反遺跡

### 本文目次

第1章 遺跡の立地 .....	1
第2章 調査の方針と経過	
第1節 調査の方法 .....	3
第2節 調査の経過 .....	3
第3章 基本層序 .....	5
第4章 検出された遺構・遺物	
第1節 古代	
住居跡 .....	7
第2節 遺構外出土遺物 .....	10
第5章 まとめ .....	11

### 挿図目次

第1図 調査対象地域と本調査区 .....	1	第6図 1号住居跡 .....	7
第2図 トレンチ設定図 .....	2	第7図 1号住居跡カマド .....	8
第3図 グリッド設定図 .....	4	第8図 1号住居跡出土遺物（1） .....	8
第4図 基本層序 .....	5	第9図 1号住居跡出土遺物（2） .....	9
第5図 遺構配置図 .....	6	第10図 遺構外出土遺物 .....	10

### 表 目 次

第1表 1号住居跡出土遺物観察表 .....	9	第2表 遺構外出土遺物観察表 .....	10
------------------------	---	----------------------	----

### 写真図版目次

図版1 1. 遺跡全景（航空写真）	4. 同カマド遺物出土状況（西より）
2. 本調査区全景（西より）	5. 同カマド完掘状況（西より）
図版2 1. 1号住居跡遺物出土状況（西より）	図版3 1号住居跡出土遺物
2. 同確認状況（東より）	図版4 遺構外出土遺物
3. 同完掘状況（西より）	

# 西野牧小山平遺跡

## 本文目次

第1章 遺跡の立地と周辺の環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 周辺の遺跡	1
第3節 大山について	3
第2章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の経過	7
第3章 基本堆積土層	9
第4章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概観	11
第2節 縄文時代	
石棒工房跡	11
石棒	11
出土状況	12
石棒破片・剥片	75
敲き石	75
土器	79
1号埋設土器	79
グリッド出土土器	80
グリッド出土石器	88
土坑	92
第3節 近世	
井戸跡	92
第5章 調査の成果	93
附 編 初鳥屋遺跡	

## 挿図目次

附 図 西野牧小山平遺跡全体図	
第1図 西野牧小山平遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 大山地形図・断面図	4
第3図 周辺地形図	5
第4図 トレンチ・調査区設定図	6
第5図 基本堆積土層図	8
第6図 群馬県における先新世テフラ層分布図	8
第7図 遺跡全体図	10
第8図 石棒出土状況図1 (No.1 ~ 3)	13
第9図 石棒No.1 ~ 3 詳細図	13
第10図 石棒出土状況図2 (No.4 ~ 20)	14
第11図 石棒No.4 ~ 11 詳細図	15
第12図 石棒No.12 ~ 20 詳細図	16
第13図 石棒出土状況図3 (No.21 ~ 22)	18
第14図 石棒出土状況図4 (No.23 ~ 24)	18
第15図 石棒出土状況図5 (No.25 ~ 28)	19
第16図 石棒No.21 ~ 27 詳細図	20

## 表 目 次

第1表	1号土坑出土遺物観察表	7	第6表	5号住居跡出土遺物観察表	21
第2表	1号住居跡出土遺物観察表	10	第7表	6号掘立柱建物跡出土遺物観察表	23
第3表	2号住居跡出土遺物観察表	13	第8表	7号掘立柱建物跡ピット計測表	<del>26</del> 27
第4表	3号住居跡出土遺物観察表	15	第9表	遺構外出土遺物観察表(1)	30
第5表	4号住居跡出土遺物観察表	18	第10表	遺構外出土遺物観察表(1)	31

## 写真図版目次

図版1	1. 遺跡周辺 (航空写真)	図版5	1. 1号掘立柱建物跡西側身舎柱列 (北より)
	2. 遺跡全景 (航空写真)		2. 同 身舎西側柱列と外周の柱列 (南より)
図版2	1. 1号住居跡確認状況 (西より)		3. P-1断面 (北より)
	2. 1号住居跡断面 (南より)		4. P-11断面 (北より)
	3. 1号住居跡全景 (西より)		5. P-12断面 (北より)
	4. 1号住居跡カマド (西より)	図版6	1. 1号掘立柱建物跡P-6柱掘り方 (西より)
	5. 1号住居跡遺物出土状況 (北より)		2. 同 P-8柱掘り方 (西より)
	6. 2号住居跡全景 (西より)		3. 同 石敷 (南より)
	7. 2号住居跡カマド (西より)		4. 同 作業風景 (北より)
	8. 3号住居跡全景 (南より)		5. 拡張区全景 (西より)
図版3	1. 3号住居跡断面 (北より)	図版7	1号土坑、1・2号住居跡出土遺物
	2. 3号住居跡カマド (南より)	図版8	2・3・4号住居跡出土遺物
	3. 4号住居跡全景 (西より)	図版9	4・5号住居跡、1号掘立柱建物跡 出土遺物
	4. 4号住居跡カマド (西より)		
	5. 5号住居跡全景 (西より)		
	6. 1号土坑全景 (東より)		
	7. 1号溝全景 (東より)		
	8. 基本層序 (北壁)	図版10	遺構外出土遺物
図版4	1. 1号掘立柱建物跡 (航空写真)		
	2. 同 全景 (南より)		

第17図	石棒出土状況図6 (No.29~33)	21	第55図	石棒実測図18 (No.68)	57
第18図	石棒No.29~31詳細図	22	第56図	石棒実測図19 (No.69~71)	58
第19図	石棒出土状況図7 (No.34~35)	23	第57図	石棒実測図20 (No.72・73)	59
第20図	石棒No.34~43詳細図	24	第58図	石棒実測図21 (No.74~77)	60
第21図	石棒出土状況図8 (No.46~58)	25	第59図	石棒実測図22 (No.78~80)	61
第22図	石棒No.46~56詳細図	26	第60図	石棒実測図23 (No.81~86)	62
第23図	石棒No.57~58詳細図 61~64	27	第61図	石棒実測図24 (No.87~90)	63
第24図	石棒出土状況図9 (No.59~67)	28	第62図	石棒実測図25 (No.92~94・56+91)	64
第25図	石棒出土状況図10 (No.60・65~67)	29	第63図	石棒実測図26 (No.95・96)	65
第26図	石棒No.59~67詳細図	30	第64図	石棒実測図27 (No.97・98)	66
第27図	石棒出土状況図11 (No.45・68~78)	31	第65図	石棒実測図28 (No.99~103)	67
第28図	石棒No.45・68~76詳細図	32	第66図	石棒実測図29 (No.104)	68
第29図	石棒出土状況図12 (No.78~86)	33	第67図	石棒実測図30 (No.105)	69
第30図	石棒No.78~86詳細図	34	第68図	石棒実測図31 (No.106)	70
第31図	石棒出土状況図13 (No.87~98)	35	第69図	石棒実測図32 (No.107~109)	71
第32図	石棒No.87~98詳細図	36	第70図	石棒実測図33 (No.110~113)	72
第33図	石棒出土状況図14 (No.99)	37	第71図	石棒実測図34 (No.114~125)	73
第34図	石棒出土状況図15 (No.100・101)	38	第72図	石棒破片・剥片図	74
第35図	石棒出土状況図16 (No.102)	38	第73図	敲き石実測図1	76
第36図	石棒出土状況図17 (No.103)	39	第74図	敲き石実測図2	77
第37図	石棒No.99・102・103詳細図	39	第75図	敲き石実測図3	78
第38図	石棒実測図1 (No.1~3)	40	第76図	1号埋設土器	79
第39図	石棒実測図2 (No.4~7)	41	第77図	グリッド出土土器1	81
第40図	石棒実測図3 (No.8~11)	42	第78図	グリッド出土土器2	82
第41図	石棒実測図4 (No.12~14)	43	第79図	グリッド出土土器3	83
第42図	石棒実測図5 (No.15~17)	44	第80図	グリッド出土土器4	84
第43図	石棒実測図6 (No.18~20)	45	第81図	グリッド出土土器5	85
第44図	石棒実測図7 (No.21~23)	46	第82図	グリッド出土土器6	86
第45図	石棒実測図8 (No.24~28)	47	第83図	グリッド出土土器7	87
第46図	石棒実測図9 (No.29~33)	48	第84図	グリッド出土石器1	89
第47図	石棒実測図10 (No.34~37)	49	第85図	グリッド出土石器2	90
第48図	石棒実測図11 (No.38~42)	50	第86図	グリッド出土石器3	91
第49図	石棒実測図12 (No.43~45)	51	第87図	土坑・井戸跡	92
第50図	石棒実測図13 (No.46・47)	52	第88図	石棒製作工程図1 (第0~1段階)	94
第51図	石棒実測図14 (No.48~51)	53	第89図	石棒製作工程図2 (第2段階)	95
第52図	石棒実測図15 (No.52~58)	54	第90図	石棒製作工程図3 (第3段階)	96
第53図	石棒実測図16 (No.59~62)	55	第91図	石棒製作工程図4 (第3段階)	97
第54図	石棒実測図17 (No.63~67)	56	第92図	敲き石分類図	98

## 写真図版目次

巻頭図版 1 - 1 西野牧小山平遺跡全景（空撮）	図版 9 - 5 石棒出土状況
- 2 同 遺物出土状況	図版10 - 1 石棒No.4
2 - 1 西野牧小山平遺跡出土石棒	- 2 石棒No.8
- 2 同 石棒工具（敲き石）	- 3 石棒No.10
	- 4 石棒No.12
図版 1 大山周辺 空撮	- 5 石棒No.11
(国土地理院1978年撮影 CB-78-7Y C6-15)	図版11 - 1 石棒No.15
図版 2 - 1 調査前現況	- 2 石棒No.17
- 2 同	- 3 石棒No.18
図版 3 - 1 大山斜面部調査前現況	- 4 石棒No.19
- 2 同	- 5 石棒No.21
- 3 トレンチ調査状況	- 6 石棒No.22
- 4 同	- 7 石棒No.23
- 5 トレンチ設定状況（空撮）	- 8 石棒No.24
図版 4 - 1 衣上掘削後全景（空撮）	- 9 同
- 2 調査区全景（空撮）	図版12 - 1 石棒No.27
図版 5 - 1 調査区及び小山全景	- 2 石棒No.30
- 2 集石全景（空撮）	- 3 石棒No.31
図版 6 - 1 調査区全景（小山頂上より）	- 4 石棒No.32
- 2 斜面部トレンチ調査状況	- 5 N-15グリッド石棒出土状況 (浅間D軽石層)
- 3 遺物確認面	
- 4 調査状況	図版13 - 1 石棒No.35、37
- 5 作業風景	- 2 石棒No.34
- 6 調査区遠景（恩賀集落より）	- 3 石棒No.34
- 7 トレンチ内基本層序	- 4 石棒No.36
- 8 トレンチ石棒川土位置	- 5 石棒No.37
図版 7 - 1 集石・石棒検出状況	- 6 石棒No.38
- 2 集石断面（浅間D軽石層）	- 7 石棒No.39
- 3 作業風景	- 8 石棒No.42、45
- 4 集石・石棒検出状況	図版14 - 1 石棒出土状況
- 5 集石断面	- 2 石棒No.46
図版 8 - 1 石棒出土状況（空撮）	- 3 石棒No.47
- 2 同	- 4 石棒No.48
図版 9 - 1 石棒No.1	- 5 石棒No.50
- 2 石棒No.2	図版15 - 1 石棒No.59
- 3 石棒出土状況	- 2 石棒No.60、66
- 4 石棒No.10、13、18（空撮）	- 3 石棒No.68

- 図版15- 4 石棒No.69  
 　- 5 石棒No.71  
 　- 6 石棒No.75  
 　- 7 石棒No.45、72、77
- 図版16- 1 石棒出土状況  
 　- 2 石棒No.74
- 図版17- 1 石棒検出状況  
 　- 2 石棒No.79  
 　- 3 石棒No.81  
 　- 4 石棒No.81  
 　- 5 石棒No.84
- 図版18- 1 石棒No.88、91~94検出状況  
 　- 2 石棒No.89  
 　- 3 石棒No.90  
 　- 4 石棒No.91、93  
 　- 5 石棒No.98
- 図版19- 1 N-14グリッド敲き石出土状況  
 　- 2 O-15グリッド敲き石出土状況  
 　- 3 N-17グリッド敲き石出土状況  
 　- 4 O-15グリッド敲き石出土状況  
 　- 5 O-15グリッド遺物出土状況  
 　- 6 同  
 　- 7 N-13グリッド遺物出土状況  
 　- 8 N-15グリッド遺物出土状況
- 図版20 石棒No.1~6
- 図版21 石棒No.7~10
- 図版22 石棒No.11~14
- 図版23 石棒No.15~17・19
- 図版24 石棒No.18・20~22
- 図版25 石棒No.23~28
- 図版26 石棒No.29~35
- 図版27 石棒No.36~41
- 図版28 石棒No.42~45
- 図版29 石棒No.46・47・49~51
- 図版30 石棒No.48・52~58
- 図版31 石棒No.59~67
- 図版32 石棒No.68~71・73
- 図版33 石棒No.72・74~77
- 図版34 石棒No.78~86
- 図版35 石棒No.87~90・92~94
- 図版36 石棒No.95+91・97
- 図版37 石棒No.95・96・98
- 図版38 石棒No.99~103
- 図版39 石棒No.104・108・109
- 図版40 石棒No.105・111・112
- 図版41 石棒No.106・107・113
- 図版42 石棒No.110・114~125
- 図版43 石棒破片・剥片
- 図版44- 1 自然面  
 　- 2 自然面と剥離面  
 　- 3 同  
 　- 4 剥離面  
 　- 5 自然面と敲打面  
 　- 6 敲打面  
 　- 7 同  
 　- 8 敲磨面
- 図版45 敲き石 1~11
- 図版46 敲き石12~24
- 図版47 1号埋設土器、グリッド出土土器1
- 図版48 グリッド出土土器2
- 図版49 グリッド出土土器3
- 図版50 グリッド出土土器4
- 図版51 グリッド出土土器5
- 図版52 グリッド出土土器6
- 図版53 グリッド出土土器7
- 図版54 グリッド出土石器
- 図版55- 1 1号土坑  
 　- 2 2号土坑  
 　- 3 1号井戸跡  
 　- 4 石棒製作実験品  
 　- 5 恩賀集落内所蔵石棒  
 　- 6 同  
 　- 7 遺跡付近現況
- (疊水・鞋井沢インターチェンジ)
- 8 同 大山と関越自動車道

# 抄 錄

フ リ ガ ナ	ヨコガワオオバシイセキ(エノタライセキ) ヨコガワノノイセキ(イギンツリイセキ) ハラクセキ(カカトイセキ) ニシノマキオオマライセキ(キンガイセキ)						
古 名	横川大林遺跡(上ノ平遺跡) 横川森の反遺跡(森の反遺跡) 原遺跡(製本遺跡) 西野牧小山平遺跡(恩賀遺跡)						
副 書 名	岡崎自動車道(上郷線) 施工地歴史文化財発掘調査報告書						
卷 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編 著 者 名	鶴見 / 福山俊彰 桐原 / 柳川俊郎(横川大林遺跡・西野牧小山平遺跡) 利谷俊(横川森の反遺跡・原遺跡)						
編 著 者 間	山武考古研究所 / T286 丁業島田出市番木町221						
発 行 機関	日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会						
発 行 年 月 日	西暦1997年3月31日						
フ リ ガ ナ	フ リ ガ ナ	コード	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査用具
所取遺跡名	所 在 地	市町村					
横川大林	群馬県水郡松井田町大字 横川字大林980-1他	10401		36° 20° 18°	138° 44° 32°	19890618 19891130 19900806- 19910703	8,570m <sup>2</sup> 開拓自動車道 (上郷線)建設工事
横川森の反	群馬県邑楽郡松井田町大字 横川字森の反1091-3他	10401		36° 52° 55°	138° 43° 46°	19891110- 19900106	183m <sup>2</sup> 開拓自動車道 (上郷線)建設工事
原	群馬県邑楽郡松井田町大字 原字西浦410-8他	10401		36° 52° 55°	138° 43° 45°	19881104- 19890315	1,588m <sup>2</sup> 開拓自動車道 (上郷線)建設工事
西野牧小山平	群馬県邑楽郡松井田町大字 西野牧字小山平1701他	10401		36° 17° 25°	138° 40° 33°	19871209- 19871223 19880509- 19881115	6,640m <sup>2</sup> 開拓自動車道 (上郷線)建設工事
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
横川大林	集落跡	绳文時代後半期・中期	住居跡 焼石炉 土坑	9軒 7基 236基	绳文時代早期上器(熊糞 文・押型文・東山・鶴ヶ 島台・格条件压痕文系 等) 特殊石器・石錐	绳文文系土器を伴う绳文時代早 期後半の上坑・熊糞石器と多量の 石錐が出土し、黒曜石の石錐 製作跡も検出されている。	
横川森の反	住居跡	平安時代	住居跡	1軒	須恵器・土師器	平安時代の住居跡(軒板柱)。	
原	集落跡	奈良・平安時代	住居跡 人骨埋立柱建物跡 構築跡	5軒 1棟 1条	須恵器・上漆器・灰陶器 器・绳文土器片・陈牛土 器	平安時代の聚落と、8世紀代 と考えられる大形堤立柱建物 跡が検出され、箕山道坂本駅 家の可能性が指摘されている。	
西野牧小山平	丁耕跡	绳文時代中期末	石斧工作跡 (瓦踏金化) 焼外縁直口器 上坑	2基	大形石柱 (未完成-一定成品) 125本 磨き石 (二月) 加曾利E 3・曾利式上器	浅間D軒石層に埋蔵された绳文 時代中期末の大形石柱工作跡。 圓内筒の焼成例で砕石、加曾 利E 3式土器が伴っている。	

# 序 章

# 序 章

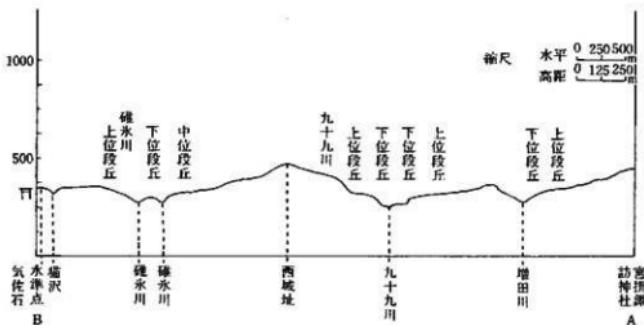
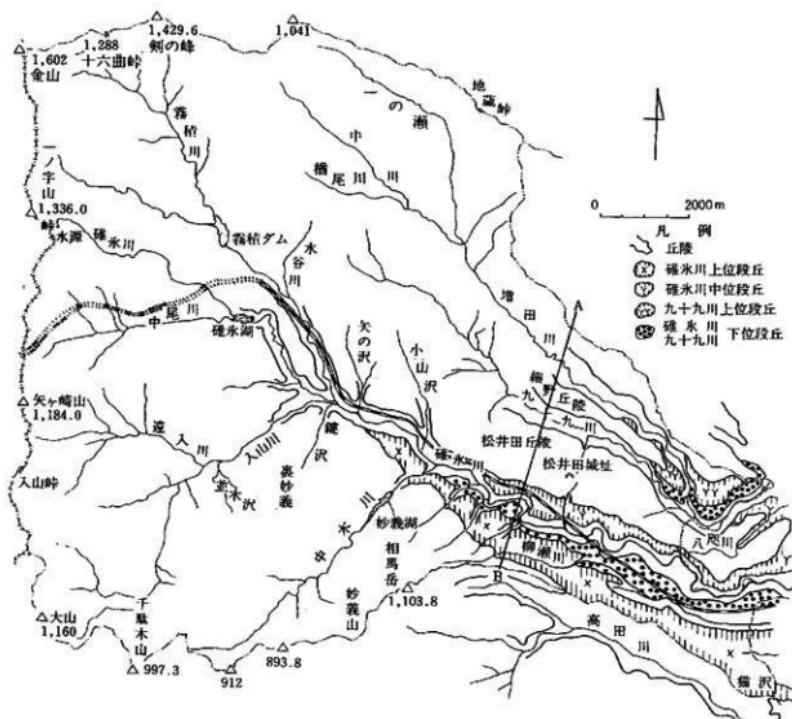
## 第1節 調査に至る経緯

上信越自動車道（「関越自動車道上越線」）は、首都圏と上信越地方とを結ぶ高速自動車国道として、東京都・練馬区を起点とし、新潟県上越市に至る総延長約280km（このうち練馬～藤岡インター間80.4kmは関越自動車道新潟線との重複区間）が日本道路公团によって建設されている。なお、平成5年3月27日には、藤岡～佐久両インター間69.5kmが供用されており、その後平成7年11月には佐久～小諸両インター間10.8kmが供用され、そして平成8年11月14日には小諸インター～更埴ジャンクション間36.8kmが供用されて長野自動車道と接続し、現在信州中野インターまでが供用されている。本県内は、藤岡市・多野郡古井町・甘楽郡甘楽町・富岡市・甘楽郡下仁田町・甘楽郡妙義町・碓氷郡松井田町の各市町を通過する。

本県部分の埋蔵文化財発掘調査にかかる上信越自動車道藤岡～佐久間については、昭和47年に基本計画が策定され、同54年に建設大臣より日本道路公团が施工命令を受けている。そして同56年には、藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・妙義町・松井田町（東部）の路線が発表され、翌57年には松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

上信越自動車道にかかる群馬県内の埋蔵文化財の取り扱いと調査経過、ならびに松井田町における埋蔵文化財発掘調査の経緯は以下の通りである。

- 昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法の遵守、国・県・市町村の各指定文化財を避けること、文化財に関する事項は県教育委員会文化財保護課と協議すること、等の考え方を示す。
- 昭和54・ 県教育委員会文化財保護課は、路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の状況をまとめ、県企画部幹線交通対策課により、「『関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書』として報告される。
- 昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、日本道路公团から県教育委員会に対し、路線内の埋蔵文化財に関する具体的な調査の依頼がなされ、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を実施した。
- 昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を「遺物分布の濃い部分」「遺物分布の淡い部分」「試掘調査を必要とする部分」に区分、発掘調査必要面積を約100万m<sup>2</sup>と想定し、55遺跡を認定した（後の試掘調査によって52遺跡に変更）。そして、埋蔵文化財発掘調査に関する基本方針を次のように策定した。
- ①発掘調査終了年度は昭和66年度とする。
- ②発掘調査は御群馬県埋蔵文化財調査事業団を中心機関とし、対応できない部分については調査会方式を導入し、関係市町には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③調査関係別対応面積は次のとおり。
- ・埋文事業団：富岡市以東の約76万m<sup>2</sup>（面積は変動の可能性あり）。
  - ・調査会：下仁田町・妙義町・松井田町の約22万m<sup>2</sup>（面積は変動の可能性あり）。
- ◎発掘調査事業実施方法：日本道路公团東京第一建設局が群馬県教育委員会に対し発掘調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はこれを受けて、御群馬県埋蔵文化財調査事業団ならびに各遺跡調査会に対し、再委託のかたちで委託契約を締結し、それぞれ発掘調査を実施する。
- 昭和61年度 4月 御群馬県埋蔵文化財調査事業団により4遺跡にて発掘調査が開始された。
- 昭和62年度 11月 松井田町遺跡調査会が設立され、年度末3月より発掘調査を開始（～平成3年度迄）
- 平成4年度 発掘調査の終了した各遺跡について整理事業を開始する。
- 平成8年度 各遺跡の整理報告書が刊行となり、松井田町遺跡調査会の全事業が終了する。



第1図 松井田町地形図（「松井田町誌」より転載）

## 第2節 遺跡の位置と考古学的環境

松井田町は群馬県の南西部に位置し、西側は碓氷峠・入山峠・和美峠を境に長野県北佐久郡軽井沢町に接している。松井田町の地形は山地・丘陵・河岸段丘面に大別され、北西部・西部及び南西部には山地が囲み、それぞれの山地から流れる各河川沿いに丘陵や段丘が形成されている。

また、松井田町の市街地から西北西26kmには浅間山が位置し、有史以前から度重なる噴火を繰り返してきている。この降下火山灰・軽石は、遺構の年代決定の指標にもなっている。

松井田町を流れる主要河川には、碓氷川・九十九川・増田川などがあり、それぞれ並行するように南北流している。丘陵地には、長者久保丘陵・松井田丘陵・西横野丘陵・細野丘陵などがある。河岸段丘は、碓氷川流域・九十九川流域・増田川流域に形成されている。

長者久保丘陵は、剣の峰から地蔵峠を経て南東方向に延び、安中市板鼻まで続く当地方最大の丘陵地で、碓氷川と群馬郡との分水嶺となっている。松井田丘陵は、剣の峰から松井田城跡を経て安中市名山へと延びるもので、南面を碓氷川及びその支流に、北面を九十九川及びその支流に浸食されている。西横野丘陵は、碓氷川南岸の丘陵で、碓氷郡と甘楽郡との都境をなし、碓氷谷と鍋谷との分水嶺になっている。同丘陵は表妙義の山稜から派生し、源ヶ原・行田・越泉・上人見を経て、安中市へと続いている。なお、妙義山地の白雲山から流下する猪沢川・柳瀬川が西横野丘陵を東流している。

平坦な地形は、おもに碓氷川・九十九川・増田川流域南側の丘陵上及び河岸段丘上に分布し、この平坦地を中心に遺跡が分布している。以下、各時代ごとに本地域の遺跡を概観する。

### 旧石器時代

行田大道北遺跡(2)から網石核が出土しているが、旧石器の検出は極めて少ない状況にある。本地域では、浅間山噴火に伴う浅間・板鼻黄色軽石(Y P層: 約13,000~14,000年前)や浅間・板鼻褐色軽石(B P層: 約18,000~21,000年前)が厚く堆積し、遺物の検出が困難なことにも起因していると考えられる。また、碓氷川右岸の上位段丘では地表下8~9mで広域火山灰の姶良-Tn火山灰(A T層: 約24,000~25,000年前)が確認される。なお、安中市の古城遺跡で、A T層前後の局部磨製石斧・ナイフ形石器が出土している。

### 縄文時代

今回の上信越自動車道関連の発掘調査において、当該期遺跡の状況が多数明らかにされた。

碓氷川右岸では、八城二本杉東遺跡(1)・行田大道北遺跡(2)・行田梅木平遺跡(3)・新堀東源ヶ原遺跡(4)が調査されている。八城二本杉東遺跡では、前期関山式期の住居跡が円形柱穴列を取り囲むように検出された。行田大道北遺跡では、早期押型文期の住居跡1軒・前期黒浜～諸磯式期を中心とする集落跡・後期初頭の敷石住居跡などが検出されている。また、前期の遺構からクッキー状炭化物が出土している。行田梅木平遺跡では、中期末葉から後期にかけて形成されたとみられる弧状列石と配石墓群が3群検出され、西方に位置する妙義山を意識して構築された可能性が指摘されている。新堀東源ヶ原遺跡は、中期初頭～末葉の大規模な集落跡であるが、前期花積下層式期の住居跡及び同時期とみられる滑石製品・未製品・碎片などが大量に検出され、工房跡の可能性も考えられている。同遺跡では、早期押型文期の住居跡も検出されている。

碓氷川左岸では、前期諸磯式・後期加曾利B式期の住居跡や後期の配石墓が検出された五料野ヶ久保遺跡(5)、早期撫糸文期末の住居跡が検出された横川大林遺跡(6)が調査されている。

碓氷川支流の入山川左岸では、西野牧小山平遺跡(11)から石棒製作跡が発見され、注目されている。同製

作跡は、浅間D軽石と思われる橙色軽石の直下で検出されており、中期後半の時期が想定されている。

上信越自動車道関連以外でも、前～晚期の遺物が出上した千駄木岩陰遺跡(24)、敷石住居跡4軒など検出された仁田遺跡(23)、後期初頭の敷石住居跡と環状列石が検出された幕井遺跡(22)、前期関山式期の住居跡が検出された八城赤羽根遺跡(18)、後期前半の敷石住居跡が検出された二軒在家二本杉遺跡(17)などの遺跡が調査されている。

#### 弥生時代

碓氷川右岸では、上人見遺跡(13)で再葬墓に使用したとみられる土器が出土しているほか、八城二本杉東遺跡でもほぼ同時期の造構・遺物が検出されている。また、行田梅木平遺跡では東海地方西部の水神平式と思われる壺が出土している。さらに、松井田工業団地遺跡(15)でも中期後半の住居跡が調査されている。

碓氷川左岸では、五料稻荷谷戸遺跡(7)から中期初頭の岩懸山式土器が出土している。

細野丘陵東端に位置する国術遺跡(27)では、中期後半から後期の住居跡3軒が調査されている。

#### 古墳時代

松井田町地域の古墳は、「上毛古墳総覧」(1938、群馬県)に63基が記載されており、松井田・西横野・塚原・九十九・細野地区などに後期～終末期を中心とした古墳群がある。増田川右岸に位置する下増田上田中遺跡(83)の1号古墳は、T字状の横穴式石室を有するもので円筒埴輪や須恵器が出土している。同古墳は出土遺物などから6世紀前半(初頭)の築造とみられ、県内における横穴式石室受容期の古墳と考えられる。同様の横穴式石室は、九十九川流域の安中市・後閣3号墳にもみられる。なお、碓氷川流域には安中市に、同じく横穴式石室受容期の前方後円墳である篠瀬二子塚古墳がある。

集落跡は、松井田工業団地遺跡や国術遺跡などで後期の住居跡が調査されている。また、入山岬祭祀遺跡(89)では、4世紀代から6世紀代の土師器・滑石製模造品が多量に検出されている。なお、同遺跡での祭祀は、奈良・平安時代まで継続するようである。

#### 奈良・平安時代

原遺跡(10)では、布堀りを施す人形の掘立柱建物跡が検出され、東山道の坂本駅跡の一部と推定されている。なお、東山道は入山岬越え・碓氷越えの二説がある。また、五料稻荷戸遺跡では、浅間B軽石が埋没土上層に堆積する大規模な溝状遺構が検出されている。

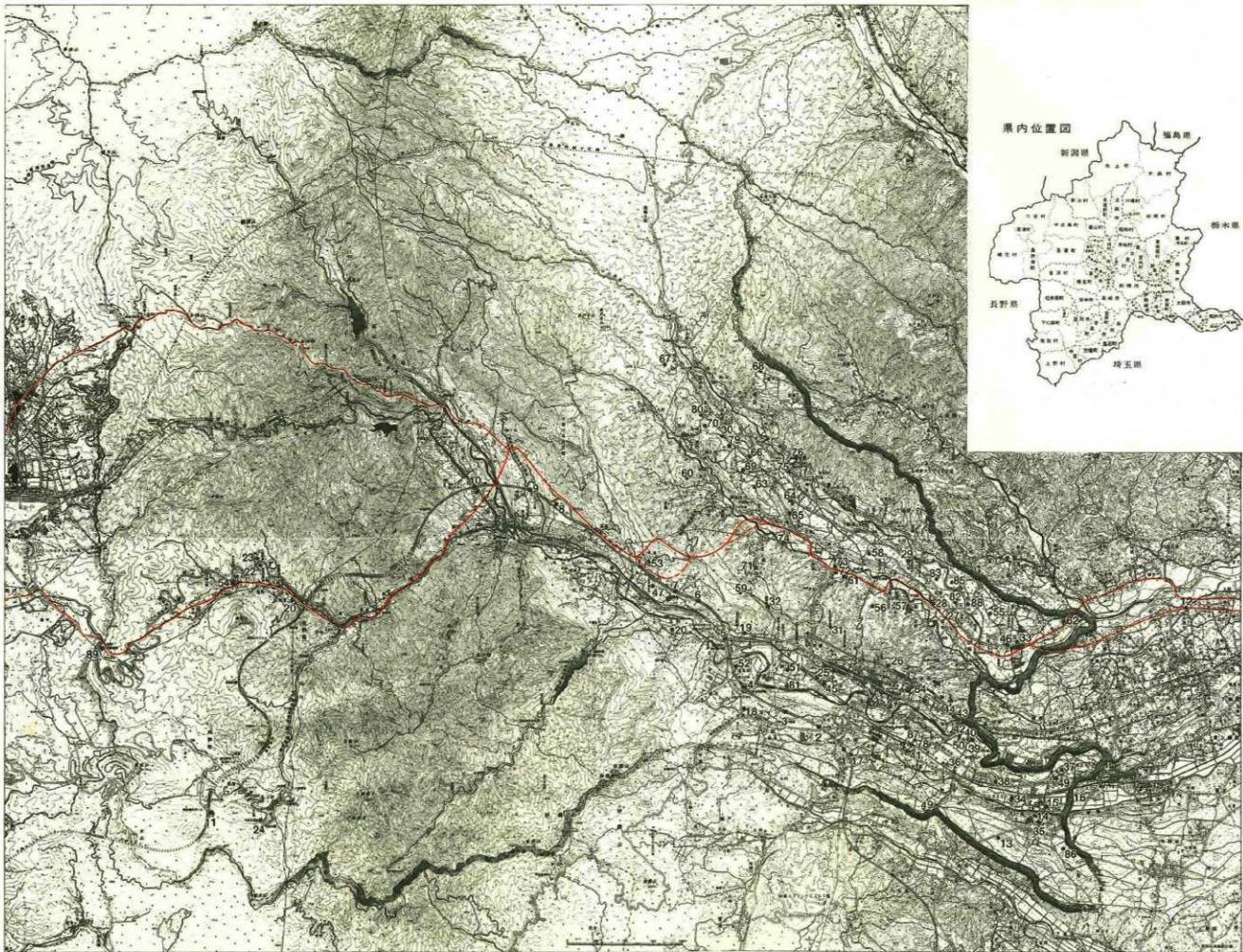
集落跡は、松井田工業団地遺跡で大規模な集落跡が調査されているほか、愛宕山遺跡(26)・仁田遺跡・幕井遺跡・人見北原遺跡(16)・五料山岸遺跡(19)・国術遺跡・下増田天神原遺跡(29)・二軒在家二本杉遺跡などが調査されている。これらの遺跡の内、愛宕山遺跡では、皇朝十二銭の万年通宝や巡方・丸納が出土している。また、上信越自動車道関連では、八城二本杉東遺跡・行田梅木平遺跡・五料平遺跡(5)・五料野ヶ久保遺跡・五料稻荷谷戸遺跡・横川森の反遺跡(9)・原遺跡で住居跡が調査されている。

牛込遺跡としては、松井田工業団地遺跡や新堀陣場遺跡(25)で浅間B軽石下の水田跡が検出されている。また、高槻子碓戸遺跡では、同軽石下の畠跡が調査されている。近接して位置する五料山岸遺跡・五料平遺跡では、多量の須恵器が検出され、周辺に窯跡の存在が推測されている。

#### 中・近世

城郭では、北条氏の重臣・大道寺氏の松井田城(31)が著名で、ほかに松井田西城(32)・小日向城(33)・下増田城・愛宕山城・坂本城・大王寺城・人見城・名山城などが知られている。

生糸遺跡では、横川大林遺跡・下増田百石遺跡(88)・上増田長久保遺跡(80)で浅間A軽石下の畠跡が検出されている。また、人見北原遺跡では、「妙義道」と推定される道路状遺構が調査されている。



第2図 松井田町遺跡分布図

第1表 松井田町遺跡一覧表（1）

No	遺跡名	時代	種別	概要
1	八城二本杉東遺跡	縄文後隔・中高、 弥生後隔・平安	石器群	縄文前期岡山八隅を主体とする集落跡。住居跡35軒、土坑227基、円形柱穴列2列、獨立柱建物跡1棟。
2	百田大芝北遺跡	縄文早期～後期	生活跡	縄文前期を主体とする集落跡。住居跡11軒、住石住居跡1軒、土坑22基、圓形柱3基、第3号、圓形柱建物跡2基。ビット打等が検出され、クッキー状陶化物が出土している。
3	石川梅木平遺跡	縄文前期～後期、 弥生、平安	配石遺跡、集落跡	紀元前後を主体とする集落跡。住居跡35軒、土坑306基、竪穴式住居跡の遺構2軒、独立柱建物跡35基、無土8基、溝、礫列跡。
4	新船東源ヶ原遺跡	縄文早中期～中期、 弥生、古墳、平安	集落跡	紀元前中期から中期、住居跡182軒、土坑1225基、チャート貯水槽1ヶ所、竪穴式改土25基、独立柱建物跡2軒。古墳2基が検出され、滑石製品、スタンプ型土器など多量に出土している。
5	五糸平遺跡	奈良、平安	集落跡	住居跡7軒、土坑77基、溝4条、乗石5基、上野型櫛壓壺、円筒埴輪の痕跡が多く出土し、他に鉄物類、刀子、瓦片、瓦葺、瓦葺中等が出土している。
6	五河村ケ久保遺跡	縄文前期・中期、 後隔、奈良、平安	配石遺跡、集落跡	縄文後隔の石遺跡、配石器底を主とし、圓形・丸形・複合形・扇形等、扁平式の遺物が多量に出土している。特に、紀元前中期の住居跡7軒、中房住居跡3軒、近隣住居跡2軒、改土改土2基、乗石1基、理塚1基、池塘1基、平安時代住居跡2軒、溝2条を検出している。
7	水科福寿谷ノ遺跡	奈良、平安	生活跡、大豊塚御遺跡	住居跡23軒、獨立柱建物跡4軒、大型灰状造作1基、色絞3枚、蓋板、溝、井戸が検出され、大型灰状造作は遺跡の可能性が指摘されている。
8	橋山大林遺跡	縄文早期・中期、 中高	集落跡、土坑群	紀元前隔後半集落跡、灰土甕等を伴う土坑群。住石、瓶十脚を主とし、早期前半住居跡5基、古窯・中房型櫛壓壺4軒、近隣住居跡等が検出され、馬蹄型を主体とする大型陶器作成跡の痕跡が大量に出土している。
9	横川萩の坂遺跡	平安	住居跡	平安時代住居跡・軒が軒跡され、状況的に既に家屋と見られる。
10	蛭遺跡	奈良、平安	獨立柱建物跡	住居跡5軒、大型灰状造作1軒、土坑2基、独立柱建物跡は遺跡の可能性と立証条件より、前段落述べる事の通りである。
11	西野牧小山川遺跡	縄文中期	石碑工芸跡	全国的に見当たらぬ奈良時代の石碑工芸跡が検出され、近年では進歩的である。石碑は度々1本1本を刻むもので現在から古窯、埴輪品、完結品に至る各段階のものが25点出土し、石碑群・刻作・石碑製作工具の鋸られ、磨擦痕等1式上等品が付着状況で出土している。
12	東山遺跡定跡	古代	古代遺跡	人跡跡、鐵柵跡の説有り。
13	上人見遺跡	古生	古生遺跡	平安中期の記述、スクリューバー出土。
14	人見谷津遺跡	縄文～古墳、中高	住居跡	住生遺跡遺跡跡、人見谷津切削器、縄文土器、住生土器、土器等出土。
15	渡井田工商地遺跡	古墳～平安	集落跡、水田跡	古墳から平安時代の住居跡445基、溝及び排水溝11軒、日向右の水田跡、古墳、井戸。
16	人見北原遺跡	古墳、平安	乘石塗、道路等	平安時代住居跡、ビット塗、牛車、洗浄の施設を含む。
17	二軒作二本木寺遺跡	縄文、平安	住居跡	縄文後隔後半の特徴化及び平安時代住居跡。
18	八戸森田遺跡	縄文、中世	住居跡、古墳地	縄文後隔後半の古墳群、中世。
19	大糸山遺跡	奈良、平安	乘石塗	奈良時代住居跡1基、須惠器片の発見、平安時代住居跡1軒、土坑多件。
20	五ヶ利小竹浜跡	縄文、平安	街路跡、土坑等	縄文中期の土坑遺跡1基、平安時代住居跡1軒、土坑多件。
21	北野竹原堂遺跡	縄文	土坑跡	土坑小径の記述。
22	藤井遺跡	縄文、平安	乗石塗等	鶴石塗を含む丸い住居跡1軒と周囲河岸、平安時代住居跡1軒、中屯溝、石道等。
23	仁田遺跡	縄文～平安	集落跡等	住居跡を含む丸い住居跡6軒、平安時代住居跡2軒。
24	千手木岩遺跡	縄文～平安	住居跡（住居跡）	鶴石塗に附て而して残すした岩陰廻跡、縄文～平安時代の遺物が多量検出。新規歴史跡、日向右の平安時代住居跡。
25	新瀬塙跡	平安	土坑塗	平安時代の記述。
26	愛宕山遺跡	奈良～平安	集落跡	住居跡5軒、4号戸門より土工用具、鉢皿具、陶器具、瓦刀溝れ瓦1基。
27	伊御遺跡	縄文～平安	乗石塗等	石器欲張石と稱する、先生時代住居跡3軒、古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡2軒。
28	忍忍森高羽引跡	縄文～近世	住居跡等	縄文期初期形跡を含む住居跡、包合塗・人見谷津切削器、山香式円錐、辽東式円錐。
29	F滑田天神原遺跡	縄文、平安	住居跡、古墳地	鶴石塗を含む地の平安時代住居跡1軒、馬糞廻跡三式古墳跡を記載せず。
30	十塙下底浜跡	縄文	住居跡、古墳地	縄文中期住居跡2軒、集石場等3基、せき1基、包合塗。
31	松井田城	中世	城跡等	安政、武蔵兵を封する北条氏の勢力大なる瀬戸内海沿岸により荒廃の城が形成された。天正15年(1587年)、南朝徒党を當て北条氏により立ち。解剖の年数桂遺跡発見時によう事前に解剖が行われる、言葉、六角印、刀子、瓦口等が出土。
32	松井田西城跡	中世	城館跡	解剖馬場の城跡と伝えられている。
33	小日向城	中世	城跡等	松井田城の東北の城郭として北条氏時代に築かれたものと思われる。
34	大王寺城	中世	城跡等	方型城跡、上原山の城跡と伝えられる。
35	人見城	中世	城跡等	東北傳説、足利氏に属した人見四郎左衛門の城として跡跡され、戦国時代に改修が行われたと思われる。
36	河田除塵	近世	半埋垣跡等	元2年奉書・政所より警戒される。
37	望原古墳群	古墳	墳墓	10基の小円墳羣、埴輪4件掘出、うち1基は後方門道跡の可逆性あり。
38	西側野 6号墳	古墳	墳墓	埴朱の漆等が底面2基が出土。宅地内にあり墳丘部は低込になっている。
39	西側野 21号墳	古墳	墳墓	埴朱漆は保存しない。埴朱漆に変色部のものが検出あるのみ。
40	西側野 20号墳	古墳	墳墓	石室の一部を残すのみ。
41	西側野 5号墳	古墳	墳墓	石室の大口が少々在する丸はほとんど年輪を留めない。
42	松井田 2号墳	古墳	墳墓	ほとんど無形を留めていない。石室蓋板と側壁蓋板の石が少々残存。
43	松井田 3号墳	古墳	墳墓	石室は土中に残存しているようである。頂丘土層は耕作。

第2表 松井田町遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	時代	種別	概要
44	松井田5号墳	古墳	墳墓	墳頂は削平され、石室構造が僅かに残る。本墳の後すべて後穴式石室の小円頂。
45	松井田6号墳	古墳	墳墓	(えな塚、御堀塚) 300年程度から前後の半面程度までえな塚であったようだ。
46	小日向古墳群	古墳	墳墓	古墳時代末期の小円頂が密集しており、一部前方後円墳も存在する。
47	臼井7号墳(本学院)	古墳	墳墓	東晩10世紀、西北8m、高さ3m。
48	(人足塚二号)	古墳~平安	包蔵地	土葬墓。集落部が散在する。古墳墓の中にあり、既述の遺物を貯蔵される。
49	(人足塚別所)	律文	包蔵地	律文中所南に中心に古墳群の散布が確認されている。
50	(二井在冢上所向)	古墳~平安	包蔵地	上断面、原生器が残存する。周辺への広がりが想定される。
51	(新柳西下原)	律文~平安	包蔵地	純文、土加器、鏡類、布紋瓦、子持匂等が出土した。一番は各所の仮設遺跡として遺物が分布があるものと思われる。
52	(五井神名田)	平安	包蔵地	土器の散布が見られる。
53	(土村高森)	中世末	包蔵地	板塀、甕器が混在し、住居は不明ながら小様でかなり彰顯化しており、中世末期の所産と考えられる。
54	(野野牧入)	律文	包蔵地	律文時代後半到平安初期の土器が後づけられている。
55	(小日向中筋日田)	律文~平安	包蔵地	粗文土器、灰陶、黒陶が落ち、小日向鮮や海貝と古く分離地帯ともと思われる。
56	高奈三十六姓造跡	律文、古墳~平安	包蔵地	古墳~平安時代住居跡2軒と巨頭丘下巣跡、獨立住居跡1軒、土坑、溝等。
57	(淡皇子山貝塚)	律文~平安	包蔵地	堤防部には漆器の散在。律文、土器類、須恵器が見られる。
58	古葉子飼柵	律文	包蔵地	弥生後期の式土器が散在する。
59	(系谷白石)	律文	包蔵地	道筋の跡跡が認められる。
60	(上原山口)	中世末	包蔵地	小型の板塀や配線跡は小屋。中世期の物と考えられる。
61	高奈丁賀員戸遺跡	弥生、奈良、平安	仙臺跡、高輪	弥生、奈良~平安時の住居跡2軒と巨頭丘下巣跡、窓心、土坑等。
62	小日向連谷峠遺跡	弥生	住居跡	弥生後期御殿式土器及び住居跡2軒。
63	(土塙東久保保)	律文	包蔵地	昭和53年(昭和53年)の発掘調査で式土器のほか完形品が出土。昭和55年の開発の際に前野間山式土器が出土。
64	(新井上塚)	律文	包蔵地	昭和30年、中間移式土器が出土。
65	(土塙跡中)	律文	包蔵地	昭和40年、道路拡張の前に後馬鹿塚之内人土器の完形品が出土。
66	(上原卫上御野原)	律文	包蔵地	昭和31年、後期加曾利式土器が出土。(御野所蔵)
67	(土塙田阪ケ沢)	律文	包蔵地	昭和41年、後期加曾利式土器の小形コップ状土器が出土。
68	(上原田宮道一茂谷)	律文	包蔵地	中周を中心とした十軒、石器が遺物に分布している。
69	(牛塙跡内)	律文	包蔵地	昭和58年(昭和58年)における相模川工事が行われ、これに伴い複数土坑を中心に多くの遺物及び遺物が出土。作房跡の一部、灰石石器の発見の北端では土坑が田畠基底近くまで、然れど隣接での底がりが確認される。
70	(牛塙丸久保)	律文	包蔵地	中周を中心とする遺物が確認されている。
71	(牛塙白石)	律文	包蔵地	中周を中心とした遺物の分量が認められ、石器が多く見られる。(69)と同一。
72	綿野7号墳	古墳	墳墓	(待定) 1毛古墳経緯による独立貢献とあるが現状では不明。昭和53年の県選1号の際に発掘の跡と須恵器、上断面片が出土。
73	綿野8号	古墳	墳墓	石室跡が発見しているが全埋体の保存状況は良好。前方後円墳と思われる。
74	(土塙寺地)	角食		昭和4(1929)年に熱をもつ鉄、青銅器1点と大型土器2軒、火薬、煙草、帽子(キーリック)、セリタ(セリタ)及び通達などに「間に差し置き金をもつて物」が封付される。
75	(上原田引ノ内)	中世末		小型の石器で割合等は全く不明。中に所在する。
76	(上原田引ノ内)	中世末		同上。八郎に所在する。
77	瓦造跡(横糞合分)	律文、奈良、平安	包蔵地、生落跡	律文包含地及び奈良~平安期に生落跡4軒、土坑等。
78	二軒在家前元寺遺跡	律文、平安初	仙臺跡	律文住居跡2軒、平安初期立柱跡2軒、土坑、溝跡等。
79	土塙西久保造跡	律文	包蔵地	律文中期動物包含地。
80	上原田丸久保造跡	律文、近世	包蔵地、仙苔	律文土器少々。八下曲跡、律文~古代(?) 遺跡。
81	新柳東下巣跡	平安	住居跡	平安時代住居跡2軒、土坑1基。
82	下増田1丁目中連跡	古墳、平安	住居跡、稻庭跡	古墳時代住居跡2軒、古墳周囲1、平安時代清酒、上弦。
83	下増田上1中連跡	律文、古墳~平安	住居跡、稻庭跡	律文住居跡1軒、弥生土器、丁字形と窓内陣2基、平安住居跡1軒。
84	佐井田御池造跡	律文、古墳	包蔵地、住居跡	純文時代土坑、載石住居跡(?) 1軒、古墳時代遺物包含層。
85	下増田1・平造跡	平安	住居跡	平安時代住居跡2軒、土坑。
86	人見京原遺跡	古墳	集会跡	古墳時代住居跡3軒。
87	八幡三日山遺跡	律文、平安	集会跡	律文中期御殿跡4軒、上坑12基、平安時代遺跡。
88	下増田百石遺跡	古墳、近世	住居跡、仙苔	古墳時代住居跡1軒、八下曲跡。
89	人山岬耕宿泊跡	律文、近世	祭祀跡	古墳時代御殿跡を主体とする祭祀遺跡、清右衛門遺跡を主体として土師器、須恵器、麻縄器等が出土している。

### 第3節 調査会の経過

松井田町遺跡調査会は昭和62年度に組織され、西野牧小山平遺跡の確認調査から開始し、平成8年度の報告刊行をもって解散した。調査組織は以下の通りである。

第3表 松井田町遺跡調査会組織表1（昭和62年度～平成3年度）

組織	役職	年 度				
		昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度
会長	町長	中山治秀	武田弘	武田弘	武田弘	武田弘
副会長	教育長	小板橋文夫	小板橋文夫	宮下初太郎	宮下初太郎	宮下初太郎
理事	教育委員長	宇佐美忠一	宇佐美忠一	宇佐美忠一	宇佐美忠一	佐藤博昭
	文化財調査委員	小林二三雄	小林二三雄	関光保	関光保	関光保
	文化財調査委員	上原富次	上原富次	上原富次	上原富次	上原富次
	総務課長	坂本克朋	坂本克朋	寺鶴正行	春原直方	上原坦
	企画課長	上原坦	上原坦	上原収	上原収	上原収
	財政課長	上原長男	春原直方	萩原修一	白石敏行	白石敏行
	社会教育課長	白石敏行	土屋眞	土屋眞	土屋眞	土屋眞
顧問	県企画部交通対策課長	町田速男	小野字三郎	小野字三郎	小野字三郎	磯貝弘二
	県教委管理部参考文化財保護課長	梅沢重昭	梅沢重昭	梅沢重昭	梅沢重昭	
	県教委管理部文化財保護課長					上月正博
	日本道路公団富岡工事事務所長	栗原紀一	栗原紀一	栗原紀一	倉沢貞夫	倉沢貞夫
	日本道路公団佐久工事事務所長	経川友司	経川友司			
	山武考古学研究所長	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫	平岡和夫
監事	監査委員	松本武夫	松本武夫	松本武夫	佐藤敏夫	須藤祐伸
	収入役	小板橋正昭	小板橋正昭	内田武夫	寺鶴正行	寺鶴正行
事務局長	文化財保護係長	伊藤節夫	伊藤節夫	伊藤節夫	伊藤節夫	
	社会教育課課長補佐文化財保護係長					清水博
事務員	文化財保護係主任	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦	水澤祝彦
	松井田町遺跡調査会臨時職員	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子

第4表 松井田町遭訪調査会組織表2（平成4年度～平成8年度）

年 度		平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
組 織		氏 名	氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
職名	役 職					
会長	町 長	武出 弘	武田 弘	武田 弘	武田 弘	武田 弘
副会長	教 育 長	宮下初太郎	宮下初太郎	植塙 勇	植塙 勇	植塙 勇
理 事	教育委員長	中島 久	山賀 基宏	山賀 基宏	山賀 基宏	山賀 基宏
	文化財調査委員	岡 光 保	上原 富次	上原 富次	上原 富次	上原 富次
	文化財調査委員	上原 富次	佐藤 義一	佐藤 義一	佐藤 義一	佐藤 義一
	総務課長	上原 坦	白石 敏行	白石 敏行	白石 敏行	白石 敏行
	企画課長	上原 収	武井 貞夫	武井 貞夫	武井 貞夫	武井 貞夫
	財政課長	白石 敏行	上屋 真	土屋 真	土屋 真	土屋 真
	社会教育課長	土屋 真	金谷 宏二	金谷 宏二	金谷 宏二	金谷 宏二
顧 問	県企画部交通対策課課長	青木 茂一				
	県土木道路建設課課長		武井 上巳	武井 上巳	高橋 壮五郎	高橋 壮五郎
	県教委管理部参事文化財保護課長	上月 正博	荒畑 大治	荒畑 大治	荒畑 大治	
	県教委文化スポーツ部文化財保護課長					土田 明
	日本道路公団富岡工事事務所長	佐々木芳文	佐々木芳文			
	日本道路公団佐久工事事務所長			土井 俊二	土井 俊二	村上 友章
	山武考古学研究所所長	平岡 和夫	平岡 和夫	平岡 和夫	平岡 和夫	平岡 和夫
監 事	監査委員	須藤 勉伸	須藤 勉伸	須藤 勉伸	中山 公平	中山 公平
	収入役	寺崎 正行	寺崎 正行	寺崎 正行	寺崎 正行	寺崎 正行
事務局長	社会教育課課長(初)	清水 博	清水 博	清水 博	佐野 興伸	佐野 興伸
	文化財保護係長					
事 務 員	文化財保護係主任	水澤 慶彦	田口 修	田口 修	田口 修	田口 修
	松井田町遭訪調査会臨時職員	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子	中澤美江子



第3図 関越自動車道路（上信越自動車道 上越線）路線図

# 横川大林遺跡

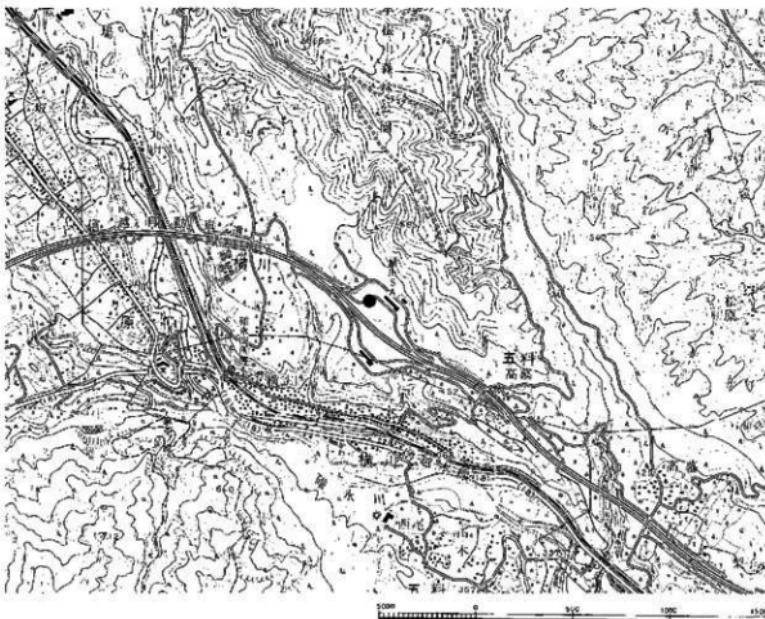
(上ノ平遺跡)

## 第1章 遺跡の立地

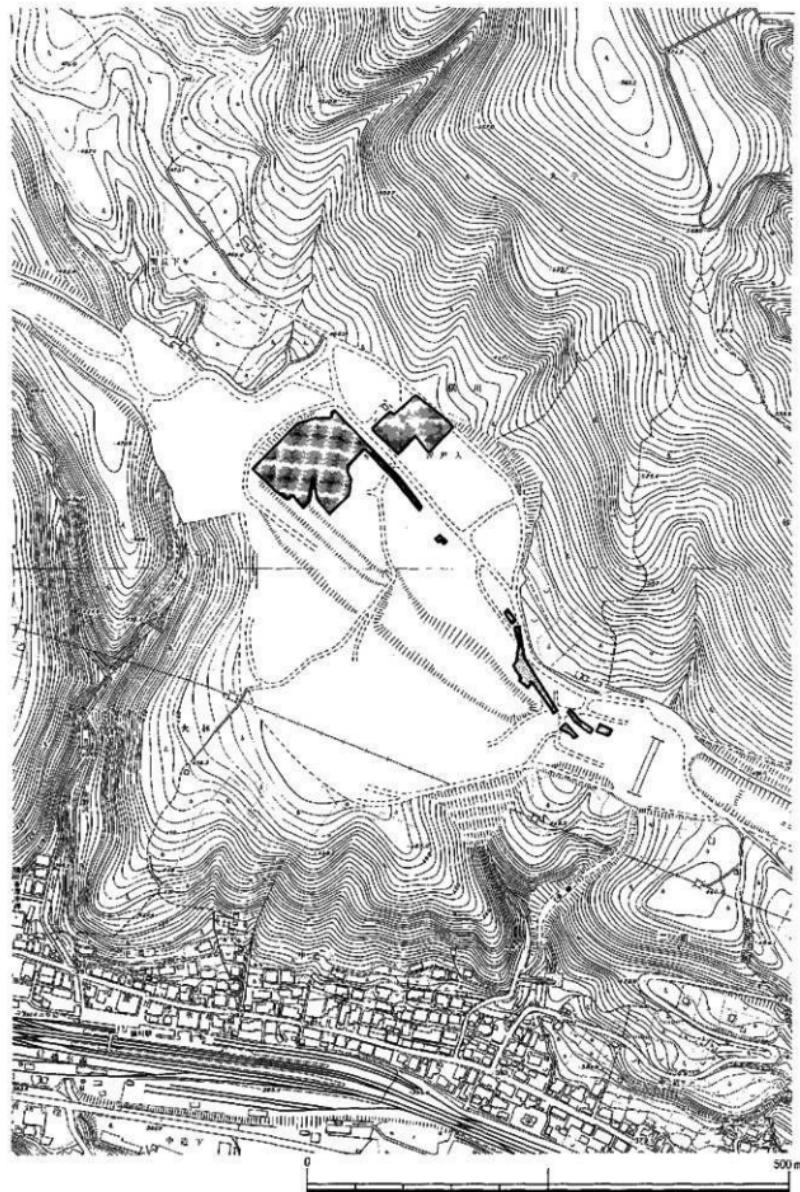
横川大林遺跡の所在する松井田町横川は、霧積川と碓氷川の合流点東側に位置する。横川から原・坂本に至る地域は群馬県（関東平野）から長野県（中部山岳地帯）に抜ける碓氷峠の起點に当たり、近世には中山道（現在の国道18号線）の要である碓氷の関所が置かれていた。又、律令期にはすでに東山道の交通の要衝として機能していたと推察され、坂本駅家・碓氷坂の関等の推定地が周辺に存在している。

横川大林遺跡は横川集落の北側に位置し、水谷から小根山森林公園を経て関長原丘陵の中腹、南向きの斜面部に立地する。調査区域の標高は約460m ± 15m、遺跡の南側に流れる碓氷川との比高は100m以上を測り、調査前の現況は畠地及び杉を主とした山林であった。確認調査範囲の中央と東側、そして西側に支谷が南北方向に走向するが、本調査を実施した地区は、中央支谷と西側支谷間の起伏に富んだ丘陵上に位置し、本遺跡を特徴付ける绳文時代早期後半の遺構・遺物は、確認調査範囲の西端部に立地する尾根状の台地部分に集中して分布していた。

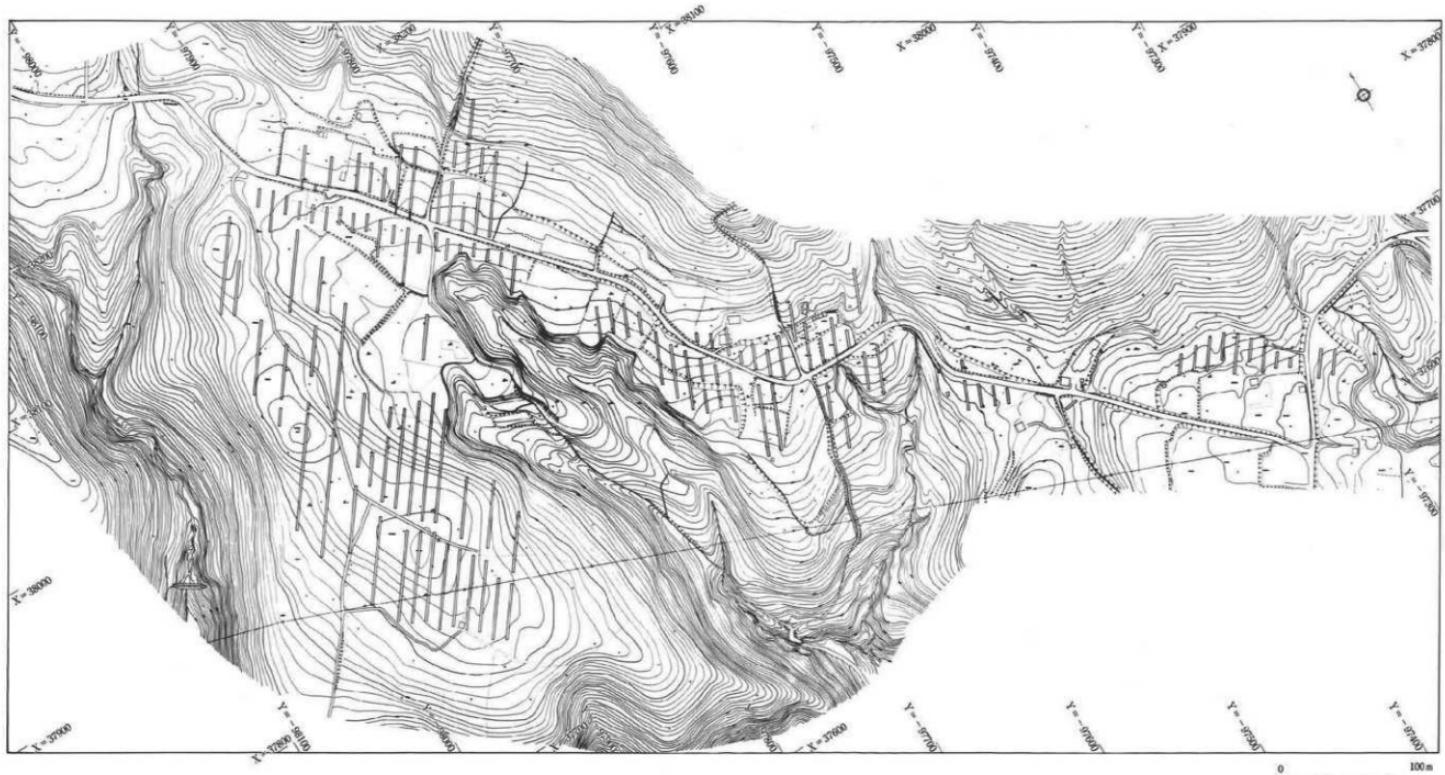
現在の調査区域は、上信越自動車道の横川サービスエリアに変貌し、雲峰妙義山の裏妙義が間近に展望出来る風光明媚なサービスエリアとして知られ、横川名物「峠の釜飯」を買い求める人々で常に賑わいを見せている。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区設定図



第3図 トレンチ設定図

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

#### 確認調査

確認調査は、調査対象面積約61,400m<sup>2</sup>に対して20%のトレンチ調査により、遺構確認を行うこととし、起伏に富んだ調査区の地形に合わせて、幅10mに2mのトレンチを設定して実施した。その結果、調査区西端部の台地、谷部、丘陵斜面部を中心に遺構・遺物が検出され、本調査を実施することに決定した。

#### 本調査

本調査は、平成元年に行われた確認調査の成果に基づき、調査対象面積約61,400m<sup>2</sup>のうち遺跡西端部の台地を中心とした面積約8,570m<sup>2</sup>を対象として実施した。本調査区は農道及び工事用道路を境に、遺跡西端部の台地をC区、その東側、農道を隔てた谷部分をB区と仮称し、B区の北側、工事用道路を隔てた斜面部をA区と仮称した。

表上排除は0.7エンボによりC区から開始し、これと併行で遺構検出作業を行った。排土上、C区が幾層もの文化層から成ることが確認された為、本区を東側部分・西側部分・最優先区域の3区に分割し、それぞれを層序毎に調査することにした。平成2年2月末段階ではA区は4面調査を、B区は3面調査を行い、C区東側部分は2面調査を、C区西側部分は3面調査を、そしてC区最優先区域は2面調査を行っている。また平成3年3月には農道の下にも遺構・遺物が広がっていることが確認された為に、新たにこの部分の調査を行うこととなり、A区を北調査区、B・C区を南調査区と地区名を改め、さらに便宜上南調査区は台地部分・谷部分・農道部分と呼称することにした。最終的な本調査実施面積は約12,280m<sup>2</sup>に及ぶ。

遺構の掘り下げについては、堅穴住居は基本的に四分割法を用い、覆土の上層を詳細に記録すると共に、遺物の出土地点とレベルを可能な限り記録し取り上げを行った。炉は住居跡と同様、十字にベルトを設定して掘り下げ、上坑は二分割法を用いた。溝その他の遺構は適宜土層観察用ベルトを設定し、掘り下げを実施した。

座標は、公共座標（国家座標第Ⅷ区系）を基準に、調査区上に一辺10mの正方形グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南へA・B・C……、西から東へ0・1・2……と付し、北西隅の杭板柱を以てグリッド呼称とした。なお水準点は公共水準を用いた。

出土遺物の採集は、遺構内の遺物については覆土一括で取り上げを行い、搅乱等に包含されている遺物及び遺構確認面の遺物はグリッド毎に取り上げを行った。

出土遺物の採集は、遺構内の遺物については覆土一括で取り上げを行い、搅乱等に包含されている遺物及び遺構確認面の遺物はグリッド毎に取り上げを行った。

実測図は1/20縮尺を基本としたが、炉・埋設土器については1/10縮尺を、遺物・焼石分布図は1/10・1/20縮尺を用いた。また遺構配置図については1/200縮尺で測量を行い、これに50cm単位の等高線を加えて作成した。

写真撮影は3種類のカメラ（35mm白黒・35mmカラースライド・白黒6×7判）を使用し、調査の各段階で随時記録を行った。また遺構掘り下げ完了後、バルーンによる遺跡全景の空撮も行った。

## 第2節 調査の経過（調査日誌抄）

本造構の調査は確認調査が平成元年6月19日より平成元年11月30日まで、本調査は平成2年8月6日から平成3年7月3日まで実施した。以下に調査経過の概略を記す。

### 平成元年

- 6月期 19日、調査開始、発掘準備作業。29・30日、トレンチ設定作業を行う。
- 7月期 1日、テストピット掘り下げ開始。6日、全体地形測量を開始する。11日、重機によるトレンチ掘り下げを開始する。20日、トレンチ精査開始、全体地形測量終了。
- 8月期 重機によるトレンチ掘り下げ、人力によるトレンチ精査作業を継続する。4日、県教育委員会の承認を得て、調査対象地区北側の一部開放を行う。
- 9月期 重機によるトレンチ掘り下げ、人力によるトレンチ精査作業を継続する。12日、T事用道路部分の表土除去作業を開始する。
- 10月期 1日、工事用道路部分の精査、遺構調査を開始する。表土除去作業継続。
- 11月期 表土除去作業、T事用道路部分の遺構調査を継続する。21日、バルーンによるトレンチ設定状況の空撮を実施する。22日、重機による埋め戻し作業を開始する。30日、埋め戻し作業を終了し、元年度の調査を終了する。

### 平成2年

- 8月期 6日、器材の搬入、同日、本調査区西側台地部分より表土排除を開始する。
- 9月期 10日、本調査区東側谷部分の表土排除を始める。12日、西側台地部分で方眼測量・水準測量を実施する。18日、西側台地部分の最優先区域より遺構調査を開始する。
- 10月期 4日、プレハブ事務所・トイレを設置し、調査補助員の大福増員に伴い、器材を追加する。
- 11月期 12日、本調査区東側の表土排除を始める。13日、西側谷部分の遺構調査を開始する。
- 12月期 西側台地部分の遺構調査を継続し、年内の調査を26日まで行った。台地頂上部では土坑多数を検出した。

### 平成3年

- 1月期 5日、調査を再開する。31日、町教育委員会の視察を受ける。
- 2月期 本調査区東側及び西側の第1面の空撮及び全体測量を終了し、漸次第2面の調査に移行する。20日、古環境研究所の早田氏来跡。土壤分析等を依頼する。この場、標準堆積土層の調査を行う。本遺跡の地層に地滑り等による二次堆積が見られることが改めて確認された。
- 3月期 東側・西側共に第2面の調査を実施するが、後半漸次第3面の調査に移行する。西側台地部分東斜面に堅穴住居・集石遺構の他、縄文土器・石器等を多数検出し、遺構・遺物はさらに農道部分に広がっていることが確認された。27日、平成2年度の調査を終了する。
- 4月期 4日、平成3年度の調査を開始し、同日、未調査であった西側農道部分の表土排除を始める。また西側台地部分の調査を継続する。9日、農道部分第1面の遺構調査を開始する。
- 5月期 9日、農道部分第1面の遺構調査を終了。14日、第2面の調査を開始する。31日、空撮実施。
- 6月期 6日、県教育委員会による終了確認を得て、現地での残務整理作業を開始する。
- 7月期 3日、残務整理の終了を以て本調査の全工程を完了する。

### 第3章 遺跡の土層

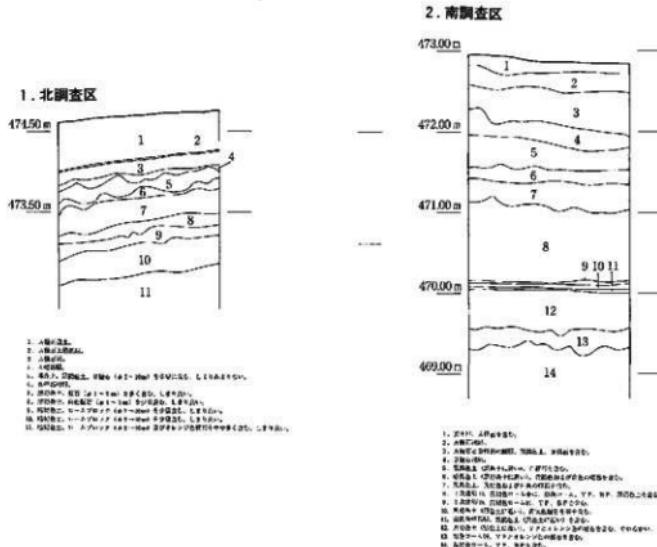
本遺跡の堆積土層については、北調査区の西壁と南調査区台地部分の南壁で観察を行った。地表面は平坦ではなく、南調査区東側の谷部分に向かって傾厚が増している。

本遺跡で最も特徴的な堆積状況を示す南調査区では、地滑りによる厚いローム二次堆積層が観察される。ローム二次堆積層は北側の関長原丘陵から発生した土砂流と推測され、本遺跡の東側に位置する五料橋荷谷戸遺跡・五料野ヶ久保遺跡でも同様の二次堆積層が確認されている。

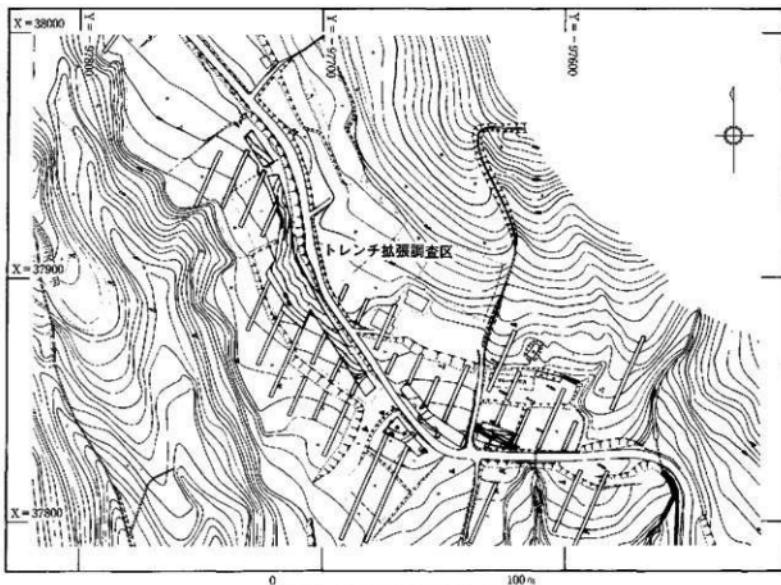
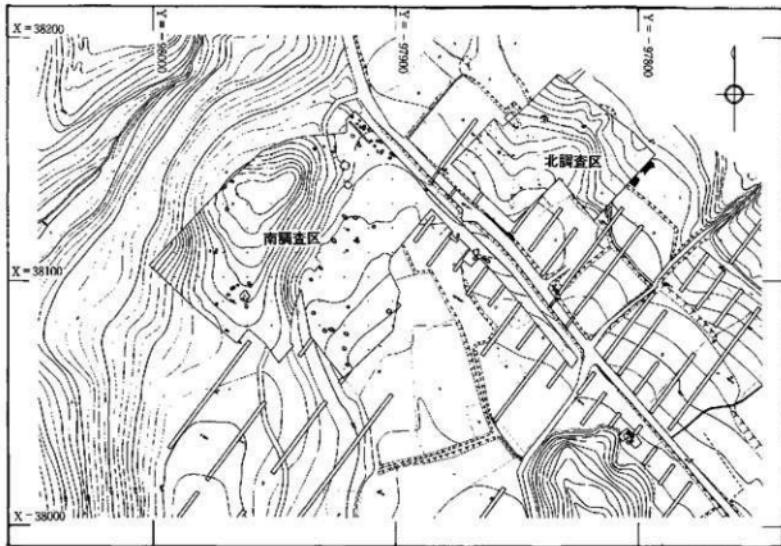
第6図-1は北調査区の基本堆積土層図である。浅間A・B軽石層に関して良好な資料を検出しており、共に幾層ものフォールユニットを確認している。各フォールユニットの层数はA軽石層では10層以上、B軽石層では30層以上に達する。B軽石層以下は黒褐色土・暗褐色土と続き、二次堆積層は検出されていない。

第6図-2は南調査区台地部分の馬本地積土層図である。第2層は浅間A軽石層、第4層は浅間B軽石層、第5層は浅間C軽石を含む黒ボク土である。第8・9層が二次堆積層で主にローム層から成り、黒ボク土や浅間一板鼻褐色軽石をブロック状に含有する。第10層以下は黒ボク土・ローム層の順に堆積し、第11層には黄灰色の軽石層が確認されている。

南調査区の土壤については柱状にサンプルを採取して土壤分析を実施している。詳細については自然科学分析編を参照されたい。



第4図 基本堆積土層図



第5図 調査区配置図

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概観

調査の結果、縄文時代早期前半の住居跡・土坑、早期後半の土坑群・集石炉・焼土跡、前期～中期の住居跡・土坑が検出され、他に縄文時代早期以前と考えられる地割れ跡、近世の遺構として畠跡と溝状遺構が検出されている。

検出された縄文時代の遺構は、時期により明確に確認面が異なり、前期～中期の遺構が黒色土中に存在する大規模なローム二次堆積層上面もしくは黒色土中で確認され、早期後半の遺構がローム二次堆積層の黒褐色土層中、早期前半の遺構はソフトローム面に相当する粘質土層の上面から検出されている。表土層から早期前半の遺構確認面までの深さは2m～4mを測る。調査区は南向きの斜面部にあたる北調査区、台地と比高10mを測る谷部の低地平坦面からなる南調査区に分かれ、本遺跡の主体となる縄文時代早期後半の遺構・遺物は、南調査区の台地部分を中心として谷部に続く東向きの急斜面から検出され、早期前半の遺構・遺物は南調査区の谷部分を中心としている。又、前期～中期の遺構は北・南調査区及び確認調査部分に散在して検出されている。

遺物は、縄文時代早期後半の条痕文系土器（鷺ヶ島台式・茅山下層式・絡条体圧痕文系等）を主体として、早期前半撚糸文系土器（稻荷台式・東山式）、押型文系土器、沈線文系土器（田戸下層式）、早期末～前期初頭啄臼式、花積下層式土器、前期諸磯b式土器、中期五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E式土器、後期加曾利B式、高井東式土器等が出土している。石器類では条痕文期に伴うと考えられる磨石類、特に特殊磨石が多量に出土し、他に打製石斧・磨製石斧・叩き石・凹石・石皿・台石・石匙・石錐・砥石・チョッパー様石器・スクレーパー等が出土している。又、南調査区の斜面部を中心として、黒曜石の石錐を主体とする小形石器類が大量に出土し、小形石器の製作跡として捉えられる状況であった。

### 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は時期により確認面が異なるため、早期前半、早期後半、前期～中期に分けて掲載し、各時期別に説明を加える。

南調査区を中心として検出された遺構の時期別数量は以下の通りである。この他に早期後半以前と考えられる地割れ跡が検出されている。

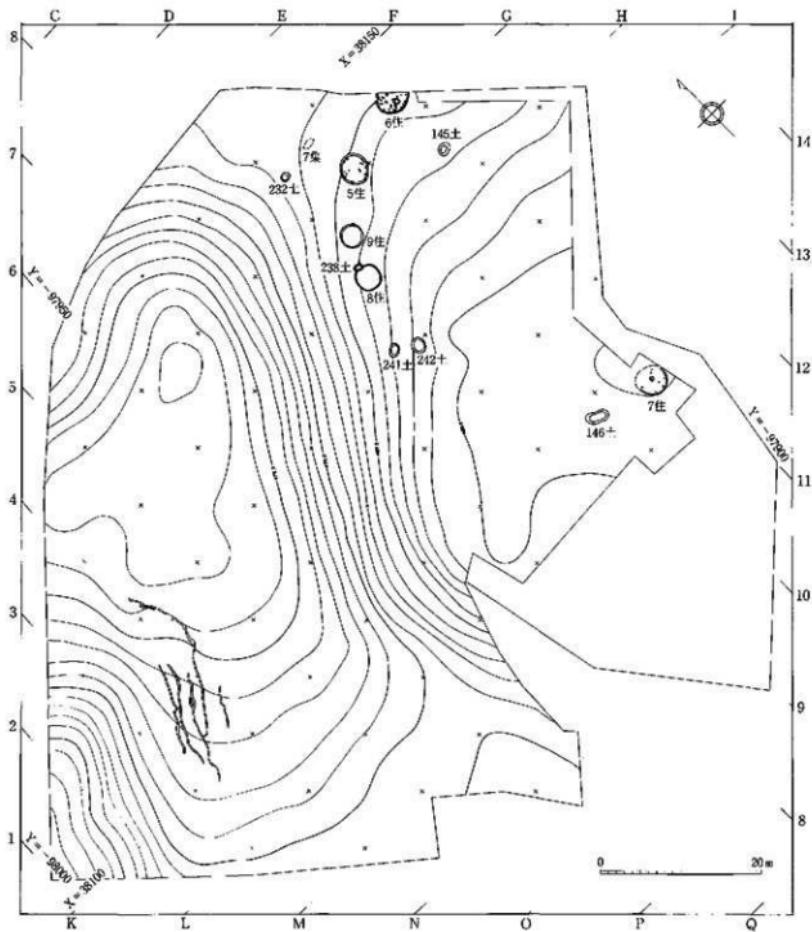
早期前半	住居跡	5軒
	土坑	6基
	集石	1基
早期後半	土坑	147基
	集石炉	6基
	焼土跡	8基
早期末～前期初頭	住居跡	2軒
中期後半	住居跡	2軒
前期～中期	土坑	81基

### 早期前半

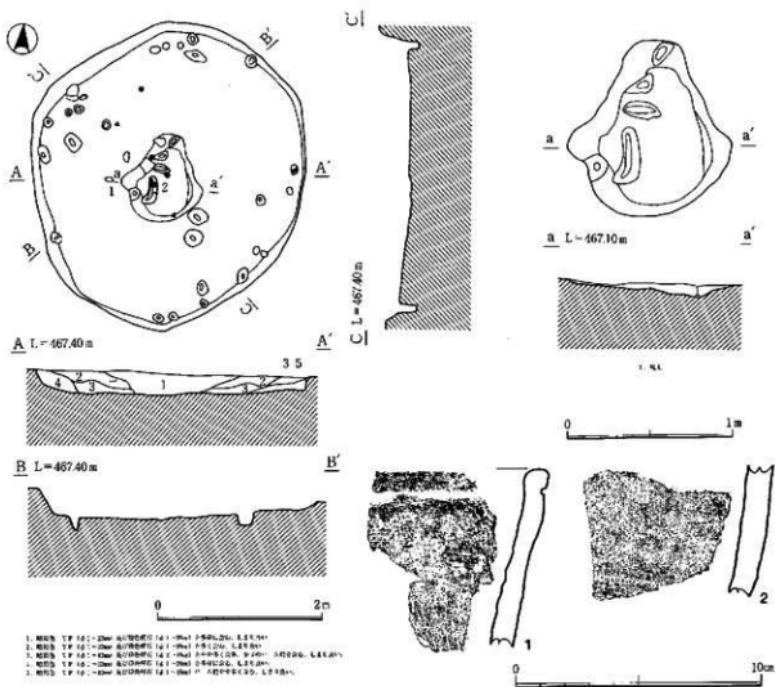
早期前半の遺構は、南調査区の谷部分に偏在して住居跡・土坑・集石が検出されている。

### 住居跡

早期前半の住居跡は、標高467mの等高線に沿って4軒、調査区東端部に1軒、総数5軒検出されている。形態はいずれも円形を基調として、5号住居跡のみ住居内に焼土跡を有していた。遺物は東山式の無文上器片が5号住居跡から出土し、他は少量の土器細片と石器類が出上したに過ぎないが、層位的な面からいずれも早期前半の所産と判断した。



第6図 南調査区縄文早期前半遺構配置図

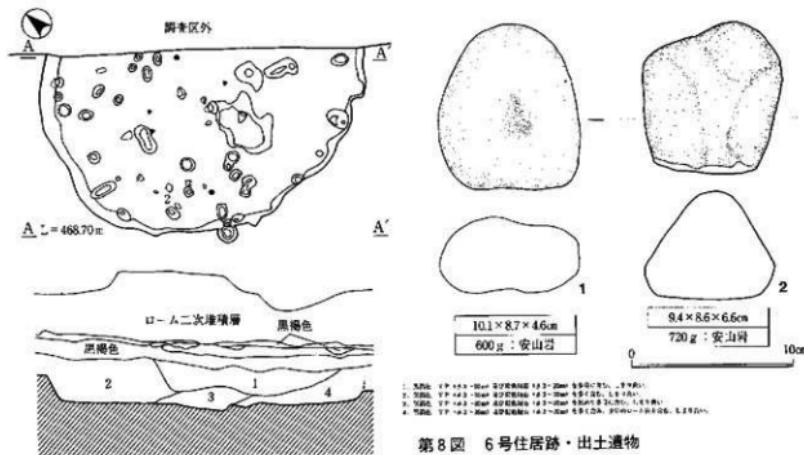


第7図 5号住居跡・出土遺物

5号住居跡 (第7図、図版5・29)

位置／南調査区F-9グリッド南東端に位置する。形態／ほぼ円形を呈し、南北方向に長軸を持っている。規模／長径3.56m、短径3.24m、深さ28cmを測る。炉／中央部から不整規円形を呈する焼土跡が検出されている。南北方向に長軸を持ち、長径1.70m、短径1.28m、深さ18cmを測る。柱穴／不規則な小ピットが検出されているが主柱穴に相当するものはない。床面／比較的凹凸があり、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物出土状況／東山式の無文土器片が炉の周辺から少量出土し、実測可能な口縁部片と胴部片を図示した。

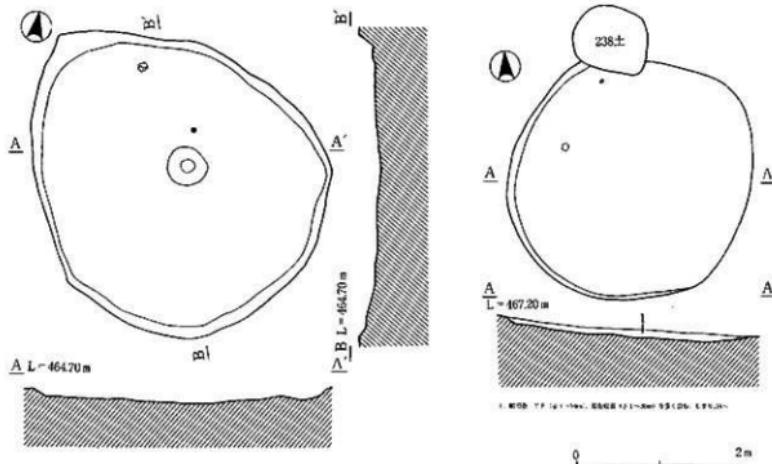
出土遺物／1は無文の口縁部破片で折り返しの口縁を持ち、内外面に擦痕が見られる。胎土に砂粒・麦岩粒・赤色粒を含み、色調褐色を呈し、焼成は非常に良好。2は外面に擦痕が見られる無文の胴部破片で、胎土上に多量の雲母粒・細砂粒と赤色粒を含み、色調黒褐色を呈し、焼成は非常に良好。



第8図 6号住居跡・出土遺物

#### 6号住居跡 (第8図、図版5・29)

位置／南調査区F-10グリッドに位置する。形態／遺構が調査区外に延びる為、明確ではないが、ほぼ円形を呈すると考えられる。規模／横径3.68m、深さ40cmを測る。炉／調査部分からは検出されなかった。柱穴／不規則な小ピットが検出されている。主柱穴に相当するものはない。床面／凹凸があり、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物出土状況／少量の繩文土器細片と自然石、石器が散在して出土している。実測可能な土器片はなく、安山岩製の凹石・特殊磨石を図示した。



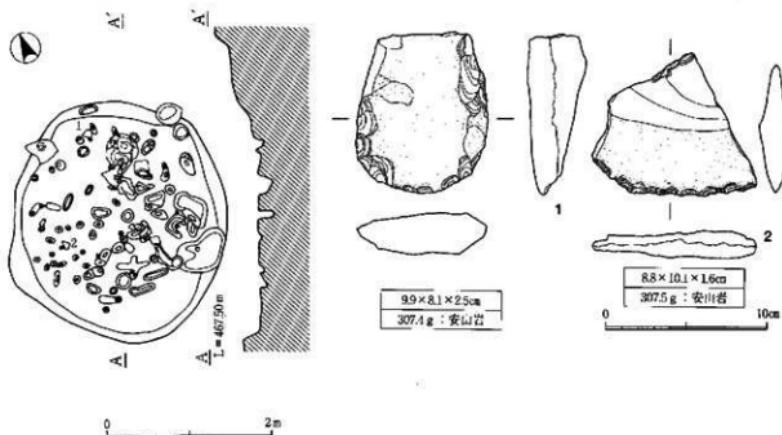
第9図 7・8号住居跡

7号住居跡 (第9図)

位置／南調査区K-10グリッドに位置する。形態／不整円形を呈する。規模／長径3.66m、短径3.20m、深さ20cmを測る。炉／なし。柱穴／なし。中央部からピット状の落ち込みが検出されている。床面／比較的平坦で、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物／縄文土器細片と自然石が少量出土している。

8号住居跡 (第9図)

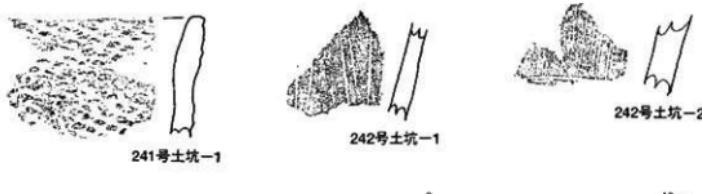
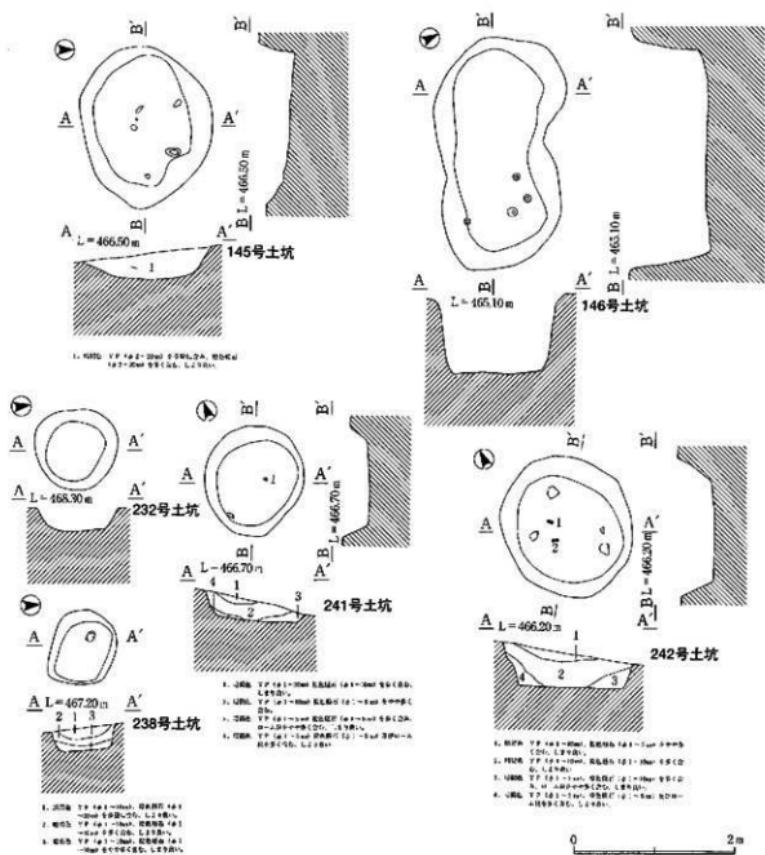
位置／南調査区G-8・9、H-8・9グリッドに位置する。形態／隅丸方形もしくは円形と推測され、東側の壁部分は消失している。規模／長径2.94m、短径2.80m、深さ10cmを測る。炉／なし。柱穴／なし。床面／凹凸があり、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物／自然石が少量出土している。重複／北端部で時期的に新しい238号土坑と重複する。



第10図 9号住居跡・出土遺物

9号住居跡 (第10図、図版6・29)

位置／南調査区G-9グリッドに位置する。形態／不整円形を呈する。規模／長径2.65m、短径2.40m、深さ20cmを測る。炉／なし。柱穴／不規則な小ピットが多数検出されている。床面／凹凸があり、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物／少量の縄文土器細片と自然石、石器が散在して出土しているが、実用可能な土器片ではなく、安山岩製の打製石斧・スクレーパーを図示した。



第11図 早期前半土坑・出土遺物

### 土坑（第11図、表-1、図版6・29）

早期前半の確認面からは土坑6基が住居跡の周辺に散在して検出されている。形態的には円形を基調として掘り込みの浅い土坑5基と、楕円形で掘り込みの深い土坑1基に分類され、円形基調の土坑は貯藏穴として使用された可能性が高く、楕円形を呈する146号土坑は形態的に窓とし穴もしくは墓坑の可能性も考えられる。

遺物は覆土中から極少量の土器片と自然石が出土しているが、図示出来る遺物は241号土坑出土の楕円押型文系土器片1点と242号土坑出土の沈線文系土器片2点のみで石器類は出土していない。

個々の土坑の規模・形態については土坑一覧表にまとめた。

表-1 早期前半土坑一覧表

(cm)

番号	位 置	平 面 形	断 面 形	長軸 × 短軸 × 深さ	備 考
145	G-10	円形	鍋底状	199 × 160 × 42	ピット1 自然石
146	K-9	不整楕円形	鍋底状	285 × 130 × 100	ピット4
232	F-9	円形	鍋底状	104 × 98 × 28	
238	G-8・9	不整円形	鍋底状	92 × 88 × 28	8号住居跡重複
241	H-8	円形	鍋底状	135 × 121 × 30	押型文系土器片
242	H-I-8	円形	鍋底状	170 × 162 × 50	沈線文系土器片

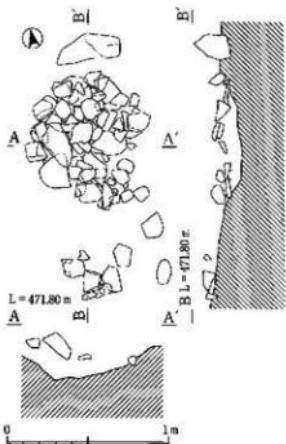
### 土坑出土遺物

#### 241号土坑出土遺物

1は押型文系土器の口縁部破片である。口縁部は弱く外反し、文様は楕円押型文が密に横位施文され、内面には凹凸がある。胎土に砂粒・繊維を含み、色調黄褐色を呈し、焼成は良好。

#### 242号土坑出土遺物

1は沈線文系土器の肩部破片で縦位の集合沈線間に横位の沈線が充填されている。胎土に砂粒・小石を多く含み、色調黄灰色を呈し、焼成は普通。2は沈線文土器の口縁部破片である。波状口縁の口唇部は角頭状を呈し、口唇部と横位集合沈線間に縦位の沈線が充填され、内外面ともに良く研磨されている。胎土には砂粒・小石を多く含み、色調黄灰色を呈し、焼成は良好。



第12図 7号集石

### 集石

集石は早期前半の面から7号集石1基のみ検出されている。

### 7号集石 (第12図、図版6)

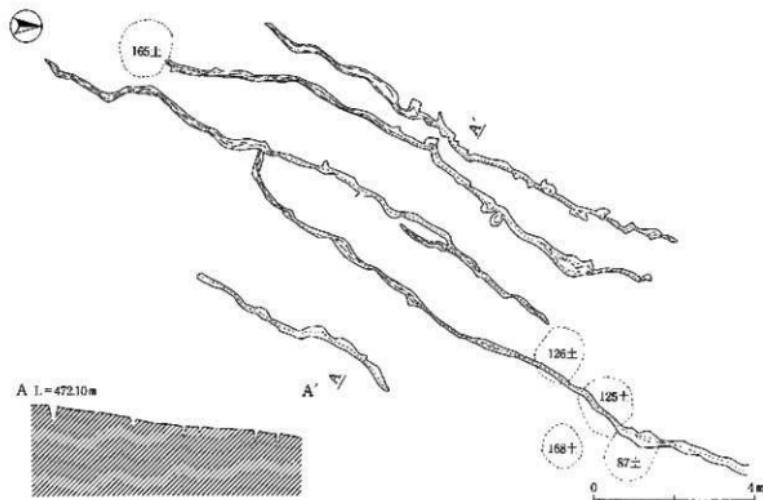
位置／ドー9グリッドに位置する。

形態／北側に楕円形の大石が置かれ、僅かに離れた南側の南北80cm、東西70cmの範囲に自然石が集中し、更に南側から数点の自然石が検出されている。中心部の下からは掘り込みが検出され、明らかに人為的なものと考えられる。尚、被熱痕は観察されなかった。

遺物／なし。

### 地割れ跡 (第13図、図版6)

南調査区台地部分の南斜面部に位置し、5条の細長い溝状を呈して検出されている。純文早期後半の土坑との重複関係から本地割れ跡が古い時期の所産と判断され、早期後半以前の所産とした。

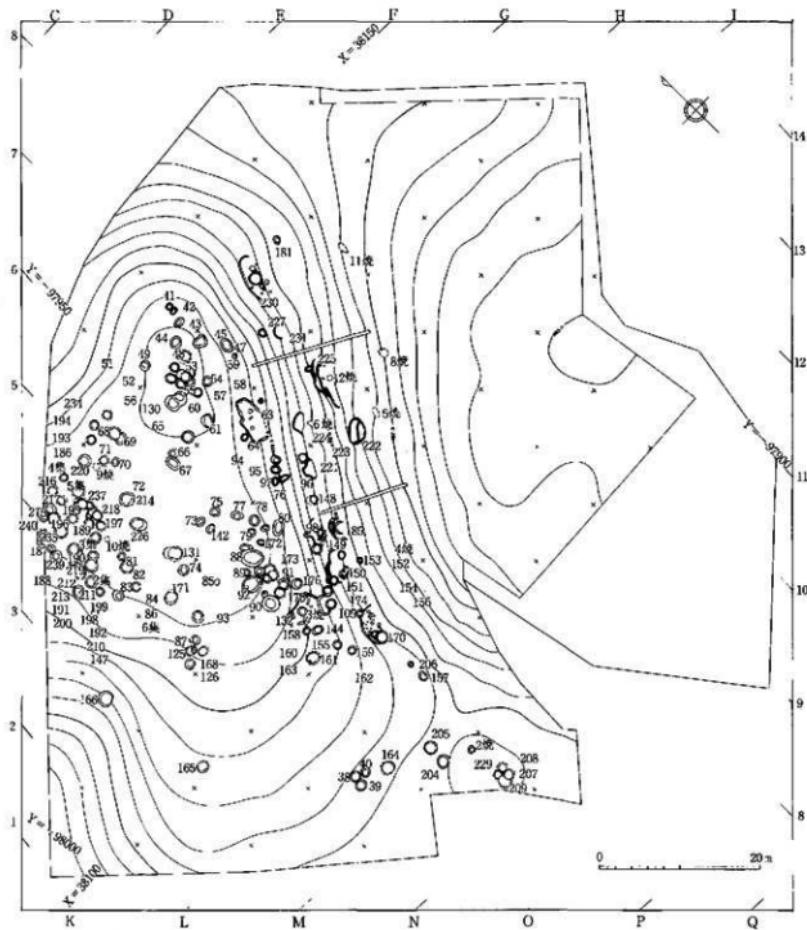


第13図 地割れ跡

### 早期後半

早期後半の遺構・遺物は、南調査区西側の台地頂上部と東側急斜面部を主体として検出されている。遺構は、ローム二次堆積層下位の黒褐色土中で確認され、黒褐色土上面からは鶴ヶ島台式、格条体圧痕文系等の条痕文系土器、磨石・特殊磨石・台石・石皿等の石器類と焼石・自然砾がほぼ一定のレベルで出土し、当該期の生活面として捉えられる状況であった。

検出された遺構は土坑147基、集石6基、焼土跡8基である。集石はほとんどが焼けた砾で構成され、焼土跡と同様に屋外炉としての機能が考えられる。尚、東側の急斜面部を中心として大量の黒曜石（原石・石核・石器・剥片等）が出土し、石器を主体とする小形石器製作跡として捉えられる状況であった。小形石器製作跡については造構外出土石器として説明を加える。



第14図 南調査区縄文早期後半遺構配置図

**土 坑** (第15~32図、表-2~5、図版I3~22)

早期後半の遺構の主体となる土坑群は、南調査区西側の台地に集中して分布している。性格的に貯蔵穴としての機能が考えられる比較的小形で円形基溝の土坑が大半を占める中で、東側の急斜面部に焼土を混入するカマド状の張り出しを有するもの(149・185・225号土坑)と、非常に大形で底面が平坦な床状を呈するもの(150・170・230号土坑)が分布している。これらは住居として機能した可能性が高いが、積極的に住居とする根拠がないことから、本報告においては土坑として取り扱い、可能性を指摘するに留めたい。検出された土坑の規模・形態については一覧表にまとめ、土坑と認定されなかつた167・243・244号土坑は欠番とした。

表-2 早期後半土坑一覧表1

(cm)

番号	位 置	平 面 形	断 面 形	長 軸 × 短 軸 × 深さ	備 考
38	L-4	円形	袋状	125 × 118 × 63	
39	L-4	円形	四字状	122 × 115 × 65	
40	L-4	円形	皿状	101 × 90 × 21	
41	F-6	円形	皿状	67 × 62 × 11	
42	F-6・7	楕円形	鍋底状	87 × 57 × 29	
43	F-6	楕円形	皿状	120 × 77 × 23	ピット2
44	F-6	不整円形	鍋底状	141 × 115 × 28	石壁
45	G-6・7	隅丸台形	皿状	179 × 120 × 17	
47	G-7	楕円形	皿状	150 × 102 × 17	特殊磨石・自然石
48	G-6	円形	袋状	143 × 128 × 60	
49	G-6	円形	皿状	111 × 95 × 70	
51	F-6	楕円形	鍋底状	126 × 101 × 44	
52	G-6	円形	鍋底状	130 × 110 × 35	
53	G-6	楕円形	造台形	195 × 121 × 96	自然石 54・55・56号土坑重複
54	G-6	円形	鍋底状	107 × 71+a × 37	自然石 53号上流重複
55	G-6	楕円形	鍋底状	100+a × 95 × 35	53号土坑重複
56	G-6	円形	鍋底状	125 × 107 × 26	53号上流重複
57	G-6	円形	四字状	110 × 104 × 63	特殊磨石・自然石
58	G-6	円形	鍋底状	113 × 100 × 34	特殊磨石・石壁・自然石
59	G-7	円形	柱穴状	49 × 46 × 71	
60	G-6	円形	鍋底状	140+a × 160 × 54	自然石 130号土坑重複
61	G-6	楕円形	皿状	137 × 90 × 20	
63	G-H-6	不整長方形	皿状	569 × 138+a × 26	石壁・自然石 ピット多数
64	H-6	楕円形	皿状	90 × 73 × 19	
65	G-5・6	円形	皿状	113 × 95 × 22	
66	G-5	円形	鍋底状	104 × 97 × 32	
67	G-II-3	楕円形	皿状	176 × 107 × 14	
68	G-5	不整円形	袋状	172 × 145 × 73	自然石 69号土坑重複
69	G-5	不整円形	皿状	135 × 111 × 23	自然石 68号重複
70	G-5	円形	皿状	86 × 76 × 20	自然石
71	G-4・5	円形	袋状	128 × 122 × 82	
72	G-4・5	不整円形	袋状	173 × 166 × 30	

表-3 早期後半土坑一覧表2

(cm)

番号	位置	平面形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備考
73	H-4	楕円形	鍋底状	211 × 142 × 35	自然石 ピット1
74	H-4	不整椭円形	袋状	179 × 156 × 90	朱痕文系土器・スクレーパー 131号土坑重複
75	H-4	円形	逆台形	109 × 110 × 75	自然石
76	I-H-5	楕円形	鍋底状	150 × 105 × 28	自然石
77	H-5	楕円形	逆台形	116 × 90 × 40	条痕文系土器
78	I-5	円形	皿状	122 × 112 × 23	自然石
79	I-5	円形	皿状	102 × 81 × 15	自然石
80	I-5	不整円形	鍋底状	92 × 68 × 29	自然石
81	H-4	円形	四字状	97 × 90 × 37	自然石
82	H-4	円形	鍋底状	172 × 146 × 75	条痕文系土器・自然石
83	H-4	円形	皿状	122 × 100 × 23	ピット3
84	I-4	円形	袋状	172 × 166 × 96	条痕文系土器・自然石
85	H-I-4	円形	逆台形	113 × 112 × 52	
86	I-4	円形	鍋底状	125 × 120 × 41	禍ヶ鳥台式土器・自然石
87	I-4	円形	鍋底状	101 × 90 × 51	自然石
88	I-5	楕円形	鍋底状	288 × 212 × 67	条痕文系土器・石礫 ピット2-172号土坑重複
89	I-5	円形	皿状	90 × 83 × 13	
90	I-5	不整椭円形	皿状	242 × 186 × 26	自然石
91	I-5	円形	鍋底状	110 × 98 × 34	
92	I-5	円形	皿状	108 × 96 × 15	175-176号土坑重複
93	I-5	楕円形	漏斗状	72 × 51 × 35	2段掘り込み
94	H-6	円形	皿状	111 × 103 × 25	粘条体圧痕文系土器
95	H-6	楕円形	皿状	111 × 83 × 25	自然石
96	I-6	瓦楕円形	皿状	144 × 73 × 24	
97	I-H-6	楕円形	皿状	102 × 67 × 22	
98	I-5-6	楕円形	皿状	196 × 117 × 32	
105	J-5	円形	皿状	120 × 95 × 25	
125	I-4	不整円形	四字状	116 × 94 × 94	
126	I-3-4	不整円形	鍋底状	135 × 119 × 44	
130	G-6	円形	鍋底状	185 × 108+α × 35	自然石 60号土坑重複
131	H-4	円形	袋状	130 × 56+α × 70	粘条体圧痕文・条痕文系土器 74号土坑重複
132	I-J-5	円形	漏斗状	209 × 191 × 65	打製石斧・自然石 2段掘り込み
142	H-5	楕丸長方形	鍋底状	116 × 85 × 35	
144	T-J-5	円形	四字状	141 × 125 × 61	174号土坑重複
147	II-3-4	円形	U字状	126 × 122 × 77	条痕文系土器・自然石
148	I-6	円形	四字状	127 × 96 × 92	
149	I-J-6	不整椭円形	鍋底状	330 × 94+α × 26	台石 燥土混入張り出し部有、ピット多数

表-4 早期後半土坑一覧表3

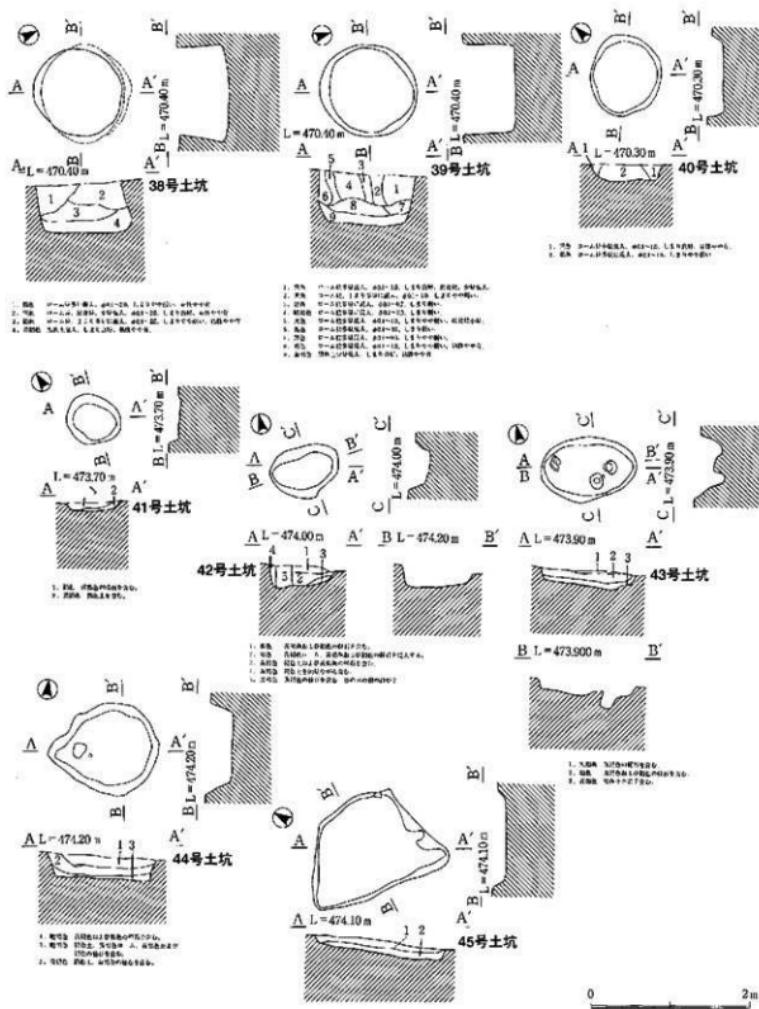
(cm)

番号	位置	平面形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備考
150	J-5・6	楕円形	圓状	423 × 150+α × 19	石築2 ピット1 151号土坑重複
151	J-5・6	円形	鋼底状	105 × 101 × 66	150号土坑重複
152	J-6	不整椭円形	鋼底状	150 × 65 × 25	ピット3
153	J-6	円形	圓次	105 × 101 × 18	台石
154	J-5	円形	圓状	129 × 112 × 26	
155	J-5	不整椭円形	圓状	237 × 108 × 24	自然石 156号土坑重複
156	J-5	円形	圓状	140 × 119 × 20	155号土坑重複
157	L-5・6	卵形	圓状	115 × 98 × 22	
158	J-5	腰丸方形	袋状	113 × 109 × 57	特殊磨石
159	J-5	楕円形	圓状	120 × 91 × 20	
160	J-5	円形	鋼底状	86 × 80 × 27	燒土
161	J-K-5	円形	鋼底状	100 × 94 × 56	自然石
162	K-5	円形	圓状	95 × 86 × 21	
163	J-5	円形	袋状	160 × 147 × 74	自然石 ピット1
164	L-4	腰丸方形	袋状	153 × 149 × 25	
165	J-3	円形	袋状	145 × 127 × 96	ピット1
166	I-Z-3	不整円形	鋼底状	187 × 163 × 83	
168	I-4	円形	鋼底状	113 × 101 × 66	
170	K-5・6	不整椭円形	圓状	494 × 190+α × 14	ピット多數
171	I-4-5	円形	逆台形	80 × 70 × 39	自然石
172	I-5	椭円形	圓状	145 × 68 × 35	ピット1 88号土坑重複
173	I-5	椭円形	圓状	103 × 60 × 18	自然石 燒土
174	I-J-5	不整方形	圓状	233 × 177 × 20	条纹文系土器 ピット7 144号土坑重複
175	J-5	円形	袋状	117 × 110 × 62	条纹文系土器・自然石 92・170号土坑重複
176	I-5	不整円形	鋼底状	132 × 76 × 39	92・175号土坑重複
181	F-8	円形	鋼底状	76 × 72 × 34	自然石
185	I-J-6	不整長方形	圓状	500 × 264+α × 63	普段用具・条纹文系土器・有孔漆器・石器 銅上蓋入り蓋なし
186	G-4	円形	袋状	150 × 147 × 113	鶴ヶ島台式土器・自然石
187	G-4	円形	袋状	142 × 140 × 86	石築・自然石
188	G-3・4	円形	鋼底状	192 × 175 × 88	自然石
189	G-4	円形	鋼底状	133 × 128 × 47	凹石・自然石
190	G-3・4	円形	逆台形	123+α × 141 × 89	自然石 219号土坑重複
191	II-3	椭円形	鋼底状	157 × 137 × 53	自然石
192	II-3	円形	鋼底状	148 × 128 × 59	自然石
193	G-F-5	円形	袋状	120 × 106 × 62	凹石
194	F-5	円形	逆台形	108 × 96 × 62	ピット1
195	G-4	円形	袋状	131 × 115 × 103	鶴ヶ島台式土器・自然石
196	G-4	円形	鋼底状	140 × 122 × 37	鶴ヶ島台式土器・石築

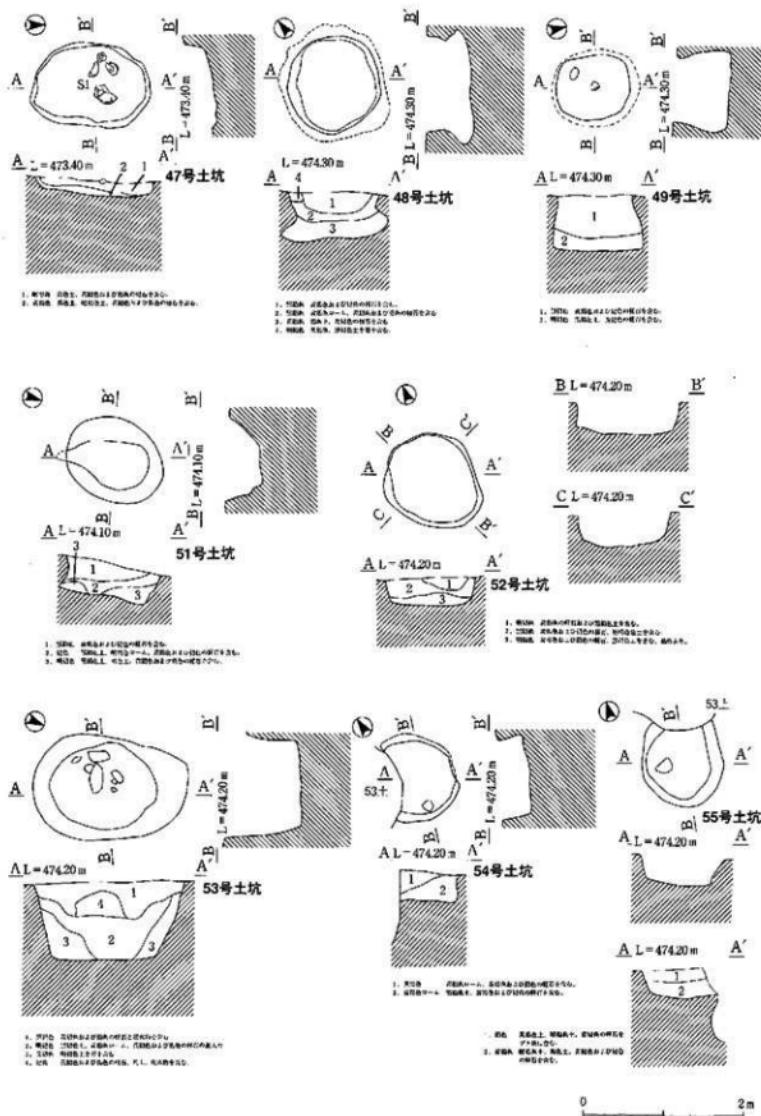
表-5 早期後半土坑一覧表4

(cm)

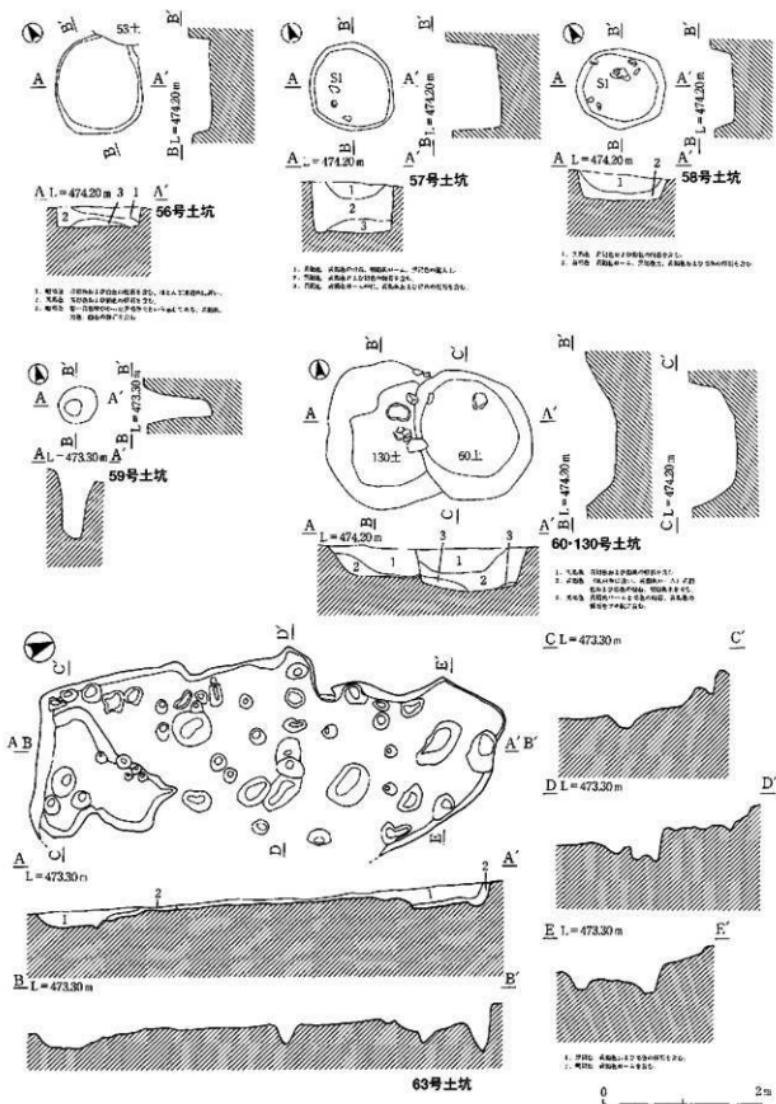
番号	位 置	平 面 形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備 考
197	G - 4	円形	鍋底状	128 × 113 × 33	自然石 236号土坑重複
198	H - 3・4	円形	鍋底状	160 × 154 × 63	自然石 199号土坑重複
199	H - 4	円形	皿状	120 × 116 × 16	自然石 198号土坑重複
200	H - 3	円形	鍋底状	145 × 1542 × 55	自然石
204	L・M - 5	円形	袋状	143 × 137 × 47	
205	L - 5	円形	皿状	157 × 145 × 18	
206	K - 5・6	円形	鍋底状	48 × 46 × 31	条痕文形土器・自然石
207	M - 5	円形	鍋底状	112 × 85 × 77	208・209号土坑重複
208	M - 5	円形	袋状	122 × 113 × 98	207・209号土坑重複
209	M - 5	円形	袋状	154 × 152 × 122	207・208・228号土坑重複
210	H - 3	円形	四字状	101 × 98 × 65	自然石
211	H - 3	円形	鍋底状	108 × 106 × 55	
212	H - 3	卵形	鍋底状	105 × 82 × 37	自然石
213	H - 3	不整円形	鍋底状	129 × 101 × 45	自然石
214	G - 4	円形	鍋底状	133 × 132 × 77	舟ヶ島台式土器・特徴石・チコリ-群石器 217・218号土坑重複
215	G - 4	円形	袋状	135 × 120 × 72	自然石
216	G - 4	円形	袋状	216 × 210 × 85	
217	G - 4	円形	袋状	114 × 32+α × 43	磨石・自然石 214号土坑重複
218	G - 4	円形	袋状	95 × 65+α × 40	自然石 214号土坑重複
219	G - 3・4	円形	鍋底状	86 × 44+α × 58	190号土坑重複
220	G - 4	円形	袋状	159 × 145 × 79	自然石
221	I - 6	不整楕円形	皿状	250 × 144+α × 35	条痕文形土器・自然石
222	I - 7	不整楕円形	皿状	308 × 207 × 26	舟ヶ島台式土器・凹石 2段埋り込み ピット2
223	I・II - 6	円形	鍋底状	119 × 100 × 45	自然石 ピット1
224	H - 7	不整楕円形	鍋底状	278 × 112+α × 32	条痕文系土器・自然石 ピット1
225	H - 7	不整長方形	皿状	500 × 264+α × 63	条痕文系土器・自然石 舟ヶ島入張り出し有 ピット7
226	G - 4	円形	袋状	115 × 112 × 85	等形磨石・自然石
227	G - 7	不整円形	皿状	157 × 105 × 30	自然石 2段埋り込み
228	M - 5	円形	袋状	98 × 95 × 47	209号土坑重複
229	M - 5	円形	袋状	120 × 110 × 54	
230	F・G - 7	椭円形	皿状	604 × 304 × 32	条痕文形土器・自然石 ピット多数
231	G - 7	椭円形	鍋底状	151 × 70+α × 36	格子体圧痕文系土器・自然石
234	F - 5	円形	袋状	118 × 117 × 45	条痕文系土器・自然石
235	G - 3・4	円形	皿状	127 × 115 × 26	
236	G - 4	円形	袋状	138 × 133 × 51	舟ヶ島台式土器・自然石 197・237号土坑重複
237	G - 4	円形	鍋底状	75 × 36+α × 30	236号土坑重複
239	G - 3	円形	四字状	108 × 100 × 78	自然石
240	G - 4	円形	四字状	155 × 133 × 75	



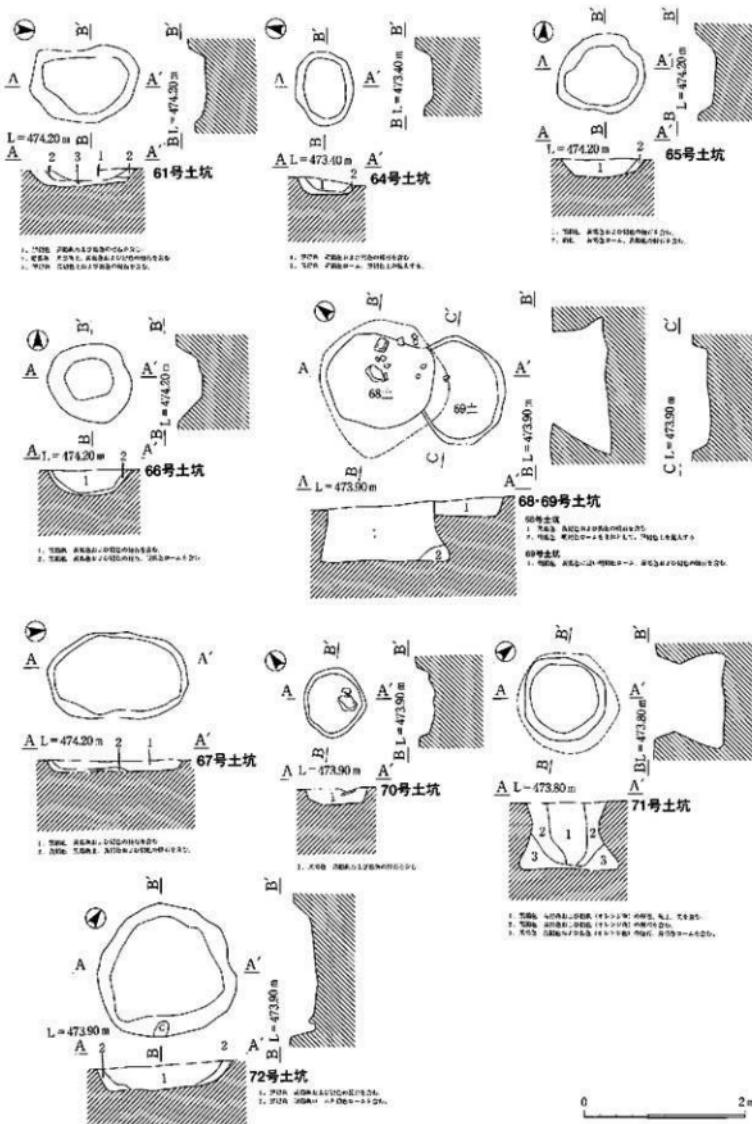
第15図 早期後半土坑 1 (38~45号土坑)



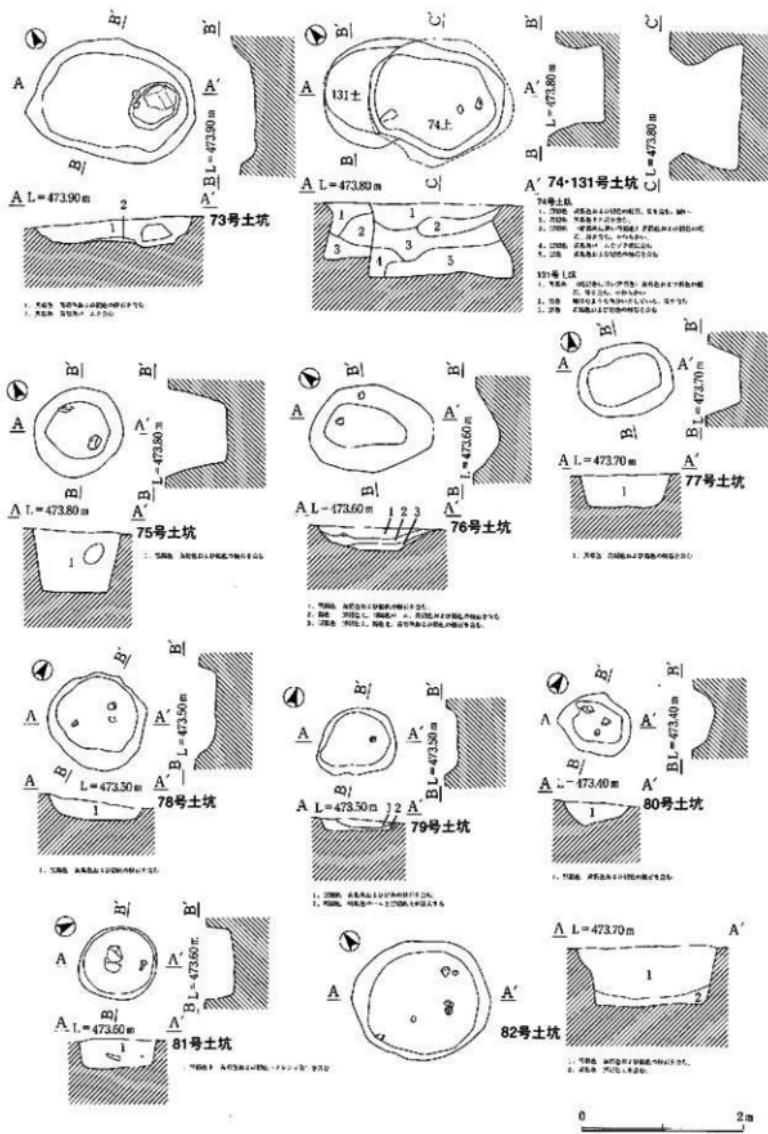
第16図 早期後半土坑2 (47~49、51~55号土坑)



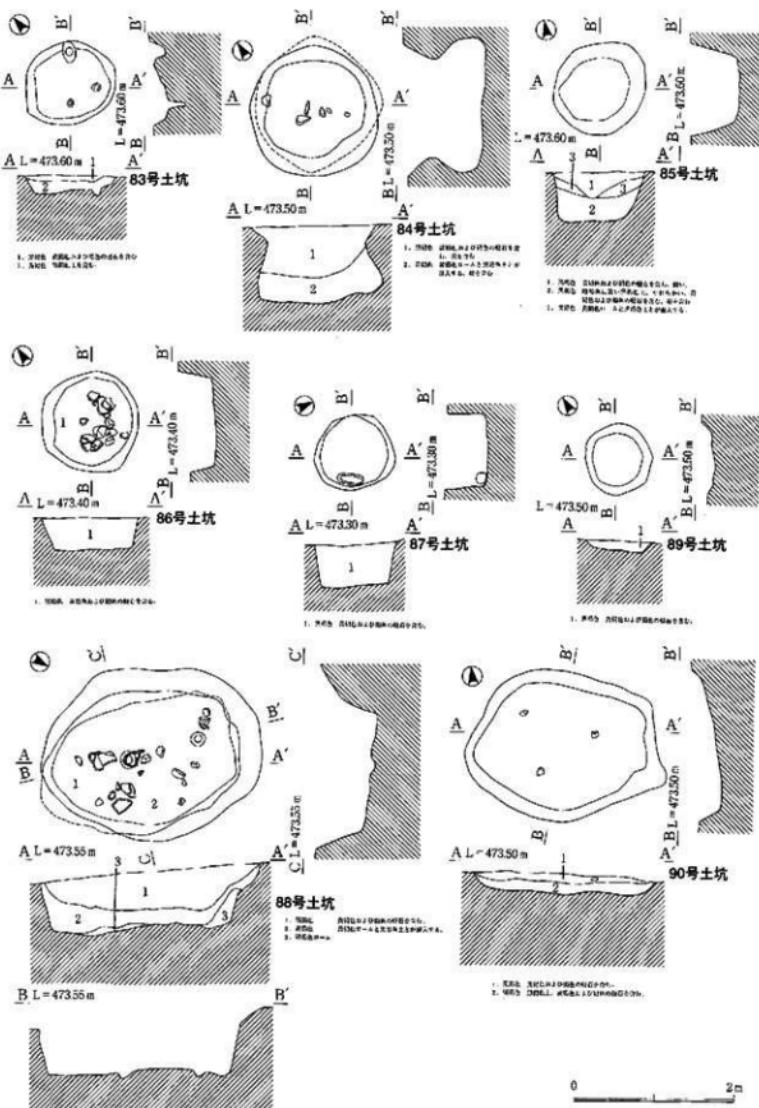
第17図 早期後半土坑 3 (56~60・63・130号土坑)



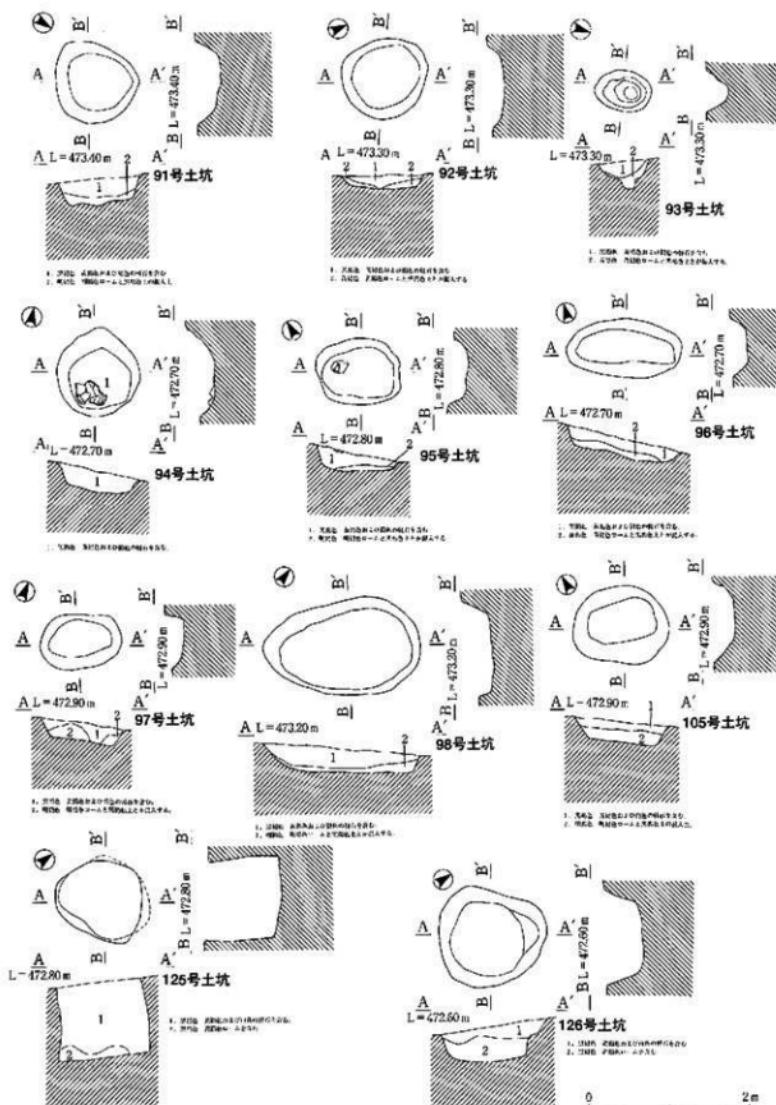
第18図 早期後半土坑4 (61・64~72号土坑)



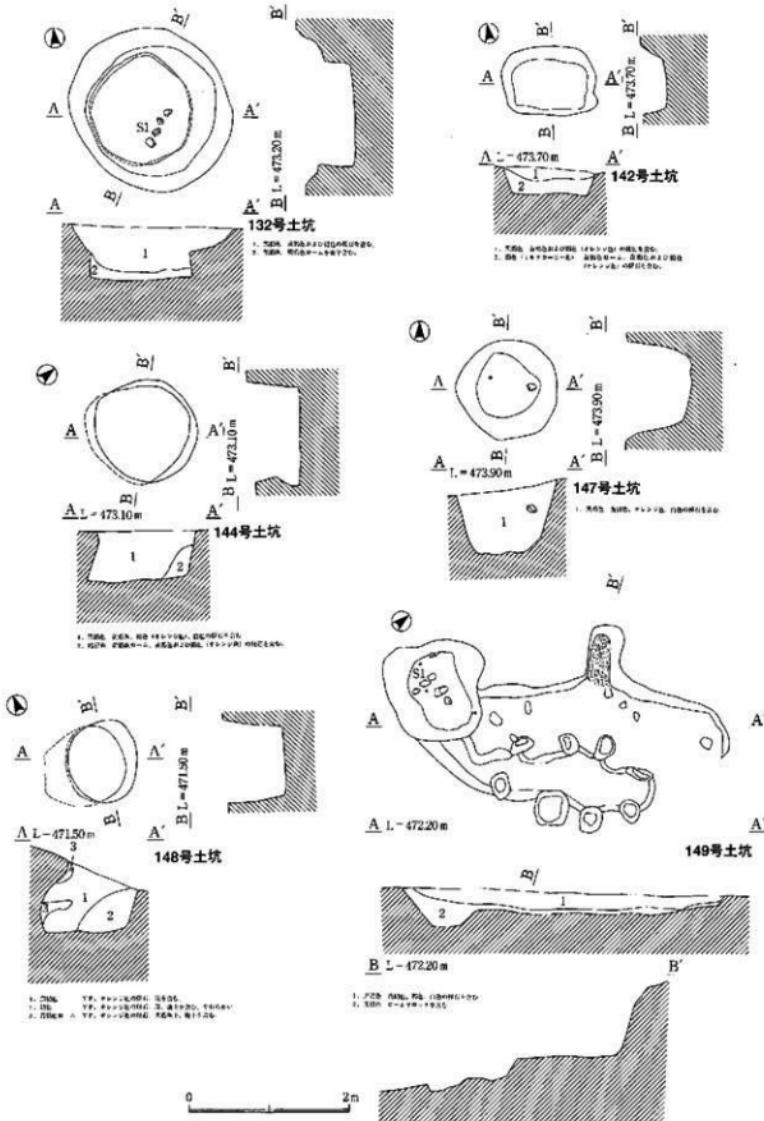
第19図 早期後半土坑5 (73~82・131号土坑)



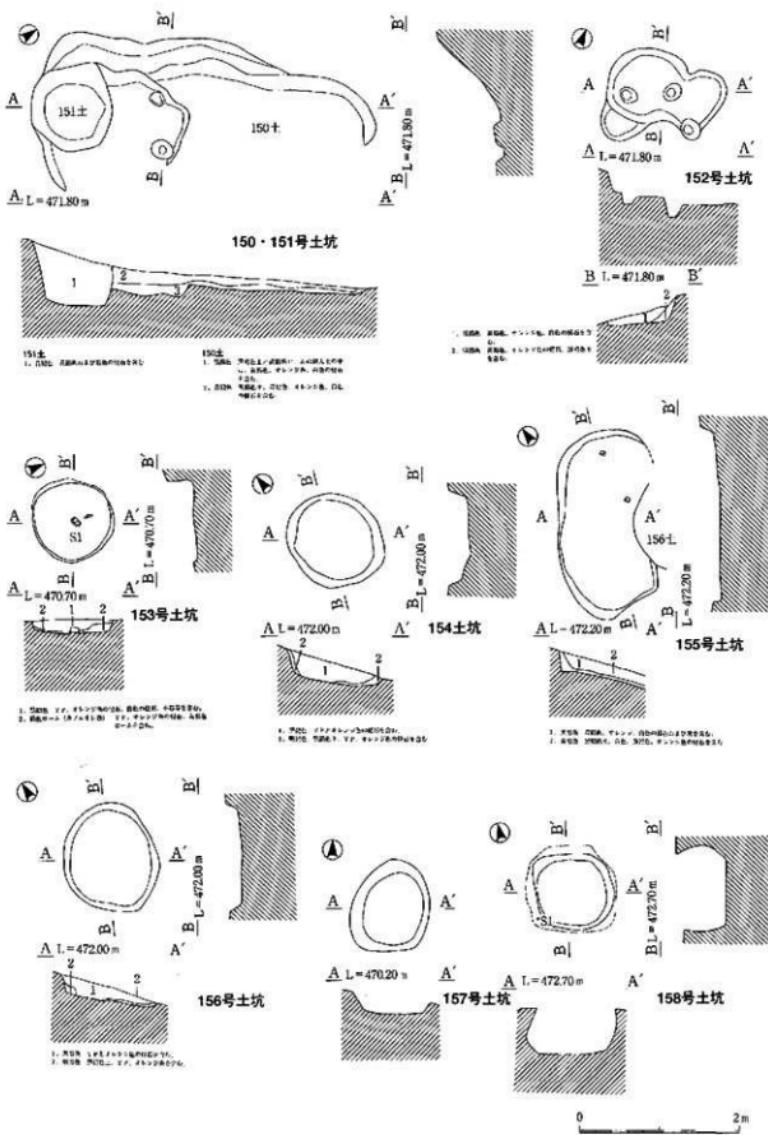
第20図 早期後半土坑 6 (83~90号土坑)



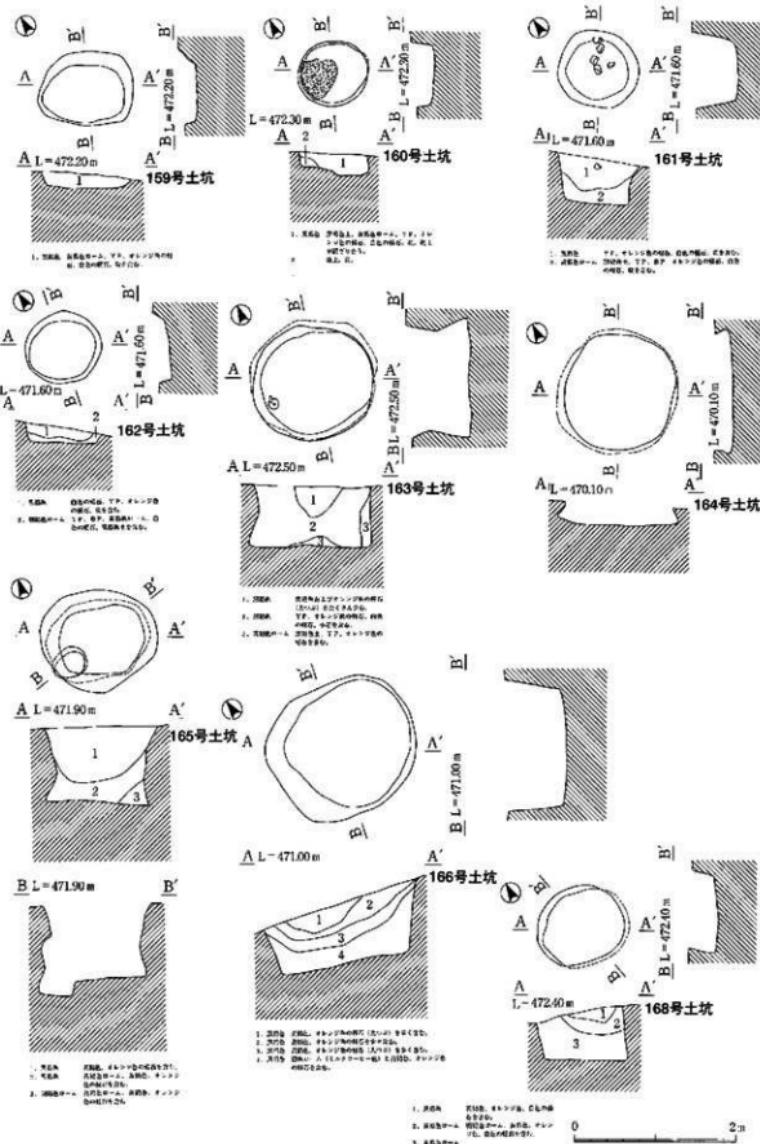
第21図 早期後半土坑7 (91~96・105・125・126号土坑)



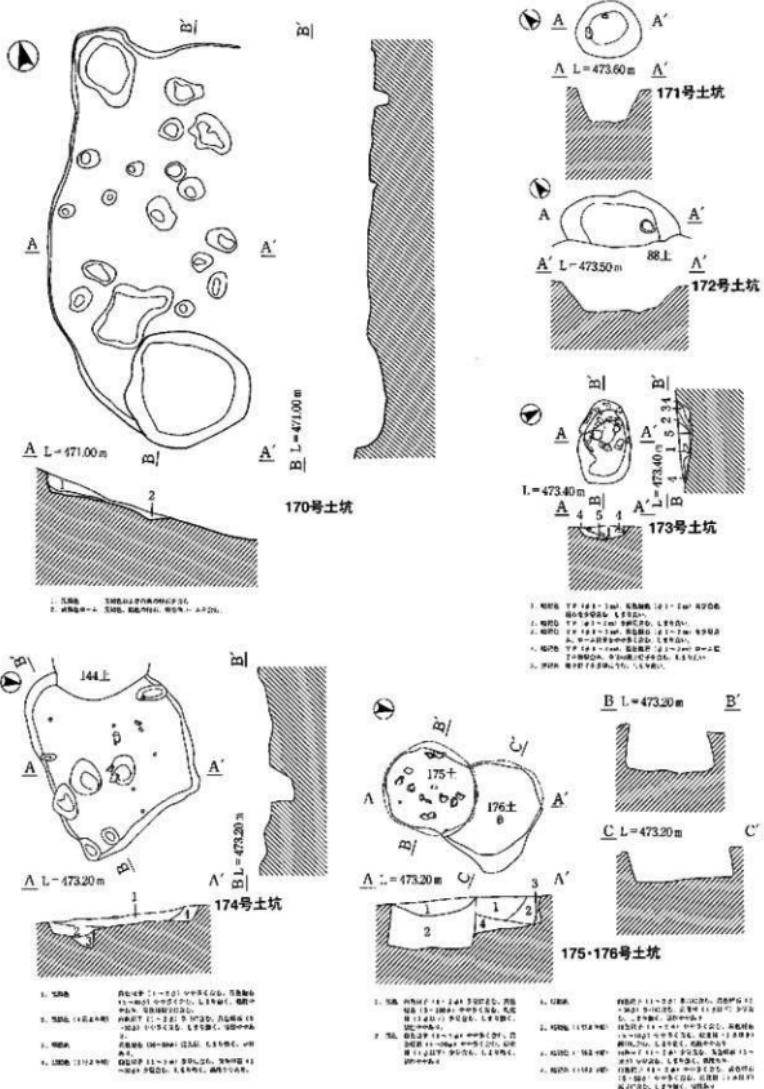
第22図 早期後半土坑 8 (132・142・144・147~149号土坑)



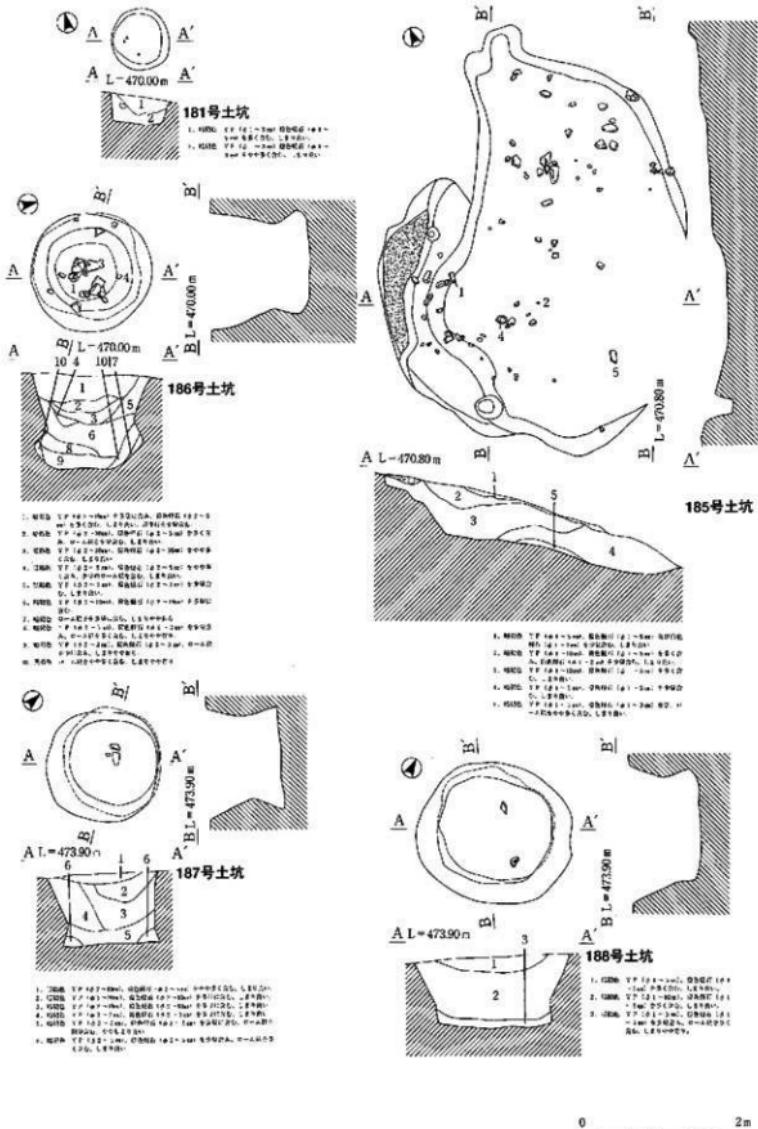
第23図 早期後半土坑9 (150~158号土坑)



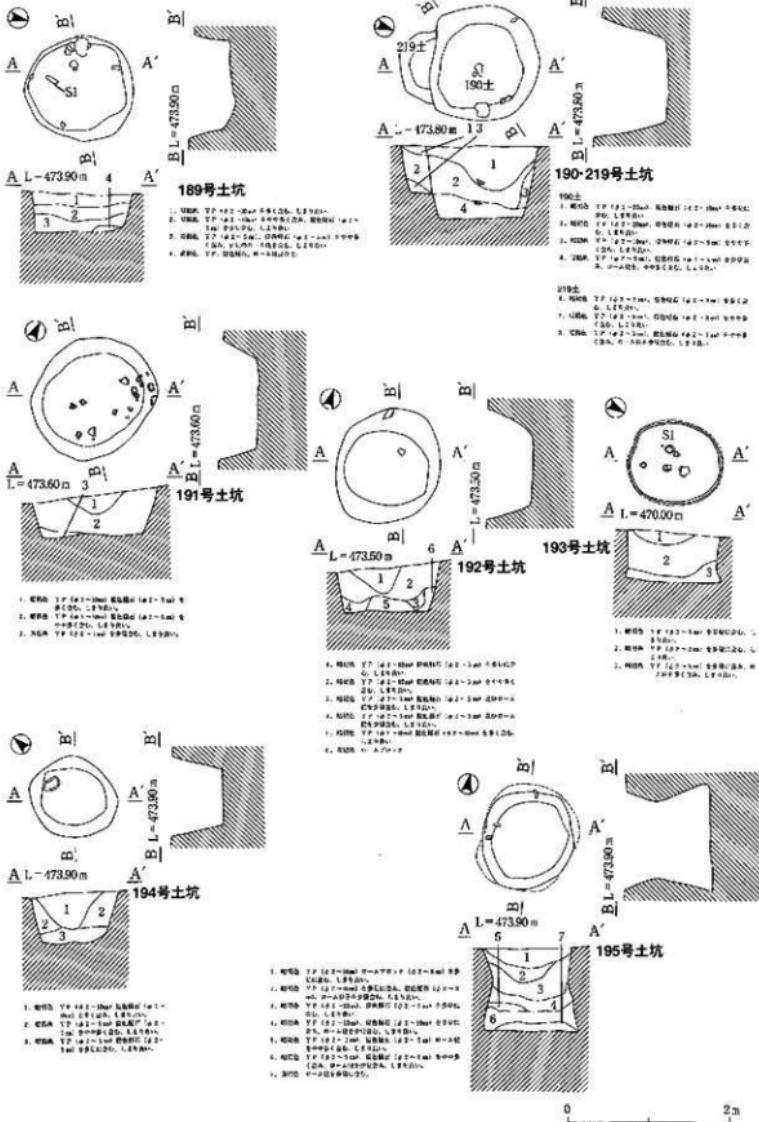
第24図 早期後半土坑10 (159~166・168号土坑)



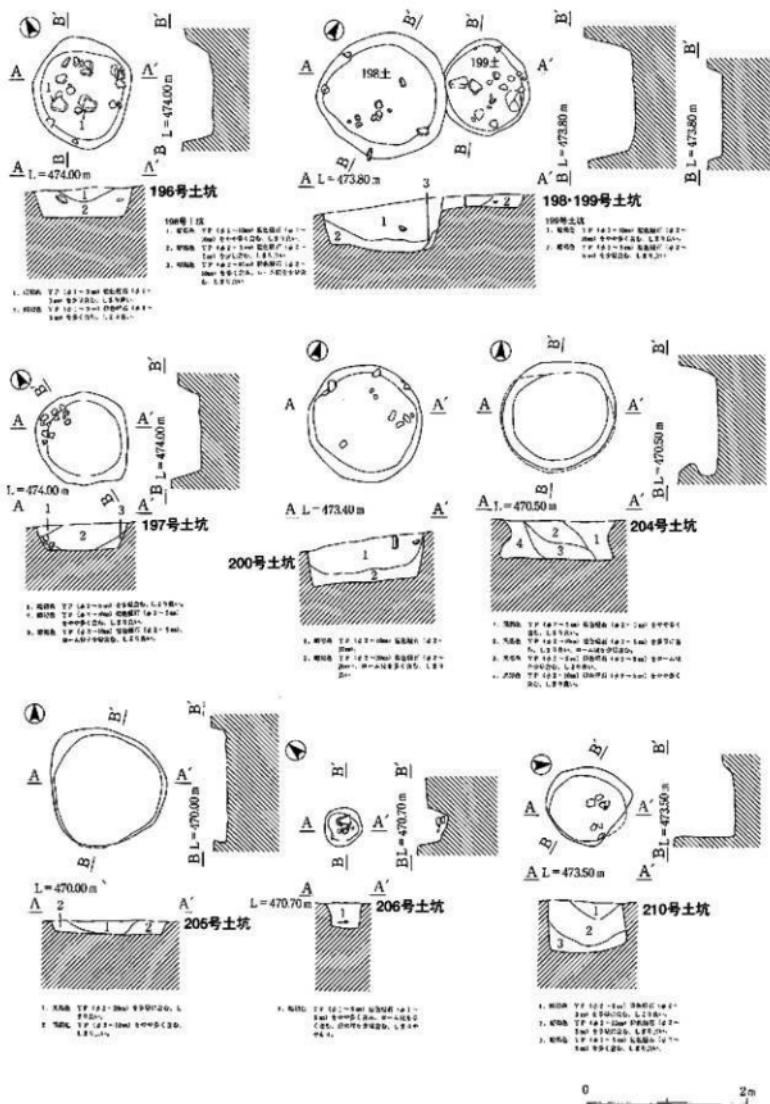
第25図 早期後半土坑11（170～176号土坑）



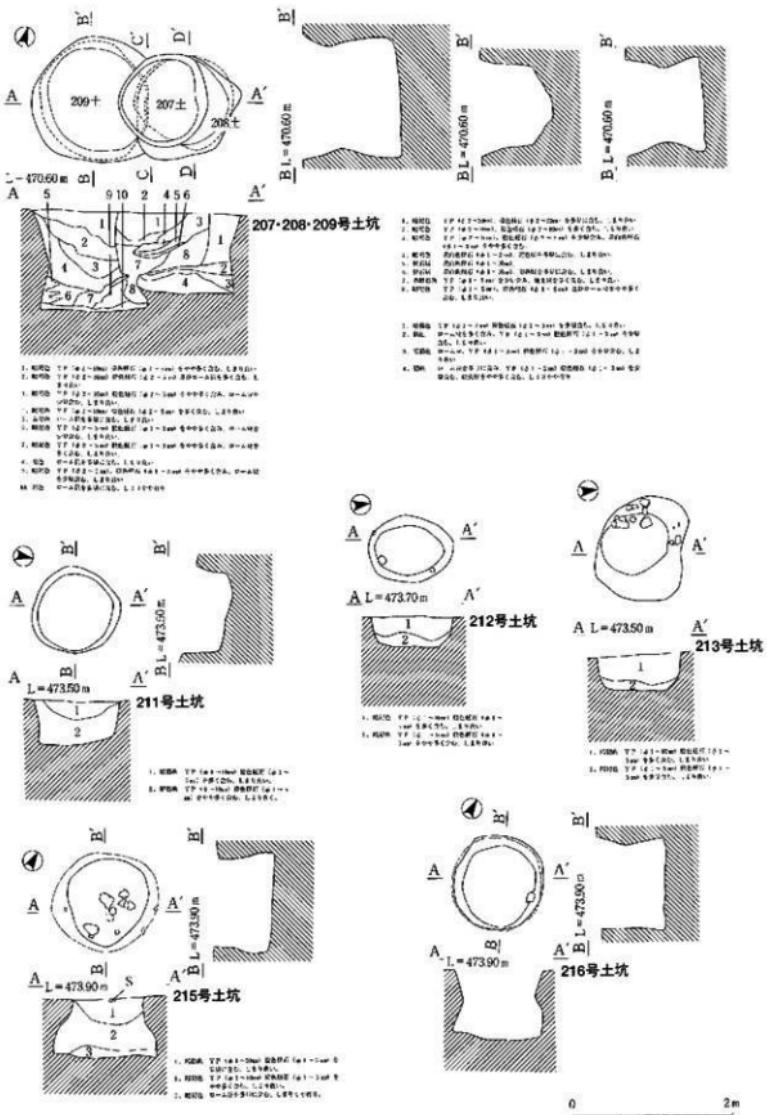
第26図 早期後半土坑12 (181・185~188号土坑)



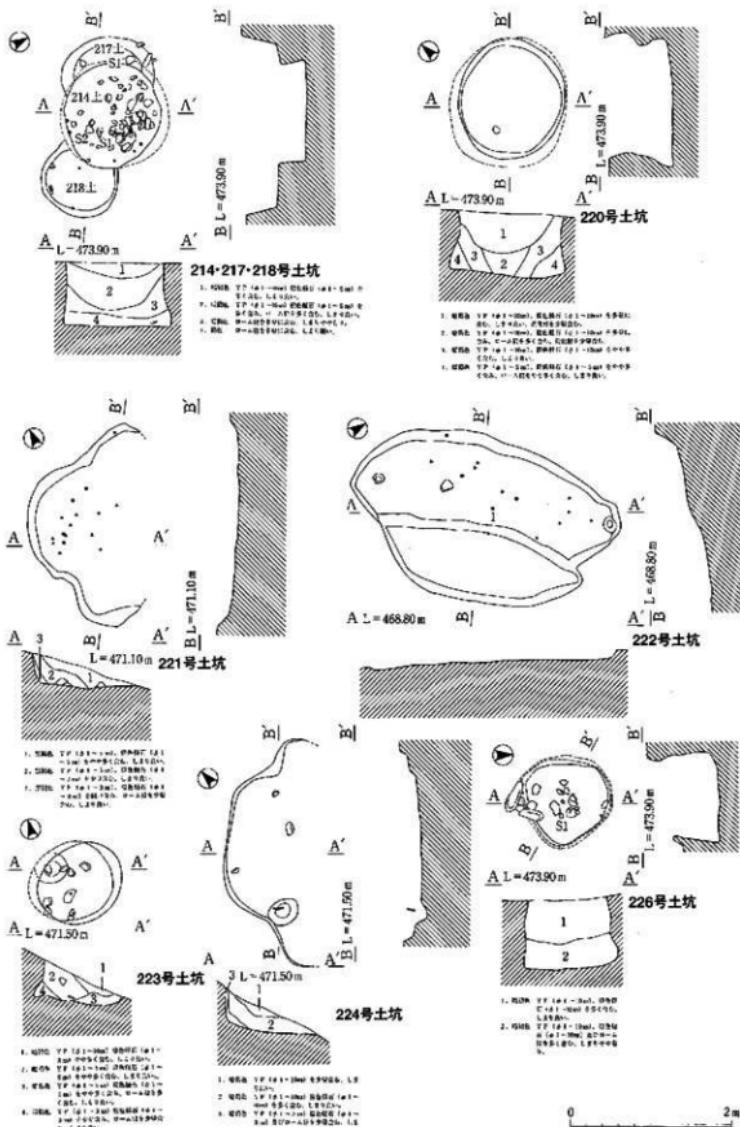
第27図 早期後半土坑13 (189~195・219号土坑)



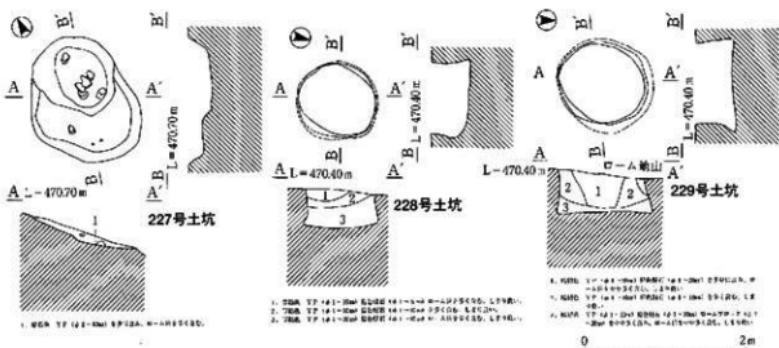
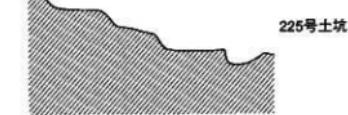
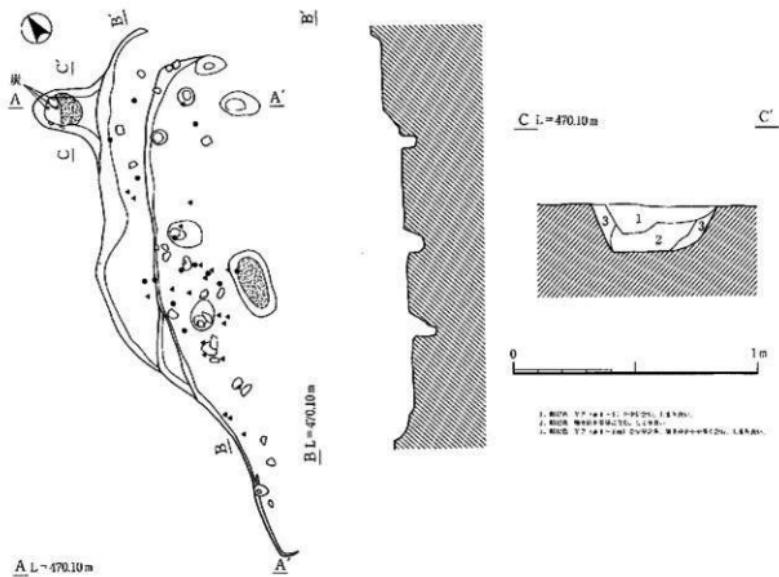
第28図 早期後半土坑14（196～200・204～206・210号土坑）



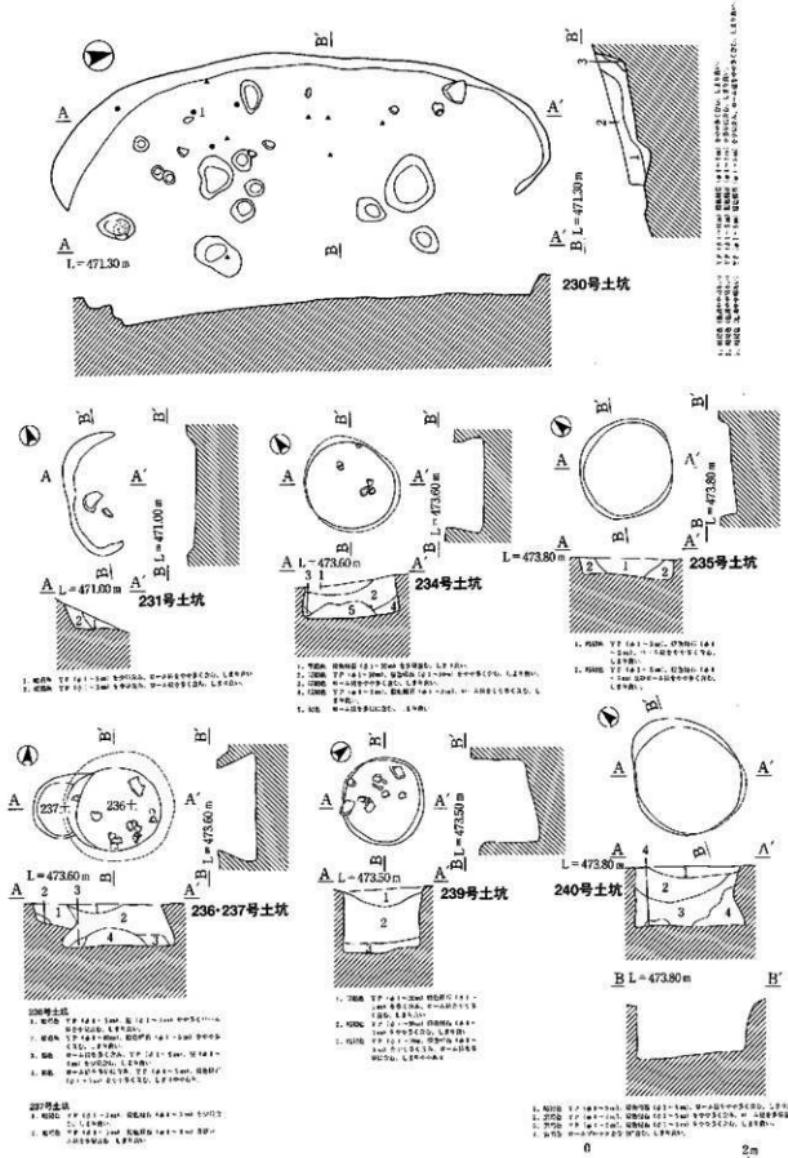
第29図 早期後半土坑15 (207~209・211~213・215・216号土坑)



第30図 早期後半土坑16 (214・217・218・220~224・226号土坑)



第31図 早期後半土坑17 (225・227~229号土坑)



第32図 早期後半土坑18 (230・231・234~237・239・240号土坑)

### 早期後半土坑出土遺物（第33～38図、図版29～32）

早期後半の土坑からは鶴ヶ島台式・絡条体圧痕文系等の条痕文系土器のみ出土し、石器類は凹石・磨石・特殊磨石・剥片石器・打製石斧・チョッパー様石器・石匙・台石・石礫等が出土している。

#### 土 器

77号土坑出土遺物／1は口縁部の破片で口縁部に沈線で斜格子文を構成し、口唇部に不明瞭な刻みが付される。色調は明褐色、焼成は良好で胎土に片岩粒と少量の纖維を含んでいる。

82号土坑出土遺物／1は脇部の破片で細沈線と押引文で文様が構成され、内面は擦痕状の条痕が施されている。色調は灰褐色、焼成は良好で胎土に片岩粒と少量の纖維を含んでいる。

84号土坑出土遺物／1は脇部破片で半截竹管による平行沈線で鋸齒状文が描かれる。条痕は外面が斜位、内面は横位に施される。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒・纖維を含んでいる。

86号土坑出土遺物／1は鶴ヶ島台式の接合資料で口縁部～底部付近にいたる破片である。脇部上半に刻みが加えられた隆帯が付され、2段の弱い屈曲を持つ。口唇部は刻みが加えられ、口縁部は沈線による斜格子文が描かれ、区画内は無文部分と押引文が充填される部分がある。隆帯に挿まれた部分は縦位の平行沈線で区画され、区画内には押引文が充填される連続三角形文が相対して描かれる。内外面には条痕が明瞭に観察される。色調は黄褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。

88号土坑出土遺物／1は深鉢下半部である。底部は平底で内外面に横位の条痕・擦痕が施される。色調淡褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。2は深鉢上半部で4単位の小波状を呈するの口縁の口唇部に刻みが加えられ、内外面に浅い条痕と擦痕が施されている。色調は褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。

94号土坑出土遺物／1は絡条体圧痕文系の深鉢上半部接合資料である。口縁部は4単位の小波状を呈し、口縁部に斜位の絡条体圧痕文で矢羽状文が構成される。文様帶直下に幅広の低隆帯が廻り、下位には横位及び斜位の状痕文、内面には横位の条痕が施される。色調は褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。

131号土坑出土遺物／1は絡条体圧痕文系の口縁部破片で口縁部に幅広の沈線で斜格子文が描かれ、文様帶下と口唇部に絡条体圧痕文が施される。内面は横位の条痕が施される。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒・纖維を含んでいる。2は口縁部の破片で口縁部に細沈線で斜格子文を構成し、縦位の沈線も見られる。口唇部には刻みが付される。条痕は外外面ともに横位に施される。色調は褐色、焼成は良好で胎土に片岩粒・砂粒と多量の纖維を含んでいる。

185号土坑出土遺物／1は外縁斜位、内面横位の条痕文のみ施文される脇部の破片で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含み、色調は褐色を呈し、焼成は良好。2は絡条体圧痕文系の口縁部破片で口唇部に絡条体圧痕文が施文され、口縁部は幅広の沈線で沈線で斜格子文が描かれる。文様帶下には2条の絡条体圧痕文が廻る。条痕は外縁斜位、内面横位に施される。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土に片岩粒・砂粒と多量の纖維を含んでいる。3は条痕文系の口縁部破片で2条単位の押引文で文様が構成される。内面には横位の条痕が施文される。色調は灰褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。

186号土坑出土遺物／1は鶴ヶ島台式の口縁部破片である。細沈線による菱形文が施文され、沈線の交点・変換点に刺突が施される。区画内は平行押引文が充填される。色調は褐色、焼成は良好で胎土に少量の砂粒・纖維を含んでいる。2は基本的に1と同様の施文が施される。色調は明褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の纖維を含んでいる。3の口縁部も基本的に1と同様の施文が施され、口唇部に刻みが

加えられている。色調は褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。4は脣部の破片で沈線による斜格子文が施文され、文様帯直下に刺突が加えられた微隆帯が廻る。色調は褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

194号土坑出土遺物／1は口縁～脣部の破片で縦位と斜位の平行押引文が密に施文され、文様帯直下に微隆帯が廻る。色調は褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

195号土坑出土遺物／1は脣部の破片で平行沈線で舟線が描かれ、文様帯直下に平行押引文が廻る。色調は淡褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

196号土坑出土遺物／1は堀ヶ島台式の接合資料である。脣部上段に2段の肩曲を持つ平底の深鉢で口縁部は2頂部4単位の波状を呈し、口唇部と脣部の隆帯上に刻みが加えられる。口縁部は2～3本単位の縦位沈線で分割され、横位・斜位の平行沈線で区画された中に押引状の刺突が充填される。下位の脣部間は平行沈線で菱形状の文様が構成され、押引状の刺突が充填される。色調は黄褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

214号土坑出土遺物／1は堀ヶ島台式の口縁部破片である。細沈線による菱形文が施文され、沈線の交点・変換点に刺突が施される。区画内は平行押引文が充填される。色調は褐色、焼成は良好で胎土に少量の砂粒・繊維を含んでいる。

222号土坑出土遺物／1は堀ヶ島台式の破片で斜位の細沈線と円形刺突が施文されている。色調は褐色、焼成は良好で胎土に少量の砂粒・繊維を含んでいる。

224号土坑出土遺物／1は脣部の破片で隆帯の下位に横位の条痕、内面は斜位の条痕が施される。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

230号土坑出土遺物／1は平底の底部で外面斜位、内面は横位の条痕が施される。色調は淡褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

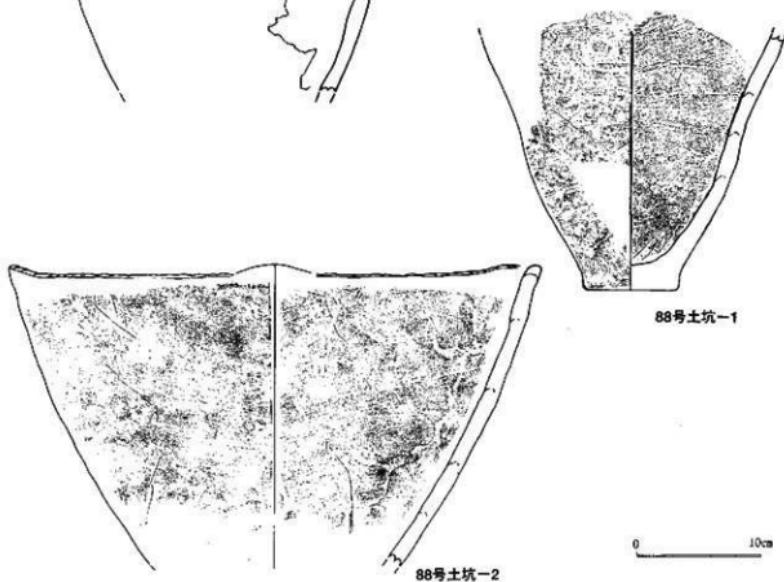
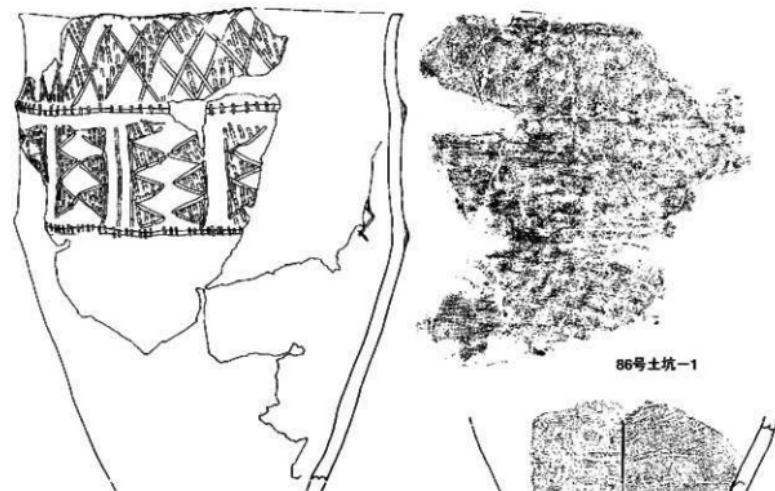
231号土坑出土遺物／1は絡条件圧痕文系の口縁部破片で口縁部に絡条件圧痕文が斜位に施文され、口唇部にも絡条件圧痕文が施文される。条痕は内外面ともに横位に施される。色調は褐色、焼成は良好で胎土に少量の片岩粒・砂粒と多量の繊維を含んでいる。

234号土坑出土遺物／1は口縁～脣部の破片で数条の横位微隆帯が施され、微隆帯上に円形刺突が一定間隔に施文される。条痕は内外面ともに横位に施される。色調は黒褐色、焼成は良好で胎土に多量の砂粒と少量の繊維を含んでいる。

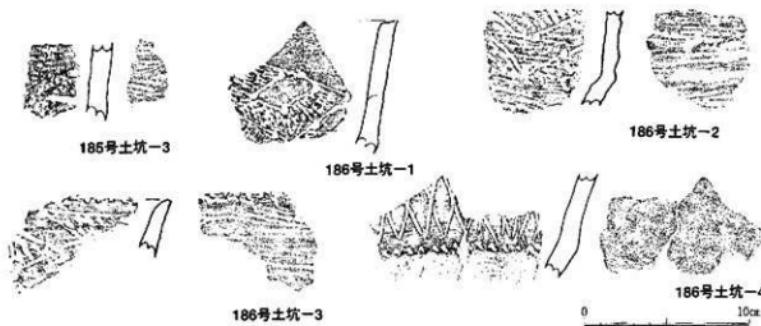
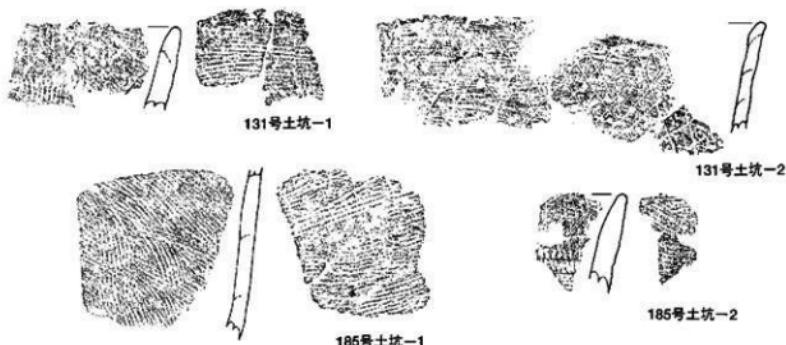
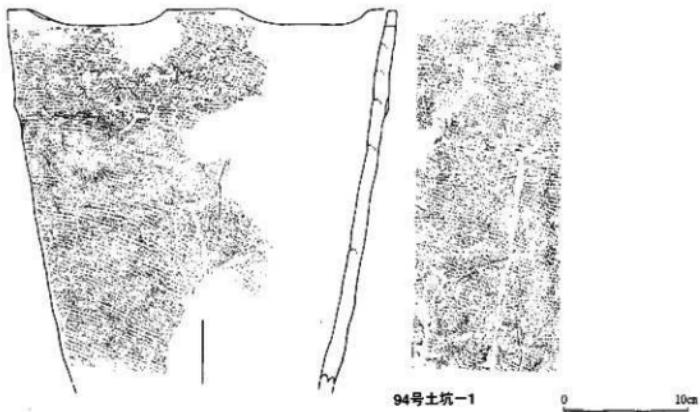
236号土坑出土遺物／1は堀ヶ島台式の破片で斜位の細沈線と円形刺突が施文され、押引文が充填される。色調は灰褐色、焼成は良好で胎土に多量の片岩粒・砂粒と少量の繊維を含んでいる。

## 石 器

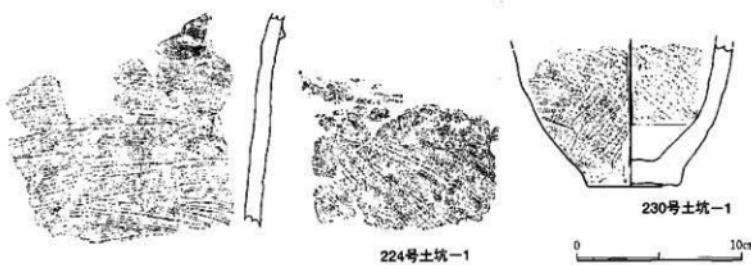
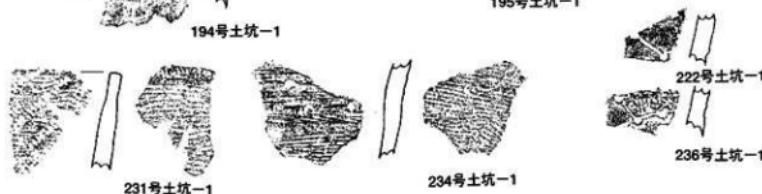
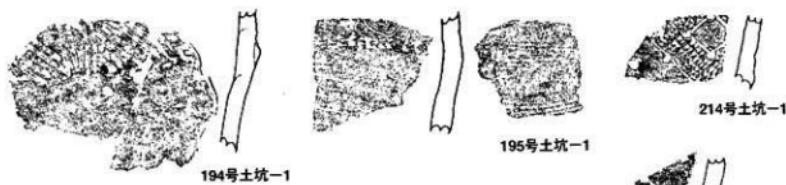
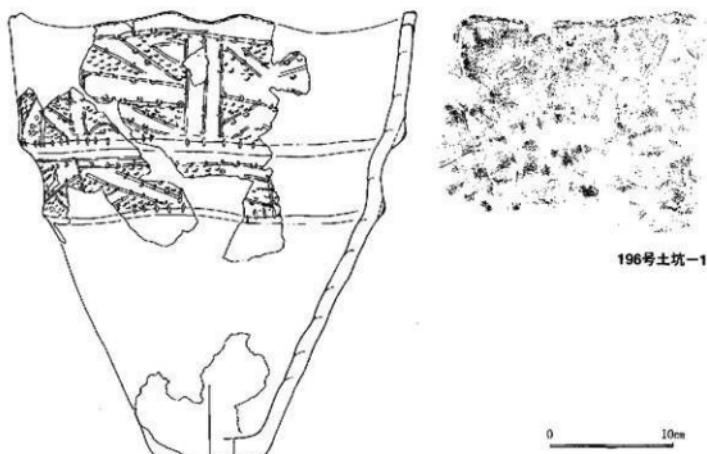
47号土坑-1は安山岩の凹石。57号土坑-1は石英斑岩、58号土坑-1は安山岩の特殊磨石。74号土坑-1は安山岩の剥片石器。74号土坑-1、132号土坑-1はシルト岩の打製石斧。149号土坑-1は安山岩の台石。153号土坑-1は砂岩の磨石。158号土坑-1は安山岩の特殊磨石。185号土坑-4・5は安山岩の磨石。6は安山岩の縦型石匙。189号土坑-1は安山岩の特殊磨石。193号土坑-1は安山岩の凹石。214号土坑-1は安山岩のチャッパー様石器。2は安山岩の特殊磨石。石鐵は8点出土し、150号土坑-1のみ平基無茎鐵、他は凹基無茎鐵で石材は44号土坑-1がチャート、他は黒曜石である。



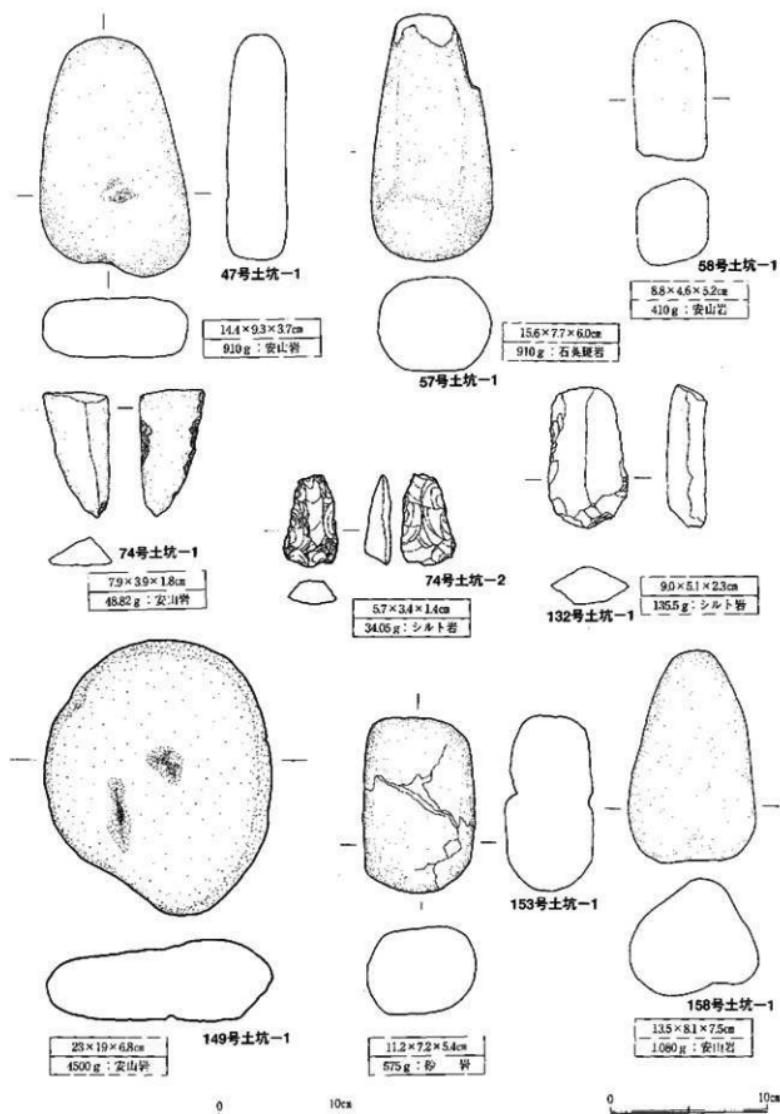
第33图 早期后半土坑出土遗物 1



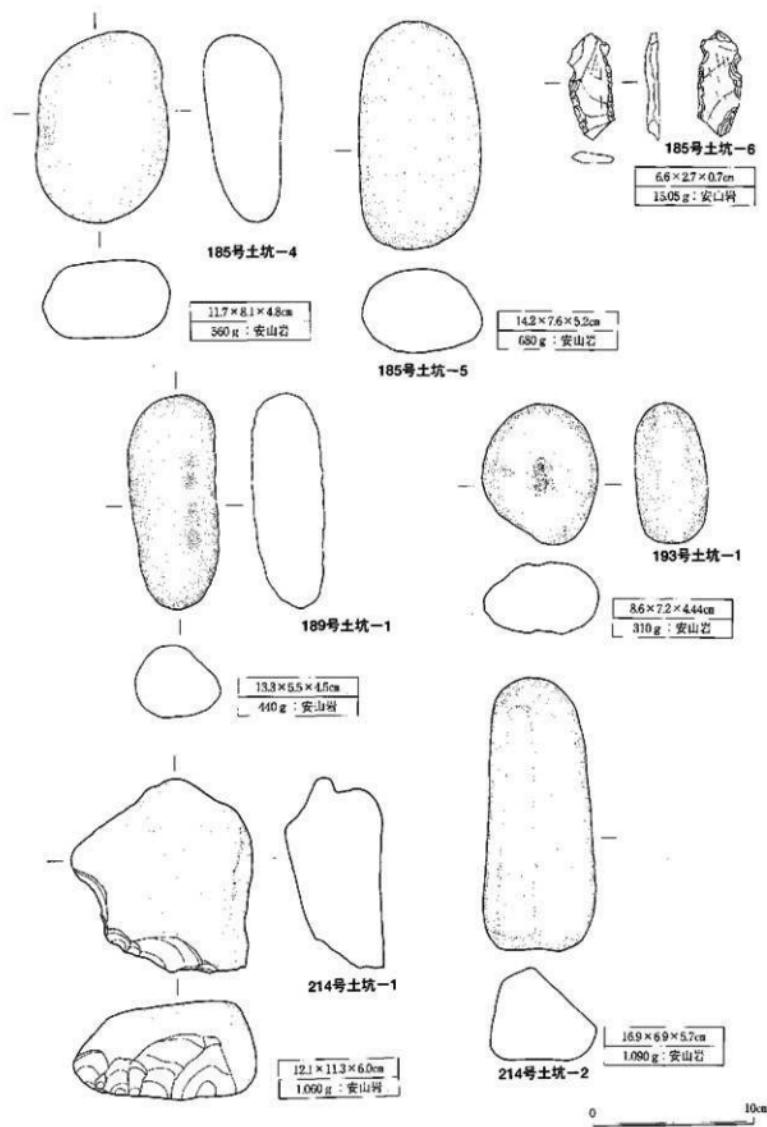
第34図 早期後半土坑出土遺物 2



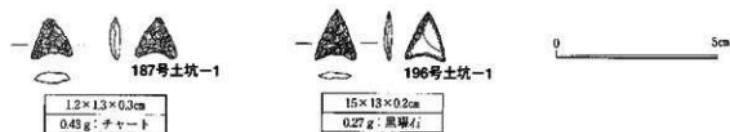
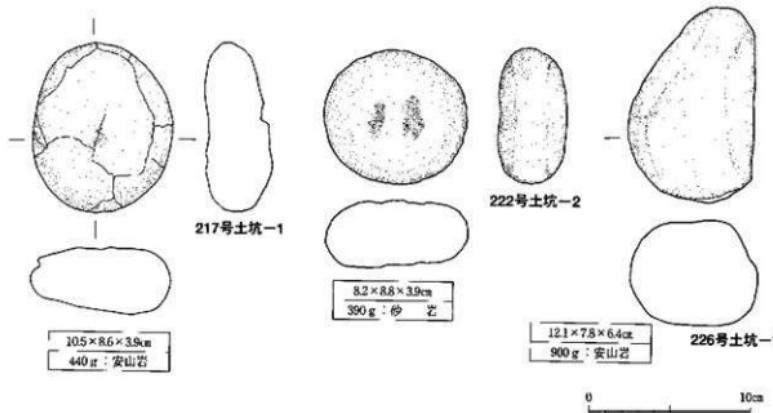
第35图 早期后半土坑出土遗物 3



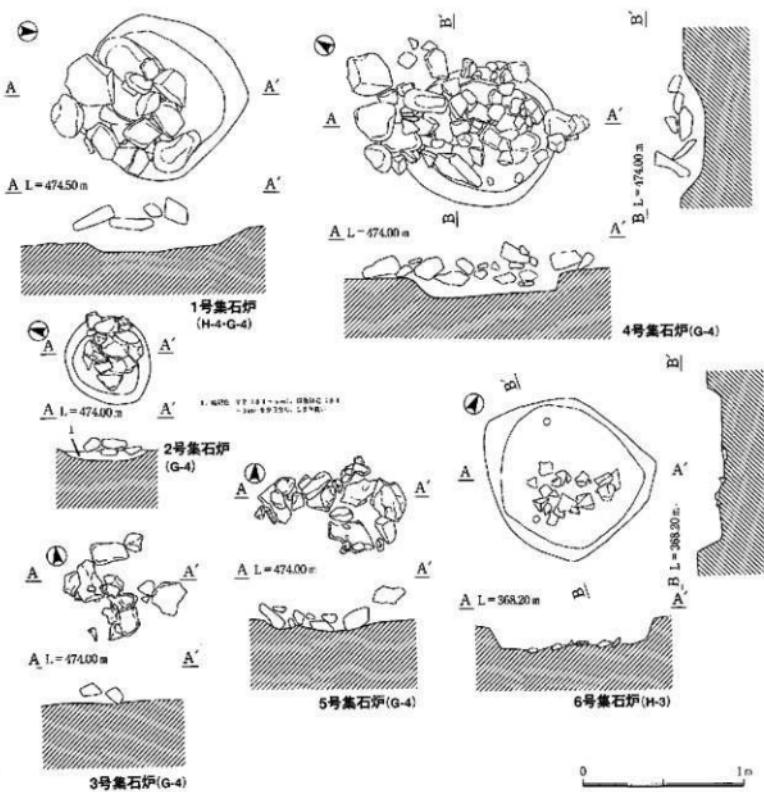
第36図 早期後半出土遺物 4



第37圖 早期後半土坑出土遺物 5



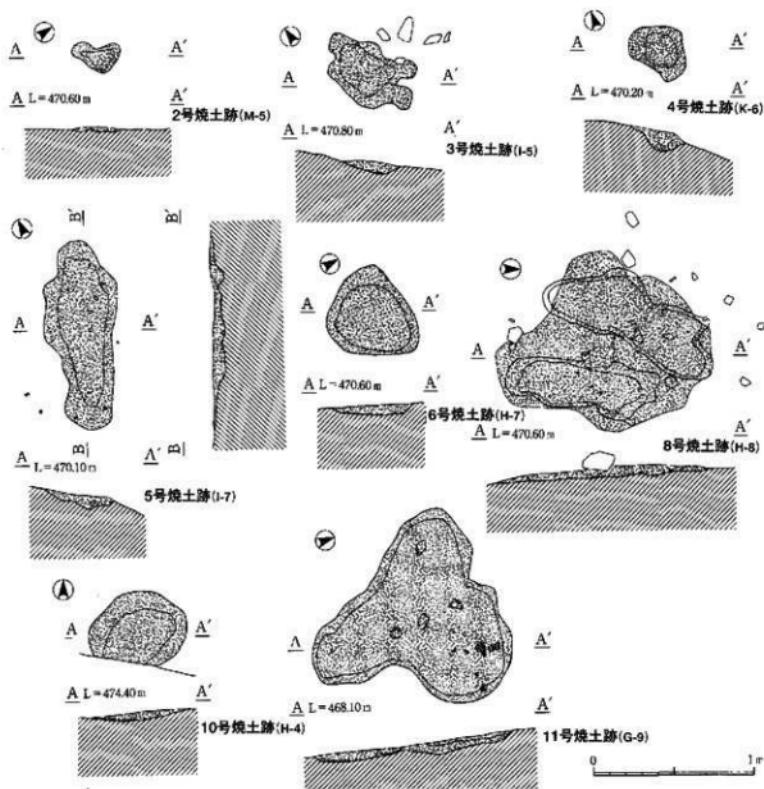
第38図 早期後半土坑出土遺物 6



第39図 1～6号集石炉

#### 集石炉 (第39図、図版22)

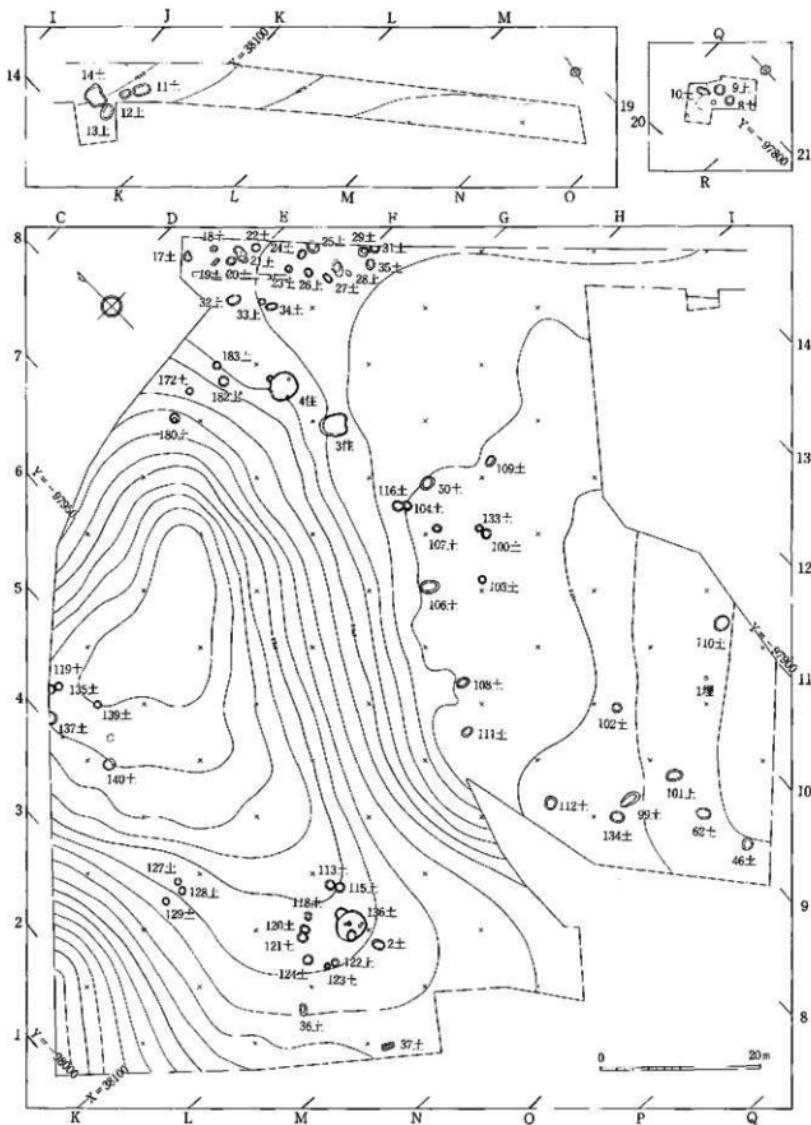
南調査区台地部分を中心とする早期後半の面には、多量の焼行が散在する状況で分布し、多数の屋外炉があったことを窺わせている。この内、集石状を呈する遺存状態の比較的良好なものを集石炉として扱った。分布状況を見ると、台地の頂上部に展開する土坑群中に散在する配置で遺存しており、台地東側の急斜面部からは検出されなかった。いずれも焼石で構成され、周辺に焼上が散在するものとほぼ完全な集石炉の形状を呈するものがある。伴う状況の出土遺物がないため時期的には明確ではないが、土坑群とはほぼ同時期、早期後半の所産と推測される。



第40図 2～6・8・10・11号焼土跡

**焼土跡** (第40図、図版22)

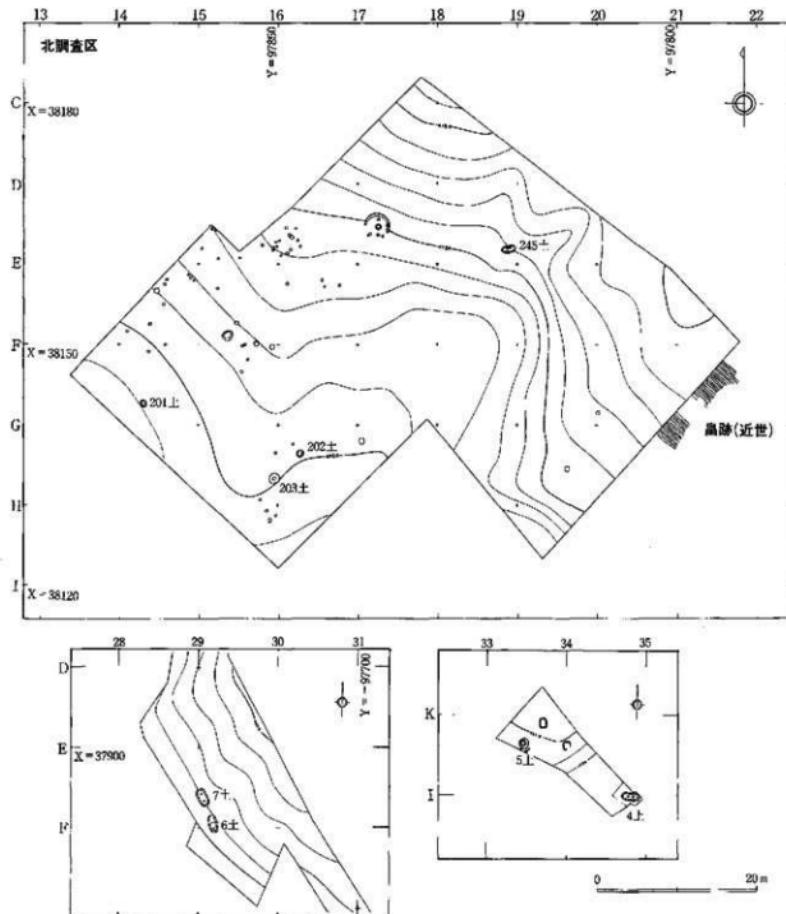
屋外炉の痕跡と考えられる焼土跡は、同様の機能を持つ集石炉と分布が異なり、南調査区台地部分に散在して検出されている。いずれも伴う状況の出土遺物はなく、時期的には明確ではないが、面的に早期後半の所産と推測される。



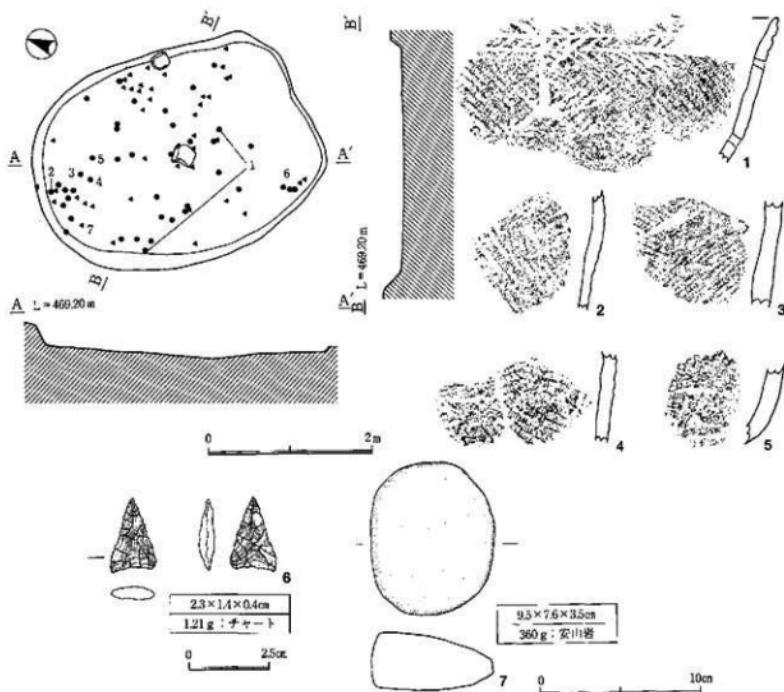
第41図 南調査区縄文前期・中期遺構配置図

### 前期・中期

前期及び中期の遺構は、調査区全体に散在する状況で検出され、確認調査時のトレンチ部分にも分布している。検出面的には二次堆積ローム層の上面で確認され、二次堆積ローム層の存在しなかった早期末～前期初頭の住居跡と北調査区の遺構についても、上下の層位から二次堆積ローム層の上面と考えられる。遺構としては早期末～前期初頭の住居跡2軒、中期後半の住居跡2軒、中期末の屋外理設土器1基、前期・中期の土坑81基が検出され、調査区全体に散在する状況で少量の土器片と石器類が出土している。



第42図 繩文前期・中期遺構配置図2



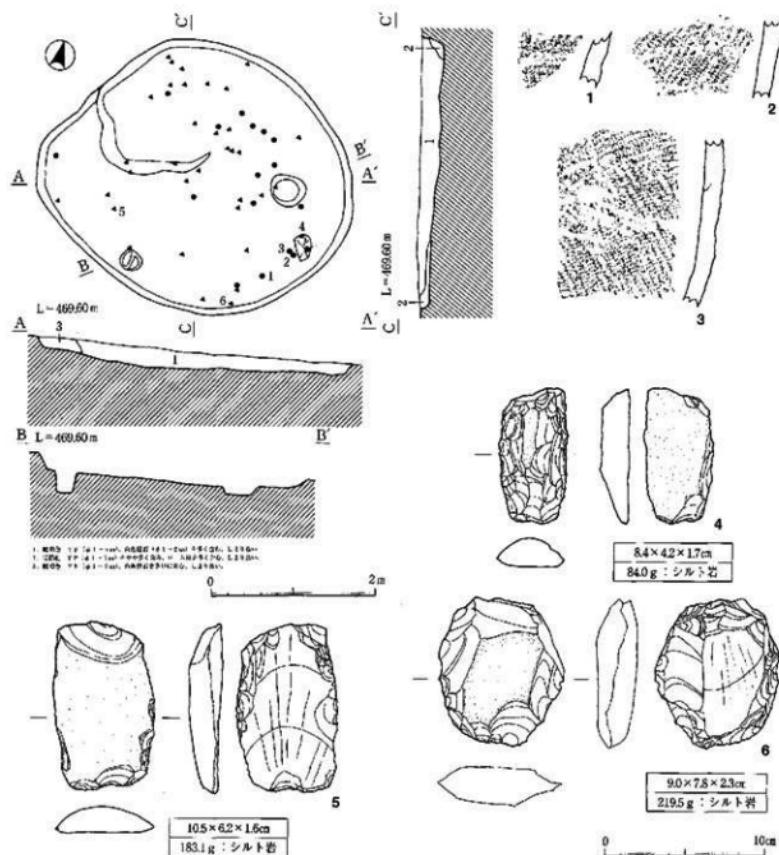
第43図 3号住居跡・出土遺物

### 住居跡

#### 3号住居跡（第43図、図版24・33）

位置／南調査区G-9グリッドに位置する。形態／不整隅丸長方形を呈する。規模／長軸3.26m、短軸2.42m、深さ28cmを測る。炉・柱穴／無し。床面／面を成すが、特に硬質化した部分は検出されなかった。遺物出土状況／塚田式・化積下層式土器片、石鏃、磨石、自然石等が全体に散在して出土し、層位的には中層部分に集中している。

出土遺物／5点図示した土器片は、いずれも胎土に多量の纖維と少量の砂粒を含んでいる。1は口縁部の大形破片で口縁部に2本の平行沈線があり、沈線間に斜位の沈線で矢羽状文が構成され、胴部は0段多条の原体による菱形羽状文が施文される。色調は黒褐色～黄褐色を呈し、焼成は良好で、3個の補修孔が開けられている。2は胴部の破片で菱形羽状文の繩文が施文される。色調黄褐色を呈し、焼成は良好。3は胴部片で菱形羽状文と思われる繩文が施文され、内面には擦痕と条痕が認められる。色調黒褐色を呈し、焼成は良好。4は1と同一個体と思われる胴部破片である。5はL.R单節繩文が施文された尖底部分である。色調黄褐色を呈し、焼成は良好。6はチャートの無莢石鏃。7は安山岩の磨石である。

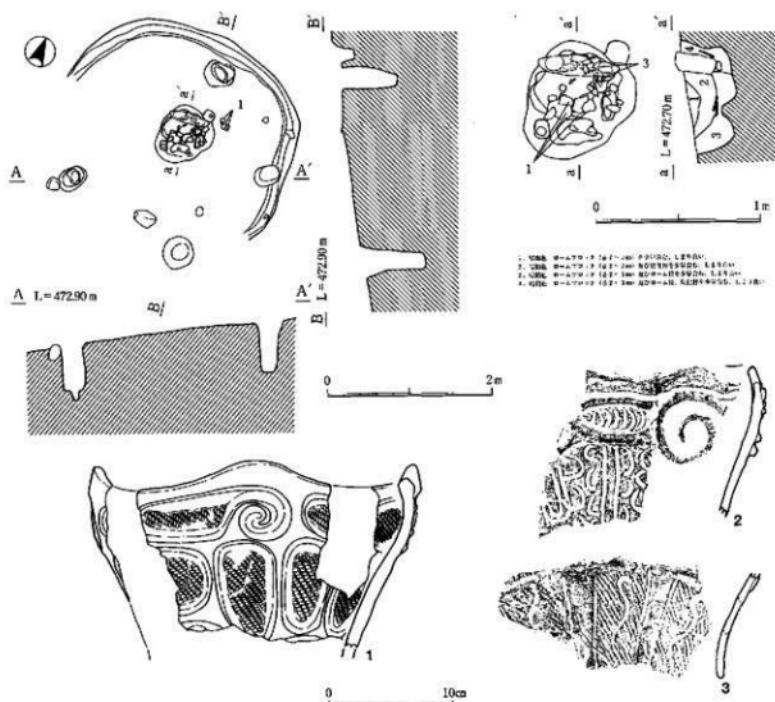


第44図 4号住居跡・出土遺物

4号住居跡（第44図、図版24・33）

位置／南調査区F-8・9グリッドに位置する。形態／不整隅丸方形を呈する。規模／長軸3.30m、短軸3.10m、深さ18cmを測る。炉／無し。柱穴／小ビット2基が検出されているが、柱穴の可能性は低い。床面／西方向から東方向に向かって緩やかに傾斜している。遺物出土状況／塙田式・花積下層式土器片、打製石斧、スクレーパー等が出土している。

出土遺物／1～3は同一個体と思われる副部破片で羽状構成の繩文が施文されている。胎土に多量の横縞と少量の砂粒を含み、色調黄褐色を呈し、焼成は良好。下半部の繩文が縱方向に流れていることから尖底になる可能性が高い。4・5はシルト岩の打製石斧と思われ、4は斎状石器の可能性がある。6はシルト岩のスクレーパー。

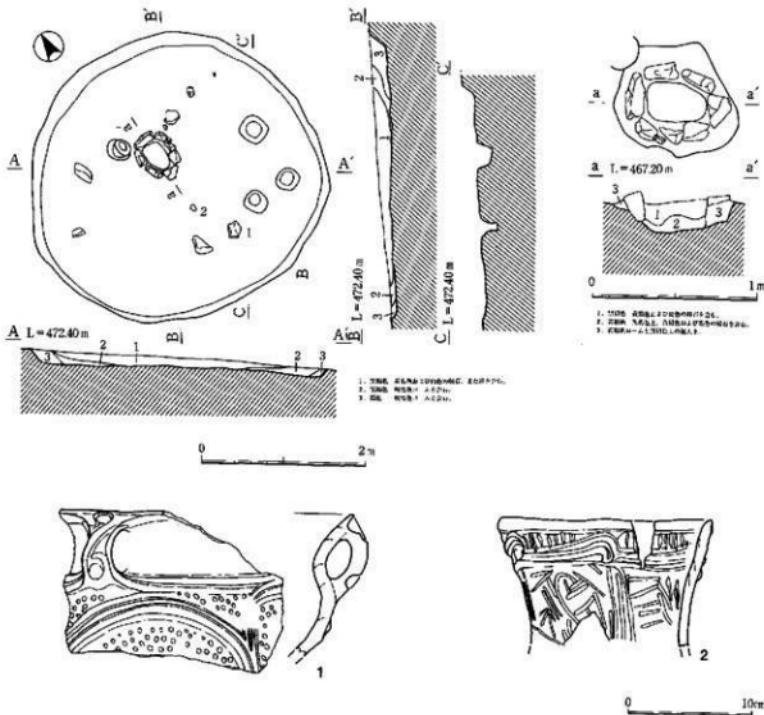


第45図 1号住居跡・出土遺物

1号住居跡 (第45図、図版24・33)

位置／北調査区D-17グリッドに位置する。形態／南向き斜面部に位置する為、南側の壁面が消失しているが、円形を呈すると考えられる。規模／現状で最大径2.80m、深さ12cmを測る。炉／北側から検出された。板状窓が配され、土器片が散在して出土している。柱穴／小ピット4基が検出されている。壁溝／北側の残存部分から検出された。幅10~14cm、深さ約10cmを測る。床面／北方向から南方向に向かって緩やかに傾斜し、中央部に硬質化した部分が検出されている。遺物／加曾利E2・3式土器が炉を中心として出土している。

出土遺物／1は炉出土の波状口縁深鉢上半部である。口縁部に縦帯による渦巻文を波頂部に合わせて施文し、陸帯区画内にR L単節繩文が施文される。胴部には縦帯による横円区画が連続して施され、区画内にL R単節繩文が縦位に施文される。胎土に白色粒・黒色粒を含み、色調にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好。時期は加曾利E 3式。2は波状口縁の破片で口縁部に縦帯による渦巻文が施文され、縦帯区画内に弧状の縦位沈線が引かれる。胴部は縦位の沈線とU字状沈線で区画され、連続する半円沈線文が充填される。胎土に白色粒・赤色粒を含み、色調赤褐色を呈し、焼成は良好。時期は加曾利E 2~3式。3は胴部の破片で地文に繩文が施文され、沈線による磨消懸垂文が施される。縦帯には波状の沈線が垂下している。胎土に白色粒を含み、色調はぶい赤褐色を呈し、焼成は良好。時期は加曾利E 2~3式。

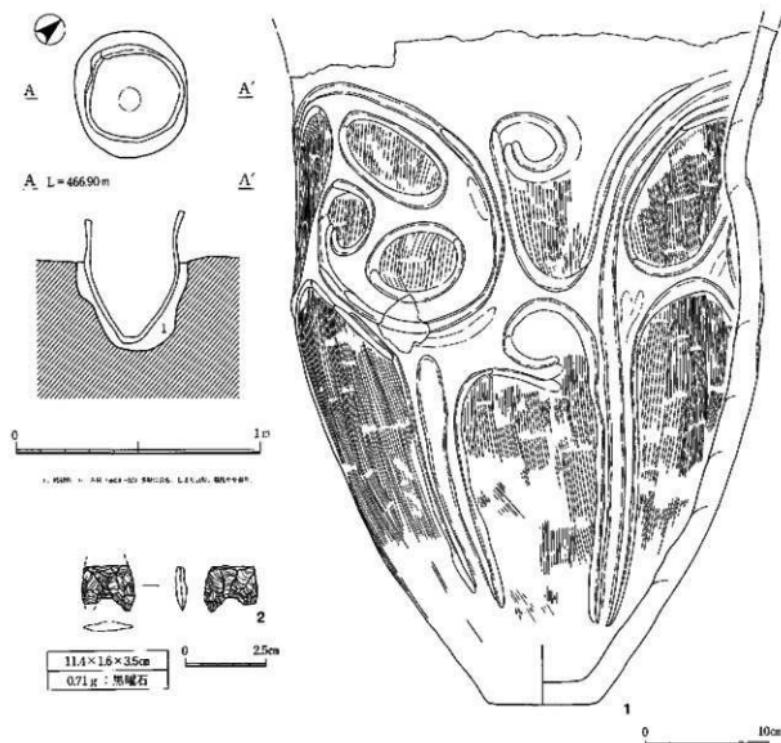


第46図 2号住居跡・出土遺物

2号住居跡（第46図、図版24・34）

位置／南調査区K-4グリッドに位置する。形態／円形を呈する。規模／径3.42m、深さ20cmを測る。炉跡／石組炉が中央部北側から検出されている。楕円形を呈し、6個の自然窪が配され、窪には明瞭な被熱痕が観察された。柱穴／住居東側に3基、炉に近接して1基の小ビットが検出されている。床面／面を成し、比較的硬質。遺物出土状況／少量の加曾利E2・3式土器片が出土している。

出土遺物／1は床面出土の口縁部の破片で、口縁部に無文帯を持ち、外反する口縁部に橋状把手が付される。胴部は2本の隆帯による楕円状の区画内に円形刺突が充填される。胎土に黒色粒・石英粒を含み、色調はにぶい橙色呈し、焼成は良好。時期は加曾利E3式。2は床面及び覆土出土の口縁～胴部に至る大形破片である。縁やかに外反する口縁部に2本の隆帯による渦巻文が連結され、三角形の区画内に縦位の沈線が充填される。胴部は3本・粗の沈線が垂下し、区画内にルーズな継続状沈線が施文されている。胎土に多量の石英粒を含み、色調はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好。時期は加曾利E2式。



第47図 1号埋設土器・出土遺物

**1号埋設土器** (第47図、岡版24・34)

南高倉区東側L-10グリッドの二次堆積ローム層上面から埋設土器1基が検出されている。当初住居跡として調査を行ったが、周辺から掘り込み等は検出されず、単独の屋外埋設土器と認定した。土器は正位に埋設され、口縁の一部を欠損するが底部まで遺存する大形の深鉢で残高57cmを測る。文様は口縁部に無文帯を持ち、上半部で僅かに括れる胴部には条線地文として2本の縦帯による渦巻文・梢円文・蕨手文が組み合わされている。胎土に白色粒・石英粒を含み、色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好。時期は加曾利E3式と考えられ、隆帯で構成される文様からは大木系の影響が窺われる。尚、土器内から黒曜石の石器が出土している。

### 土坑（第45～56図、表-6～8、図版25～28）

前期及び中期に属すると考えられる土坑は、円形、楕円形、長楕円形、不定形等多様な形態で総数81基検出されている。個々の土坑の規模・形態については一覧表にまとめて提示する。

時期・性格ともに不明瞭な土坑が大半を占める中に、平面長楕円形・隅丸長方形を呈し、底面にピットを有する陥とし穴状土坑が、斜面部、台地頂上・縁辺部、谷部に散発的に分布している。これらの陥とし穴状土坑は調査区外まで展開すると推測され、調査区内に特に集中する箇所がなく、規則的な分布も見られないことから、周辺地域にその中心が存在する可能性が考えられる。

遺物はほとんど出土しておらず、3号土坑出土の口縁部片1点と20号土坑・21号土坑出土の磨石、35号土坑出土の石匙を図示した。3号土坑-1は小波状を呈する口縁部の突起部分で3条の沈線で区画した中に沈線による格子目文が充填され、波頂端部に円孔と集合沈線が施される。胎土に石英粒・雲母粒を含み、色調はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好。時期は五須ヶ台式と考えられる。20号土坑-1は安山岩の特殊磨石で断面三角形を呈する石の1角面のみ使用されている。21号土坑-1は安山岩の磨石。35号土坑-1は珪質頁岩の横型石匙である。

表-6 前期・中期土坑一覧表1

(cm)

番号	位置	平面形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備考
1	14トレンチ	円形	皿状	130 × 120 × 21	自然石
2	17トレンチ	隅丸長方形	凹字状	247 × 82 × 40	ピット6 陥とし穴状
3	17トレンチ	隅丸長方形	皿状	230 × 78 × 12	五須ヶ台式土器片 ピット2 陥とし穴状
4	I-34	長楕円形	鍋底状	217 × 82 × 50	ピット2 陥とし穴状
5	K-33	不整円形	U字状	122 × 103 × 77	
6	E-29	隅丸長方形	凹字状	207 × 73 × 79	ピット2 陥とし穴状
7	E-29	隅丸長方形	鍋底状	214 × 90 × 60	ピット2 陥とし穴状
8	Q-20	不整円形	V字状	93 × 90 × 47	
9	Q-20	円形	皿状	115 × 112 × 35	
10	Q-20	楕円形	皿状	166 × 85 × 32	炭化材
11	J-14	長楕円形	鍋底状	212 × 132 × 108	自然石 陥とし穴状
12	J-14	楕円形	皿状	140 × 86 × 20	自然石
13	J-14	隅丸長方形	皿状	193 × 122 × 38	自然石
14	J-14	不整台形	皿状	283 × 200 × 40	自然石 2段掘り込み
15	欠番				
16	欠番				
17	D-9	不整楕円形	皿状	120 × 88 × 25	
18	D-9	楕円形	鍋底状	82 × 62 × 25	自然石

表-7 前期・中期土坑一覧表2

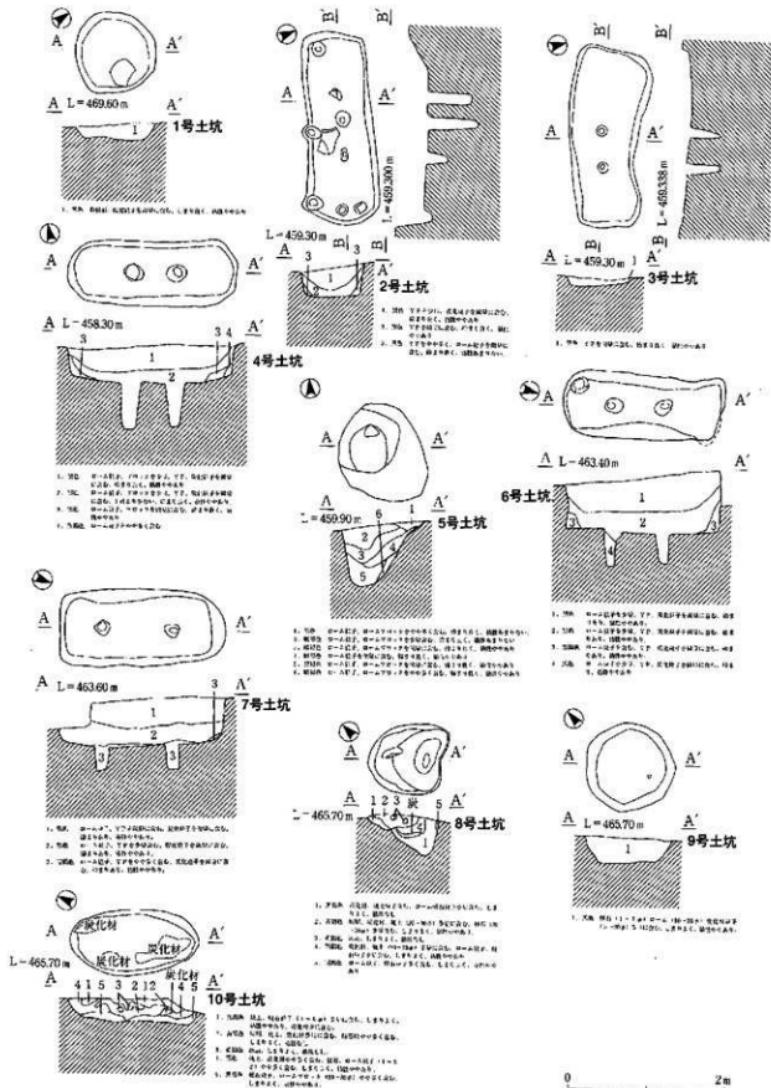
(cm)

番号	位置	平面形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備考
19	D-9	橢円形	U字状	120 × 47 × 45	
20	D-9	円形	鍋底状	135 × 102 × 38	特殊磨石・自然石
21	D-9	不整橢円形	皿状	228 × 100 × 30	2段掘り込み
22	D-9	円形	逆台形	100 × 96 × 47	自然石
23	E-10	円形	鍋底状	87 × 82 × 26	
24	E-10	橢円形	鍋底状	120 × 87 × 42	
25	E-10	不整円形	鍋底状	98 × 82 × 25	自然石
26	E-10	橢円形	V字状	144 × 103+a × 38	自然石
27	E-10	橢円形	V字状	103 × 78 × 26	自然石
28	E-10	橢円形	鍋底状	182 × 100 × 61	
29	E-10	円形	U字状	116 × 106 × 71	
30	E-F-10	円形	U字状	56 × 47 × 30	
31	F-10	橢円形	鍋底状	123 × 81 × 45	
32	E-9	橢円形	皿状	158 × 120 × 23	自然石
33	E-9	円形	皿状	75 × 72 × 20	自然石
34	E-9	円形	皿状	136 × 108 × 29	自然石
35	E-F-11	橢円形	皿状	95 × 80+a × 17	石路
36	L-3	円形	鍋底状	146 × 118 × 35	
37	M-4	馬蹄長方形	四字状	152 × 48 × 62	ピット2 隘とし穴状
46	N-9	橢円形	皿状	150 × 122 × 30	
50	H-9	橢円形	鍋底状	179 × 123 × 60	
62	N-8-9	橢円形	逆台形	173 × 134 × 102	2段掘り込み
99	M-8	長橢円形	鍋底状	274 × 120 × 60	
100	I-9	橢円形	皿状	137 × 110 × 20	自然石
101	M-9	橢円形	鍋底状	220 × 134 × 62	
102	L-9	円形	皿状	110 × 104 × 20	
103	T-9	円形	鍋底状	96 × 84 × 25	
104	H-9	円形	鍋底状	105 × 95 × 57	
106	I-8	橢円形	鍋底状	257 × 231 × 55	
107	I-9	円形	皿状	108 × 87 × 24	
108	J-7-8	橢円形	鍋底状	165 × 111 × 40	
109	H-10	橢円形	鍋底状	101 × 144 × 37	
110	L-10	円形	皿状	199 × 84 × 18	
111	K-7	橢円形	鍋底状	133 × 90 × 50	
112	L-7	卵形	鍋底状	160 × 127 × 30	

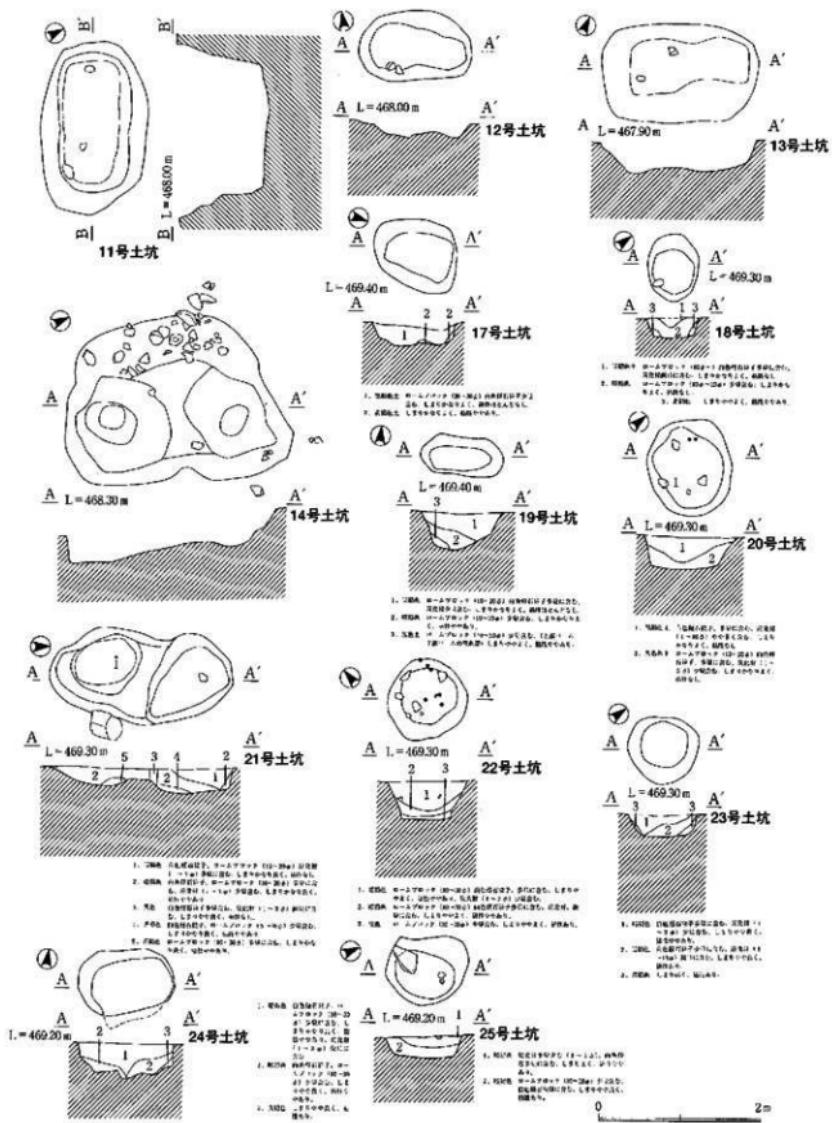
表-8 前期・中期土坑一覧表3

(cm)

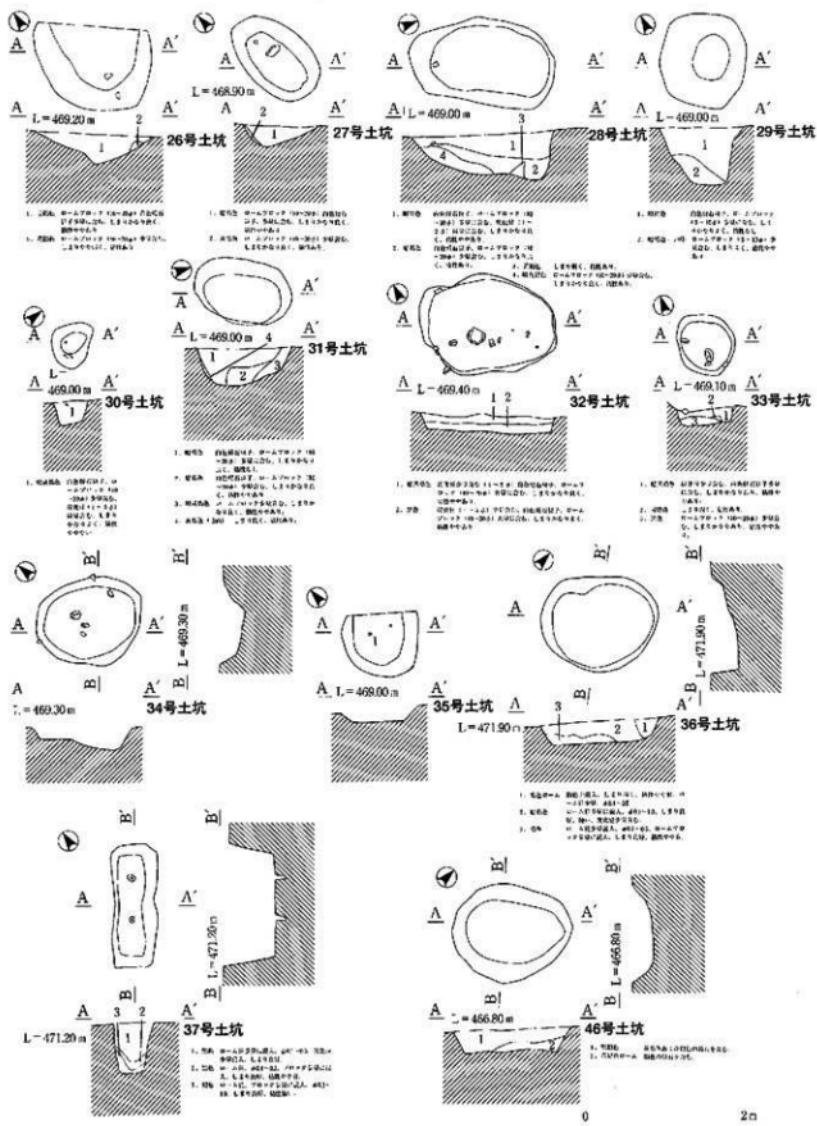
番号	位置	平面形	断面形	長軸 × 短軸 × 深さ	備考
113	K-5	円形	皿状	96 × 92 × 22	
114	欠番				
115	K-5	精円形	皿状	97 × 75 × 20	
116	H-8・9	卵形	皿状	140 × 113 × 28	
117	L-4・5	精円形	皿状	156 × 102 × 20	
118	K-4	円形	鍋底状	88 × 67 × 28	
119	G-4	円形	鍋底状	126 × 70+a × 43	
120	K-4	円形	皿状	106 × 86 × 29	
121	K-4	精円形	皿状	124 × 92 × 20	
122	K-L-4	円形	皿状	76 × 72 × 19	
123	K-4	円形	皿状	65 × 61 × 19	
124	K-4	円形	皿状	123 × 106 × 18	
127	H-3	円形	皿状	72 × 69 × 18	ピット2
128	I-3	円形	皿状	82 × 75 × 20	
129	H-3	円形	鍋底状	77 × 63 × 25	
133	T-9	凸形	鍋底状	110 × 90 × 26	
134	M-8	精円形	鍋底状	162 × 133 × 60	
135	G-4	円形	鍋底状	95 × 90 × 43	
136	K-4	円形	皿状	121 × 82+a × 31	2号住居跡重複
137	G-3・4	円形	鍋底状	150 × 83+a × 50	
138	K-4	精円形	皿状	118 × 90 × 22	2号住居跡重複
139	G-4	円形	皿状	87 × 85 × 15	
140	H-4	円形	逆台形	140 × 132 × 67	自然石
177	E-8	凸形	鍋底状	87 × 76 × 30	
178	欠番				
179	欠番				
180	E-7	円形	鍋底状	121 × 115 × 47	自然石
182	E-8	円形	鍋底状	125 × 107 × 30	
183	E-8	円形	鍋底状	86 × 80 × 26	
184	欠番				
201	F-14	円形	鍋底状	76 × 68 × 20	
202	G-16	円形	皿状	74 × 70 × 18	
203	G-16	不整円形	鍋底状	125 × 118 × 88	
233	欠番				
245	D-18	精円形	匁字状	180 × 90 × 85	ピット2 端とし穴状



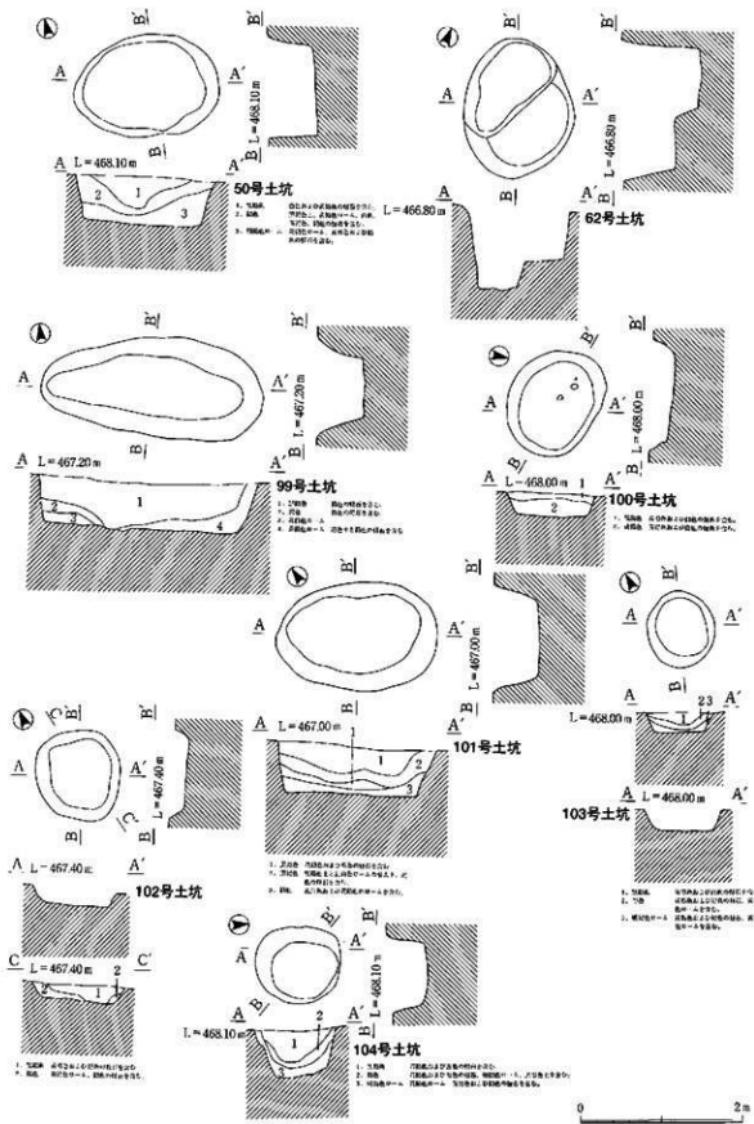
第48図 前期・中期土坑 1



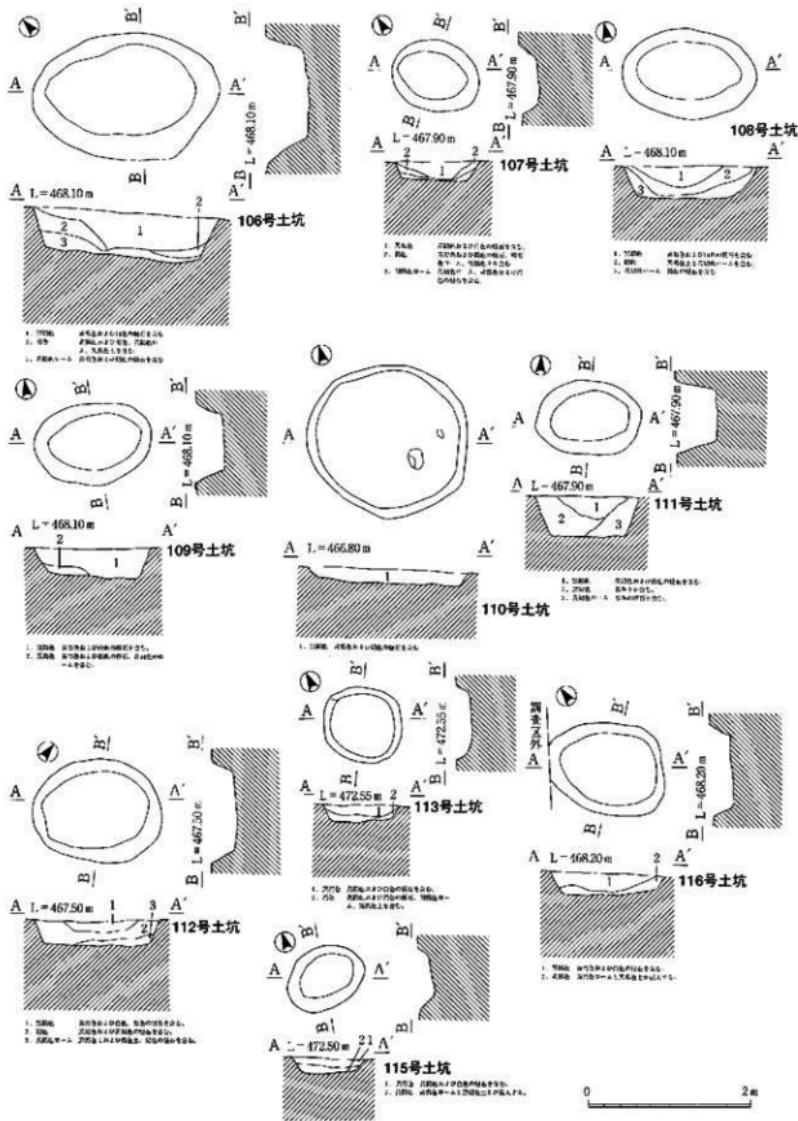
第49図 前期・中期土坑2



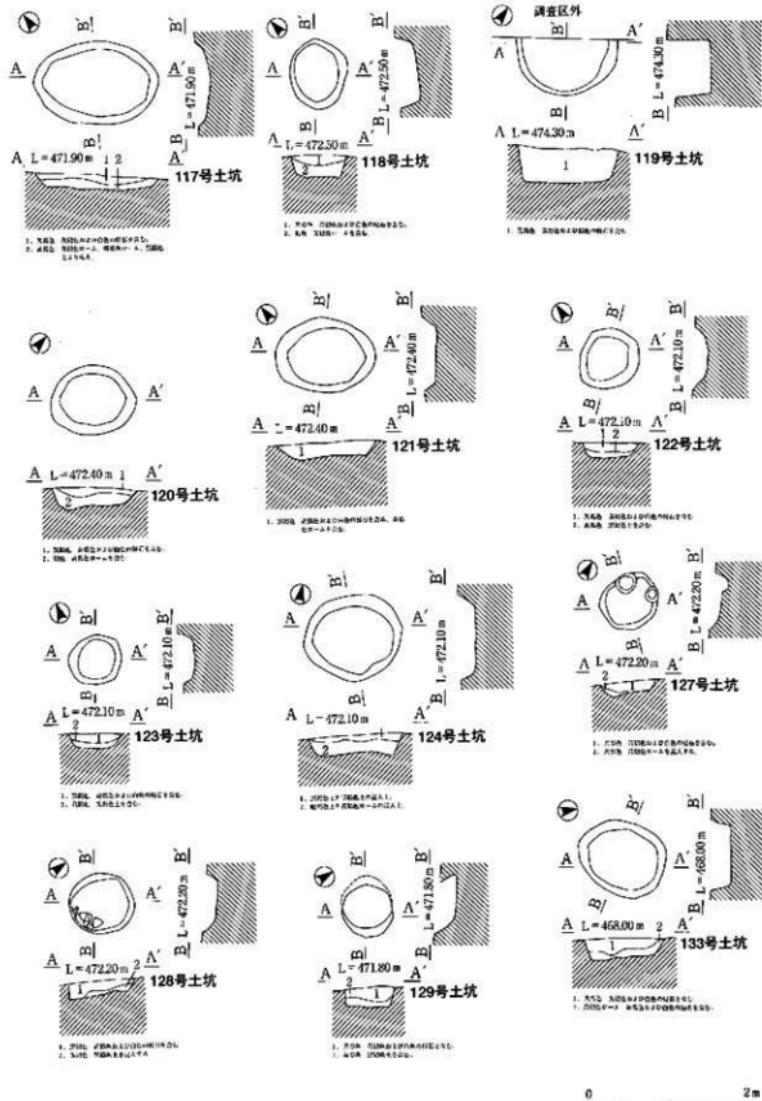
第50図 前期・中期土坑3



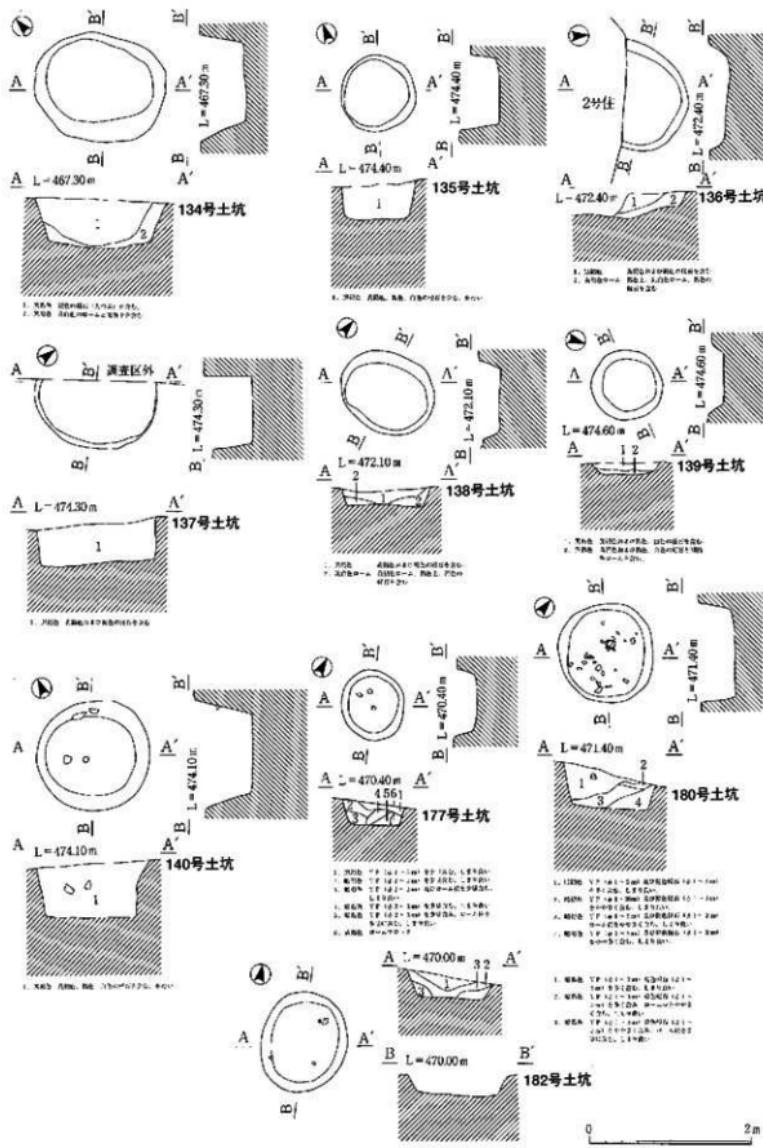
第51図 前期・中期土坑 4



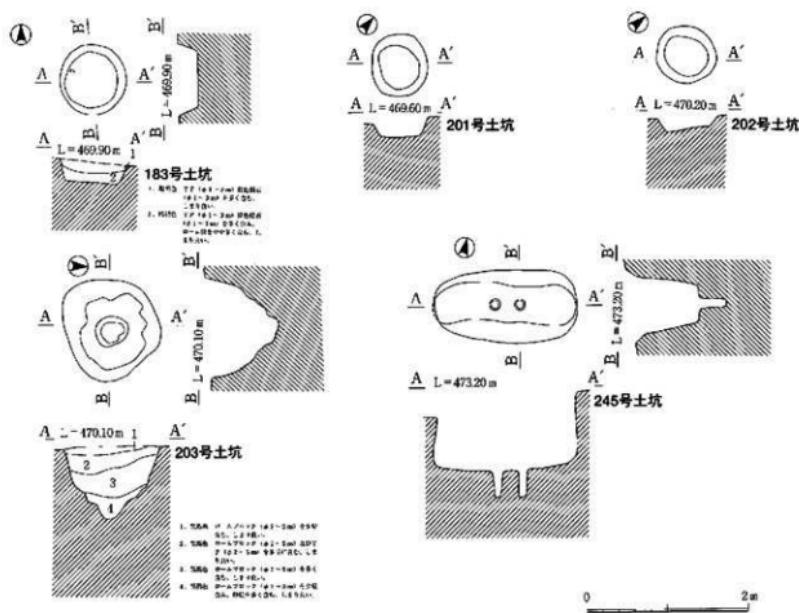
第52図 前期・中期土坑5



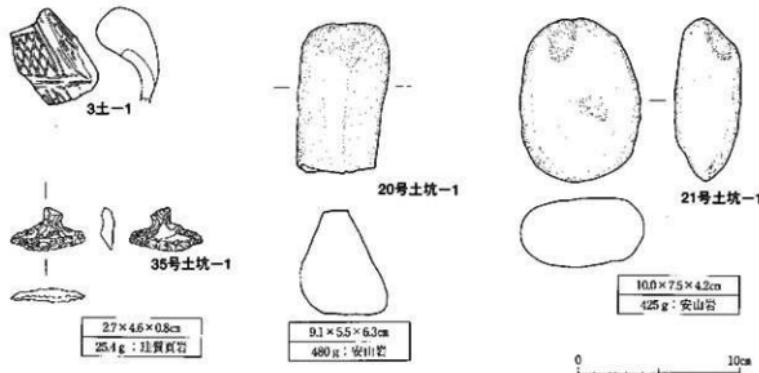
第53図 前期・中期土坑 6



第54図 前期・中期土坑7



第55図 前期・中期土坑 8



第56図 3・20・21・35号土坑出土遺物

## 遺構外出土土器

本遺跡からは早期後半の条痕文系土器を主体として、早期前半～後・晩期に至る土器が出土している。遺構外出土の土器については以下の6群に大別して報告し、個々の遺物は一覧表にまとめて提示する。

- 第1群 早期前半土器（撲糸文系、押型文系、沈線文系）
- 第2群 早期後半土器（条痕文系、鶴ヶ島台式・茅山下層式・絡条体圧痕文系等）
- 第3群 早期末～前期初頭土器（塙田式・花轍下層式）
- 第4群 前期土器（諸磯b式）
- 第5群 中期土器（五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E式）
- 第6群 後期土器（加曾利B式・高井東式等）

### 第1群土器 1～38 (第57・58図、表-9・10、図版35)

早期前半の土器を本群とした。出土量は少量で図示可能なもののほとんどを掲載している。本群土器は1類の撲糸文系土器(1)、2類の押型文系土器(2～25)、3類の沈線文系土器(26～38)に分けられる。

1類の撲糸文系土器は鶴ヶ島台式の口縁部片1点のみ出土し、他に撲糸文末期の東山式と考えられる土器細片が見られたが、図示出来る破片は5号住居跡出土の2点のみであった。2類の押型文系土器は押型文の種類によって、a種の山形押型文(2)、b種の柿円+横状押型文土器(3)、c種の山形+横円押型文土器(4)、d種の横円押型文土器(5～25)に細別される。b種とc種の一部には胎土に微量の纖維が含まれている。3類の沈線文系土器はいずれも田戸下層式の範疇と考えられる。単独の工具による沈線文・平行沈線文で主文様が構成され、26・27・28・30には貝殻腹縫文が加えられている。

### 第2群土器 39～250 (第59～72図、表-11～23、図版36～47)

胎土に纖維を含み、地文に条痕が施文される条痕文系土器を本群とした。条痕文系土器は本遺跡の主体となる土器群であり、遺跡全体の出土量の約90%を占めている。1類の鶴ヶ島台式(39～74)、2類の茅山下層式(75～93)、3類の条痕文のみ施文する土器(94～125)、4類の絡条体圧痕文系土器(126～205)、5類として半截竹管の押し引き文を多用し、3類と文様構成を共有する土器(206～242)と、6類の底部片(243～250)に分けられる。

1類の鶴ヶ島台式土器は口縁部に沈線による斜格子文が描かれるもの、沈線区画内に刺突が充填されるもの、沈線の交点に円形刺突が施されるもの等がある。2類の茅山下層式土器は半截竹管の押し引きにより、X字状・鋸齒状文等が描かれる。3類の条痕文のみ施文される類には波状口縁のものが存在し、口唇文に刻みが加えられるものが多く見られる。4類は最も出土量の多い絡条体圧痕文系土器である。口縁部文様として施文される絡条体圧痕文は縦位、斜位、羽状の他、鋸齒状、V字状等に施文され、隆帶上や口唇部、更に内面に施文するものがある。又、頸部部分に絡条体圧痕文を横位に一条運らし、口縁部文様帯を区間するものが見られ、他に、隆帶が組み合わされるもの、半截竹管による押し引き文を組み合わせて文様が構成されるものがあり、外面に半截竹管による押し引き文、内面に絡条体圧痕文が施文されるものも存在している。5類は4類の絡条体圧痕文系と文様構成を共有する類である。半截竹管による押し引き文を多用し、口縁部に縦位、斜位、羽状、鋸齒状の文様が描かれる。本類土器は3類の中に絡条体圧痕文と押し引き文が組み合わされるものがあり、絡条体圧痕文系土器の成立を考える上で重要な位置を占める土器群と考えられる。6類の底部はいずれも平底である。本群土器では尖底になるものは出土していない。

### 第3群土器 251～285 (第72～73図、表-24・25、図版47・48)

早期末～前期初頭の土器を本群とした。塚田式一花積下層式の範疇と考えられる。胎上に模様を含み、地文に菱形構成の羽状繩文が施文される。単節繩文の原体はいずれも0段多条と思われる。口縁部には2～3条の沈線で菱形文が描かれるもの、隆帯上に刻み・撲糸圧痕が施されるもの等がある。269は尖底部分である。271～285は撲糸文が施文される胴部破片である。撲糸文は基本的に菱形構成と思われ、底部は尖底になると考えられる。

### 第4群土器 286～297 (第74図、表-26、図版48・49)

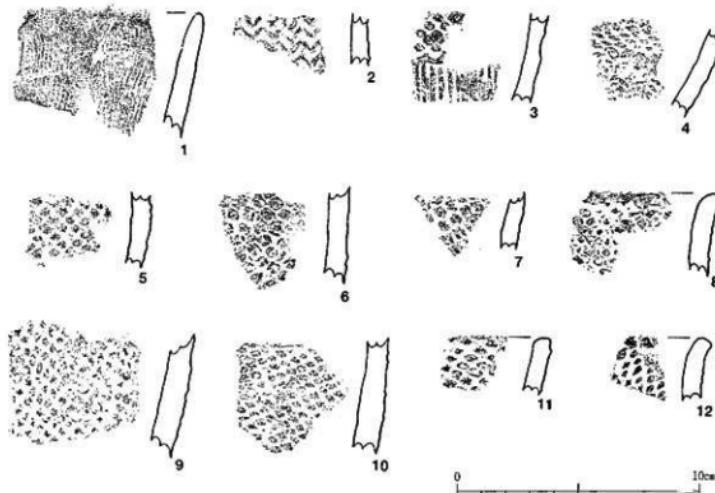
前期諸磧b式を本群とした。地文に繩文が施文され、結節浮線文、半截竹管による平行沈線等で文様が構成されている。

### 第5群土器 298～311 (第74・75図、表-26・27、図版49)

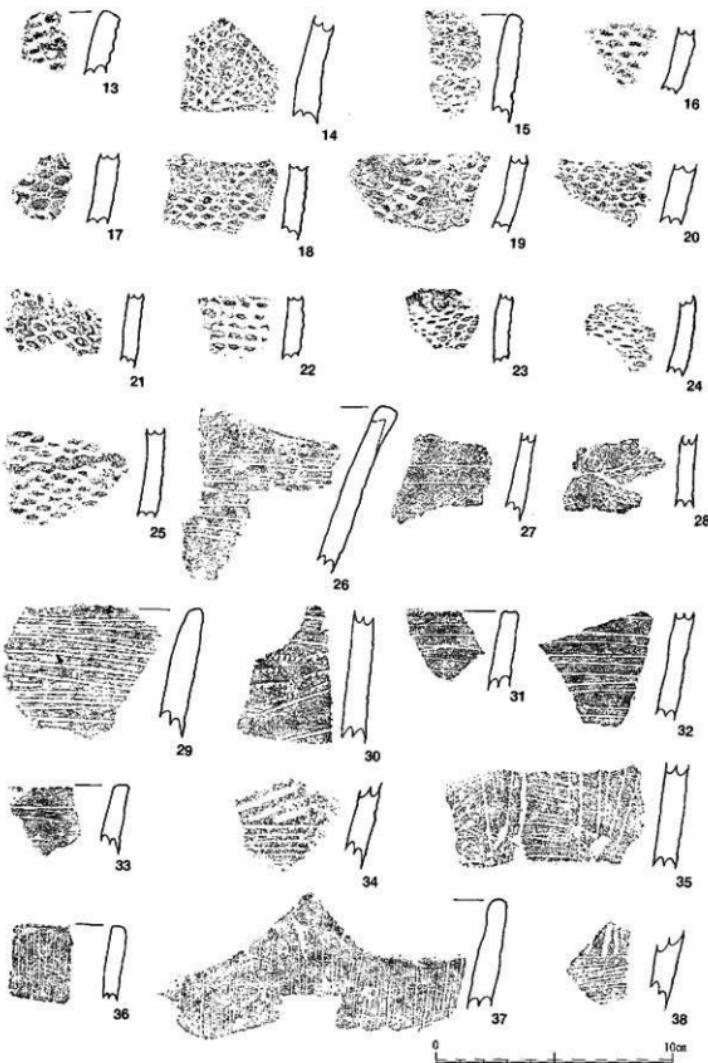
中期の上器を本群とした。1類の五領ヶ台式(299～301)、2類の阿正台式(302～305)、3類の加曾利E式(306～311)に分けられる。1類では300に三角印刻文が見られる。2類の302～304は同一個体の破片で、横位・縦位の隆帯と爪形文が施文される。305は波状口縁の大破片で隆帯による梢円区画内に爪形文が施文され、刻みの加えられた隆沿・半截竹管によるコンパス文と平行沈線で横位の文様が構成されている。3類は306が加曾利E2式、他は加曾利E3式で307～309は条線で文様が構成される。

### 第6群土器 312～319 (第75図、表-27、図版49)

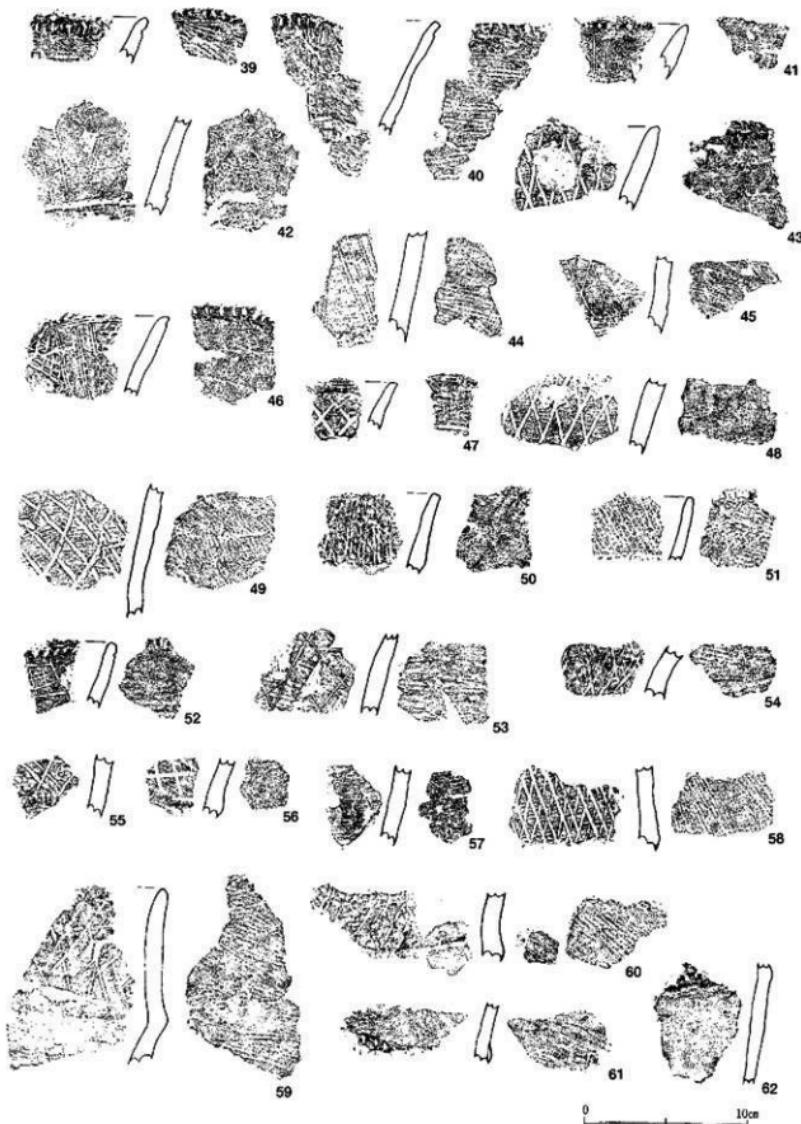
後期と思われる上器を本群とした。312～316は後期中葉～後半の所産と思われる無文の粗製土器片である。318は高井東式の大波状口縁深鉢の範疇と考えられ、時期的に安行1式期まで下るものと思われる。肩部が内屈する319の鉢形土器は、口縁部に2本一組の沈線で菱形文が構成され、その交点に円形貼り付け文、肩部には刻みが施されている。時期的には高井東～安行1式期と思われる。



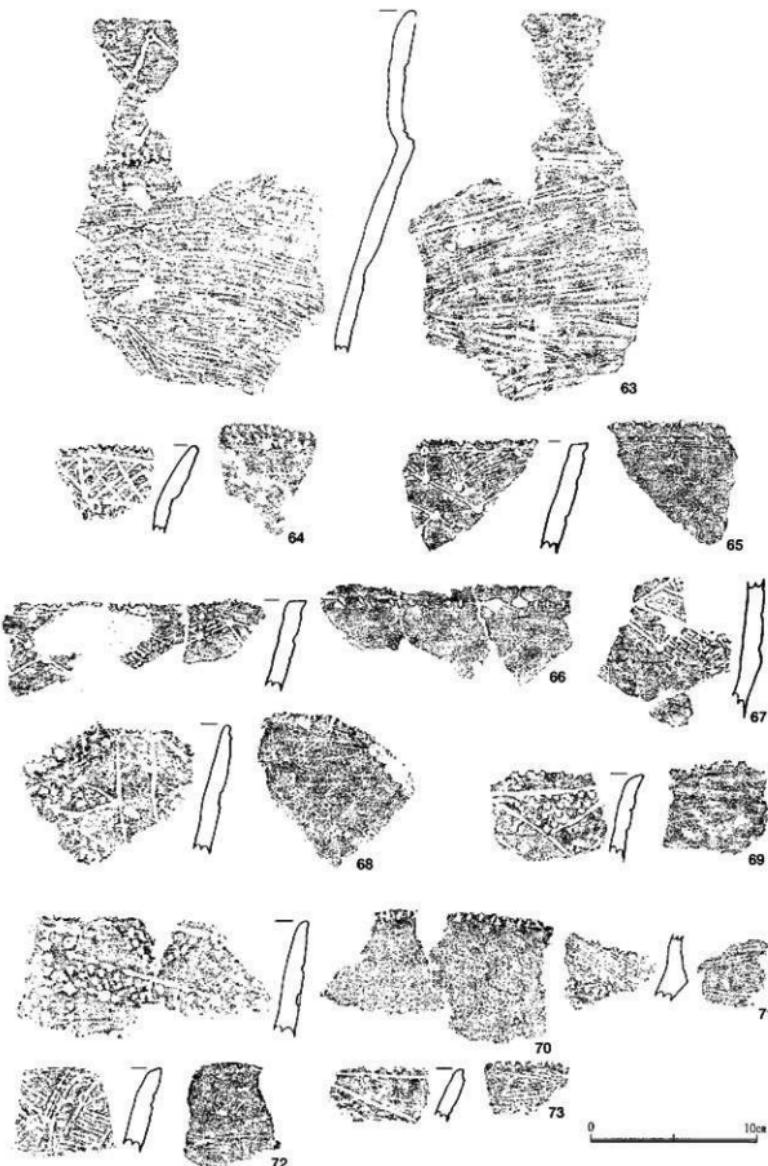
第57図 遺構外出土土器 1



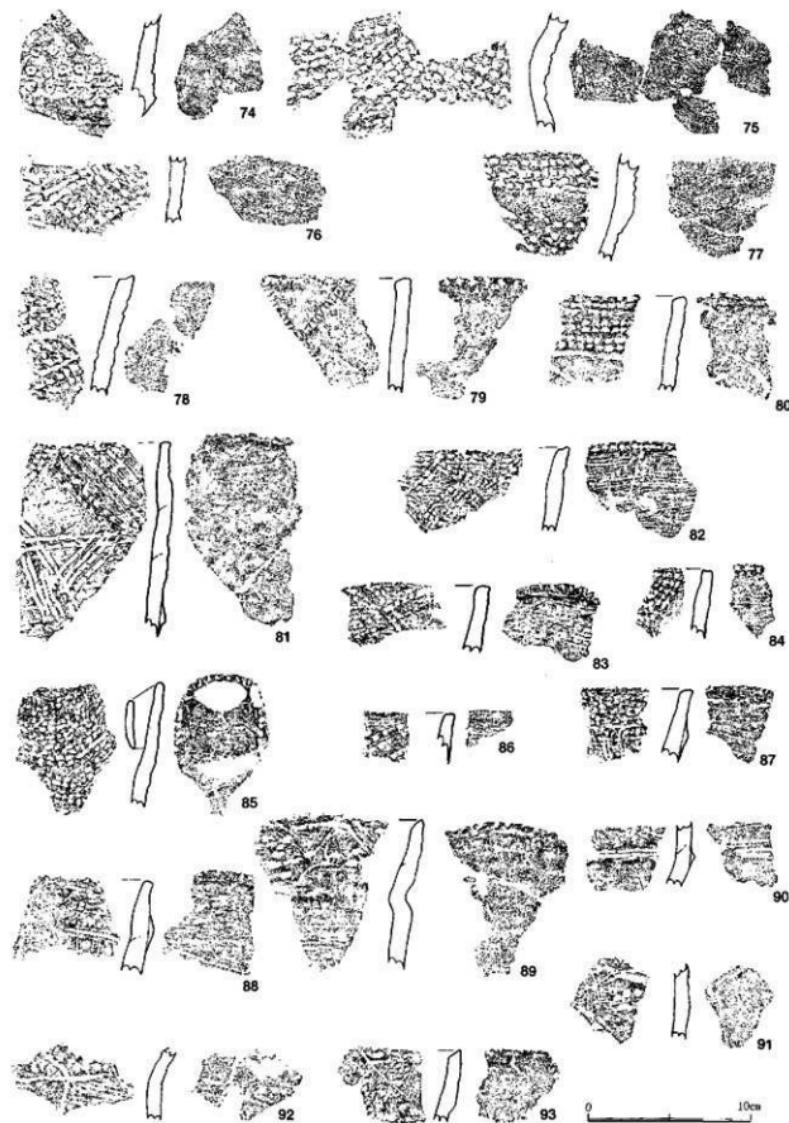
第58図 遺構外出土土器 2



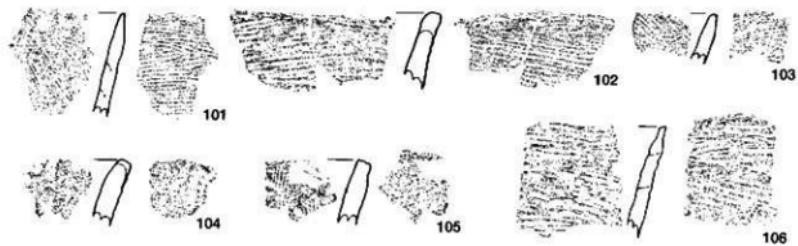
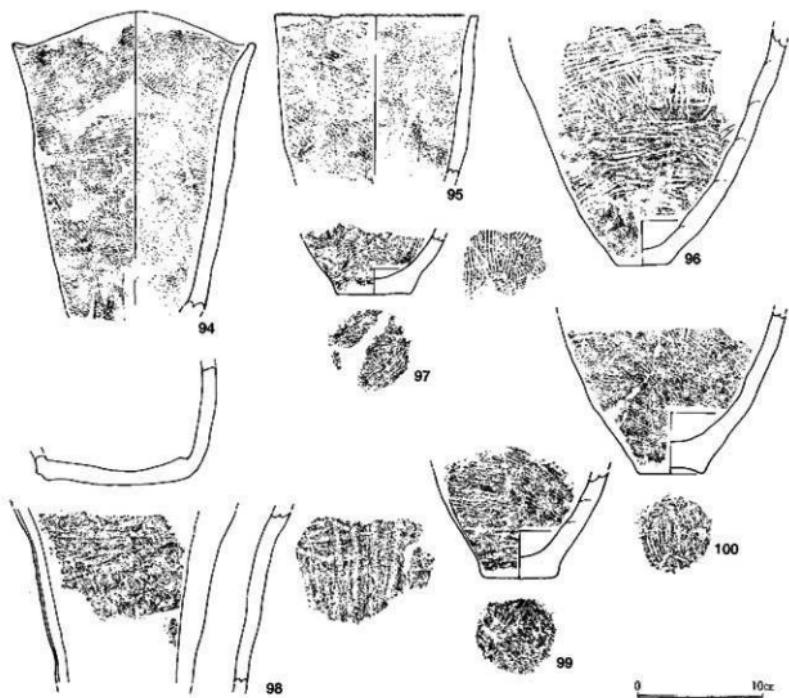
第59図 連構外出土土器 3



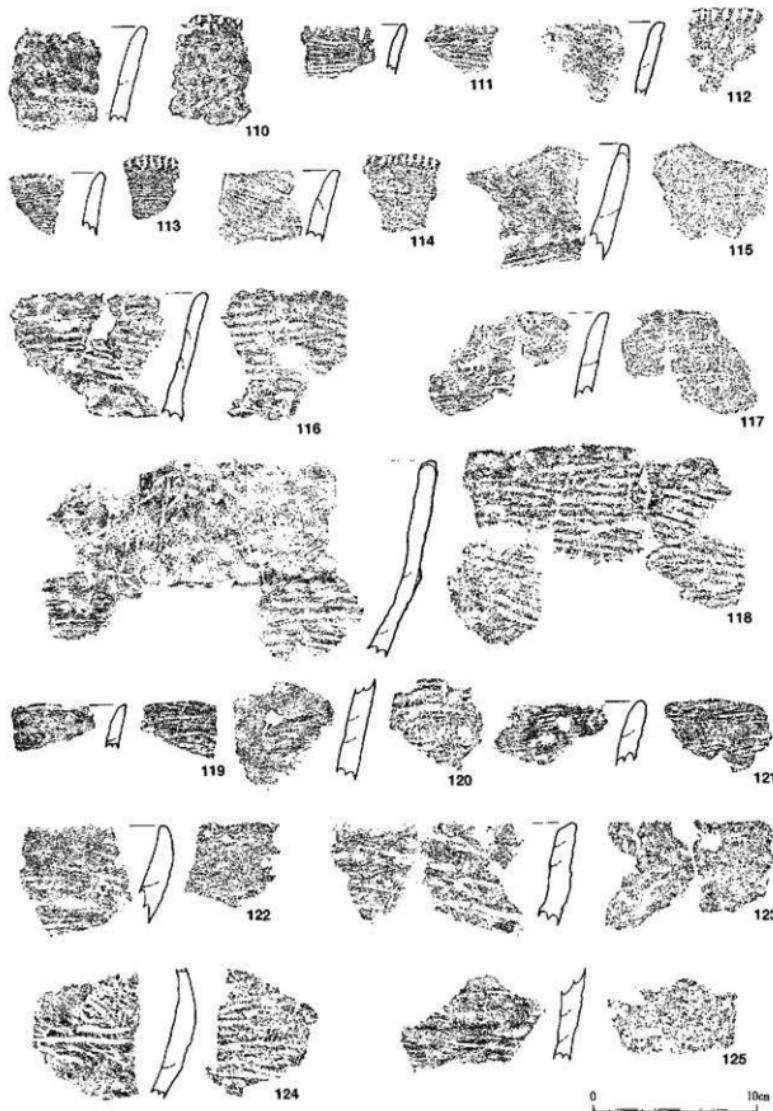
第60図 造構外出土土器4



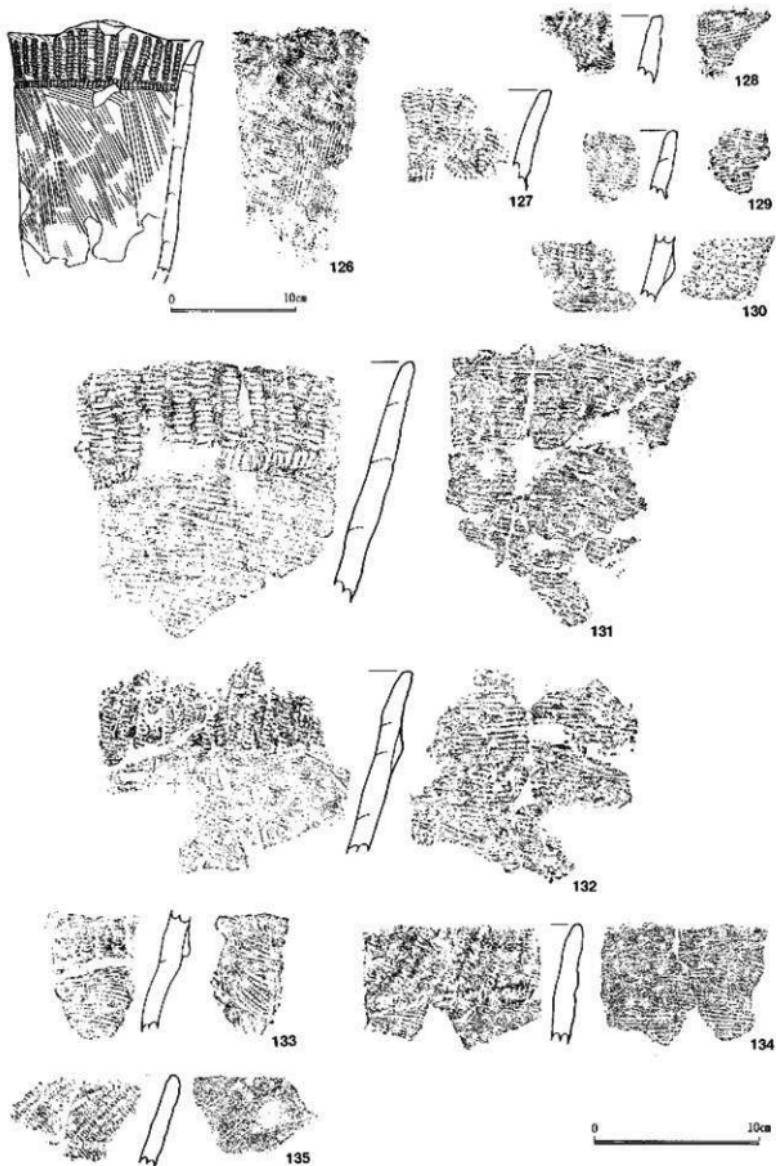
第61図 通橋出土土器 5



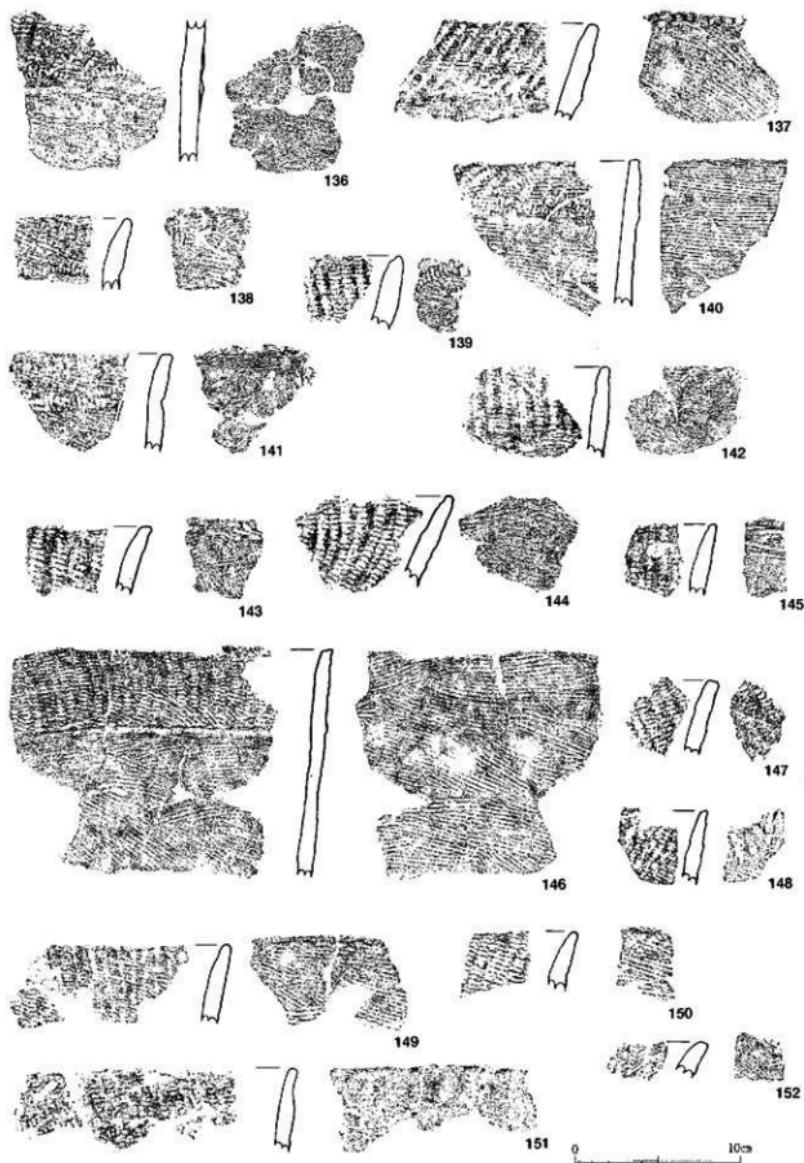
第62図 遺構外出土土器 6



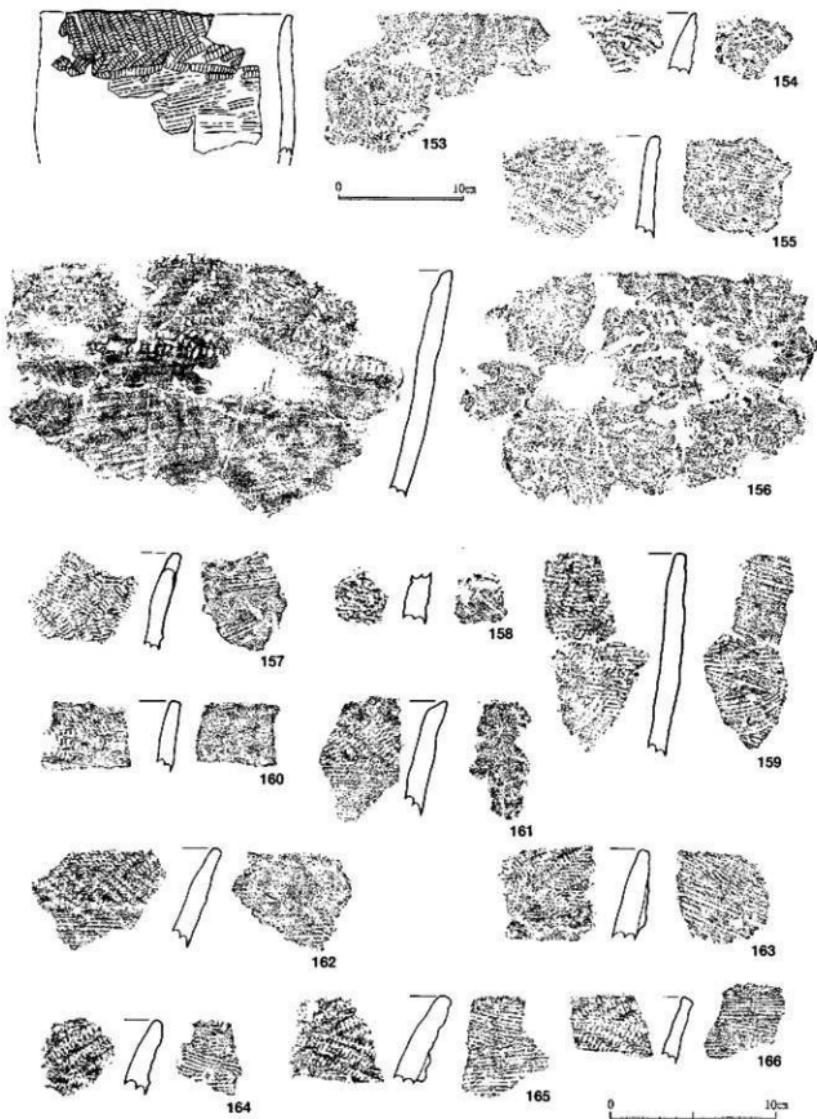
第63図 遺構外出土土器



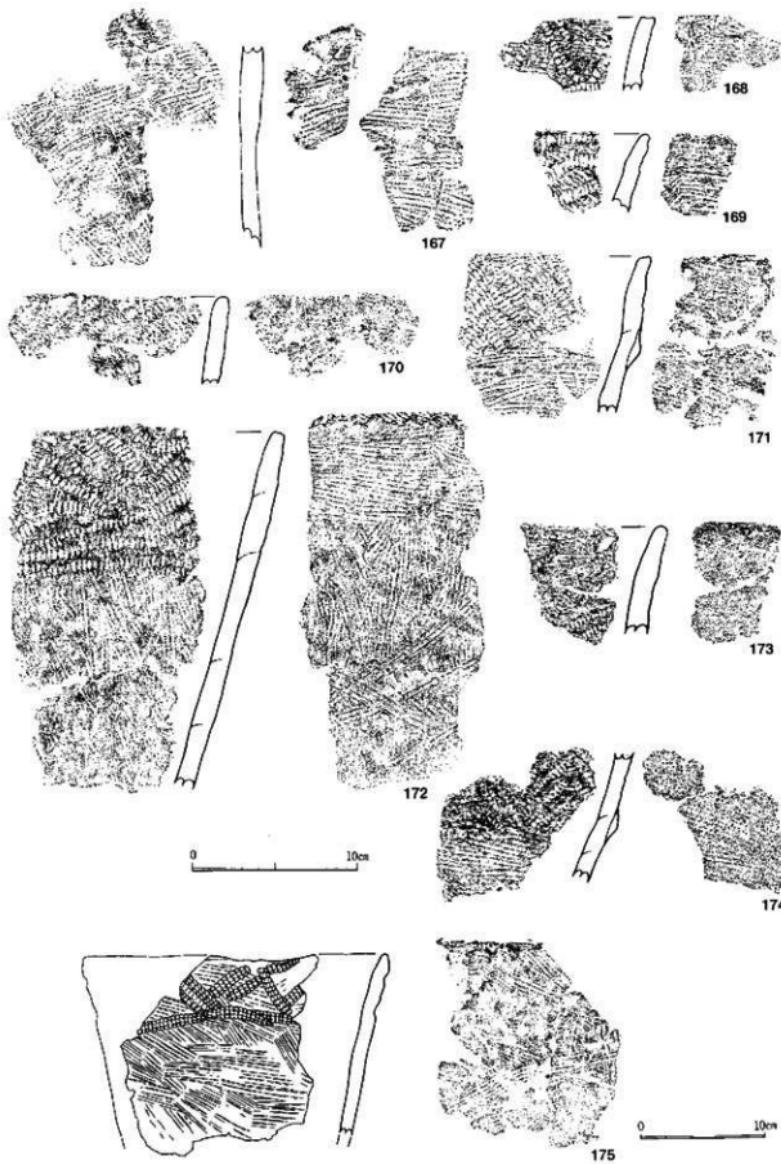
第64図 遺構外出土土器 8



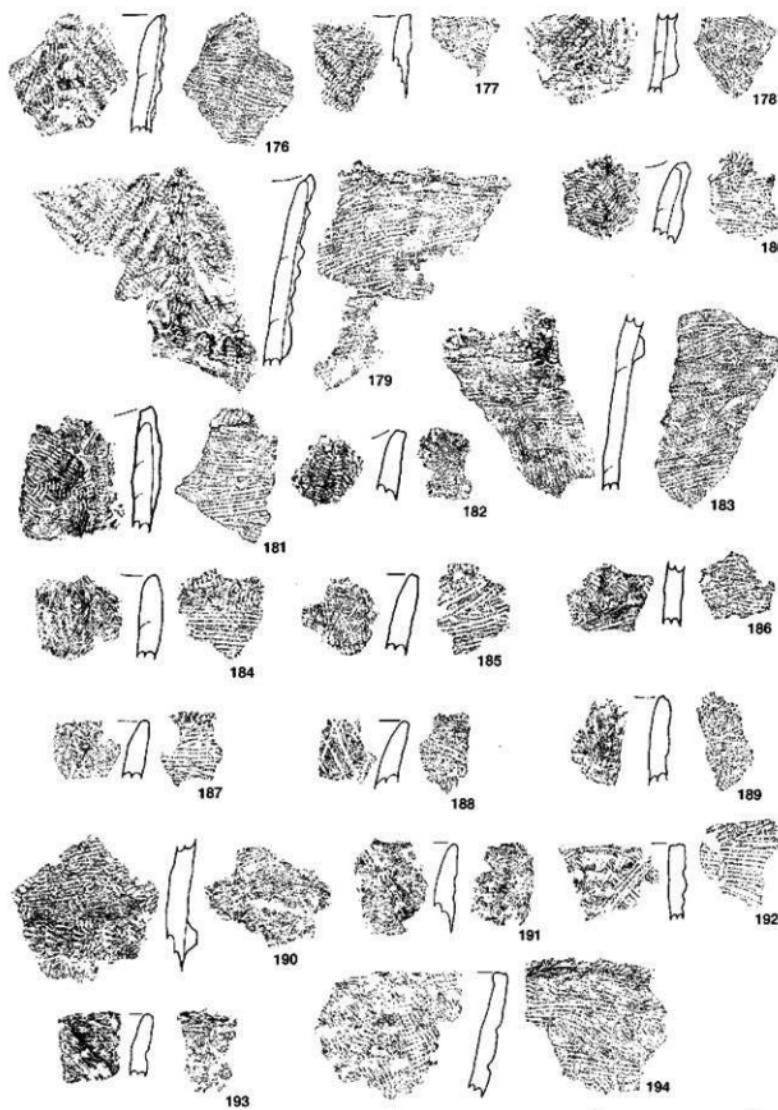
第65図 造構外出土土器 9



第66図 遺構外出土土器10

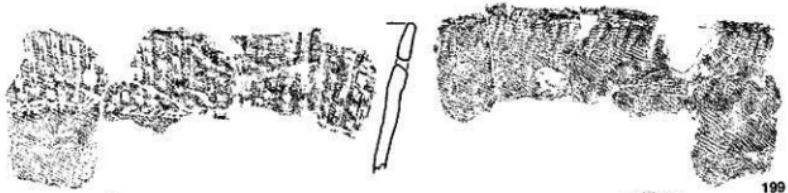
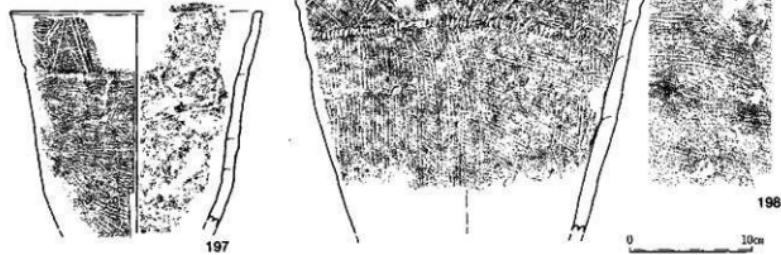
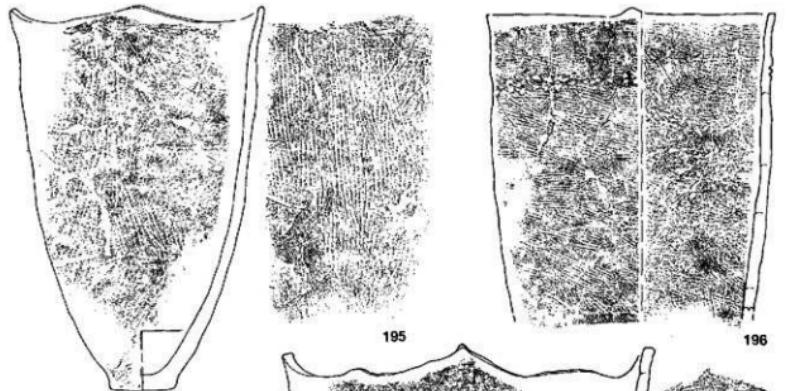


第67図 造構外出土土器11

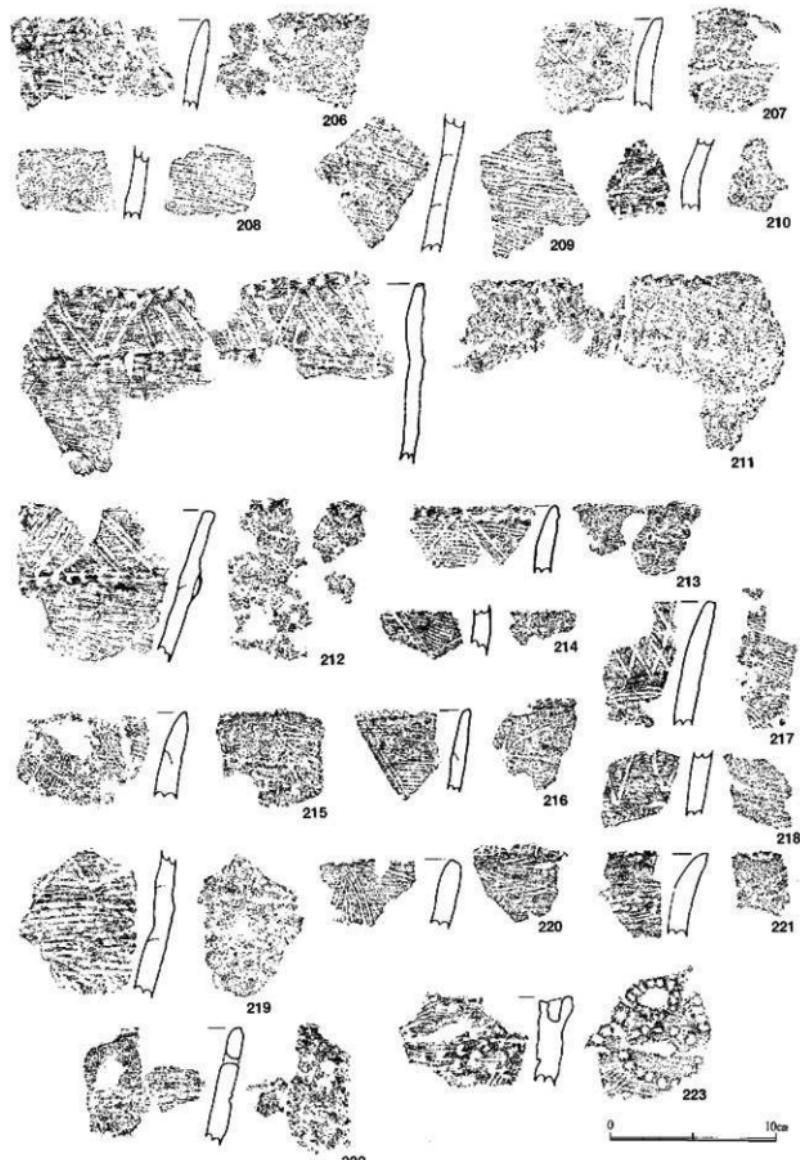


0 10cm

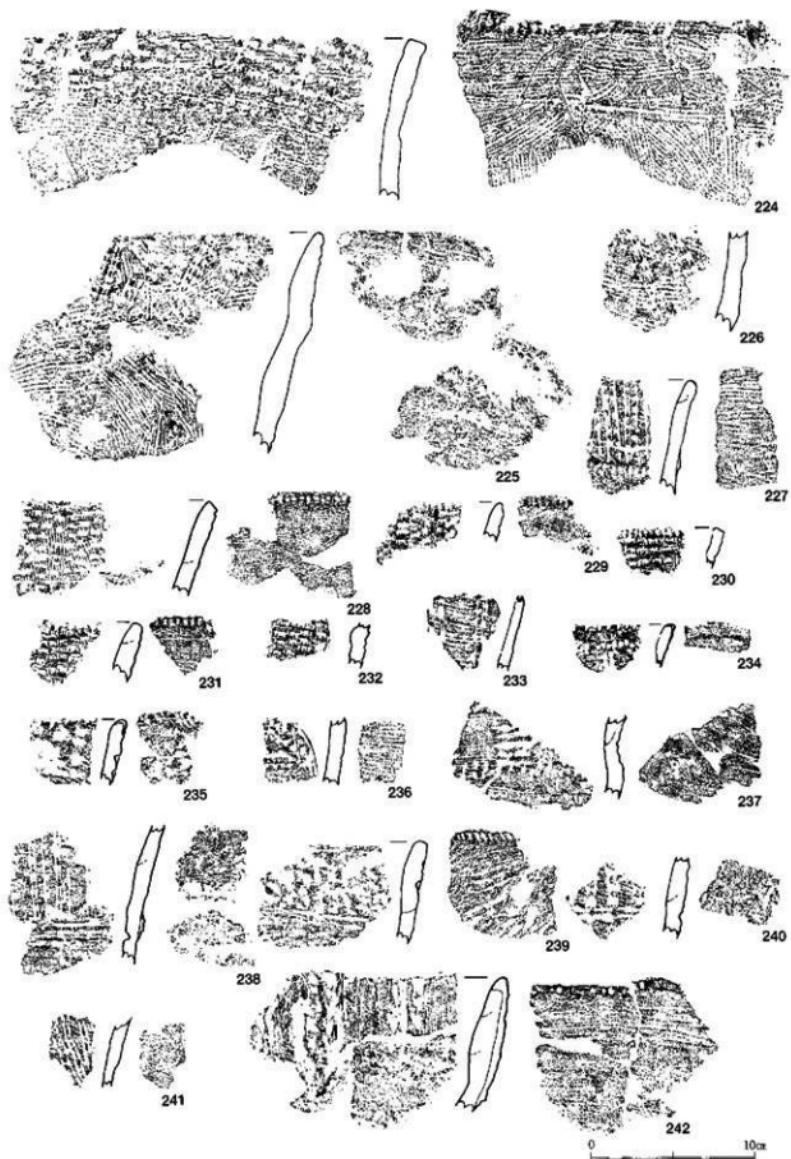
第68図 造構外出土土器12



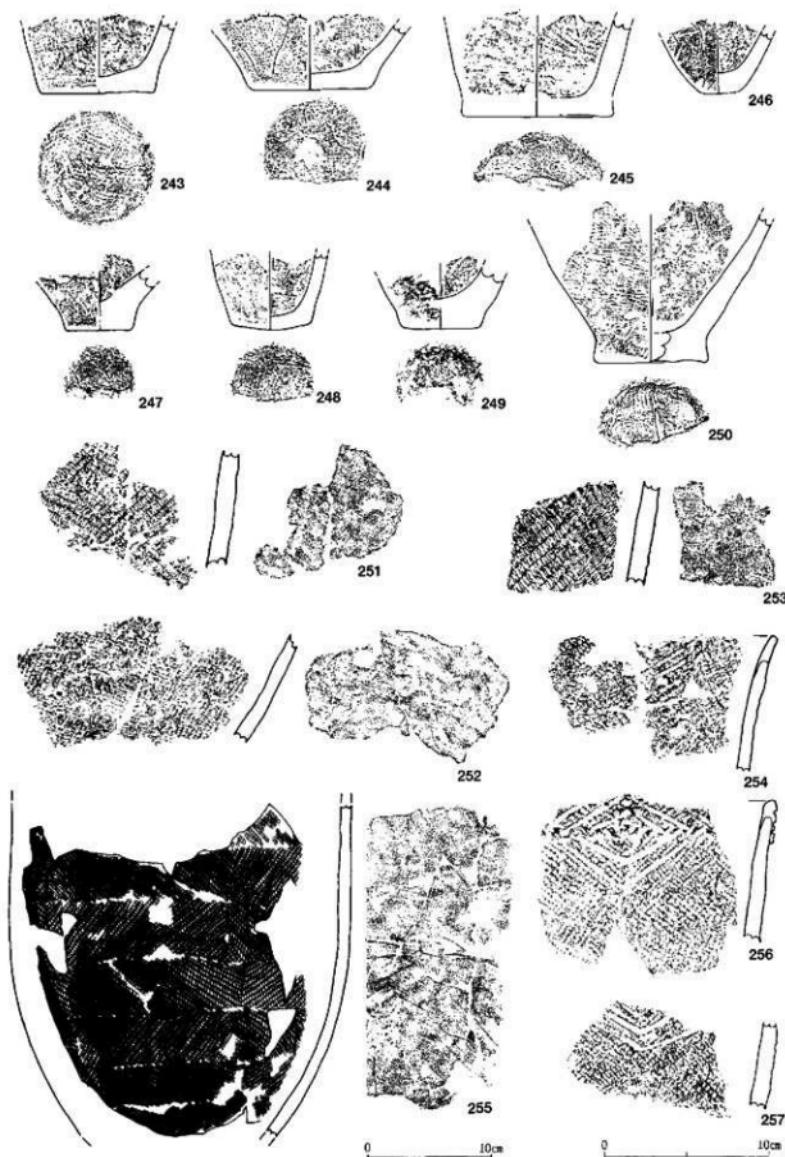
第69図 通構外出土土器13



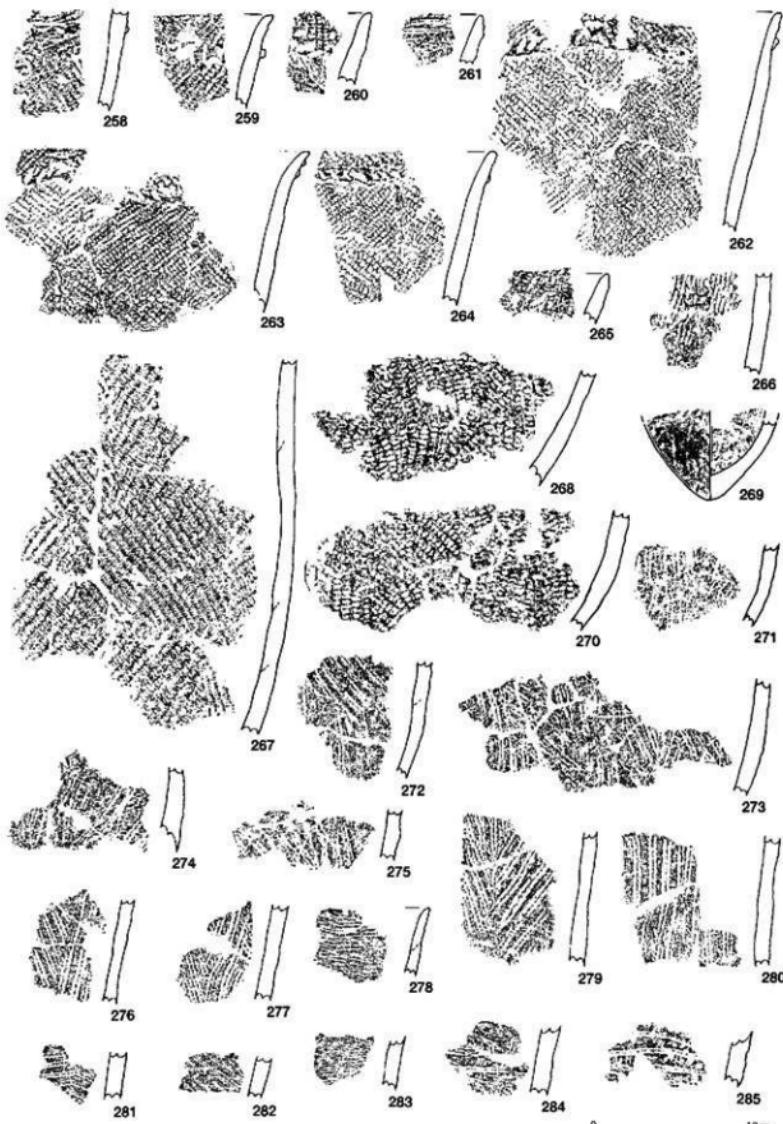
第70図 遠縄出土土器14



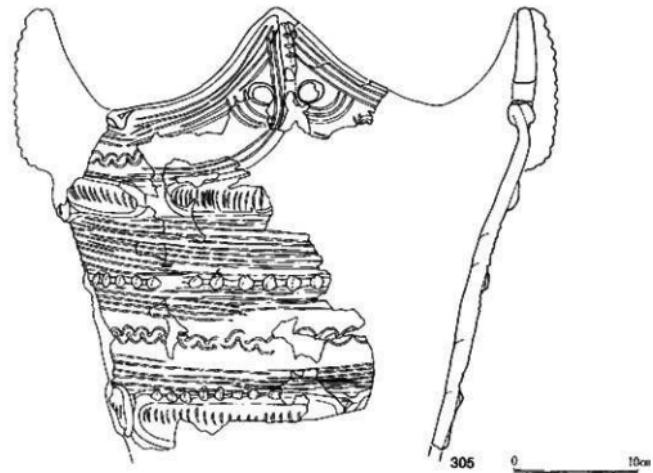
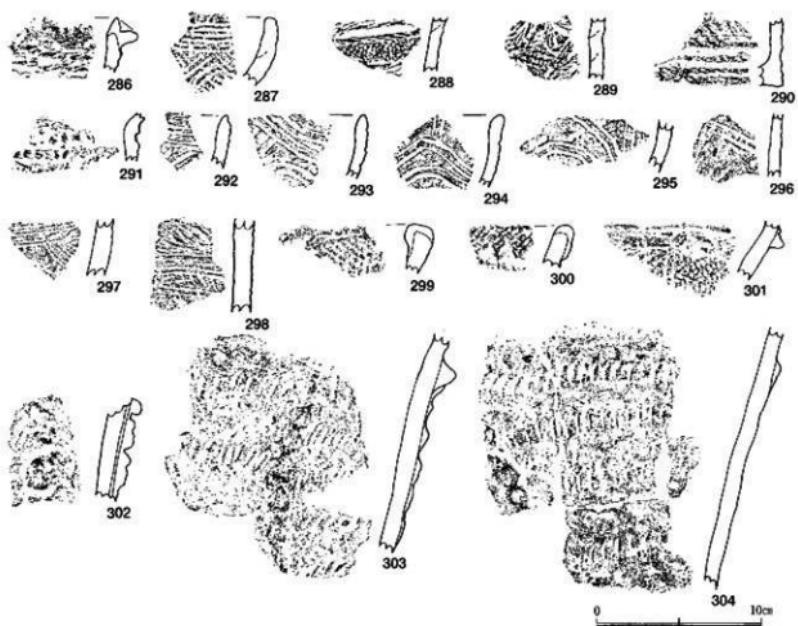
第71図 遺構外出土土器15



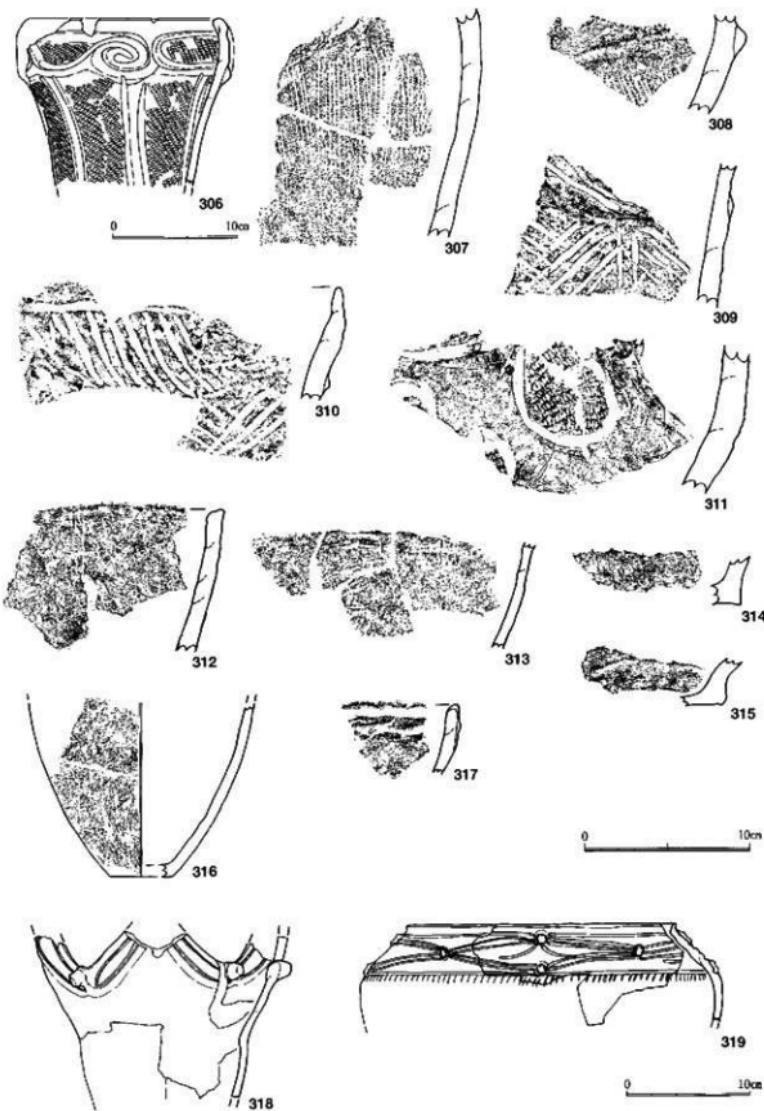
第72図 造構外出土土器16



第73図 通構外出土土器17



第74図 遺構外出土土器18



第75図 造構外出土土器19

表-9 遺構外出土器觀察表1

番号	①鉢上 ②洗底 ③色済 ④形态	文様要旨	文様伝承・文様類文・省略の特徴	備考
1	①砂粒多、金具多 ②瓶底 ③黄褐色 ④山縞部	桃尻文(左横:木)	横位回転文。口縞部は直立。	桜荷台
2	①砂粒多 ②良好 ③黄褐色 ④圓部	山形押型文	横位回転文。	押型文系
3	①砂粒少、織維微量 ②瓶底 ③淡褐色 ④斜部	山形・横位押型文	横位回転文。斜状押型文の施文具には、側位の縦が付く。斜数の縦を束ねた縦痕か。	押型文系
4	①砂粒多 ②瓶底 ③赤褐色 ④瓶部	山形・横位押型文	横位回転文。	押型文系
5	①砂粒多 ②普通 ③黄褐色 ④瓶部	山形押型文	横位回転文。原形の印刷は格子丁文に近く、菱形状をなす。	押型文系
6	①砂粒多 ②良好 ③黃褐色 ④裏部	横位押型文	横位回転文。	押型文系
7	①砂粒多 ②良好 ③淡褐色 ④瓶部	山形押型文	横位回転文。	押型文系
8	①砂粒多 ②良好 ③褐色 ④口縒部 ①片岩の碧片多 ②瓶底 ③赤褐色 ④瓶部	山形押型文 碧円押型文	横位回転文。施文が重複。口縒部は器外反し、口縒部は平頭。	押型文系
9	①砂粒多 ②良好 ③褐色 ④口縒部	碧円押型文	横位に密な施文。一部で重複。	押型文系
10	①砂粒少、織維微量 ②良好 ③淡褐色 ④瓶部	横位押型文	横位に密な施文。	押型文系
11	①砂粒少 ②良好 ③赤褐色 ④口縒部	横位押型文	横位回転文。	押型文系
12	①砂粒少、織維微量 ②良好 ③赤褐色 ④口縒部	横位押型文	斜めに施文か。口縒部が器外反し、口縒部は平頭。	押型文系
13	①砂粒少、織維微量 ②普通 ③黄褐色 ④口縒部	横位押型文	横位回転文。口縒部が直立し、口縒部は下凹。	押型文系
14	①砂粒多、織維微量 ②良好 ③黄褐色 ④瓶部	山形押型文	粗粒、横位に密な施文。	押型文系
15	①砂粒多、織維多 ②普通 ③淡褐色 ④山縞部	横位押型文	密な横位回転文。口縒部は直立。	押型文系
16	①砂粒多 ②不均 ③淡褐色 ④瓶部	山形押型文	密な横位回転文。	押型文系
17	①砂粒少、織縞少量 ②良好 ③黄褐色 ④瓶部	横位押型文	密な横位回転文。	押型文系
18	①砂粒多、織縞量多 ②普通 ③黄褐色 ④瓶部	山形押型文	密な横位回転文。	押型文系
19	①砂粒少、織縞微量 ②良好 ③黄褐色 ④瓶部	横位押型文	密な横位回転文。内面に凸凹有り。	押型文系

表-10 遺構出土土器観察表2

番号	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	支綴要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
20	①砂粒少 ②良好 ③黄褐色 ④胴部	椎円押型文	密な横位凹輪施文。	押型文系
21	①砂粒多、燒成微量 ②良好 ③褐色 ④胴部	椎円押型文	密な横位凹輪施文。	押型文系
22	①砂粒少 ②良好 ③暗褐色 ④胴部	椎円押型文	密な横位凹輪施文。	押型文系
23	①砂粒少 ②良好 ③赤褐色 ④胴部	椎円押型文	横位凹輪施文。	押型文系
24	①砂粒少 ②良好 ③赤褐色 ④胴部	椎円押型文	横位凹輪施文。	押型文系
25	①砂粒多 ②良好 ③赤褐色 ④胴部	椎円押型文	密な横位凹輪施文。	押型文系
26	①大粒の砂粒多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈紋・片斜腹輪圧痕	波状口縁。口唇部内側ざ状。口唇部に複数横位集合沈輪帶に直線文を施した断面状は眞文を施す。内外面研磨。	田戸下層
27	①大粒の砂粒多 ②良好 ③赤褐色 ④胴部	沈紋・片斜腹輪圧痕	波状口縁に片斜腹輪圧痕文を先底施文。内外面に人字形な撫で溝。	田戸下層
28	①砂粒少 ②良好 ③暗褐色 ④胴部	沈紋・片斜腹輪圧痕	対角導文式の施文であろう。口縁内に眞文を施す。	田戸下層
29	①砂粒多 ②良好 ③灰褐色 ④口縁部	沈紋	口縁部に横位集合沈輪帶、内外面研磨。	田戸下層
30	①砂粒多 ②良好 ③黄褐色 ④胴部	沈紋・片斜腹輪圧痕	沈輪帶に正規文を充満。内外面研磨。	田戸下層
31	①砂粒少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈紋	口縁部外周削ぎ状。口唇部に複数集合沈輪帶。内外面研磨。	田戸下層
32	①砂粒、石片少 ②良好 ③赤褐色 ④胴部	沈紋	横位集合施文。内外面研磨。	田戸下層
33	①砂粒、石片少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈紋	横位集合施文。内外面研磨。口縁部内削ぎ状。	田戸下層
34	①砂粒多 ②良好 ③灰褐色 ④胴部	沈紋、三線	横位凹合式線と斜位三線の組み合わせ。内面無地。	田戸下層
35	①砂粒、石片多 ②暗褐 ③黄褐色 ④胴部	沈紋	横位集合沈輪帶間を横位沈紋で充填。内外面研磨。	田戸下層
36	①砂粒、石片多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	沈紋	口縁部に複数集合沈輪帶を、複数沈輪で充填。片側上の波状口縁。口唇部は角張り内外面研磨。	田戸下層
37	①砂粒、石片多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	沈紋	口唇部と横位集合沈輪帶間を、複数沈輪で充填。片側部は角張り。内外面研磨。	田戸下層
38	①砂粒少 ②良好 ③黒褐色 ④胴部 ・口縁部	横位凹合式線と複数三線の組み合わせ。内外面研磨。	田戸下層	

表-11 造構外出土土器観察表 3

番号	①軸上 ②施皮 ③色第 ④底存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
39	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	織沈縞、刺突、凹縞、刻み、条痕文	口唇部文様帶の上位を斜交文と伴う凹縞で飾し、その間に複数の抜き穴を穿孔して複数枚の文様帶を構成。文様帯下の内面側では、凹縞の直下に、剥離を許さずして、剥離を許して剥離を許している。口唇部上面には削み跡がある。表面の文様部は不明瞭となる。器手の作りで、口縁部は波状を呈す。	早期後半
40	No.39と同一個体。			早期後半
41	①砂粒多・繊維少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	織沈縞、刻み	口唇部文様帶を複数の枚の文様帶で分割し、その間に斜交文と斜交文を構成。内面ぎ状の口唇部外縁に削み跡がある。	早期後半
42	①砂粒多・繊維少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	織沈縞、刻み、打引文	No.41と同一個体。口唇部文様帶下を波状具による押引文で区画する。なお、器形は文様帶の位置部で微く変曲。	早期後半
43	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	武縞(斜状工具)、刻み	口唇部に沈縞で斜引子文を構成。内面ぎ状の口唇部外縁に削み跡がある。	早期後半
44	①砂粒少・繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	沈縞(波状二式)、刺突、(半纏竹管)、条痕文	No.39と同じ構成であるが、斜引の沈縞は下半に窓を残し、文様帯下を斜交文で区画。条痕文は口唇部外縁と口縁部に施されるが、外側文様帶は施されていない。口縁部削み跡。	早期後半
45	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈縞(斜状工具)、刺突、条痕文	口唇部に沈縞で斜引子文を構成し、文様帯下を通過する斜引文で区画。内外面には斜引の削み跡を有する。沈縞、刺突、条痕文は同一の工具であろう。	早期後半
46	①片岩粒・繊維多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	武縞(斜引半纏竹管の回転使用)、刻み	口唇部文様帶を3条の複数沈縞で分割し、その間に小さな斜引窓を区画し、一つおきに口唇部内面を細かな斜引子文で充填。内面ぎ状の口唇部に深く削み跡がある。	早期後半
47	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	沈縞(斜状工具)、条痕文	口縁部に沈縞で斜引子文を構成。口縁部と内面に構成の条痕文を施す。	早期後半
48	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈縞(斜状工具)、条痕文	No.43と同一個体。外側に横状の擦痕文を施す。	早期後半
49	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④口縁部	沈縞(塊状工具)、条痕文	口唇部に沈縞で斜引子文を構成。内面に横状の浅い条痕を斜引に施す。	早期後半
50	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②普通 ③明褐色 ④口縁部	平行沈縞(半纏竹管)	口縁部に平行沈縞で細かな斜引子文を構成。	早期後半
51	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	沈縞、刺突、条痕文	口縁部に沈縞で斜引子文を構成し、文様帯下を刺突文で区画。内面口唇部等にも数条の刺突文を施す。沈縞と刺突文は同一の工具であろう。	早期後半
52	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③灰褐色 ④口縁部	沈縞、刺突、刻み、条痕文	口唇部に沿って斜交文を施し、一端部に小区画の斜交文を施す。成株門輪の厚林で、口唇部には削み跡がある。また、内面にはうっすらと条痕文が認められる。	早期後半
53	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	沈縞、条痕文	口唇部に沈縞で斜引子文を構成。内面に横状の浅い条痕文を施す。	早期後半
54	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈縞、縞帶、条痕文	口縁部に沈縞で斜引子文を構成。文様帯下の段階で、縞帶が伴うであろう。内面に斜引の浅い条痕文を施す。	早期後半

表-12 邊構外出土土器觀察表4

番号	(1)胎土 (2)施釉 (3)色調 (4)残存	文様要素	文様構成・文様繪文・背景の特徴	備考
55	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑、刺突(半徑性竹管)、 滴状文	No.45と同じ構成。繪文具もやはり同一であろう。	早期後半
56	①砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑	No.54と同じタイプだが、条紋文は施文されない。	早期後半
57	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑(底施瓦)、刺突、滴状文	No.56と同一構成。	早期後半
58	①片岩粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑、条紋文	口縁部に沈緑で細かな斜葉子文を構成。文様帯下の斜葉子文に斜葉が並ぶ。条紋文は外側が横位、内側は縱位で施文。	早期後半
59	①片岩粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑、条紋文	口縁部に斜葉で斜葉子文を構成。文様帯下の斜葉子文に斜葉が並ぶ。外側口縁部と内側に複数の条紋文を施文。	早期後半
60	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑、条紋文、斜葉文	No.59と同一構成。外側に横位の斜葉、内側に複数の条紋文を施す。	早期後半
61	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	沈緑、刺突、斜葉、横刷	No.62と同一構成。文様帯下に刺突を伴う斜葉で区画し、内側に斜葉の斜葉。	早期後半
62	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	刺突、斜葉、横刷	No.61の斜葉。	早期後半
63	①片岩粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④体高3.5±1.5	太沈緑、円形刺突(竹管)、 刺み、条紋	1段の羅斗をもつ複数。口縁部に太沈緑で斜葉子文を構成し、各爻点に円形竹管の刺突を施す。内斜する口縁部外側と口縁部に斜めを施す。条紋文は内外側とも縦位の施文。	早期後半
63	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	太沈緑、円形刺突(竹管)、 刺み、斜葉	口縫部を横位の沈緑2~3段に分け、どちらに縱位の斜葉で分割した区间内を斜葉子文で充填し、分隔線の爻点に円形竹管の刺突を施す。また、口縁部には外側と内側に斜めを付す。	早期後半
64	①砂粒少・鐵錆少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	新沈緑、押引文(?)本半径の竹管凸面使用)、円形刺突(竹管)、 刺み、斜葉文	1段の羅斗部をもつ複数口縁部の済灰。口縫部に菱形文を構成するタイプで、内斜する口縫部の外側と内側に斜めを施す。内斜に横位の条紋、外側には横位の斜葉が認められる。	早期後半
65	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	太沈緑、円形刺突(竹管)、 刺み、斜葉、押引文(竹管凸面使用)	口縫部は菱形文を構成。三角形の区间内を竹管凸面に沿う押引文で充填し、区间内の爻点に内斜する斜葉を充填する。内斜する口縫部外側には斜めを施す。内斜に横位の条紋、外側の条紋は直線で示している。	早期後半
66	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	太沈緑、円形刺突(竹管)、 刺み、条紋、押引文(竹管凸面使用)	口縫部は菱形文を構成。三角形の区间内を竹管凸面に沿う押引文で充填し、区间内の爻点に内斜する斜葉を充填する。内斜する口縫部外側には斜めを施す。内斜に横位の条紋、外側の条紋は直線で示している。	早期後半
67	①片岩粒・砂粒多・鐵錆少 ②黄褐色 ③明褐色 ④口縁部	太沈緑、斜葉、組み(同の円形竹管を使用)	口縫部文様帶を平行する複数の沈緑で分割し、その間に斜葉子文を構成し、菱形の区间内に斜めの斜葉を充填。各爻点の爻点には円形の斜葉を施す。口縫部上面には斜めを施す。内外側に斜めを施す。	早期後半

表-13 遺構外出土土器観察表5

番号	①鉢上 ②流域 ③色調 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
69	①片岩粒・砂粒多、鐵錆少 ②良好 ③黒褐色～明褐色 ④口部跡	太沈縫、刺突、刷み（いずれも同一の円形容竹管による）、押引文	太沈縫で菱形文を構成し、三角形の区画内を斜めで充填。内斜する口沿部外縁には刷みが付く。内外面には複数の擦痕が認められる。	早期後半
70	①ナガト粘・砂粒多、鐵錆少 ②良好 ③黒褐色 ④口部部1/4	押引文（竹管凸面）、円形容突（竹管）、刷み、押引文	基本的には菱形文で構成されるが、文様は3本の平行する線位の区画で分隔される。文様にいずれも押引文で接続され、区画内は押引文で充填され、交差点には円形容竹管の側面が施され、口唇部上面には刷みが付けられ、器内面には後述の擦痕が残る。	早期後半
71	①片岩粒・砂粒多、鐵錆多 ②良好 ③黒褐色 ④口部跡	新沈縫、刺突（竹管）、刷み、捺壓、余痕文	1段の筋面をもつ複縫で、筋曲面には刷みを行う性質が付く。口縫部の文様は新沈縫による菱形文で構成され、交点や区間に沿って斜めに加えられる。外縁の一帯と内面には後述の浅い底文が施す。	早期後半
72	①片岩粒・砂粒少、鐵錆少 ②良好 ③黒褐色 ④口部跡	太沈縫、押引文（半截竹管凹面）、円形容突	全体の文様は不明。太沈縫で文様を区画し、局部は押引文で施され、交点に円形容突文が施される。内斜する口沿部外縁には刷みが付く。また、内面には余痕文がかすかに残る。	早期後半
73	①片岩粒・砂粒多、鐵錆少 ②良好 ③黒褐色 ④口部跡	太沈縫、刺突、刷み（いずれも同一の円形容竹管による）、捺壓文	文様構成、器内面等ともNo.69と同じ。	早期後半
74	①片岩粒・砂粒少、鐵錆少 ②良好 ③黒褐色 ④口部跡	円形容突、刷み、隕帶、捺壓、底面底痕文	口縫部の文様密を刷みを伴う隕帶で区画し、口縫部には横位斜縫の円形容突文を施文する。外縁に捺痕底痕が部分的に認められる以外は無文。	早期後半
75	No.78と同一個体			早期後半
76	No.78と同一個体		2段の筋曲面をもつタイプで、文様は段を抜んで2帯構成となり、下段の筋部には押引文が1列施される。	早期後半
77	No.78と同一個体			早期後半
78	①片岩粒・砂粒多、鐵錆多 ②良好 ③黒褐色 ④口部跡	押引文、刷み（同の竹管凸面使用）	1全周位の押引文で新偏下次の文様を構成。内斜する口唇部外縁に刷みが付く、上面に押引文を施す。底面は認められない。	早期後半
79	①砂粒・砂粒多、鐵錆多 ②良好 ③ 黒褐色 ④口部跡	押引文（跳状具）、刺突、刷み、捺痕	1全周位の押引文で×字状のビーチワーフを構成。口唇部之下に1本の刺突列を施し、内斜する口唇部外縁には刷みを施す。内外面には後述の擦痕が残る。	早期後半
80	①片岩・砂粒多、鐵錆多 ②良好 ③ 黒褐色 ④口部跡	平行押引文（半截竹管凹面）、太沈縫、刺突	口縫部の上位に押引文を3条平行に施し、下位には太沈縫で文様が構成される。口唇部外縁には刷みが付く。	早期後半
81	①片岩・砂粒多、鐵錆少 ②良好 ③ 黒褐色 ④口部跡	平行押引文（半截竹管凹面）、刷み、捺痕、押痕文	2～3条の押引文で×字状のモイーフを構成し、横位中央に1条の押引文を施して、文様を分留。文様下には隕帶で区画し、内斜する口唇部外縁に刷みを施す。内外面には後述の擦痕が残り、外縁は光沢を有する。	早期後半

表-14 造構出土土器観察表6

番号	①粘土 ②灰灰 ③色調 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
82	①片岩・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	平行押引文（半壺竹管四面）、刺突、刻み、条痕	No.85と同一。口唇部以下に押引文を1条差しさせ、口縁部に横扁状のモチーフを2段に施文。其他の口唇部には外縁に刻み、上縁に刺突列を施文。各文は内外両面とも施文の論文。	早期後半
83	①片岩・砂粒多・礫混少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	平行押引文（下壺竹管四面）、刻み、擦痕、条痕	手取袋の押引文で×字形のモチーフを構成。文様は横扁の押引文で分割される。口縁部外縁に刻み、外面に横扁の擦痕、内面に施文の垂直が施され、外縁は光沢を帯びる。	早期後半
84	No.82・85と同一。			早期後半
85	①片岩・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④柄把手	平行押引文（半壺竹管四面）、刺突、刻み、条痕	把手部の外縁に押引文を抵抗状に施文し、器体に施文具で窓状孔を付す。また、把手の口唇部外縁には刻みを施す。外縁に施文、内面に施文の分離が認められる。	早期後半
86	①片岩粒・砂粒多・礫混少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	平行押引文（半壺竹管四面）、刻み、擦痕	2条の平行押引文で×字状のモチーフを構成するタイプであろう。口縁部外縁に刻みが付く。内外両面には横扁の擦痕が認められる。	早期後半
87	No.86と同一。			早期後半
88	①片岩粒・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	押引文（円形竹管）、平行沈線、刻み、金魚	口縁部に横に波をもつタイプの施文。口縁部の上位に2本単位の押引文を2~3条施文し、波の底下に1条の平行沈線を横扁に施せ、波下に施文の平行沈線を等間隔に施す。平行沈線と平行波は同一の施文具であろう。口縁部外縁には刻みが付き、内面には施文の垂直が施される。なほ、文様の施文されない空白部が認められる。	早期後半
89	①片岩粒・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	平行沈線（半壺竹管四面）、刺突、条痕、金魚	11縦部と側部を、強い割合で分離する施文。口縁部に平行沈線による横扁状のモチーフとランダムに施した刺突で文様を構成する。内側する11縦部外縁に刻みを施す。外縁に施文の深い垂直を施す。	早期後半
90	①片岩粒・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	平行押引文（半壺竹管四面）、施文、条痕	No.81・83と同じタイプ。内面に施文の垂直が認められる。	早期後半
91	①片岩粒・砂粒少・礫混少 ②良好	平行沈線、刺突	No.89・98と同じタイプ。	早期後半
92	①片岩粒・砂粒多・礫混多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	太沈線、押引文、条痕	太沈線と押引文で垂直的な文様が構成される。大きく包囲する器形の深溝で、内外両面には施文の深い垂直が施される。	早期後半
93	No.89と同一。			早期後半
94	①傾斜、砕片多 ②良好 ③黒~赤褐色 ④底部1/3と側部欠損	条痕文	外縁は斜削、内面は2/3に施文→新星の条痕文を施す。内面底部付近に無数。向き合う1対の大窓状口縁と1対の小窓状口縁をもつ円筒状の深溝。口縁部は聞く圍く。	早期後半
95	①傾斜、砕片多 ②良好 ③黒~赤褐色 ④底部1/3と側部欠損	金魚文	外縁は新星施文、内面は側部施文。下縁の円筒状深溝。口縁部に刻み目。	早期後半

表-15 遺構外出土器観察表7

番号	①地土 ②焼成 ③色調 ④保存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
96	①縦條、岩片多 ②良好 ③明褐色 ④崩部下半	条纹文	外側は崩部中段と下位に横條施文、その間に縦條を複数施文し、文様を構成。内面は横條施文を主体とし、左部附近に無文。器形は安定性に欠ける小さな平底の深鉢。	早期後半
97	②縦條、岩片多 ③良好 ④明褐色 ⑤崩部下半	条纹文	内外面とも横條施文。底面にも無文。器形は側面がやや膨らむ平底の深鉢。	早期後半
98	①縦條、岩片多 ②良好 ③暗褐色 ④体基1/3	条纹文	外側斜面と上位に横條、下位に縦條、内面には段位の横條を主軸とする施文。器形は平面形が正方形の特異なもので、崩部上半が大きく開く。	早期後半
99	①横條、岩片多 ②良好 ③明褐色 ④崩部下半	条纹文	内外面とも横條施文。底面は無文。器形はNo.97と同様。	早期後半
100	①横條、岩片多 ②良好 ③明褐色 ④崩部下半	条纹文	外側斜面、内面裏文。底面にも施文有り。器形はNo.97と同様。	早期後半
101	①片岩粒多、縦條少 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文	外側に新鮮、内面に後年の各段位を施文。口縫部は未施文。	早期後半
102	①片岩粒、縦條多 ②良好 ③赤褐色 ～黒褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に横條の条痕を施文。口縫部外側は崩ぎ状。	早期後半
103	①縦條多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文	外側に横條、内面に縦條の条痕を施文。口縫部は外側崩れ。	早期後半
104	①岩片多、縦條少 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に横條の条痕を施文。若い状況の底面で、底面部口唇は平底。	早期後半
105	①縦條多 ②良好 ③黒褐色 ④口縫部	条纹文、刻文	外側に縦條の条痕をまばらに施文。内面は不明瞭。口縫部には東夷文と同一整体の削突を施文。	早期後半
106	①縦條多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に横條の条痕を施文。	早期後半
107	①片岩粒、縦條多 ②良好 ③黒褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に斜位の条痕を施すが、外側は腹でより不明瞭。底次口縫部であろう。	早期後半
108	①片岩粒、縦條少 ②良好 ③赤褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に横條の条痕を施文。口縫部は内側さかみに炎る。	早期後半
109	①片岩粒、縦條多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文	内外面に横條の条痕を施文。口縫部は内側さかみに炎る。	早期後半
110	①片岩粒多、縦條少 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	縫目、崩み目	内外面に横條施文。口縫部に崩み目。	早期後半
111	①片岩粒多、縦條多 ②良好 ③灰褐色 ④口縫部	条纹文、崩み目	内外面に横條条痕。口縫部外層に崩み目。並に比較してかなり薄い器壁。	早期後半
112	①片岩粒多、縦條多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	条纹文、崩み目	外側に横條、一基柱状の条痕。内面の条痕は不明瞭。崩れ状の崩み目を残す。内側さかみの口縫部に崩れを崩み目。	早期後半
113	①片岩粒多、縦條少 ②普通 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文、崩み目	内外面に横條条痕。口縫部に複数の明瞭な崩み目。	早期後半
114	①片岩粒多、縦條少 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	条纹文、崩み目	外側に斜位、内面に横條の条痕。口縫部に崩み目。	早期後半
115	①片岩粒多、縦條少 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	横條、条痕、崩れ跡	口縫部と四脚を横條で施文し、口縫部に横條施文、脚部に横條条痕を施文。内面斜で、口縫部に山形の突起を伴す。	早期後半

表-16 遺構出土土器觀察表 8

番号	①脚ト ②焼成 ③内調 ④残存	文様要素	文様構成・文様証文・器形の特徴	備考
116	①片岩紋、織模多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	朱痕文、墨痕、別み目	口縁部と脚部の間に太陰窓。内外面に巾の広い条痕を焼成に施文。口縁部外端に削み目。	早朝後半
117	①片岩紋、織模多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	条痕文	外面に條痕の複数状条痕。内面側で、口縁部は内側状。	早朝後半
118	①片岩紋、織模多 ②良好 ③黄褐色 ④口～脚部1/3	条痕文、沈線文、旋書き、削み目	幅く内渦しながら間く渦跡。口縁部と脚部の間に太陰窓で区画。内外は巾の広い条痕を焼成に施文。口縁部外端に削み目を加えて、一部に沈線による斜彎字文を施文。内削ぎ状の口部外端に削み目。	早朝後半
119	①砂粒、織模少 ②普通 ③黄褐色 ④口縁部	朱痕文	内外面に焼成の条痕を施文後、撫で。口縁部内面が光。	早朝後半
120	①片岩紋、織模多 ②良好 ③黄褐色 ④脚部	朱痕文	内外面に巾の広い条痕を焼成に施文後、外面に撫でを加えて表面を滑潤す。	早朝後半
121	①片岩紋、織模多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	朱痕文	内外面に渦状の条痕。	早朝後半
122	①片岩紋、織模多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	朱痕文	外面のみに巾の広い条痕を焼成に施文。口縁部は鋸く内凹。	早朝後半
123	①片岩紋、織模多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	朱痕文	No.122と同一側面。内面に渦状の条痕を残す。	早朝後半
124	①片岩紋、織模多 ②良好 ③黄褐色 ④脚部	朱痕文	内外面に巾の広い条痕を焼成に施文後、外面は撫でを加えて整頓す。	早朝後半
125	①片岩紋、織模多 ②良好 ③明褐色 ④脚部	朱痕文	内外面撫で。122と同一側面。	早朝後半
126	①片岩紋、織模多 ②良好 ③褐～明褐色 (0) 体部 1/2、底部欠損	絶条体注痕文、朱痕文	口縁部に焼成、脚部に斜彎の条痕を施し、口縁部に斜彎の条痕と注痕文を等間隔に施文し、その下端を焼成の間に注痕文で区画。口縁部上端にも斜彎条痕を施す。内面には朱痕を焼成、旋窓部に施す。旋窓部は円錐状の筆跡で、口縁部には対応する一対の大さな山形状突起が付くことなく、内面には作成時の顧観を示す5~6cmの幅の彫ざ目が確認できる。外端にも平凸有り。	早朝後半 口縁部に1箇の旋窓孔
127	①片岩紋、織模多 ②良好 ③褐～明褐色 ④体部	新条体注痕文、朱痕文	No.126のもう一方の山形状突起部。	早朝後半
128	No.124と同一側面			早朝後半
129	①片岩紋、織模少 ②良好 ③墨褐	新条体注痕文、朱痕文	No.124と同一側面。	早朝後半
130	①片岩紋、織模多 ②良好 ③明褐色 ④脚部上半大形破片	絶条体注痕文、朱痕文、旋窓	文様焼成や朱痕文の施文はNo.121と同様だが、口縁部文様下部を陰窓で区画して、焼成の注痕文の施文は旋窓部分まで及んでいたため、旋窓は不明瞭。	早朝後半
131	①片岩紋、織模少 ②良好 ③褐色 ④脚部上半大形破片	絶条体注痕文、朱痕文、旋窓	口縁部に焼成、脚部に斜彎の条痕を施し、口縁部に斜彎の条痕と注痕文を等間隔に施文し、その下端を焼成の間に注痕文で区画して文様を焼成。口縁部には削み目をあけて焼成文による削み目を施文しており、一見No.126と同様のよう見える。内面は焼成の旋窓。旋窓は直線的に開く平純な旋窓。	早朝後半

表一七 遺構外出土土器観察表 9

番号	①粘土 ②焼成 ③色調 ④焼度	文様要素	支撑構成・文様施文・跡形の特徴	参考
132	①片岩粒、焼度多 ②良好 ③黄褐色 ④焼部上半大形被片	斜条体花瓶文、条文、焼帯	文様構成や条文の施文はNo.131と同様だが、口部裏文部帯下に焼帶で区隔しておらず、焼帯の内側文の施文は胫部部分まで及んでいるため、胫部は不明瞭。	早期後半
133	①片岩粒、焼度多 ②良好 ③明褐色 ④焼部上半大形被片	斜条体花瓶文、条文、焼帯	文様構成や条文の施文はNo.131と同様だが、口部裏文部帯下に焼帶で区隔しており、焼帯の内側文の施文は胫部部分まで及んでいるため、胫部は不明瞭。	早期後半
134	①片岩粒、焼度多 ②良好 ③明褐色 ④焼部	斜条体花瓶文、条文	口部裏に斜位の新条体花瓶文を胫部に施分し、下部を焼帯の間に花瓶文で区隔。条文文は内外面とも焼帯に施されている。	早期後半
135	①片岩粒多、焼度多 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	文様構成はNo.138と同様だが、内部の施文はない。条文文は内外面とも新條文だが、内側の施文は少ないので、口部に施文が付く事、欠失。	早期後半
136	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文、焼帯	口部裏に斜位の新条体花瓶文を施文し、下部に焼帯文を施せば焼帯間に施す。文様部の胫部には焼帯による。条文の条文文は内外面とも焼帯の施文。	早期後半
137	①片岩粒多、焼度多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文、焼帯	口縁部と胫部を焼帯で区隔し、口縁部に斜位の新条体花瓶文を胫部間に施す。口縁部上面にも焼帯文が施される。条文文は外側が焼帯、内側は斜位の施文。	早期後半
138	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	口縁部に斜位の新条体花瓶文を施して下端を焼帯の間に花瓶文で区隔。また、口縁部上面と口縁部内面にも焼帯文が斜位に施文される。条文文は内外面とも焼帯の施文。	早期後半
139	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	No.142と同じ構成。条文文は不明瞭。口縁部には小焼帯が付く。	早期後半
140	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文、焼帯	基本的な構成はNo.137と同じだが、胫部上位に焼帯に付いて斜位の胫部花瓶文が施される。条文文は内外面とも焼帯の施文。	早期後半
141	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	斜条体花瓶文の構成はNo.134と同じ。条文文は外側が焼帯、外側は焼帯だけはほとんど焼文ではない。波状口縁のタイプであろう。	早期後半
142	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	口縁部に斜位の花瓶文を施す。内面には2条並列の花瓶文で胫部文を構成。口縁部上面にも焼帯文が付く。条文文は内外面とも焼帯。	早期後半
143	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	口縁部に焼帯の花瓶文を施す。口縁部上面にも焼帯文が付く。条文文は内外面とも焼帯。	早期後半
144	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	口縁部に斜位の花瓶文を施す。口縁部上面にも焼帯文が付く。条文文は内側が焼帯に付く。波状口縁のタイプで、波頭部は欠失。	早期後半
145	①片岩粒多、焼度少 ②良好 ③黄褐色 ④口縁部	斜条体花瓶文、条文	口縁部と口縁部上面に斜位の花瓶文を施す。条文文は内外面とも焼帯施文。	早期後半

表-18 遺構外出土土器観察表10

番号	①地土 ②模倣 ③地調 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・着形の特徴	備考
146	①片岩较多、模様少 ②良好 ③明褐色 ④体部上半約1/4	縦条体状文、条痕文	口縁部に複数の印加跡を有し施文し、下端に施文文を施文して縫を形成。文縫沿下の区画を明確にしている。口縫部上面にも四角印文を施す。条痕文は内外面ともに斜一斜位。口縫部には突起が付く。	早期後半
147	①片岩较多、模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.142と同じ構成。	早期後半
148	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.142と同じ構成。No.142と同じ構成だが、口縫部の直面文は斜位の直面文。口縫部には突起が付く。	早期後半
149	①片岩较多、模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.145と同じ構成。	早期後半
150	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.148と同じ構成。縦条体状文の1段間。	早期後半
151	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.153と同じ構成であろう。	早期後半
152	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.143と同じ構成。口縫部には突起が付く。	早期後半
153	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	口縫部に直面文で羽状文を施成し、下端に同直面文を斜位に；条縫させて区画。口縫部上面にも直面文を施文。条痕文は外側に斜位施文で、内面には施文されない。	早期後半
154	①片岩较少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	口縫部に直面文で羽状文を構成するタイプ。口縫部には突出した縫による割れが付く。条痕文は斜位～斜位。口縫部は小波状を呈す。	早期後半
155	①片岩较少、模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.150と同じ構成。条痕文は外側が斜位。内面は横位に施文。	早期後半
156	①片岩较少、模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.150と同じ構成。外側には横位の直面文（不明瞭）と条痕文を施文。内面は直面。	早期後半
157	①片岩较少、模様少、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.153と同じ構成。直面文は内外面とも横位。口縫部には山形の小窓沿が付く。	早期後半
158	①片岩较少、模様多、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.154と同じ構成。	早期後半
159	①片岩较少、模様多、模様多 ②普通 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文、縦帶	No.160と同じ構成。条痕文は内外面とも横位の施文。	早期後半
160	①片岩较少、模様少、模様多 ②普通 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文、縦帶	口縫部と縫部を長い捻条で廻し、口縫部に施文文で羽状文を構成。口縫部上面にも同直面文を施文。条痕文は要箇が荒れていて不明。	早期後半
161	①片岩较少、模様少、模様多 ②普通 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文、縦帶	No.160と同じ構成。条痕文は外側が横位。内面は不明。	早期後半
162	①片岩较少、模様多、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	No.160と同じ構成。条痕文は外側が横位の施文。内面はほとんど施文されない。	早期後半
163	①片岩较少、模様多、模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縫部	縦条体状文、条痕文	肥厚する口縫部に、条痕文で羽状文を構成。口縫部上面にも直面文を施文。条痕文は外側が横位。内面が斜位の施文。肥厚口縫のタイプで、縫部との間に段をもつ。	早期後半

表-19 造構外出土器観察表11

番号	①船上 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素	文様模成・文様施文・跡形の特徴	備考
164	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	No.163と同じタイプ。条板文は不明、内面は焼付施文。	早期後半
165	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	No.163と同じタイプ。条板文は外側が焼付、内面は僅く斜斜の施文。	早期後半
166	①片岩粒・砂粒少・繊維多 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	No.163と同じ模成であろう。全痕文は内外面とも傾斜の施文。	早期後半
167	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②普通 ③褐色・黒褐色 ④削断大形破片	縦条体状痕文、全痕文	No.163と同じ模成であろう。全痕文は外側上半と内面が焼付、外側下部は焼化施文。	早期後半
168	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	基本的文様模成はNo.163と同じだが、口縁部内面にも全痕文の施文が一部及んでいる。平縁で口唇部は角状。	早期後半
169	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	No.163と同じタイプ。全痕文は外側が焼付、内面は傾斜の施文。	早期後半
170	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②普通 ③褐色 ④口縁部	縦条体状痕文、全痕文	口縁部に新規の全痕文を等間隔に施文。口縁部にも焼付痕文が施される。全痕文は外側が焼付、内面はほとんど施されない。	早期後半
171	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②普通 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	No.164と同じ焼成。口縁部にも焼痕文を施文。全痕文は内外面とも焼付の施文。	早期後半
172	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④体部上半1/3	縦条体状痕文、全痕文	LJ縫部に丘頂文で焼痕状文を模成し、文様下を2条の横條状痕文で区画。LJ縫部上部に右側正痕文と左痕文。全痕文は外側が焼付、内面は口縁部が焼付、胴部は焼付に施文。平縁の漆面。	早期後半
173	①片岩粒・砂粒少・繊維少 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文	口縁部に、斜行する丘頂文をまばらに施文。LJ縫部の施文ではない。外面に複数の丘頂状の痕跡文を施すが、内面は施されない。	早期後半
174	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	縦条体状痕文、全痕文、焼付	口縁部と胴部を舟型で区画し、口縁部に焼痕文で焼痕状文を模成。全痕文は内外面とも焼付施文。	早期後半
175	①片岩粒・砂粒多・繊維多 ②良好 ③褐色 ④体部上半1/4	縦条体状痕文、全痕文	口縁部の1/4全半位の芯板文で焼痕状文を模成。文様下の1/4は1条の横條丘頂文で区画。内側が焼付の施文にも焼痕状文を施文。内外面に斜行の複数の丘頂状の痕跡文を施すが、内面は全痕文が少なく、かなりランダム。波状口縁の漆面。	早期後半
176	①片岩粒・砂粒少・繊維少 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	新条件状痕文、全痕文、LJ縫部	No.170と同じ焼成。	早期後半
177	①片岩粒・砂粒少・繊維少 ②普通 ③褐色 ④LJ縫部	新条件状痕文、全痕文	No.171と同じ模成。	早期後半
178	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	新条件状痕文、全痕文、LJ縫部	No.172と同じ模成だが、LJ縫部の割みは施されない。全痕文は内外面とも焼付施文。	早期後半
179	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④LJ縫部	新条件状痕文、全痕文、LJ縫部	LJ縫部と胴部を舟型で区画し、さらに焼痕の太痕文でLJ縫部を分離し、文様下内を所要文による波状V字状文で作成。LJ縫部にも焼痕文による割み目が付けられる。また、内側が焼付の口縁部にも焼痕文を施文。全痕文は内外面とも焼付の施文。内面には焼痕状の凹凸が現る。半縁の深縁で、文様下を分割するLJ縫部は、口縁部上で小突起となる。	早期後半
180	①片岩粒・砂粒多・繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	新条件状痕文、全痕文、LJ縫部	いずれもNo.179と同じ模成と思われるが、LJ縫部文様下の割みが狭く、LJ縫文の施文はかなり乱れている。	早期後半

表-20 道構出土土器觀察表12

番号	①形状 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素	文様構成・文様施え・器形の特徴	備考
181	①片岩粒・砂粒多・模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	輪廓体压痕文、条痕文、太陰窓	いずれもNo.179と同じ構成と思われるが、口縁部文様部の幅が狭く、江戸文の後文はかなり乱れている。	早期後半
182	①片岩粒・砂粒多・模様少 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	輪廓体压痕文、条痕文、太陰窓	いずれもNo.179と同じ構成と思われるが、口縁部文様部の幅が狭く、江戸文の後文はかなり乱れている。	早期後半
183	①片岩粒・砂粒多・模様少 ②良好 ③褐色 ④肩部	輪廓体压痕文、条痕文、太陰窓	No.179と同じ構成。条痕文は外側肩部上半と内面が焼けた旋文。外側肩部下半は旋文の旋文。	早期後半
184	①片岩粒・砂粒少・模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	輪廓压痕（波状片）、輪廓体压痕文、刷毛目全表面	口縁部に、輪廓の凹凸で斜削子文を形成し、文様下を走る絞文を施す模様。口縁部にも開拓文様が施される。刷毛目全表面は、外側は直線、内側は斜削の旋文。なお、口縁部には山形次の小尖端が付く。	早期後半
185	No.184と同一個体。			早期後半
186	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	輪廓凹凸（波状片）、輪廓体压痕文、刷毛目全表面	No.184と同じタイプだが、口縁部の斜削子文の他として、輪廓体压痕文を輪廓裏面に施しており、口縁部下を区切る斜削子文は1条となっている。	早期後半
187	No.184と同一個体。			早期後半
188	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③明褐色 ④口縁部	輪廓凹凸（波状片）、輪廓体压痕文、刷毛目全表面	No.184と同じタイプ。	早期後半
189	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③明褐色 ④L.I.縫隙	輪廓凹凸（波状片）、輪廓体压痕文、刷毛目全表面	口縁部に斜削の輪廓体压痕文を零断続に施文し、その間に2条車輪の輪底凹凸で波状波状のモチーフを施す。文様下は1条の輪底付近文で区切り、口縁部にも同様文様を施す。なお、口縁部は波状波状を呈す。	早期後半
190	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②普通 ③明褐色 ④口縁部	輪廓体压痕文、条痕文、太陰窓	No.179と同じ構成だが、太陰窓の刻みが2本卓位の半周斜面上による斜削で施されている。条痕文は内外面とも横位の旋文。	早期後半
191	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②普通 ③明褐色 ④口縁部	平行斜引文、輪廓体压痕文	口縁部に、斜行する平行斜引文を等間隔に施文し、その間に輪廓体压痕文を施す。口縁部には内側窓が付くであろう。	早期後半
192	①片岩粒・砂粒多・模様少 ②良好 ③褐色 ④口縁部	刻文、条痕、刷毛目全表面、輪廓体压痕文	口縁部に手描き手彫竹籠を亞百合花らせたような豪華な模様を施文し、その間を押引斜削で充填。口縁部には輪廓体压痕文を施す。刷毛目全表面は外側が焼け、内面は焼けた旋文。	早期後半
193	①片岩粒・砂粒多・模様少 ②普通 ③明褐色 ④L.I.縫隙	平行斜引文、輪廓体压痕文	No.191と同じ構成。	早期後半
194	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③褐色 ④L.I.縫隙	輪廓体压痕文、刻文、刷毛目全表面	口縁部を輪廓体压痕文による波状のモチーフと斜削で構成し、文様下を輪底波状で区切。口縁部にも同様文様を施す。刷毛目全表面は外側は焼け、内面は焼けた旋文。	早期後半
195	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③褐色 ④体部1/2	平行斜引文（半周斜削凹面）、輪廓体压痕文、条痕文	4卓位の波状モチの複数の溝跡で、平面を呈すが、完全さはなく自己立しない。内外面とも輪底の曲率が施されるが、外側では一端に斜削が斜位の部分があり、口縁部の一端にのみ平行斜引文による波状子文が施文されている。また、口縁部と末部の一端に輪廓体压痕文の旋文が認められる。	早期後半
196	①片岩粒・砂粒多・模様多 ②良好 ③褐色 ④体部1/4	輪廓体压痕文、刻文（半周斜削）、刷毛目全表面（後縁体か？）	單純な円筒状の溝跡で、口縁部には小尖端が付く。口縁部に輪廓体压痕文を複化等間隔に施文し、文様下を斜削を施した長い旋筋で区切。口縁部にも同様文様が施される。刷毛目全表面は、内外面とも横位・斜位旋文。	早期後半

表-21 造構外出土土器観察表13

番号	①灰土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様背景	文様構成・文様構成・器形の特徴	備考
197	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②普通 ③黄褐色 ④全体1/3	平行波線(半截竹管凹面)、 縦条作成模様、余白文	平行の單純な模様。口縁部に平行波線で側面 秋葉文が施成し、文様部下を1文字の余白仕上げ で区画。口縁部内面にも同正角文を施文。 余白文は外側のみに施され内側の波線。	早期後半
198	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③褐色 ④開口下平欠失	沈線、押引文、縦条作成模 文、余白文	縦やかに内面しながらく模様。1部位の波状凸起 で、波状の内面に小波状器が付く。口縁部の文様帶下 は1余白の余白模様で区画され、口縁部には逆 で斜板子文が施成されるが、波状の縁の1部位にが りけ底子文と平行する押引文を施す。また、口部上面 に斜板子文が施成される。また、口部上面 には斜板子文が施文される。余白文は内面が優 先、外側は横模様の筋文模様で、縦模様の波線を加えている。	早期後半
199	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④全体1/3	平行押引文(半截竹管凹面)、 縦条作成模様、刷毛 目余白	内面次の深溝で、口縁部に小突起が付く。口縁 部に複数の平行押引文を施し、波状下を1字 の開口引文で区画。口縁部内面には複数の縦 条作成模様を充填模様し、口唇部にも同圧痕文 を施す。刷毛目余白は内外側とも斜位の施文。	早期後半
200	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縫跡	押引文(半截竹管凹面)、 縦条作成模様、余白	本物的模様はNo.199と同じだが、平行押引文は1本 基底の押引文になり内面の縦条作成模様は施られない。	早期後半
201	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③褐色 ④口縫跡	押引文(半截竹管凹面)、 縦条作成模様、余白	口縫部に山形の小突起が付く。口縫部の文様帶 基底はNo.199と同じで、口縫部には既述の斜板子文 が施されるが、内面の施文はない。刷毛目余白 は内面側とも斜位の施文。	早期後半
202	No.204と同一個体。			早期後半
203	No.204と同一個体。			早期後半
204	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色～黒褐色 ④口縫跡	平行押引文(半截竹管凹面)、 縦条作成模様、刷毛目余白	No.199と同じタイプで、全く同じ構成。	早期後半
205	No.201と同一個体。			早期後半
206	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	押引文、沈線、刻み、刷毛 目余白	押引文で円窓状あるいは圓筒状の文様を施さ、 縦縫に分けて複数の沈線が施される。口唇部には斜 め付く。刷毛目余白は外側のみ縦位に施文さ れる。内面に凹凸を多く持つ。	早期後半
207	①砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	幅広凹線(1/4截竹管)、 余白	口縫部に幅広凹線で斜板子文を施成。外側の ふたは斜位の施文。	早朝後半
208	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	平行押引文(半截竹管凹面)、刷毛目余白	口縫部に平行押引文で斜板文を施成。刷毛目 余白は内外側とも横位の施文。	中期後半
209	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	平行押引文(半截竹管凹面)、刷毛目余白	No.208と同じ構成。刷毛目余白も同様。	早朝後半
210	No.206と同一個体。			中期後半
211	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	幅広凹線(1/4截竹管)、 押引文、沈線、刷毛目余白	口縫部に斜板子文で斜板状のくチワを施成。文様帶下を区画する波状上と口唇部には押 引文を施す。刷毛目余白は外側のみに施位の施文。	早朝後半
212	No.211と同一個体。			早朝後半
213	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫跡	沈線、押引、刷毛目余白	口縫部下面に斜板列を施し、口縫部に2~4条の 波状で斜板のくチワを施成。刷毛目余白は外側 のみに斜板の施文。口縫部には低い小突起が付く。	早朝後半

表-22 通構出土土器觀察表14

番号	①漁土 ②板底 ③色調 ④残存	文様要素	文様構成・文様款式・意匠の考察	備考
214	No.213と同一個体。			早期後半
215	①砂粒多、繊維多 ②青油 ③褐色 ④口縁部	幅広西振（1/4 織竹管）	口縁部に幅広西振で斜構子文を構成。	中期後半
216	①砂粒多、繊維多 ②良好 ③褐色 ④口縁部	刺突、筋み、刷毛目余張、 余張	口縁部下に斜構子文を構成し、斜構子文部に筋みを施す。刷毛目余張は外側のみに積位に施す。内側には余張が少くに施る。	早期後半
217	①砂粒多、繊維多 ②青油 ③黒褐色 ④LJ縫隙	幅広門縫（端状具）、円筒 (圓筒狀)、条痕	口縁部に幅広西振で斜構子文を構成し、文様帶下に斜構子文の凹部に延長。余張は内外両とも横位の施文。	早期後半
218	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③黒褐色 ④口縁部	幅広門縫（端状具）、条痕	口縁部に物凹凸で斜構子のモチーフを構成。余張は内外両とも横位施文。	中期後半
219	①砂粒多、繊維多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫～縫隙	押引文（1/4 織竹管）、腹 部、条痕	口縁部に押引文で斜構子のモチーフを構成し、文様帶下を覆する。各文式は外側のみに横位施文。	早期後半
220	①砂粒少、繊維多 ②良好 ③黒褐色 ④口縁部	条痕、筋み、条痕	口縁部に余張の沈痕で斜構子のモチーフを構成するタイプ。外側のLJ縫隙部に筋みを施す。条痕文は内外両とも横位の施文。	早期後半
221	No.222と同一個体。			早期後半
222	①片岩粒・砂粒少、繊維多 ②良好 ③黒褐色 ④口縁部	刺突（半縮竹管）、筋み、 余張、刷毛目余張	口縁部と斜構子を低い位置で区別し、口縁部下に1条の斜構子を施す。口縁部上面に筋みが付く。刷毛目余張は、外側のみに横位の施文。	中期後半
223	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③黒褐色 ④口縫部	押引文（端状具）、筋み	口縫部の筋条部端部で、口縫部内外側に押引文で文式が施され、口縫部にも同押引文が施される。	中期後半
224	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③黒褐色 ④作縫上半1/4	刺突、条痕	口縫部が深く外反する部分で、口縫部には上面が平坦な尖突が4箇所くらい。上面形は橢円形を呈する可能性が高い。LJ縫隙には2箇所ずつ押引文と斜構子で充填し、文様帶下を斜構子の斜構子列で区隔。外縫部にも同押引文が付く。刷毛目余張は外側と口縫部内側が横位、口縫部内側は縱位の施文。	中期後半
225	①片岩粒・砂粒多、繊維多 ②普通 ③黒褐色 ④口縫部	平行押引文、腹部、刷毛目 余張	口縫部が大きく外反する部分。口縫部に1～2条の平行押引文で斜構子のモチーフを構成し、文様帶下を斜構子で区隔。口縫部にも同押引文が付く。刷毛目余張は内外両ともランダムに施される。	早期後半
226	No.225と同一個体。			早期後半
227	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③褐色 ④口縫部	平行押引文（半縮竹管 面）、腹部、刷毛目余張	口縫部に、縦位の平行押引文を充填施文し、文様帶下を斜構子で区隔。刷毛目余張は内外両とも横位の施文。	中期後半
228	①片岩粒・砂粒多、繊維少 ②良好 ③黒褐色 ④口縫部	押引文、筋み、刷毛目余張 (いずれも同一の施文状況)	口縫部に、段れ方向の押引文を充填施文し、文様帶下を斜構子で区隔。口縫部に、斜構子文で筋みを施す。刷毛目余張は内外両とも横位の施文。	中期後半
229	No.228と同一個体。			早期後半
230	No.228と同一個体。			中期後半
231	No.228と同一個体。			早期後半
232	No.228と同一個体。			中期後半

表-23 遺構外出土器觀察表15

番号	①胎土 ②施釉 ③色調 ④残存	文様要素	文様構成・文様論文・器形の特徴	備考
Z33	①片岩紋・砂紋多・模様少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)、刷毛口全周	No.234と同じ構成。刷毛口全周は外縁が複数の施文。	早期後半
Z34	①片岩紋・砂紋少・模様少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文、施文、刷み(同一の半截竹管四面使用)	口唇部直下に二条の刺突羽を施し、その下に複数方向の平行押引文を零距離に施文。内側する口唇部外縁に刷みを施す。	早期後半
Z35	①片岩紋・砂紋多・模様少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	押引斜割文(半截竹管四面)、刷み	口唇部の構成はNo.109と同じ。口唇部の刷みは上縁と外縁の文様方向をえて、欠刻状態に施成。	早期後半
Z36	①片岩紋・砂紋多・模様多 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)、条文	LJ縫隙の文様構成はNo.99と同じ。条文は内外面とも施文の状況。	早期後半
Z37	①片岩紋・砂紋多・模様少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部～脚部	押引文(偏垂状異)、刷毛部、刷毛口全周	口唇部下に1段の施文をもつ変形・文様構成はNo.233・235と同じタイプであるが、口縫部上には押注文で新規丁文が施されているようだ。ほか、腹部に施された便使の押引文の他にも、複数方向の施文が施されている。刷毛口全周は口唇部のみに施文の施文。	早期後半
Z38	①片岩紋・砂紋多・模様多 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管2本)、施文、刷み	No.227と同じタイプで、文様下を隔壁で区画し、隔壁上にも平行押引文を施す。外縁には施文の施文が残る。	早期後半
Z39	①片岩紋・砂紋多・模様多 ②普通 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)、刷み、施文	LJ縫隙の文様構成はNo.159と同じタイプだが、LJ縫隙はかなり歪れている。LJ縫隙下部に刷みが施され、条文は外縁が施文、内面は斜位の施文。	早期後半
Z40	①片岩紋・砂紋多・模様多 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)、条文	LJ縫隙の文様構成はNo.196と同じ。条文は外縁のみ斜位の施文。	早期後半
Z41	①砂紋少・模様少 ②良好 ③内折角 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)	LJ縫隙の文様はNo.169と同じ構成。	早期後半
Z42	①片岩紋・砂紋多・模様少 ②良好 ③青褐色 ④口縁部	平行押引文(半截竹管四面)、施文、押引文、施文、刷み(以上は同一の内折角部)、隔壁、隔壁	口縫隙下に二段の施文をもつ複数で、隔壁を張り施した隔壁の隔壁で文様を分類。口縫部には沈没とその周側の押引文をセッテで、隔壁に前面をあけて施文し、口唇部には刷みを施す。隔壁は口縫隙外縁は斜位、隔壁と内面は斜位の施文。	早期後半
Z43	①片岩・石英多・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	平底の漆跡、削下部に施文の条文施文。底部糞も同一下系による施文。	早期後半
Z44	①石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	平底の漆跡、削下部に施文の条文施文。内面にも条文有り。	早期後半
Z45	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	やや大きめの平底をもつ漆跡。外縁は条文施文施設でが、内面にも条文有り。	早期後半
Z46	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	底面に細小な平底面をもって、外縁が丸みをもつ漆跡。	早期後半
Z47	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	小さな底部をもつ漆跡。外縁は綻びの条文。	早期後半
Z48	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	小さな底部をもつ小形の漆跡。外縁に細かい工具による刷毛の条文。	早期後半
Z49	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	小さな底部の歪体。外縁は復位の条文。内面にも条文有り。	早期後半
Z50	①片岩・石英・模様 ②良好 ③にぶい青色 ④底部	条文	底面より大きく四く漆跡。外縁は横位の歪体。内面にも条文有り。	早期後半

表-24 造構出土土器観察表16

番号	①粘土 ②焼成 ③赤褐色 ④残存 ⑤断面	文軸要素	文軸構成・文軸協調・藝術の特徴	備考
251	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④断面	調文（0段3条RL・LR）、 漆底	調文は菱形羽状の構成。内面には剥落が見える。	早期末～前期初頭
252	①砂粒少、焼成多 ②普通 ③赤褐色 ④断面	調文（RL・LR）、漆底	No.251と同じ構成だが、海支帯に剥落が生じて いる。内面には剥落がある。	中期末～前期初頭
253	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④断面	調文（0段3条RL・LR）、 漆底	No.251と同じ構成。内面には剥落が見える。	中期末～前期初頭
254	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黒褐色～ 黄褐色 ④断面上半1/4	調文（LR・L）	1縦部が側面から外反する逆錐。体部に繩文LRを 配置し、輪郭に突起に突出して、菱形羽状構 成を構成したものと考えられる。口縫部の… 部に執筆絵文しの施文が認められる。内面は 無地。	早期末～前期初頭
255	①砂粒多、焼成多 ②良好 ③褐色 ④断面1/2	調文（R）、漆底、朱痕	墨筋がえみをもつ大形の深鉢で、全面に繩文 RLとLRの2種類の模様を交互に施文して、菱 形羽状模様を構成。内面は無地であるが、 一部に褐色の朱筋がかすかに残る。	早期末～前期初頭
256	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黒褐色～ 黄褐色 ④断面上半1/4	漆底、輪郭、削み、繩文 (RL・LR)	4単位後口縫の岸側を埋跡で、尖底となる であろう。口縫部に削みを施した痕跡を辿ら れ、底部に同様沿を下すまで通跡。各部位 部には2～3本の沈縫による菱形文を構成。調文 はRLとLRの2種類の原形で、菱形羽状調文を 構成。文軸の底面部分は繩文、籠革、漆底の 組。内面は無地。	早期末～前期初頭
257	No.256と同一固体（接合）。			
258	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	漆帶、削み、繩文（0段3 条、RL・LR）	No.256と同じ構成だが、比較による菱形文は施 文されない。内面は無地。	中期末～前期初頭
259	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	漆帶、削み、繩文（LR？複 数）	No.258と同じ構成だが、Z縫部の凸出りLR 模様を交互に施文しており、菱形羽状となるか 不明。内面は無地。	中期末～前期初頭
260	①砂粒少、焼成多 ②普通 ③黄褐色 ④口縫部	漆帶、削み、繩文（RL・ L）	No.258と同じ構成。内面は無地。	中期末～前期初頭
261	①砂粒少、焼成多 ②普通 ③灰褐色 ④口縫部	漆帶、削み、繩文（R2木）、繩文 (LR)、漆帶	口縫部に底層を貼り付けて肥厚させ、そこ に2～3次の漆並重層を積みに施し、底層には 繩文LRを複数に施文。四隅の側面は、漆並重 層を交互に施文（無余文）の可能性もある。内面は 無地。	中期末～前期初頭
262	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④断面上半1/5	漆帶、削み、繩文（RL・ LR）	口縫部がやや早く平鈍を深鉢で、口縫部には 山形の突起が4個付けてある。底部は尖底 と思われる。No.259と同じタイプであるが、往 返による菱形文は施されない。内面は無地。	中期末～前期初頭
263	No.258と同一固体。			中期末～前期初頭
264	No.252と同一固体。No.253と254を合 せると1/2			中期末～前期初頭
265	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④口縫部	調文（LR）	外側に繩文LRを施す。底層の端部を結んだ纏 の仕張が見られる。	中期末～前期初頭
266	①砂粒少、焼成多 ②良好 ③黄褐色 ④断面	調文（R・LR）	無縫Rの底面部にLRが一箇重複して施文され ている。	中期末～前期初頭

表-25 遺構外出土器観察表17

番号	①輪上 ②施文 ③色調 ④模様	文様要素	文様構成・文様種文・蓄形の特徴	著者
287	①砂紋少、楕椎多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (0段3条RL-LR)	複文の構成はNo.281と同じだが、下段の旗文方向が反対になっている。左側の旗文方向が反対になっている。左側の旗文方向が反対になっている。左側の旗文方向が反対になっている。左側の旗文方向が反対になっている。	早期末～前期初頭
288	①砂紋少、楕椎多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (RL-LR)	複文RLとLRを交叉に配置施文として、複数枚の施文を構成している。この施文手法は尖底土器の施文付近に特徴的な手法である。内面は無地で閑散。	早期末～前期初頭
289	①砂紋少、楕椎多 ②普通 ③黄褐色 ④網目	施文 (RL-LR)	尖底部近傍で施文RLの模倣施文を主体に、一部にRLの施文が認められる。	早期末～前期初頭
290	①砂紋少、楕椎多 ②普通 ③黄褐色 ④網目	施文 (RL)	複文RLを複数枚配置して、複数枚の菱形文を構成。この施文手法は尖底土器に特有な模様である。内面は無地で閑散。	早期末～前期初頭
291	①細砂较多、楕椎少 ②普通 ③明褐色 ④網目付近	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
292	①細砂较多、楕椎少 ②普通 ③明褐色 ④網目付近	施文 (L幅2本単位)	基本的にこれはNo.271と同様であろう。内面無地。	早期末～前期初頭
293	①細砂较多、楕椎少 ②普通 ③赤褐色 ④網目下半	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
294	①細砂较多、楕椎少 ②普通 ③赤褐色 ④網目下半	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
295	①細砂较多、楕椎少 ②普通 ③赤褐色 ④網目下半	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
296	①砂紋多、楕椎少 ②良好 ③暗褐色 ④網目	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
297	①砂紋多、楕椎少 ②普通 ③赤褐色 ④網目下半	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
298	①砂紋多、楕椎少 ②普通 ③赤褐色 ④網目	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
299	①砂紋多、楕椎少 ②良好 ③赤褐色 ④網目	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
300	①砂紋多、楕椎少 ②良好 ③赤褐色 ④網目	施文 (L幅2本・R幅2本)	2種類の原体を交叉に配置施文として、複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
301	①砂紋多、楕椎少 ②良好 ③赤褐色 ④網目	施文 (R+L矢羽根状)	複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
302	①細砂多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (R+L矢羽根状)	1種類の原体を配置施文として、斜横子文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
303	①細砂多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (R+L矢羽根状)	複数の菱形文を構成。内面無地。	早期末～前期初頭
304	①細砂多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (R+L+R+L)	2種類の原体により複数の菱形文を構成。施文は對称性が認められない。内面無地。	早期末～前期初頭
305	①細砂多 ②良好 ③黄褐色 ④網目	施文 (R+L+R+L)	No.284と同一操作。	早期末～前期初頭

表-26 造構出土土器觀察表18

番号	①地土 ②赤成 ③色調 ④纹様	文様要素	文様構成・文様論文・器形の特徴	件名
266	①砂粒・軽石多 ②良好 ③褐色 ④	浮織文、円環状突起	斜面の割みが付く洋織文を横幅に沿す。口縁部には内凹状の突起が付く。	諸國b
267	①砂粒・軽石多 ②良好 ③灰白色 ④	平行沈織(半裁竹管)、織文(RL)	捲文(R)を地文に、数条の平行沈織で文様を構成。	諸國b
268	①砂粒・軽石少 ②良好 ③褐色 ④	浮織文、織文(RL)	織文RLを地文に、斜面の割みが付く浮織文で文様を構成。	諸國b
269	①砂粒・軽石少 ②良好 ③褐色 ④	浮織文、織文(RL)	No.268と同じ。	諸國b
290	①片岩斑・砂粒多 ②良好 ③黄褐色 ④	浮織文、織文(RL)	半巻の底端部分で、織文RLを地文に斜めに複数の浮織文を施された複雑な文様をもたらす。	諸國b
291	①砂粒・軽石多 ②良好 ③褐色 ④	斜筋浮織文	斜筋浮織文で文様を構成。	諸國b 加良野から東南方面か
292	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④口縁部	平行沈織(半裁竹管)、織文(L)	菱形文構成。地文有り。波状口縁。	前期諸國b
293	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④口縁部	平行沈織(半裁竹管)、織文(L)	No.292と同一個体。	前期諸國b
294	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④口縁部	平行沈織(半裁竹管)、織文(L)	No.292と同一個体。	前期諸國b
295	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④口縁部	平行沈織(半裁竹管)、織文(L)	No.292と同一個体。	前期諸國b
296	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④口縁部	平行沈織(半裁竹管)、織文(L)	No.292と同一個体。	前期諸國b
297	①砂粒少 ②普通 ③黄褐色 ④	平行沈織(半裁竹管)	菱形文構成。	前期諸國b
298	①砂粒多 ②良好 ③暗褐色 ④崩壊	平行沈織(半裁竹管)、織文(R)	扇形沈織で菱形文を構成。地文有り。	前期諸國b
299	①石英・雲母 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④口縁部	沈織文	波状口縁の淮部。沈織による区画内に格子目文を充て。	五箇ヶ台
300	①崩壊・石英多 ②良好 ③にぶい黄褐色 ④口縁部	織文(LR)、三角印刷文	絞やかに内凹する口縁部の淮部。口縁部の外側に側文を施し、二角印刷文を模に施す。	大原ヶ台
301	①石英・雲母 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④崩壊	織文(RL)、隆脊、沈織	脛曲した口縁部の淮部。側文を地文とし、半裁竹管による断面V字形の縫合状の隆脊を施し、隆脊に平行沈織を施す。	五箇ヶ台
302	①石英・雲母 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④崩壊	隆脊、系形沈織文	脣の淮部に筋上に垂れ付けて突出部分とし、左右に弧形文を施す。	河合台2~3 No.303・304と同 個体
303	①石英・片岩・雲母 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④崩壊	熱帯、弧形沈織文	直線的に立ち上がる崩壊部の淮部。側面縫合から縫合部を除く全周には横筋による2組みを施す。	河合台2~3
304	No.303と同一個体。			河合台2~3

表-27 造模外出土器観察表19

番号	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要因	文様構成・文様施文・跡形の特徴	備考
305	①白色粘・青灰 ②良好 ③にぼい赤褐色 ④口縁~脚部	平行沈線(半弦竹箇)、捺帯	波状口縁をもつ大型で器壁の薄い深鉢。尖り気味の直頂部に胡みのある捺帯を複数に配置。残存を挟んで内丸を施す。文様帯は横様に構成。区画二重形の線路帶で、捺凹形の区画を作り、区画内に大きめの波形文を充填。大きな割込みを入れた幅広の捺帯を施し、半弦竹箇による平行沈線とコンパス文を施す。	阿正台3
306	①白色粘・石英 ②良好 ③にぼい赤褐色 ④口縁~脚部	織文(RL・LR)、捺帯、凹道	幾つかなキャラバ-形を呈する深鉢。口縁部は斜面による器底文を複数につなく区画内に構成(RL)。施文・斜筋は織文(LR)を施文とし、2本の凹道を垂下して区画し、既位施文による波形文を盛ける。	加曾利E2
307	①白色粘 ②良好 ③にぼい黄褐色 ④脚部	捺帯、条縞	大型の深鉢。肩上部に捺帯による区画沿文。肩下部に既位の全縞。	加曾利E3
308	①白色粘 ②良好 ③にぼい黄褐色 ④脚部	捺帯、全縞	大型の深鉢。肩上部に捺帯による区画沿文。肩下部に既位の条縞。	加曾利E3
309	No.313と同一製作。			
310	①白色粘 ②良好 ③にぼい黄褐色 ④口縁部	捺帯、波縞	鏡外反して開く山線部の架体。口縁部直下に波縞を施し、斜面による波風文を施す。区画内には捺縞網を充填。網部は絞文を施す。	加曾利E3
311	①白色粘 ②良好 ③にぼい赤褐色 ④口縁部	織文(RL)、凹道	波状口縁の深鉢。口縁による筋内形の区画内に既位を施す。	加曾利E3
312	①白色粘 ②良好 ③褐灰色 ④山線~脚部	無文	口縁部がやかに開く形。口縁部は肥厚し、外側につまり出す。外面は既位の捺縞網を施す。	後期
313	①褐色粘・白色粘 ②良好 ③にぼい黄褐色 ④脚部	無文	鏡・キャラバ-形の深鉢。内面施研磨、外面は割いた形で開口。	後期
314	①白色粘 ②良好 ③褐灰色 ④脚部	無文	平底の深鉢。外側は堤筋。	後期
315	①白色粘・石英 ②良好 ③褐灰色 ④口縁部	無文	腹部が緩やかに開く平底の形。内外面に丁寧な既位。	後期
316	No.313と同一製作。 ②脚部~底部			
317	①白色粘 ②良好 ③にぼい黄褐色 ④口縁部	凹道	波状口縁の鉢。口縁部下に2本の凹道を施す。	後期~晚期
318	①白色粘 ②良好 ③にぼい褐色 ④口縁~脚部	捺帯、捺縞、貼付文	4基部の波状口縁をもつ深鉢。口縁部外側に捺縞を施し、区画内を口縁部の下に捺縞でつなぎ、区画内に捺縞を施す。底底部に円形の捺付文。	高井川(安行1)
319	①白色粘 ②良好 ③褐灰色 ④口縁~脚部	捺縞、円形捺付	肩部で内傾する形。細く立ち上がる口縁部下に波縞を施し、2本の沈線による變形文を施す。交点には円形捺付文。肩部に胡みを施し、外側全縫に捺縞。	後期~晚期

## 遺構外出土石器

横川大林遺跡から出土した石器は、早期、前期、中期の時期で、早期（条痕文期）の上層に自然の変化によってもたらされた2m以上の上石流が間層として存在し、その上層に前期、中期の各時期が複合した遺跡で、出土した石器の大半は早期後半条痕文期である。この遺跡の特徴的なところは、土石流の間層によって早期と前期以降の遺物の混在がない状態で、石器の製作跡が発見されたことである。調査時の所見では、南傾斜の地形を削平し、平坦な場所を作られ、その崖には焼けたところがあり炉が在ったことが考えられ、その南側に石器がブロック状に散布し、屑石を南側の傾斜地に捨てていた状況（第94図）が観察されている。

石器は中央の斜面地から、大形剥片や自然石を素材とした石器群と小形石核から作出された剥片を素材とした石器群が存在することが判明した。大形剥片や自然石を素材とした石器は、磨石、凹石、棒状研磨器、台石、板石、石皿、チッパー様石器等と、この他にスクレイバー、石斧、石匙、石錐等がある。一方小形石核の剥片を素材にした石器は、大半が石器であり、その製作工程の各段階の未完成品と完成した石器が出土している。この他に石槍、楔形石器、削器、搔器、ノッチ、石錐、石逃等と加工のある剥片と使用痕のある剥片が多く発見されている。このため石器の記載は、大形剥片や自然石を素材とした石器群と小形石核の剥片を素材にした石器群に分けて説明することとする。

## 大形剥片や自然石を素材とした石器類（第76図～93図、図版50～57）

大形の石器は、河原等から人手した軽石を使用した磨石類、凹石と円錐や櫛を割った台石、板石、チョバ一樣石器等がある。この他に露頭や岩場等から入手して製作したと考えられる石器もある。

検出された石器は、磨石類が最も多く、断面が三角形及び四角形を示す棒状の自然石の側縁（角）に直線状の摩滅痕を持ったものと、円形や楕円形を示し偏平な自然石で、周縁には研磨痕や摩滅痕が在り、偏平な表裏面に浅い溝を持ったものがある。この他にスタンプ型石器、棒状研磨器など同種の作業をすると考えられる石器がある。

## 直線状の摩滅痕をもつ磨石（第76図～第80図）

この磨石は、楕円形や長方形等の形態で、断面が三角形及び四角形を示し、その角を使い研磨し、その結果として側縁に直線状の摩滅痕となった。そしてこの摩滅痕は1側縁のもの、2側縁のもの、3側縁のものがあり、その殆どが欠損している。そして欠損した面はシャープで、割れた後は使用していないようである。しかし、20は欠損後に周辺に摩滅痕がある。この特種な磨石の大きさは、2.5.15が円錐の状態のもので、手で握れて手頃な重量の円錐が石材として選ばれたようである。そしてこれとは別に、楕円形や長方形或いは不定形で、角を利用して直線状の摩滅痕を1側縁、2側縁と持つものがある。そしてこの磨石も欠損しているものが多く、欠損面はシャープである。

この直線状の摩滅痕をもつ磨石には次のような5種類の特徴があり、分類することができた。

- 1類 楕円形や長方形等の形態で、断面三角形で1側縁（角）に直線状の摩滅痕を持つもの（1～14）
- 2類 断面三角形で2側縁（角）に直線状の摩滅痕を持つもの（15～22）
- 3類 断面三角形で3側縁（角）に直線状の摩滅痕を持つもの（23～26）
- 4類 楕円形や長方形等の形態で、断面が四角形、不定形を示し側縁に直線状の摩滅痕を持つもの（27～41）
- 5類 不定形で、側縁に直線状の研磨痕を持つもの（42～65）

これらの磨石には、先端部に敲いたり擦ったりした跡が6, 13, 14, 18から26, 58から65に観察される。また敲いて剥落した16, 40, 41, 50がある。この他に共通して焼けた部分を持ったものが15, 23, 24, 29, 35, 46, 65で、亀裂があるものは27, 29で、火を受けて変色した25と全体が黒くなった9がある。また22, 27には小さな窪みがあり、35には皿状の窪みがある。

#### スタンプ状石器（第81図69～74、第82図75～81）

スタンプ状石器は、二つのタイプがあり、棒状のものと偏平で円形及び楕円形の形態を示すものとがあり、スタンプとなる面が平らな石器である。棒状の形態を示すものは70と71で、スタンプの部分は割って作られ、71などは割った面がまだ残されている。69, 76は偏平な形態であるが縦形にして、69はスタンプ面を割って作り出しているが、76は擦り減らしてスタンプ面を作出したものか、自然の形を利用したかである。72から75と77から81は円形、楕円形、四角形で偏平な形態で、偏平な面をスタンプ面にして、しかもその面は水平に摩滅痕が観察される。そして72から81の側縁には研磨痕がある。74は火をうけ、75, 78, 81は焼けた部分があり、81は焼けた後に研磨が行われている。また76には小さな窪みも観察される。

#### 凹石（第83図～第85図106, 107）

この石器は、円形及び楕円形のものが多く、厚みのある偏平な形態を示し、3mmから10mmの浅い窪みを有する。また浅い窪みは、皿状のもの、楕円形をしたもの、溝状になったもの等と、その窪みが単独のもの、複数有るもの、表裏にあるもの等がある。そして窪みを有した石器は、側縁に敲き跡ないし摩滅痕を有したものと、磨石に施したものとがある。その特徴ごとに記載する。円形、楕円形の磨石で窪みを持ったものは82から84, 86, 88で、82, 83は裏側に浅い窪みが在り、表側には敲かれた跡がある。84はその逆である。側縁の一部及び周縁に敲き跡ないし摩滅痕を有したものは85, 87, 89から107である。そして83の裏側が焼けている。円形、楕円形の側縁周辺に研磨痕や摩滅痕があり、浅い窪みを持ったものが多く85, 87, 89から107まである。そして窪みが表側に1カ所あるものは101, 104, 107で、窪みが表裏側に1カ所づつあるものは87, 89, 92, 102, 103である。窪みが表に数カ所で裏側に1カ所あるものは91, 95で、窪みが表裏側に数カ所あるものは94, 96, 97, 99, 100, 105, 106である。この中で97, 100, 105は浅い窪みが連なり溝状になっている。窪みが表側に1カ所で裏側に摩滅痕をもつものは85, 90, 98である。この他に93は四面に楕円形の窪みが作られている。窪みが円錐状を示すものは91, 92, 102から104で、楕円形を示すものは89, 90, 93, 94, 98, 100, 105, 106等がある。そして焼けているものが91で、焼けて火を受けているものが92で、亀裂があるものは90, 101, 103, 104で、火を受けて亀裂があるものは105は、焼かれて変色した94がある。

#### 円窓（第85図108～114）

偏平で円形、楕円形等の様々な形態を示す自然石で、108から110の円窓には側縁に摩滅痕が認められる。その他は、人為的な加工の痕跡を持たないが、焼けている部分がある。112と114は全体的に焼けでて112は亀裂があり、114は赤色の部分が観察される。

#### 棒状研磨器（第86図115～121）端部に摩滅痕のある棒状石器

この石器は、殆どのものが棒状の形態を示し、その先端部及び末端部に摩滅痕が観察されるものである。そしてこの摩滅痕には、擦り減って生じた115から121と、敲いて生じた122から129との異なったところが観

察される。115は細い棒状で、先端に3面と端末に2面の平面的な摩滅痕がある。116は細い棒状で、117は小形の円錐で、摩滅面は擦る方向の断面は曲がっているが、左右は平らな面と擦る方向と左右が平らな面の2面が観察される。また116には球状を示す部分がある。118と119も小形の円錐と細い棒状の形態で、両方とも摩滅面は擦る方向の断面は曲がっているが、左右は平らな面が観察される。120は先端部、末端部が円錐状（球状）の摩滅痕が観察される。121は棒状の自然石の先端部と末端部の側縁に摩滅の跡が観察され、使用始めの様子が伺える資料である。そして細い棒状石材の先端部や末端部に、摩滅痕が観察される石器は、石を削り溝を付けたり、擦って穴を空けたりといった作業に用いたものと考えられる。

#### 敲石（第81図67、68・第86図122～129）

この石器は、棒状で縱長偏平の形態で、石材の両端に敲いた跡が観察されるものを本類とした。67、68、123、124、126、128、129は両端に敲き跡か摩滅痕を持つ。また122と127は側面に敲き跡か摩滅痕が認められ、下端に敲き跡か摩滅痕を持っている。この他に、123、125の石器には煤けた部分が観察される。この中で125は人為的な行為は顯著ではないがハンマーの素材と思われる。そして、棒状で縱長偏平な石材の両端に打撃痕が観察されるものは、右側から剥片を取るためにハンマーと考えられる。

#### 板石・台石・砥石（第87図130～133、第88図134、135）

この石器は、自然石で平面を持った石材を用いたものと、板状に割れる石材を用いるものとがある。自然石を用いた台石は131から134で、131は断面が四角い自然石で、岡で上部となつた部分は傾斜しているがその他のは平らに研磨されている。132は側縁は大きな剥離があるが、上面は研磨され半らである。133は岡の上下に割れた面があるが偏平な自然石で、上部は中央がやや窪んでいるが平らに研磨されている。134は断面が四角形の自然石で、上面と下面を平らに研磨し、特に上面はつるつるとしていて使用していたように思える台石である。130と135は石材を板状に割っている。130は上面と下面とも研磨をしていて、上面には割った面が残されていて研磨の途中である事が伺える。135は上面は自然面で岡の中央から下部に掛けて研磨し、下面は割った状態のままである。139は梢円形でやや厚い偏平な自然石で、表面を平らに研磨している。この中で131、134、135、139は石斧を研磨する砥石ではないかと考えられる。また130は板石、132は作業台（台石）と考えられる。

#### 石皿（第88図136・第89図137、138、140）

石皿の石材は、円形、梢円形、方形を示し偏平で、自然石を用いている。136は方形で皿状に大きく窪み、上部が欠損している。137は円形で偏平な石材を用いて、上面部には浅い皿状の窪みがあり、下面部は作業台として使用した跡が観察される。138は方形の石皿で、上面部、下面部の両面に皿状の窪みがあり、使用により擦り減り薄くなつて割れた様に考えられる。140は円形で偏平な自然石の上面部に浅い皿状の窪みがあるが、岡の右側が欠損している。石皿の136、138は縄文時代前期以降のものである。

#### 有溝砥石（第90図141・142）

砂岩製で偏平で長方形と梢円形を示し、表裏に溝条の砥き面をもつ石器を本類とした。141と142は有溝砥石である。141は長方形で角が丸く偏平で、長軸に沿つて中央に表裏にU字状の溝が観察されるが、3分の1程度の現存である。石材は焼かれていて赤色で、目の荒く現代の剥落が観察される。142は細身の梢円形

1で、石質は堅めで、表面に斜めに2条の溝と裏面に長軸に沿って1条の溝が中央にある。この砥石も半分近くが欠損している。

#### 砥石（第90図143～148）

砥石は全て砂岩製で焼かれ、ほぼ方形の形態で板状を示し、平面と側面を使用している。143は方形で断面が長方形を示し、赤色で目が細かいが柔らかい。144と145は薄い石材で、下部が欠損し、表裏面と側面を使用している。特に144は表裏面に斧を研いだと思われる跡が観察される。146は台形を示し、目が細かく緻密で堅く、側縁と表は使用しているが裏面は使用していない。147は方形で、板状を示し、側面3面が斜めで、表裏面共も使用されている。148は方形で、表面は使用しているが、裏面は削ったままである。

#### チョッパー様石器（第90図149、150・第91図151～153）

偏平な自然石そのまゝのものと、割って使用した素材を用いている。149は自然石を用いたもので、断面が板状を示し、急角度の表面部分に3回の剥離と裏面に2回の剥離を行っている。150は偏平な自然石に裏面から5回の打撃を加えている。151は自然石で板状を示し、裏面から8回剥離が行われ、表面から1回剥離を行っている。152は板状を示した自然石で、裏面から数回の打撃を加えている。153は方形をした自然石で、やや板状を示し、裏面から数回の打撃を加えている。この石器を形態的にチョッパー様石器としたが、150、152、153は石核で、149、151は石斧の素材とも考えられる。

#### スクレイバー（第91図155）

スクレイバーは、剥片を素材とし打点部を上部に置き、下部に刃部を有し、刃部のみに加工を施し、器厚は薄い石器である。

#### 加工のある剥片（第91図154、156、第92図158、159、161、162）

定型石器の形態に至らない加工の段階で、154、156、158、159は剥片を素材とし、打点を上部に置いている。161、162は打点については不明であるが、自然面を片面に持っている。158、159の石器製作工程から伺える定型石器は石槍が挫剥される。

#### 使用痕がある剥片（第91図157、第92図160）

剥片を素材とし打点部を上部に置き、157は下部にスクレイバー状の剥離痕と、両側縁にノッチ的な使用痕が観察される。

#### 石斧（第92図163～168、第93図169～171）

石斧の163～168は製作途中のもので、163を除き縄文時代早期の時期である。163は未完成品で大きく取った剥離の後に小さな剥離を行っている段階でまだ後が除去されていない状態である。164、168は剥片を素材とし、片面にまだ自然面が残された製作途中の石斧である。165から167は、偏平な自然石を素材とし、側縁に小さな剥離を加えた調整段階である。石斧の169から171は小形の磨製石斧で、時期については不明である。169は頭部に剥離痕が残され、この他は全面に良く磨かれて上げの段階と思われる。170は頭部と側縁に剥離痕が観察されるが、その他の側縁から全面に研磨され、側縁の瘤を取り除けば完成である。171は刃部の

欠損で、刃部の一部に剥離痕が観察されることから研磨中に割れたものと考えられる。

#### 石匙（第93図172～175）

石匙は、剥片を素材として横長の嵌片は172、174、175で、縦長の剥片は173で、172、173は横型で、174、175は横型の石匙である。これらの石器は製作段階のもので、174が工程的には完成に近いものと考えられる。

#### 石錐（第93図176）

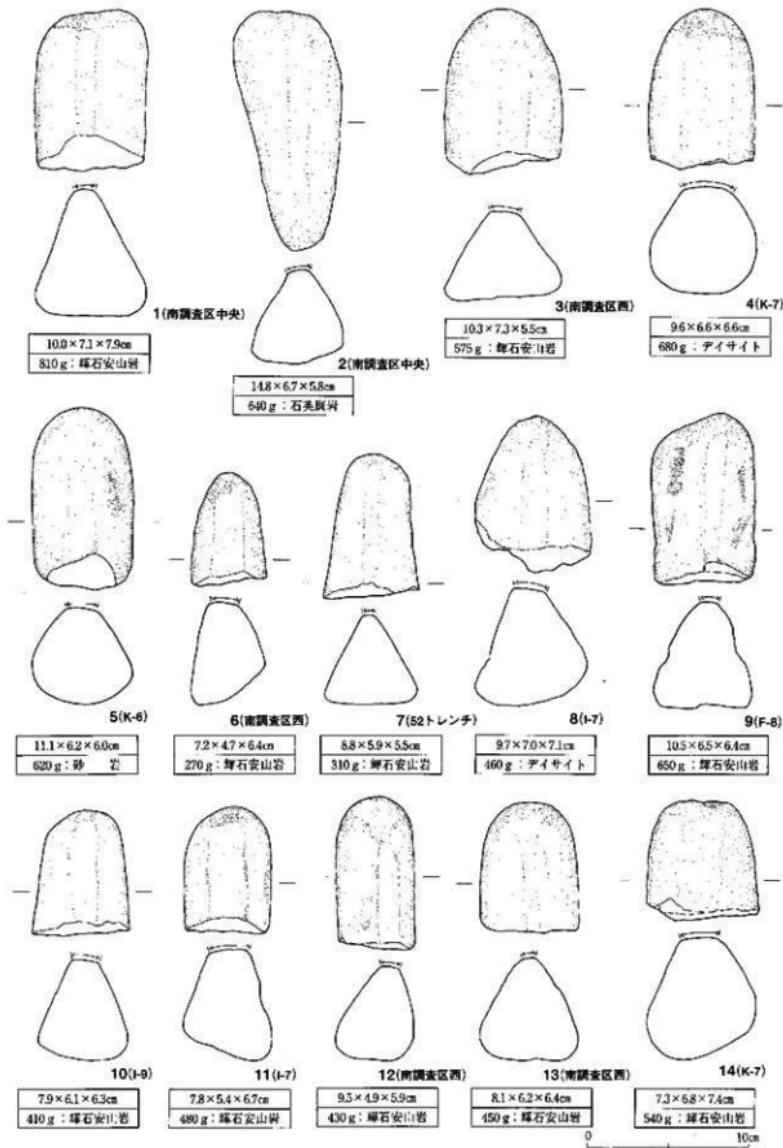
人形の石錐は1点のみで、剥片を素材とし、摘み部から錐部の彫整が荒い石器である。

#### 装飾品（第93図177）

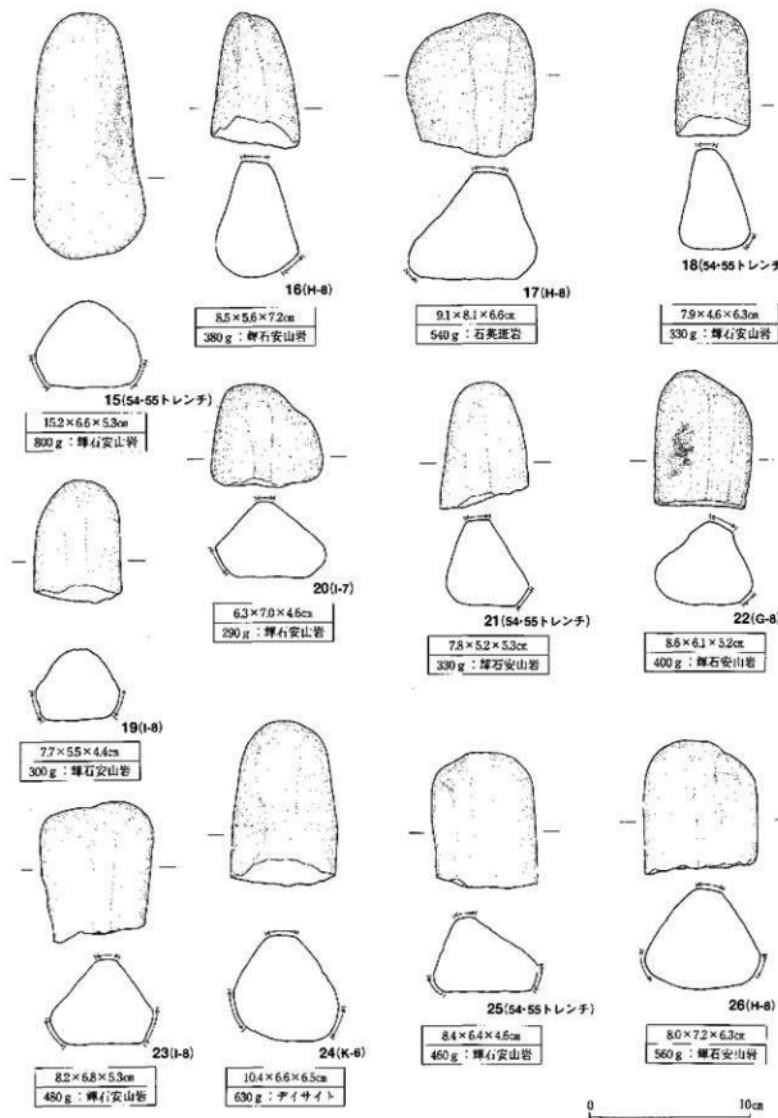
偏平な素材を長方形に研磨し、仕上げ両側縁に鋸歯状に飾りと考えられる刻みを施している。この石器は、上下が欠損しているため積極的にペンダントと言えないところがあり、念入りに製作され石槍の模倣品とも思われ、道具としての使用は考えられない遺物である。

#### 石鎌（第93図178～188）

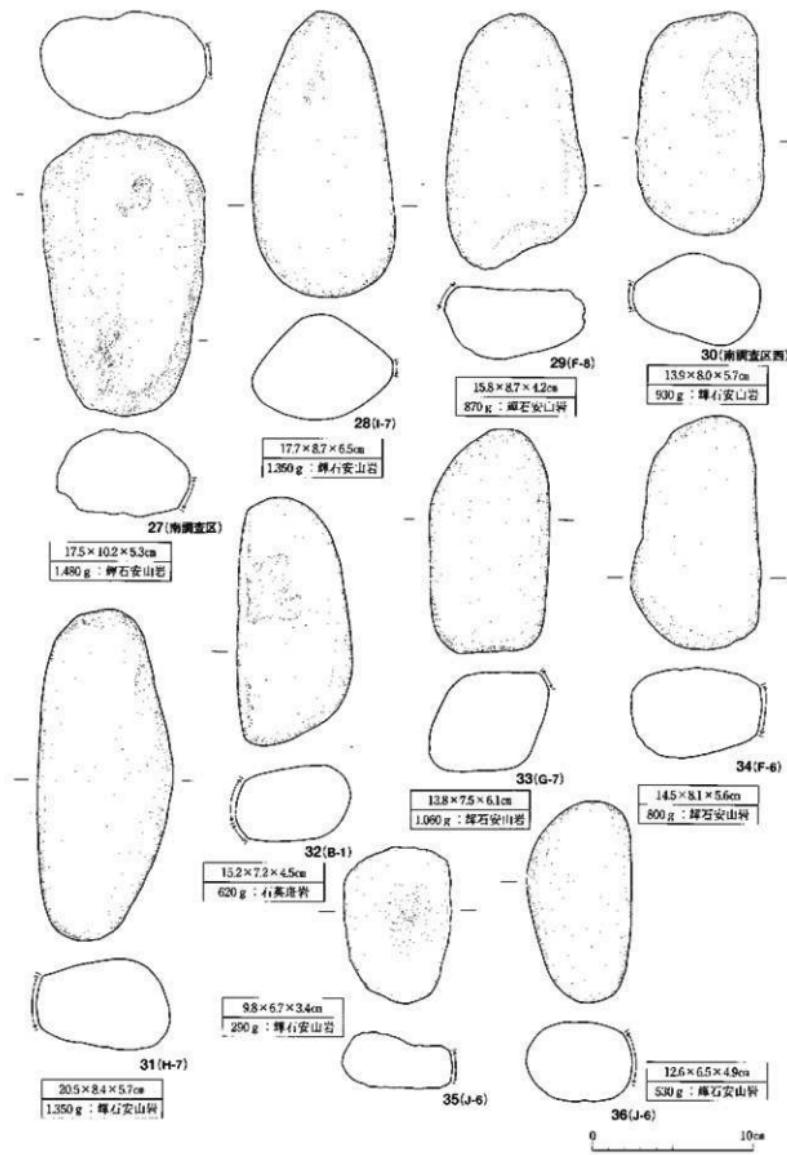
この石鎌は、縄文時代前期以降のもで、二等辺三角形で基部に抉りをもつたものが178から182、185で、抉りがないものは186である。三角形で深い抉りの184と二等辺三角形で有茎の183がある。また一等辺三角形を示しもので、抉り部に研磨痕をもつ187、188の2点がある。



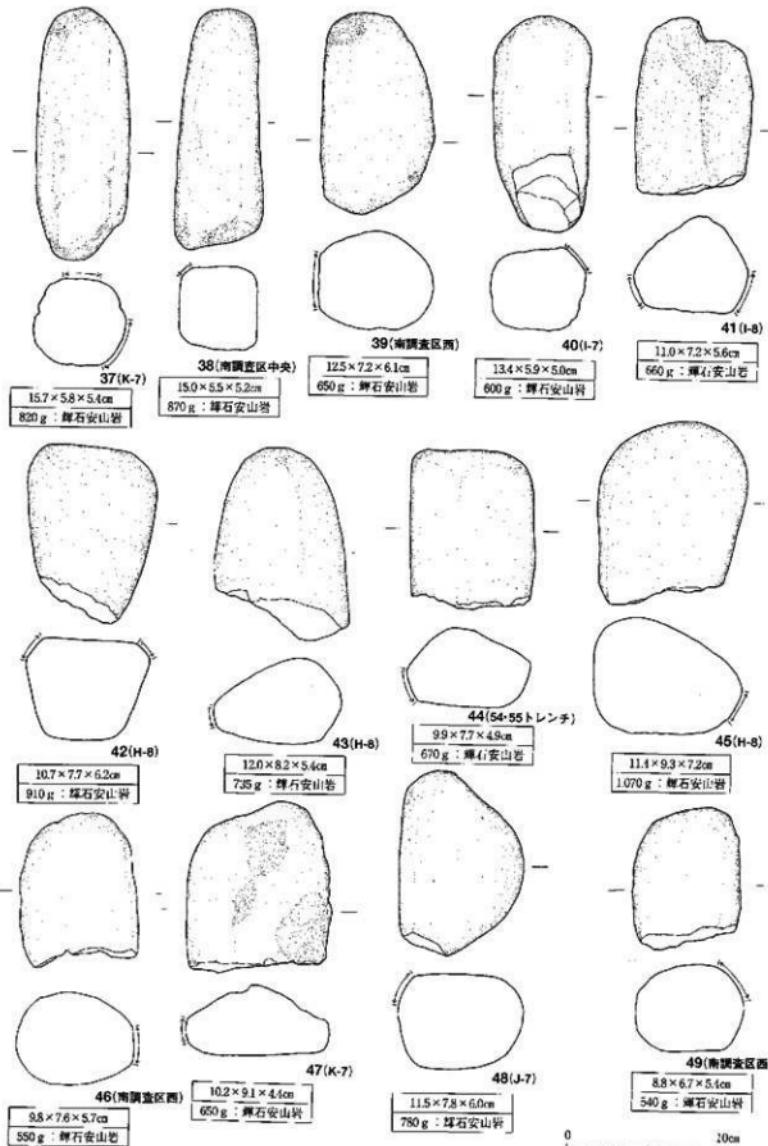
第76図 造構外出土石器 1



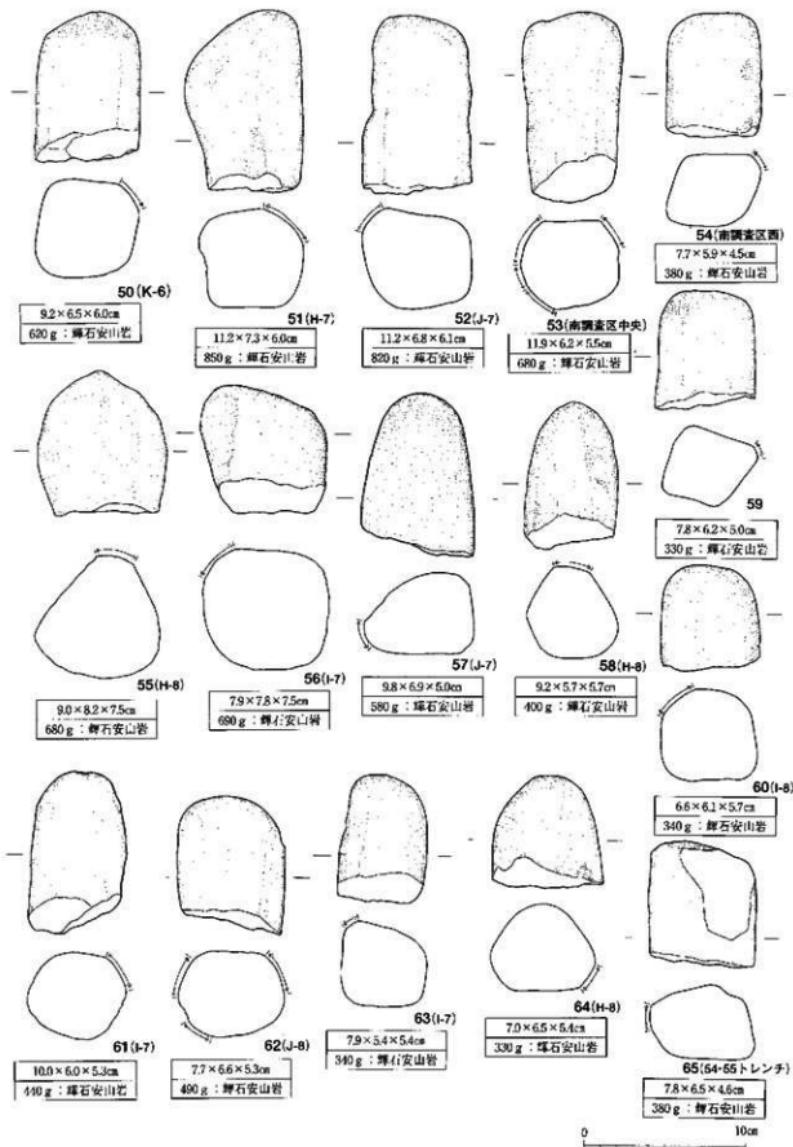
第77図 進構外出土石器 2



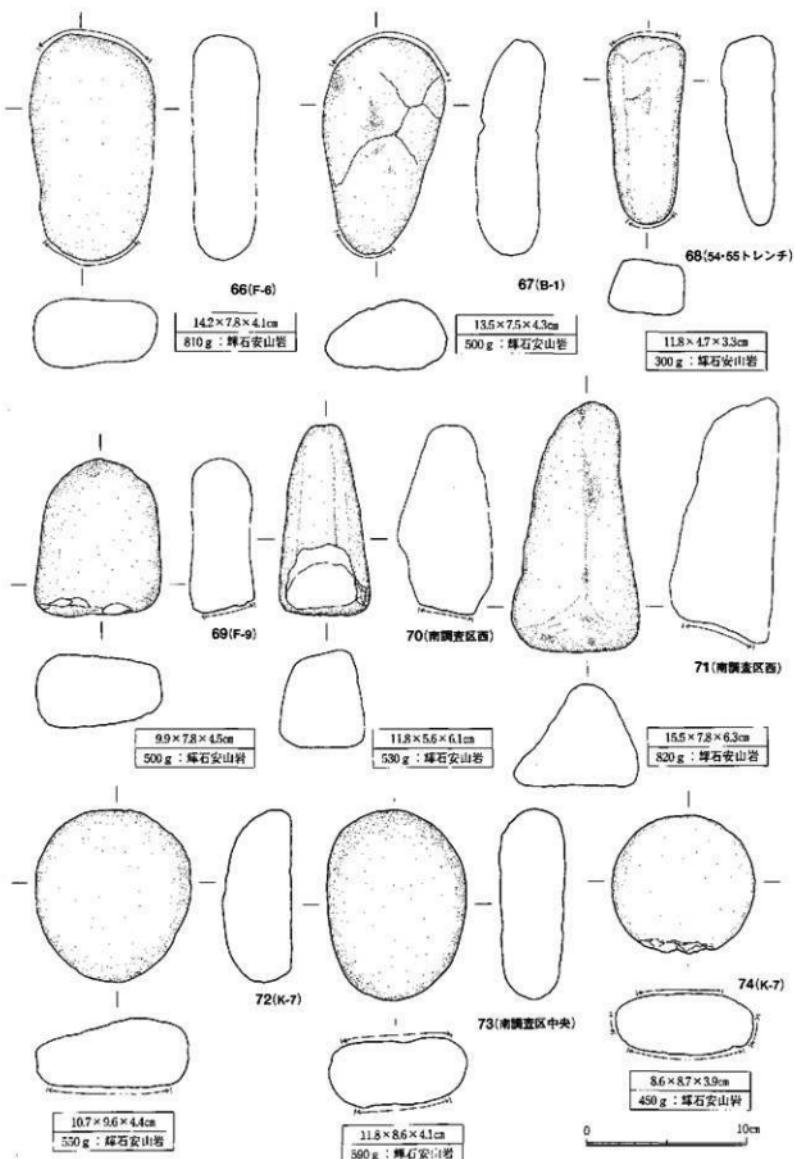
第78図 遺構外出土石器 3



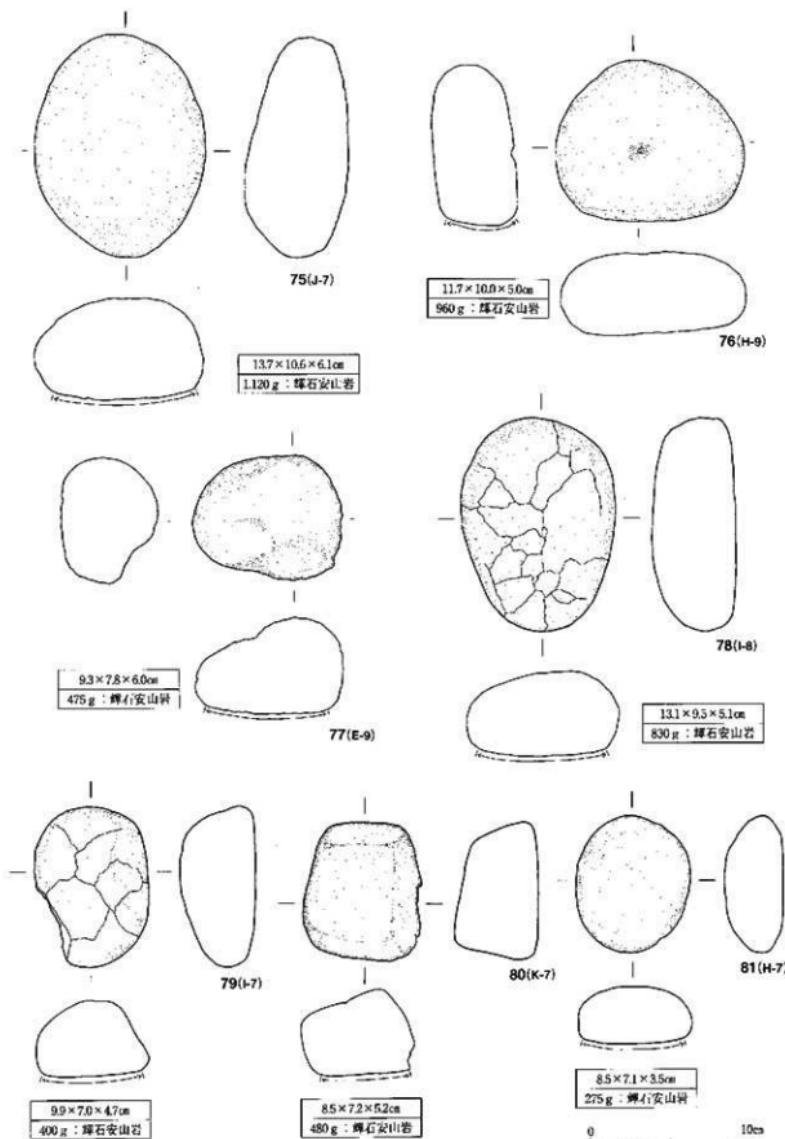
第79図 遺構出土土石器 4



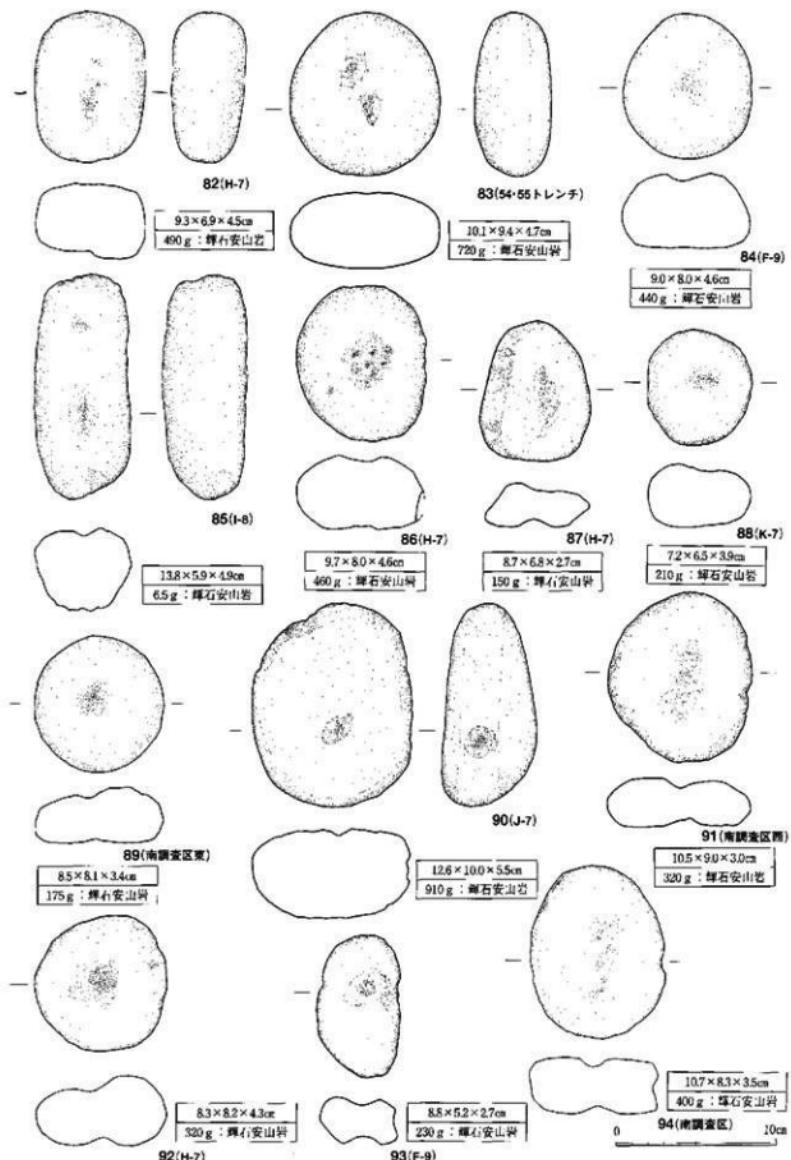
第80回 造構外出土石器 5



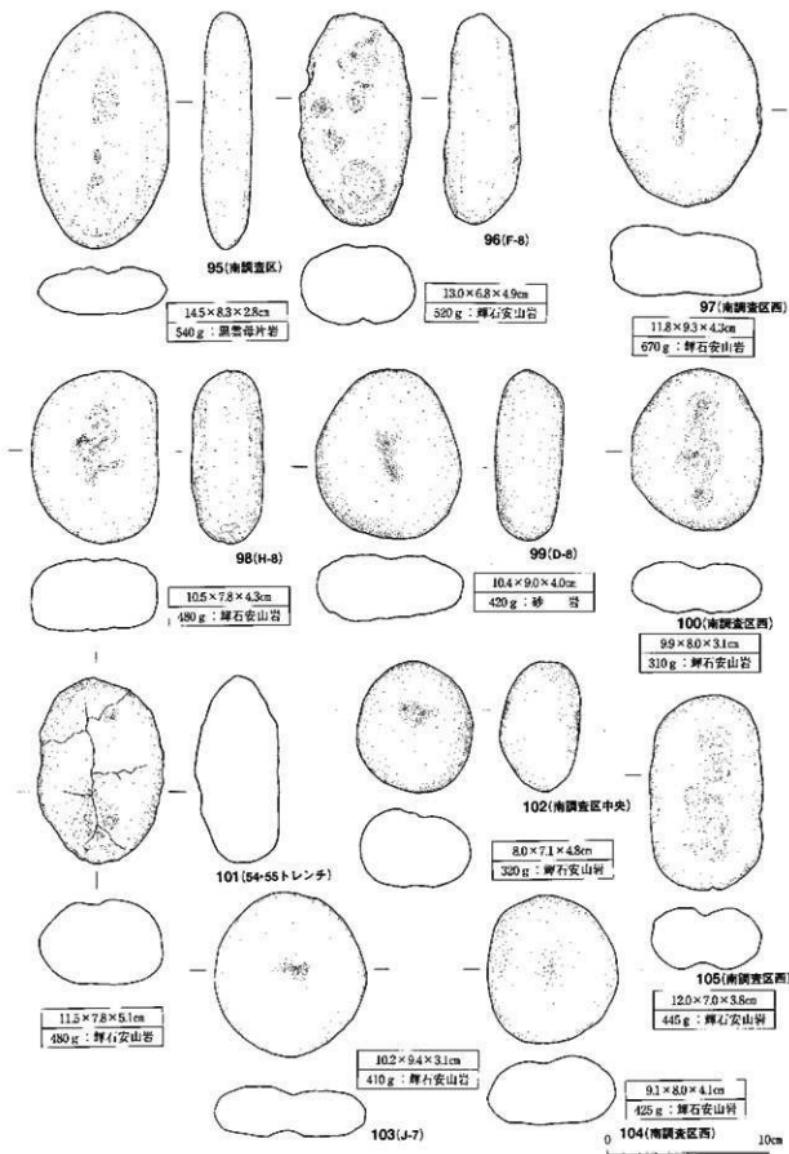
第81図 通構出土石器 6



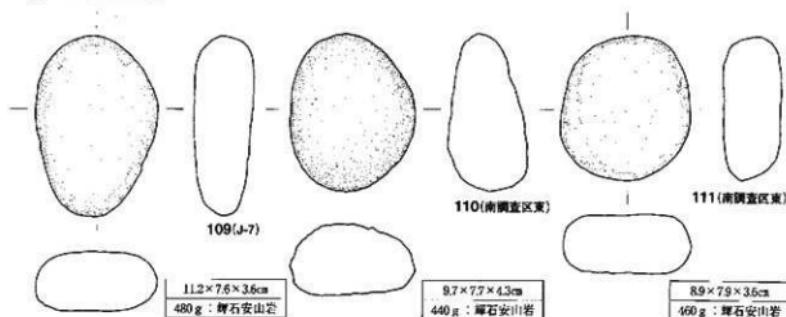
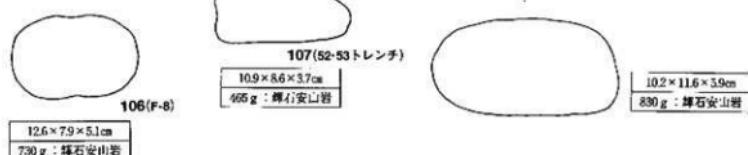
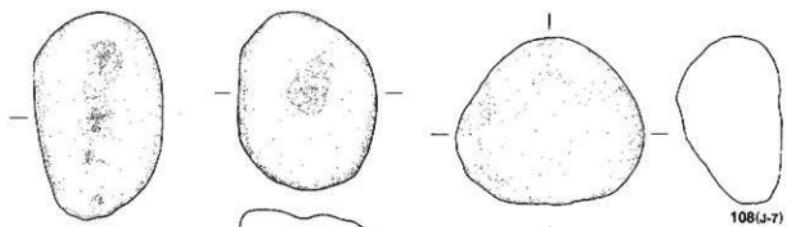
第82図 遺構外出土石器 7



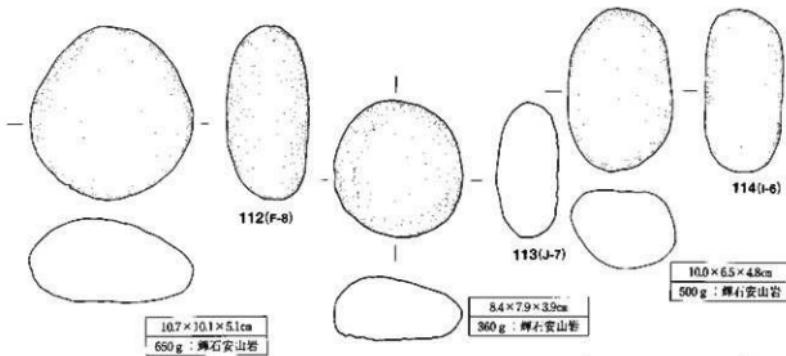
第83図 通構外出土石器



第84図 造構外出土石器 9



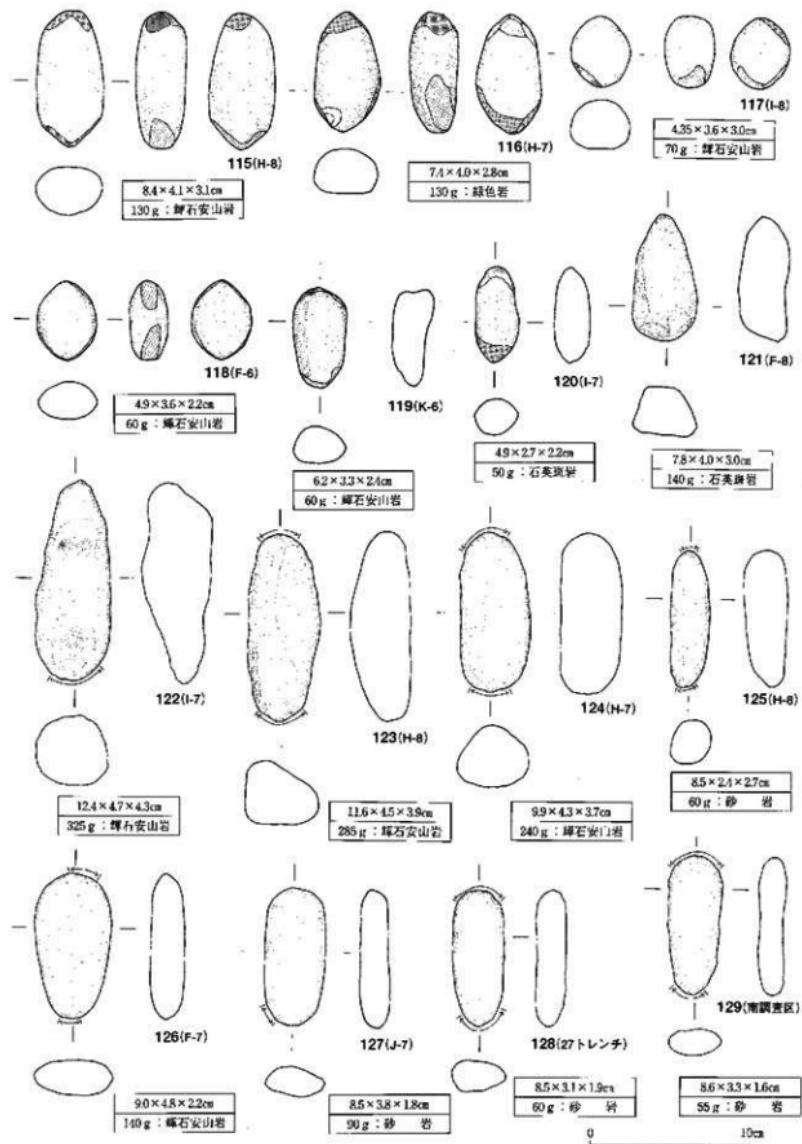
112×7.6×3.6cm 480g : 鮫石安山岩	9.7×7.7×4.3cm 440g : 鮫石安山岩	8.9×7.9×3.6cm 460g : 鮫石安山岩
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------



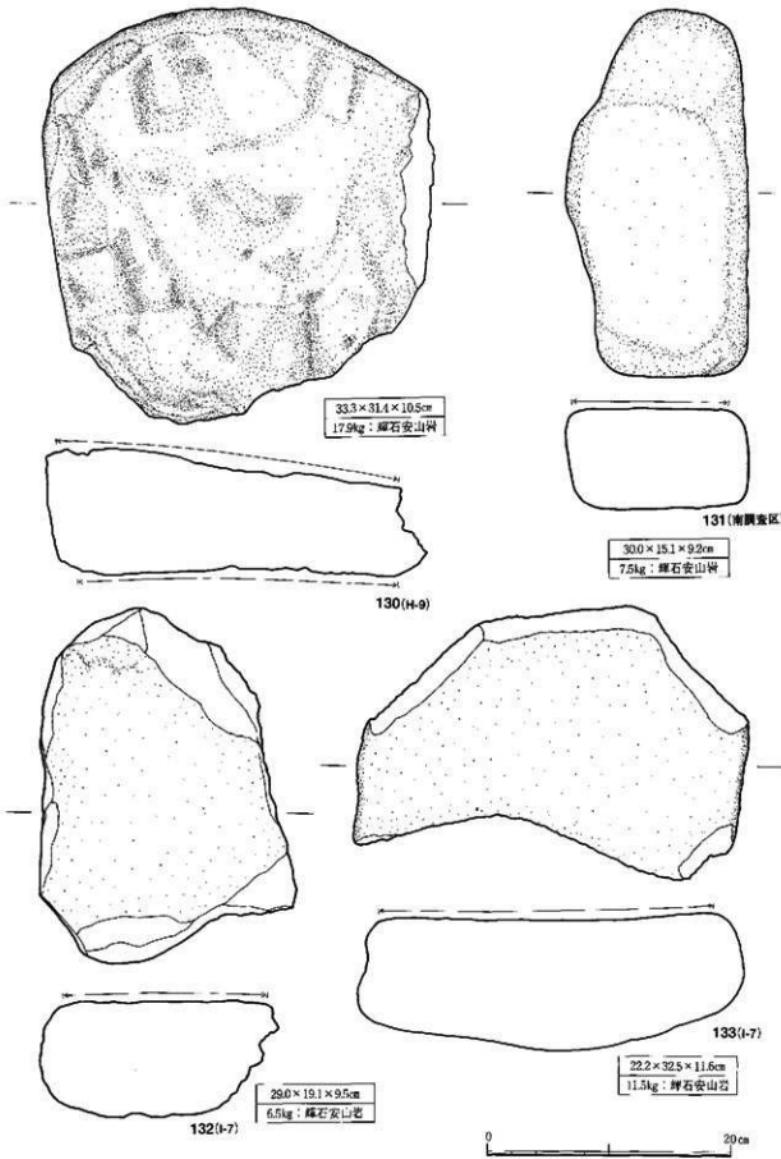
10.7×10.1×5.1cm 660g : 鮫石安山岩	8.4×7.9×3.9cm 360g : 鮫石安山岩	10.0×6.5×4.8cm 500g : 鮫石安山岩
---------------------------------	-------------------------------	--------------------------------

0                    10cm

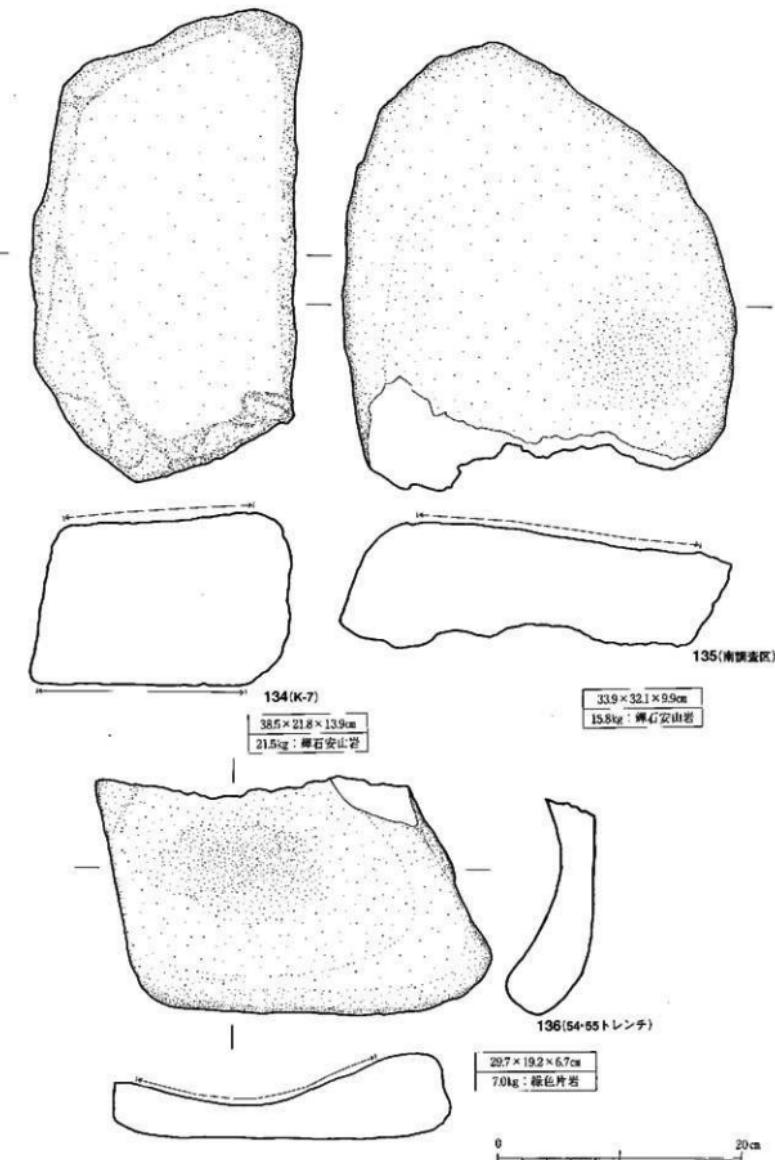
第85図 遺構外出土石器10



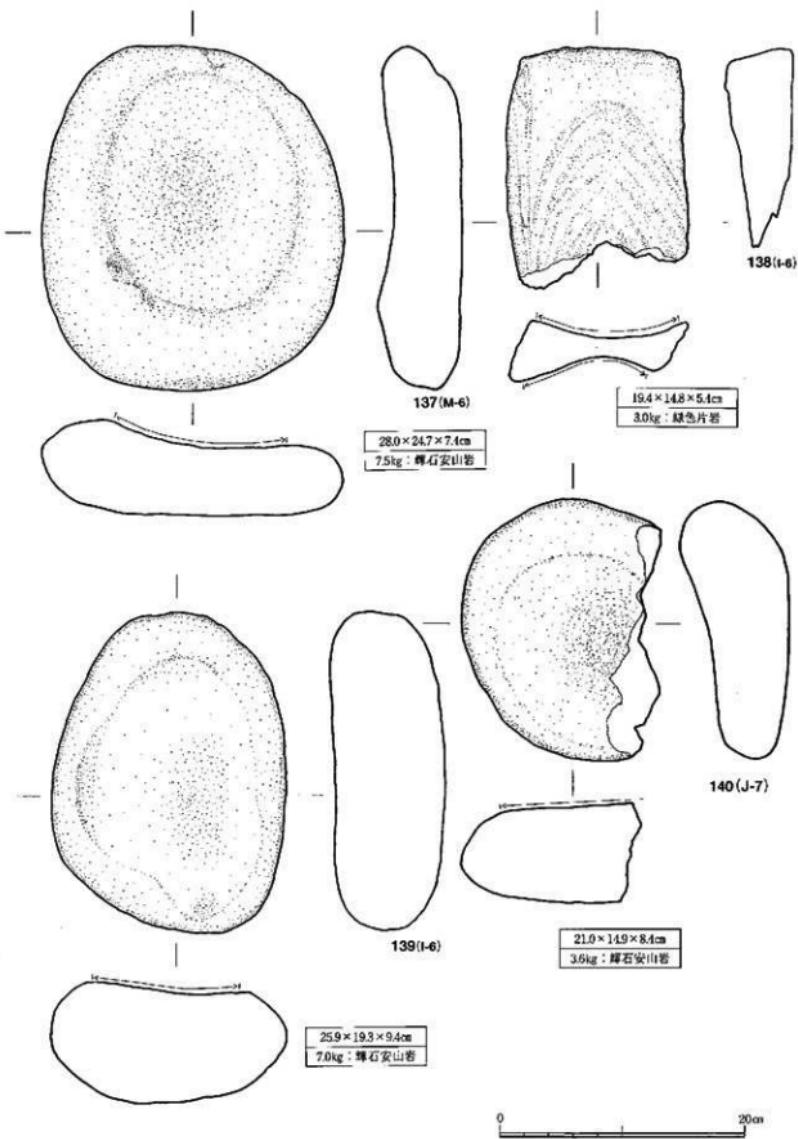
第86図 造構外出土石器11



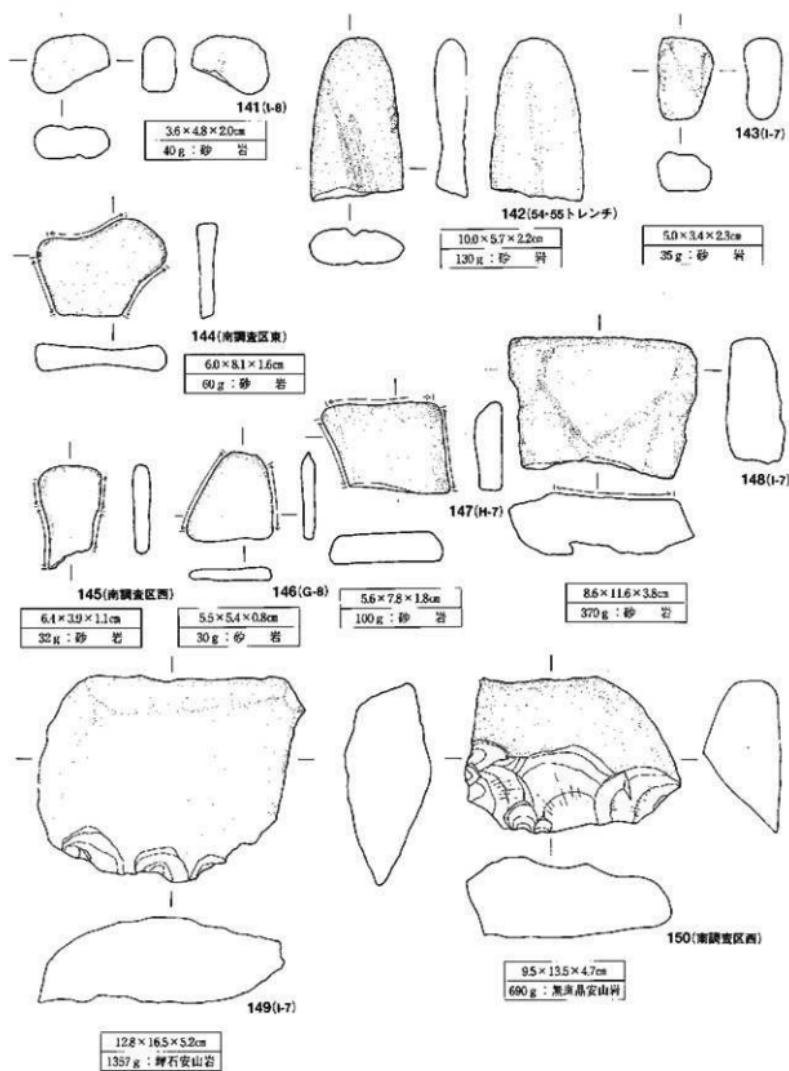
第87図 遺構外出土石器12



第88図 造構外出土石器13

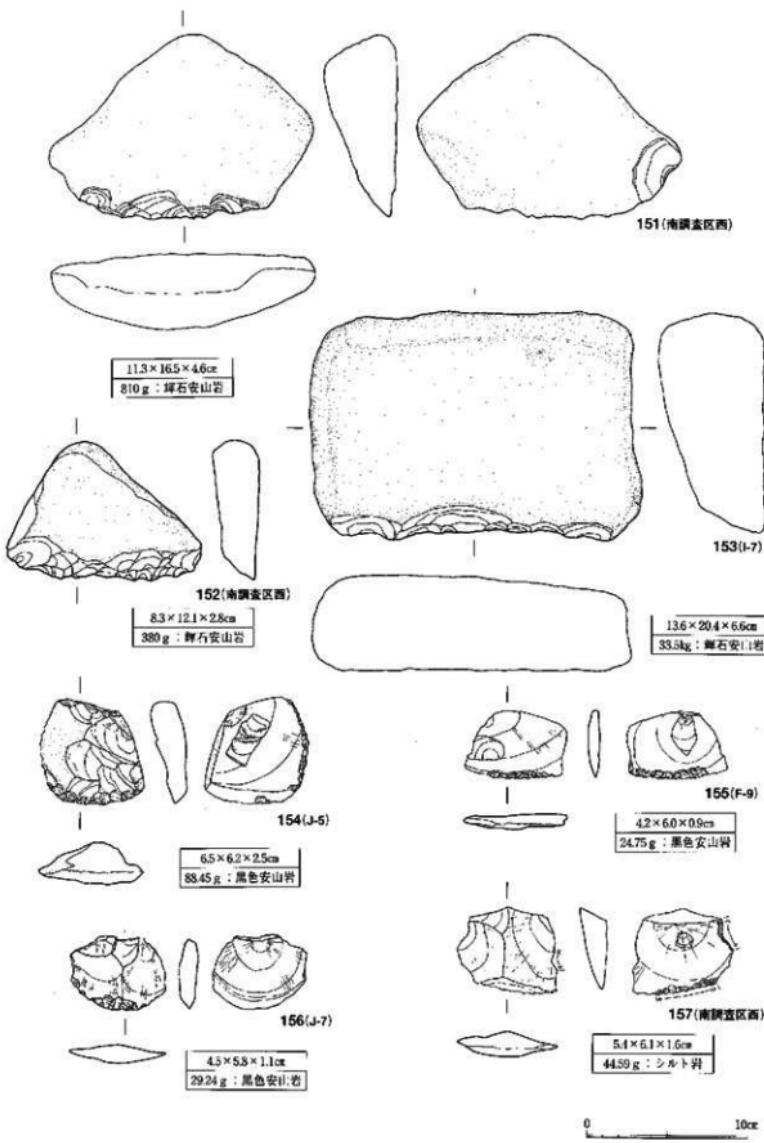


第89図 造構外出土石器14

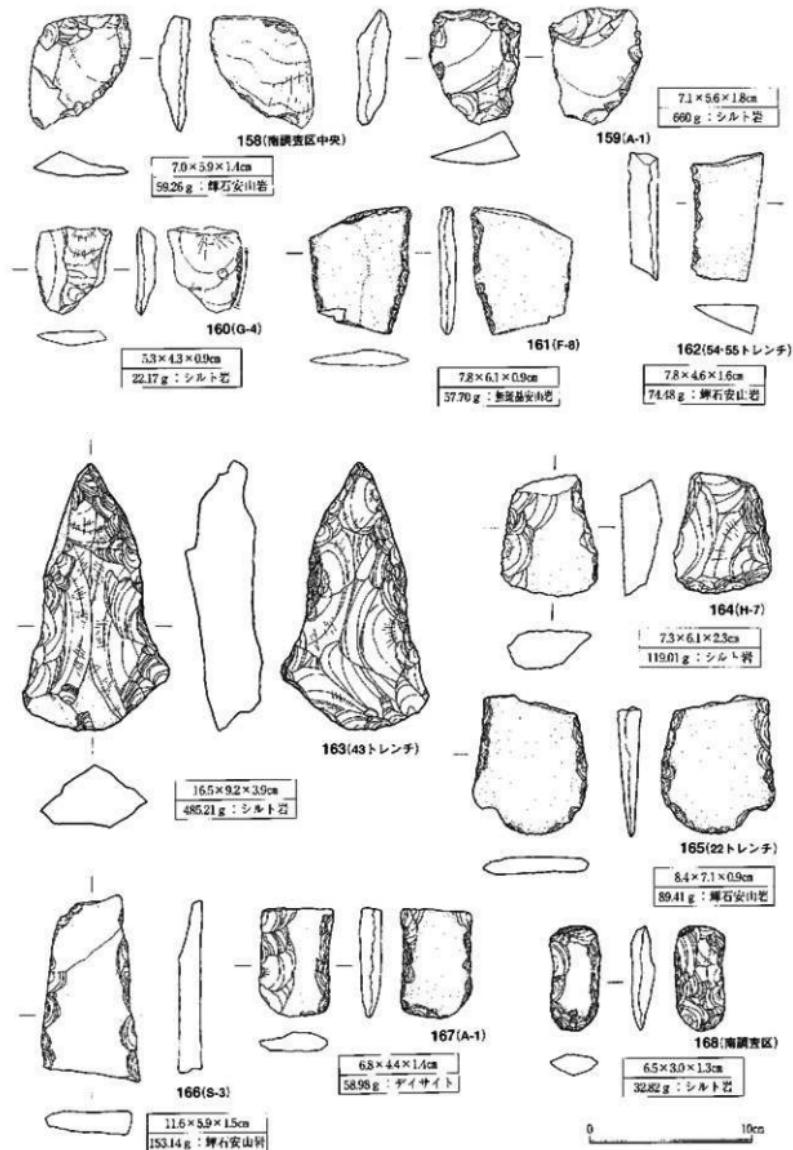


0 10cm

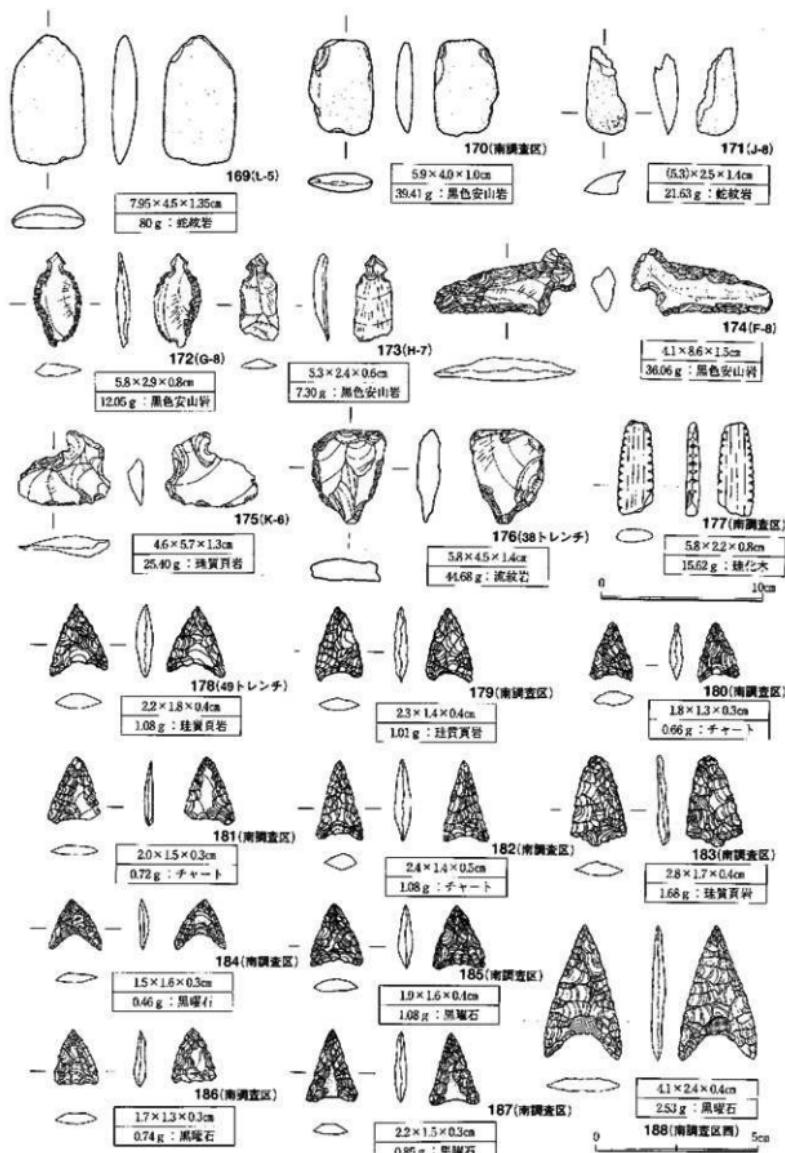
第90図 遺構外出土石器15



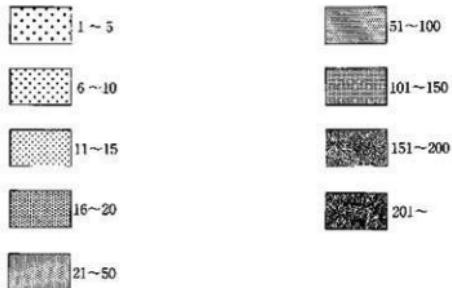
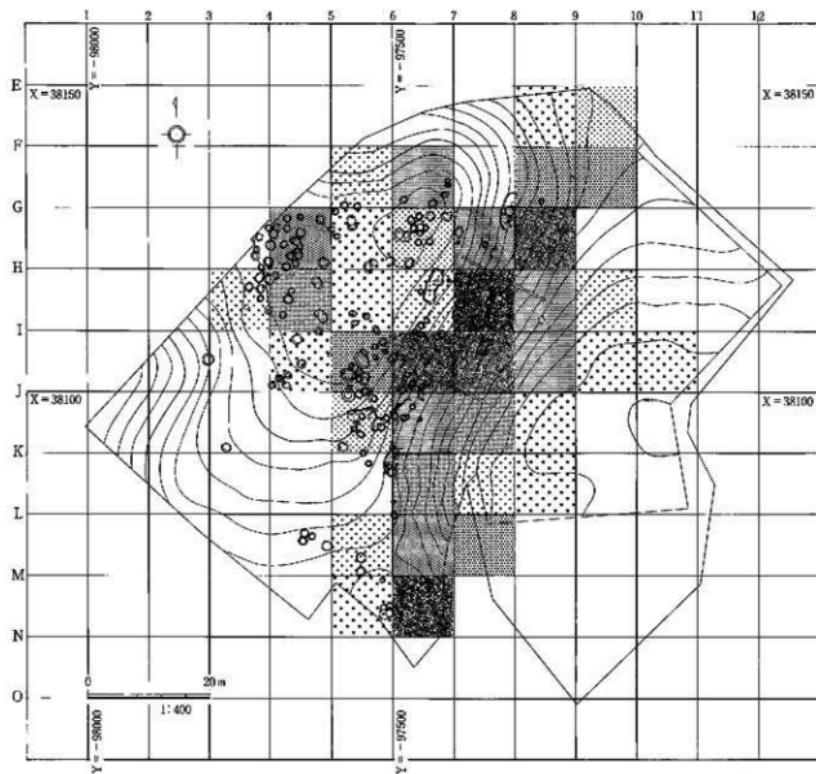
第91図 通構出土石器16



第92回 造構外出土石器17



第93図 遺構出土土石器18



第94図 小形石核と石器出土状況濃淡図

### 小形石核の剥片を素材とした石器群（第94～101図、表-28、図版58～66）

小形石器の大半は石核であるが、この他に石槍、削器、搔器、石錐、石匙、ノッチ、楔形石器、不定形石器と使用痕がある剥片、加工のある剥片がある。その集計は表-28石器集計表に示した。そしてこれらの石器の素材となる剥片を作出する石核は図版58でも分かるように以外と小形の石核が用いられている。また石器ごとに石核が異なっていたものではなく、石核から作出された剥片の中から、石器製作に適した剥片を選択して製作していたものと考えられる。

### 原石（図版58）

原石は、石器製作の素材である剥片を作出するもので、殆どが黒曜石であった。原石は拳より大きい物は少なく、小さな原石が大半を占め、崖や藪頭から採取したものと考えられる。観察から何えたことは、原石の所産地は信州地方ではないかとの推測をしていた。そして鉱物分析をした結果信州産のものが大半を占め、この他に三浦半島産が含まれていた事が分析された。石核の中には、極めて小さなものがあったので、剥離の跡がなく一辺が2cmを計るものも原石として集計した。

### 石核（第95～97図）

石核は、縄文時代早期の石器製作に係わる石核で、打点の位置によりIからVまで分類をした。またIIやVIに分類した中には楔状の石核も含まれている。これは石器製作の素材となる剥片を作出するためのものと考えられる。そして、この石核から作出されたと思われる縱長の剥片（マイクロブレイド状）があり、意識的に作出されたものなのか副産物なのかは不明である。しかし、これらの石核から作出された縱長剥片と横長剥片（貝殻状）は、石器製作等に係わる素材であることは確かなことである。

石核を次のように分類した。

I類 表となる面で一方向から打撃を加えたもの（1～10）

II類 上下から打撃が加えられているもの（11～24）

III類 表と裏側に上部から打撃が加えられているもの（25～29）

IV類 多方向から打撃が加えられているもの（30～45）

V類 表側が上部から、裏側が下部から打撃が加えられているもの（反回転）（46～49）

これらの石核は、打点の位置により分類したが、IからVのなかで縱長の剥片と、幅広の剥片を作出する石核が含まれている。この多くの石核は、石器を製作するための素材である剥片を作出するためのものであって、打点の位置は原石や剥片の形状によって打点の位置が異なったものと考えられる。また作出された剥片を選択し小形石槍、削器、搔器、石錐、石匙、ノッチ等の定型石器を製作したものと考えられる。

### 石器（第98図50～77、第99図78～99）

石器は、未成品、完形品、欠損品と製作時に作り出されたチップ類が数多く発見されている。未成品の中には、製作の初期のもので素材の原形を残したもの、製作途中で石器の製作工程の経過が辿れるものなどがあり、その過程をAからEまで分類し、さらに分類した中で作業の段階が異なるものは分けて、石器の製作工程の復元を試みた。

A分類（第98図50～61）

製作の初期のもので、一側縁及び二側縁に加工を持ち、表裏に剥離面が多く残った段階を本類とした。

1. 一個縁部に潰しを施し剥片の形状と剥離面を多く残した段階 (50~53)
2. A-1 の工程に押圧剥離を行った段階 (54, 55)
3. 二個縁に押圧剥離を行い二等辺三角形の形に仕上げた段階 (56~59)
4. 二等辺三角形及び三角形の形にして、抉り部を作り出した段階 (60, 61)

**B 分類 (第98図62~75)**

未成品で、形態を三角形に仕上げて、押圧剥離の加工が中程から完成に近い段階を本類とした。

1. A-4 工程まで行われ、片面が押圧剥離による調整が進んだ段階 (62~64)
2. 片面が押圧剥離によりほぼ調整が終り、その裏面に押圧剥離が加えられた段階 (65~69)
3. 両面に押圧剥離が加えられているが、調整の段階で一部に剥離面が残っている段階 (70~72)
4. 完成品に近いもの (73~75)

**C 分類 (第98図77・第99図78~82)**

表裏面に押圧剥離が施され完成したもの。先端部が僅かに欠いているものについてはC分類に含める。

**D 分類 (第99図83~99)**

石鎚の部位で先端部、末端部、抉り部等が欠損したものを本類とした。その部位の欠損の位置で製作時の工程についてや、或いは規則性が認められるものかどうかに注意した。

1. 抜りがある片方が欠損したもの (83~85)
2. 抜りがある両方が欠損したもの (86, 87)
3. 先端部が欠損したもの (88, 89)
4. 抜りの部分まで欠損したもの。もしくは脇部の中心まで欠損したもの (90~92)
5. 抜りと先端部が欠損したもの (93, 94)

**E 分類 (第99図95~99)**

石鎚の抉り部、底辺部に槌状剥離 (ファシット) を有するもの。

この行為は何のために加えられたものなのか不明であるが、アクシデントにしては数量が多いため本類として分類した。製作過程の行為か、或いは装着のための行為か、或いは石鎚ではなく全く別の用途に使用した石器なのか不明であるが本類が検出された。この中で96だけが剥離の角からの打撃ではなく、抉り部の中央から加えている。

石鎚以外に製作された石器は次に掲げるもので、これらの石器は、石鎚を製作した場所で、また同一の石核を用いて製作されたものと推測される。

**石槍 (第99図100~104・第100図105~108)**

石槍は4cm前後より大きいく、調整の観察等により分厚いものは石槍に分類し、薄く小形のものは石鎚に分けることとした。100から102は木葉形で断面が紡錘形を示し、表裏面とも押圧剥離が行われているが自然面が残され、大きく欠損していることから製作時に割れたものと推測される。103は打点部に自然面がある剥片で、末端部に剥離を行った段階のもので、石槍の製作初期のものと思われる。また105も製作途中のもので断面が三角形で、荒い調整剥離を加えている段階である。106, 108は木葉形で断面が紡錘形を示し、完成に近い段階である。104, 107は完成品と考えられる。104は木葉形で断面がズングリとした紡錘形を示し、やや荒い調整である。107は細い木葉形で断面が備鉢状を示し、やや荒い調整である。

#### 楔形石器（第100図109～121）

これは楔状石核と関係し、石錐の素材と分けるのに困難なところがあるが、また楔状石核の残核とも考えられるが、綫長で刃部が認められるものを楔形石器とした。109から112は爪形の形態を示す。また小形になるが120、121も爪形の形態を示している。115から118は綫長の形態を示す。113、114、119も小形になるが綫長の形態である。

#### 石匙（第100図122～127）

石器の素材は、綫長のものと幅広のものとを使用している。幅広の素材を使用したものは、摘み部の下部は横に広く刃部が下に位置している。一方綫長を素材としたものは、摘み部に抉りを持ち剣状に尖った形態で、刃部は側縁に位置している。122、123、125は幅広の素材を用いて、摘み部と刃部に荒い剥離を行い、刃部は横に広く下部に位置している。124、127は綫長の素材を用いて、摘み部と片側縁の刃部に荒い調整を加えた剣状で、127の摘み部は抉りを入れて作られている。126は幅広の素材を用いて、摘み部は抉りを入れて作り、刃部両側縁部に調整剥離を加えた剣状の石匙である。

#### 石錐（第101図128～132）

打点部を側面にした錐で、縄文中期等で見られるような細く棒状の形態を示す錐では無く、旧石器的な錐部が短い形態の錐である。128、129、131は打点部を側面し、調整剥離は局部的で粗雑な感じがする。131だけが大形で錐部も顕著である。131、132は錐形の素材を用いて、調整剥離は局部的で粗雑であり、錐部は顕著である。

#### 削器（第101図133、134）

この石器は2点のみで、側縁に刃部の加工がある。133は黒曜石であるが、134はチャートなのでこの場で取り上げるより、前の段階で取り扱った方が適していた。

#### 搔器（第101図135、136）

剥片の末端に急角度の刃部を持つもので、周辺の加工は見られず刃部のみに調整剥離を加えただけの石器である。

#### ノッチ（第101図137～141）

抉りを持った石器には、抉り部を作出したものと、使用により結果的に抉り部が出来たものとが存在すると考えられるが、その分類は困難なため抉りが認められる石器を同類とした。この石器の素材は、綫長で幅広のものを用いている。137、138、141はノッチを目的として、抉り部を作出したものと考えられるが、139、140は使用により作出されたものと考えられる。

#### 不定形石器（第101図142）

この石器は、三方に広がった部分を持ち、錐かノッチと考えられるが、形態的に所属するところが無いため不定形石器とした。

#### 加工がある剥片（第101図143～147）

素材の形状と剥離の観察から見て、石器を制作するためのものでは無く、また不定形石器や使用痕がある剥片では無いものが検出された、この石器は石器以外の石器の製作途中のものと考えられるが、その形態が分からぬ為、加工がある剥片として分類した。

#### 使用痕がある剥片（第101図148～153）

剥片の鋭い部分を刃として使用し、刃零れの痕跡を残したもの。相対的に見てノッチ的な使い方になるものが多く見られた。この他に石器製作の準備として、剥片周縁の鋭い部分を除去したものが含まれていると考えられる。

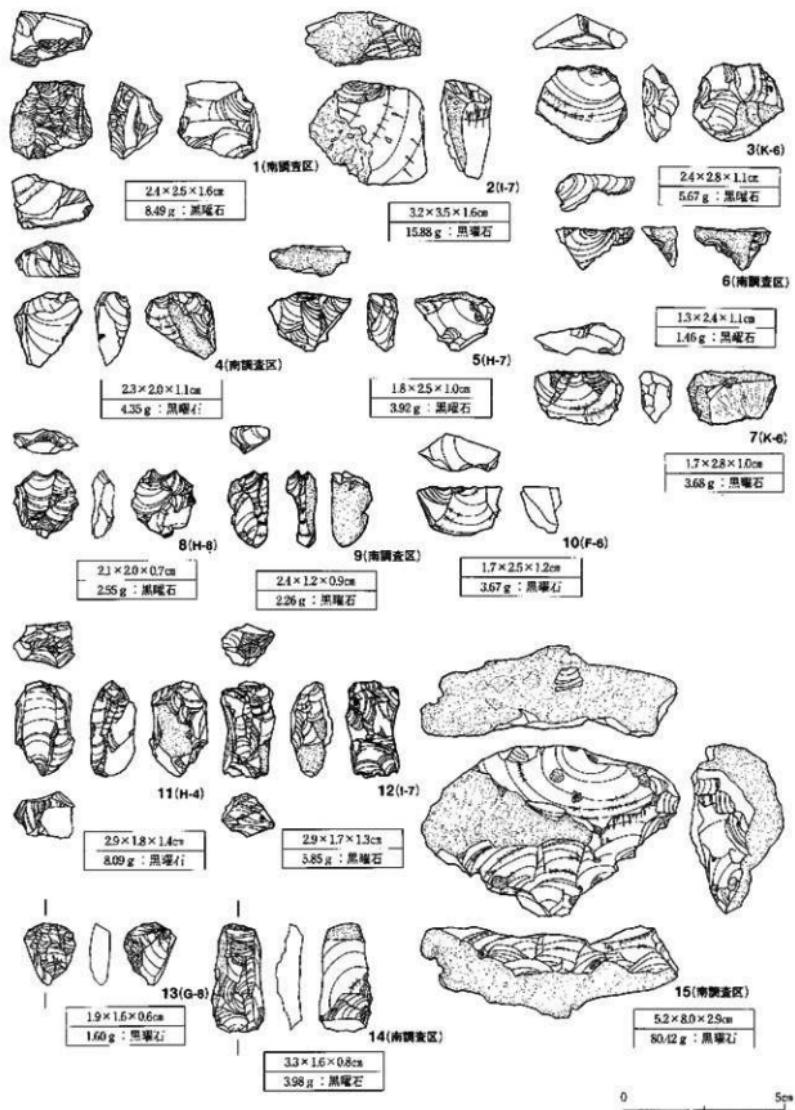
本遺跡は、縄文時代の早期と前期の間に自然環境の変化により 2 cm 以上の土石流が間層として存在し、早期（撚糸文末、条痕文期）とそれ以降の前期から後期までの遺物の混在がない状況で、早期の石器製作跡が発見できたことは何者にも代え難いものである。このような状況で検出された石器群は、人形剥片と自然石を素材とした石器群と小形石核の剥片を素材にした石器群とが在ることが判明した。大形剥片や自然石を素材とした石器群では、自然石を用いて直線状の摩滅痕をもつ磨石で、楕円形や長方形等を示し、断面が三角形及び四角形し、その角を使い 1 個縁、2 個縁、3 個縁の摩滅痕を有している。何故このような直線状の摩滅痕をもつ磨石が存在したのかを推測すると、第87図130の資料を作成するためのものと考えられた。この石器は板状に割った石材の表裏を研磨し、平らにするための道具と考える。縄文時代に平たい板状の作業台は生活の中で必要不可欠な道具として考える。整理段階で板状に割られた石材が存在していた事と直線状の摩滅痕をもつ磨石、そしてスタンプ型石器も含めて関連性の在る遺物と考える。この他に偏平な自然石に浅い窪みを持つ凹石は、棒状の先端部及び末端部に摩滅痕を持った棒状研磨器と関係する道具と考えられる。凹石を観察すると円錐状に窪みがあるもの他に楕円形に窪んだものが多く観察されたため、自然石に浅い窪みを作るためには、棒状研磨器は整的な作業も考えられるので、凹石の製作と関わり合いが在る遺物であると考える。またこの調査で特出されることは、有溝砥石が検出されたことである。縄文時代草創期の所産と思われていたが、早期末の時期にまで存在することが判明した。一方小形石核の剥片を素材にした石器等の製作工程の各段階の製品が検出されたことである。石器の製作は、素材である剥片があり、作り始めの段階、押圧剥離をして行く段階、完成に近い段階、失敗したもの、完成品、或いは第99図95～99に示したように特種な加工をした石器が検出された。石器の製作段階で抉りを入れる段階はかなり早い段階で作出していくことが判明した。また小形石核から作出される剥片は石器を製作するための素材である剥片作りが主たる目的と考えられるが、作出された剥片から選択して石槍、楔形石器、削器、搔器、ノッチ、石錐、石匙等色々な石器を作出していたことが伺えた。

(篠原)

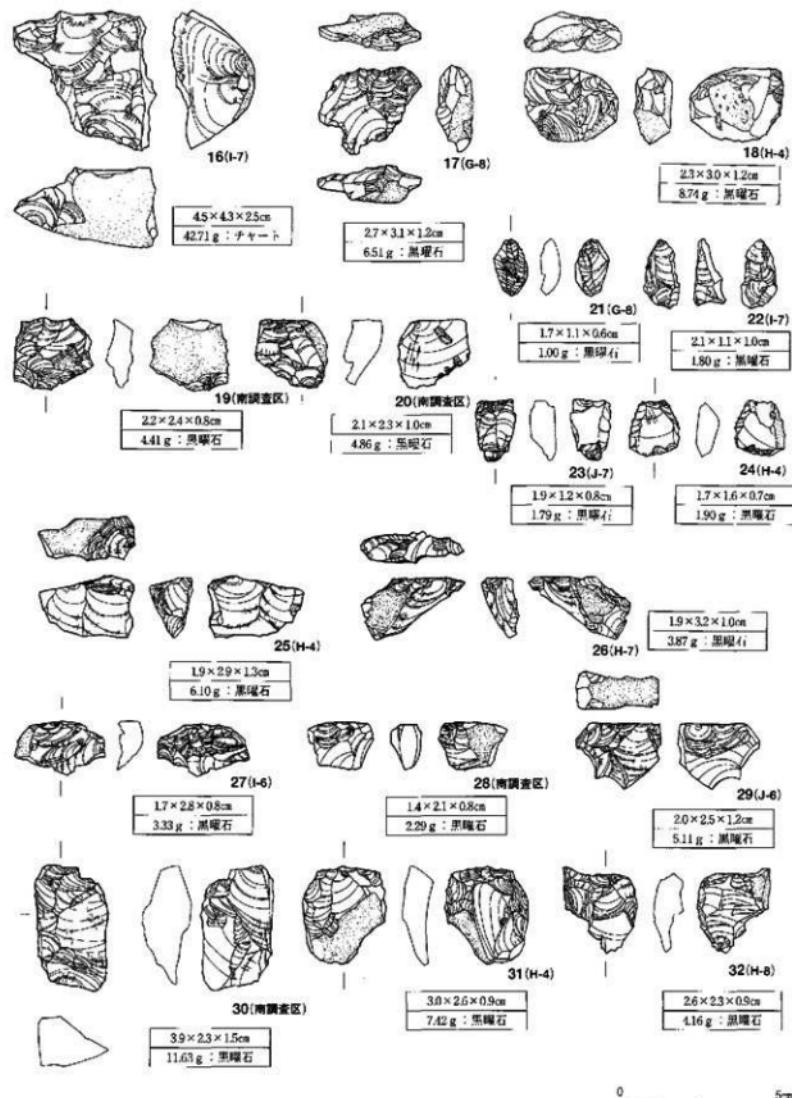
表-28 石鎚集計表

※ A-作り始め B-未製品 C-完形品 D-欠損品 E-ファシットを有するもの

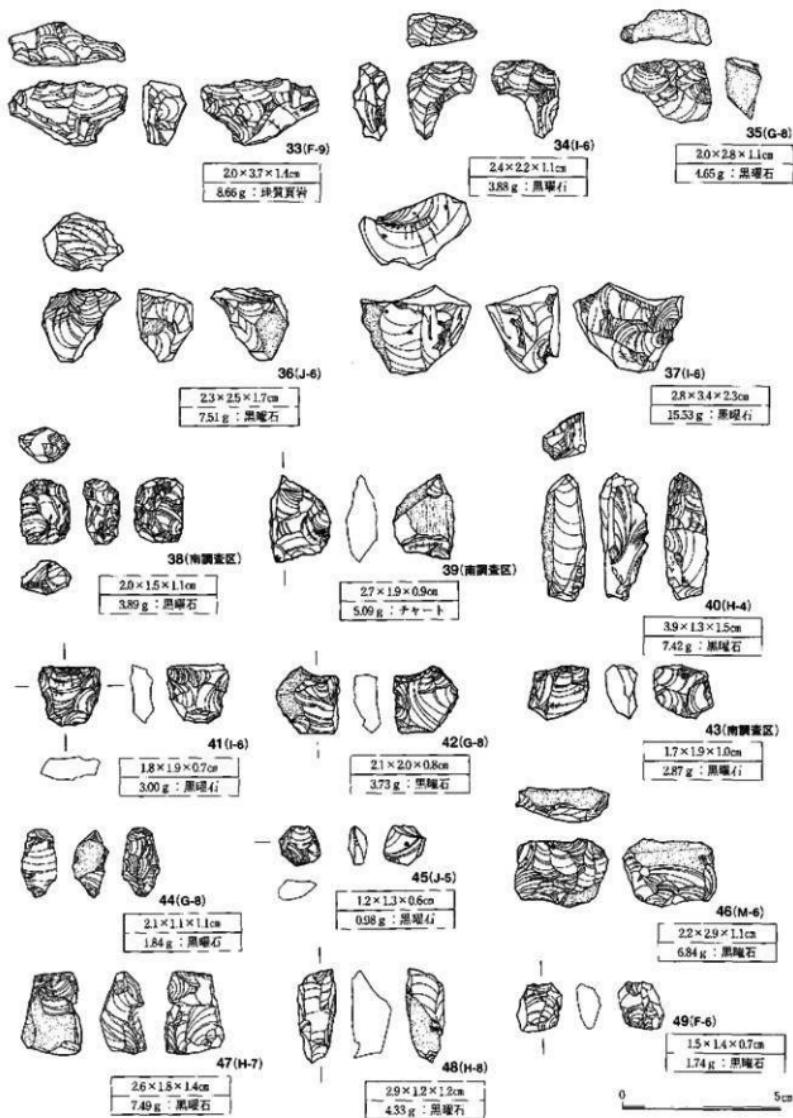
位置	A	石 墨	石 鉄	石 錫A	石 錫B	石 錫C	石 錫D	石 錫E	石 錫F	石 錫G	ノッチ	楔状石錫	小型石錫	複形石錫	部 器	接 器	石 錫	石 錫	加 工	削 片	使用削片	不定形	石 錫チップ	ダイントレク	幅長削片	接長削片	打点調整	被削削片	ナップ	被 削	合 計
E-8		1									1									1								1		4	
E-9	1	2	3								2	1	1								3	1								14	
F-5		2	1	1																		2								2	10
F-6	1	7	5	2	2	2					9	2		1	1			1		7	9	8	2	1				1	7	68	
F-8		3		4	2	3					1										3	2							1	1	20
F-9		4	2	2																1	1	2	2					1	1	17	
G-4	2	3	5		2	2					6		1							11	4						2	1	1	1	42
G-5		1										1																		2	
G-6	1	1	1	1							1		1								3								3		13
G-7	1	5	1	6	4						3	5		1				1	4	6	2	2	1				1	4	47		
G-8	1	27	18	22	5	6	3	3	3	1				4			1	1	33	17	2	1	6	1	2	1	3	6	167		
H-3		1																		1									5	8	
H-4	7	22	10	9	7	9					6	4	3							21	4	1	1	3	3	3	5		118		
H-5		1									1																		3		
H-6	2	1									1		1	1							1									7	
H-7	1	39	17	10	6	13	1	19	2	3	7				1	1			35	16	2	1	9	2		2	24	1	212		
H-8		17	5	2	5	2		8	2	2	2	1			1	2			16		1	2							69		
H-9		1		2	2	1													3			1							10		
I-4		1	1																1										3		
I-5		6		1	1			3										1	2	1		2						1	18		
I-6	1	33	27	7	6	11		16	3			2		1	1	1	1	1	26	16	10	1		1	1	1	7	3	177		
I-7	12	34	16	18	6	9	3	10	4	2	3	1			2			35	17	1	1	2	1				10	2	189		
I-8		17	5	5	2	5		3										12	7	1		2				1	1	63			
I-9		1																3										4			
I-10								1																					1		
J-5		6	3		1	1	1											1	2										15		
J-6	2	22	3	4	3	4		1	1			2			1		13	6		2							2	66			
J-7	2	27	9	7	9	10	1	10	1	1	3				1	2	19	10	1	2	1	1	2	1	1	3		123			
J-8																	1											1			
K-5		1						1										2	1									5			
K-6	1	10	13	11	3	6	1	8	2		1	6		1				12	6		18						35		134		
K-7		4		1	1			1	1																			1	9		
K-8																													1		
L-5		1						1	1									3	1								1	8			
L-6	15		5	2	1		1										2	1		1							1	29			
L-7		3	1		1												4	2	2			1		1	3		17				
M-5																		1										1			
M-6	42	8	11	3	6	1	2	2		1	2						32	25	35	4	2				30		206				
右端部	28	31	15	20	10	13	7	1	2	2	2					1	15	12	1	2	5	3		13		181					
斜面部		12	9	2	2	9	8	3		3							7	9	8	1					4	1	80				
両頭部	2	32	4	12	7	5	1	20	6	1	2	1	2			2	1	19	14		4	1		3		139					
合計	63	434	184	166	92	119	11	154	45	19	28	22	4	8	13	10	353	192	2	94	12	56	12	12	17	164	18	2288			



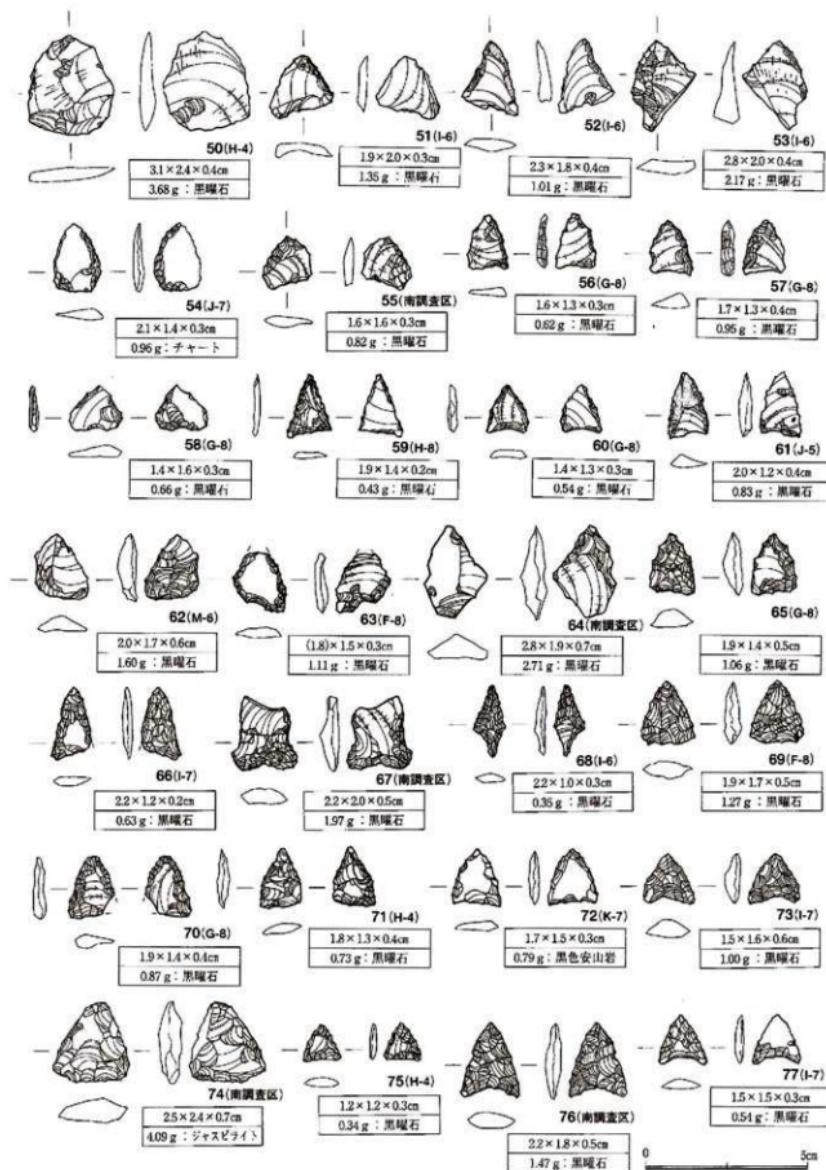
第95図 小形石核と石器 1



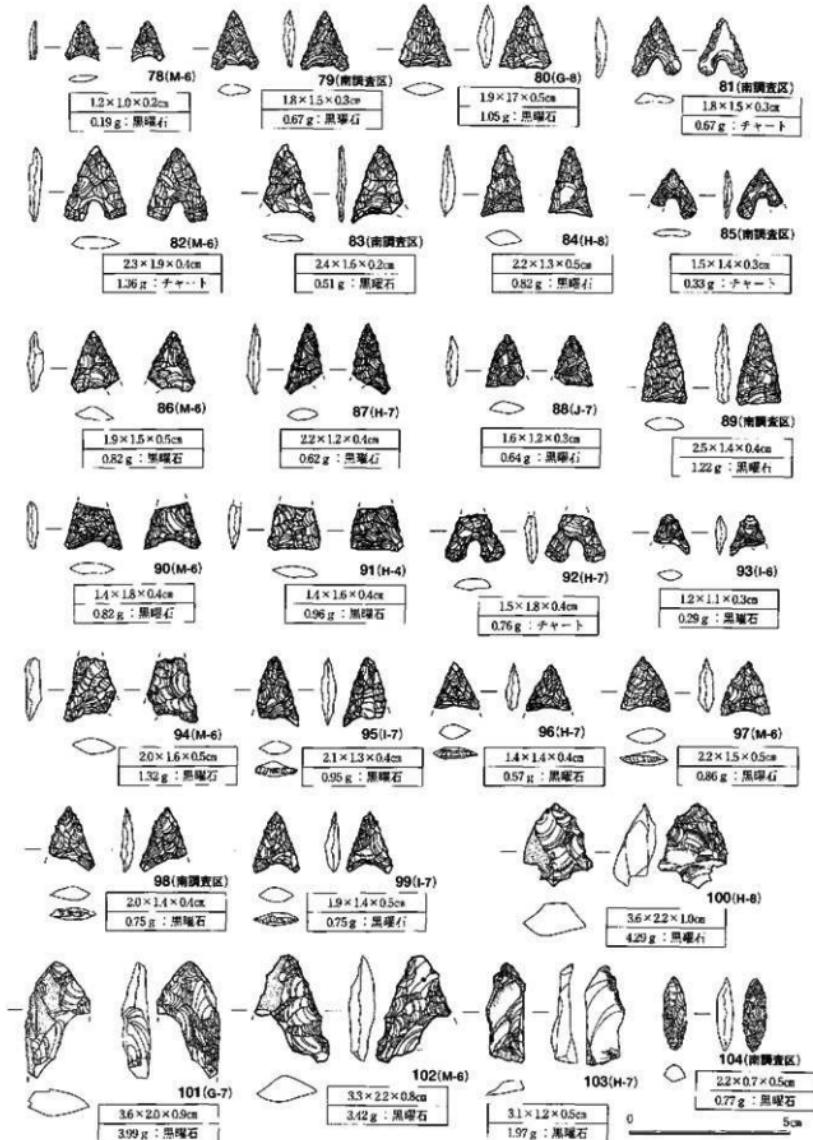
第96図 小形石核と石器2



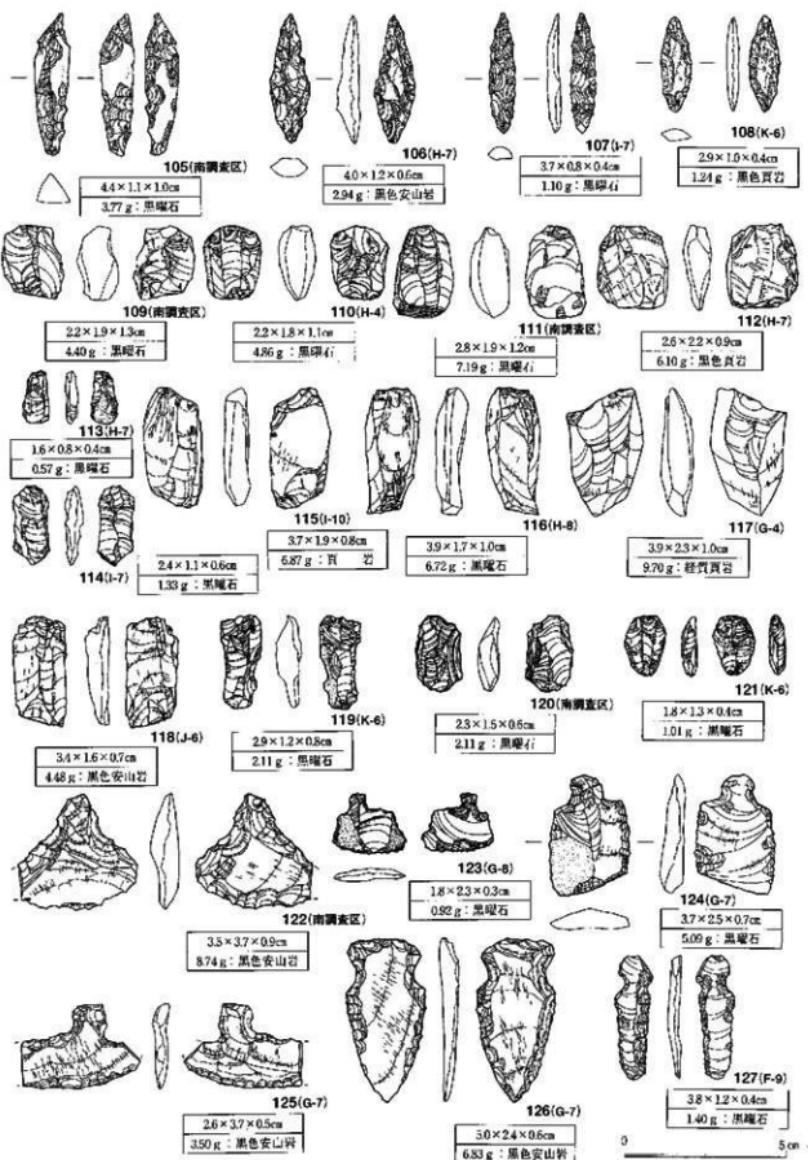
第97図 小形石核と石器 3



第98図 小形石核と石器 4



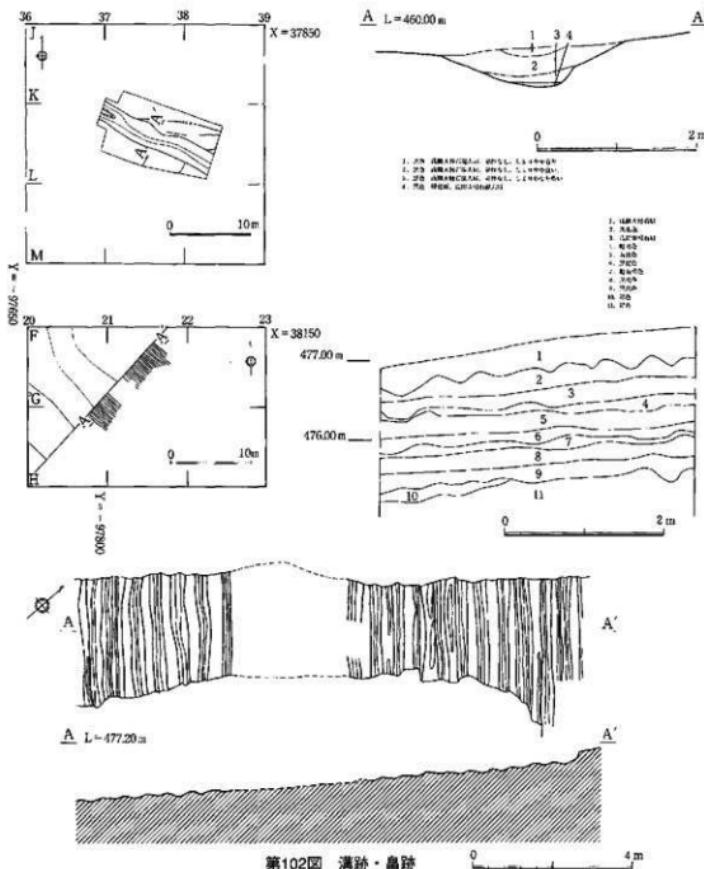
第99図 小形石核と石器5



第100図 小形石核と石器 6



第101図 小形石核と石器



第102図 溝跡・壠跡

### 第3節 近世

近世の遺構として溝跡1条、壠跡1枚が検出されている。

#### 溝 跡 (第102図、図版28)

溝跡は確認調査区K-37・38グリッドから検出された。幅2.40m～3.05m、深さ50cmを測り、断面形は皿状を呈する。浅間A軽石を混入する黒色土が堆積しており、浅間A軽石降下後の所産と判断される。

#### 壠 跡 (第102図、図版28)

壠跡は北側調査区東側の本調査区外から検出されている。歴方向は北西～南東を指向し、高さは40cm前後を測る。全体を浅間A軽石帶層が被覆し、軽石降下の直前まで使用されていた可能性が高い。本遺構について土壤分析、プランツ・オバール分析を実施している。詳細については自然科学分析編を参照されたい。

## 第6章 調査の成果

調査の結果、縄文時代早期後半の条痕文期を主体として、早期前半から後期に至る遺構・遺物と、近世の畠跡・溝跡が検出されている。主体となる条痕文期の遺構・遺物は、南箇塚区西端に立地する尾根状の台地上に占地している。土坑と集石炉・焼土が台地頂上部から東側の斜面にかけて濃密に分布し、当時の生活面として捉えられる状況で、土器・石器・焼石がほぼ一定のレベルで出土している。更に、これら条痕文期の遺構・遺物を覆って、浅間山起源の軽石層とローム二次堆積層が厚く堆積し、早期末以降の遺構・遺物と明確に分断されている状況であった。本章では条痕文期の遺構・遺物に補足の説明と若干の考察を加え、調査のまとめとしたい。

### 条痕文期の遺構

条痕文期の集落は、前述した尾根状の台地から検出されている。遺構の主体となる土坑群は尾根状台地の頂上部から東側の斜面に分布し、東側斜面部からは大形で底面が床面状を呈する土坑と、焼土が混入するカマド状の張り出しを有する土坑が検出されている。これらを住居跡と捉えると東の斜面部に居住域、頂上部には集石炉・土坑を主体とする生活域が形成された状況が考えられる。標高400mを超える山地中の腹に集落を形成することも特徴的な占地と言えよう。群馬県内では当該期の集落の検出例が少なく、今後の類例の増加によって本遺跡の集落構造がより明確になることを期待したい。

### 条痕文期の石器

条痕文期の石器類は、焼石に混在する状況で大量に出土している。器種は磨石・特殊磨石を主体として、スタンプ状石器・凹石・棒状研磨器・敲石・チョッパー様石器・石斧・砥石・台石・石皿等多様であり、当該期の石器組成を知り得る良好な資料である。更に、黒曜石の石器を主体とした小形石器類の製作が行われていたことが判明し、2,000点を超える関連遺物が出土している。石器の製作跡については、埼玉県江南町千代遺跡群西原遺跡において、中期末のチャートを主体とする資料が森田安彦氏によって詳細に検討され、欠損品の再加工も一連の作業として行われていたことが報告されている。(森田 1996) 石器の製作に係る資料は、近年、特に関東での報告例が増えつつあり、今後、各時期・各地域の比較検討を要する事例といえよう。

### 縦条体圧痕文系土器

本遺跡から出土した土器の約90%を占める条痕文系土器は、鷺ヶ島台式と縦条体圧痕文系が大半を占め、少量の茅山下層式が出土している。他に、条痕文のみ施されるものと、縦条体圧痕文系と文様構成を共有するものがある。この中で特筆されるものは、従来、群馬県内での出土例が少ない縦条体圧痕文系土器が多く出土したことである。早期後半～末にかけて存在した縦条体圧痕文系土器については、長野県と周辺地域の出土資料を集成・検討した綿田弘実氏の論考(綿田 1996)、栃木県那須町鹿島遺跡出土資料による坂本篤也氏の常世2式土器の論考(1988 坂本)等がある。これらの成果と本遺跡出土資料を比較し、従来の編年観に対比すると、縦条体圧痕文系土器は茅山下層式期に発生し、早期終末期まで存続したものとして捉えられる。

縦条体圧痕文系土器の初原期に係る土器として、前章で第5類とした「縦条体圧痕文系と文様構成を共有し、半截竹管の押しひき文を多様する類」が挙げられる。これらは文様構成及び施文具等から茅山下層式期に存在したものと考えられ、鷺ヶ島台式の出土量に対して、茅山下層式が少ないと該期に比定される傍

証になるもととして捉えられる。更に、縦条体圧痕文系土器の中に第5類の文様を有し、縦条体圧痕文が組み合わされる196・197・198等と、外面に密な縱位の押し引き文、内面に密な縱位の縦条体圧痕文が施文される199・204等が存在することから、第5類の土器は縦条体圧痕文系土器の発生に関与した土器群として、重要な位置を占めているといえよう。

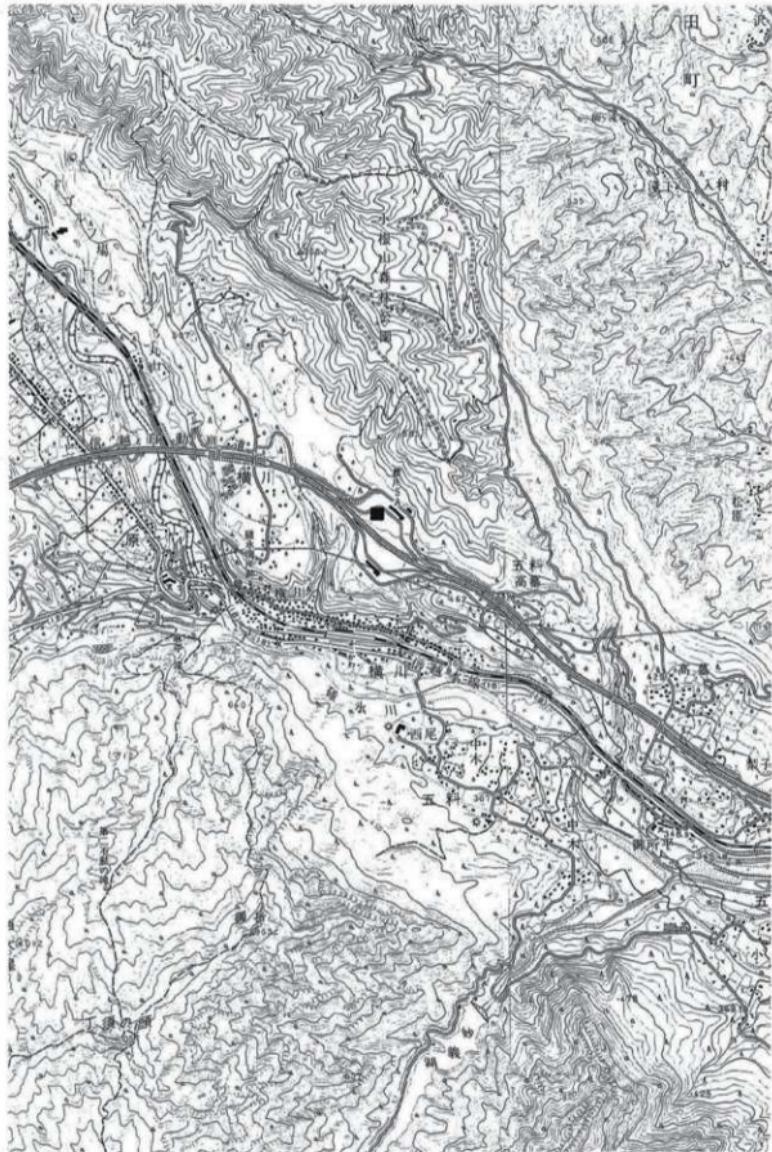
茅山上層式期に隆盛した様相を呈する縦条体圧痕文系土器は、口縁部に密な縱位の縦条体圧痕文が施文される126・131・132・146等と、やや斜位に施文される134・137・140等から、次時期には上が長い羽状を呈する153・156等、羽状を呈する94号土坑-1・157・163等に変遷し、打越式期には鋸齒状・V字状に施文される172・174・175・179等に変遷したと思われる。尚、神之木台式期には、本遺跡で見られなかった縦条体圧痕文を横位多段に施文する類が存在した可能性が高く、のことから本遺跡の特徴であるローム二次堆積層は、遺物の空白期間である神之木台式期、もしくはその前後の時期に大規模な地滑りが発生したと想定され、条痕文期の遺構・遺物が地滑りによって埋没した後、塚原～花積下層式期になって、再びこの差に集落が形成されたと考えられる。

縦条体圧痕文系土器については、近年、群馬県及び周辺地域においても資料が増えつつあり、既に形式設定を行える資料が蓄積されている状況である。本報告では本遺跡出土資料と他遺跡出土資料の比較検討が十分に行えなかっただが、紙面を変えて再検討をすべき課題と考えている。

#### 参考文献

- 浅利 司 1990 「縦条体圧痕文を有する土器群について」『新発見6』止梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
暮巻半男 1992 「群馬県における縦文時代早中期から前期初頭土器群の様相」－縦文系土器を中心にして－  
『研究紀要』10 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
柳田弘実 1996 「中部高地における縦文早期末格条体圧痕文上部」『長野県立歴史館研究紀要』第2号 長野県立歴史館  
榎本鉄也 1988 「駒島駿道跡　道の歴道跡」－国道294号線改良工事に伴う発掘調査報告－ (財) 板木県文化振興事業団  
守屋昌文・榎本鉄也 1986 「高麗呂遺跡」－昭和59年度宮崎県鹿児島市高麗川地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－  
芳町市教育委員会  
黒坂慎二 1995 「良山／上原／向原」 首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－IV－  
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
新井 達・森田安奈也 1996 「千代遺跡群」－縦文時代編－ 江南町教育委員会・江南町「代遺跡群発掘調査会  
縦文セミナーの会編 1994 「早期終末・前軌初頭の縦條相」 縦文セミナーの会  
神奈川考古同人会編 1980 「上器資料集成刊集」 (シンボジウム'80) 縦文時代中期後半の諸問題  
－特に加曾利E式と曾利式土器との関係について－ 『神奈川考古』第10号 神奈川考古同人会  
神奈川考古同人会編 1981 「シンボジウム縦文時代中期後半の諸問題」－特に加曾利E式と曾利式土器との関係について  
『神奈川考古』第11号 神奈川考古同人会  
神奈川考古同人会縦文研究グループ編 1983 「上器資料集成刊集」 (シンボジウム'83) 縦文時代早期末・前期初頭の諸問題  
『神奈川考古』第17号 神奈川考古同人会縦文研究グループ  
神奈川考古同人会編 1984 「シンボジウム 縦文時代早期末・前軌初頭の諸問題」記録・論考集  
『神奈川考古』第18号 神奈川考古同人会  
松元町誌編さん委員会編 1985 「松井田町誌」 松井田町誌編さん委員会  
群馬県史編さん委員会編 1988 「群馬県史 資料編」 原始古代1】 群馬県  
長野県編 1988 「長野県史 考古資料編 全1巻(4) 道像・遺物」 (社) 長野県史刊行会  
芦沢光則編 1994 「縦文時代研究辞典」 東京堂出版

# 写 真 図 版



■—横川大林遺跡

0 500 1000 1500

横川大林遺跡

図版  
1



横川大林遺跡 空撮 (国土地理1991年撮影 K T - 91- I X C 7- 2)

## 横川大林遺跡

図版2



1. 調査前現況



2. 同

横川大林遺跡

図版  
3



1. 遺跡遠景（空撮）



2. トレンチ設定状況（空撮）

## 横川大林遺跡

図版  
4



1. 3~5トレンチ



2. 8トレンチ



3. 14トレンチセクション



4. 24トレンチ



5. 29トレンチ



6. 42トレンチ~



7. 南調査区 基本堆積土層



8. 同

横川大林遺跡

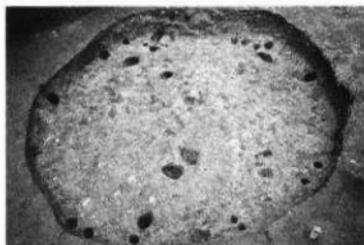
図版  
5



1. 5号住居跡



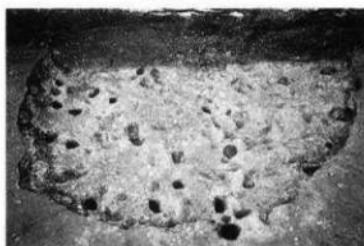
2. 同 覆土地積状況



3. 同 完掘



4. 6号住居跡検出状況



5. 同 完掘

# 横川大林遺跡

図版 6



1. 9号住居跡



2. 同 完掘



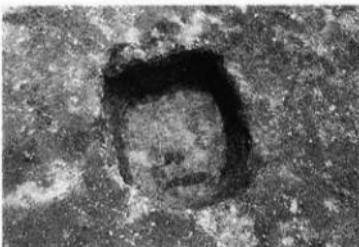
3. 7号集石



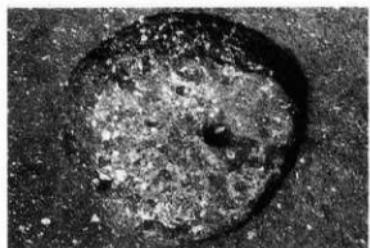
4. 南調査区地割れ全景



5. 232号土坑



6. 238号土坑



7. 241号土坑



8. 242号土坑

横川大林遺跡

図版  
7



1. 南調査区斜面部 遺物出土状況



2. 同 遺構確認状況

## 横川大林遺跡

図版  
8



1. 南調査区斜面部 遺物出土状況



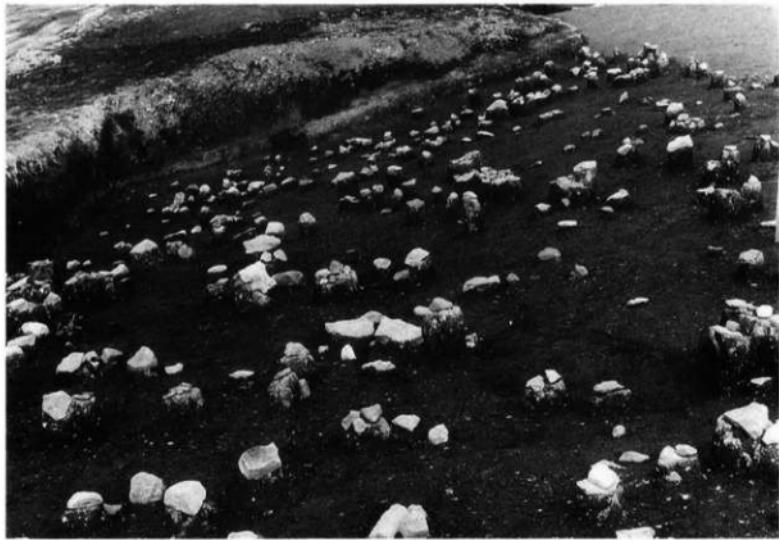
2. H-7 グリット 遺物出土状況

横川大林遺跡

図版  
9



1. 南調査区台地上 遺物出土状況



2. 南調査区 遺物出土状況

横川大林遺跡

図版  
10



1. 南調査区全景（空撮）



2. 南調査区土坑群

横川大林遺跡

圖版  
11



1. 南調査区遺物出土状況



2. 同



3. 同



4. 同



5. 同



6. 同



7. 同



8. 同

## 横川大林遺跡

図版  
12



1. H-7 グリット 遺物出土状況



2. 同



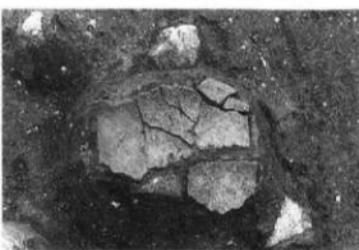
3. 同



4. I-7 グリット 遺物出土状況



5. J-6 グリット 遺物出土状況



6. J-7 グリット 遺物出土状況



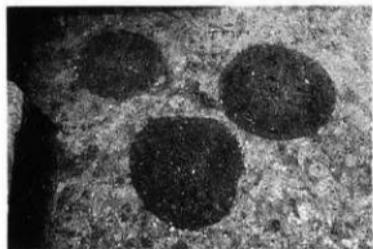
7. L-6 グリット 遺物出土状況



8. I-7 グリット 黒曜石出土状況

横川大林遺跡

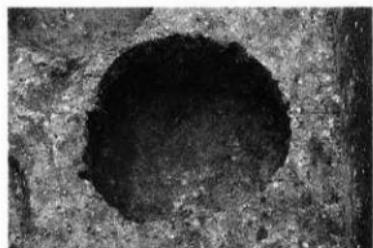
図版  
13



1. 38・39・40号土坑



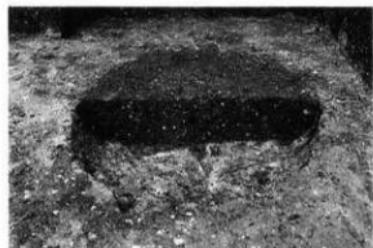
2. 38・39・40号土坑



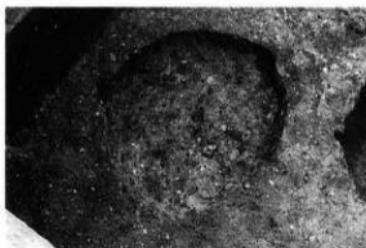
3. 38号土坑



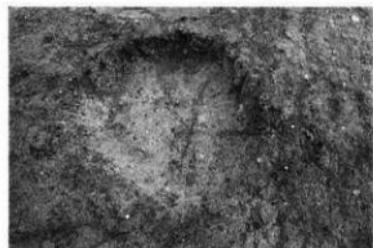
4. 39号土坑



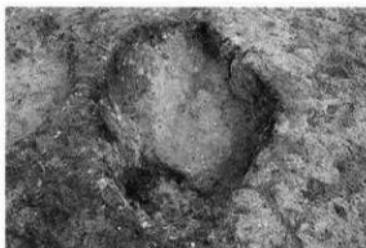
5. 40号土坑覆土堆積状況



6. 40号土坑



7. 41号土坑



8. 42号土坑

# 横川大林遺跡

圖版  
14



1. 43号土坑



2. 48号土坑



3. 49号土坑



4. 52号土坑



5. 53号土坑



6. 同 覆土堆積狀況



7. 56号土坑



8. 57号土坑

横川大林遺跡

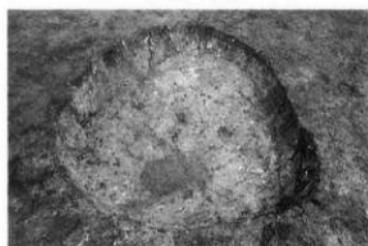
圖版  
15



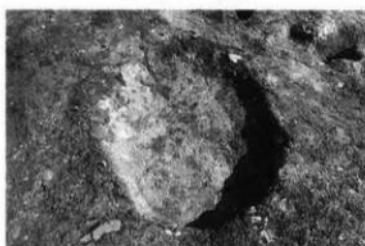
1. 58号土坑



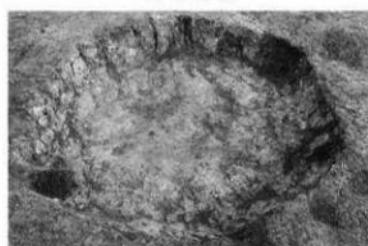
2. 60・130号土坑



3. 61号土坑



4. 64号土坑



5. 65号土坑



6. 68・69号土坑



7. 72号土坑



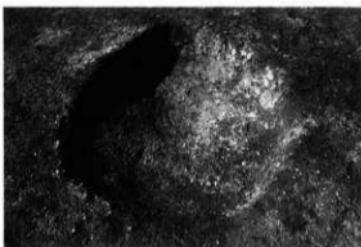
8. 74・131号土坑

# 横川大林遺跡

図版  
16



1. 75号土坑



2. 79号土坑



3. 82号土坑



4. 84号土坑



5. 85号土坑



6. 86号土坑



7. 87号土坑



8. 88号土坑

横川大林遺跡

圖版  
17



1. 94号土坑覆土堆積狀況



2. 94号土坑



3. 97号土坑覆土堆積狀況



4. C区東 97号土坑



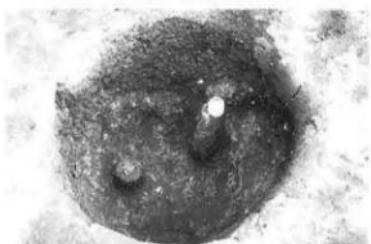
5. 105号土坑



6. 132号土坑



7. 144号土坑



8. 147号土坑

# 横川大林遺跡

図版  
18



1. 149号土坑



2. 同 張り出し部分



3. 150・151・152号土坑



4. 158号土坑



5. 164号土坑

横川大林遺跡

図版  
19



1. 173号土坑確認状況



2. 173号土坑



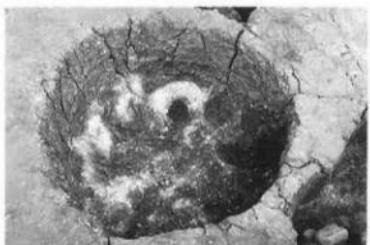
3. 181号土坑



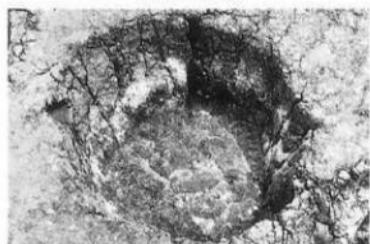
4. 185号土坑



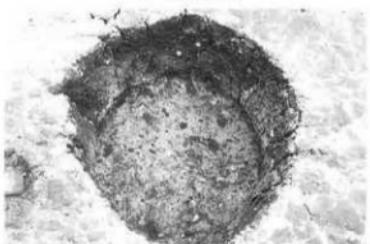
5. 187号土坑



6. 189号土坑



7. 192号土坑



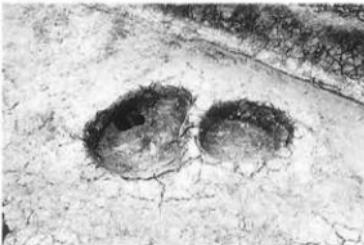
8. 193号土坑

# 横川大林遺跡

図版  
20



1. 206号土坑



2. 212・213号土坑



3. 214・217・218号土坑



4. 221号土坑



5. 222号土坑

横川大林遺跡

圖版  
21



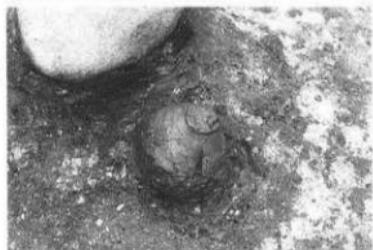
1. 225号土坑



2. 230号土坑

# 横川大林遺跡

図版  
22



1. 230号土坑遺物出土状況



2. 207・208・209・228・229号土坑



3. 234号土坑



3. 236、237号土坑



5. 1号集石



6. 2号集石



7. 3号集石



8. 6号焼土

横川大林遺跡

図版  
23



1. 土坑配置状況（前期以降）



2. 同



3. 北調査区全景



4. 南調査区東全景



5. F-8 グリット遺物出土状況



6. 同



7. I-8 グリット石皿出土状況



8. トレンチ内石皿出土状況

## 横川大林遺跡

図版  
24



1. 3号住居跡



2. 4号住居跡



3. 1号住居跡



4. 1号住居跡



5. 2号住居跡



6. 同完掘



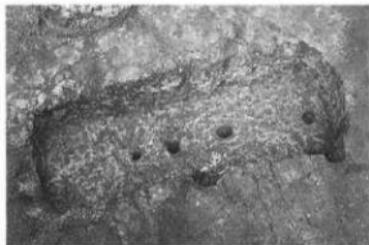
7. 1号埋設土器



8. 同

横川大林遺跡

圖版  
25



1. 2号土坑



2. 4号土坑



3. 7号土坑



4. 11号土坑



5. 18号土坑



6. 22号土坑



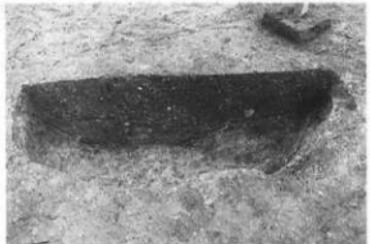
7. 23号土坑



8. 同 覆土堆積狀況

## 横川大林遺跡

圖版  
26



1. 24号土坑 覆土堆積狀況



1. 24号土坑



3. 25号土坑 覆土堆積狀況



4. 25号土坑



5. 26号土坑



6. 32号土坑



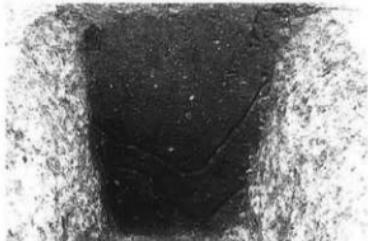
7. 33号土坑



8. 34号土坑

横川大林遺跡

圖版  
27



1. 37号土坑 覆土堆積狀況



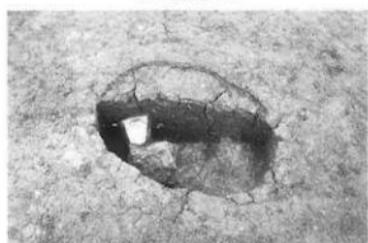
2. 37号土坑



3. 102号土坑



4. 103号土坑



5. 107号土坑 覆土堆積狀況



6. 107号土坑



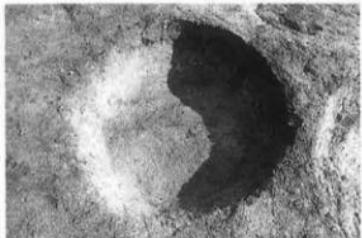
7. 110号土坑



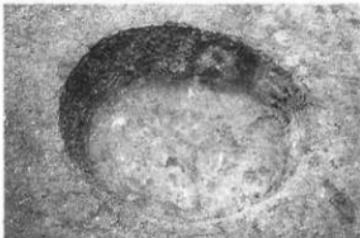
8. 115号土坑

# 横川大林遺跡

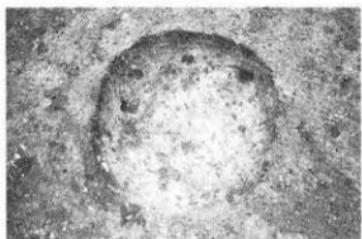
図版  
28



1. 120号土坑



2. 182号土坑



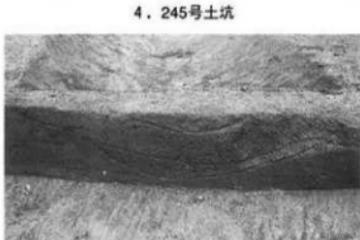
3. 201号土坑



4. 245号土坑



5. 1号溝



6. 1号溝 覆土堆積状況



7. 北調査区基本堆積土層



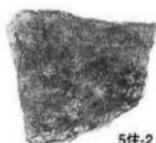
8. 北調査区 1号溝路

横川大林遺跡

図版  
29



5住-1



5住-2



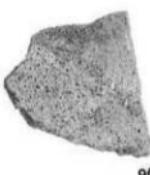
6住-1



6住-2



9住-1



9住-2



86土-1



241土-1



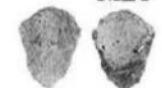
242土-1



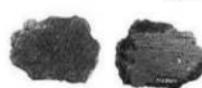
242土-2



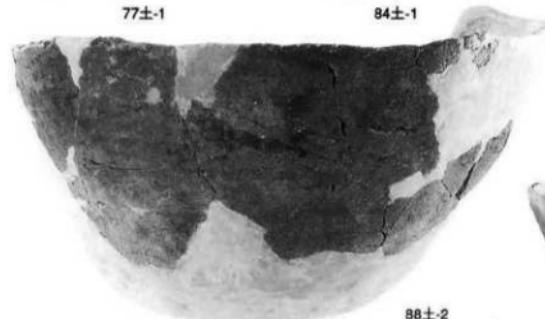
82土-1



77土-1



84土-1



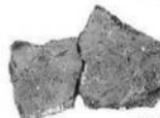
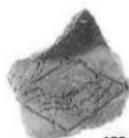
88土-2



88土-1

横川大林遺跡

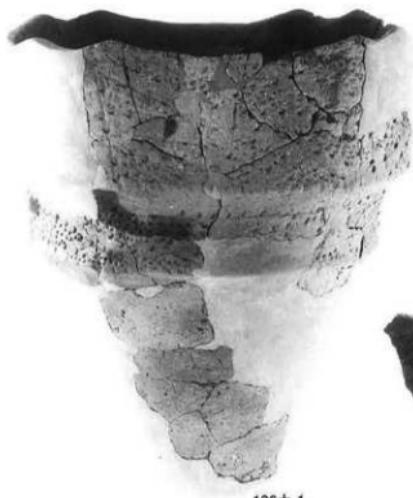
図版  
30



195土-1

横川大林遺跡

図版  
31



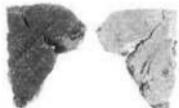
196土-1



214土-1



222土-1



231土-1



234土-1



236土-1



224土-1



230土-1



47土-1



57土-1



58土-1



132土-1



74土-1



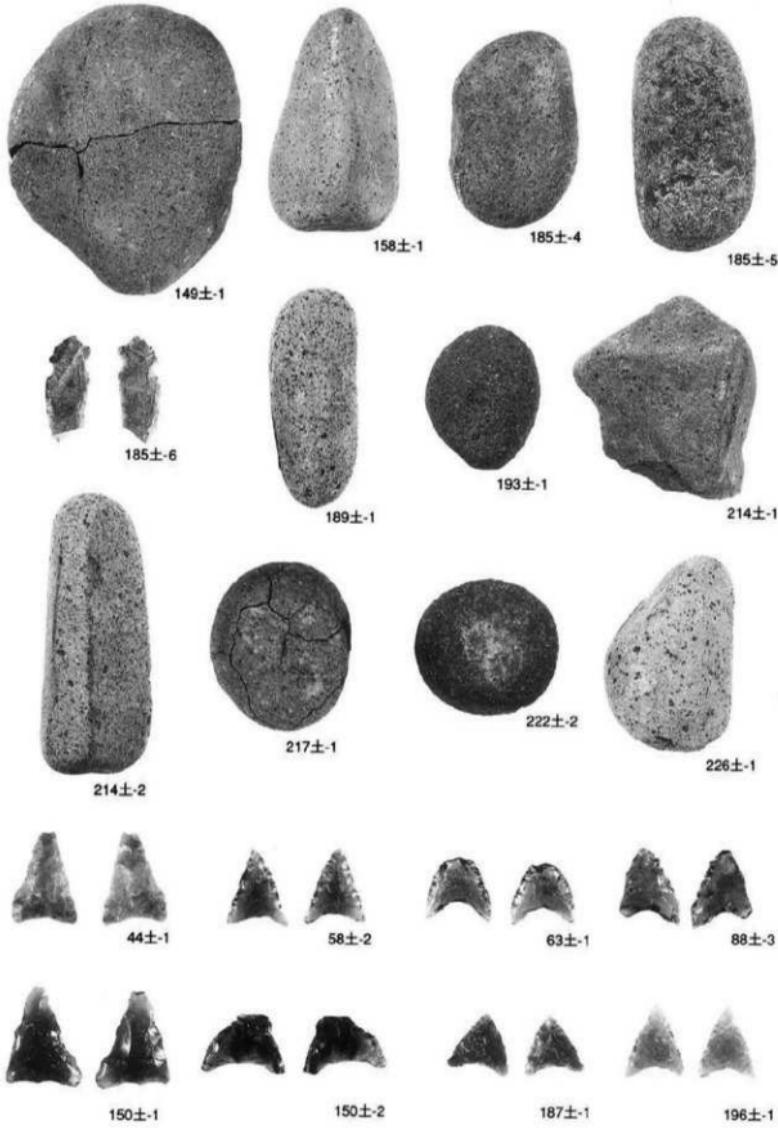
153土-1



74土-2

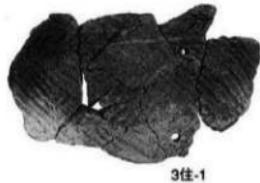
横川大林遺跡

図版  
32



横川大林遺跡

図版  
33



3住-1



3住-2



3住-3



3住-5



3住-4



3住-6



3住-7



4住-1



4住-3



4住-4



4住-5



4住-6



1住-1



1住-2



1住-3

横川大林遺跡

図版  
34



2住-1



2住-2



1号埋設土器出土石鏃



3土-1



1号埋設土器



20土-1



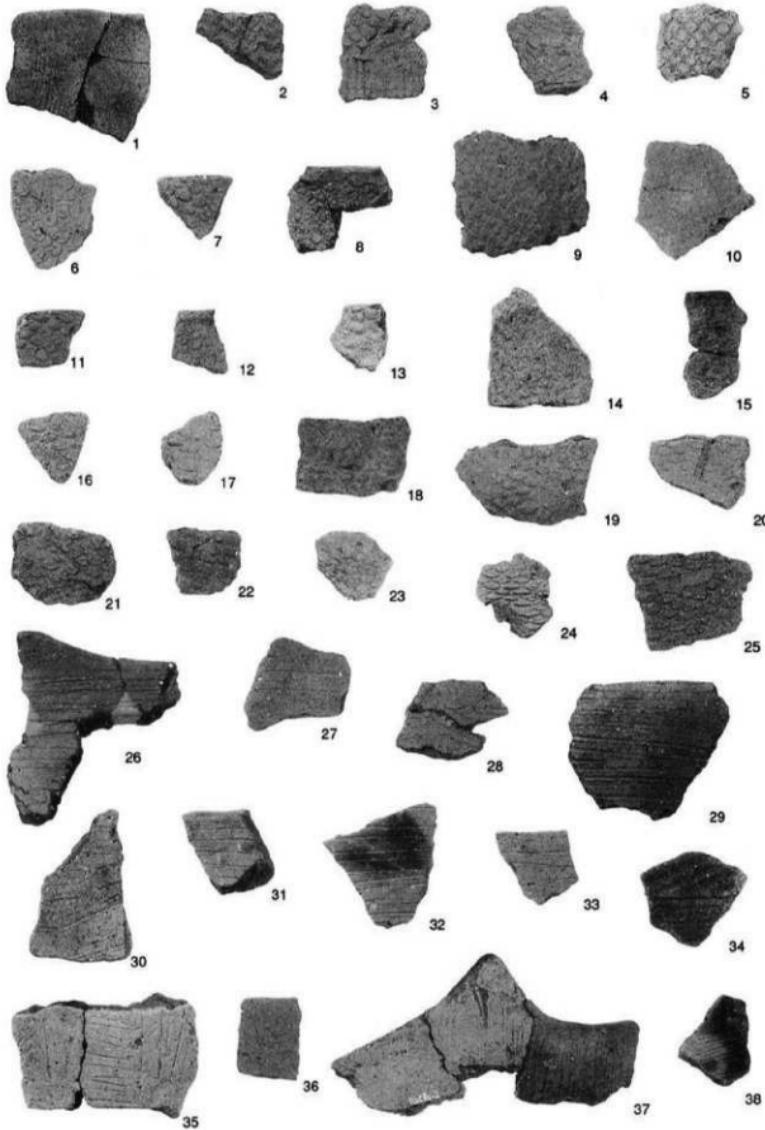
21土-1



35土-1

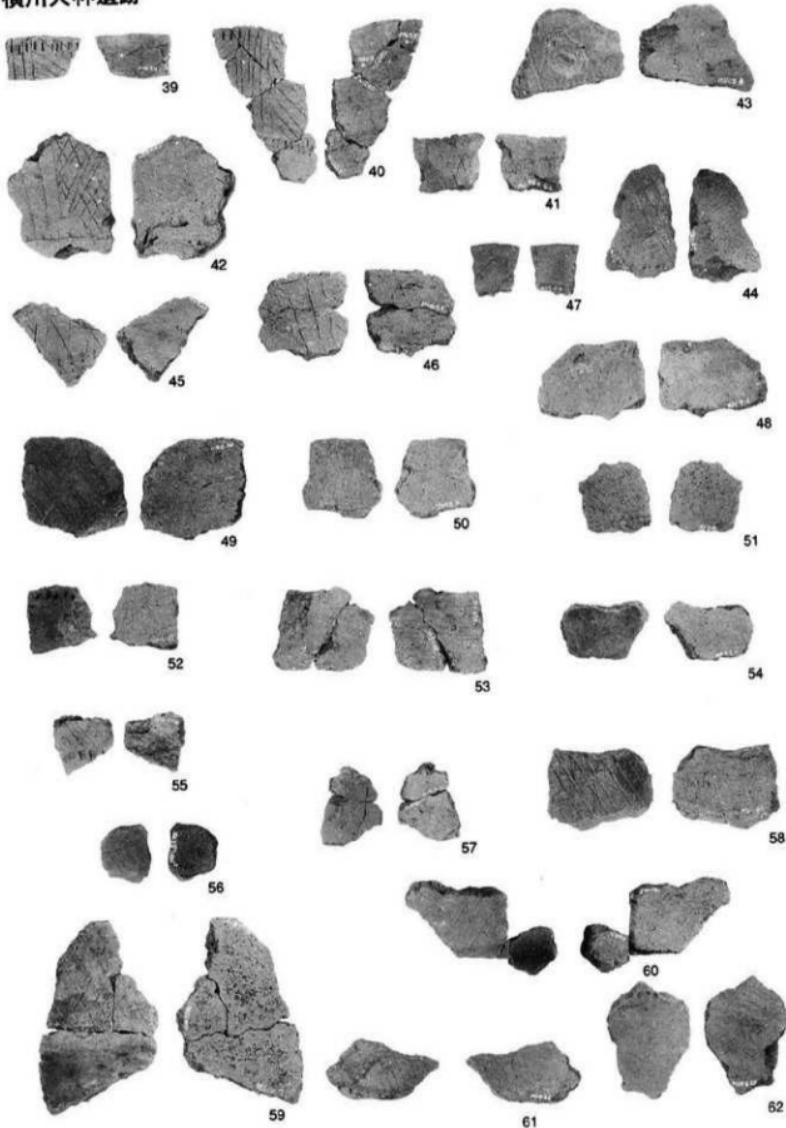
横川大林遺跡

図版  
35



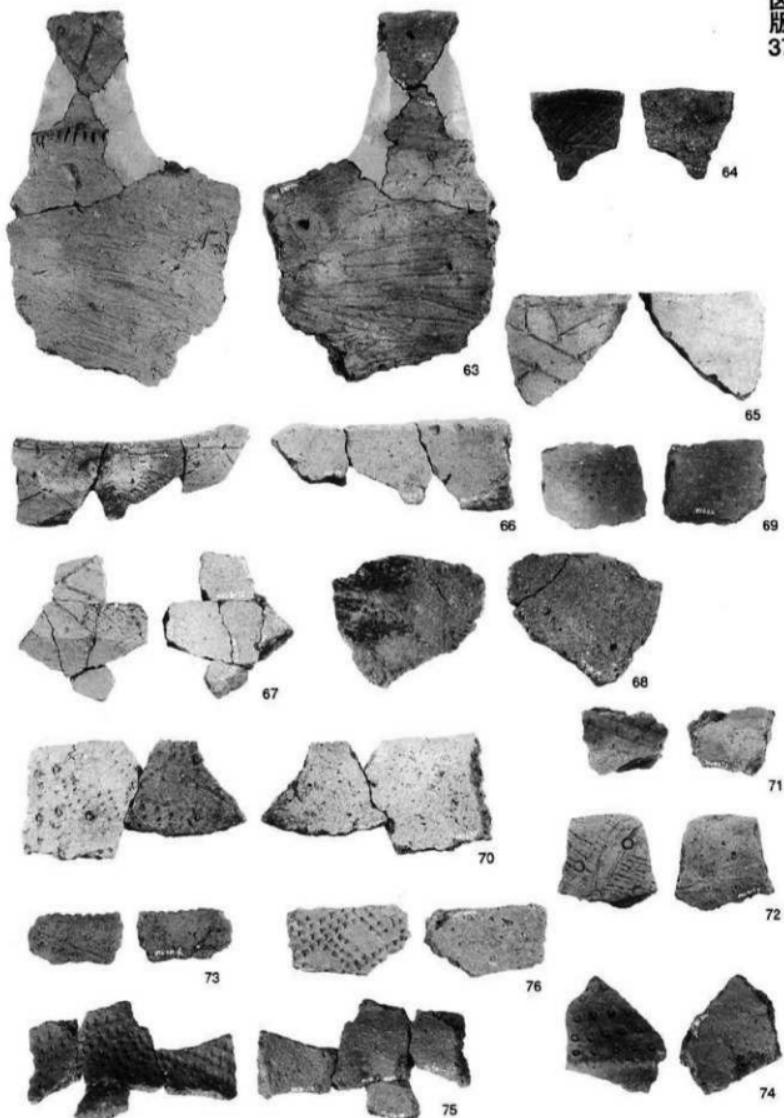
## 横川大林遺跡

図版  
36



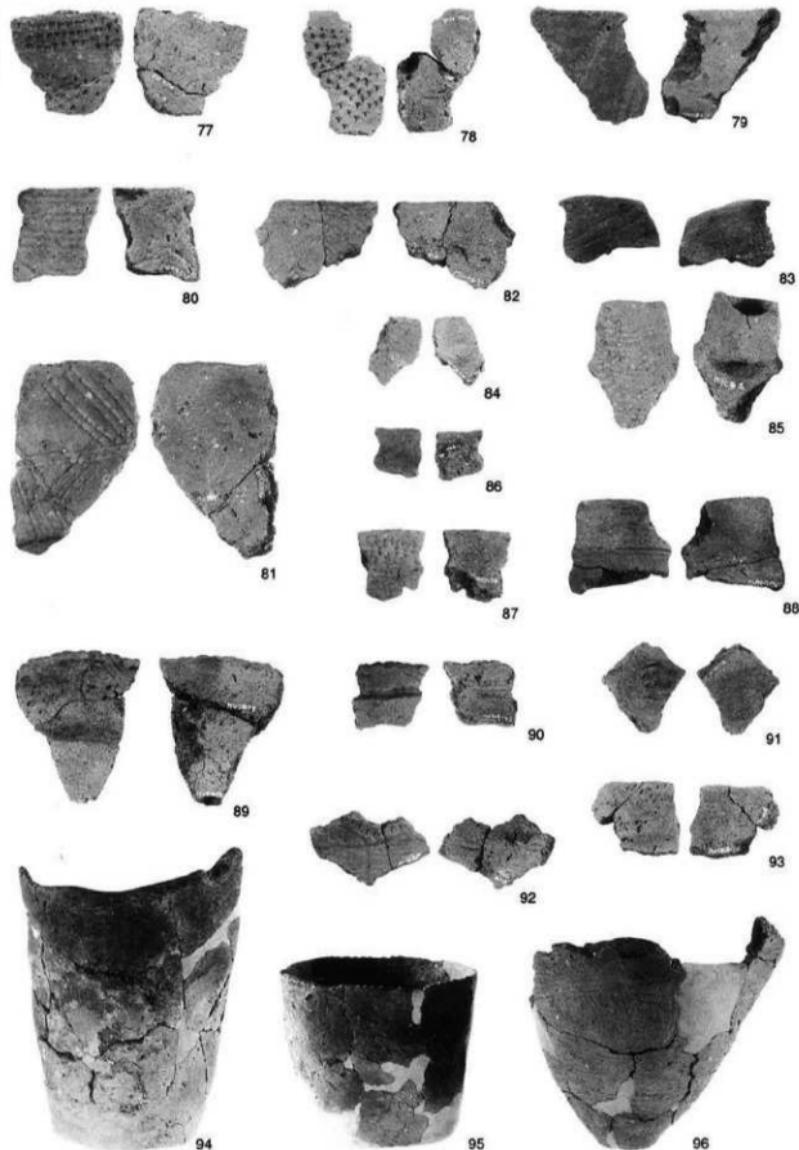
横川大林遺跡

図版  
37



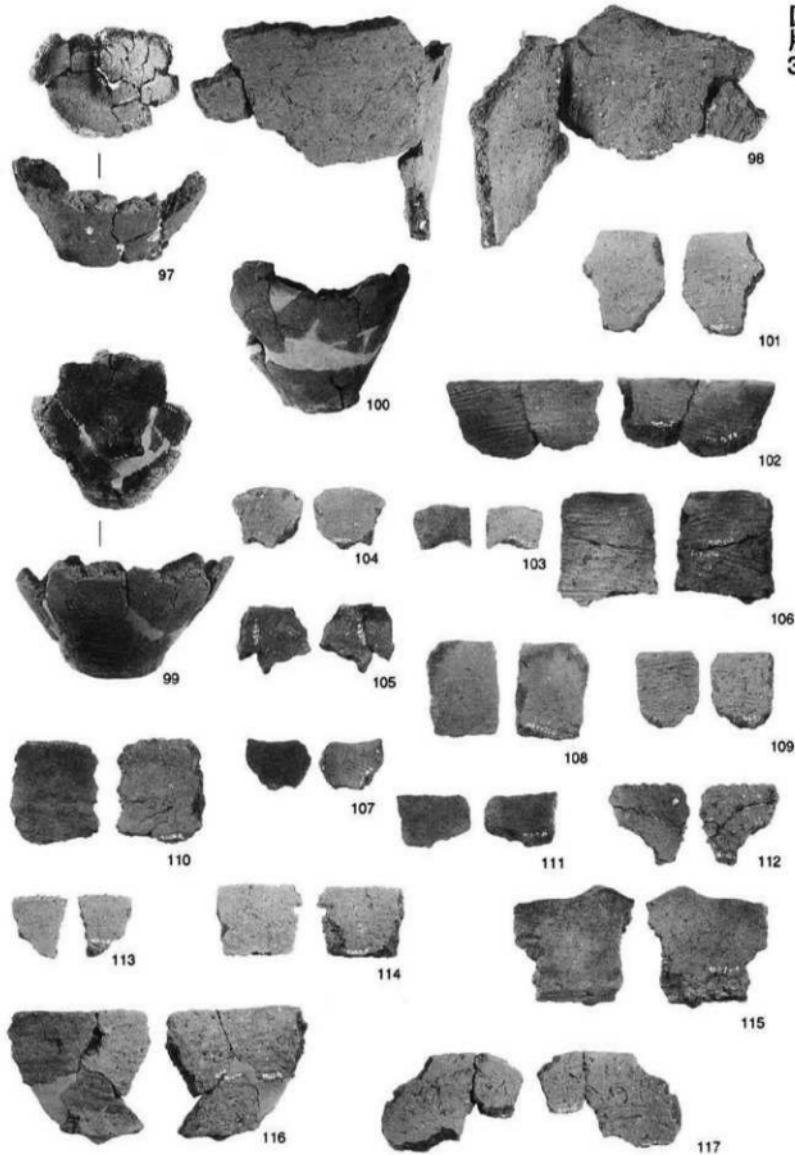
横川大林遺跡

図版  
38



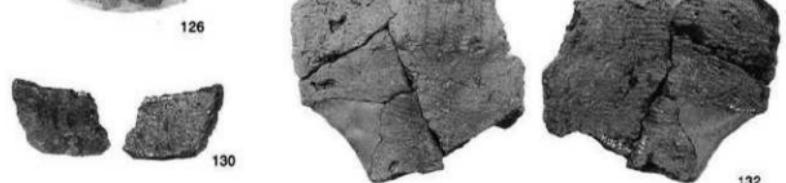
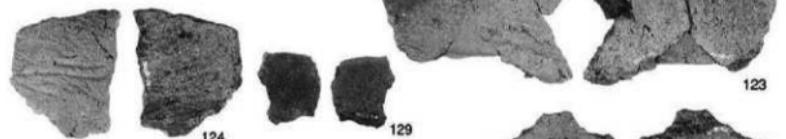
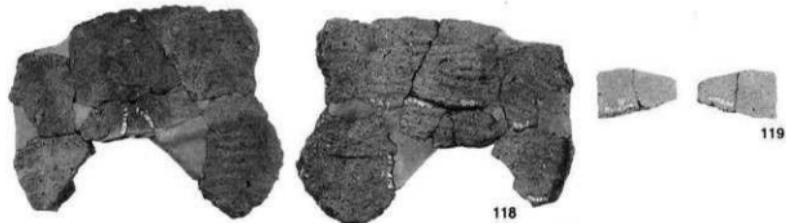
横川大林遺跡

図版  
39



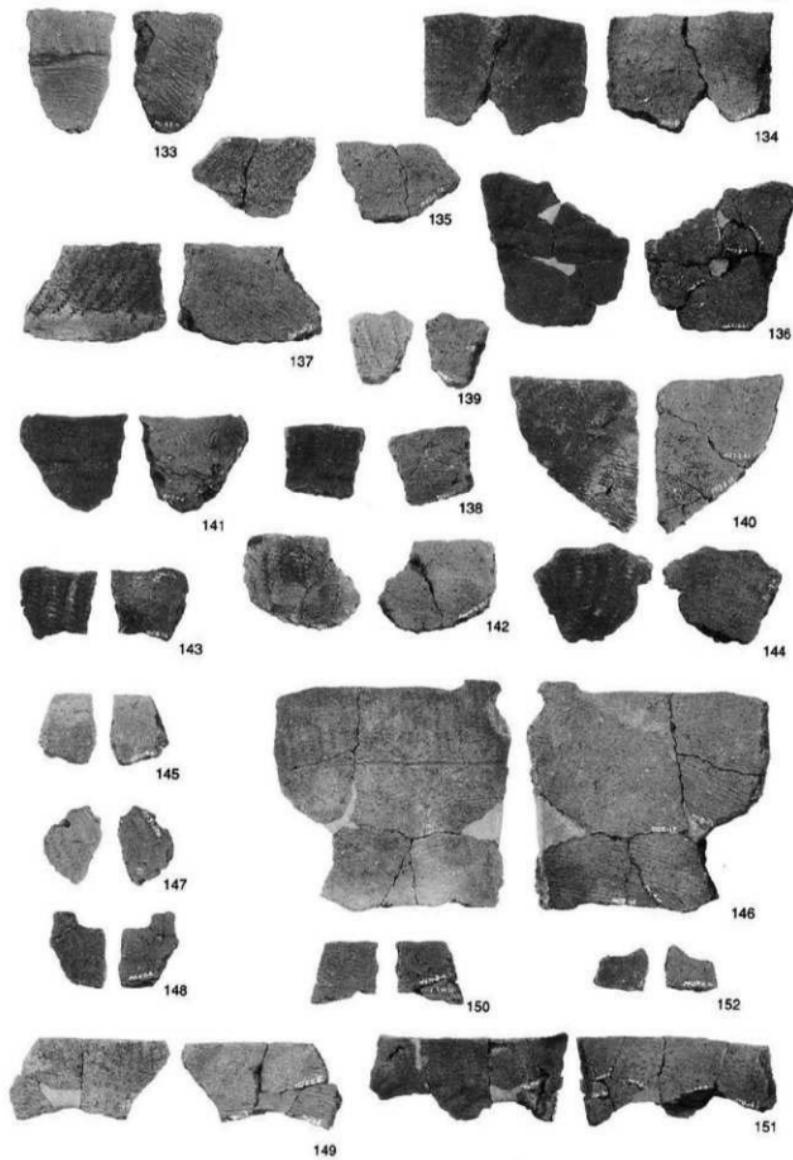
横川大林遺跡

図版  
40



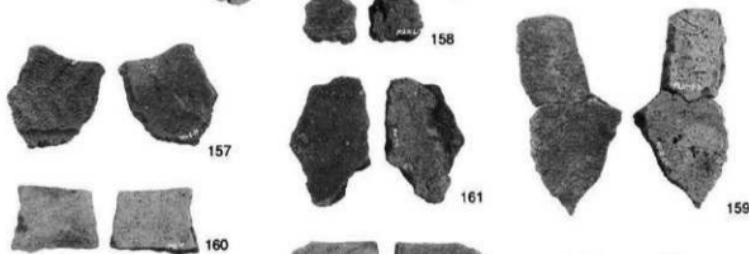
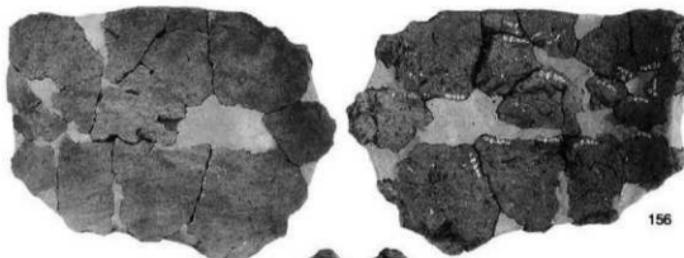
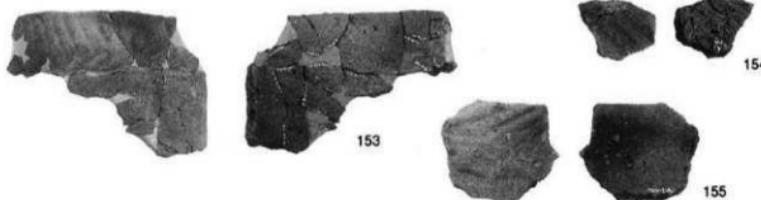
横川大林遺跡

図版  
41



横川大林遺跡

図版  
42



横川大林遺跡

図版  
43



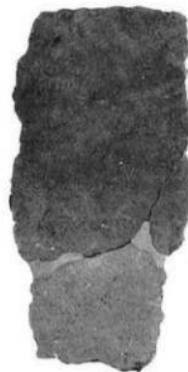
169



170



171



172



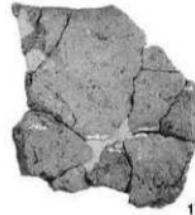
173



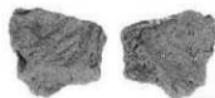
174



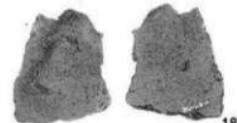
175



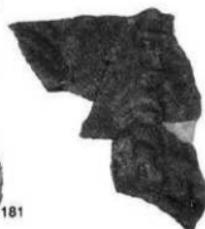
176



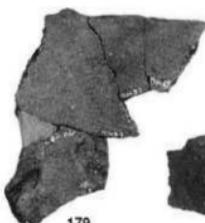
177



178



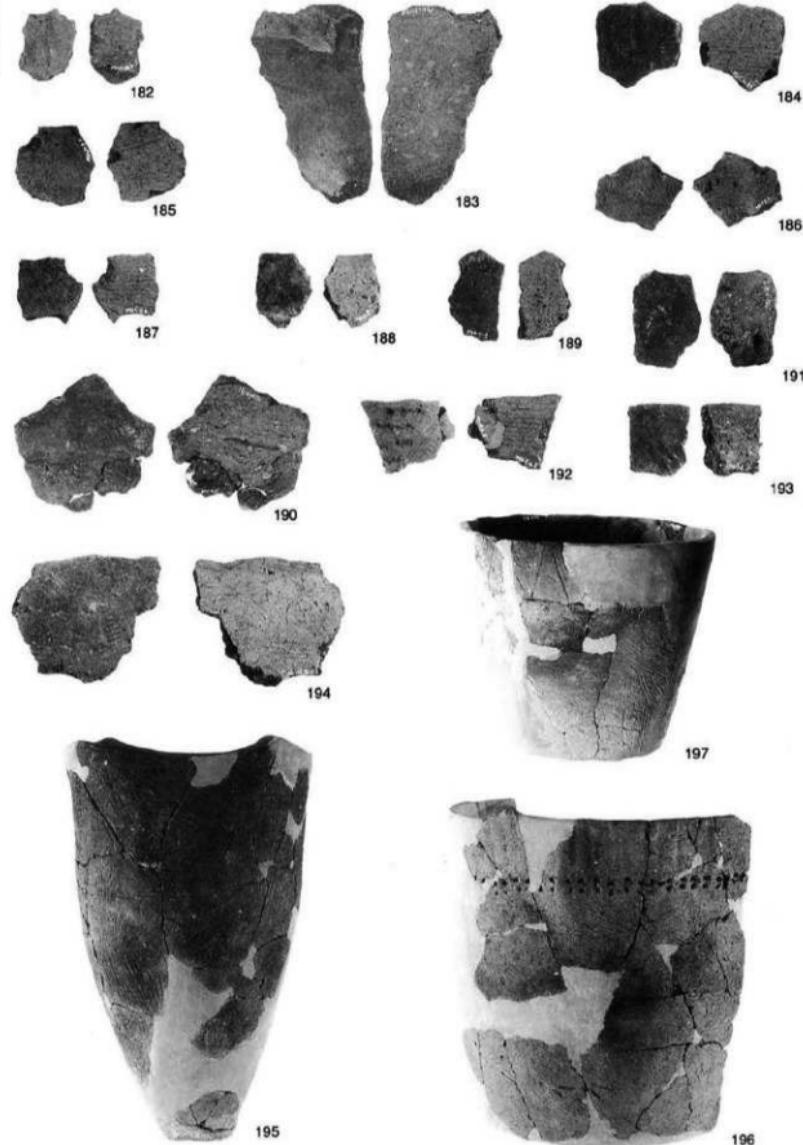
179



180

## 横川大林遺跡

図版  
44

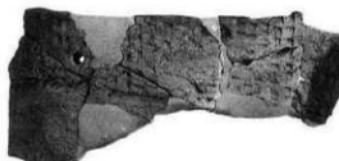


横川大林遺跡

図版  
45



198



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210



211



212



213



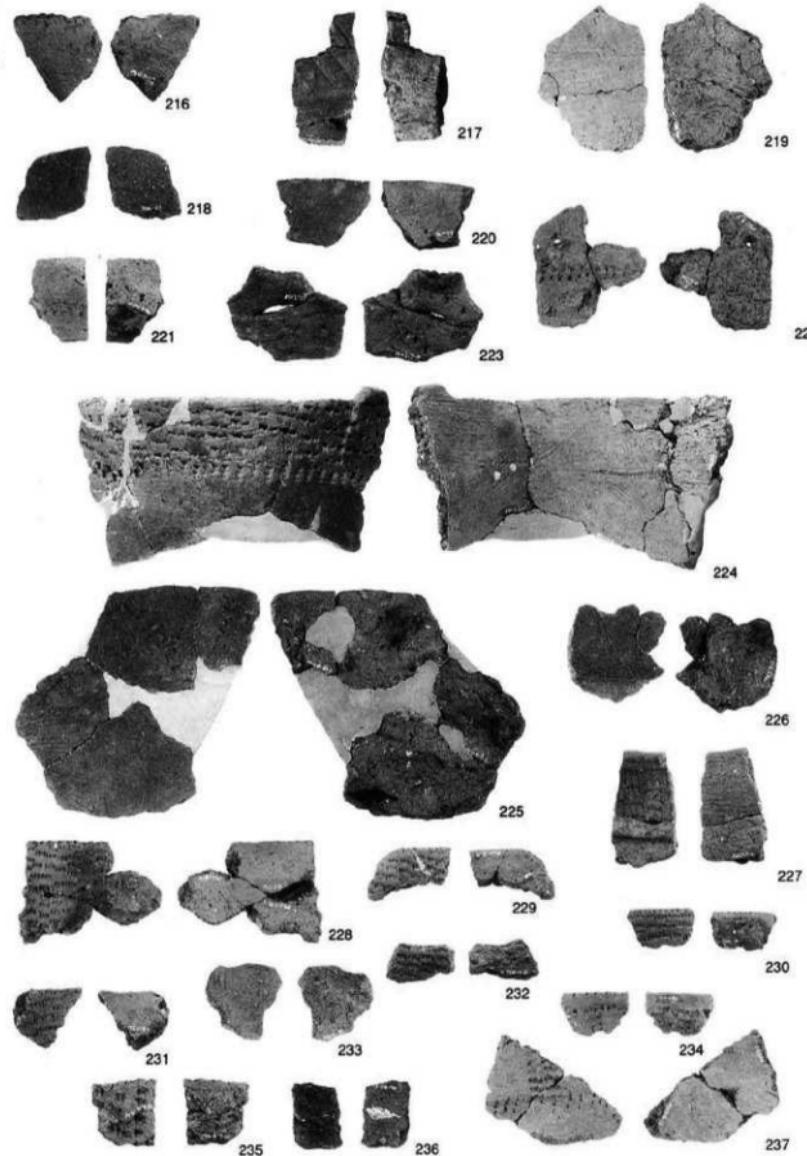
214



215

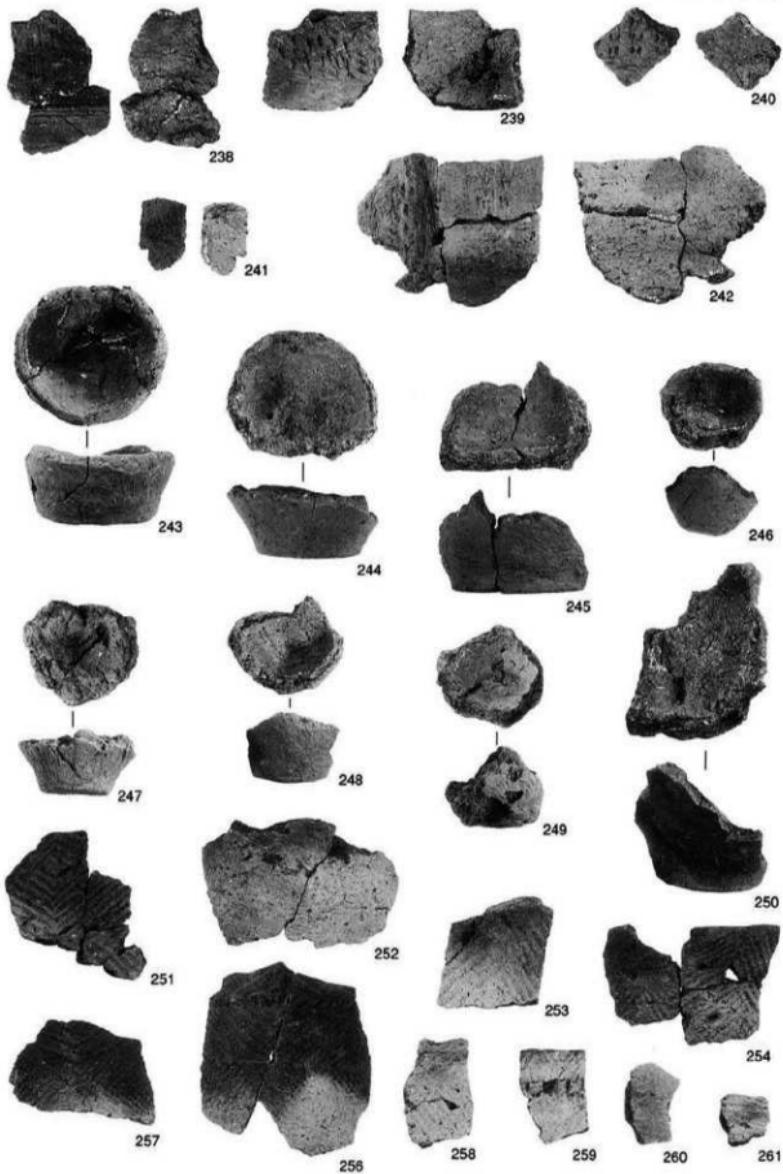
横川大林遺跡

図版  
46



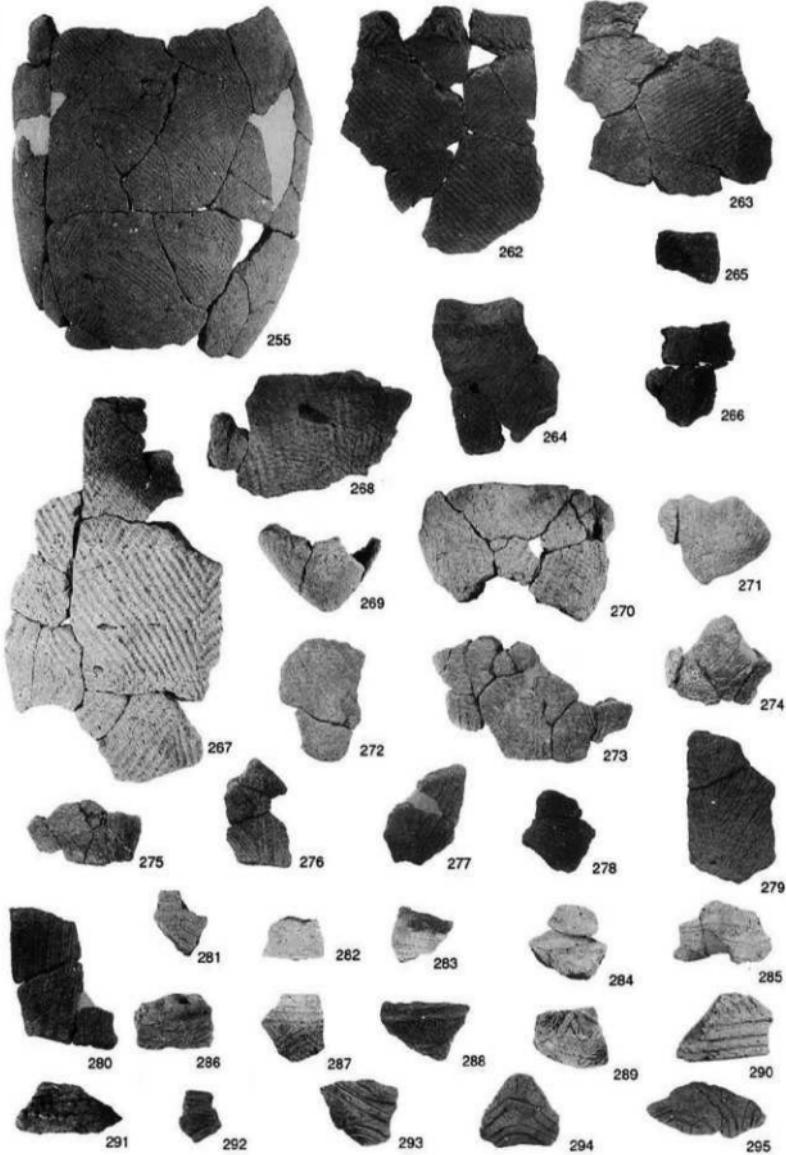
横川大林遺跡

図版  
47



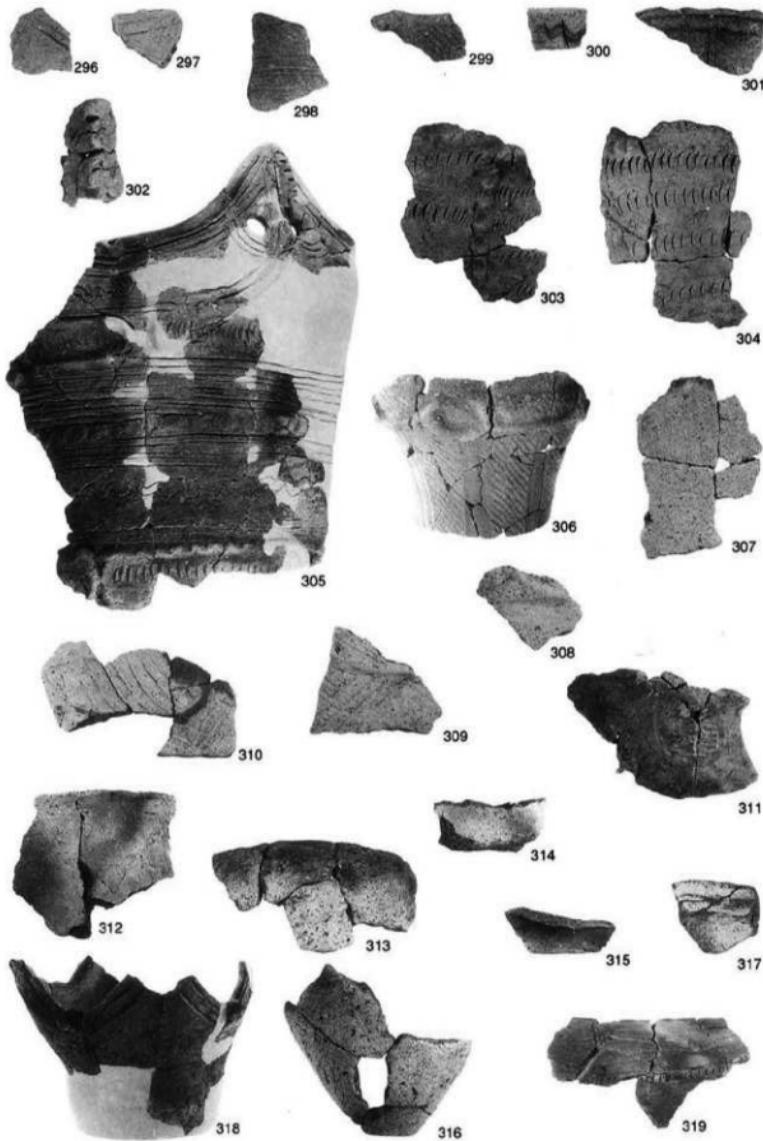
横川大林遺跡

図版  
48



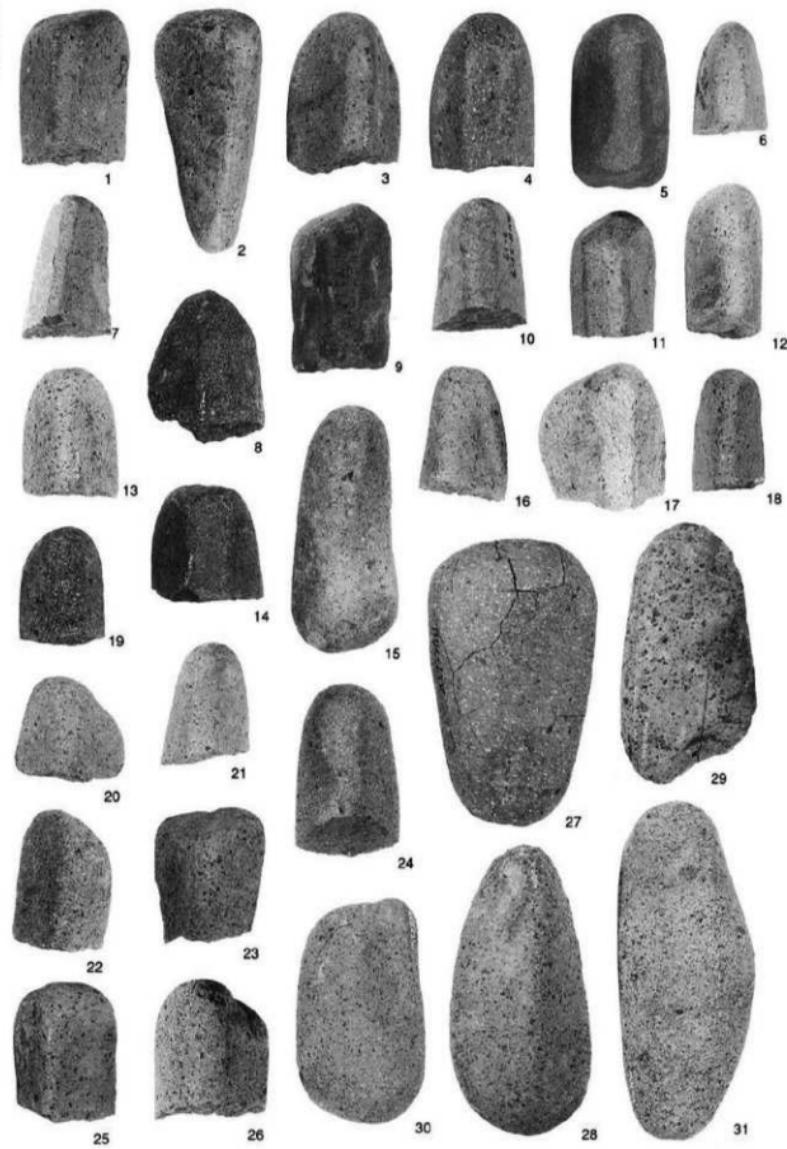
横川大林遺跡

図版  
49



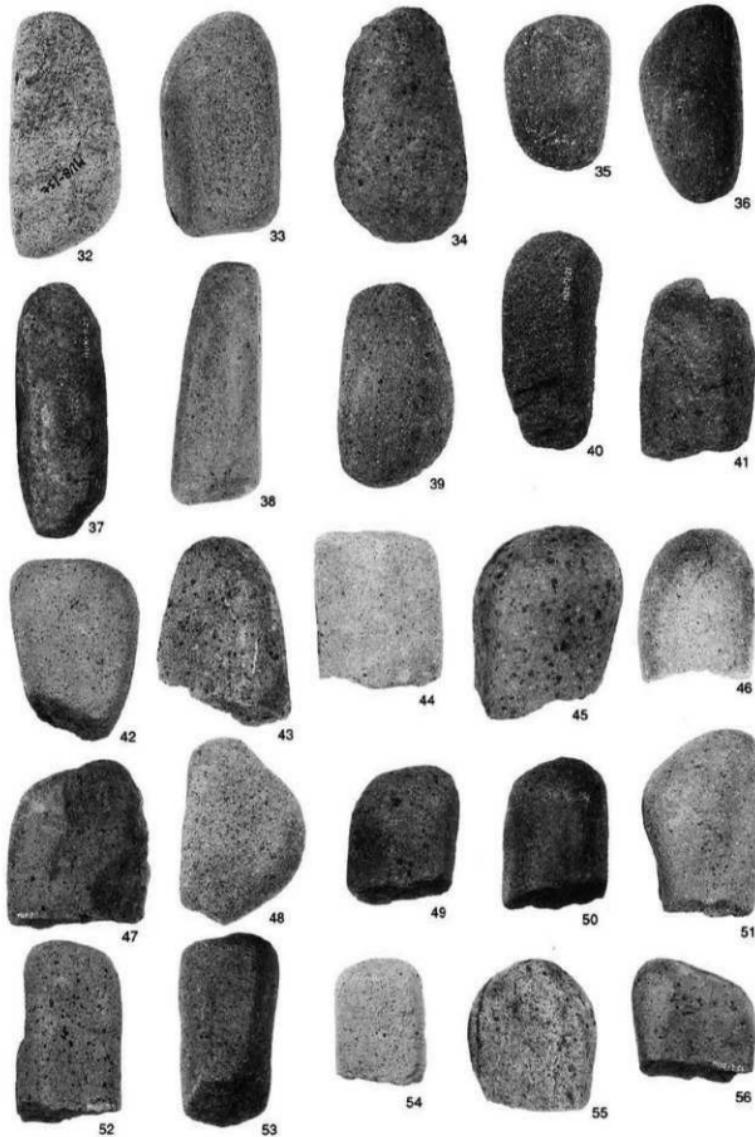
横川大林遺跡

図版  
50



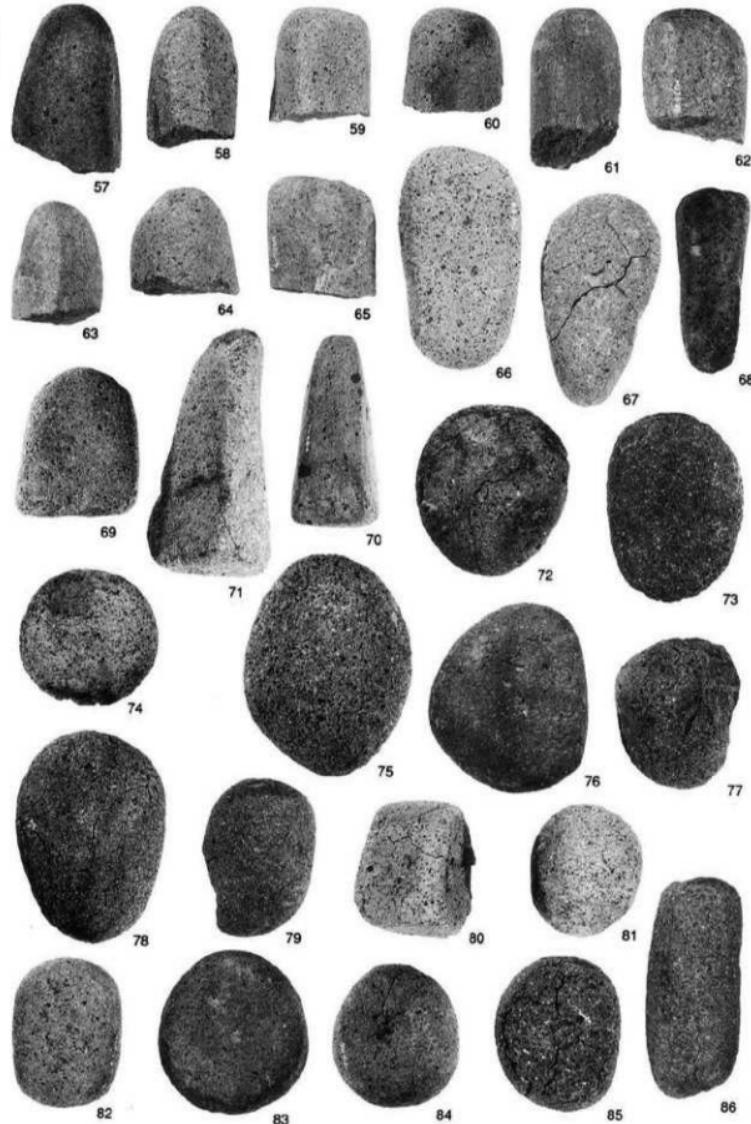
横川大林遺跡

図版  
51



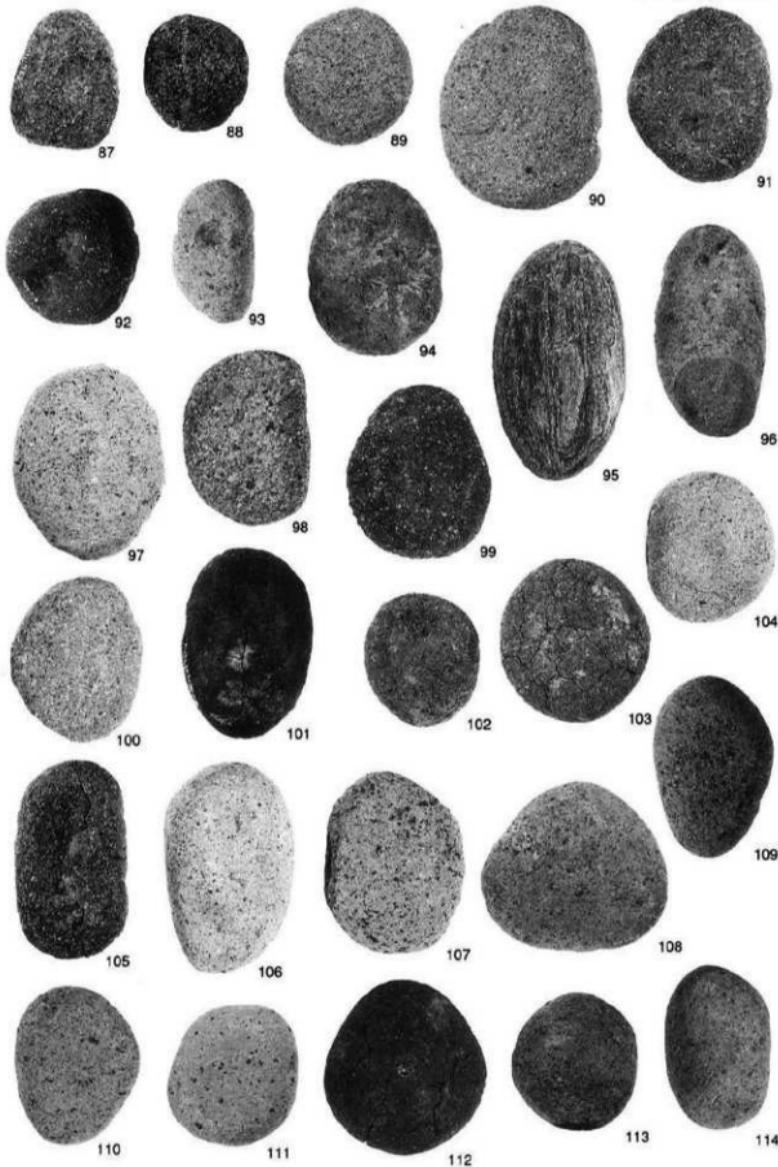
## 横川大林遺跡

図版  
52



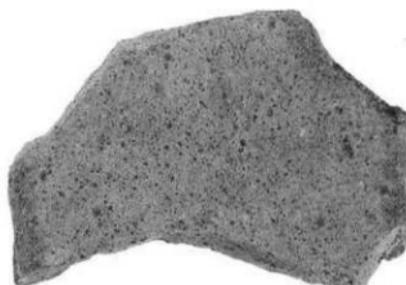
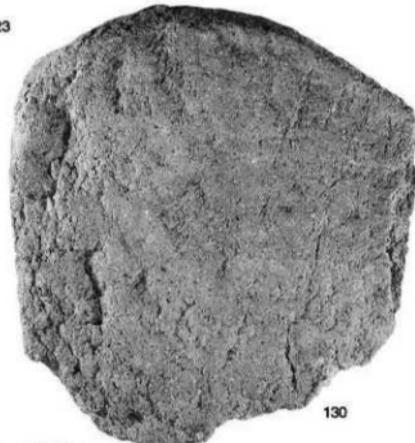
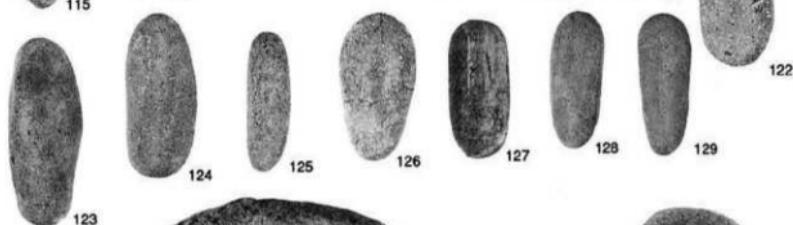
横川大林遺跡

図版  
53



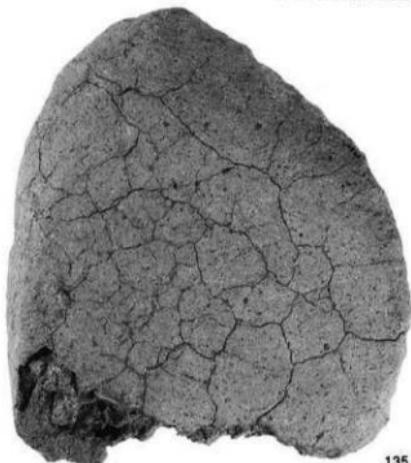
横川大林遺跡

図版  
54



横川大林遺跡

図版  
55



134

135



136



137



138



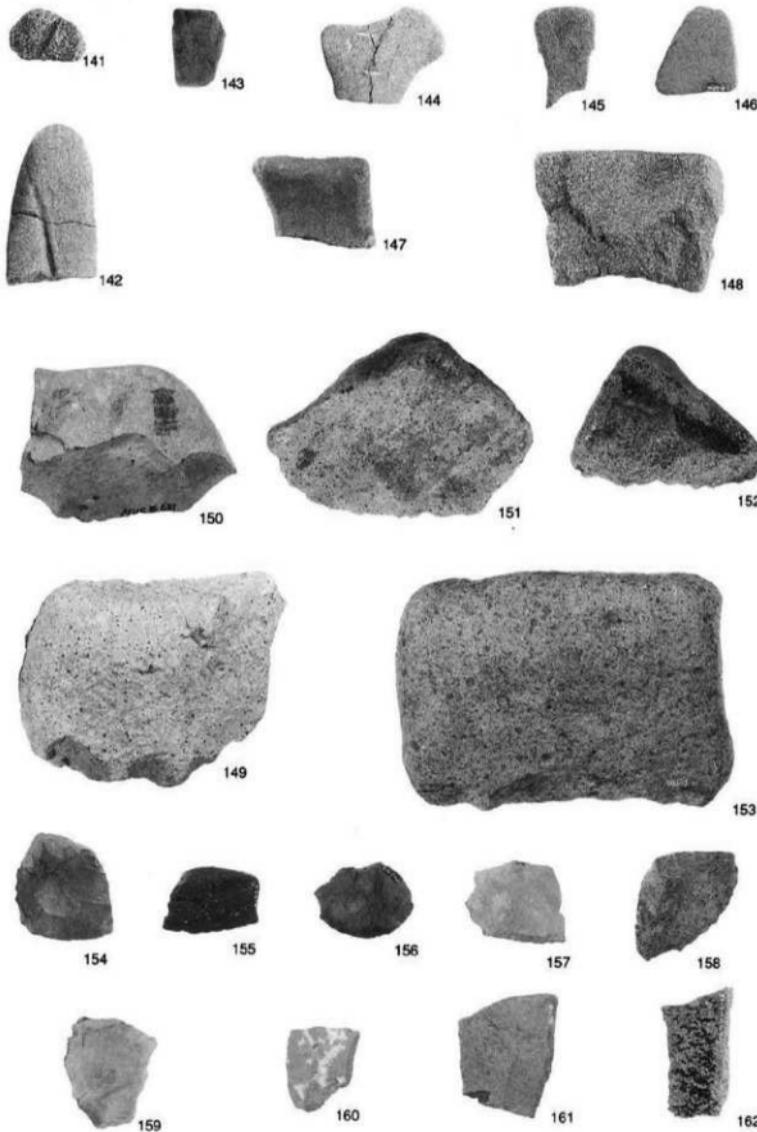
139



140

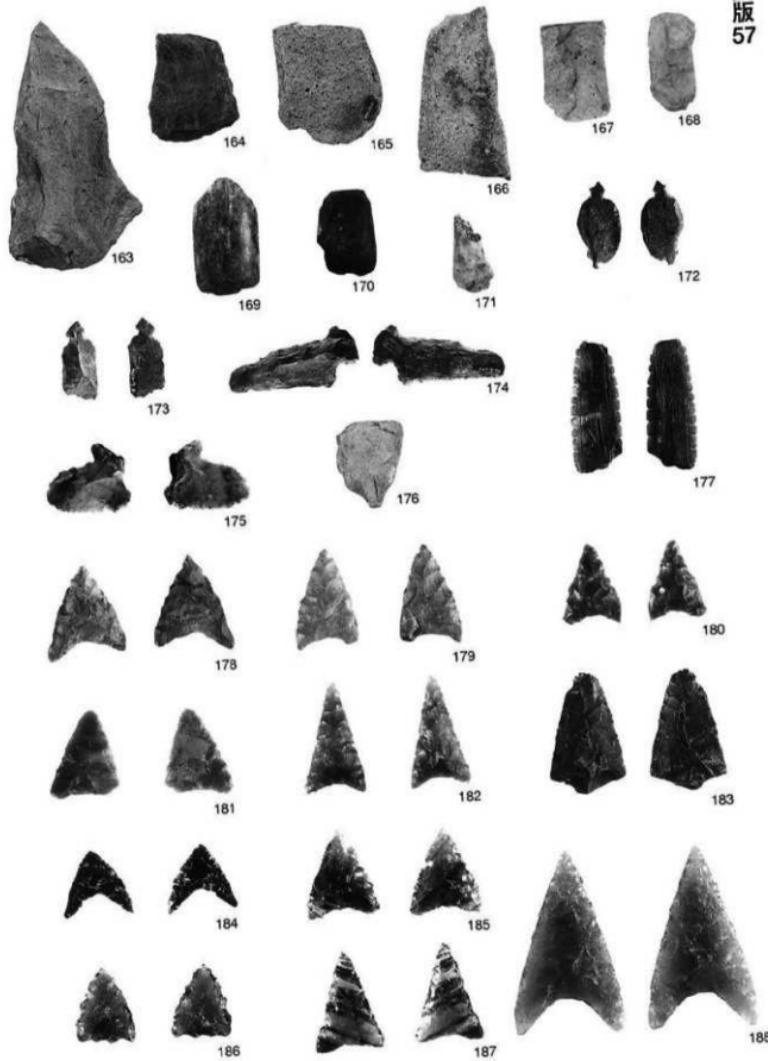
## 横川大林遺跡

図版  
56



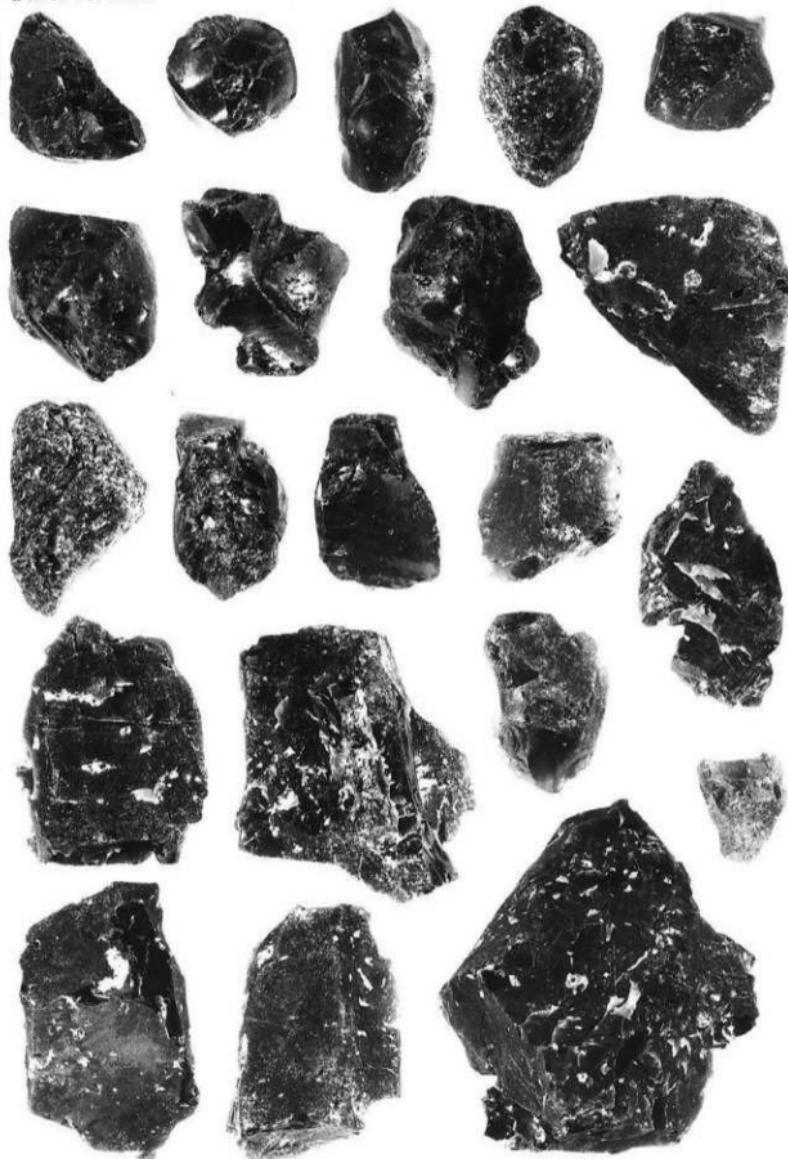
横川大林遺跡

図版  
57



横川大林遺跡

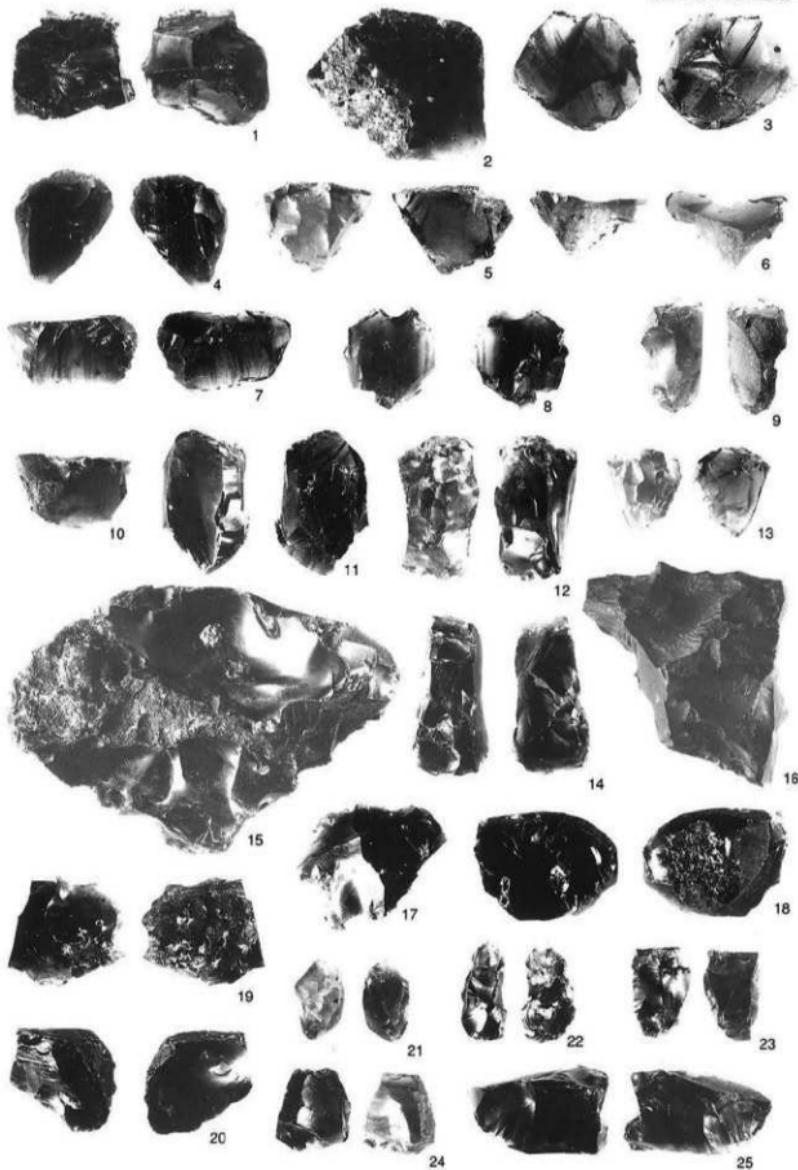
図版  
58



原石

横川大林遺跡

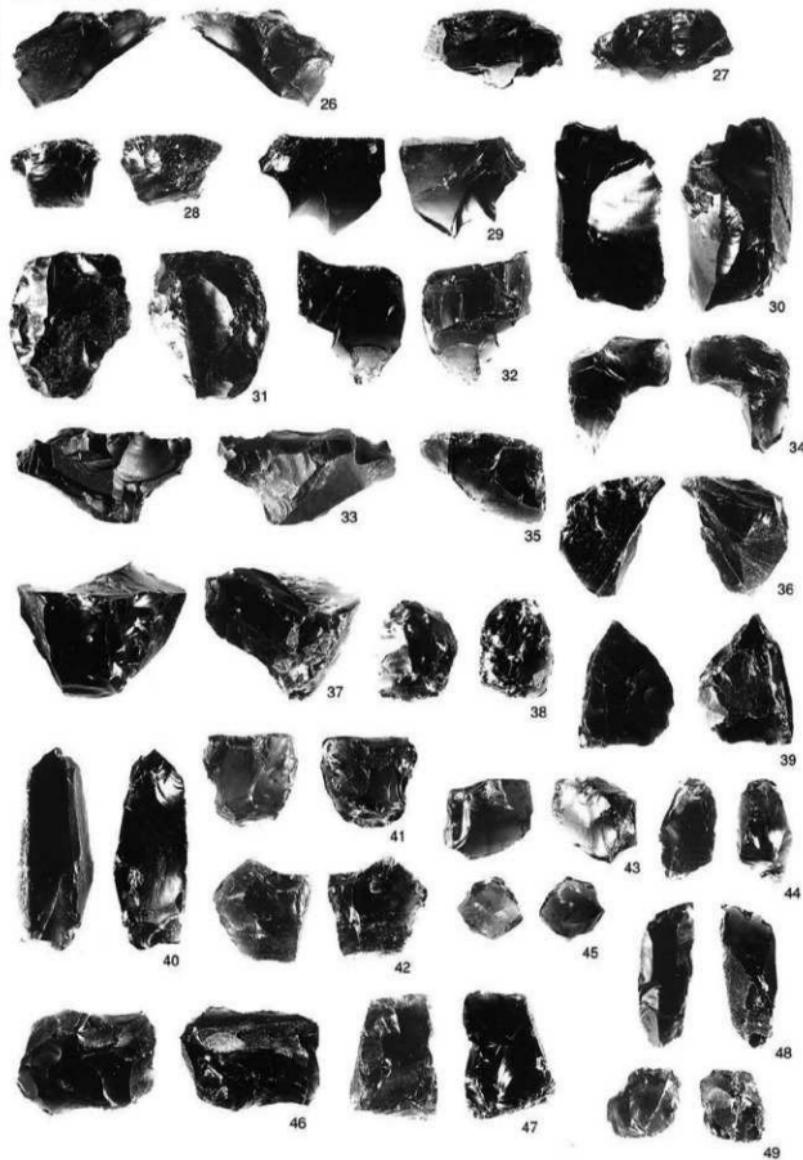
図版  
59



石核

横川大林遺跡

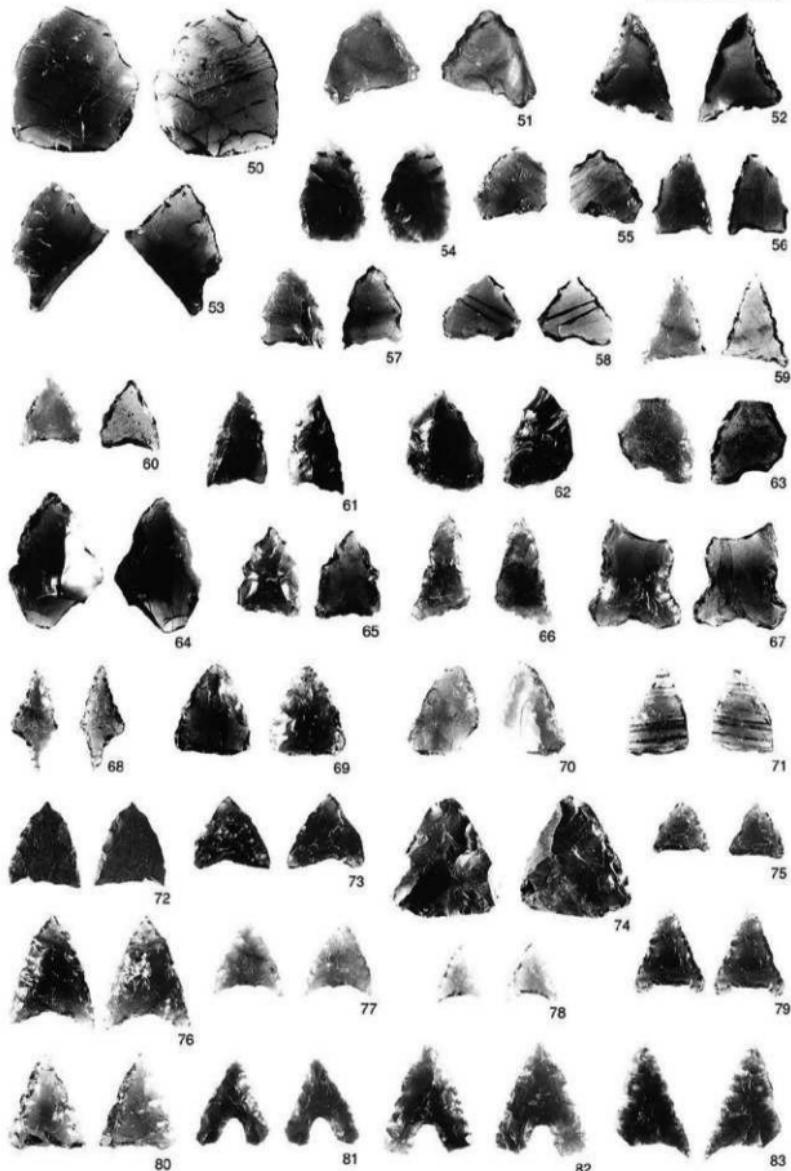
図版  
60



石核

横川大林遺跡

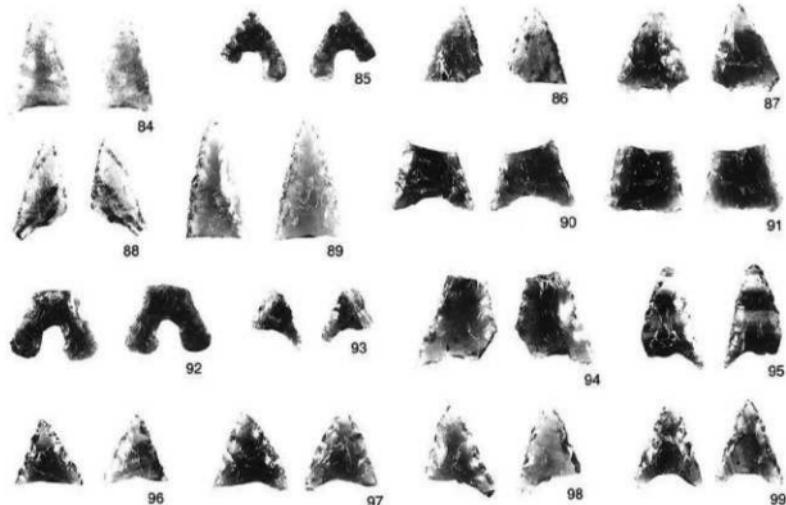
図版  
61



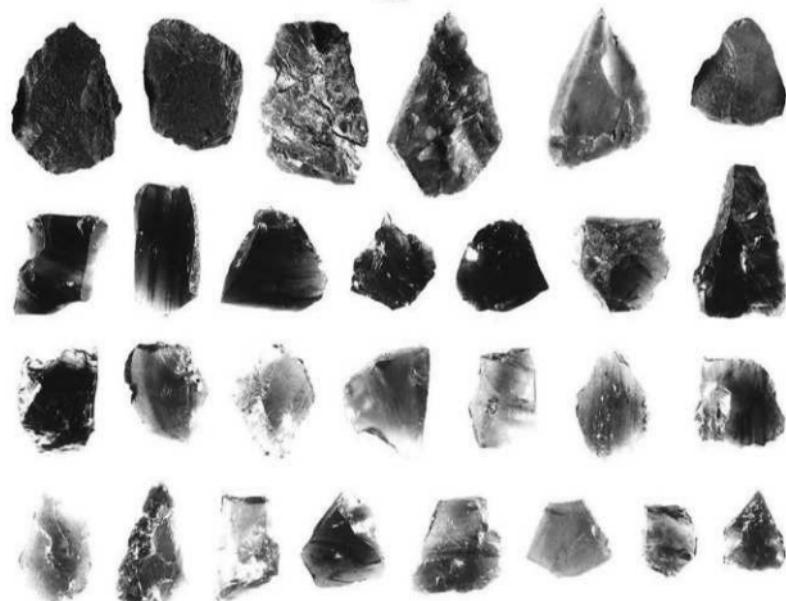
石錐

## 横川大林遺跡

図版  
62



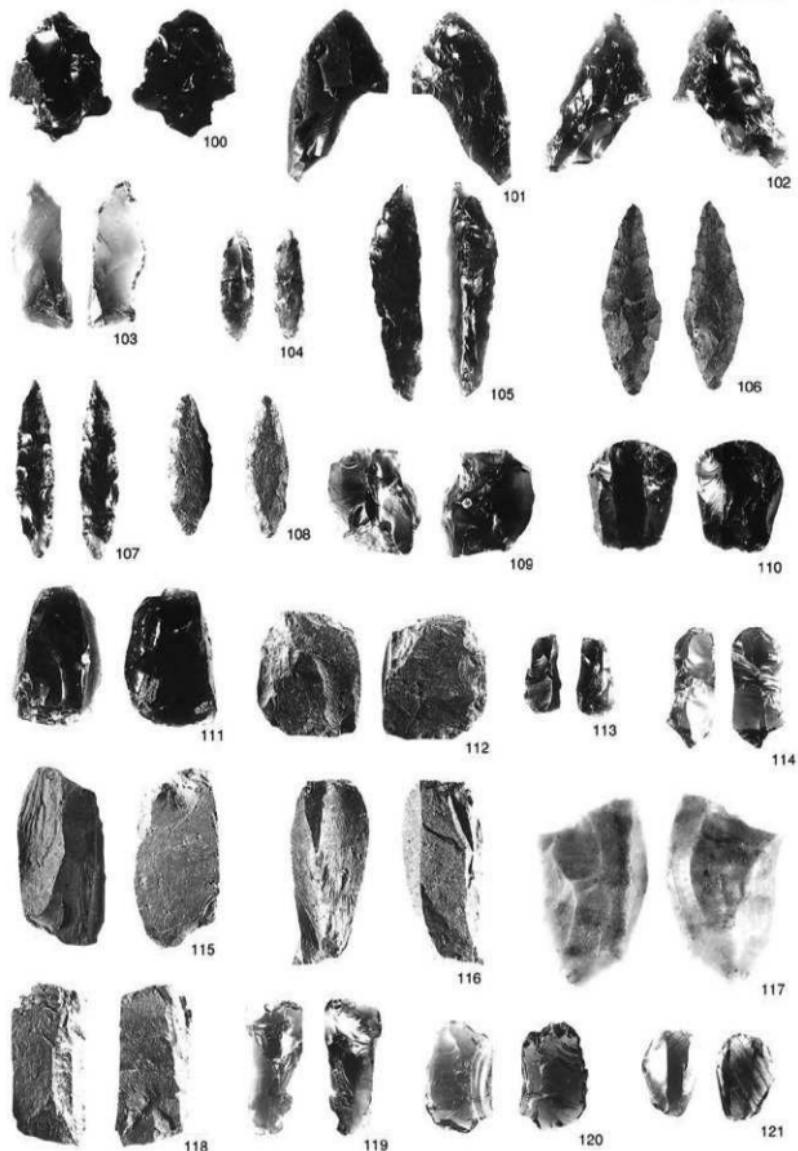
石器



石器素材

横川大林遺跡

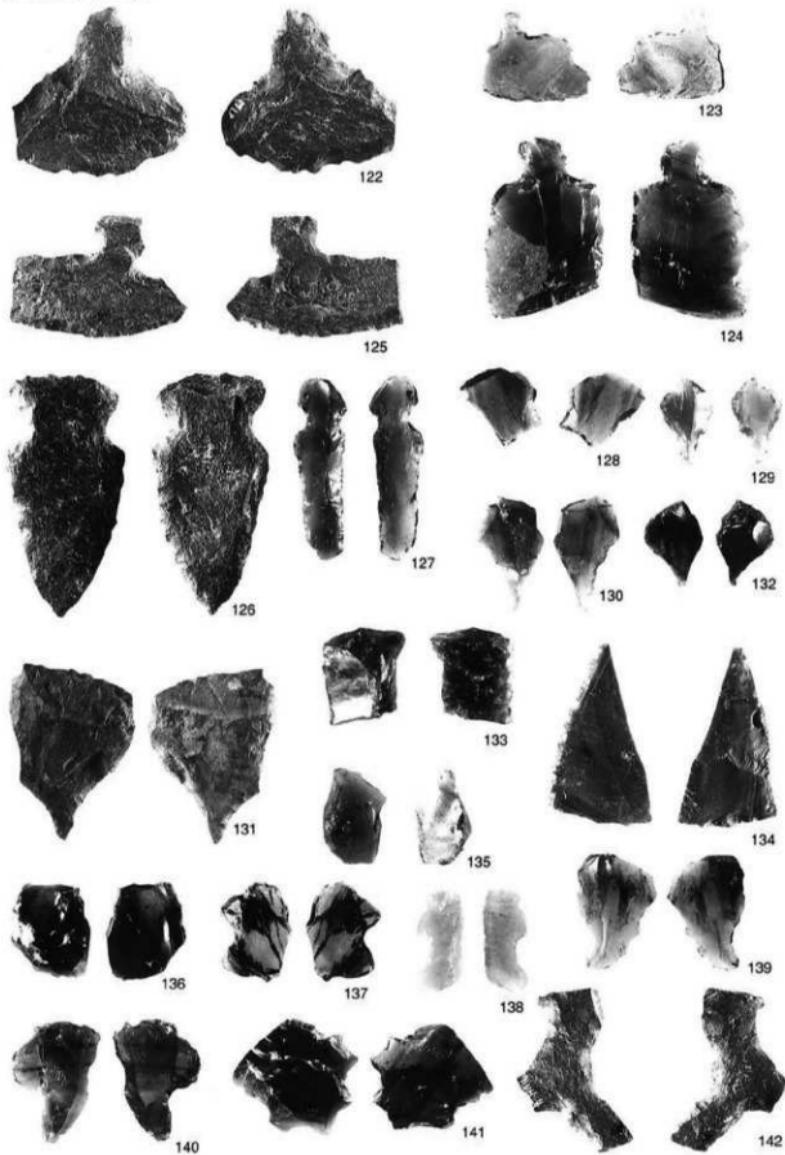
図版  
63



石槍・楔状石核・楔形石器

## 横川大林遺跡

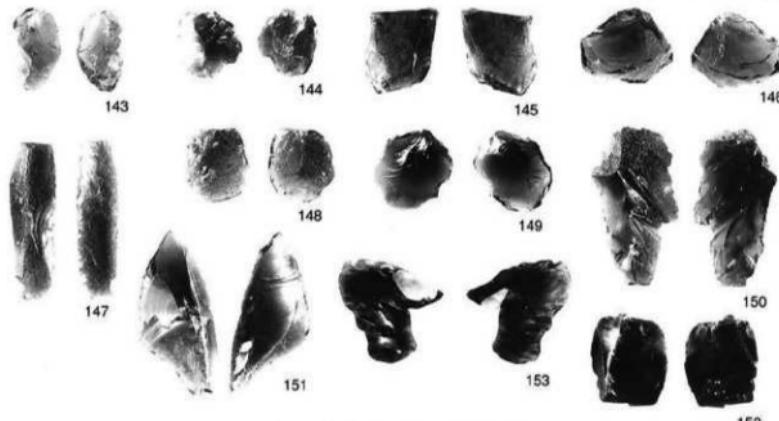
図版  
64



石匙・石錐・削器・撃器・ノッチ・不定形石器

横川大林遺跡

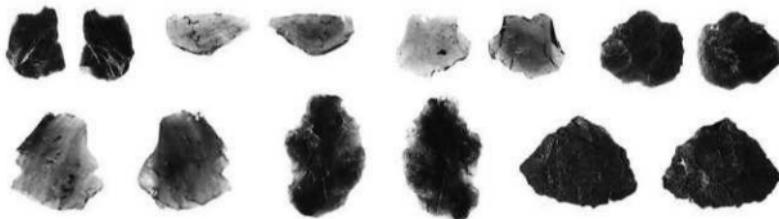
図版  
65



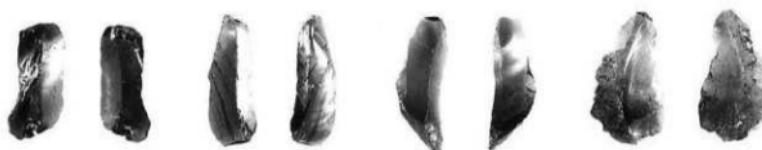
加工がある剥片・使用痕がある剥片



石錠チップ



ポイントフレーク



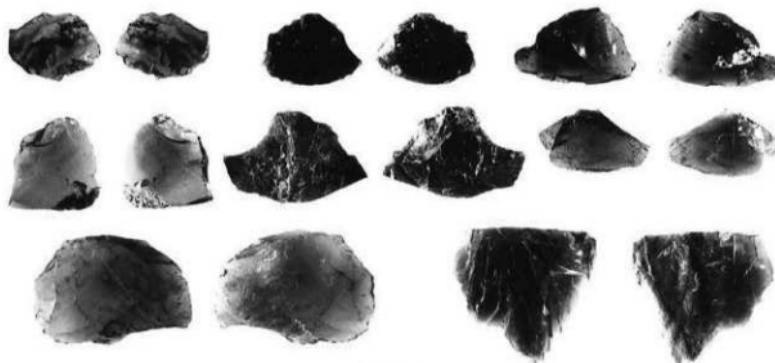
縦長剥片

横川大林遺跡

図版  
66



縦長剥片



横長剥片



チップ

# 原 遺 跡

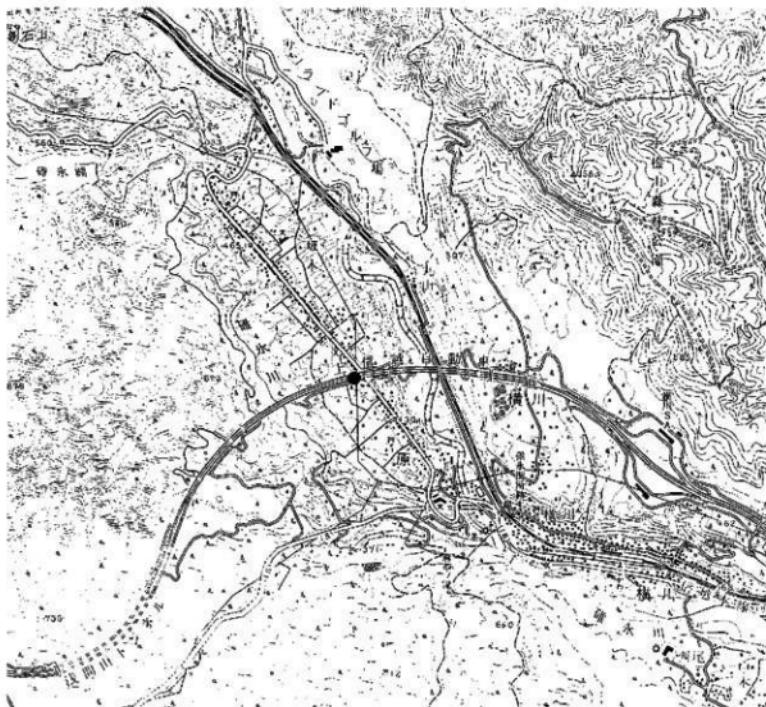
(坂本遺跡)

## 第1章 遺跡の立地

本遺跡は松井田町大字原923番地に所在し、JR横川駅の北西約1.5kmの旧国道18号線（中山道）沿いに位置する。これより北西に約250m程進むと、慶長七年（1602年）に五街道の一つとして指定された中山道の宿駅（坂本宿）である松井田町大字坂本にはいる。当時、中山道は東海道に次ぐ重要な街道で、道幅も五間と定められており、宿駅もほぼ二里毎に置かれていた。また、中山道に設けられた閑所としては、当地の碓水の閑所と木曽福島の閑所は有名である。

遺跡の立地する大地は、碓氷川と霧積川に挟まれた幅600m・長さ2000mの北西から南東に延びる表層平坦な舌状の台地で、遺跡中央の標高は約440mを割る。中山道はこの台地を縱断して走り、遺跡地より北西へ約1.2km進んだ地点で、同街道の最大の難所である劍石山の急峻な坂道に入る。

地質的には基盤層である安山岩疊の上に、浅間山を供給源とする火山灰等のテフラ層（第4図）が整合的に堆積しており、各時代の文化層はこれら鍵層により判断が可能である。



第1図 遺跡の位置図 (1/25,000)



第2図 遺跡の位置と周辺の地形図 (1/5,000)

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法（第3・5回）

#### 確認調査

遺跡は県教育委員会が昭和59年に実施した現地調査によって、遺跡の所在が確認されたものである。したがって、発掘調査は遺構の分布状況・時期・性格を把握することより開始した。トレンチは南北方向に設定し、調査対象面積に対し20%の試掘を行った。

#### 本調査

確認調査によって得られた成果に基づき、県教育委員会の指導の基に本調査の範囲を決定した。

調査区には公共座標を基準とする10m四方のグリッドを覆せて調査の基準とした。グリッドの呼称は東西ラインを算用で西から19~31、南北ラインを北からアルファベットでC~Jとし、各北西隅をグリッド呼称として使用した。

各遺構の掘り下げは土層観察用のベルトを設定し、慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物については、原則として出土地点・高さを記入して個別に取り上げ、遺構外出土遺物については各グリッド毎に一括して取り上げた。

実測の縮尺は以下の通りである。

トレンチ設定図――1/500 遺構配置図――1/200 住居跡・掘立柱建物跡――120

カマド――1/10 溝・道――――1/40

写真の撮影は3台のカメラ（白黒プローニー6×7、白黒35mm、カラースライド35mm）を使用し、各調査段階において隨時実施した。更に、遺跡の全体写真はバルーンを使用して行った。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は昭和63年11月16日より開始し、平成元年3月15日まで実施した。

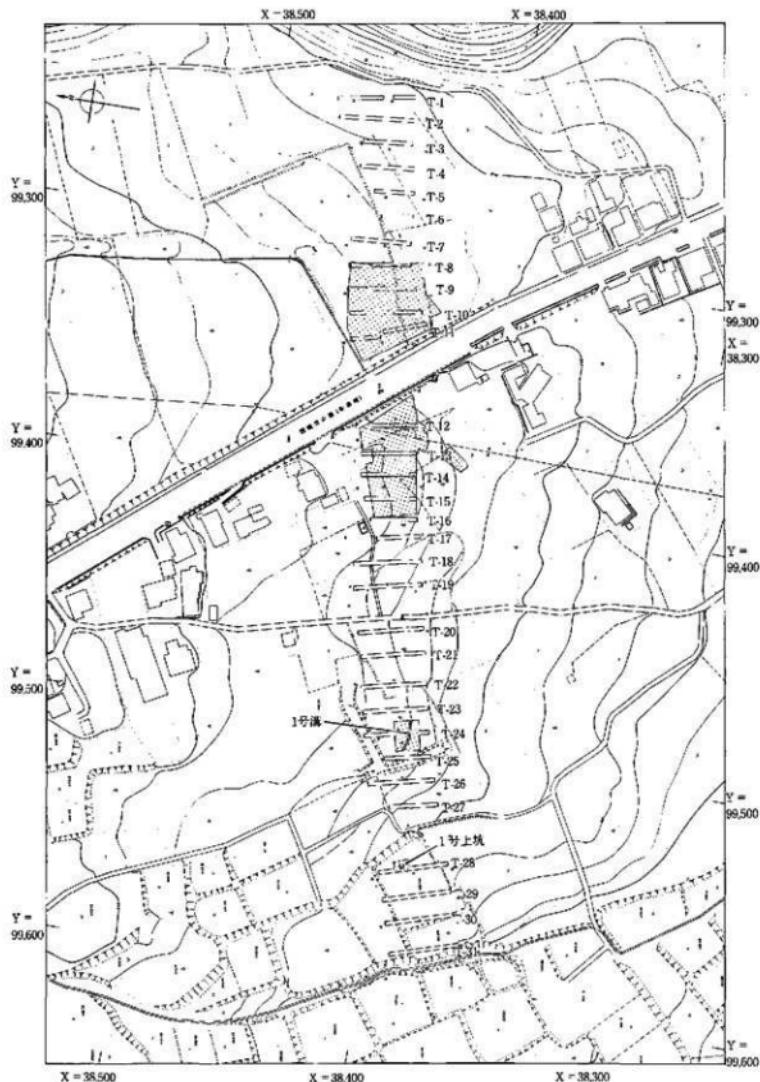
11月期 16~31日、調査前の写真撮影及び規況測量を実施し、後にテストピット（2m×2m）による土層観察を実施した。その結果、浅間B軽石層直下より古代の遺物が出土し、更にその下部に堆積する浅間D軽石混じりの黒褐色土より縄文土器が検出された。

12月期 5日~24日、先月に実施したテストピットの成果を踏まえ、調査区の西側より二面に亘る確認調査を開始する。

1月期 確認調査を継続。旧国道18号線を挟み、古代の住居跡5軒・溝2条・土坑1基をトレンチ坑より確認する。13日、確認調査の結果を踏まえて本調査区域を確定し、後に表土除去作業を開始する。18日、住居跡等の遺構の掘り下げを開始する。

2月期 住居跡の調査を継続。8日、旧国道18号線の東側より大型の掘立柱建物跡1棟が確認され、調査を開始する。調査が進むに従い、その構築状況より公的性格の高い建物跡と考えられる。27日、文化庁・県教育委員会・町教育委員会により、掘立柱建物跡の視察が行われる。

3月期 15日、調査区内の発掘調査を終了する。14~18日、県教育委員会により、掘立柱建物跡の規模及び付随施設の有無を確認するため、高速道路路線外の確認調査を実施する。20日、奈良国立文化財研究所・宮本長二郎氏に来訪いただき、掘立柱建物跡の鑑定を頼う。25・26日、現地説明会を実施し、全ての調査を終了する。



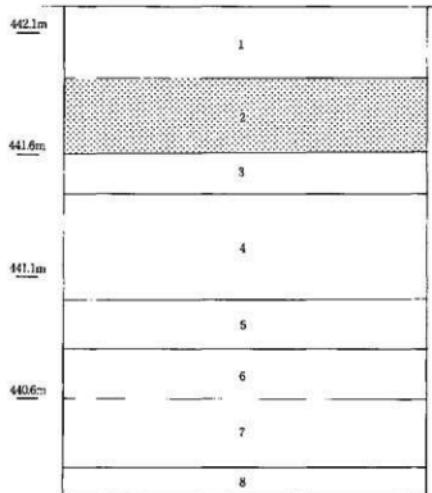
第3図 トレーンチ設定図、1号溝・1号土坑位置図 (1/2,000)

### 第3章 基本層序(第4図)

1号掘立柱建物跡を中心とした区域の基本的な堆積状況図である。地盤は畠地であり、表層は概ね平坦となっている。1層は浅間A軽石含む耕作土で、2層以下がプライマリーな堆積となる。2層は木造跡の鍵層となる浅間B軽石純層で、層厚は30~40cmを測る。

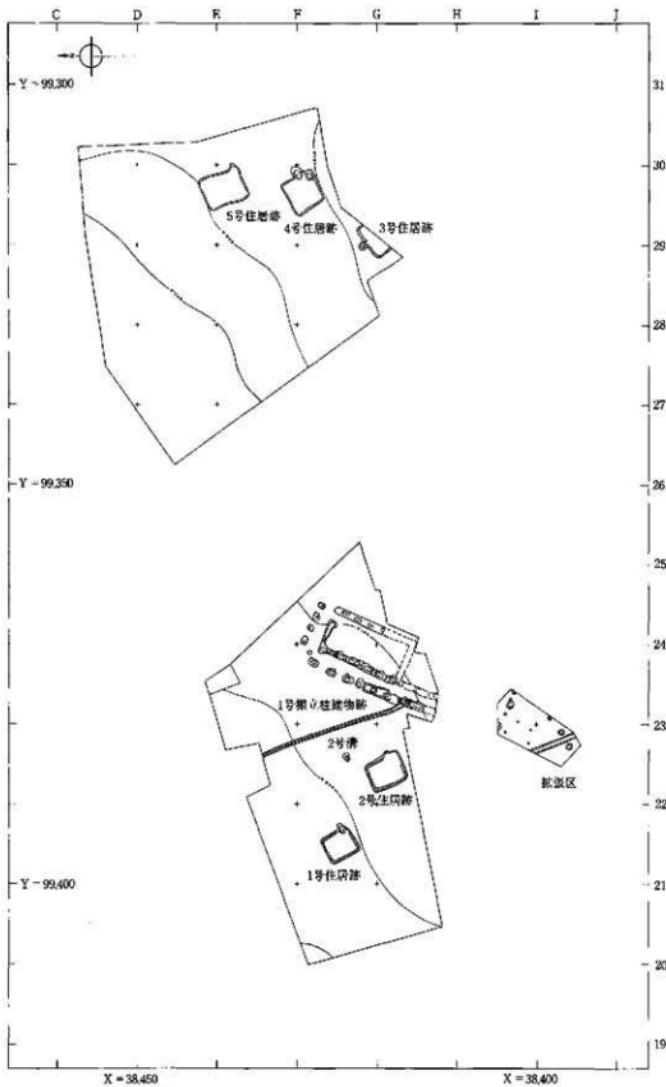
古代の遺構確認面は2層直下からであり、住居跡と溝は2層直下から、1号掘立柱建物跡は4層直上より検出されている。各遺構の掘り込みは、住居跡が4層中位で、1号掘立柱建物跡の柱掘り方は7層まで達している。縄文時代の遺構確認面は、7層直上とした。

442.6m



1. 暫期地  
瓦西大軽石多く含む。(耕作土)
2. 瓦西大軽石純層
3. 耕作土  
浅間C軽石(3-10cm)含む。(古代の遺構確認面)
4. 耕作土  
磧谷C軽石(3-10cm)含む。(古代の遺構確認面)
5. 耕作土  
磧谷C軽石(3-10cm)含む。(古代の遺構確認面)
6. 耕作土  
2層に似る。表面やや堅く。
7. 深谷黄色粗石層  
Y・ド野。(縄文時代の遺構確認面)
8. 表層土  
ローム野。やや黄土。

第4図 基本層序模式図



第5図 全体図、グリッド設定図(1/600)

## 第4章 検出された遺構・遺物

### 第1節 遺跡の概観

検出された遺構・遺物は、縄文時代・奈良・平安時代・中・近世に亘り、この内で主体となるのが奈良・平安時代のものである。縄文時代の遺構は土坑1基が検出され、遺物は縄文土器・石器が若干量出土している。奈良・平安時代では住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構2条が検出され、遺物は土師器・須恵器・灰陶器などが出土している。この内、掘立柱建物跡は「布掘工法」を用いた大型の建物跡で、その性格が注目されている。中・近世においては陶器等が若干出土しているにすぎない。

### 第2節 縄文時代

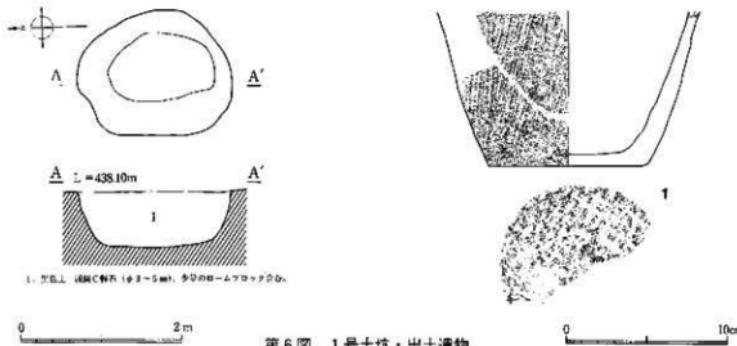
縄文時代では、後期の土器を包蔵する土坑が1基と前期から後期にかけての小破片が遺構外より出土しているにすぎない。

#### 土坑

1基が検出された。検出位置の地勢は、南西方向に向かい緩やかに高さを減じている。

1号土坑（第3・6図 表1 図版3-6、7）

T-28（トレンチ）より検出され、長軸方向は南北軸にはほぼ一致する。平面形は略格円形で、規模は長軸1.94m・短軸1.44m・深さ0.70mを測り、断面形は鍋底状を呈する。埋土は黒色土を基調とした單層で、人為堆積と考えられる。遺物は縄文土器1点が出土した。



第6図 1号土坑・出土遺物

第1表 1号土坑出土遺物観察表

質地	器種	法蓋 (cm)	質地・底盤形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
-	縄文	口徑 芯高 深径	口徑 芯高 底盤 9.5	砂礫多 砂質	酸化 赤褐色		

### 第3節 古代

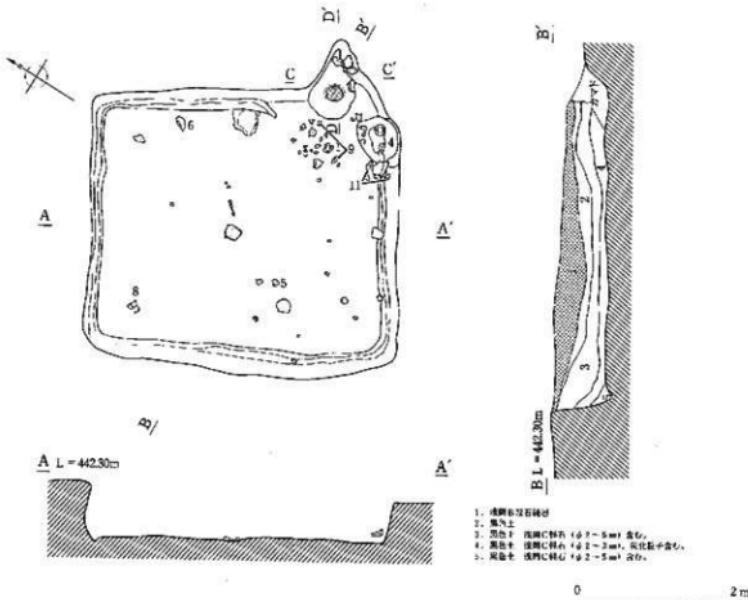
堅穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、溝2条が検出され、いずれも浅間山を供給源とするB軽石純層に覆われている。時期は掘立柱建物跡が奈良時代から平安時代、堅穴式住居跡と溝は平安時代の所産と考えられる。

#### 住居跡

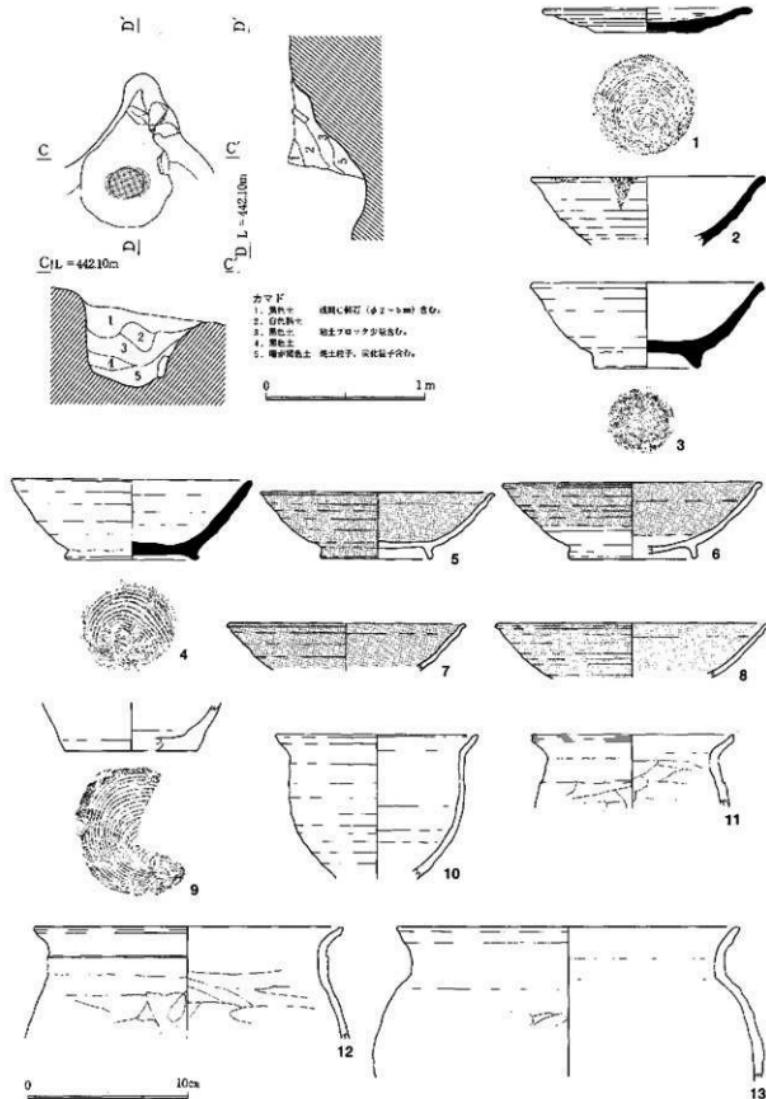
検出された5軒の住居跡は、9世紀後半から10世紀前半に作られたものであり、遺存状況は比較的良好であった。

##### 1号住居跡（第7・8図 表2 図版2-1~5, 7）

F-21グリッドに位置し、カマドの中軸線はN $65^{\circ}$ -Eを指向する。形態 南北にやや長い長方形を呈し、南西壁がやや弧状となる。規模 床面の中軸線上で長軸長3.45m×短軸長2.95mを測り、床面積は約10.2m<sup>2</sup>である。柱穴 検出されない。埋土 5層に分層可能な自然堆積で、1層は浅間B軽石純層である。カマド 東壁の南端部に付設され、壁を幅70cm・長さ50cmの三角形状に掘り込み構築されている。天井部・焚口は消失しているが、石材を用いて構築されたと思われ、煙道部に石材が遺存している。燃焼部は壁内に存在し、煙道部は急な角度で立ち上がる。床面 ほぼ平坦である。壁溝 カマドの周辺を除き全周に、幅10~15cm・深さ10cm程の「U」字状断面を呈する。貯蔵穴 カマドの南東隅に存在する。平面形は不整円形で、規模は長軸長55cm・短軸長45cm・深さ20cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器が4層を中心に包藏されていた。



第7図 1号住居跡



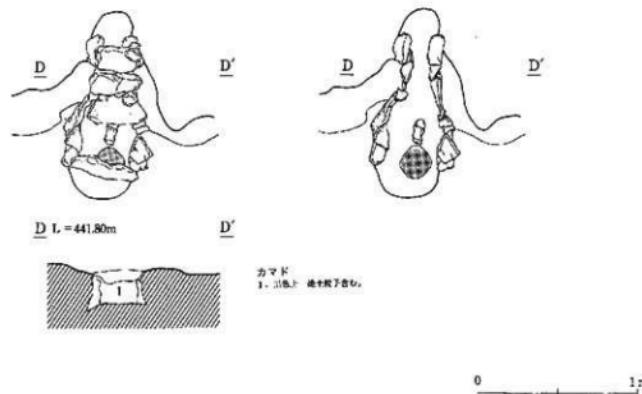
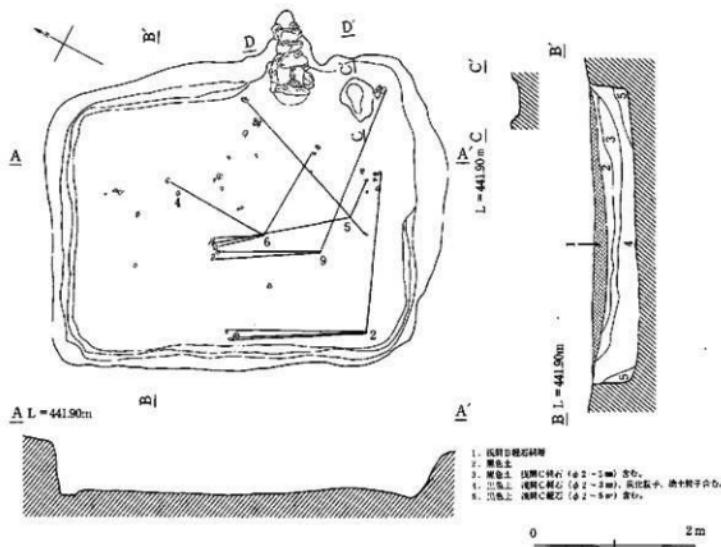
第8図 1号住居跡カマド・出土遺物

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

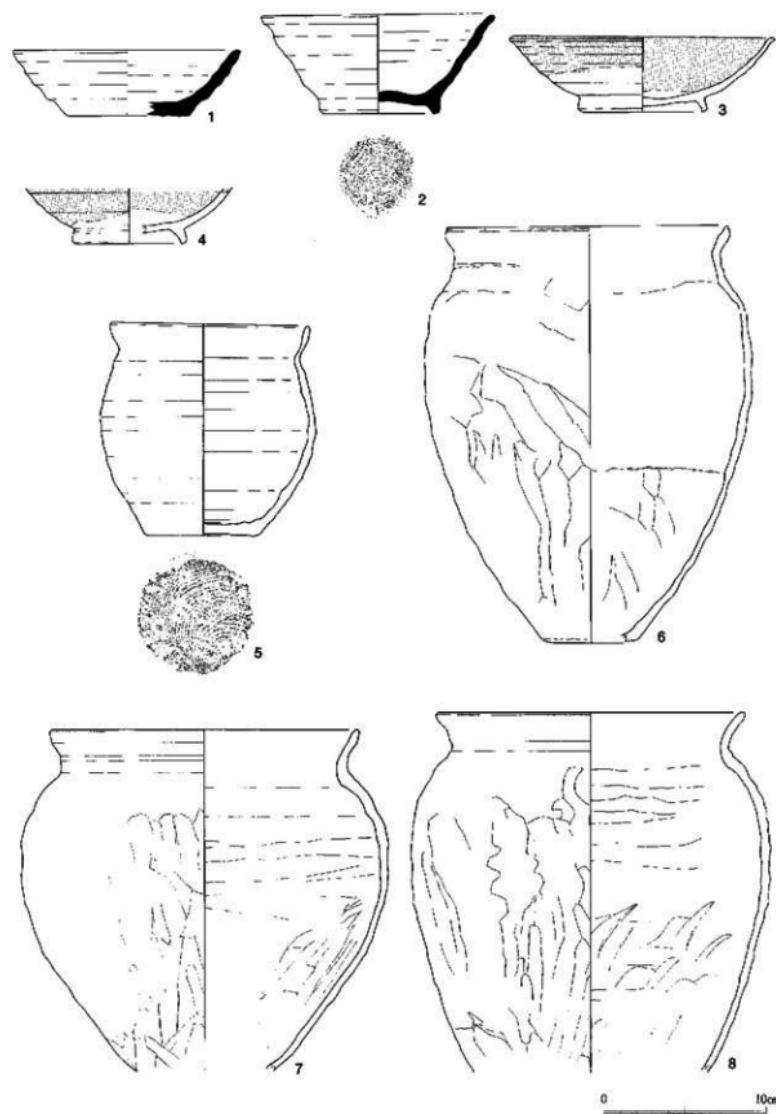
番号	器種	法蓋(cm)	断面・成形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・参考
1	須恵器 皿	L径:29 高台:15 底径:6.5	体部は大きく開き、口縁部は外反する。底部には丸をついた複数の足跡が認められるが、底高台に欠落したらしく、底高台となっている。縫道跡後、回転均切り無痕。	黑色或褐色 砂多	還元 焼成	灰色 灰化	
2	須恵器 杯	口径:14.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反。輪縫痕有。	砂少素合 び	還元 焼成	灰白色 灰白色	鉄。被状物質が付着。
3	須恵器 高台付杯	L径:14.5 高台:5.4 底径:6.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し、高台は器肉が傾いてやや低い。縫道跡後。	砂多量に 含む。	還元 焼成	灰白色 灰白色	
4	須恵器 高台付杯	口径:15.0 高台:5.1 底径:6.2	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外傾して直線的に近づく。高台はやや低い。縫道跡後、底板系有。	砂塵多量 に含む。	還元 焼成	灰白色 灰白色	
5	灰釉陶器 瓶	口径:14.5 高台:4.2 底径:6.7	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。(ヶ月高台)。縫道跡後。刷毛塗り。	灰石を含 む。	還元 焼成	褐色 白色	
6	灰釉陶器 瓶	口径:14.8 高台:7.7	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。三ヶ月高台。縫道跡後、底板下端に回転削り。刷毛塗り。	灰石	還元 焼成	褐色 褐色	浅灰色地。
7	灰釉陶器 瓶	口径:14.7 高台:6.4 底径:7.2	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。縫道跡後。刷毛塗り。	灰石を含 む。	還元 焼成	褐色 褐色	淡灰色地。
8	灰釉陶器 瓶	L径:12.0 高台: 底径:	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。縫道跡後。刷毛塗り。	灰石を含 む。	還元 焼成	灰褐色 灰褐色	
9	土師器 甕	口径: 高台: 底径:8.2	は灰。縫道跡後、底板を切り無痕。	砂粒多。	酸化	褐色	
10	土師器 甕	L径:12.6 高台: 底径:	L縫道部は近く外傾して立ち上り、縫道部は上半が直線的に立ち上がり、下半が丸みを持つ。縫道跡。	砂粒多。	酸化	明褐色 明褐色	
11	土師器 甕	口径:12.6 高台: 底径:	口縁部には沈痕有り、口縁部は「コ」の字状となる。口縁部横側で、縫道外側に左から右への割り、内蓋が横位の既燃地を示す。	砂粒多。	酸化	明褐色 明褐色	
12	土師器 甕	口径:9.3 高台: 底径:	口縁部には沈痕有り、口縁部は「コ」の字状となる。L縫道部横側で、縫道外側に左から右への割り、内蓋が横位の既燃地を示す。	砂粒多。	酸化	褐色 褐色	電
13	土師器 甕	口径:21.9 高台: 底径:	L縫道部は縫やかに外反し、底部は人気く張る。L縫道部横側で、外縫道部は上凸が既燃地で、それより下伝に削りを施し、内底縫部は既燃の状態で施す。	砂粒多。	酸化	明褐色 明褐色	

2号住居跡(第9~11図 表3 図版2-6・7、7、8)

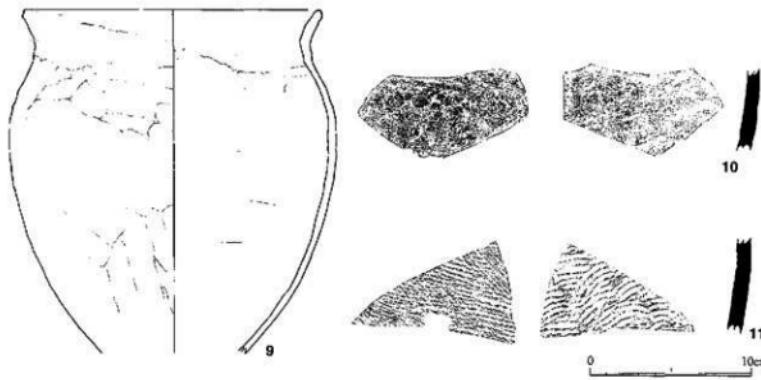
F・G-22グリッドに位置し、カマド中軸線はN-65°-Eを指向する。形態 南北にやや長い長方形を呈し、南側に向かい開き気味となる。規模 床面の中軸線上で長軸長4.20m×短軸長3.05mを測り、床面積は約12.8m<sup>2</sup>である。柱穴 植出されない。埋土 5層に分層可能な自然堆積で、1層は浅開B輕石純層である。カマド 東壁の南寄りに位置し、遺存状況は良好である。上法は壁より幅60cm・長さ70cmの「V」字状に掘り込んだ後、石材を掘り方の内壁に沿って「ハ」の字状に立てて壁とし、縫道部に3枚と焚口部に1枚の天井石を設置する。壁石・天井石の被覆材・固定材は、粘土を主体とした暗褐色土を用いる。燃焼部は壁内に存在し、支脚には石材が使用され、縫道部はやや急な角度で立ち上がる。床面 ほぼ平坦であるが、中央部がやや低くなっている。壁溝 カマドの周辺と南壁の東半分を除き巡り、幅10~15cm・深さ10cm程の「U」字状断面を呈する。貯藏穴 カマド脇の南東隅に存在し、規模は長軸長54cm・短軸長42cm・深さ10cmで、皿状断面を呈する。遺物 上師器・須恵器・灰釉陶器が4層の下部を中心に包蔵されていた。



第9図 2号住居跡・カマド



第10図 2号住居跡出土遺物（1）



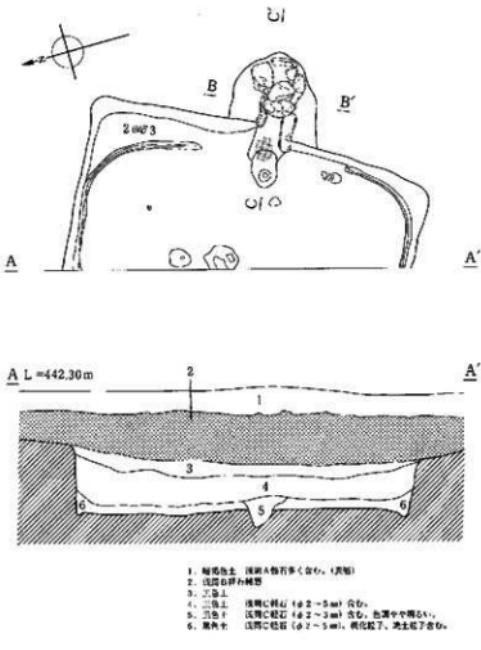
第11図 2号住居跡出土遺物（2）

第3表 2号住居跡出土遺物観察表

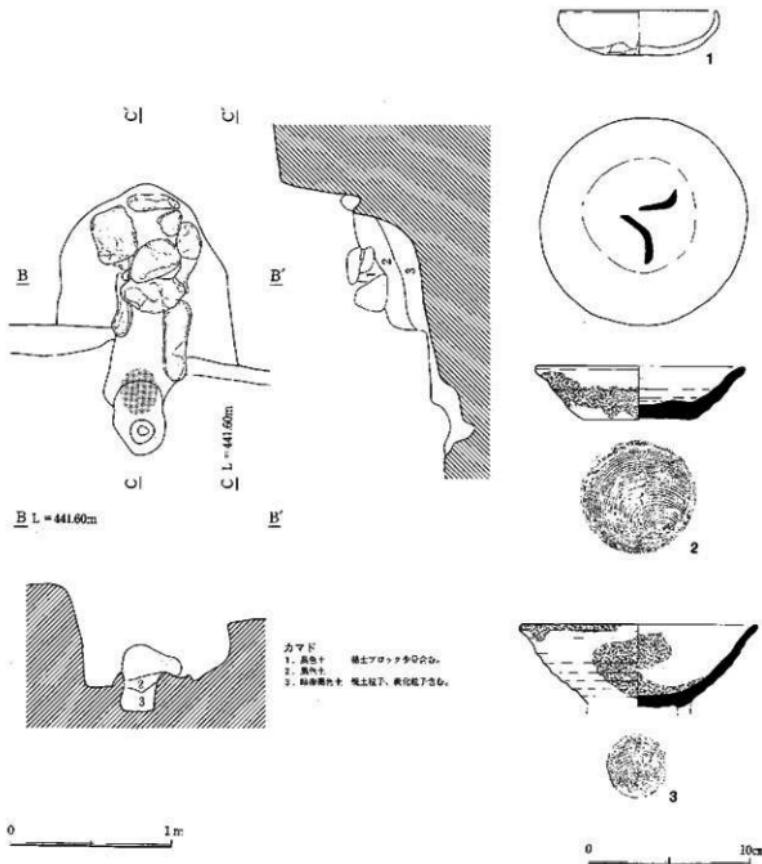
番号	器種	法縁(cm)	器形・成形様の特徴	粘土	焼成	色調	出土位置・層等
1	鉢	口径 40 高さ 40 底径 75	体部から口縁部にはほぼ直線的に立ち上がり、断面は切妻形。底部には凹凸状の切妻形。	砂粒多く含む。 軟質	素光 無灰化	灰灰色	
2	灰 磷 鉢	口径 14.5 高さ 6.1	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反している。断面は直線的。底部は斜面状切り。	砂粒多く含む。	素光	灰白色	
3	深 細 鉢	口径 16.0 高さ 7.4	体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反、二ヶ月高台、断面は直線的。底部を削り、横け分け。	長石を含む。	素光 無灰化	灰褐色 茶色	
4	灰 磷 鉢	口径 - 高さ 6.4	体部は丸みを持って立ち上がり、三ヶ月高台。断面直線的。底部を削り、横け分け。	長石を含む。	素光 無灰化	灰白色 淡緑色釉	
5	上 鋸 鉢	口径 13.0 高さ 7.0	口縁部は外輪して立ち上り、中位より内湾気味となる。肩部は大腹輪で中央に持ち、底やかに削る。底土被覆の後、輪轍開窓、凹窓、凹窓を切り無灰化。	細少量含む。	無灰化	赤褐色	
6	七 扇 鉢	口径 17.4 高さ 25.8 底径 5.8	削れた「口」の字状口縁部を持ち、「口」部分に凸縫を有している。下位部は内側に斜めに削て底を上から下への削り、断面内側に傾きの尾風。	縮合む。	無灰化	明赤褐色	
7	上 鋸 鉢	口径 19.0 高さ -	削れた「口」の字状口縁部、肩部は最大腹径を上位に有す。肩部外側に上位を右から左への削り、下位を左から右への削り、断面内側に傾きの尾風。	縮合む。	無灰化	赤褐色	
8	土 鋸 鉢	口径 19.0 高さ 18.4 底径 -	削れた「口」の字状口縁部、肩部は最大腹径を上位に有す。肩部外側に上位を右から左への削り、下位を左から右への削り、断面内側に傾きの尾風。	縮合む。	無灰化	赤褐色	
9	上 鋸 鉢	口径 18.4 高さ -	削やかに外傾する口縁部。肩部は最大腹径を上位に有す。口縁部を削り、断面外側に二段を右から左への削り、下位を左から右への削り、断面内側に傾きの尾風。	縮合む。	無灰化	赤褐色	
10	須 毛 鉢	口径 - 高さ 40 底径 -	胸輪部。輪轍課題。	黒色粒を含む。	素光	黑灰色	
11	須 毛 鉢	口径 - 高さ 40 底径 -	胸輪部。外縁は平行叩き目後、カキ目、内縁は同心円當て目作手。	黒色粒を含む。	素光	灰褐色	

3号住居跡（第12・13図 表4 図版2-8、3-1・2、8）

F・G-28・29グリッドに位置し、カマド中軸線はN-38°-Wを指向する。形態 南西部が調査区外に延びており不明瞭であるが、方形を基調としていると思われる。規模 床面の中軸線上で、長軸長4.0m・現短軸長1.5mを測る。柱穴 検出されない。埋土 4層に分層可能な自然堆積で、1層は浅間B輕石純層である。カマド 北壁のほぼ中央部に位置する。壁を幅116cm・長さ103cmの「U」字形平面に掘り込み、内壁と大井部は石材を用いて構築されている。内壁には掘り方に沿って5個の石材を「U」字形に立て並べ、煙道部の穴井には4個の石材を配置し、先端では煙出部を構成している。床面 ほぼ平坦である。中央部に小ピットが見られたが、住居跡より新しく無関係である。壁溝 検出された範囲ではカマド周辺を除き全周し、北東壁の溝は塀よりも離れた位置に存在する。貯蔵穴 検出されていない。遺物 土師器・須恵器が出土している。



第12図 3号住居跡



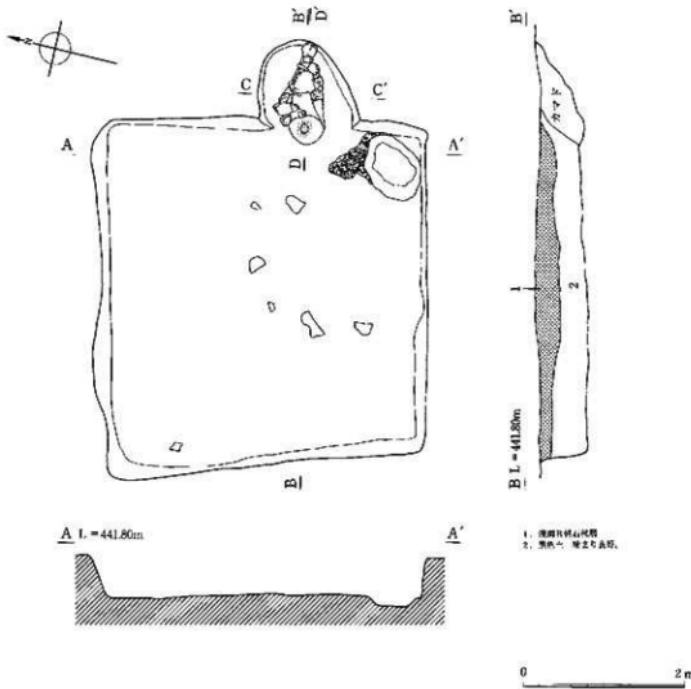
第13図 3号住居跡カマド・出土遺物

第4表 3号住居跡出土遺物観察表

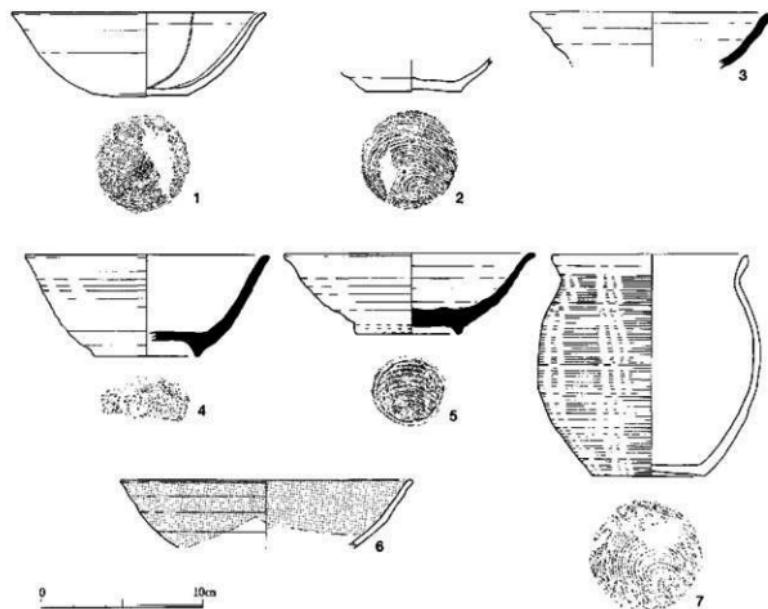
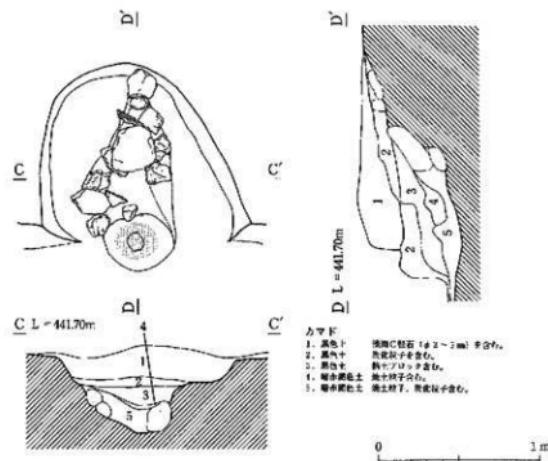
番号	器種	出土(cm)	輪形・成盤形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	土器	山型 器高 底径	扁平で、丸みのある体部を持ち、口縁部は内湾気味となる。口縁部から内面に痕跡で、体部外腹は三棱を招きえ、下唇を露 けりを放す。	砂粒を多 く含む。	酸化 化	明赤橙 色	
2	灰窓器	口径 器高 底径	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。縫隙 調査後、回転系切り無測定。	砂粒を若干 含む。	素元	灰色	見込みに「八」の墨書き。 内外面に墨状の付着物。
3	灰窓器	口径 器高 底径	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。両台 高古付 底径	砂粒を若干 含む。	素元	灰白色	両台欠落後に内外面に 堆積の物質が付着して いる。

4号住居跡（第14～16図 表5 図版3-3・4、8、9）

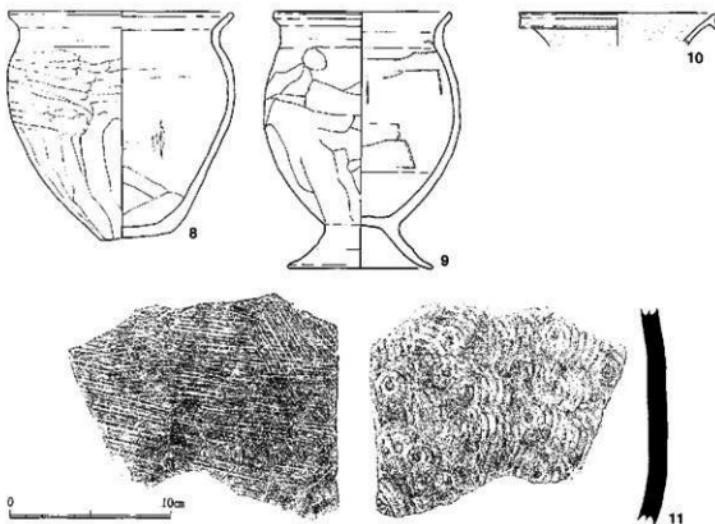
E・F-29グリッドに位置し、カマドの中軸線はN-60°-Eを指向する。形態 方形を基調としているが、北壁が東・西・南の各壁より長くなり、台形に類似する。規模 床面の中軸線上で東西軸3.95m×南北軸3.95mを測り、床面積は15.6m<sup>2</sup>である。柱穴 検出されない。埋土 2層に分層される自然堆積で、1層は浅間B軽石純層である。カマド 東壁の中央部東寄りに位置する。掘り方は壁より幅130cm・長さ110cmの半円形に掘り込み、内部に「V」字状に石材を立て並べ、煙道部に天井石を架構している。煙道部は壁と壁のライン上にあり、煙道は緩やかに立ち上がる。床面 ほぼ平坦であり、カマド脇から貯蔵穴にかけての床面が焼土化している。壁溝 検出されていない。貯蔵穴 カマド脇の東南隅に存在する。長軸長88cm・短軸長62cmの不整円形を呈し、深さ14cmの鍋底状断面を有する。遺物 土師器・須恵器・灰陶陶器が出土している。



第14図 4号住居跡



第15図 4号住居跡カマド・出土遺物(1)



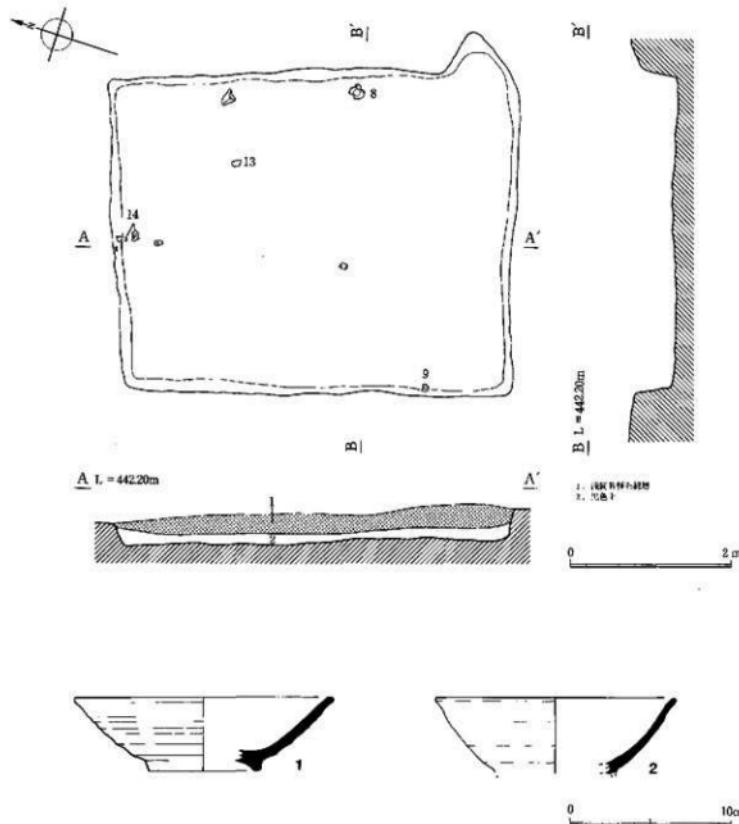
第16図 4号住居跡出土遺物（2）

第5表 4号住居跡出土遺物観察表

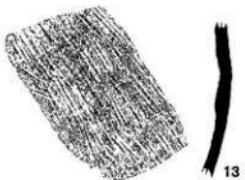
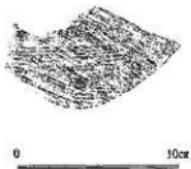
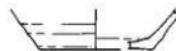
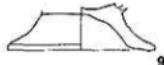
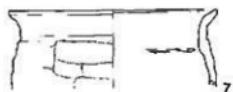
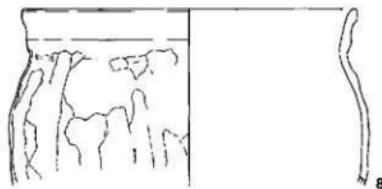
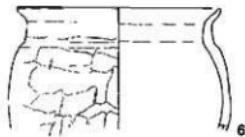
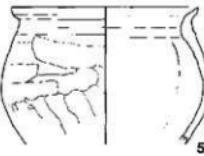
番号	器種	直徑(cm)	器形・成形形の特徴	胎土	焼成	色調	已生灰・標考
1	土器 瓢 杯	口径:15.6 高さ:5.2 底径:5.8	体部は丸く立ち上がり、口縁部は若干外反する。箆縫施設法。 刮削系切り無調査。内面に放射状の文を施す。	砂粒多く 含む。	酸化	褐褐色 内燃。	
2	土器 瓢 杯	口径:11.9 高さ:6.0 底径:6.0	平底。右回転輪轉調整後、両輪系切り無調査。	砂粒多く含む。	酸化	暗赤褐色 褐	
3	土器 瓢 杯	口径:15.0 高さ:6.3 底径:6.3	体部は丸く立ち上がり、口縁部は外反する。右回転輪轉調整後、両輪系切り無調査。	砂粒を若干 含む。	還元	灰色	
4	土器 瓢 杯	口径:15.1 高さ:6.3 底径:6.3	体部はやや丸みを持て立ち上がり、口縁部は若干外反している。高台 は台形を呈する。右回転輪轉調整。	砂粒を若干 含む。	還元	灰色	
5	土器 瓢 杯	口径:15.5 高さ:6.2 底径:6.2	体部は丸みを持て立ち上がり、口縁部は外反している。高台 は「角形」を呈する。右回転輪轉調整。	砂粒を若干 含む。	還元	灰褐色	
6	灰陶器 瓶	口径:18.2 高さ:— 底径:—	体部は丸みを持て立ち上がり、口縁部は外反している。瓶輪 調整後、体部下端崩壊。窪け損傷。	茶色混合 含む。	還元	灰白色 白色釉	
7	土器 瓢 杯	口径:12.1 高さ:13.8 底径:7.0	丸く外側する口縁部、丸く底の割れ。右回転輪轉を施した後、 刮削系切り無調査。	砂粒多く 含む。	酸化	明褐色 褐色	
8	土器 瓢 杯	口径:11.0 高さ:4.4 底径:4.4	「」の字状の口縁部、最大断面を「」に持つ粗縫を有す。口縁部は斜 面で、底部外縁は「」に持つ粗縫を有す。下部を上から下への折れで 持す。底部は中央部に斜面が残る。斜面の面は下から上への折れで、	砂粒を若干 含む。	酸化	偏暗赤褐色 褐色	
9	土器 瓢 杯	口径:11.0 高さ:6.0 底径:9.0	「」の字状の口縁部、最大断面を「」に持つ粗縫を有す。白は「八」 の字形に開く。口縁部は斜面で、底部外縫は上部を右から左への折れで、 下部を上から下への折れで持す。斜面の面は下から上への折れで持す。	砂粒多く 含む。	酸化	暗赤褐色 褐	
10	灰陶器 瓶	口径:12.4 高さ:— 底径:—	口縁部が三角形に突出する。無調査。	黑色液を 含む。	還元	灰白色 灰褐色	
11	土器 瓢 杯	口径:— 高さ:— 底径:—	口縁部。外縁に平行切ぎ目、内面は同心円内で口底側で削して いる。	砂粒多く 含む。	還元	明褐色	

5号住居跡（第17～19図 表6 図版3・5、9）

D・E-29グリッドに位置し、カマド中軸線はN-70°-Eを指向する。形態 南北方向に長い長方形を呈し、隅は直角近くに構築される。規模 床面の中軸線上で長軸長4.75m×短軸長3.85mを測り、床面積は約18.3m<sup>2</sup>である。主柱穴 検出されない。埋土 2層に分層可能な自然堆積で、1層は浅間B軽石純層である。カマド 東壁の南端に位置し、掘り方のみ確認される。壁より幅83cm・長さ55cmの三角形平面に掘り込み構築されている。煙道は急な角度で立ち上がり、燃焼部は壁内に存在する。床面 ほぼ平坦であるが、多少の凹凸が見られる。壁溝 検出されない。貯蔵穴 検出されない。遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器が床面を中心に出上している。

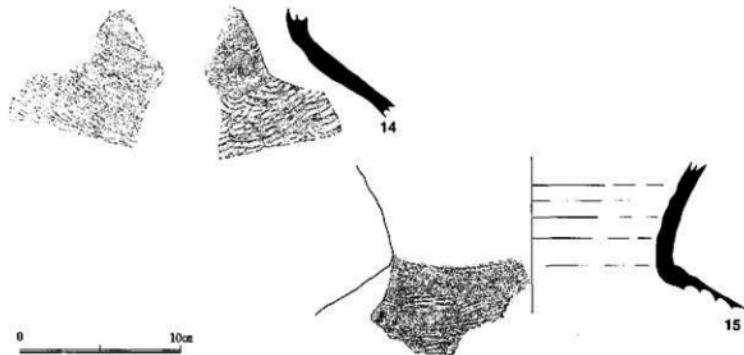


第17図 5号住居跡・出土遺物（1）



0 10cm

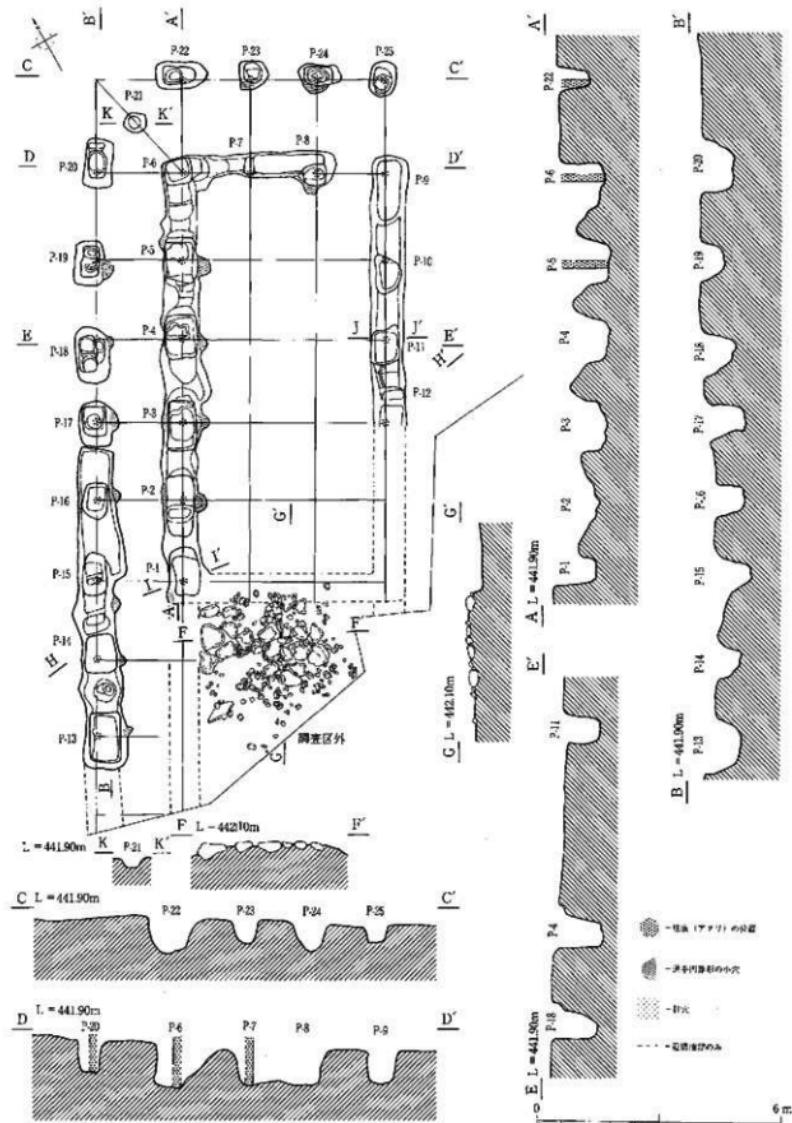
第18図 5号住居跡出土遺物(2)



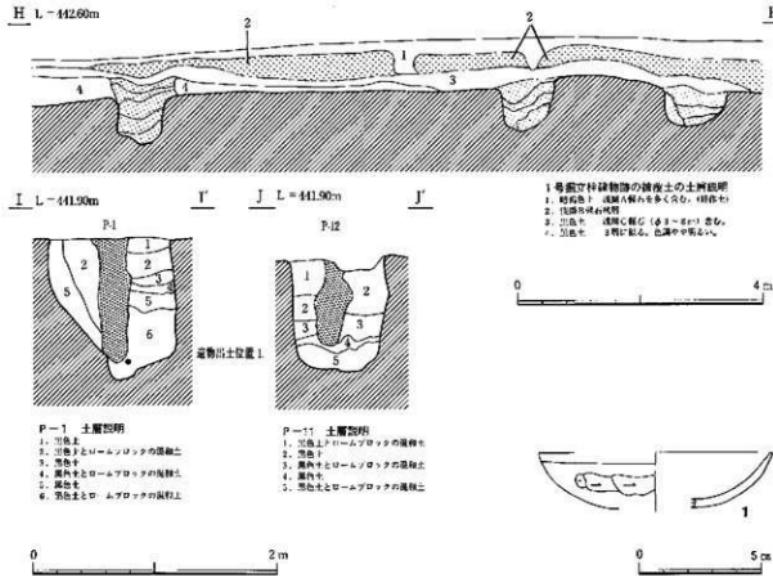
第19図 5号住居跡出土遺物（3）

第6表 5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法算(cm)	器形・成形形の特徴	地土	焼成	色調	出土位置・精査
1	傾窓器	口径160 縁高46 底径87	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部が外傾する。台形の高台。縫隙測量。	砂	還元	灰褐色	壁
2	傾窓器	口径148 縁高 底径	体部はやや丸みを持って立ち上がり、L字縁部が外反する。縫隙測量。	砂	還元	灰褐色	壁
3	灰釉陶器	口径157 縁高51 底径74	丸みを伴って立ち上がる体部。口縁部は外反し、高台は三ヶ月高台が崩れた形状を呈する。縫隙測量。抜け部分。	黒色粘土を含む。	還元	灰白色	白色釉
4	灰釉陶器	口径 縁高 底径	やや高めの直線的な台形。抜け部分。	黒色粘土を含む。	還元	灰白色	白色釉
5	土器	口径116 縁高 底径	口縁部は「コ」の字状を呈し、底部は強いて張りを有している。口縁部は横張で底面は縦張である。断面外側は上位を右から左への削り後、下位は上から下への削りを呈す。断面内側は横張の凹溝である。	砂礫を含む。	焼化	明褐色	壁
6	土器	口径126 縁高 底径	口縁部が直立し、中位より大きめに外傾する。底部は弱い張りを呈す。口縁部は横張である。断面外側は上位を左から右への削り後、下位は左から右への削りを呈す。断面内側は横張の凹溝である。	砂粒を含む。	焼化	明褐色	壁
7	土器	口径130 縁高 底径	口縁部は下位が直立し、中位より大きめに外傾する。横張は弱い張りを呈す。底部は弱い張りを呈す。断面外側は左から右への削りを呈す。断面内側は横張の凹溝である。	砂粒を混じる。底を多く含む。	焼化	明褐色	壁
8	土器	口径 縁高 底径	強く外反する口縁部。張りの弱い底部。口縁部横張で。底部外側は下から上の削り、内側は横張の先端である。	砂粒多く含む。	焼化	明褐色	壁
9	土器	口径 縁高 底径	「八」の字次に開く構造。横張で底を呈す。	砂粒を多く含む。	焼化	明褐色	壁
10	土器	口径 縁高 底径	張りのある割れ。縫隙測量後、断面糸切り無調整である。	砂粒多く含む。	焼化	明褐色	壁
11	土器	口径 縁高 底径	平底。縫隙測量後、断面糸切り無調整である。	砂粒を含む。	焼化	明褐色	壁
12	傾窓器	口径 縁高 底径	縫隙片。外面平行切き口、内面同心円当て具孔。	砂粒多く含む。	還元	明灰色	壁
13	傾窓器	口径 縁高 底径	縫隙片。外面平行切き口。	砂粒多く含む。	還元	明灰色	壁
14	傾窓器	口径 縁高 底径	縫隙片。外面平行切き口、内面同心円当て具孔。	黒色粘土を含む。	還元	灰褐色	壁
15	傾窓器	口径 縁高 底径	縫隙片。外面平行切き口。口縁部輪郭崩壊。	砂粒多く含む。	還元	明灰色	壁



第20図 1号掘立柱建物跡 (1)



第21図 1号掘立柱建物跡（2）・出土遺物

第7表 1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	法華 (cm)	器形・底盤形の特徴	黏土	焼成	色調	出土位置・備考
1	円錐	口径 17.2 鋸高 3.5 底径	底盤は丸底気味。体部は内凹しながら腰やかに立ち上がり、腹部は先細り。外周に凹で、外側全体に横方向の施張り。	砂多く含む。	焼成	褐色	P-1 の柱直上より出土。

#### 掘立柱建物跡

調査区内に於て1棟が検出され、建物は更に南東方向へ延びている。柱掘り方は、柱位置を布状に連続して掘り込み、内部に平面形が長方形基調の柱穴を穿つ、いわゆる「布掘り工法」を用いている。その構築法・規模・立地場所より、古代の公的な建物と推察される。

また、後に県教育委員会により実施された確認調査(第22図)では、当遺構に関連すると考えられる遺構群が確認されている。なお、遺構の性格についての詳細は、第5章のまとめで述べることとする。

#### 1号掘立柱建物跡(第20・21図 表8 図版4-1・2、5-1~5、6-1~4)

旧国道18号線(中山道)沿いのF-G-23・24グリッドに於て検出された南北棟建物で、桁行はN-24°-Eを指向する。建物は大きく分けて「身舎」と身舎の北面・西面を調節する「柱列」、そして「石敷」より構成され、身舎を調節する柱列の内壁上部には「逆半円錐形の小穴」が部分的に認められる。

以下は各部位の詳細と若干の復元の一案である。

### ① 身舎について (P-1~12)

北東隅を除き布掘り工法を用いている。平面規格は桁行5間・梁間3間で、その建物に柱筋を描えた別棟の建物が、石敷より約1.6mの間隔をとって並列して存在するという見解が大勢的である。しかし、その後の検討によれば桁行6間以上・梁間3間の建物で、当初は南妻として確認された柱列(P-1東北列)は、桁行6間以上の身舎内を仕切る「間仕切り」の可能性も考えられる。その理由として、現況を留めていると判断される石敷の高さが構築時の柱掘り方の掘り込み面に一致し、石敷と建物跡は同時期に機能していた可能性が高いと考えられる。そうであるならば、別棟と考えられた建物の北妻は掘立柱建物という前提では成立し難い。また、発掘調査段階では、西側身舎柱列がP-1以南でも、ほぼ連続して確認されている。

柱掘り方の規模は、布掘りが幅0.8~1.1mで確認面よりの深さは0.3~0.5m、内部の平面長方形の柱穴は1m間隔で穿たれ、長軸長1m・短軸長0.7mで布掘り底面からの深さは0.5~0.7mを測る。

柱間寸法は、各柱穴の底面に柱の「アタリ」と思われる硬化面が桁行で約195cm間隔、梁間で約170cm間隔で確認されており、心々で桁行195cm(総長9.75m以上)・梁間170cm(総長5.1m)と考えられる。柱径は幾つかの柱掘り方(P-1・12等)の土層断面で観察された柱径より約30cm前後と推測される。

柱掘り方内の埋土は、黒色土とローム主体の混和土の互層堆積で、突き固めながら充填されている。この様な詰め込みは、大型の掘立柱建物に通行の手法として認められる。

### ② 身舎を囲繞する柱列について (P-13~25)

身舎の北面と西面に確認されている。平面形は長方形を基調とし、北面柱列の4基(P-22~25)と西面柱列の北より4基(P-20~17)は布掘りを施さず単独で掘り込まれる。柱穴位置は身舎柱穴に対応し、西面柱列は7間以上、北面柱列は3間となり、規模は身舎に比してやや掘り込みが浅い。

この柱列については「庇」の可能性があるとしながらも、北西隅に当柱列に対応する柱穴が検出されなかったこと、北西隅の内側(P-21)に小穴が検出されたことにより、大勢の見解として「塀」の可能性が高いとされている。しかしながら筆者は庇ではなかろうかと考えている。その理由は、西隅に柱は無くとも北側は北側で、西側は西側でそれぞれ庇が付いていたと考えても何等問題がないこと、北西隅の小穴(P-21)の有無が庇の否定材料となり得ないこと、形状が身舎の柱掘り方に近似していること、柱穴の底面で確認された硬化面が身舎柱列の柱の「アタリ」に対応することによる。

柱掘り方の規模は、長軸長1m・短軸長0.7mで深さは0.3~0.7mを測り、概ね身舎柱穴の規模に準じている。柱間寸法は心々で桁行195cm(総長13.65m以上)・梁間170cm(総長5.1m)と考えられ、身舎よりの柱の出は2面とも約220cmを測る。

### ③ 石敷(集石)について

身舎内の間仕切りと考えられる柱列以南より確認され、一部は柱列の際に掛かっている。石は径3.5mの範囲内に、径30~50cm程度の扁平な川原石を敷き、その間を拳大の礫を詰め込んで構築されている。延びは更に南東方向に展開する可能性があり、一部の石には被熱による亀裂、赤色変化が認められる。

確認位置は標高441.9mで、掘立柱建物跡の調査面より約20~30cmほど上であったが、表土層よりの土層観察により、構築時の柱掘り方面と一致することが判明した。

時期的には一連の柱穴と同時期のものと考えられ、性格は不明瞭ながら建物跡に付随する施設であることは確実であろう。

#### ④ 柱掘り方に付随する逆半円錐形の小穴について

身舎西側柱列と庇の柱掘り方の内壁上部に於て部分的に確認され、特に身舎西側柱列に顕著である。規模は径が約20~30cmで、深さは柱掘り方の上端より20cm程度まで確認が可能である。これらの小穴は、ほぼ柱位置に対応しており、基本的に桁行約195cm、梁間約170cmの間隔で存在する。

この小穴の意味については予てより、柱の抜き取り痕、柱を立てる際にできた痕跡（斜路）、床束穴が想定されてきたが、ここで再度検討してみたい。まず、柱の抜き取り痕であるが、幾つかの柱穴断面より柱痕が確認されており、後に柱を抜き取ったとは考えられない。次に斜路の痕跡であるが、これは柱が特に長い場合に柱掘り方の盤体に斜路を作つて柱を立てるもので、比較的横長に掘り込まれると思われる。当小穴の形状を見るかぎりでは違和感は否めない。最後に床束の可能性であるが、床束の穴ならば深い穴であることは充分に考えられ、当小穴の形状にも違和感はない。ただし、床束と考えた場合には次の問題点がある。

身舎東側柱列の西側、そして身舎内に同様の小穴が検出されていないのである。しかし、遺構確認面の高さの問題が残る。身舎西側柱列に比して身舎東側柱列は、約30~40cm程度下げられて調査されているのである。これは、ここまで掘り下げなければ遺構が確認されなかつた経緯によるものである。したがつて、仮に床束が存在していたとしても、確認段階に於て掘削している可能性もあり得る。また、西側柱列の西側には、顕著と言えないまでも不等間隔の僅かな掘り込みが認められている。

この様な場合、ひとつの大きな判断材料になり得るのは、柱痕と小穴と布掘りの埋上の新旧関係である。布掘りを確認した段階で何が見えていたのかで、ある程度の性格を絞り込むことが可能であろうが、調査段階では捉えきれなかった。

#### ⑤ 出土遺物について（第21図 表7 図版9）

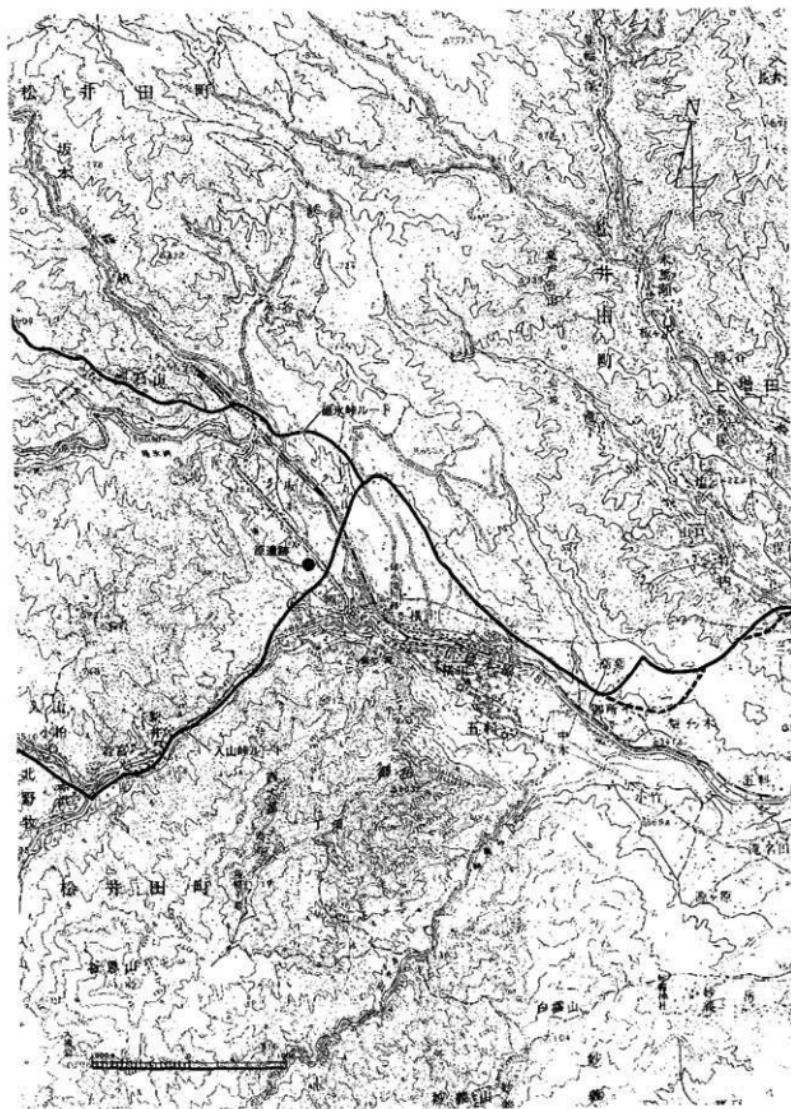
数点の土師器細片と須恵器細片が出土したにすぎない。この内、身舎の柱掘り方底面（P-8）より出土した土師器は最も年代を特定し得るものであり、その特徴より8世紀代の所産と考えられる。

生活遺物が極めて乏しいのも当遺構の特徴であり、特殊な遺構であった現れの一つと考えられる。

#### ⑥ 機能年代について

掘立柱建物跡を覆う埋土は、柱掘り方の直上より黒色土（20~30cm）、浅間B軽石純層（20~30cm）、暗褐色土（耕作土）の順で堆積し、この内で縫層となる浅間B軽石は1108年（天仁元年）の降下と考えられている。また、当遺構の西側には、掘立柱建物跡と主軸方向を逸えた9世紀後半と考えられる住居跡（1・2号住居跡）が検出されている。

以上の事実関係と出土遺物より、8世紀代に構築され1108年以前には廃絶したと判断される。さらにもう一步踏み込むならば、この様な特殊な建物の至近に、主軸方向を逸えた住居跡が併存する可能性は少なかろうと思われる。よって、廃絶年代を9世紀後半以前に考えるのも一案ではなかろうか。



第22図 1号掘立柱建物跡の規模の復元と床束想定位置図

② 復元の一案（第22回）

以上に建物跡の各部位に対し、若干の私見を交えつつ事実関係を述べてきた。前述した通り、建物全体を発掘調査したわけではなく、規模・構造についてはいまだに不明瞭と言える。したがって、以下の事柄は推定の域を出ることはないが、あえて若干の復元を試みる。

規模については身舎が桁行6間（195cm等間）以上、梁間3間（170cm等間）で、北面と西面に庇（約2.2m）の出を想定した。そこで、第22回の県教育委員会により実施された拡張区のP-26～29に着目したい。このピットは、理上や規模・形態が北庇の柱掘り方に近似し、さらに北庇（P-22～25）と北妻（P-6～9）の柱位置を結ぶラインの延線上に一致し、距離は北庇の柱筋より約25.85mを測るのである。

もし、このピットが当建物跡の南庇と仮定するならば、庇の出は南面と北面で約4.4mなので、身舎全長は21.45mとなる。桁の柱間寸法は約195cmを測るので、桁行は11間となる。よって、桁行11間・梁間3間の身舎に東側を除く3面此の建物が復元される。

また、当初南妻と考えられた柱列を間仕切りとし、柱掘り方の内壁上部に付随する小穴を床束とするならば、複室構造の北室が床張りで、南室が石敷の可能性がある。ただ、西庇と考えた柱掘り方のP-13・14の内壁上部にも小穴が穿たれており、これを床束穴とするならば南北もまた床張りとなる。しかるに、南室は当初床張りで、その後、石敷に改築された可能性もあり得よう。

なお、基準尺度については不明瞭であるが、仮に1尺を28cmと考えるならば、桁行195cm（6.961尺）、梁間170cm（6.071尺）、庇の出220cm（7.857尺）となり、ほぼ整数値が得られることになる。

第8表 1号掘立柱建物跡ピット計測表

番号	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10
平面形	長方形	長方形	長方形	長方形	長方形	長方形	略方形	略方形	長方形	長方形
長軸(cm)	94	146	113	108	108	68	42	58	148	86
短軸(cm)	57	64	62	80	73	62	22	52	63	62
深さ(cm)	133	131	138	142	144	136	115	134	130	129
備考	布掘り									

番号	P-11	P-12	P-13	P-14	P-15	P-16	P-17	P-18	P-19	P-20
平面形	長方形									
長軸(cm)	86	—	133	93	103	87	108	135	108	118
短軸(cm)	66	58	76	78	58	64	95	90	96	68
深さ(cm)	128	128	128	130	148	136	128	102	76	98
備考	右掘り	右掘り	右掘り	右掘り	右掘り	右掘り	単独	単独	単独	単独

番号	P-21	P-22	P-23	P-24	P-25	P-26	P-27	P-28	P-29
平面形	円形	長方形	略方形	略方形	略方形	不明	略方形	円形	不明
長軸(cm)	55	125	70	97	85	65	105	45	100
短軸(cm)	48	68	66	70	65	—	85	40	—
深さ(cm)	26	105	88	106	91	—	—	—	—
備考	単独								

## 溝

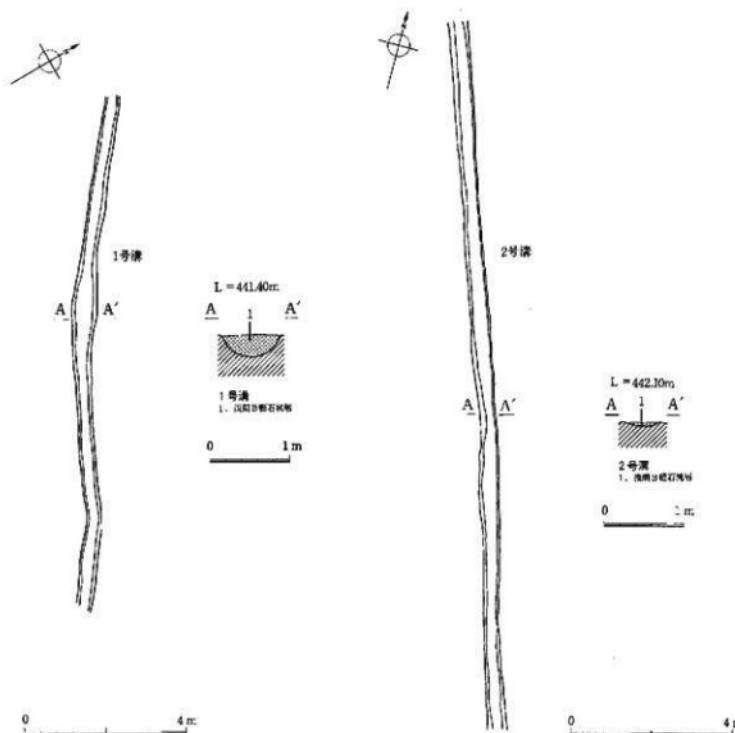
本調査区内に於て 2 条の溝が確認されている。何れの溝も浅間 B 軽石純層に直接覆われており、2 号溝は 1 号掘立柱建物跡と重複関係にある。

### 1号溝（第23図 図版3-7）

T-24（トレンチ）に位置する東西溝である。規模は確認現長12.7m・上面径0.4~0.6m・下面径0.2~0.4m・深さ0.3mを測る。断面形は「U」字状を呈し、底面の高さは概ね一様である。埋土は浅間 B 軽石純層の単層である。出土遺物は無かった。

### 2号溝（第23図）

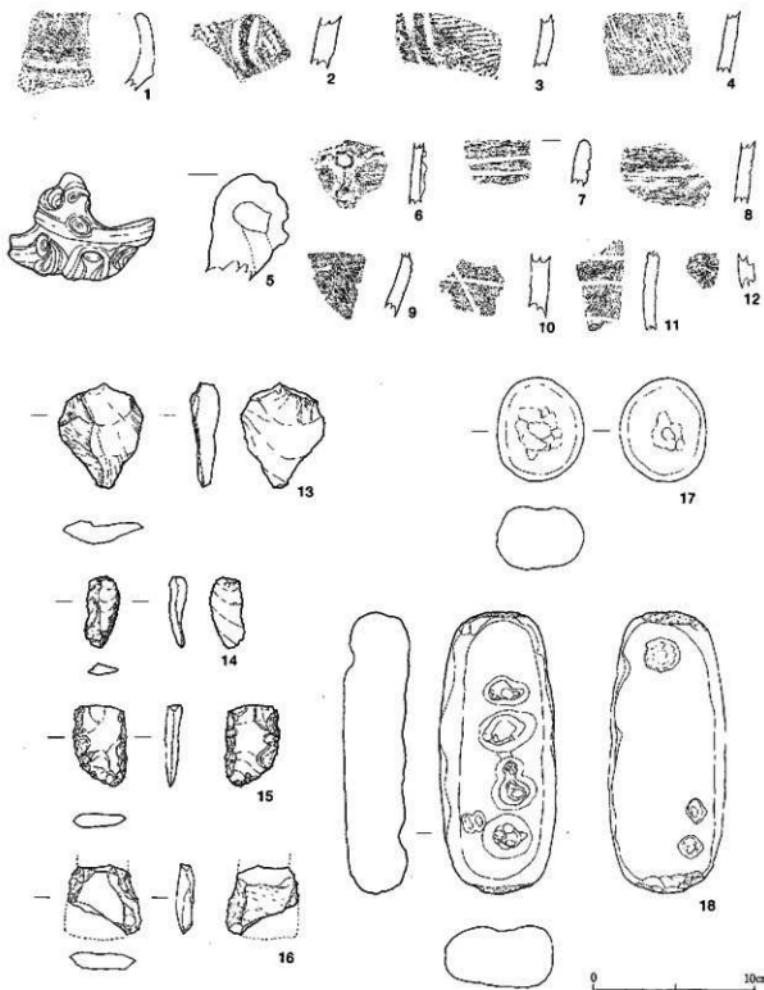
E~G-22~23グリッドに位置する南北溝で、1号掘立柱建物跡を切り込んで構築されている。規模は確認現長17.5m・上面径0.2~0.4m・下面径0.2~0.3mを測る。断面形は「皿状」を呈し、底面の高さは北端に比して南端は約0.3m程低くなり、南方向に向かい緩やかに傾斜している。堆土は浅間 B 軽石純層の単層である。出土遺物は無かった。



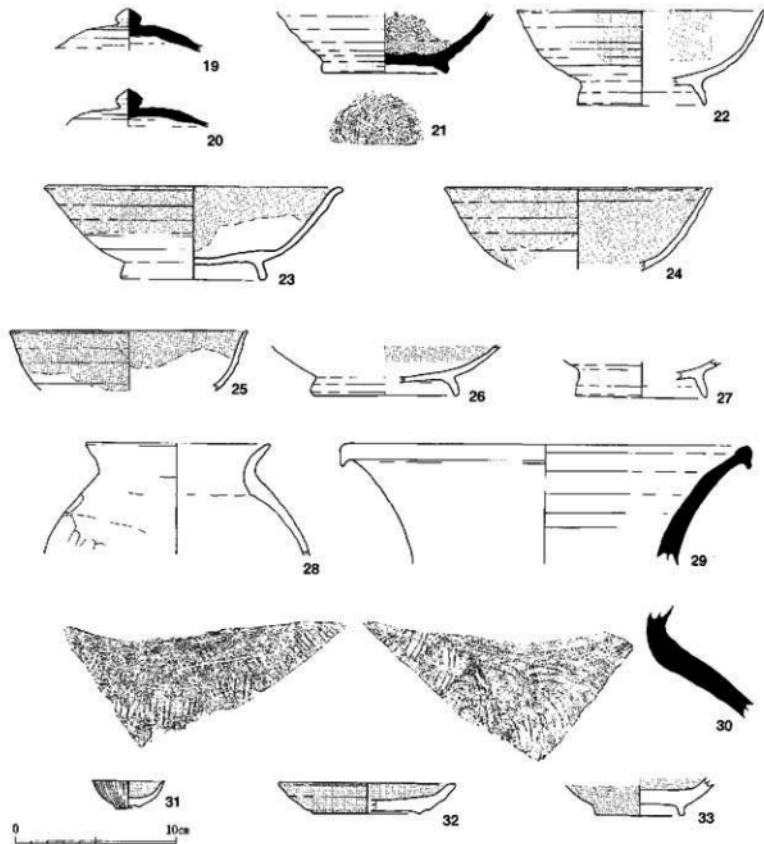
第23図 1・2号溝

#### 第4節 遺構外出土遺物（第24・25図 表9・10 図版10）

绳文時代では中期から後期の土器・石器が、平安時代では土師器・須恵器・灰釉陶器が若干量出土し、中世に至っては陶磁器が3点ほど出土した。



第24図 遺構外出土遺物（1）



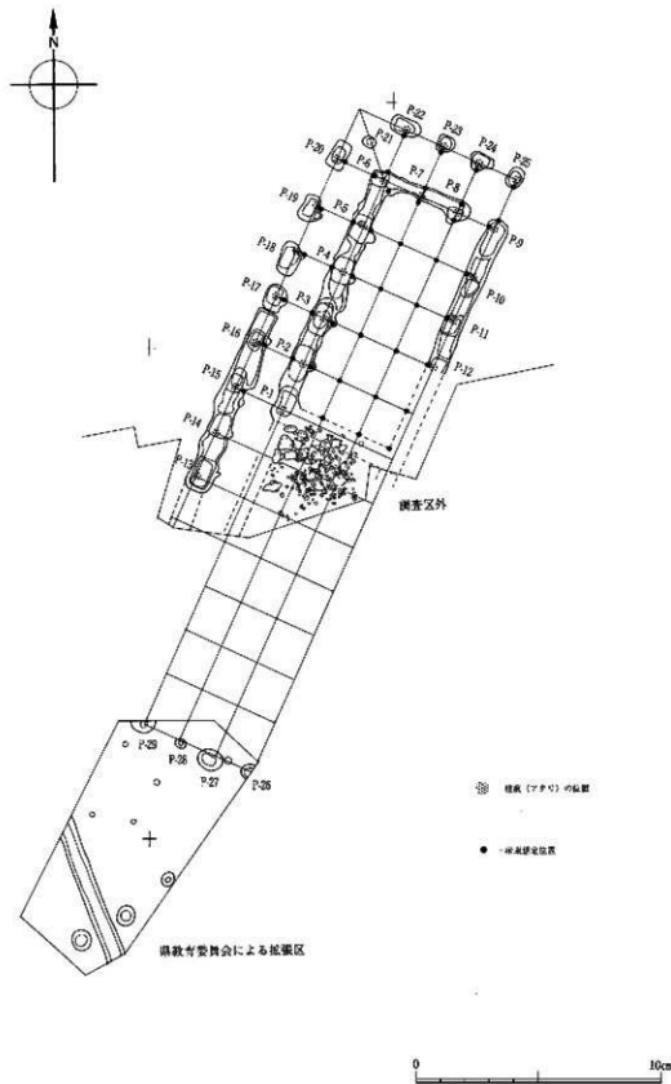
第25図 遺構外出土遺物（2）

第9表 遺構外出土遺物観察表（1）

番号	形種	寸法(cm)	器形・成形形の特徴	粘土	焼成	色調	出土位置・備考
1	縦文		内凹する山腹部付で、東下に後退起線を有す。	砂粒多 く含む。	良好	明赤橙 色	加賀利E末
2	縦文		断面がU字である。底面と沈縫により区画文を構成し、内外にR.L.の模文を施す。	砂粒を多 く含む。	やや 不規 則	暗褐色 色	加賀利E末
3	縦文		平行する2本の太い沈縫により区画文を構成し、内外にR.L.の模文を施す。	砂粒を多 く含む。	やや 不規 則	暗褐色 色	加賀利E末
4	縦文		条状が施されている。	砂粒を多 く含む。	今や 小瓦	明褐 色	加賀利E末
5	縦文		把手部分である。太い沈縫と刻文が施されている。	砂粒を多 く含む。	やや 不規 則	淡褐色 色	鶴之内
6	縦文		横状沈縫の区画文を施す。	砂粒を多 く含む。	良好	淡黄褐 色	鶴之内
7	縦文		口縫部である。沈縫が横段に平行して施文されている。	縫やや多 く含む。	良好	明褐 色	

第10表 遺構外出土遺物観察表（2）

番号	器種	法華（ax）	器形・変形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
8	鏡文		削部片である。沈板が横位に平行して施文されている。	薄やや多く含む。	良好	明黄色 地	
9	鏡文		格子に施文された北緯文。	砂粒を含む。	やや 淡灰褐色	不良	加賀灰B
10	鏡文		格子に施文された北緯文。	砂粒を含む。	やや 淡灰褐色	不良	加賀灰B
11	鏡文			砂礫を含む。	青銅	深褐色	
12	鏡文			砂礫を含む。	青銅	深褐色	
13	刮片		岩の剥離刮片。	砂礫を含む。	青銅	深褐色	
14	刮片		チャートの延長刮片で、範邊にリッヂが見られる。				
15	削		削巻の削片と思われる。古糞陶質の範邊に削巻が入る。				
16	石斧		石斧の底片である。穂部が呈すと思われる。				
17	石斧		石斧の底片である。孔は墨状を示す。				
18	石斧		石斧にいの所、表面に3ヶ所に孔が見られ、孔は墨状を示す。今体に摩擦しており、両端部は叩き石として利用されている。				
19	須恵器 蓋	口徑 厚 底径	-	丸錐状のつまみを有す。腰錐削後、天井部外縁の1/2を回転削り。	砂粒を多く含む。	透光 灰白色	
20	須恵器 蓋	口徑 厚 底径	-	宜津状のつまみを有す。腰錐削後、大井部外縁の1/2を回転削り。	黑色粒を含む。	透光 明灰色	
21	須恵器 蓋	口徑 厚 底径 高台付	7.4	三角形の高台。右側に腰錐削整型、左側を切り。	砂粒を多く含む。	透光 灰白色	内面に擦りが付着。
22	灰釉陶器 網	口徑 厚 底径	5.4 5.8 5.8	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、高い高台を有す。端縁周全体、体部下端部腰錐削りを施す。横け掛け。	砂粒若干含む。	透光 灰白色	白色釉
23	灰釉陶器 瓶	口徑 厚 底径	8.65 8.6 8.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し、高い高台を有す。腰錐削後、体部下端部腰錐削りを施す。横け掛け。	丸石を含む。	透光 明灰色	淡褐色釉
24	灰釉陶器 網	口徑 厚 底径	16.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。左側に腰錐削整型。横け掛け。	砂若干含む。	透光 灰白色	白色釉
25	灰釉陶器 網	口徑 厚 底径	14.6	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。左側に腰錐削整型。体部下端部腰錐削りを施す。横け掛け。	砂若干含む。	透光 灰白色	白色釉
26	灰釉陶器 網	口徑 厚 底径	8.6	やや高い高台。右側に腰錐削整型。	黑色粒を含む。	透光 墨ねじき	白色釉
27	灰釉陶器 網	口徑 厚 底径	8.0	高い高台。右側に腰錐削整型。	砂若干含む。	透光 灰白色	白色釉
28	土師器 蓋	口徑 厚 底径	11.4	口縁部に「ノ」の字状に外反し、側部は環切形を呈す。口縁部模様で、側部外面削り、側部内面削で施す。	赤色底化 物を多く含む。	透化 弱め青色	
29	須恵器 蓋	口徑 厚 底径	25.2	削部片。内面には同心円當て目、外側は平行叩き目、側部から口縁部に垂れを施す。	砂多く含む。	透光 灰白色	
30	須恵器 蓋	口徑 厚 底径	-	削部片。内面には同心円當て目、外側は平行叩き目を施す。	黑色粒を含む。	透光 明灰色	
31	白漆 器	口徑 厚 底径	4.5 1.5 1.7	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は横反り。長石粒が内面から口縁部外側に見られ、外側体部以下は路船となっている。	緻密	良好 黄白色	
32	白漆 器	口徑 厚 底径	11.0 1.9 6.6	丸盤。高い高台を有す。先石粒が全面に剥げられている。	若い	良好 黄白色	
33	白漆 器	口徑 厚 底径	5.5	刃付け。底盤は厚脂、淡褐色釉。	若い	良好 黄白色	



第26図 進路位置と東山道駅路の紳越えルート想定図 (1/50,000)

## 第5章 まとめ

第4章では、各遺構と遺物について述べてきた。特に1号掘立柱建物跡については、若干の復元的試案を含みながら詳細に報告した。本章では各住居跡の概要を述べた後、1号掘立柱建物跡の性格と問題点を論じてまとめる。

### 住居跡

検出された5軒の住居跡は、9世紀後半から10世紀前半に亘り営まれた集落跡で、旧国道18号線沿いの西側台地に2軒（1・2号）と東側台地に3軒（3～5号）が検出された。時期と位置関係より、1号掘立柱建物跡との相互関連は薄いと判断される。また、床面積は時代が下るにしたがい拡張傾向にある。

9世紀後半に入ると1・2号住居が西側台地に構成される。平面形は南北に長軸をとる長方形で、カマドの中軸線はN-65°-Eに據える。カマドは東壁南寄りに付設され、主に石材と粘土を用いて構築されている。いずれも整溝と貯蔵穴を有し、床面に主柱を持たない。床面積は1号住居が10.2m<sup>2</sup>で、2号住居は12.8m<sup>2</sup>を測る。埠上は顯著な自然堆積を示し、浅間B軽石が純層で入る。

土器の器種構成には、土師器は壺、須恵器は壺・高台壺・壺、灰釉陶器は碗がある。一般的な土師器の壺は「コ」の字状口縁のものが主体的である。須恵器壺は回転糸切り無調整で、ロクロ目が目立つ。灰釉陶器の碗は、その特徴より光ヶ丘1号窯式に比定される。1号住居跡の方が古い様相である。

次の10世紀前半代には、3・4・5号住居が東側台地に構成される。3号住居跡は南側の約2/3程度が調査区外へ伸びており、規模・形状については不明瞭である。カマドは付設位置と方向がバラツキ、5号住居を除いて石材と粘土を用いて構築されている。いずれも主柱穴を持たない。床面積は4号住居が15.6m<sup>2</sup>で、5号住居は18.3m<sup>2</sup>を測る。埋土は顯著な自然堆積を示し、浅間B軽石が純層で入る。

土器の器種構成には、土師器は壺・壺、須恵器は壺・高台壺・壺、灰釉陶器は碗・瓶がある。土師器壺（4号・1）は1点のみで、部体は丸く立ち上がり、口縁は緩やかに外反し、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。土師器壺は「コ」の字状口縁のものが主体的で、前代に比して口縁部や底部を中心で器肉がやや厚くなる。須恵器壺は全て回転糸切り無調整で、焼成良好で硬質のものは少なくなる。灰釉陶器の碗は、その特徴より大原2号窯式に比定される。4号住居はやや古い様相である。

### 1号掘立柱建物跡の性格について

第4章で論じた通り、8世紀代から1108年以前に機能した建物跡である。規模は桁行11間（195cm等間・總長21.45m）、梁間3間（170cm等間・總長5.1m）の身舎に、東面を除く3面庇（約2.2m）の出を想定し、さらに身舎内は複室構造の北室は床張りで、南室は床張りの後、石敷に改築した可能性を指摘した。

以上の復元案がどの程度の信憑性をもつもののか定かではないが、いずれにせよ一般の人々が生活した住まいとは考え難い。公的な、もしくは財力・勢力のある者の何らかの施設と考えるのが妥当であろう。

この地方に於て、8世紀から9世紀代の公的な建造物として考えられるのは、「延喜式」「頃聚三代格」に記載された「東山道坂本駅家」「碓氷坂門」や「続日本記」に記載のある豪族の「上毛野坂本氏の館」などが考えられる。以下これらについて考察し、後に性格を推定する。

なお、当掘立柱建物跡の性格については、水田稔氏による「群馬県松井田町「原遺跡」で発見された掘立柱建物跡」で詳細かつ的確に報告されている。よって、氏の論拠に準じて考察を展開して行きたい。<sup>注1</sup>

## ① 坂本駅家について

「東山道」という言葉が史料上に初めて見えるのは、『日本書記』承和天皇五十五年二月一日条にある「彦彥鳩王を以て、東山道の十五か国都督に押けたまう」とあるものである。この東山道は租・調輸道路であると同時に、中央集権国家を維持・強化するための軍道であり、駅路としては『上野国交替実録帳』に「無実」となっている庚午年緒九十巻の内訳に、「昔都別割拾陸駅家戸肆」とみえることから、庚午年（697年）には駅家が置かれていたと考えられている。

『和名抄』による上野国の駅家は、坂本・野尻・群馬・佐位・新田の五駅であり、碓氷峠下の坂本駅に15疋、他の四駅には10疋の駅馬を置いていた。また、奈良時代には全14郡の郡家に伝馬が置かれていたとされるが、確認できる資料はない。

この東山道駅路は、信濃國の長倉駅を過ぎると、日本書紀や方策集に「碓日峰」「碓氷の山」「碓日の坂」と詠まれている同境の峠を越え「坂本駅」に至るのである。從来、この碓氷越えについては、旧国道18号線（中山道）とほぼ同ルートの「碓氷峠説」と現在の碓氷バイパスに沿う「入山峠説」の二説があり、地名・地形・途中の遺跡などを基にその説を主張している。

從来より駅家跡の推定には、地名をもって根拠とされていることが多い。この坂本駅の場所についても、現存する坂本の地名や「ウスイの坂」の「サカのモト」を意味する地形や立地からも、原遺跡の所在する台地上に存在していたと推定できる。また、遺跡の立地も駅家跡を推定する重要な要素となる。令制では三十里（現在16km）に一駅を原則としているが、地形が険しかったり水や草がない場合には、里数にこだわらずに簡くことを規定している。駅を置く場合には、前述の条件に加えて、駅家を運営するための可耕地（駅田）やそれを運営する駅戸の存在が考えられ、さらには、駅使を接待するために、眺望のすぐれた場所が選定されたと思われる。なお、この駅家の想定地を坂本地区より原地区に求める説が強い。その理由として、原地区が中山道から入山峠に別れる分岐点であること、前述した信濃國の長倉駅から約三十里（現在16km）を満ること、峠をはさんで軽井沢町にもある「白蛇神社」が、当遺跡の南東約200m地点に鎮座していることなどによる。

## ② 碓氷坂闘について

万葉集にも詠まれた碓氷峠は、古代から近世に亘り、東日本から日本海側・西日本への通過点として重要な地點であった。

平安時代も9世紀になると世情不安となり、『類聚三才格』の昌泰二年（899年）の太政官府には、上野国を中心とする東国において、馬を奪って輸送業を営む「しゅう馬ノ党」が出没するため、相模國の足柄坂と上野國の碓氷坂に閻を置き、公驗（官発行の証明書）によって通行を監視していたことが見える。この碓氷坂闘の終焉については、『貞信公記』に天慶三年（940年）四月六日に碓氷坂闘を停止したとの記事がみられる。よって、機能年代は9世紀終末より10世紀中頃までとなる。

『安中志』によるとその後の閻跡は、正応二年（1289年）北条氏が関長原に、文永元年（1292年）伊奈忠次・大久保長安が横川に、慶長十九年（1614年）伊丹兵部少輔藤原直勝が関長原に、そして元和八年（1622年）に閻長の閻所を廃して横川に移したとされる。

『類聚三才格』に伝わる閻の想定地は、前述した閻の経緯と現在の残っている地名より、現在の横川字閻長とする説が強い。なお、10世紀代の須恵器が出土し、攻防に地の利を得ていることなどにより劍石山の山頂に閻跡を求める説もある。

### ③ 上毛野坂本氏の跡について

『日本書記』によれば、東国を最初に統括したのは崇神天皇の皇子「豊城入彦命」で、名跡考によれば命は上野国造の始祖という。書記に「以豊城命令治東。是上毛野君・下毛野君之始祖也」とあり、上毛野は豊城入彦命の末裔で、代々国造・國司として上毛の地を治めていたのであろう。

上毛野君の本家は後に京に上り大和朝廷の役人となったが、一族の者がこの地に残り地方豪族となって定着し、その中に碓氷に関係ある者として碓氷郡の人、外從八位下、上毛野坂本君黒益の名が見える。したがって、上毛野氏は在地の支配者のみならず、都と関連した官僚でもあったのである。

以下は、『続日本書記』にみえる上毛野坂本氏に関する記録の一節である。

・大寶元年（701年）石上部登與が、上毛野坂本の姓を賜う。

・天平勝寶元年（749年）五月十五日 上野國碓氷郡外從七位上石上部諸弟が、國分寺に知識物を献じ、外從五位下を授かる。

・天平感寶五年（753年）七月十九日 左京人正八位上石上部君男鳩ら47人が、大寶元年に父が賜った上毛野坂本の姓に改めてほしい要請書を提出し許可された。

・寶龜元年（770年）十一月十九日 正六位上上毛坂本君男鳩に、外從五位下を授ける。

この記事から推察すると、坂本氏が碓氷郡を本拠地として、この地方を統治していた様相が伺われる。仮に、その姓から本拠地を「坂本」地区に求めるならば、律令官人として都とパイプを持つ強い統治力を背景に、要衝とされる碓氷坂の出入り口を掌握することも可能であったと考えられる。

### ④ おわりに

以上に、『延喜式』『類聚三才圖会』『日本書記』などを手がかりに、当建物跡の性格を探ってきが、依然として確たる性格の認定是不可能である。それでも前述の考察により、信憑性の高い性格のしほり込みが成されたと考えている。

その結果、最も蓋然性が高いのは「坂本駅家」と思われる。その主な理由として、②の碓氷坂関の存続期間は、9世紀終末より10世紀中頃までであり、年代的には当建物跡より後発的な感は否めない。③の上毛野坂本氏の跡については年代的に矛盾はないが、その主な根拠を坂本氏の「姓」と坂本地区的「地名」の一致を前提に置かねばならず、肯定材料として不安定と考えられる。

現在、駅家の全体の範囲・境域が確實に報告された例は無く、調査事例そのものが稀である。特に東国に於ける規模・構造などについては不透明である。そのような中で、播磨国の「布施駅」と確認された小丸遺跡では、地域的に日本の歴史にとどまらず貴重な成果を提示している。その発掘成果によれば、中枢部は約80m四方と推定され、その周辺に駅家の付随施設が想定されている。駅家の建物群は、駅家全体を囲む柵の中に、機能をえた2種類があると考えられており、一つは駅舎院とよばれる中枢部で、もう一つは屋とか倉とか呼ばれる雜舍群である。駅舎院はその名が示す通り、駅全体の囲いの中に更に内側に柴垣などで囲まれており、駅使の宿舎にあてられていたと考えられている。雜舍群は駅の実務を執行する建物や、駅出からの収穫物を収める建物、そして厩舎などから構成されていると考えられている。

布施駅は山陽大路の駅であり、このような造形形態が東山中路の駅家にもあてはまるか否かは定かではないが、同じ律令理念の基に造営されたのであれば、やはり基本形態は類似していると考えられる。

いずれにせよ、仮に1号独立性建物跡が駅家施設の一部であるならば、多くの施設は南北方向の畑地帯に眠っていると考えられ、今後の資料の蓄積を望まずにはいられない。

註

- 1 水田稔 「群馬県邑水郡松井出町「原遺跡」で発見された権立柱建物跡について」『考古学ジャーナル』No.332, 1991  
ニューサイエンス社
- 2 木本雅泰 「東山道・山坂を越えてー」『木下良輔 古代を考える古代道路』 吉川弘文館 1996
- 3 高橋美久二 「古代交通の考古地理」 大明堂 1995
- 4 群馬県教育委員会 「歴史の道調査報告書 東山道」「群馬県歴史の道調査報告書第十六集」 1883
- 5 松井田町文化振興委員会 「松井町町誌」 1985
- 6 国下多美樹 「基礎構造からみた古代都城の礎石建物」「長岡京文化論叢Ⅱ」 中山修一先生高寿記念事業会 1992
- 7 前橋市教育委員会 「方賀園地遺跡群第2巻 方賀東部園地遺跡Ⅱ-古墳～平安時代編その2-」 1988

# 写 真 図 版

原遺跡

図版  
1



1. 遺跡集辺（航空写真）



2. 遺跡全景（航空写真）

## 原遺跡

図版  
2



1. 1号住居跡確認状況（西より）



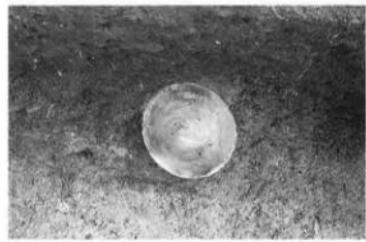
2. 1号住居跡表面（南より）



3. 1号住居跡全景（西より）



4. 1号住居跡カマド（西より）



5. 1号住居跡遺物出土状況（北より）



6. 2号住居跡全景（西より）



7. 2号住居跡カマド（西より）



8. 3号住居跡全景（南より）

原遺跡

図版  
3



1. 3号住居跡断面（北より）



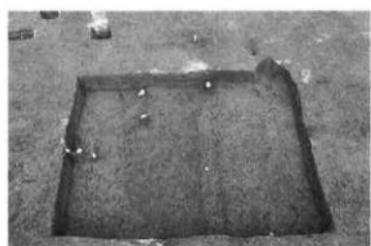
2. 3号住居跡カマド（南より）



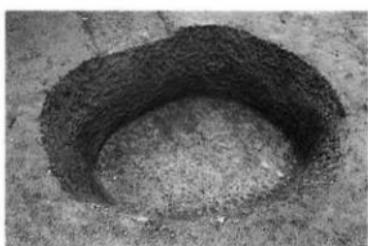
3. 4号住居跡全景（西より）



4. 4号住居跡カマド（西より）



5. 5号住居跡全景（西より）



6. 1号住居跡全景（東より）



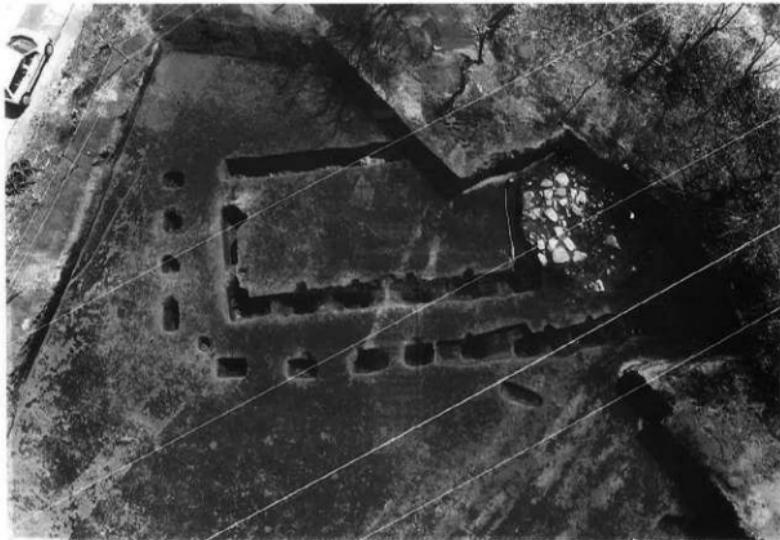
7. 1号溝全景（東より）



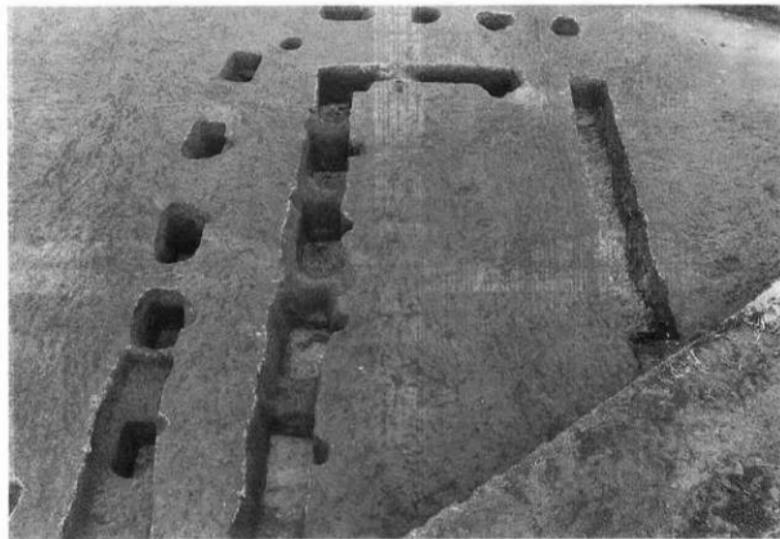
8. 基本層序（北壁）

原遺跡

図版  
4



1. 1号掘立柱建物跡（航空写真）



2. 同 全景（南より）



1. 1号掘立柱建物跡西側身舎柱列（北より）



2. 同 身舎西側柱列と外周の柱列（南より）



3. 同 P-1断面（北より）



4. 同 P-11断面（北より）



5. 同 P-12断面（北より）

## 原遺跡

図版  
6



1. 1号掘立柱建物跡 P-6 柱振り方（西より）



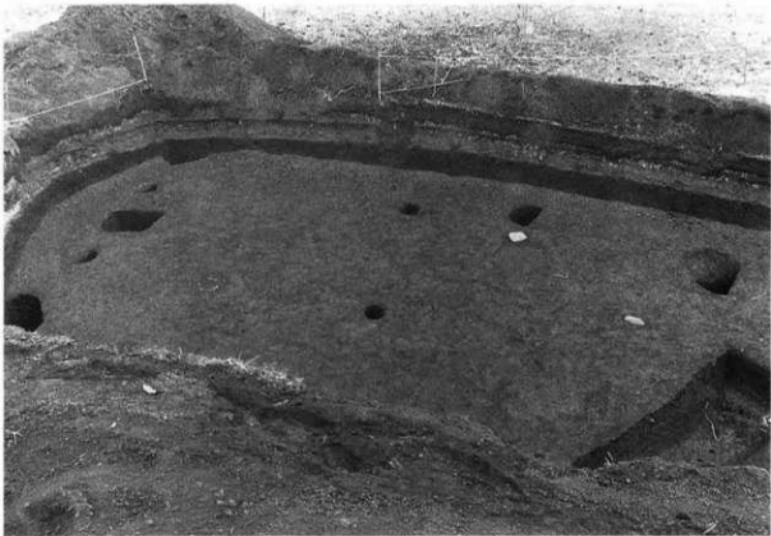
2. 同 P-8 柱振り方（西より）



3. 同 石敷（南より）



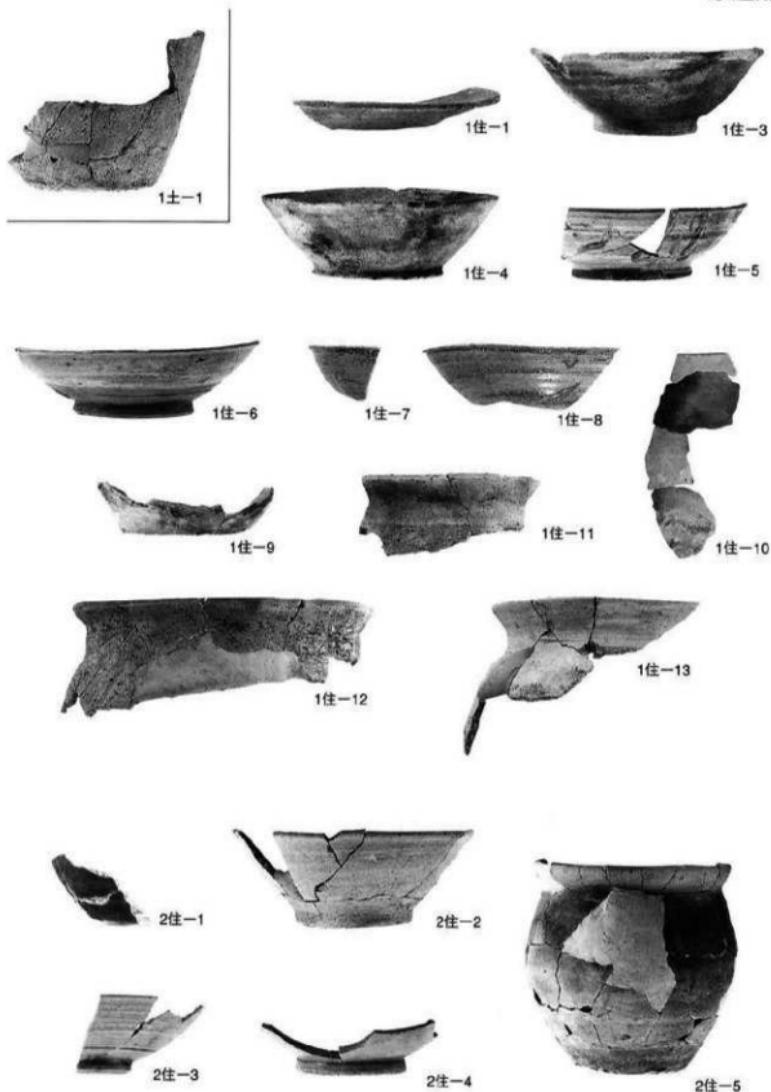
4. 同 作業風景（北より）



5. 拡張区全景（西より）

原遺跡

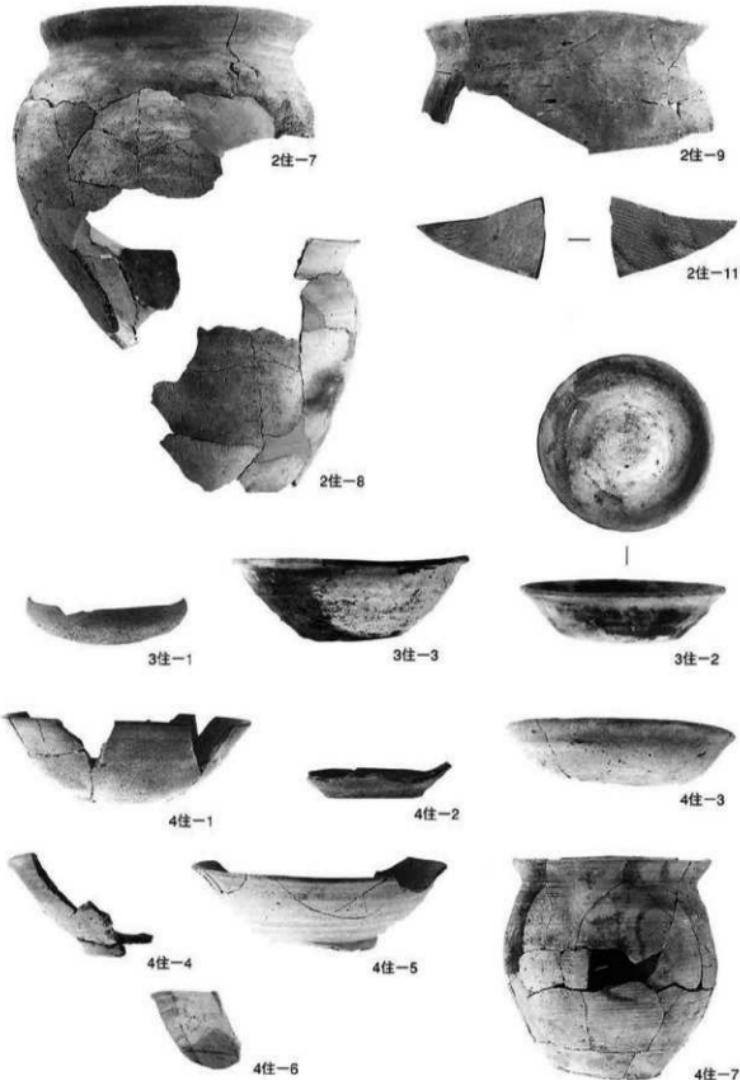
圖版  
7



1号土坑、1・2号住居跡出土遺物

原遺跡

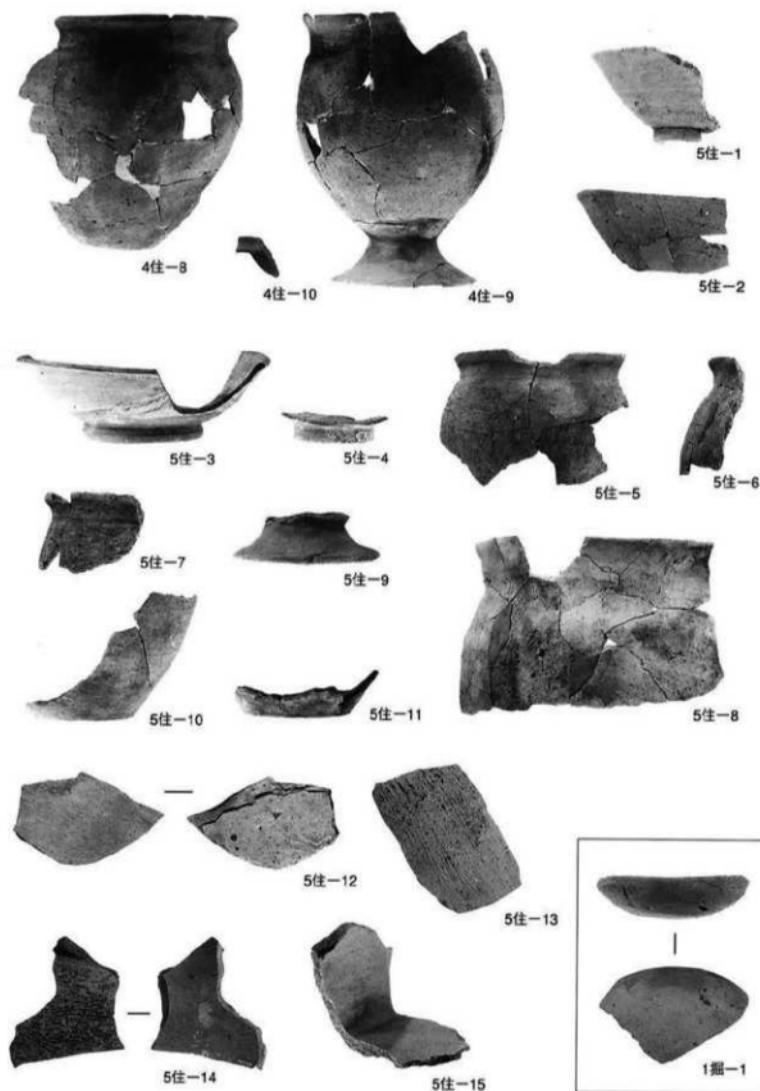
図版  
8



2・3・4号住居跡出土遺物

原遺跡

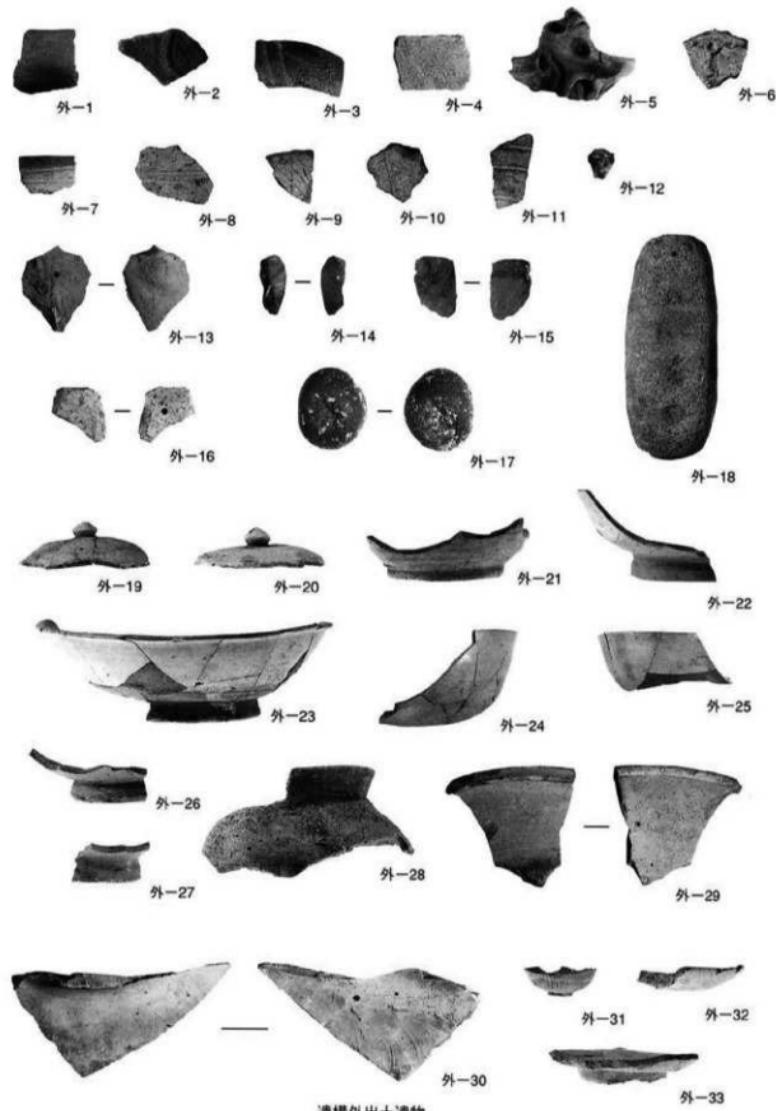
図版  
9



4・5号住居跡、1号掘立柱建物跡出土遺物

## 原遺跡

圖版  
10



遺構外出土遺物

# 横川萩の反遺跡

(萩の反遺跡)

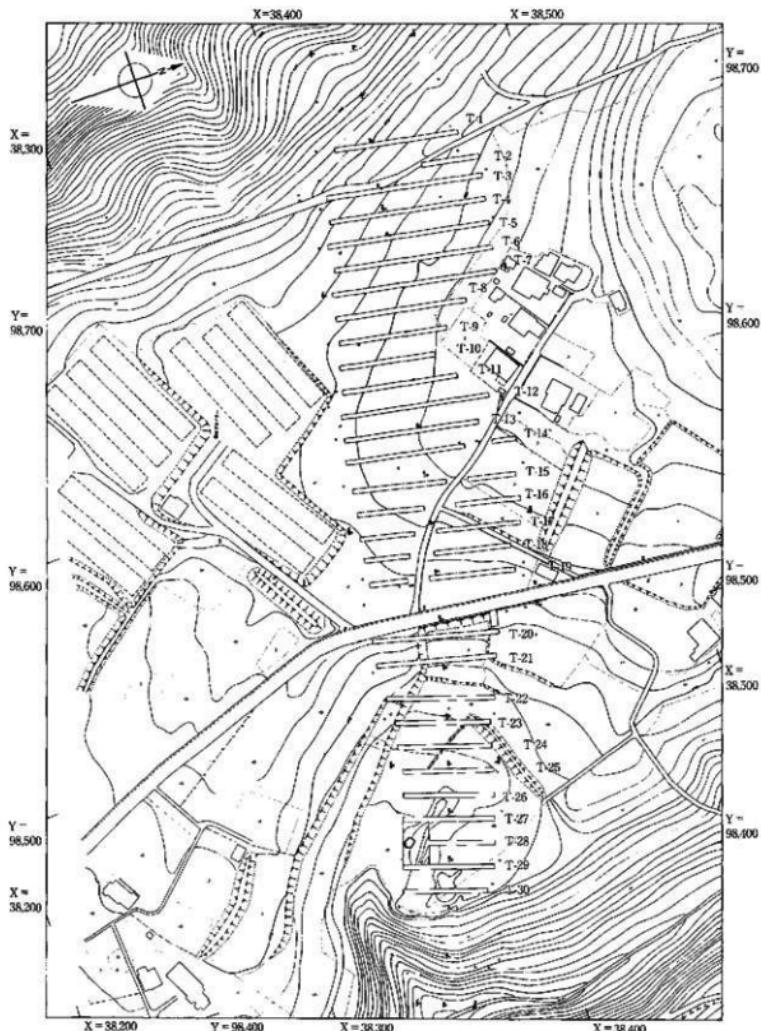
## 第1章 遺跡の立地

本遺跡は松井田町大字横川字萩の反に所在し、霧積川左岸の段丘と水谷から森林公园（標高約667m）を経て閑長原に至る閑長原丘陵の裾部に立地する。この丘陵は標高700m付近より上では基盤層を露出させることが多いが、それ以下になると第四紀世の厚いテフラに覆われる場所が多くなる。調査区域での標高は475~480mの範囲にあり、南方向に向かい緩やかに高さを減じる。また、西方約300m付近には霧積川が南流し、背面に小根山森林公园が所在する。地目は果樹を主体とする耕作地となっている。

なお、本遺跡の北東約200~300m付近は、類聚三代格に詳しい『碓氷坂の関』の推定地となっている。この関跡は昌泰二年（899年）に設けられ、天慶三年（940年）に廃止になったとされる。その後も正応、文保、慶長、元和と時々の治政に応じて復活されたと考えられている。



第1図 調査対象地域と本調査区 1/5,000



第2図 トレンチ設定図 1:2,000

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法（第2・3図）

#### 確認調査

遺跡は県教育委員会が昭和59年に実施した現地踏査によって、遺跡の所在が確認されたものである。したがって、発掘調査は遺構の分布状況・時期・性格を把握することより開始した。トレンチは調査区域に沿って設定し、調査対象面積に対して20%の試掘を実施した。

#### 本調査

確認調査によって得られた成果に基づき、県教育委員会の指導の基に本調査の範囲を決定した。

調査区及び周辺には、公共座標を基準とする10m四方のグリッドを覆せて調査の基準とした。グリッドの名称は東西ラインを算用数字で西から0～10、南北ラインを北からアルファベットでA～Jとし、各北西隅をグリッド呼称として使用した。

検出された遺構の掘り下げは土層観察の為のベルトを設定し、慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物については、原則として出土地点・高さを記入して個別に取り上げた。遺構外出土遺物については各グリッド毎に一括して取り上げた。

実測図の縮尺は以下の通りである。

トレンチ設定図——1／500 遺構配置図——1／200 住居跡——1／20 カマド——1／10  
写真的撮影は3台のカメラ（白黒プロニー6×7、白黒35mm、カラースライド35mm）を使用し、各段階において随時実施した。更に、遺跡の全体写真はバルーンを使用して行った。

基本層序は検出された1号住居跡の至近において実施し、掘り下げは板鼻褐色軽石層以下までとした。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成元年11月10日から翌年の1月6日まで実施した。調査経過の概要は以下の通りである。

#### 平成元年11月期

10日 プレハブ・トイレ等の施設を設営し、器材を搬入する。後に、トレンチの設定を行う。

14日 調査区の東側より、確認調査を実施する。

22日 確認調査継続。その結果、T-28より住居跡1軒を検出する。

#### 12月期

1日 確認調査の結果を踏まえ、T-27～29の南側を本調査区域とし、表土剥離を開始する。

12日 1号住居跡の掘り下げを開始する。

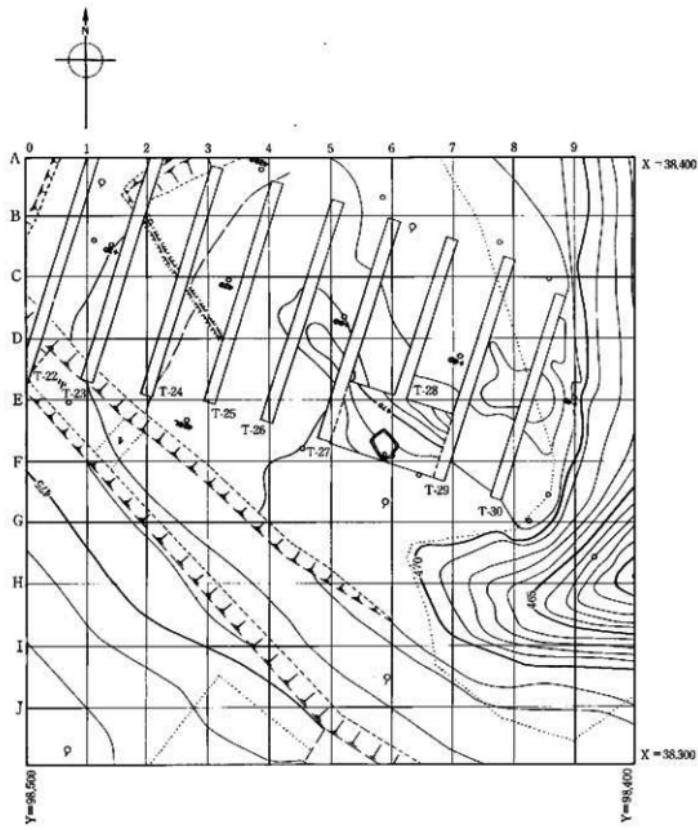
20日 確認調査を終了する。

22日 バルーンによる空撮を実施する。

25日 1号住居跡の調査を終了する。県教育委員会の終了確認を得た後に、埋め戻しを開始する。

#### 平成2年1月期

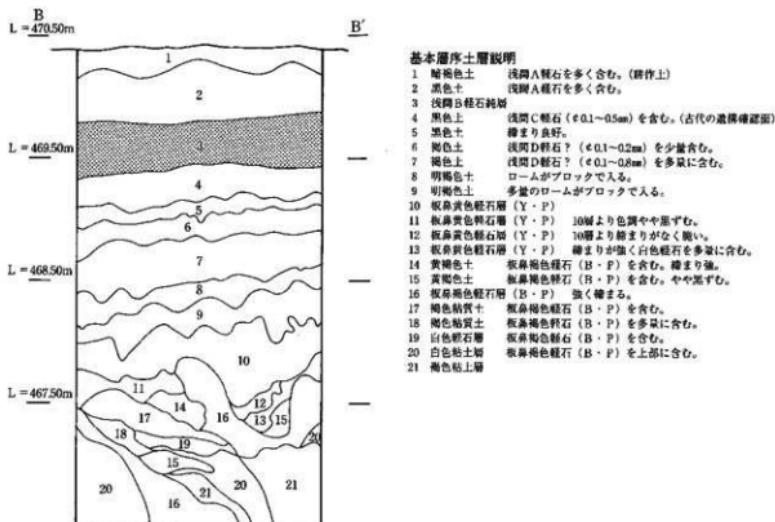
6日 調査区域の埋め戻しを終了し、発掘調査の全てを終了する。



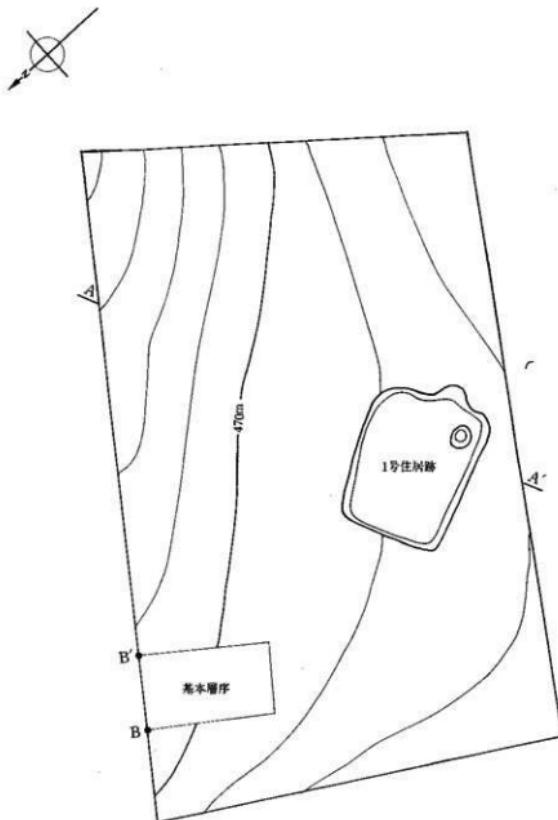
第3図 グリッド設定図 1/800

### 第3章 基本層序 (第4図)

E-5グリッド内の南壁に於て実施した。地目は果樹園で、標高は約470mを測り、地形は南方向に向かい緩やかに傾斜している。耕作土(1層)を除く2層以下は、本来この台地上に堆積する標準的な土層であり、鍾層となる火山灰層が整合的に観察されている。科学分析は行っていないが、1~2層で浅間A軽石、3層で浅間B軽石、4層で浅間C軽石、6層で浅間D軽石、10~13層で浅間板鼻黄色軽石(Y・P)、14~20層で浅間板鼻褐色軽石(B・P)が観察されている。なお、確実に一次堆積と判断されるのは、3層の浅間B軽石のみである。



第4図 基本層序



A L = 478.00m

A'



0 10m

第5図 造構配置図

## 第4章 検出された遺構・遺物

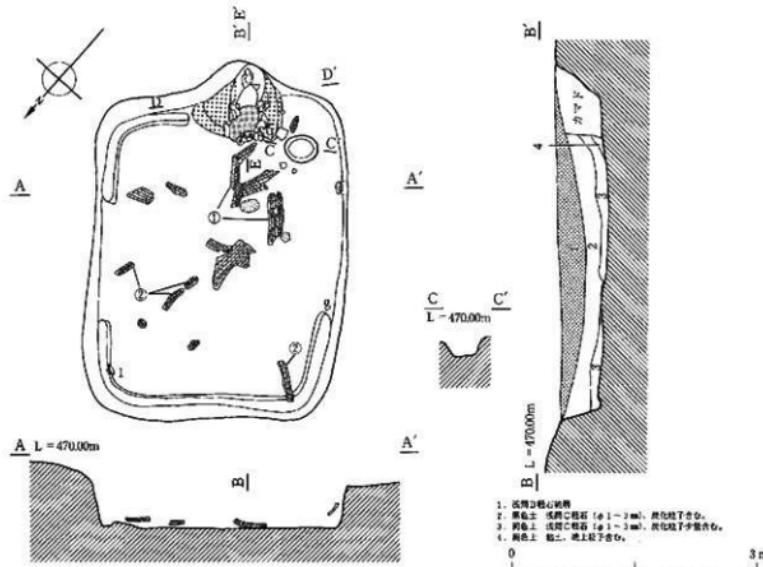
本遺跡は霧横川左岸の段丘上に位置し、対岸には原遺跡が所在する。今回の発掘調査で検出された遺構は平安時代の竪穴式住居跡1軒のみで、この他には遺構外より縄文時代前期・中期の土器片と石器が少量出土しているにすぎない。

### 第1節 古代

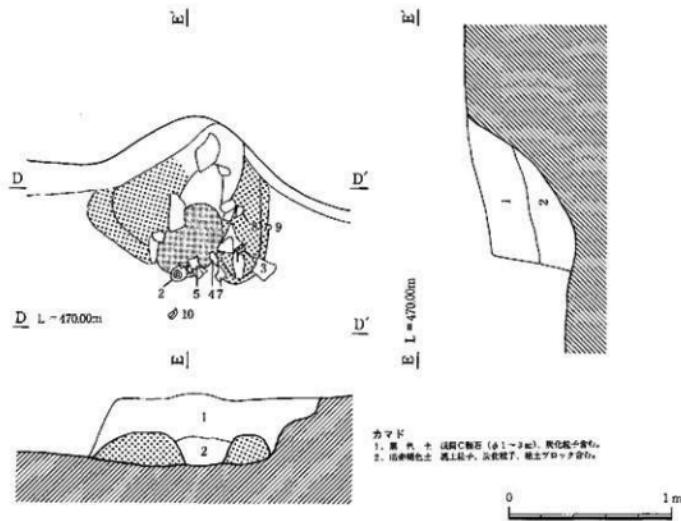
前述した通り検出された遺構は住居跡1軒のみで、検出状況より焼失家屋と判断される。

#### 1号住居跡（第6～9図 表1 図版2-1～5、3）

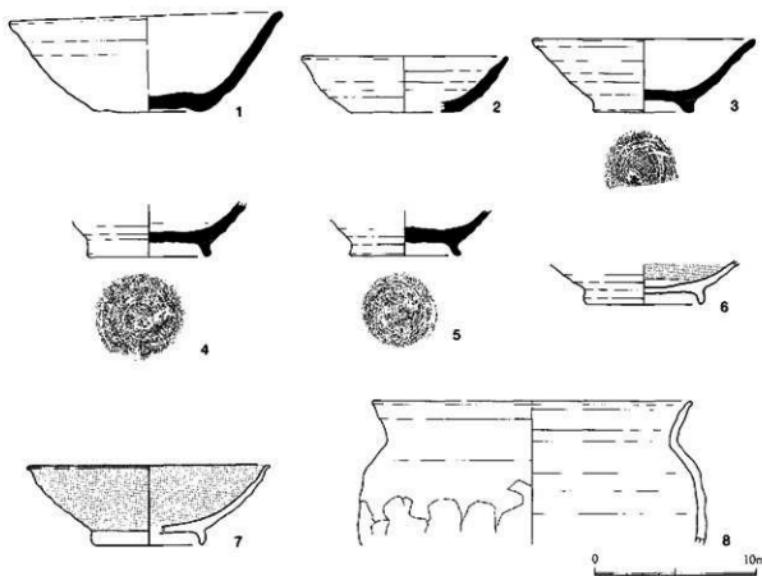
E-5グリッドに位置し、長軸はN-153°-Eを指向する。形態 隅丸の長方形を呈する。東・西・北の壁は比較的直線であるが、南壁はやや弧を描いている。規模 床面の中軸線上で長軸3.45m×短軸3.0mを測り、床面積は10.35m<sup>2</sup>である。主柱穴・支柱穴は検出されていない。カマド 南東壁の中央よりやや西寄りに付設される。主に黒灰色粘質土により袖・天井部を構築し、内壁は石材により補強されている。煙道は半球形に掘り込まれ、高い角度で立ち上がる。埋土 基本的に3層に分層される自然堆積で、1層には浅間B軽石が純層で入る。床面 ほぼ水平で、床面直上より炭化材が確認されている。確認された炭化材はカマド前面のものが棟木(①)、床面の中央に向かい放射状に分布するものが乗木材(②)と思われる。壁溝 北辺・南東辺の周辺に存在する。貯蔵穴 長軸長40cm×短軸長32cmの楕円形を呈し、深さが24cmの鍋底状を呈する。遺物 上部器・須恵器・灰陶器が出土している。



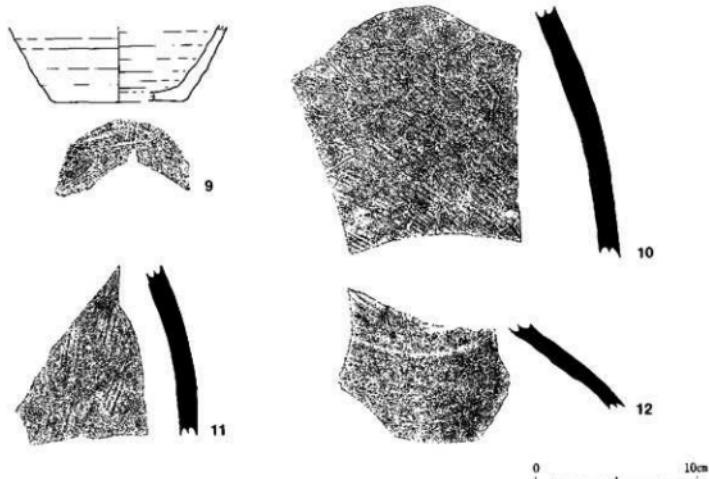
第6図 1号住居跡



第7図 1号住居跡カマド



第8図 1号住居跡出土遺物 (1)



第9図 1号住居跡出土遺物（2）

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法長(cm)	器形・成形形の特徴	地土	焼成	色調	出土位置・備考
1	灰 器 甕	口径 身高 底径 63 68	体部は直線的に立ち上がり、口縁部や外反する。輪縁調整。刃部尖り調整。	砂塵を含む。	墨元	灰白色	底部が荒れている。
2	灰 器 甕	口徑 身高 底径 72 35 65	体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部が外反する。輪縁調整。刃部尖り調整。	砂を多く含む。	墨元	明灰色	墨
3	灰 器 高台付甕	口徑 身高 底径 46 62	体部は直線的に立ち上がり、口縁部や外反する。台形断面の高台。輪縁調整。刃部尖り調整。	砂を多く含む。	墨元	灰黃色	
4	灰 器 高台付甕	口徑 身高 底径 75	体部はやや丸みを持って立ち上がり、「八」の字状に高く凸台。輪縁調整。刃部尖り調整。	砂を多く含む。	墨元	灰白色	墨
5	灰 器 高台付甕	口徑 身高 底径 76	体部はやや丸みを持って立ち上がり、「八」の字状に高く凸台。輪縁調整。刃部尖り調整。	砂を多く含む。	墨元	灰白色	
6	灰陶甕器 甕	口徑 身高 底径 79	三ヶ月高台。輪縁調整。横け掛け。	墨色を含む。	墨元	灰白色	白色釉
7	灰陶甕器 甕	口徑 身高 底径 82	体部は丸みを持って立ち上がり、「八」の字状に高く凸台。輪縁調整。横け掛け。	墨色を含む。	墨元	灰白色	墨。白色釉
8	土 釜 甕	口徑 身高 底径 158 -	口縁部はやや外反し、脇部は張りがある。口縁部は輪縁で、脇部は指輪え、脇部は下から上への削り、内面輪縁部は横棒の跡で塗る。	赤化 物を含む。	墨化	灰橙褐色	
9	土 釜 甕	口徑 身高 底径 80	輪縁部は張る。輪縁調整。横棒み切り無調整。	砂塵多く含む。	墨化	赤橙色	
10	灰 器 甕	口徑 身高 底径 -	輪縁片。外側は叩き目、内面は鉛で施す。	砂多く含む。	墨元	黑灰色	墨
11	灰 水 瓶 甕	口徑 身高 底径 -	輪縁片。外側は叩き目、内面は鉛で施す。	砂多く含む。	墨元	灰色	墨
12	灰 器 甕	口徑 身高 底径 -	輪縁片。内外面鉛で施す。	砂多く含む。	墨元	灰色	墨

## 第2節 遺構外出土遺物 (第10図 表2 図版4)

縄文時代の土器片が8点と石斧1点が出土した。出土地点はT-9トレンチ内で、基本層序の6層に相当する褐色土に包蔵されていた。



第10図 遺構外出土遺物

第2表 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	径量(cm)	器形・成形形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	縄文 深鉢	口径 - 基部 -	口縁部片である。平行沈縄文。	繊維多く含む。	良好	明褐色 褐色	2~4と同一個体である。縄文3式
2	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。平行沈縄文。	繊維多く含む。	良好	明褐色 褐色	1~3~4と同一個体である。縄文3式
3	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。平行沈縄文。	繊維多く含む。	良好	明褐色 褐色	1~2~4と同一個体である。縄文3式
4	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。平行沈縄文。	繊維多く含む。	良好	明褐色 褐色	1~3と同一個体である。縄文3式
5	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	「縫合」片である。障面により区画を構成し、内部に横文を施す。	砂礫多く含む。	良好	暗褐色 褐色	加賀利3式
6	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。沈縄により区画を構成し、内部に横文を施す。	砂礫多く含む。	良好	暗褐色 褐色	加賀利3式
7	縄文 深鉢	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。縄文が施されている。	砂礫多く含む。	やや不良	暗褐色 褐色	加賀利3式
8	縄文 深鉢 破片	口径 - 基部 - 底径 -	断面片である。折縄文に沈縄を施す。	砂礫多く含む。	やや不良	褐色 褐色	
9	石斧		破片である。片面に自然面を残す。				

## 第5章　まとめ

本遺跡は発掘調査の結果、縄文時代前期及び中期の遺物と平安時代の竪穴式住居跡が検出されているが、全体に遺物の出土量も少なく、小規模な遺跡あるいは遺跡の端の地点と思われる。

縄文時代では、試掘トレンチより諸磯り式と加曾利E2・3式の土器の小片と石斧が出土したにすぎず、遺構は検出されていない。

平安時代では、焼失した竪穴式住居跡1軒が検出されている。規模は床面積が10.35m<sup>2</sup>を測り、床面に支柱を据えない通有のタイプである。時期的には土師器壺の口縁部の「コ」の字がすでに崩れていること、高台壇が多いこと、灰釉陶器碗（6・7）が三ヶ月高台で、施釉は漬け掛けによること等から10世紀前半代が考えられる。また、鷹巣川対岸に所在する原遺跡とはほぼ同時期と考えられ、当遺跡との関連性が予想される。

### 参考・引用文献

「房東部田地遺跡Ⅱ」 - 古墳～平安時代編 その2 - 前橋市教育委員会 1988

【松井田町誌】 松井田町誌編さん委員会 1985

宮木長二郎 『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版 1996

# 西野牧小山平遺跡

( 恩 賀 遺 跡 )

# 第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡

## 第1節 遺跡の立地

西野牧小山平遺跡（山 恩賀遺跡）は、群馬県邑楽郡松井田町大字西野牧字小山平17,011番地他に所在する。遺跡地は松井田町の南西端部にあたり、南は甘楽郡下仁田町、西は長野県北佐久郡軽井沢町に隣接している。北に奇勝高岩山を望む山岳地帯に立地し、群馬県内に数多くの示標テフラを噴出させた浅間山は本遺跡の北西側に位置するが、周辺の山々に連れて調査区からはその山容を望めない。遺跡地の標高は750m前後を測り、標高1,183mを測る大山東側の裾野に位置する。東側には人山に対峙する形で標高836mの小山があり、両山に挟まれた緩傾斜地に立地している。北側及び南側は急斜面・急崖になり、眼下に横川付近で碓氷川に合流する入山川と千駄木川が流れている。両川河床との比高は20m以上を測る。入山川を挟んだ北側に恩賀集落、入山川・千駄木川沿いに標高で100m～150m下った位置には下平といわれる集落がある。

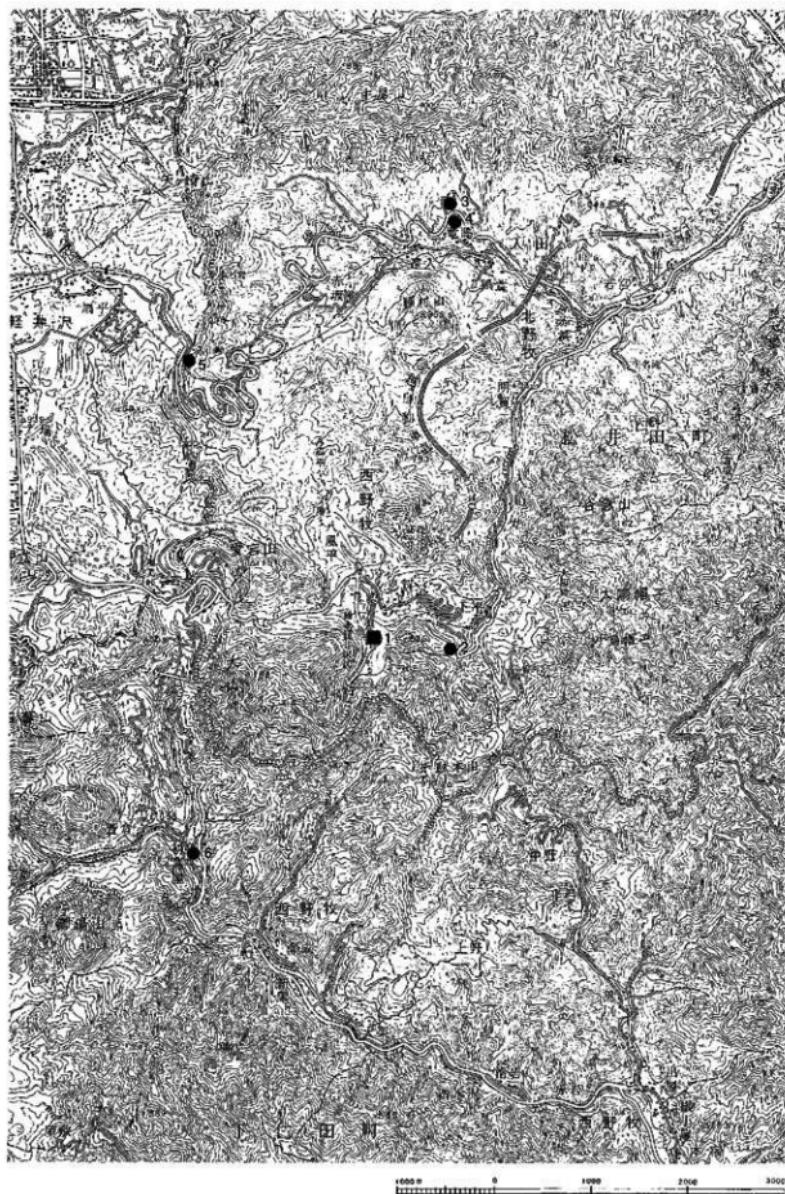
本遺跡を含む恩賀集落周辺は古くから石棒が採集されることで知られ、松井田町で保有されているもの他に恩賀集落内にも現存するものがあり、発掘調査を実施する契機となった。遺跡地の調査前現況は山林及び荒地で、現在は上信越自動車道碓氷軽井沢インターチェンジに変貌している。

## 第2節 周辺の遺跡

本遺跡は山岳地帯に位置するため、周辺の遺跡には不明な点が多い。入山川流域における唯一の例として前述した下平地区に位置する千駄木岩陰遺跡がある。この遺跡は千駄木川によって形成された小規模な河岸段丘上に位置し、標高は約640m、千駄木川河床との比高は約6mを測る。古くから土器・石器・獸骨類が出土することで知られていたが、昭和46年・47年に松井田町文化財専門委員、群馬県文化財保護室によって調査され、縄文時代から古墳時代にわたる重要遺跡であることが確認された。昭和48年には県道横川・西野牧線拡幅工事に伴い、群馬県教育委員会・松井田町教育委員会による発掘調査が実施されている。調査の結果、縄文時代中期五領ヶ台式期の集石上坑・加曾利E式期の集石上坑・炉跡・焼土等が検出され、縄文時代前期～晩期の土器・石器・弥生時代後期の土器・石器・骨角器の他、貝類及び貝輪等の貝製品、かもしれない・猪・鹿・熊・猿等の獸骨が多数出土し、古墳時代及び奈良・平安時代の土師器・須恵器も検出されている。又、群馬県内において浅間D型石層が唯一確認されている遺跡としても著名である。遺跡は工事計画の設計変更によって保存された後、昭和50年9月5日に群馬県指定史跡となった。

本遺跡の北側約4kmに位置する国道18号線碓氷バイパス沿いには、縄文時代中期末～後期初頭を中心とする遺構・遺物が検出された仁出遺跡・暮井遺跡が所在し、群馬県と長野県の境界線である標高1,035mを測る入山峠には、剣・刀・刀子・鏡・勾玉・白玉・小玉等の滑石製模造品と、勾玉・管玉の玉類が出土した入山峠祭祀遺跡があり、縄文時代から近世に至る遺物が出土している。同遺跡は古代東山道推定のひとつである標となる遺跡という見方もされている。

人山の南側に位置する甘楽郡下仁田町には初鳥居遺跡が所在している。正式な発掘調査が行われた遺跡ではないが、やはり石棒が採集されることで知られ、昭和40年・42年に秋池武氏によって詳細に論考され、当時すでに出土していた恩賀集落の資料も取り上げられている。論考によれば、同遺跡は利根川にそそぐ支流の源流地である山間部の狭い盆地に存在し、支流に臨んだ比高10m程度を測る傾斜平面上に遺物散布地の畠地がある。ここから出土した石棒及びその未製品は、所在が明らかなものだけでも10数本を数え、無頭石棒が多く、有頭石棒は3本にすぎない。石材はすべて角閃石安山岩質で遺跡付近には同石材の柱状自然石が多く存在し、原石が容易に入手出来る立地条件を有している。時期的には同時に出土した土器片から縄文時代



第1図 西野牧小山平遺跡と周辺の遺跡

中期末～後期初頭の所産と推測され、本遺跡と比較すると立地条件・時期・形態等、非常に近似しており、対比資料として重要な遺跡といえよう。

(1) 西野牧小山平遺跡 2 千駄木岩陰遺跡 3 仁田遺跡 4 巻井遺跡 5 入山崎祭祀遺跡 6 初鳥屋遺跡

### 第3節 大山について

大山は、群馬県甘楽郡下仁田町大字西野牧字和美沢から、碓氷郡松井田町大字西野牧字小山平地区にまたがる標高1,183mの円錐型の独立した岩山である。この地域は表日本と裏日本を区分する関東山地が南北に走る場所で、群馬県と長野県の県境地域でもある。北方には浅間山(2,568m)があり、ここから南方に鼻曲山、矢ヶ崎山、愛宕山、そして大山、日暮山、御場山、八風山、寄石山・荒船山等千メートルを越える高山が連なっている。長野県側浅間山寄りの地形は比較的穏やかな地形で佐久平に通じる。一方、東方の群馬県側では千駄木山、大鳥帽子山、谷急山、金洞山、白雲山等妙義山系の山々や、物語山等千メートルを越える急峻な高山と、これを侵食し利根川に通じる河川が深い谷を刻み、厳しい自然地形を形成している。

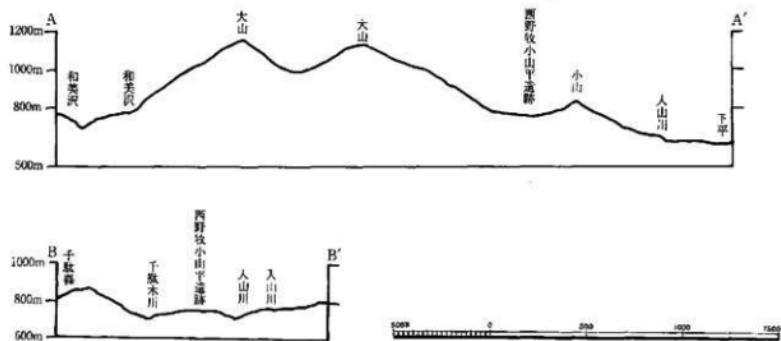
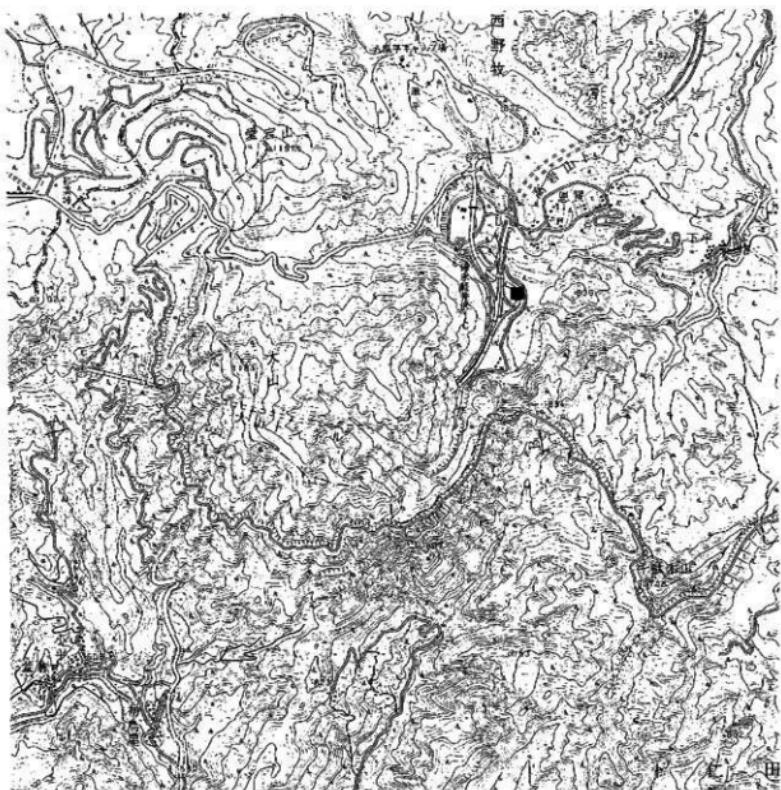
大山は、長野県御代田町、軽井沢町から群馬県に通じる和賀峠の南方約5km、上信越自動車道碓氷・軽井沢インターチェンジ西方、大山トンネルの貫通する山である。周囲には北に接して愛宕山(1,191m)、南に千駄木山(997m)、西に日暮山(1,207m)、矢川川を挟んで南方に物語山(1,091m)がある。

この付近の地層は、古い時代の火山活動の痕跡や近年の浅間山噴出物が堆積した地域でもあり、火山の影響が強い地域である。大山地域の地層は、群馬県側の表妙義・裏妙義から長野県側八風山にかけては、本宿・秋開期の凝灰角砾岩層が広く分布し、八風山、谷急山、金洞山、白雲山等が構成されている。この層の中央には、下仁田町本宿方面から長野県側に向かい中新世の砂岩と泥岩の互層で構成される井戸沢層が分布している。これらの地層の中には、中新世から鮮新世の安山岩質の岩石が貫入してできた岩類層で構成される日暮山、愛宕山、高岩山等の山があり、いずれも岩石質の高山をなし独特の景観を形成している。

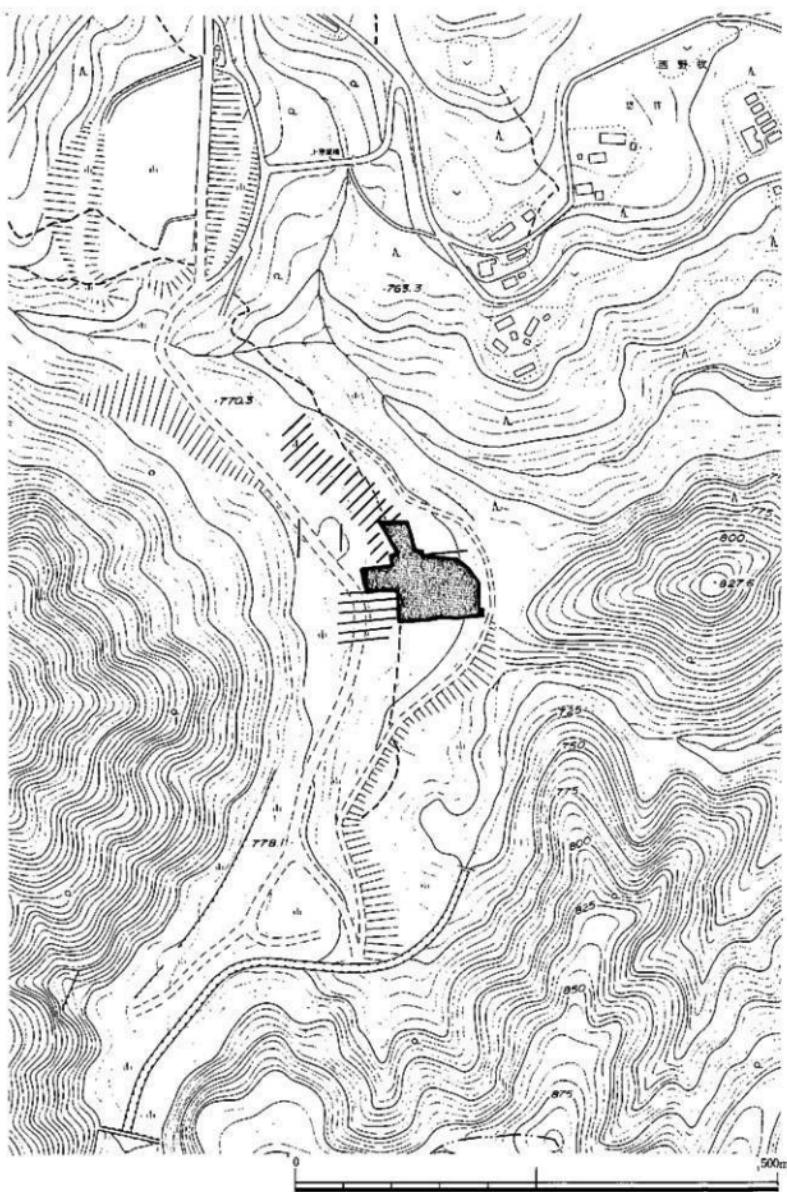
大山もかつて同様岩石で形成されたとされ、その後、中新世の「玢岩(ひんがん)」の貫入により形成された山とされたが、石材鑑定の結果、大山の岩石は石英斑岩(分類によっては流紋岩)と鑑定されている。この岩石はやや離れた東方の芝の沢、中野集落付近にも小規模の分布が見られるが、現在までのところ繩文時代に利用された形跡は見られない。大山の岩石は直ぐにする安山岩の柱状節理構造ではないが、自然崩壊の過程の中で四角柱状を形成するものが含まれることがある。又、この岩石は適度の硬度で石に目があることからこれを加工が容易である。

大山は、山腹傾斜の強い円錐型の優美な山体で、岩盤露頭部が各所に見られ、場所により差があるが山腹から常に崩落がある。すなわち、山の西にある初鳥屋遺跡側では欠川川に流入する和美沢、前川が侵食し、標高1,000m付近から発達した小沢からは多量の石材が常に崩落し、遺跡近くの欠川川まで流入している。この矢川川は西牧川から鈴川、烏川、利根川へと流入する水系である。また、大山東側では西側ほど地形の厳しさがなく、山腹から入山川への岩石崩落量は腹定的である。ここにある西野牧小山平遺跡は初鳥屋遺跡より標高が高い場所にあり、入山川支流を見下ろす山麓傾斜地にある。この入山川は碓氷川、烏川、利根川へと流入する水系である。尚、大山北側は愛宕山との関係から深い沢が発達しにくく、大山からここに崩落する岩石量は少ない。

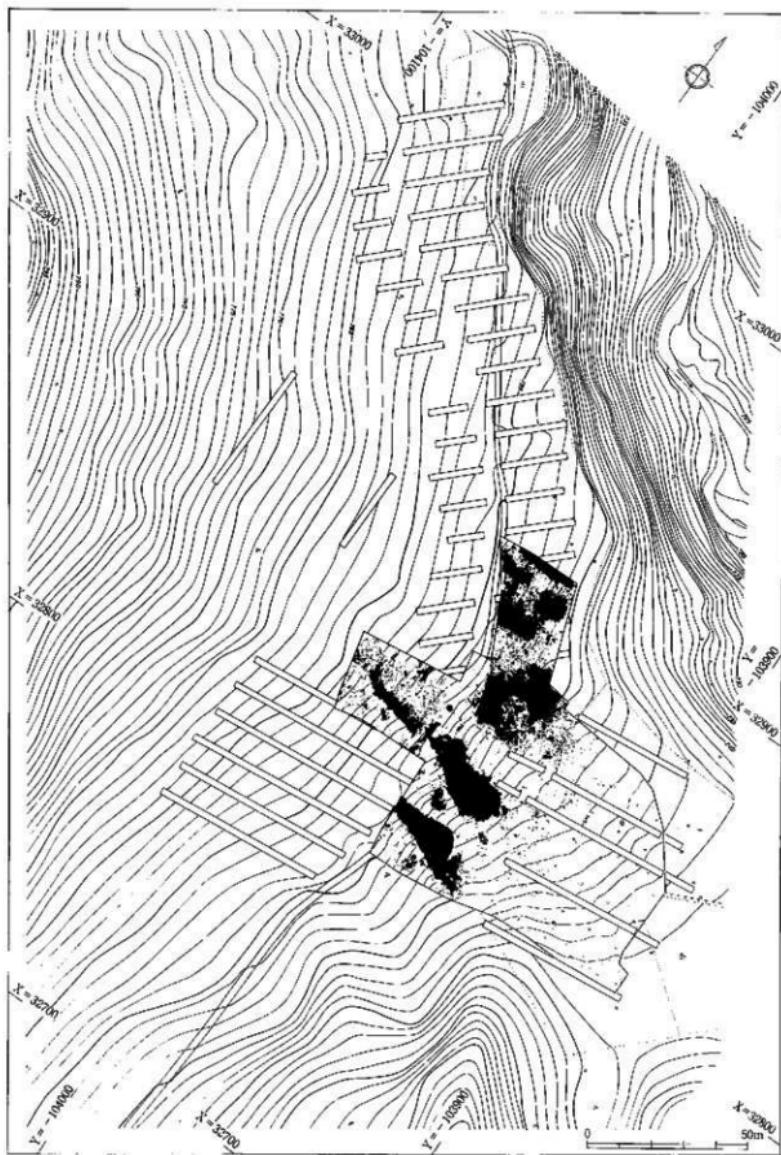
西野牧小山平遺跡、初鳥屋遺跡とも大山産の岩石を利用し石棒を作製する点において共通するが、大山の地形、遺跡の位置、岩質と岩石崩壊条件等は、両遺跡にそれぞれ異なる影響を与えており、遺跡の性格を規定する上で重要な条件となっている。



第2図 大山地形図・断面図



第3図 周辺地形図



第4図 トレンチ・調査区設定図

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

本遺跡は、群馬県教育委員会が昭和59年に実施した現地踏査によって、遺跡の所在が確認されたものである。従って、発掘調査は遺構の分布状況・時期・性格を把握することより開始した。確認調査は地形に沿った形で約10%のトレンチを設定し、掘り下げを実施した。調査の結果、縄文時代中期の遺物が散見され、更に石棒の出土が確認されたため、県教育委員会の指導により本調査を実施することに決定した。

本調査は、遺物が集中すると考えられた緩傾斜地を中心として調査範囲を設定し、遺物の出土状況に応じて範囲拡張を行ったため、周辺のトレンチ調査を実施した。遺構・遺物確認面は石棒出土位置上位の軽石層(浅間D軽石層)を示標とした。調査の方法は重機による表土除去の後、公共座標を基準とする10m×10mのグリッドを設定し、グリッドに合わせた土層観察用ベルトを調査区全域に残して慎重に掘り下げを行った。掘り下げはすべての遺物及び石を残して実施した。実測図は20分の1縮尺の割図で全面実測を行い、石棒については10分の1の縮尺で詳細図を作成した。また、上層面は20分の1、40分の1を併用して実測を行った。写真撮影は白黒・カラー6×7判、カラースライド・白黒35mmを用いて各調査段階を記録した。空撮はバルーンを使用し、調査の状況に合わせて合計3度実施した。

### 第2節 調査の経過

#### 確認調査(昭和62年)

12月期 8日 調査補助員説明会を実施する。9日 発掘器材を搬入し、調査区にトレンチを設定する。  
10日 調査前現況写真撮影、テント・トイレ設置。11日 土層観察用のテストピット掘り下げを行う。12日～22日 重機によるトレンチ掘削・人力による精査・遺構確認作業を行う。23日 器材搬出を行い、確認調査を終了する。

#### 本調査(昭和63年)

5月期 11日 伐採木の除去等、調査区内整備作業を開始する。16日 テント・発掘機材搬入。18日 確認トレンチ精査を開始する。24日 重機による表土除去作業を開始する。25日 遺構検出作業を開始する。30日 表土除去作業中断、水準測量・方眼測量を実施する。

6月期 3日 調査区周辺のトレンチ調査を開始する。4日 土層観察用ベルトを調査区全域に設定し、グリッド単位の掘り下げを開始する。5日～30日 グリッド掘り下げ、周辺部トレンチ調査を継続する。23日 バルーン使用による空撮を実施する。27日 本調査区拡張作業を開始。

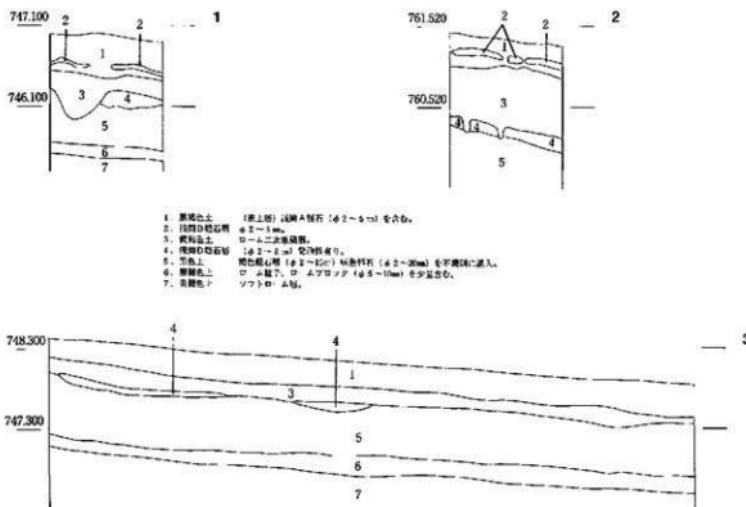
7月期 グリッド掘り下げを継続。1日～20日 本調査区拡張作業継続。21日～25日 大山斜面部のトレンチ調査を実施する。※山岳地帯の為、雨天が多く、作業は遅れがちであった。

8月期 グリッド掘り下げを継続。2日 20分の1縮尺による割図実測を開始する。17日 拡張部に水準測量・方眼測量を実施する。※前月に引き続いで雨天が多く、作業が遅れる。

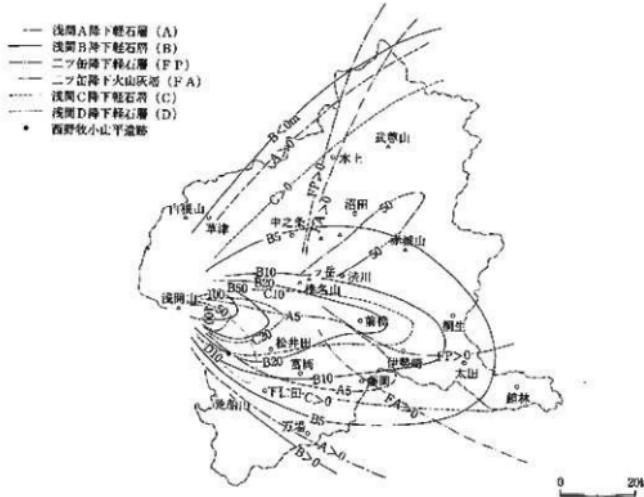
9月期 グリッド掘り下げ、割図実測を継続し、石棒の個別写真撮影を行う。

10月期 グリッド掘り下げ、剖面実測、写真撮影を継続。3日 調査区内堆積土層の実測を開始する。15日 バルーン使用による空撮を実施する。17日 グリッド掘り下げを終了し、調査区内ベルト除去作業を開始する。18日 井戸跡の掘り下げ作業を開始する。26日 ベルト除去を終了し、バルーン使用による空撮を実施する。28日 アンケート調査用のサンプル石材を収集する。

11月期 1日～7日 集石の断面調査を実施する。2日 遺物上げ作業を開始する。9日 遺物上げ作業を終了する。10日～15日 現地にて残務整理・発掘器材の撤収を行い、発掘調査を終了する。



第5図 基本堆積土層図



第6図 群馬県における完新世示標テフラ層分布図

### 第3章 基本堆積土層

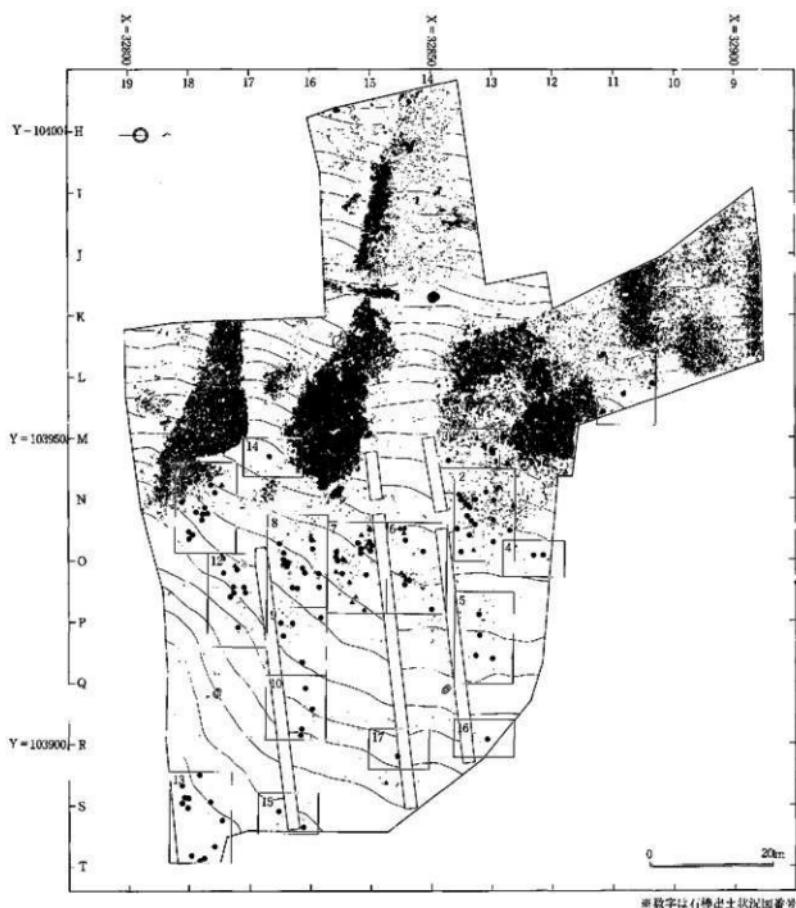
火山に隣接した地域では火山性テフラが層位学的に重要な位置を占めている。群馬県における完新世の示標テフラ層は、第6図に示されている浅間山（前掛山）・榛名山（ニッ岳）からの噴出テフラ層が大部分を占めており、本遺跡の所在する松井田町とその周辺では、浅間山起源の降下テフラ層の厚い堆積が観察される。浅間山からの降下テララ層には江戸時代末期（天明3年；1783年）降下の浅間A軽石層、平安時代末期（天仁元年；1108年）降下の浅間B軽石層、4世紀代降下の浅間C軽石層、绳文時代中期末降下と考えられている浅間D軽石層が存在し、その他にも小規模な噴火による火山灰・軽石の存在が確認されている。各文化層はこれらの降下テフラ層によって分断され、遺構・遺物の確認面として層位的に明確な示標となっている。また、ローム層中にも板鼻黄色軽石層（As-YP）、板鼻褐色軽石層（As-BP）等の浅間山起源テフラ層が堆積している。

第5図-1は調査区内、第5図-2は調査区外確認トレンチで作成した基本堆積土層図である。第1層は浅間A軽石を多量に混入する黒褐色の表土層、第2層は層厚15cm±を測り、調査区内で部分的に介在する浅間B軽石層になる。黒色スコリアが混入し、無粒火山灰（ピンク火山灰）は認められない。第3層は大山の地滑りに起因すると考えられる黄褐色のローム二次堆積土で、場所によって大量の巨礫を含んでいる。第4層は本遺跡の鍵層となる浅間D軽石層である。層厚10cm~20cm程度の明瞭な地層として調査区全域に存在するが、ブロック状を呈して堆積する場所、一部確認されない場所も見受けられる。第5層は少量の黄褐色軽石、灰白色軽石を混入する黒色土になり、出土遺物は本層上半部に集中して検出され、大山からの地滑り堆積物と考えられる集石も本層上位から検出されている。第6層は多量の黄褐色軽石、灰白色軽石を混入する黒褐色土、第7層は褐色を呈する上部ローム層になる。尚、第4層上位に黒色土が存在する場所も見受けられた。

第5図-3は確認調査時のトレンチ土層図である。土層図部分では浅間B軽石層が検出されなかつたが、浅間A軽石を含む表土層の直下、浅間D軽石層の上位にローム二次堆積層が存在し、基本的には1・2と同様の堆積状況を示している。

本遺跡の鍵層となる浅間D軽石層は、遺跡発掘例の多い群馬県南部地域においては明瞭な地層として検出されておらず、前述の千駄木岩陰遺跡において唯一確認されている軽石層である。報告では绳文時代中期末加曾利E式土器包含層を被覆し、弥生時代遺物包含層に覆われる関係が確認されている。千駄木岩陰遺跡における最大粒径は4cm±、黄褐色を呈し、発泡は浅間C軽石と同程度に良好とされている。本遺跡で確認された浅間D軽石層は下部に粗粒の黄褐色軽石層、上部に細粒の黄色軽石層で構成され、最大粒径は10cm±のものまで確認されている。やはり黄褐色を呈し発泡は非常に良好であった。供給源に近い位置にあるため、大径の軽石と厚い堆積が残されていたと考えられる。

浅間D軽石の噴出年代については層位的事例が少なく明確ではないが、小滝火鉢流堆積物（前掛山北東斜面に分布し、浅間D軽石層の下位に位置する）の<sup>14</sup>C年代が $4,500 \pm 150$ y.B.P.と測定されていることから、これ以後に噴出したテフラであることは確実である。これに千駄木岩陰遺跡及び本遺跡の層位を加味すれば、绳文時代中期末に降下した可能性が最も高いといえよう。



第7図　遺跡全体図

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概観

本遺跡において検出された遺構・遺物の中心となるものは、縄文時代中期末にこの地で営まれた石棒工房跡である。調査は石棒（未製品～完成品）が集中して出土した平坦部分を中心として遺物の拡がりを追った結果、石棒125本、敲き石、石棒破片・剥片、土器片が粗密な状況で出土し、付随して加曾利E3式期の埋設土器1基が検出されている。石棒工房跡に付随する状況の遺構は壙設土器以外には検出されず、該期の住居跡も検出されていない。逆にいえば生活痕がなく、完全に工房としてのみこの地が利用されていたと考えられ、全体がひとつの遺構・工房として捉えられる特殊な遺跡といえよう。

石棒工房跡以外では、縄文時代の所産と考えられる卜坑2基と近世井戸跡1基が検出され、遺物は若干量の縄文早期・前期土器片、五領ヶ台式土器片、石器類（打製石斧・磨製石斧・凹石・磨石・石鏃等）と平安時代土器細片、近世磁器等が出土し、特に五領ヶ台式土器片の出土が目立っている。

### 第2節 縄文時代

#### 石棒工房跡（附図・第7図）

本遺跡の主体となる縄文時代中期末の石棒工房跡は、年代的示標となる浅間D軽石層の下位から検出されている。調査区西側に位置する集石の端部を中心として、調査区には全域に石棒と付随する敲き石、土器・石器が粗密に分布し、調査区外に拡がる様相を見せている。

遺跡内において特徴的な位置を占める集石は、巨視的にみて調査区内に3ヶ所（北・中央・南集石）検出されている。成因は調査区西側に登る大山からの地滑り堆積物と考えられ、急斜面から緩斜面への変換点で肩状になる上砂流出の典型的な形態を呈し、層位的には浅間D軽石層の下位に堆積している。状況的に石棒原石の採集場として利用されたと判断され、時期的には石棒工房が営まれた時期より当然古い時期の所産であり、集石が自然埋没で埋まらない程度の比較的近い時期と考えられる。又、時期差を有して複数回の地滑り崩落が起こった可能性も非常に高い。

本節では石棒を主体とする遺物の出土状況を第7図に示した地点別に報告する。その際、石棒について製作工程を剥離－敲打－成形の3段階、原石を第0段階に分類して説明を加える。石器類は石棒製作工具として敲き石を抽出し、土器は全体に散在する状況で出土している為、グリッド出土遺物として時期別に説明を加える。尚、石棒工房に伴う土器は1号壙設土器の時期である加曾利E3式期と考えられる。

#### 石棒（第38～71図、図版20～24）

本遺跡から出土した石棒は、無頭・有頭合わせて125本を数え、更に破片・剥片が出土している。工房跡である為、圧倒的に未製品・破損品が多く、完成品もしくは完成に近いものは少量であった。石棒については前述した以下の第0～3段階に分類し、観察表を付した。尚、挿図中のスクリーン部分は自然面を表し、敲打部分はドットで表現している。

第0段階－原石段階 石棒原石と思われる自然石、出土位置から抽出した。

第1段階－剥離段階 柱状原石の余分な角を剥離により取り去る段階。

第2段階－敲打段階 敲打によって石棒としての形を作り出す段階。

第3段階－成形段階 ほぼ完成に近い段階で断面形が円形もしくは梢円形を呈し、端部の成形も行われる段階。

この内、第2段階の出土量が半数以上を占め、更に細別も可能である。又、第3段階は端部まで成形が行われることも基準となるが、端部の破損資料が多く、全体を窺える資料は少ない。量的には第2段階>第3段階>第1段階>第0段階になる。第0段階とした原石は遺跡上必要と判断されるもので、出土位置的に採取された可能性が高い柱状の自然石を抽出している。

各製作段階の特徴を概観すると、第1段階では原石に數か所の剥離が加えられた程度のものから、角面全てに加えられるものまで存在し、第2段階では僅かに敲打されたもの、片面のみ敲打されたもの、自然面以外全て敲打されているものまで存在している。第3段階では全体的に細かい敲打が加えられ、断面形が円形もしくは楕円形を呈するもの、自然面をほとんど残さず敲打されているものがある。この段階ではほぼ完成に近いと考えられるが、最終的に研磨が施されることが想像され、その場合は他の場所に伴出してから行われた可能性が高い。尚、出土位置的にかなりの距離を有して接合するものが存在し、一例だけの出土であるが第1段階(56)と第2段階(91)の接合例がある。この接合例は工房跡であることを明瞭に示すとともに、破損品の再加工が行われる場合がある実証例といえよう。又、一部に被熱痕を有するものも数点見られるが、祭祀行為による被熱の可能性は低く、製作段階における被熱と捉えるのが妥当であろう。

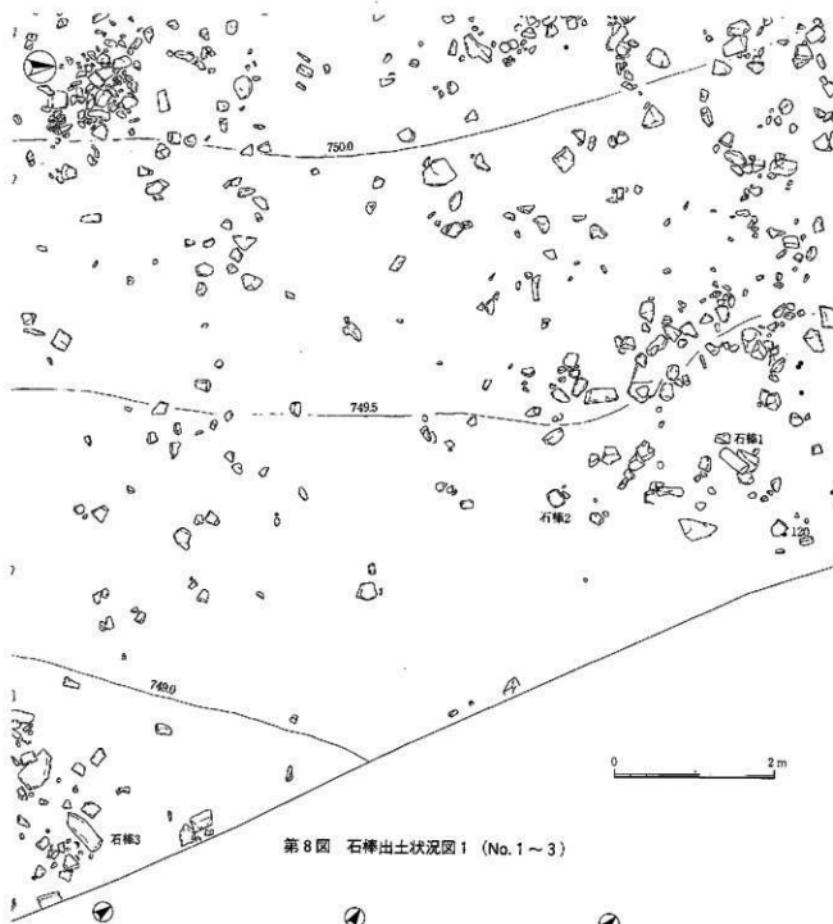
石棒の素材は当初、大山玢岩といわれていたが、鑑定の結果、全て石英斑岩(分類によっては流紋岩)であった。石英斑岩は性質的に石棒素材として好適な板状・柱状の節理を有し、質的には黄色味を帯びて縞が入る縦方向に非常に脆いもの、黄色～白色で比較的硬いもの、白色で硬質なものがあり、比較的硬いもの最も多い。又、端部が斜方向に切られた様な形状を呈するものも存在しているが、これは石英斑岩が節理面に対して斜方向の角度でも節理しやすい性質に起因するものであり、意識的に行ったものではなく、自然面を利用したもの、もしくは自然に節理したものといえる。石棒から推測される原石の長さは、50cm程度のものから最大100cmのものまで存在している。長さ的には、100cm程度のものが原石の性質上限界に近い可能性が高く、幅・厚さは20cmを超えるものがあり、原石段階ではそれ以上のものが存在していたと考えられる。尚、比較的小形の有頭石棒は、全長30cm程度、幅15cmを測るものまで存在しているが、頭部のみの出土が多く、長さにどの程度まで存在するかは不明である。

#### 出土状況

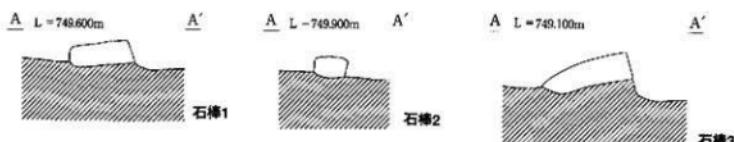
K-10・11、L-10・11地点、石棒1～3(第8・9・38図、図版9・20)

第8図は調査区北側、K-10・11グリッドから出土した石棒1～3の出土状況図である。石棒1～3は比較的小径の疊らな集石に混在し、周辺からは微量の加曾利E3式上器片が出土している。敲き石は出土していない。又、東側は急崖になり、下には比高20mを測る入山川が流れている。

1はL-10グリッドから出土した第2段階の資料で、長さ39.0cm、幅15.1cm、厚さ14.7cm、重量15.0kgを測る。基部側を欠損していると考えられるが、断面方形を呈する石材の角面から敲打が加えられ、4面に自然面を残している。2は1の南1.5mの位置から出土した第2段階の資料で、長さ20.5cm、幅15.6cm、厚さ12.3cm、重量6.0kgを測り、欠損部上位に抉りが加えられた有頭石棒の頭部である。L-11グリッド出土の3は長さ58.1cm、幅18.2cm、厚さ15.7cm、重量24.0kgを測る。全体に剥離痕を残し、一部に敲打が加えられる第2段階前半の資料で、白色を呈する硬質な石材を使用している。他に、遺物確認トレンチから出土した104が近接した位置にあたる。長さ95.5cm、幅21.8cm、厚さ19.2cm、重量53.0kgを測る人形の資料で、頭部に向かって先細の形状を呈し、基部部分は斜め方向に節理面が入っている。段階的には全体に敲打が加えられ、一部に剥離痕を残す第2段階の資料である。



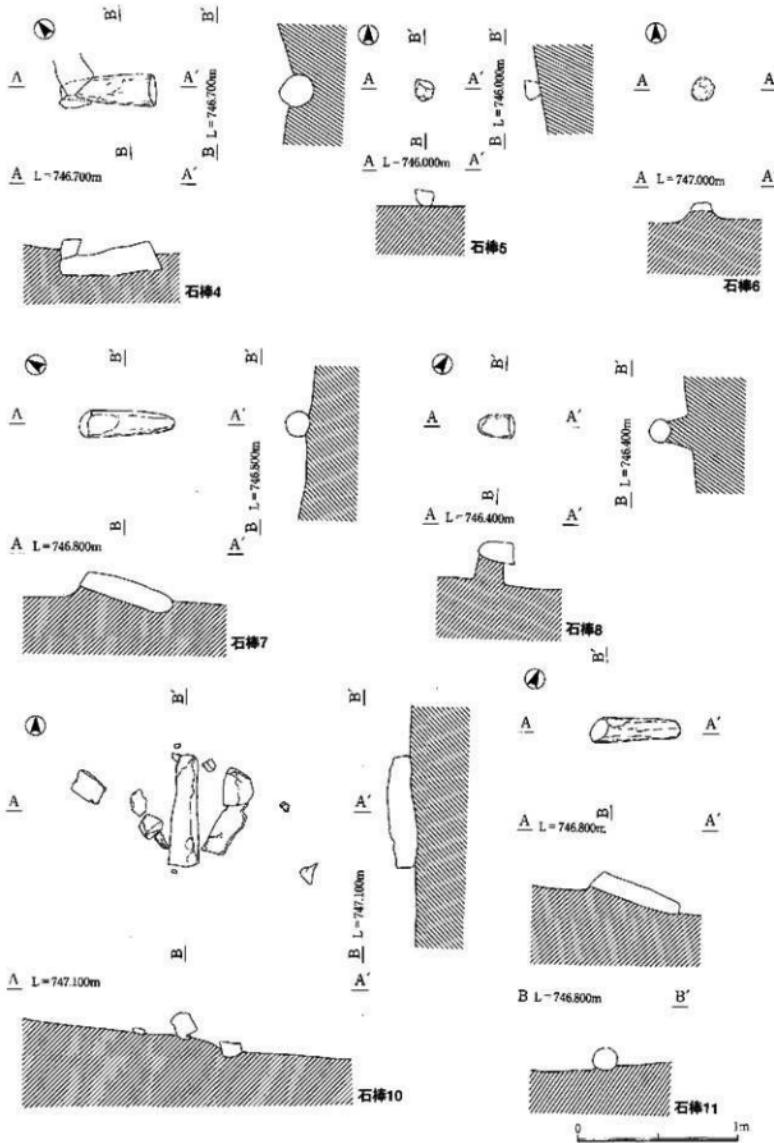
第8図 石棒出土状況図1 (No.1~3)



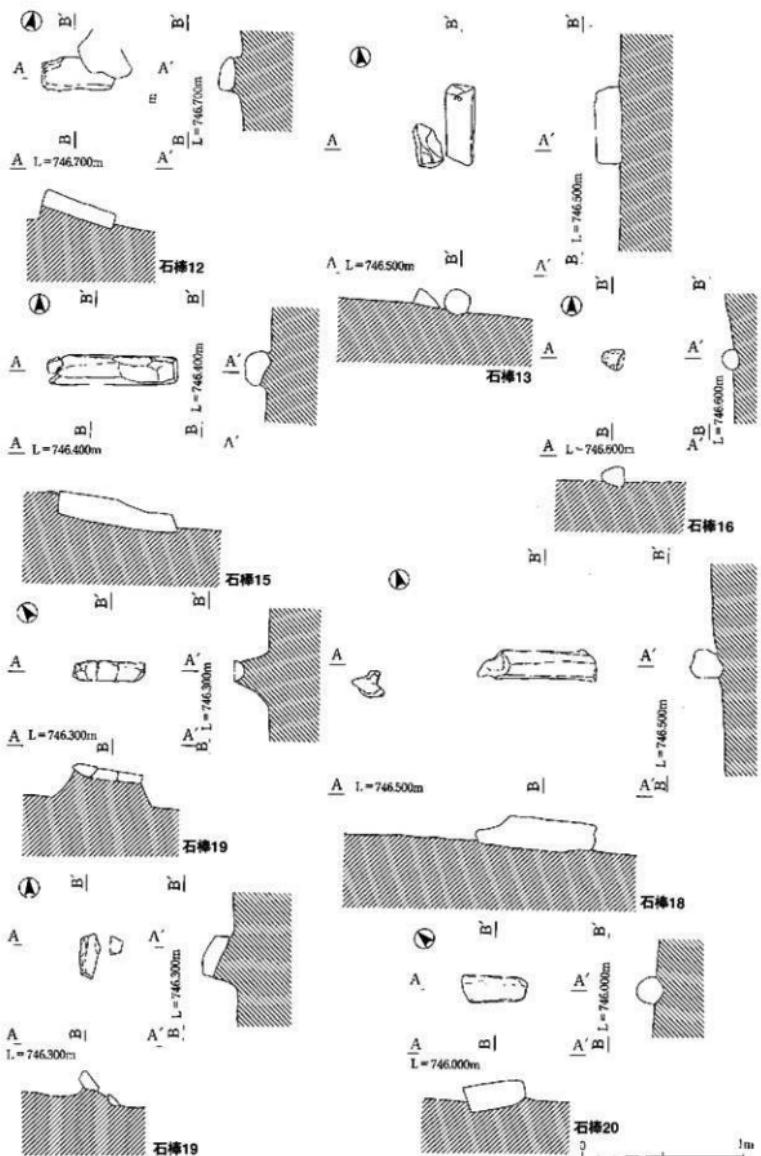
第9図 石棒No.1~3 詳細図



第10図 石棒出土状況図2 (No. 4 ~ 20)



第11図 石棒No.4～11詳細図



第12図 石棒No.12~20詳細図

#### M-12・13、N-12・13グリッド地点 石棒4～20（第10～12、38～43図、図版9～11、20～24）

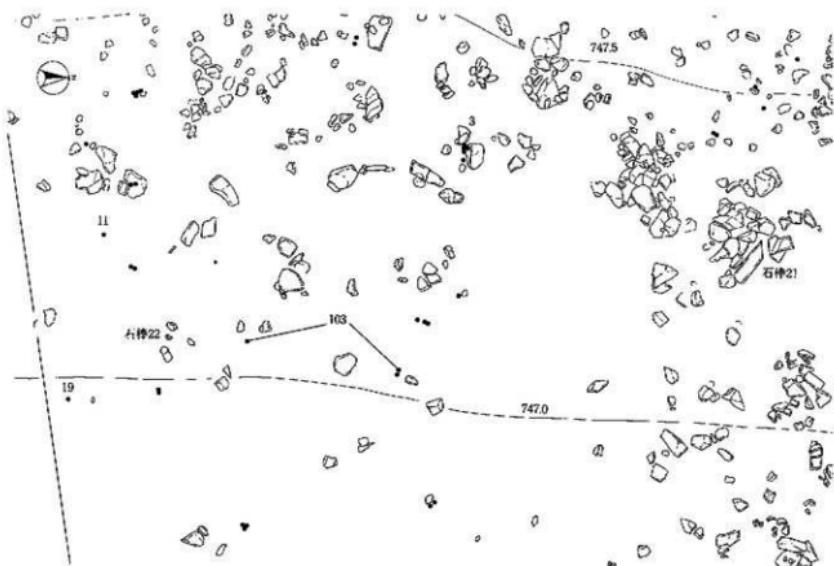
第10図は調査区北側、北集石の東端部に集中する石棒4～20の出土状況図である。石棒4・7・10・12・14がM-13グリッド北東、北集石東端部の疊らな集石に混在する状況で集中し、東側約1mのN-13グリッド北西には石棒9・13・15・13・17・18が集中している。更に、石棒頭部の5・6・8・16が北側に約2m離れて散在し、その北側2mに石棒11、北東側からは縦方向に割れた石棒19が出土している。敲き石1と石棒20は東側のN-13グリッドから出土している。周辺からは加曾利E3式期の土器片が散在する状況で出土し、五領ヶ台式土器も僅かに見られている。

4は長さ63.5cm、幅19.6cm、厚さ18.8cm、重量30.1kgを測り、断面形がほぼ円形を呈する第3段階の資料である。5は第1段階の端部で全体に被熱痕がある。6は第3段階の端部で断面形は円形を呈している。7は長さ58.2cm、幅15.7cm、厚さ14.5cm、重量19.0kgを測る第2段階の資料で、両側面と頭部に自然面を残している。8は第3段階の頭部で一部に被熱痕が観察される。9は第2段階の頭部である。10は長さ68.2cm、幅17.5cm、厚さ17.0cm、重量29.5kgを測る第2段階の資料で、側面と裏面に自然面を残している。11は縦方向に縫が入る軟質で脆い石材を使用した第2段階の資料である。長さ54.2cm、幅13.0cm、厚さ12.8cm、重量11.4kgを測り、基部には斜方向の筋理が入っている。12は長さ50.0cm、幅19.7cm、厚さ11.5cm、重量18.8kgを測り、剥離面を明瞭に残す第2段階前半の資料である。断面形は弱張りの長方形を呈し、自然面が4面全てに残されている。13は長さ47.5cm、径16.4cm、重量20.3kgを測る第3段階の資料で、断面形は円形を呈する完成品に近い資料である。14は長さ59.2cm、幅21.7cm、厚さ16.0cm、重量30.2kgを測り、断面形が方形を呈する第1段階の資料で、角面の一部のみに剥離が加えられるほぼ原石に近い資料である。15は第1段階の有頭石棒頭部で、自然面を表裏面・頭頂部に残し、欠損部上位に抉りが加えられている。16は断面形が円形を呈する第3段階の頭部である。17は長さ79.6cm、幅20.1cm、厚さ13.5cm、重量34.0kgを測る第2段階の資料で、3面に自然面を残し、側面からの敲打は頭部中央に鉗状の高まりを残して加えられている。表面の胴部下位に陥没があるが、破損による陥没、自然陥没の区別は不明瞭である。18は原石で長さ74.9cm、幅20.9cm、厚さ18.7cm、重量39.6kgを測る。19は軟質の脆い石材を使用した第1段階の接合資料で、長さ44.3cm、幅12.4cm、厚さ12.6cm、重量7.4kgを測る。20は長さ38.7cm、径16.0cm、重量15.6kgを測る第3段階の資料で、頭部に自然面を残して、全体に細かい敲打が加えられるほぼ完成品と思われる資料である。

#### M-12・13グリッド西地点 石棒21・22（第13・16・44図、図版11・24）

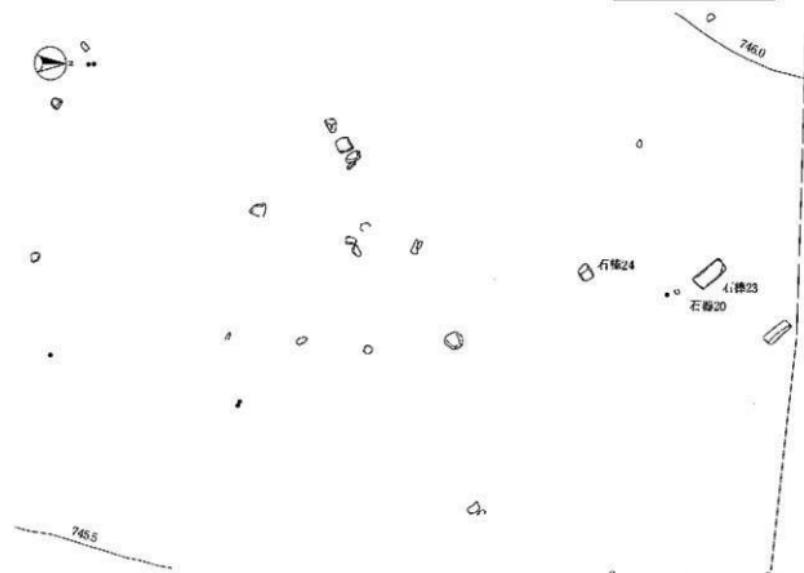
第13図は北集石に混在する状況で出土した石棒21と22の出土状況図である。

21は長さ71.2cm、幅16.2cm、厚さ12.8cm、重量26.0kgを測る第1段階の資料で、断面長方形を呈する原石の角面4面に細かい剥離が加えられ、縦面に対して約45°の角度で斜位に割れて出土している。22はほぼ完成品と思われる第3段階の小形有頭石棒である。長さ22.4cm、頭部最大径8.5cm、括れ部径7.0cm、胴部最大径7.9cm、重量22.2kgを測る。



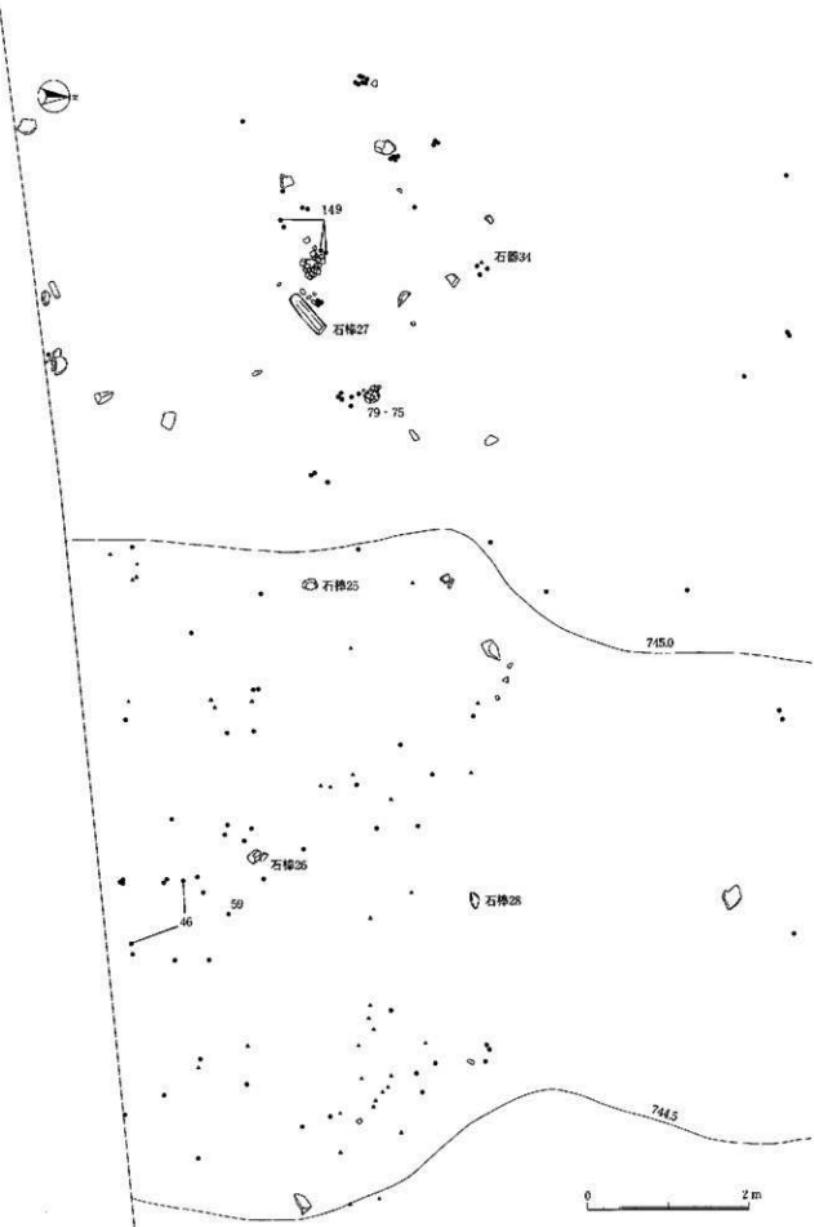
第13図 石棒出土状況図3 (No.21・22)

0 2m

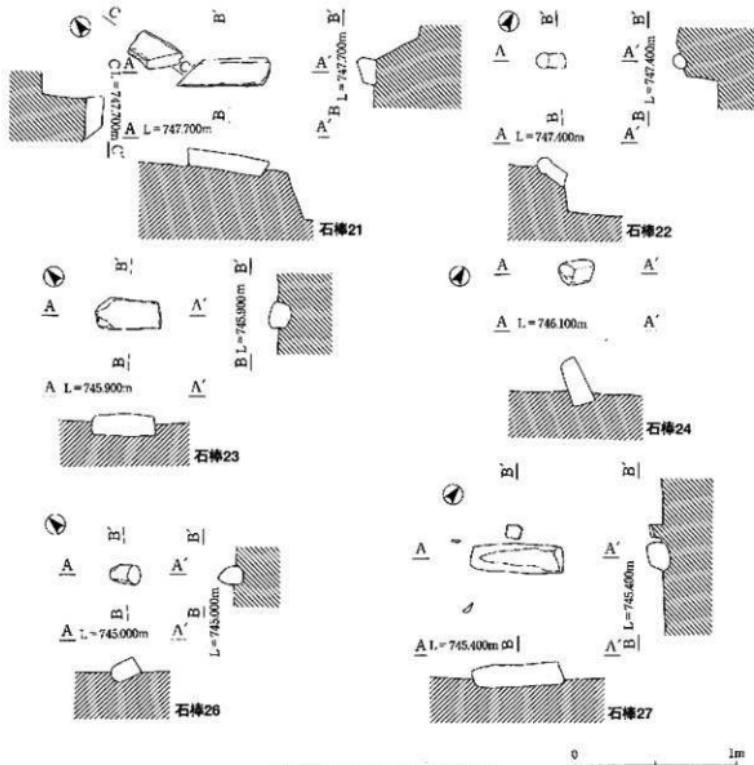


第14図 石棒出土状況図4 (No.23・24)

0 2m



第15図 石棒出土状況図5 (No.25~28)



第16図 石棒No.21～27詳細図

N-12グリッド東地点 石棒23・24（第14・16・44・45図、図版11・25）

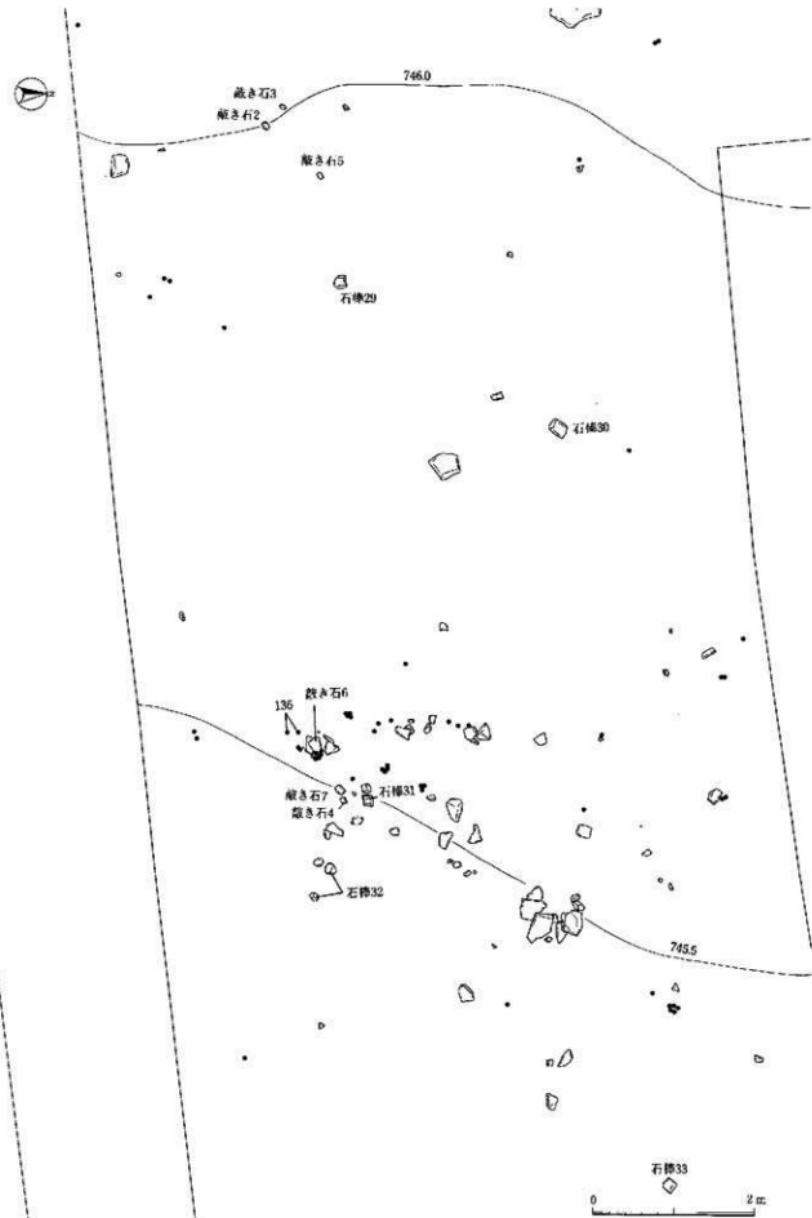
石棒23・24はN-12グリッド北東端部から近接して出土し、24はほぼ直立状態で検出されている。

23は表面と側面に荒い剥離が加えられ、裏面と右側面に自然面を残す第1段階の資料で、長さ40.5cm、幅19.5cm、厚さ13.9cm、重量16.2kgを測る。24は表面に自然面を残し、側面から敲打が加えられる第2段階の資料で、断面形は楕円形を呈している。長さ30.6cm、幅14.3cm、厚さ11.2cm、重量8.2kgを測る。

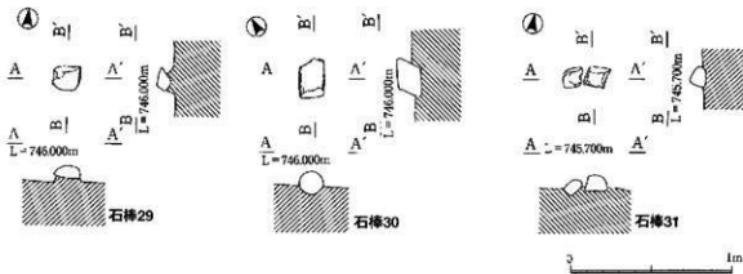
O-12・13、P-12・13グリッド地点 石棒25～28（第15・16・45図、図版12・25）

第15図は石棒25～28が散在する調査区北西部、P-12グリッド周辺である。石棒の周辺からは加曾利E3式期の土器片が比較的多量に出土し、五領ヶ台式の土器片も散在している。

25は敲打段階の有頭石棒頭部で、一部に被熱痕が観察される。26は第1段階の端部である。27は長さ57.9cm、幅17.3cm、厚さ13.6cm、重量22.8kgを測る第2段階の資料で、方形と思われる原石の4角面から敲打が加えられている。自然面を4面に残しているが、断面形は楕円形を呈し、頭頂部は平坦面を成している。28は第2段階の端部大形破片である。



第17図 石棒出土状況図 6 (No.29~33)



第18図 石棒No.29~31詳細図

N-14・O-14地点 石棒29~33（第17・18・46図、図版12・26）

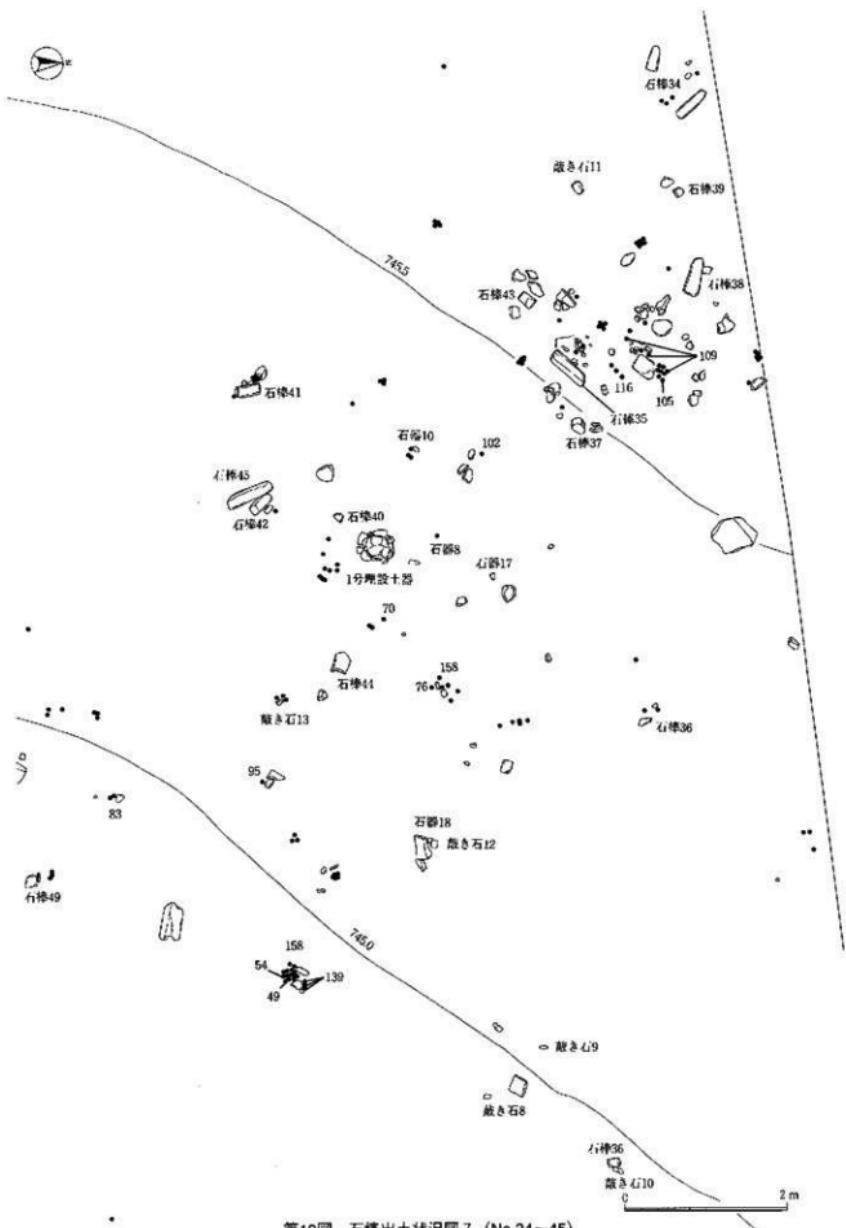
調査区は中央に位置するN-14グリッドから石棒29・30と敲き石2・3・5が出土し、O-14グリッドには石棒31・32・33、敲き石4・6・7、加曾利E3式土器片が集中して出土している。又、自然縫も全体に散在する状況で出土し、土器片と同様に石棒31・32付近にやや集中している。

29は自然面を両側面に残す第2段階の大形破片で一部に被熱痕が観察される。30は第3段階の頭部で自然面を残さず敲打され、断面形は円形を呈している。径15.6cmを測り、上部方向にやや細く成形されている。31は第1段階と思われる削部で自然面以外に被熱痕が観察される。32は第2段階の有頭石棒頭部で、表面は全体に敲打が加えられ、裏面には全体に剥離痕が残されている。33は第2段階の資料で風化が著しく、凹石に転用された可能性がある。

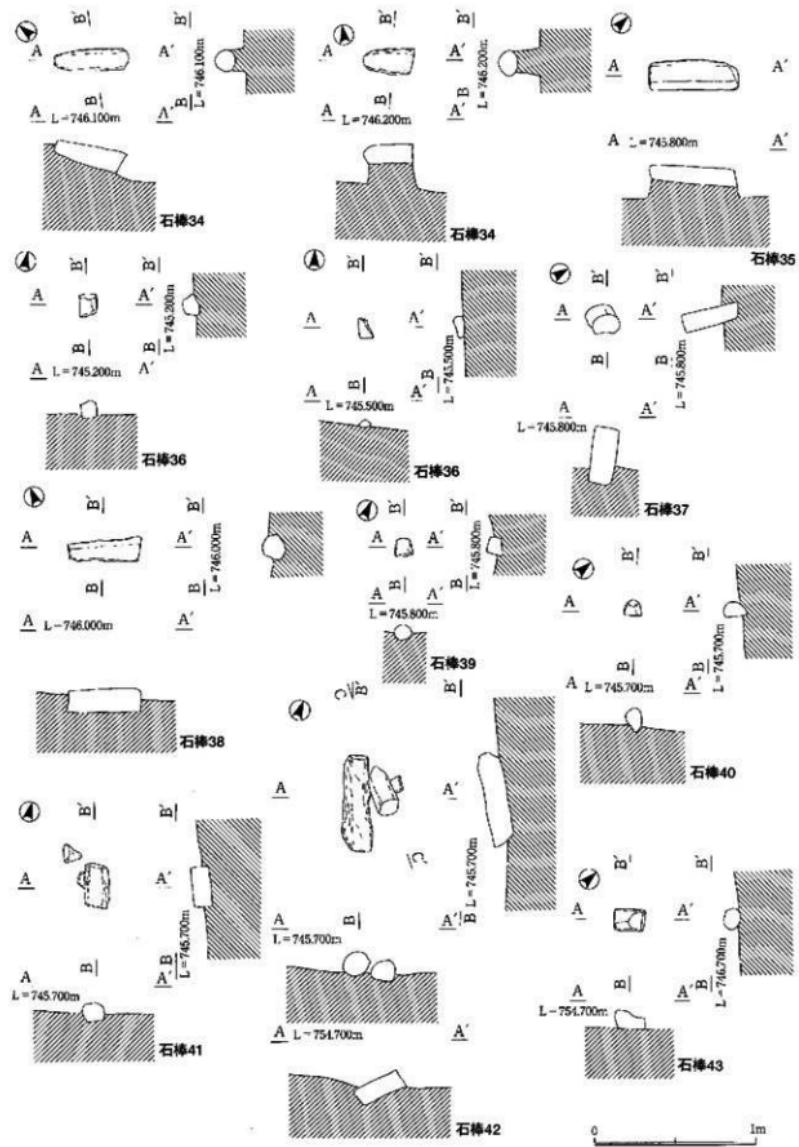
N-15・O-15地点 石棒34~45（第19・20・47~49図、図版12・13・26~28）

調査区中央のN-15グリッド北側に石棒34・35・36・37・38・39・43と敲き石11、加曾利E3式土器片が集中し、その北西約2mに位置する1号壇設上器の周辺から、石棒41・42・44・45（3分の2）と、敲き石12・13、石斧等が出土している。1号埋設土器の東側約7mからは石棒36と敲き石8・9・10が出土している。

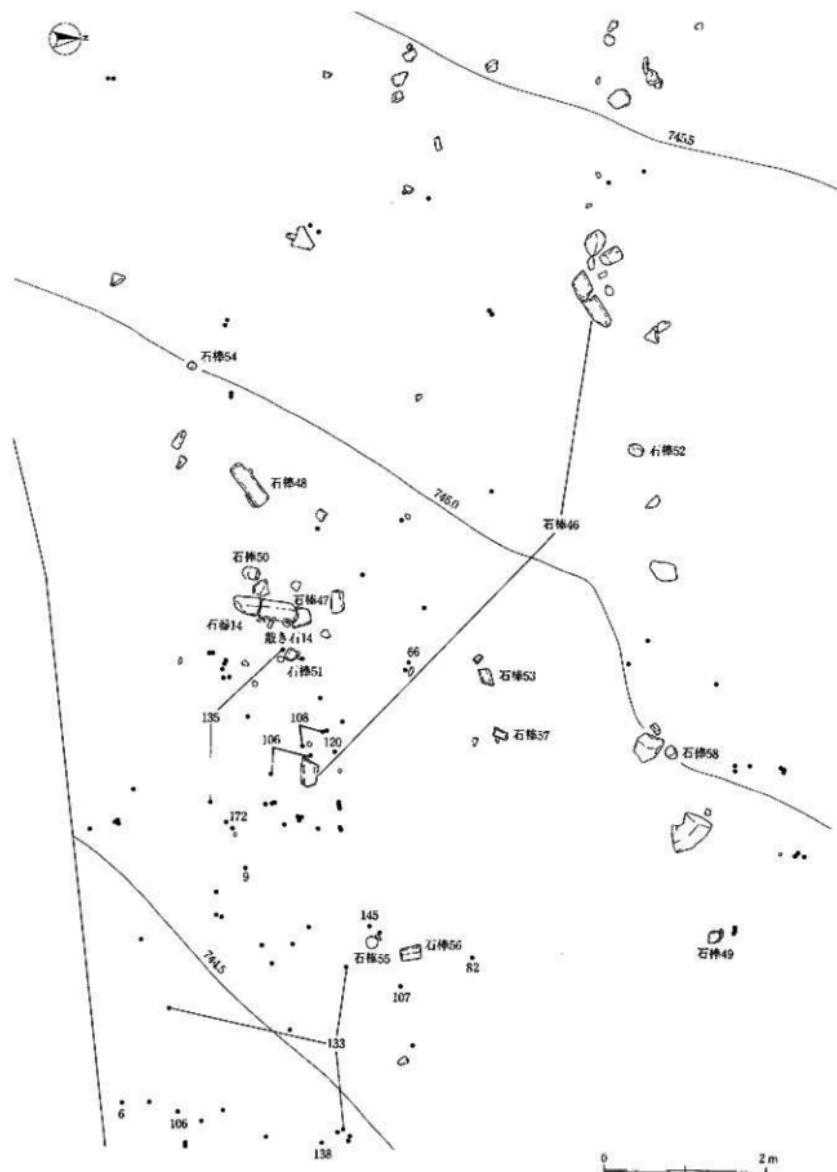
34は長さ69.3cm、幅12.8cm、厚さ12.7cm、重量18.0kgを測る第2段階の接合資料で、自然面を残す上下端部に向かって細い形状を呈する無頭石棒の完形品である。35は断面形が台形を呈する原石で、長さ53.8cm、幅18.4cm、厚さ10.4cm、重量18.0kgを測る。36は全体に被熱した第3段階と思われる削部人形破片である。37は第1段階の資料で長さ36.8cm、幅17.0cm、厚さ11.4cm、重量11.8kgを測る。38は第1段階の資料で長さ73.3cm、幅17.3cm、厚さ14.0cm、重量26.0kgを測り、裏面に大剥離が加えられている。39・40は第2~第3段階の頭部で、40は有頭石棒の可能性がある。41は側面から敲打が加えられ、表裏面に自然面を残す第2段階の資料である。長さ26.4cm、幅14.8cm、厚さ11.4cm、重量7.1kgを測る。42は両側面に剥離が加えられた第1段階の資料で長さ30.4cm、幅13.4cm、厚さ12.3cm、重量8.4kgを測る。43は両側面から敲打が加えられる第2段階の資料で裏面は被熱で破碎した可能性がある。44は第1段階の頭部である。45はN-17グリッド出土の資料と接合した第2段階の資料で、長さ88.5cm、幅17.0cm、厚さ15.2cm、重量34.5kgを測る完形品である。



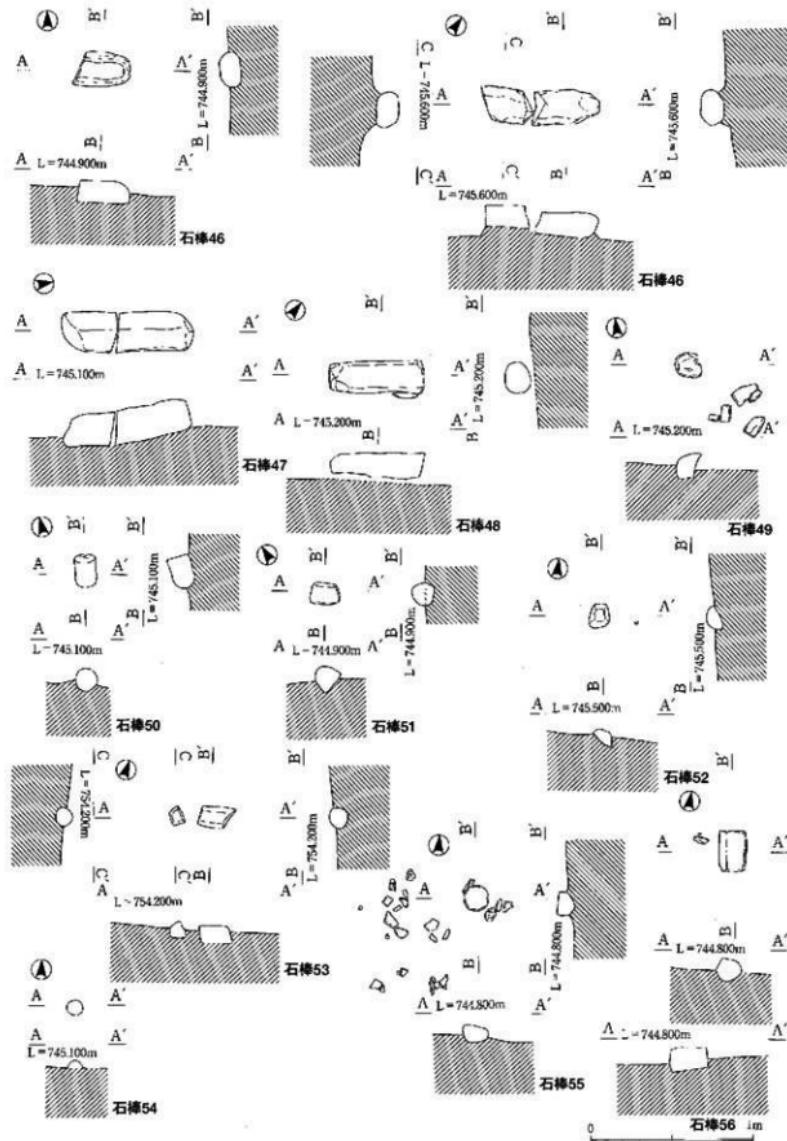
第19図 石棒出土状況図 7 (No.34~45)



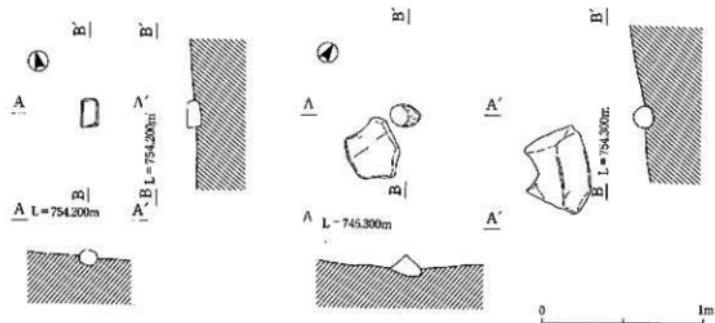
第20図 石棒No.34~43詳細図



第21図 石棒出土状況図 8 (No.46~58)



第22図 石棒No.46～56詳細図



第23図 石棒No.57・58詳細図

N-16・O-16グリッド地点 石棒46~58（第21~23・50~52図、図版14・29・30）

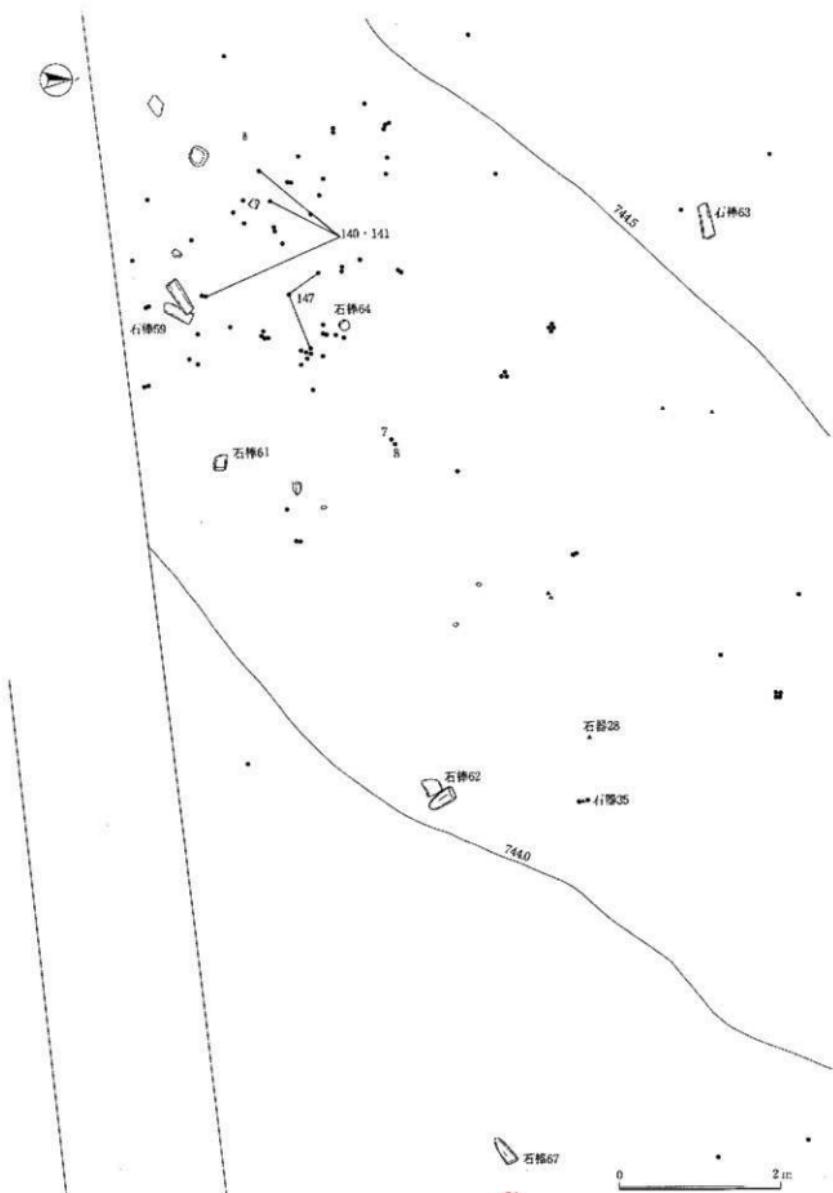
第21図は石棒46~58の出土状況図である。O-16グリッド西側に石棒47・48・50・51・54・46（3分の1）と敲き石14が集中し、その北～東側に約2～5m離れて、石棒49・52・53・55・56・57・58と46の約3分の2が散在して出土している。又、周辺には自然縞と加曾利E3式土器片も散在している。

接合資料の46は、長さ95.9cm、幅20.4cm、厚さ14.0cm、重量47.5kgを測る第2段階の完形品で、断面長方形を呈する原石の4角面に剥離が加えられ、側面から敲打が始められている。47は断面五角形を呈する原石で長さ77.8cm、幅23.5cm、厚さ20.6cm、重量55.0kgを測る。48は長さ58.7cm、幅19.5cm、長さ17.0cm、重量29.8kgを測る第2段階の資料で、裏面全体に自然面を残している。49・51・52・54・55・57・58は頭部部分で、51・52・55は上端部に斜方向の筋理自然面を残して敲打が加えられ、54の頭頂部は丸く成形されている。49・58は頭頂部が平に仕上げられ、全体に敲打が加えられている。57は4面に自然面を残す第1段階の資料である。50は有頭石棒の頭部部分で比較的大形の部類に入る。最大径13.6cmを測り、括れは不明瞭だが、全体に敲打が加えられた第3段階と考えられる。53は匂い石材を使用する第2段階の資料で、下半部の4面に自然面を残し、4角面から敲打が加えられている。長さ31.5cm、径13.0cm、重量6.0kgを測り、断面形はほぼ円形を呈している。56は2角面から敲打が加えられた第2段階の資料で、約40m離れたR-18グリッドから出土した第1段階の91と接合した資料である。長さ24.8cm、幅15.5cm、厚さ13.5cm、重量8.0kgを測り、表裏面に自然面を残し、側面から敲打が加えられている。

P-16グリッド地点 石棒59・61~64（第24・26・53・54図、図版15・31）

P-16グリッド西側に接合資料の59、約2m離れて北側に64、東側に61が位置し、62は北方向約5m、63は東方向約5m離れた位置から出土している。石棒59・64付近には加曾利E3式土器片が集中している。

59は折り重なって出土した第1段階の接合資料で、長さ72.5cm、幅15.0cm、厚さ8.8cm、重畠17.8kgを測り、断面長方形を呈する原石の4角面から剥離が加えられている。61は第1段階の端部である。62は第2段階の資料で長さ33.0cm、幅15.8cm、厚さ13.7cm、重量9.4kgを測る。63は長さ84.3cm、幅16.2cm、厚さ13.0cm、重量26.6kgを測る第2段階の接合資料で、トレンチ出土の資料と接合している。敲打は側面から加えられ、表裏面に自然面を残している。64は表面に自然面を残す第2段階の有頭石棒頭部で、最大径11.9cmを測る。頭頂部は半に成形され、括れは不明瞭であるが、断面形はほぼ円形を呈している。

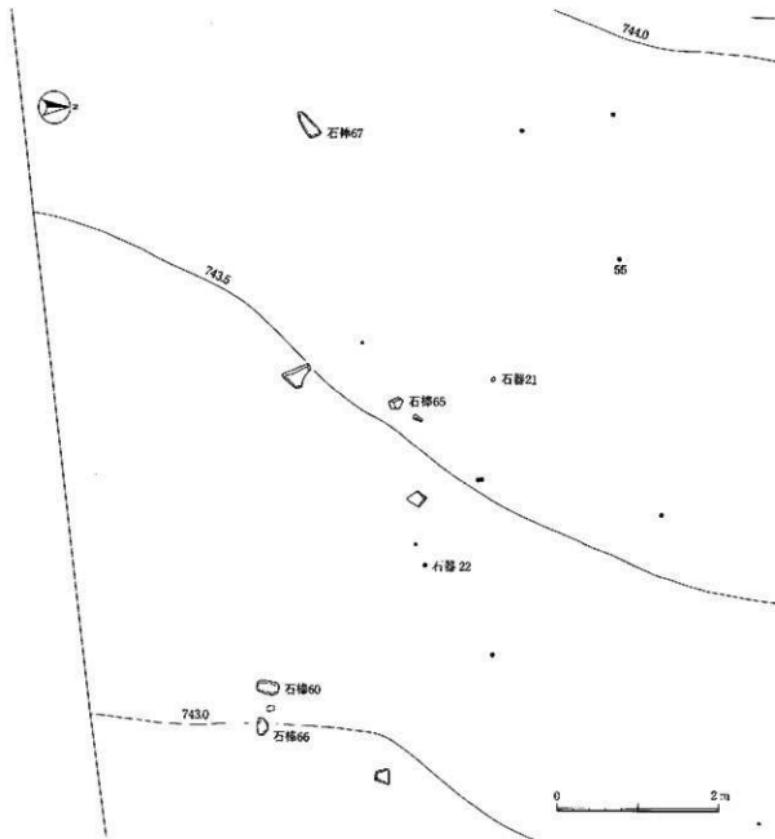


第24図 石棒出土状況図9 (No.59・~~62~~~64・67)

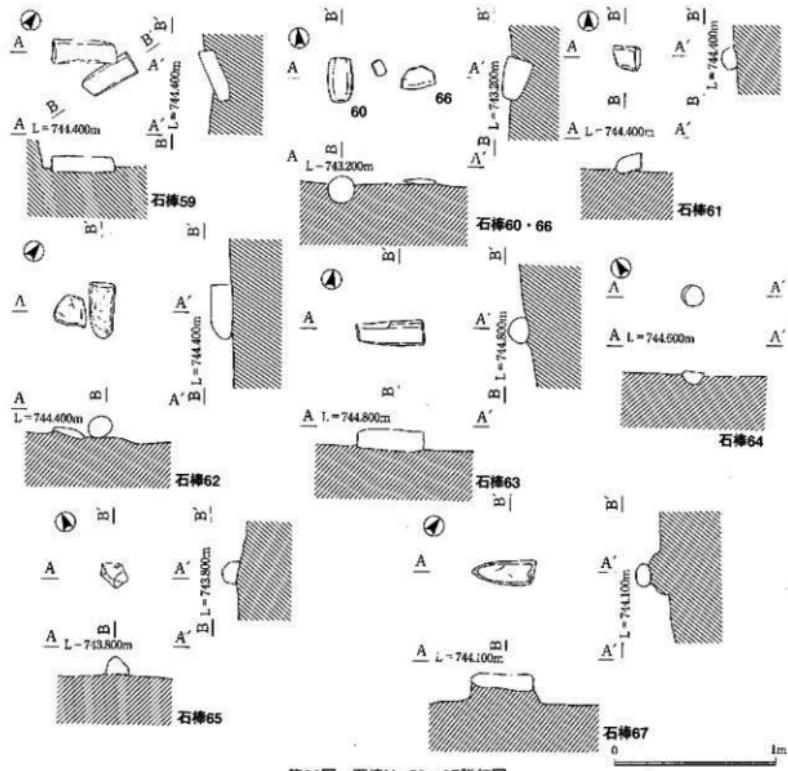
Q-16グリッド地点 石棒60・65~67 (第25・26・53・54図、図版15・31)

第25図はQ-16グリッドの石棒出土状況図である。Q-16グリッド北側に60・65・66・67が散在して出土し、少量の土器片と石器類、自然石が出土している。

60は長さ26.8cm、径18.6cm、重量16kgを測る第3段階の頭部で、全体に敲打が加えられ、断面形は円形を呈し、頭頂部は自然面を利用して平に成形されている。65は脇部大形破片で被熱によって破碎した可能性が高い。表面は既に滑らかに仕上げられ、残存部が半円形を呈する第3段階の資料である。66は60の横から出土した第2段階の大形破片である。67は第2段階の資料で、長さ36.7cm、幅13.5cm、厚さ9.5cm、重量6.3kgを測り、表裏面に自然面を残して内側面から敲打が加えられる。断面形は長梢円形を呈し、頭頂部に向かって先細る形状を呈している。



第25図 石棒出土状況図10 (No.60・65~67)

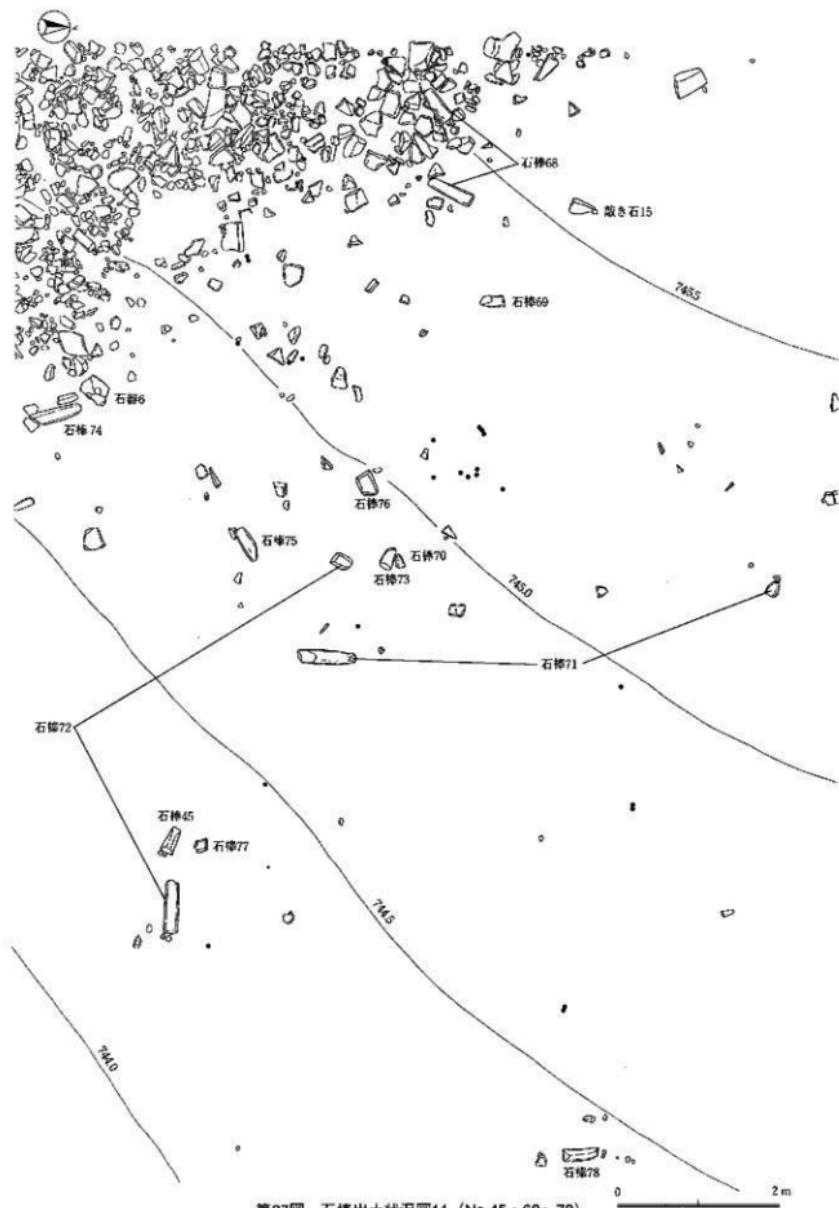


第26図 石棒No.59~67詳細図

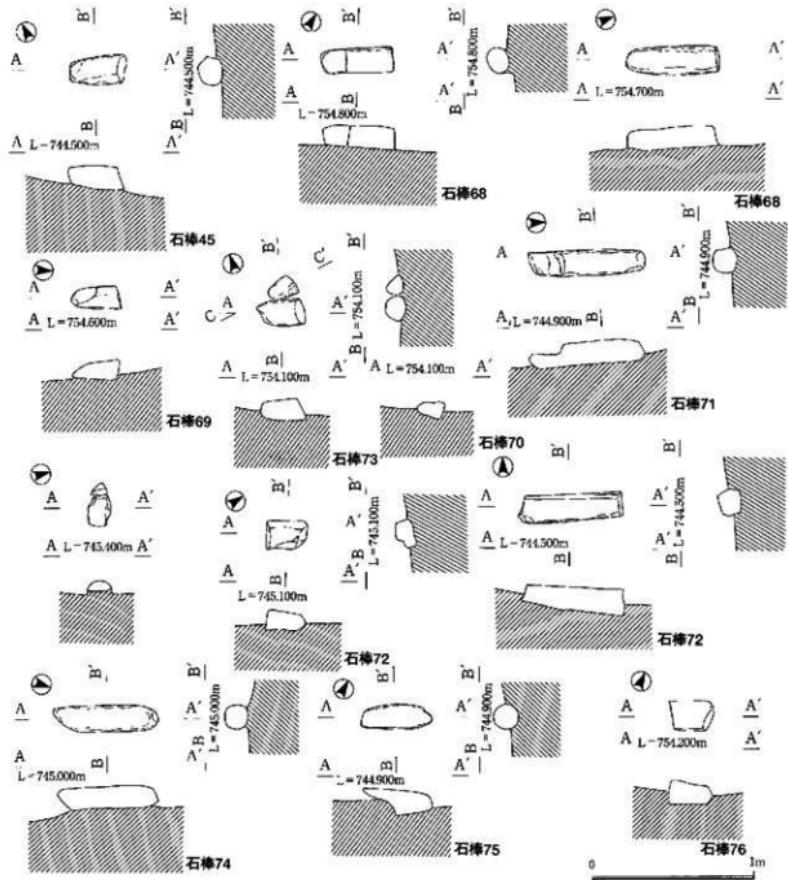
M-17・N-17・N-18グリッド地点 石棒45・68~77（第27・28・55~58図、図版15・16・32・33）

第27図は南集石の東端部付近に集中する石棒45・68~77の出土状況図である。南集石末端部から2個体に割れた石棒68、石棒74・69と敲き石15が出土し、東側には石棒70・71・73・75・76と72の一部が集中している。その東側2mには石棒72・77と、N-15グリッド出土の石棒45の3分の1が出土し、他に、石棒71と接合する破片が北側から出土している。この地点からの石棒は接合資料が多く、離れた位置からの出土資料と接合するものも目立っている。

68は完形の接合資料で、長さ97.1cm、幅15.6cm、厚さ14.0cm、重量30.0kgを測る。剖面から敲打が加えられた第2段階の資料で、両端部付近まで敲打が加えられている。69は長さ29.5cm、幅13.7cm、厚さ12.4cm、重量6.0kgを測る第2段階の資料で、頭部に斜方向の自然面が残され、裏面はほぼ全面に自然面を残しているが、全体に敲打が加えられ、断面形はほぼ円形を呈している。70は第2段階前半の頭部である。71は長さ70.6cm、幅15.3cm、厚さ14.4cm、重量25.8kgを測る第2段階の資料で、両側面に自然面を残して表裏面から敲打が加えられている。表面基部が剥落し、破片が接合している。

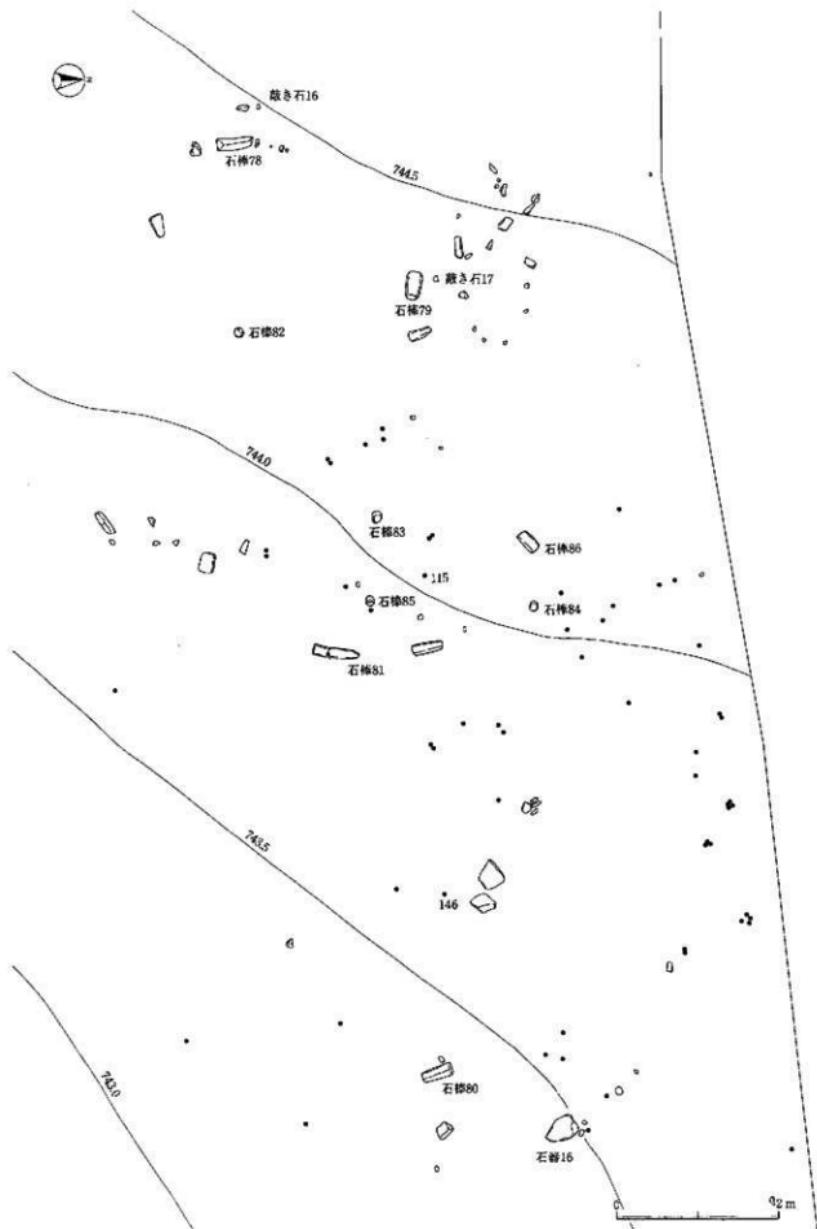


第27図 石棒出土状況図11 (No.45・68~78)

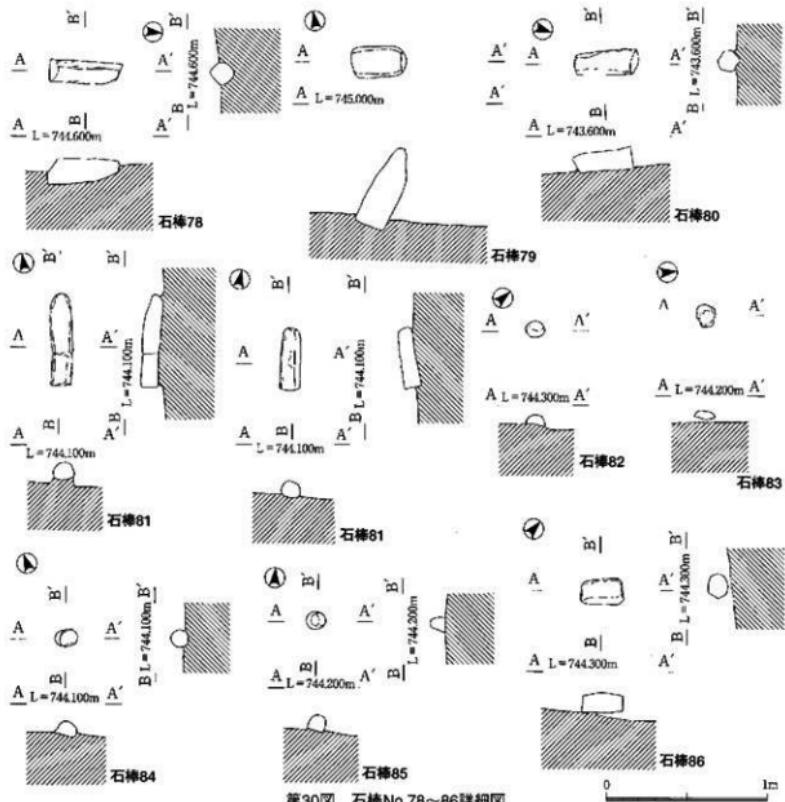


第28図 石棒No.45・68～76詳細図

72は第1段階の接合資料である。長さ86.9cm、幅15.8cm、厚さ14.8cm、重量35.0kgを測り、表面に集中して剥離が加えられている。73は長さ29.1cm、幅15.0cm、厚さ13.1cm、重量8.2kgを測る第2段階の資料で、両側面と頭部に自然面を残して截打が加えられ、断面形はほぼ円形を呈している。74は長さ64.3cm、幅13.5cm、厚さ15.0cm、重量20.6kgを測る第3段階の資料で、側面と頭頂部に自然面を残して細かい截打が加えられ、断面形は梢円形を呈し、基部側には斜位の節理が入っている。75は第3段階の頭部で、残長42.1cm、径15.6cm、重量11.0kgを測る。全体に截打が加えられ、自然面は無い。断面形は円形を呈し、頭部はやや先細りの丸形に仕上げられている。76・77は第1段階の端部である。



第29図 石棒出土状況図12 (No.78~86)

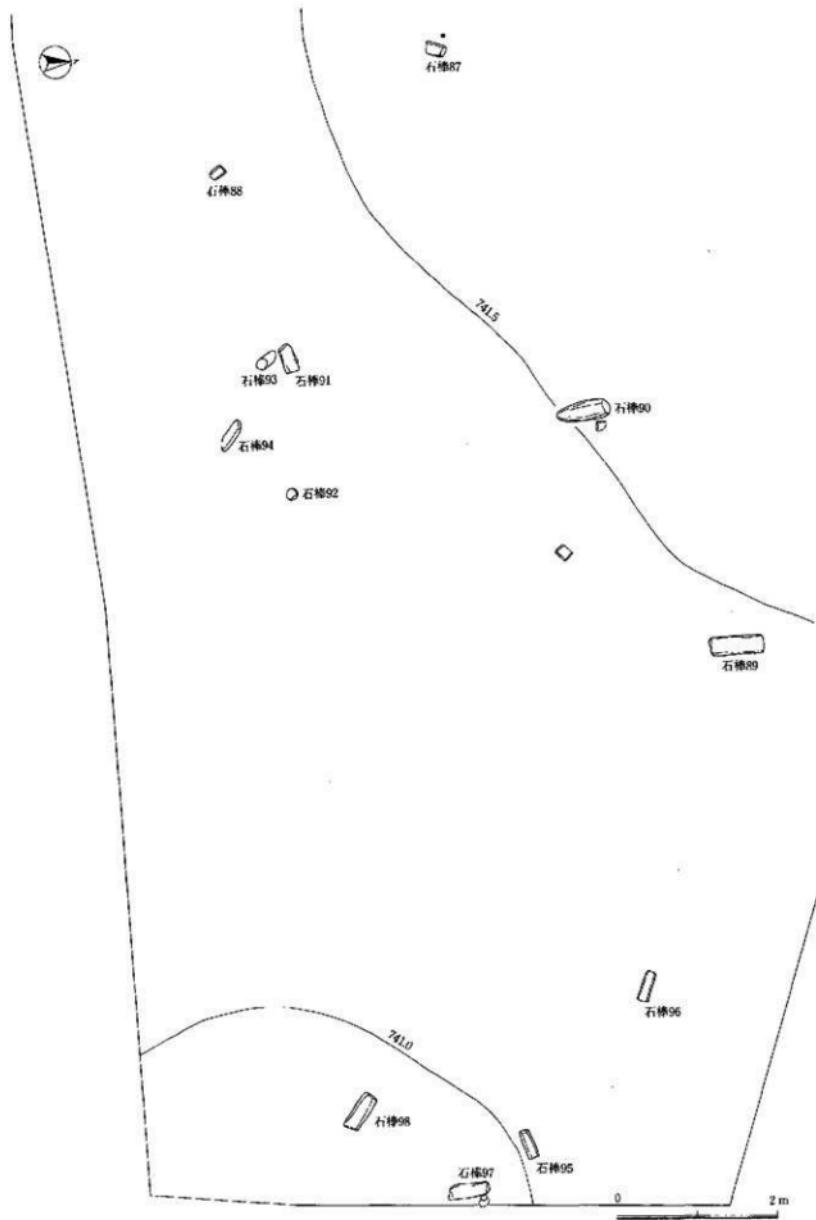


第30図 石棒No.78~86詳細図

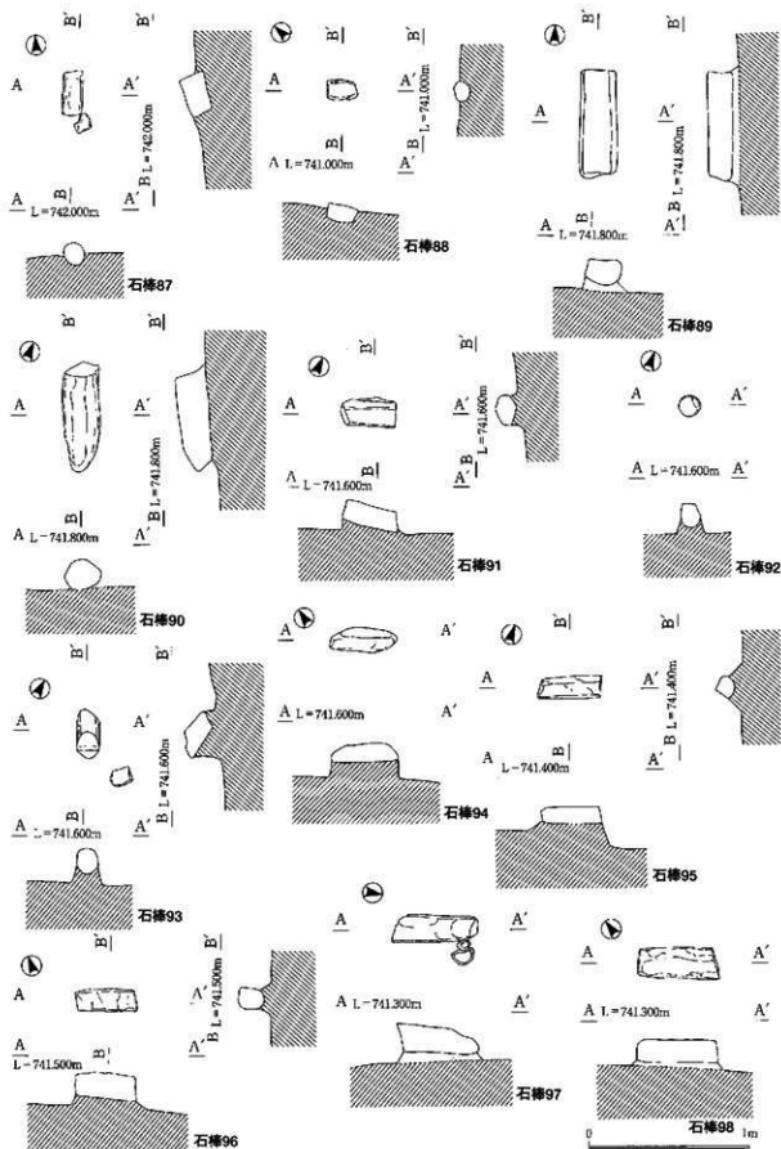
#### O-17・P-17グリッド地点 石棒78~86 (第29・30・59・60図、図版17・34)

第29図は石棒78~86の出土状況図である。O-17グリッド北側を中心として石棒78~86と自然石・土器片が散在している。東端部に位置する石棒78の横から敲き石16、斜位に立った状況で出土した石棒79の横からは敲き石17が出土し、石棒81は3個体に割れて出土している。

78は第2段階の資料で長さ48.5cm、幅15.5cm、厚さ13.8cm、重量13.2kgを測る。79は斜位に立った状況で出土した第3段階の資料で、長さ54.5cm、幅18.4cm、厚さ18.6cm、重量28.6kgを測る。全面に細かい敲打が加えられる完形品と思われ、一部に自然面を残しているが、断面形は円形を呈している。80は第2段階の資料で長さ38.5cm、幅15.0cm、厚さ10.5cm、重量10.2kgを測る。断面長方形を呈する原石の4角面に剥離が加えられ、側面の一部に敲打が加えられている。81は第2段階の接合資料で全長90.8cm、幅13.1cm、厚さ11.4cm、重量19.5kgを測り、断面形はほぼ円形を呈し、自然面が比較的多く残されている。82・83・84・85は頭部で、82・85は頭部が丸く成形される第3段階の資料である。83は被熱痕がある破片資料である。84は有頭石棒の頭部で頭部径10.7cm、抉り部分9.5cmを測り、比較的明瞭な抉りを持ち、僅かに自然面があるが、第3段階と考えられる。86は第1段階の有頭石棒頭部と考えられ、下端に剥離成形で抉りが作出されている。頭部部分は自然面を多く残し、ほとんど原石の形状が残されている。



第31図 石棒出土状況図13 (No.87~98)

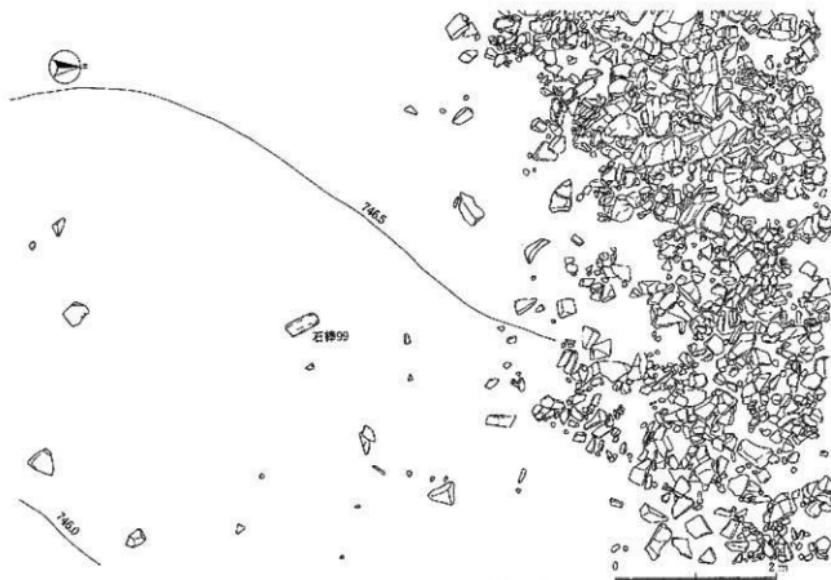


第32図 石棒No.87~98詳細図

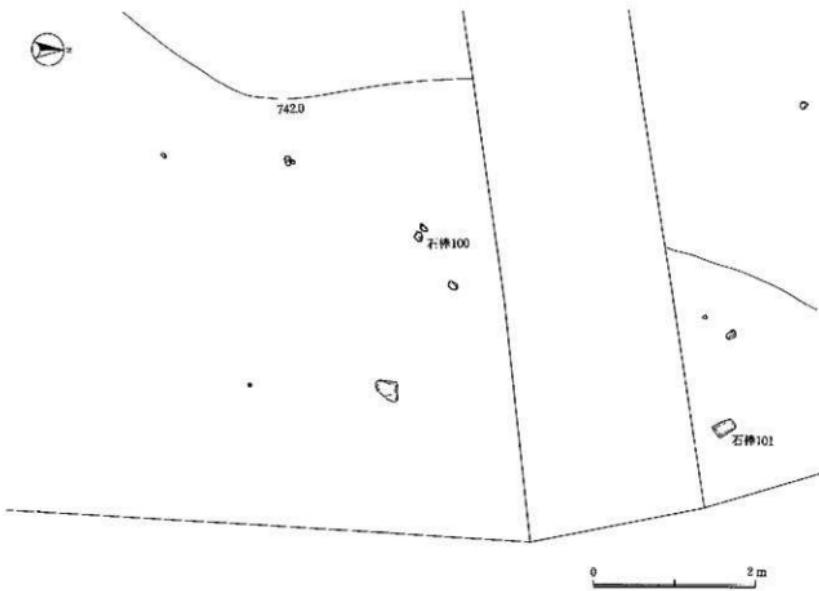
S-17・18、R-17・18グリッド地点 石棒87~98（第31・32・61~64図、図版18・35~37）

第31図は調査区東南端部の石棒87~98の出土状況図である。石棒89・90・91・92・93・94・95・96・97・98が弧状に散在して出土し、その西側に石棒87・88が位置している。周辺から敲き石は出土せず、土器片・自然礫も僅かに見られる程度に出土したのみであった。

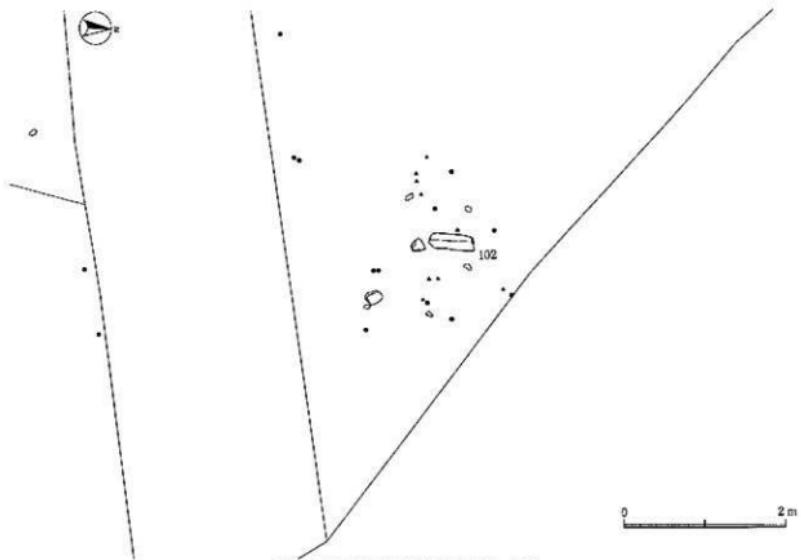
87は第2段階前半の資料で、長さ26.4cm、幅15.5cm、厚さ10.5cm、重量7.8kgを測る。断面長方形の角面に剥離が加えられ、側面から敲打が始まられている。88は断面三角形を呈する原石の3角面に敲打が加えられ、3面に自然面を残す第2段階頭部の資料で、下端に抉りが観察される有頭石棒木製品である。89は長さ66.4cm、幅21.8cm、厚さ16.3cm、重量43.0kgを測る原石である。90は長さ64.7cm、幅21.4cm、厚さ18.6cm、重量37.0kgを測る第2段階の資料で、側面から敲打が加えられている。91は第1段階の資料で2角面に剥離が加えられ、自然面と角面を多く残している。長さ34.0cm、幅15.9cm、厚さ13.6cm、重量11.0kgを測る。91はO-16グリッドから出土した第2段階の56と接合し、接合状態での長さは58.8cm、重量は19.0kgを測る。段階の異なる資料の接合例は唯一この91と56のみであった。92は表面・側面に被熱痕を残す第3段階の頭部で、頭頂部は丸く仕上げられている。93は全面に敲打が加えられ、断面形がほぼ円形を呈する第3段階の資料で、形態的には上方向に細く成形されている。94は非常に脆い材質の第1段階の資料である。95は両側面に荒い剥離が加えられ、表裏面に自然面を残す第1段階の資料で頭部部分と考えられる。長さ37.3cm、幅15.6cm、厚さ11.4cm、重量12.0kgを測る。原石は表裏面部分が湾曲する長方形の断面形を有していたと考えられる。96は断面形が長方形を呈する原石の両側面から加工が施された資料で、長さ38.0cm、幅17.2cm、厚さ10.6cm、重量13.2kgを測る。左側面は敲打によって丸く仕上げられているが、右側面は荒い剥離が残された状態で、両側面で加工段階が違う資料といえよう。段階的には第2段階の資料である。97は第2段階の資料で長さ52.3cm、幅17.2cm、厚さ15.7cm、重量20.4kgを測る。自然面を3面に残し、明瞭な剥離痕が見られる面もある。98は両側面から敲打が加えられ、表裏面に自然面を残す第2段階の資料で、長さ49.1cm、幅18.5cm、厚さ13.8cm、重量21.6kgを測る。断面形は橢円形を呈し、頭頂部は平に成形されている。



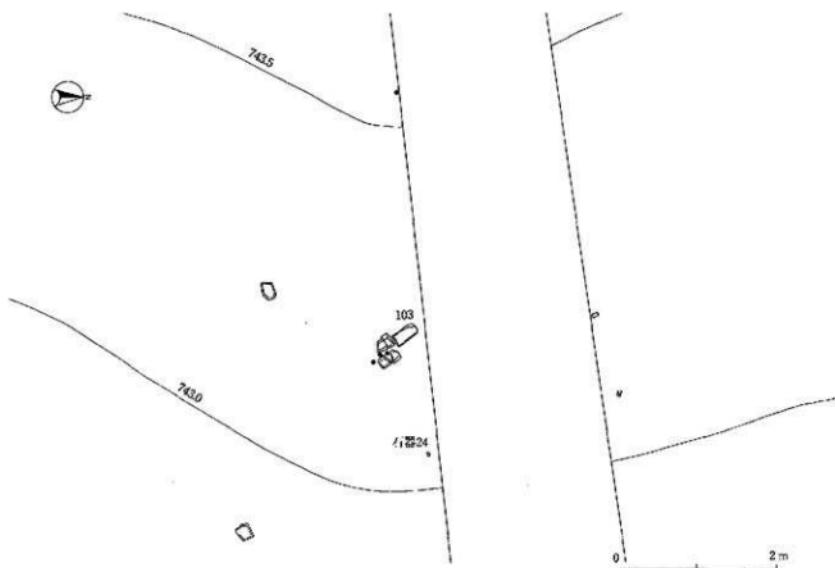
第33図 石棒出土状況図14（No.99）



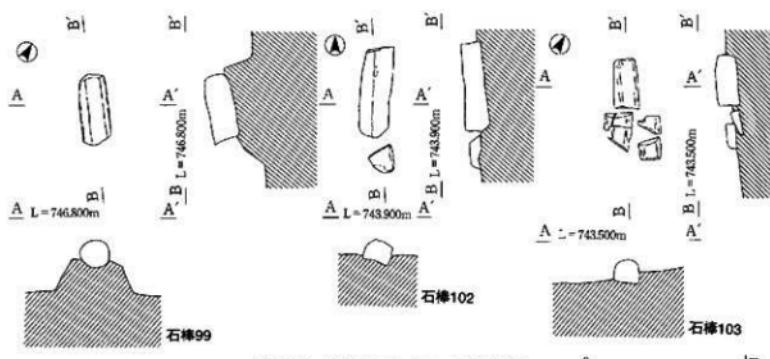
第34図 石棒出土状況図15 (No.100・101)



第35図 石棒出土状況図16 (No.102)



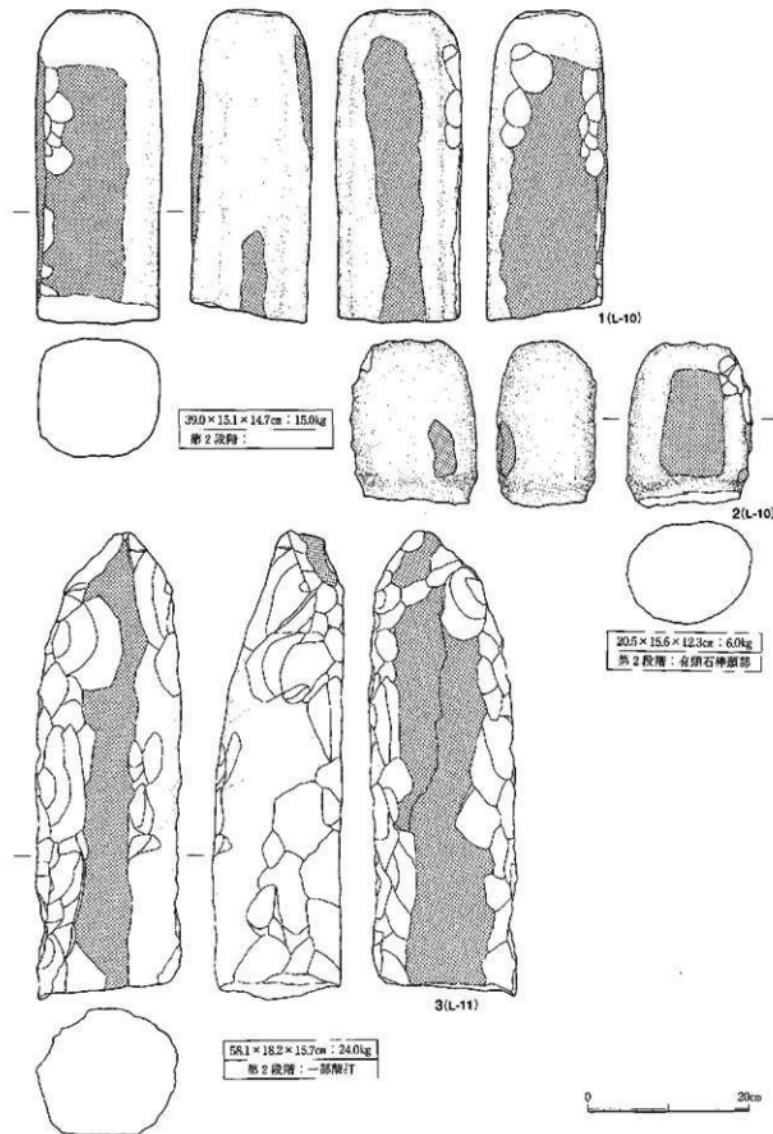
第36図 石棒出土状況図17 (No.103)



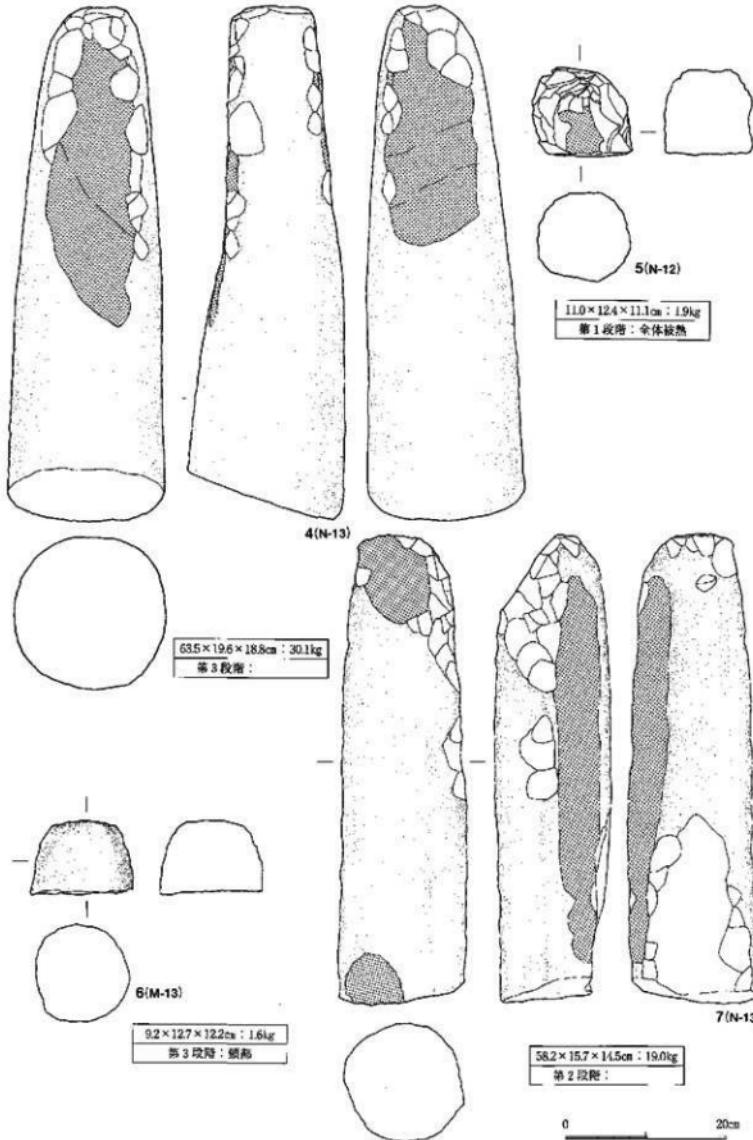
第37図 石棒No.99・102・103詳細図

0 1m

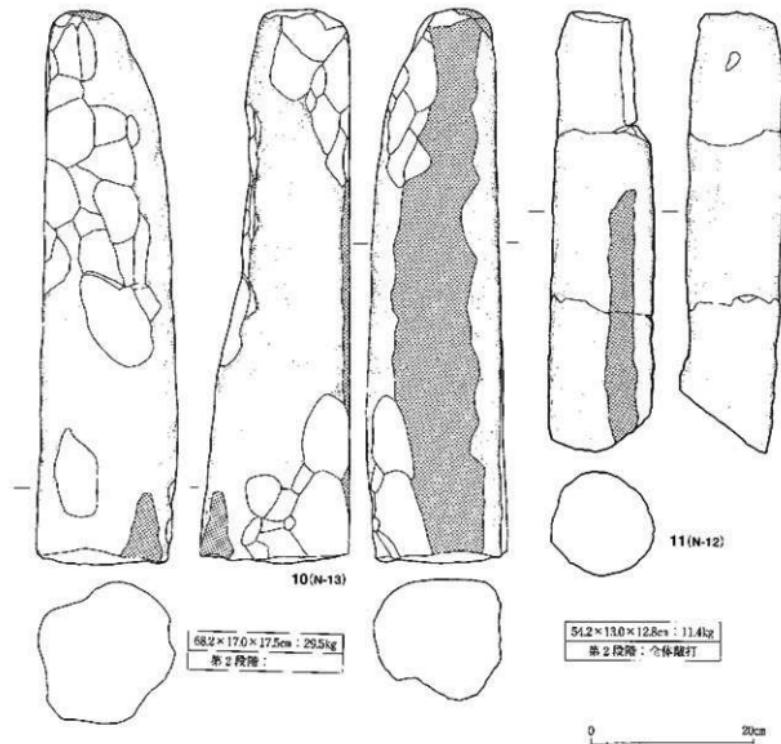
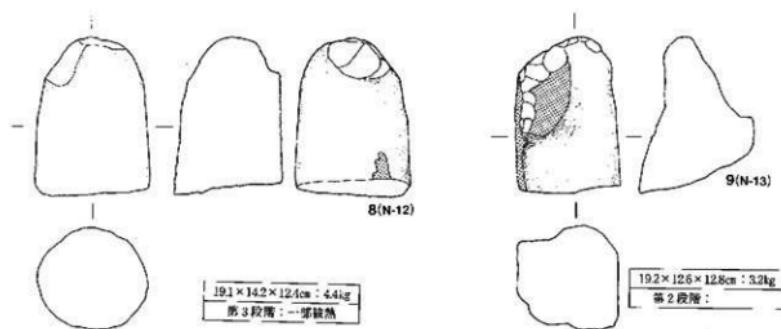
散発的に出土したものは、南集石と中央集石の中間、M-16グリッドから99、S-16グリッドから100・101、R-14グリッドから102、調査区北東端Q-13グリッドが出土している。その他、P-17グリッド、Q-16グリッド、南集石東端N-18グリッド、調査区北西端K-18グリッド等から頭部が出土し、確認調査時に本調査区内トレンチから出土したものでは、敲打段階の接合資料として長さ90.0cm、幅18.0cm、厚さ16.5cm、重量42.0kgを測る105と、長さ100.0cm、幅17.5cm、厚さ14.8cm、重量43.0kgを測る106の大形資料がある。剥離段階の資料としては、長さ79.6cm、幅20.0cm、厚さ15.7cm、重量41.0kgを測る107があり、1角面のみに剥離が集中的に加えられている。



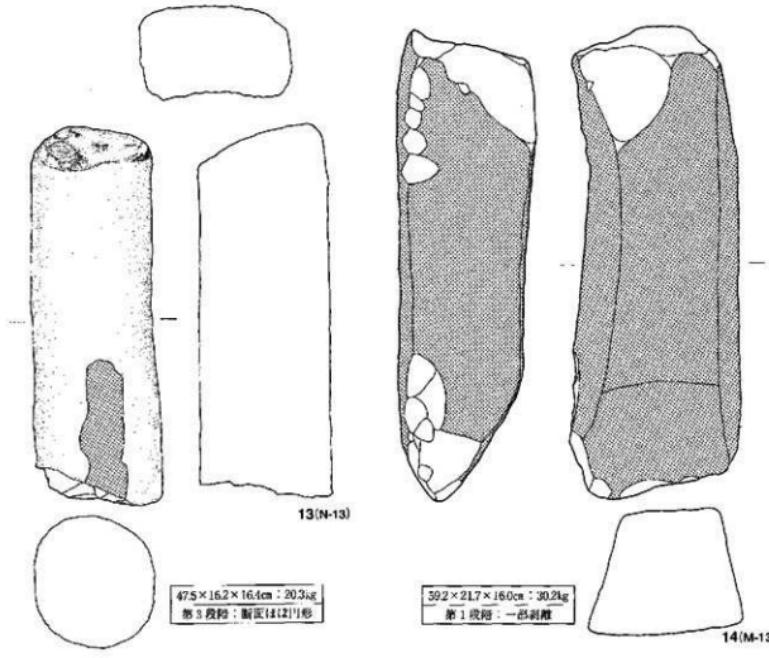
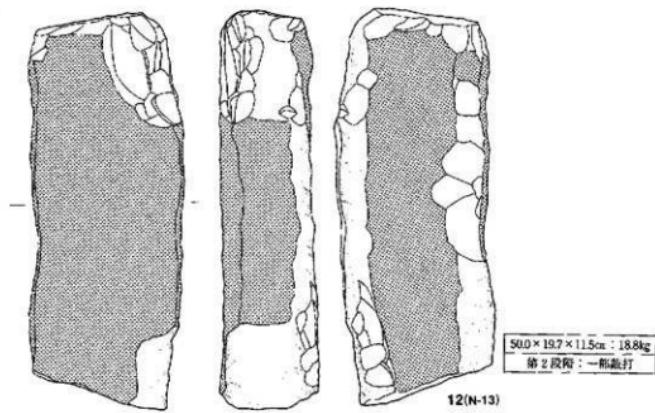
第38図 石棒実測図 (No. 1 ~ 3)



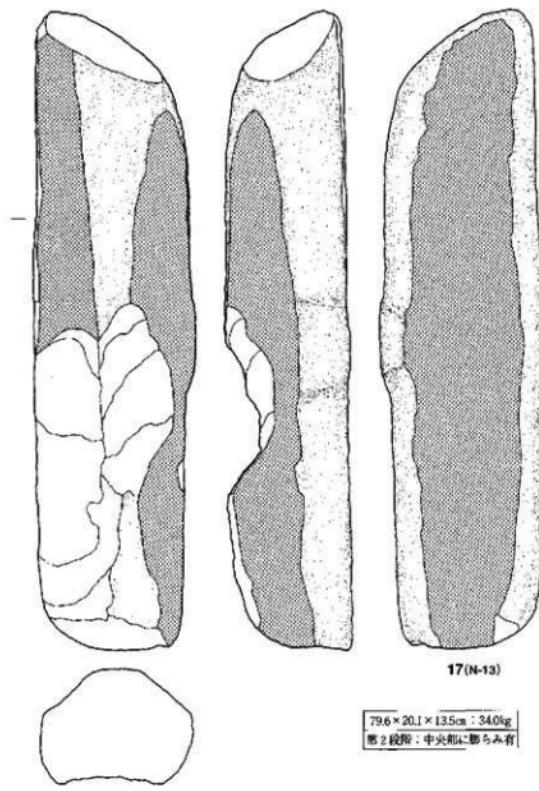
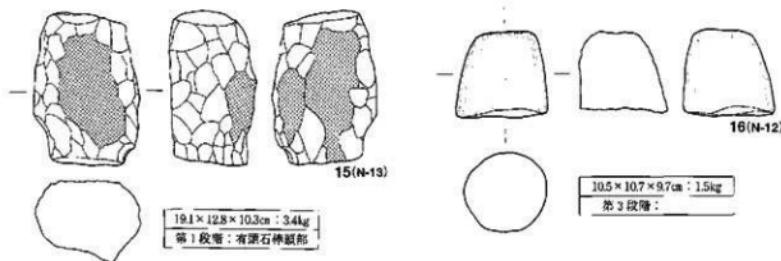
第39図 石棒実測図 (No. 4 ~ 7)



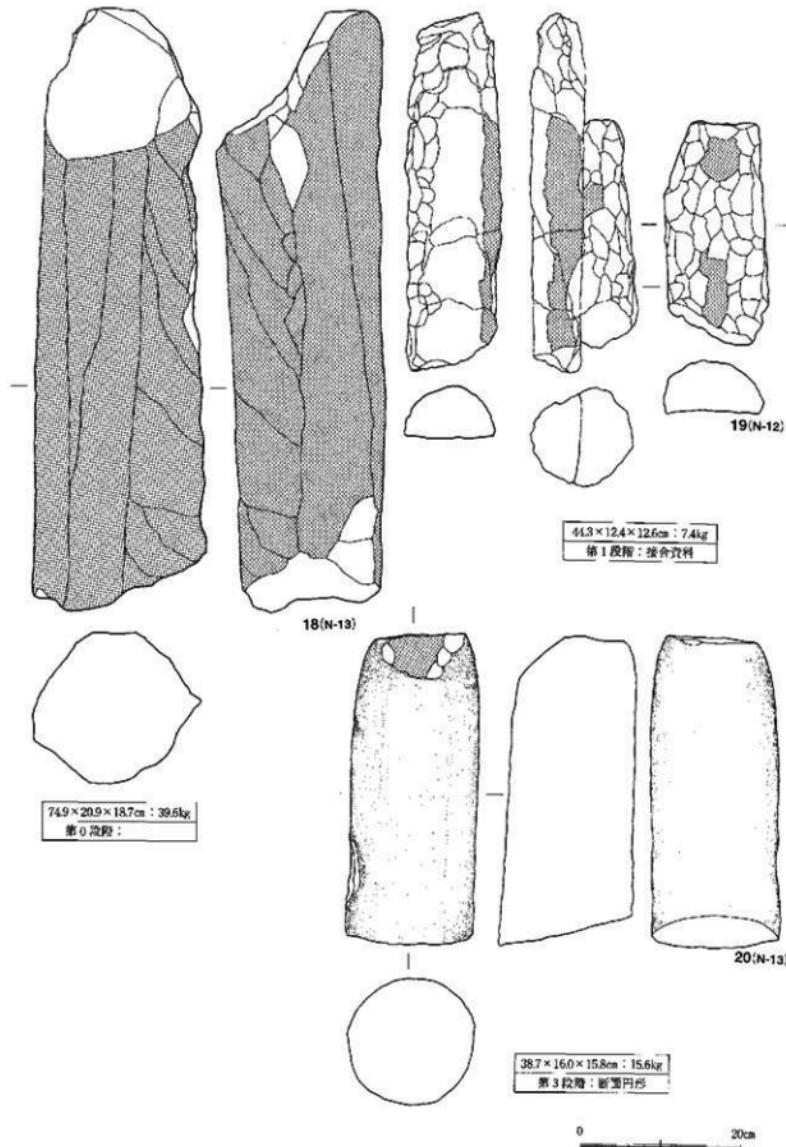
第40図 石棒実測図 (No. 8 ~ 11)



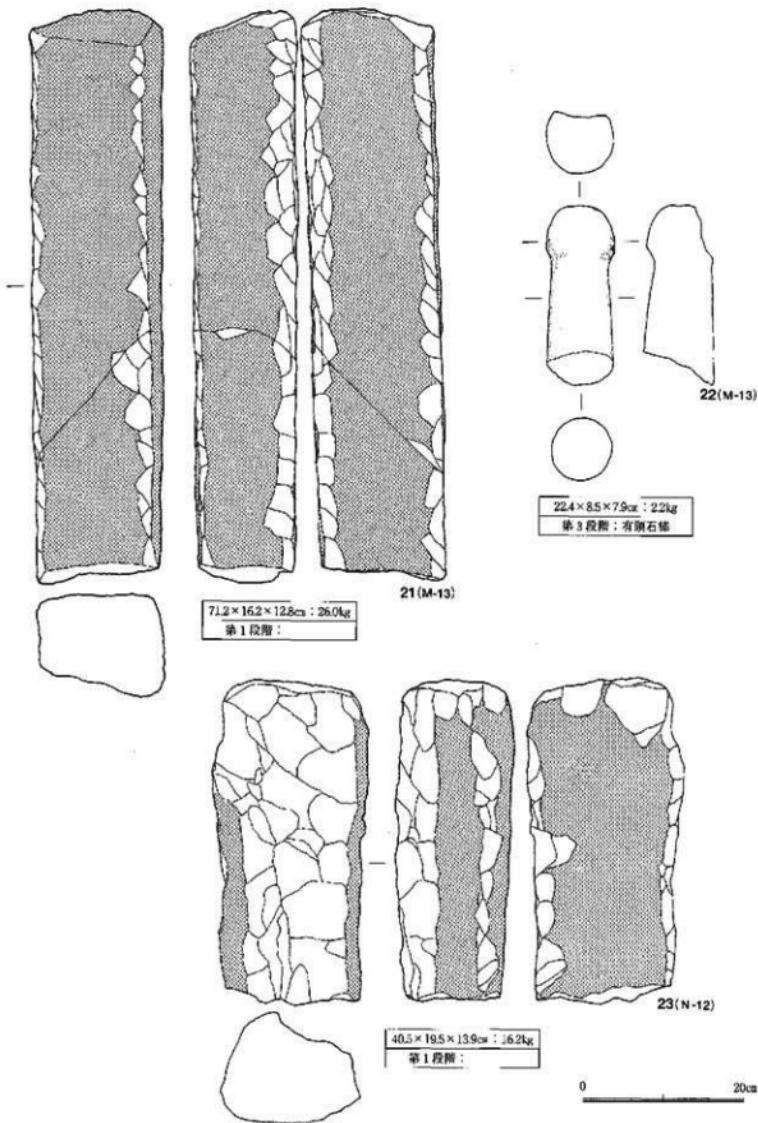
第41図 石棒実測図 (No.12~14)



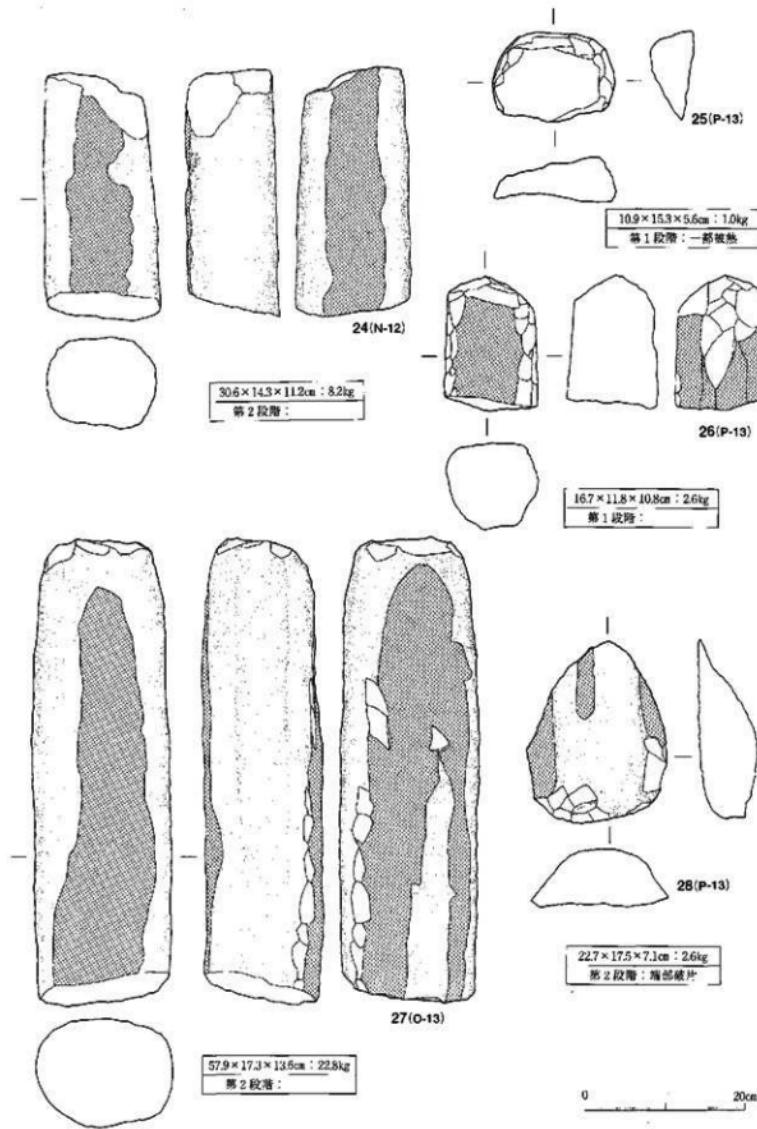
第42図 石棒実測図 (No.15~17)



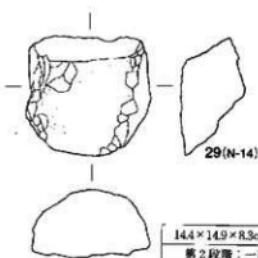
第43図 石棒実測図 (No.18~20)



第44図 石棒実測図 (No.21~23)



第45図 石棒実測図 (No.24~28)



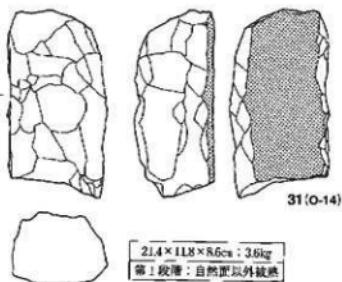
29(N-14)

$14.4 \times 14.9 \times 8.3\text{cm} : 1.9\text{kg}$   
第2段階：一部被熱



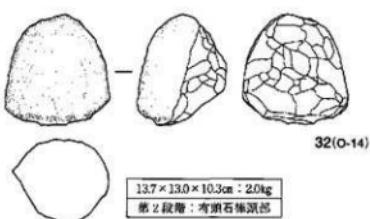
30(N-14)

$24.6 \times 15.6 \times 14.3\text{cm} : 7.1\text{kg}$   
第3段階：前面凸形



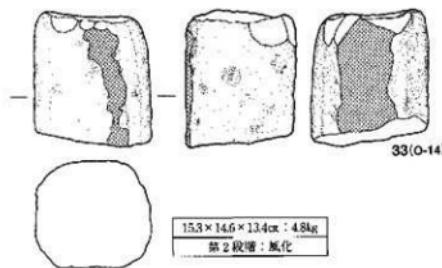
31(O-14)

$21.4 \times 11.8 \times 8.6\text{cm} : 3.6\text{kg}$   
第1段階：自然面以外被熱



32(O-14)

$13.7 \times 13.0 \times 10.3\text{cm} : 20\text{kg}$   
第2段階：有頭石棒頭部

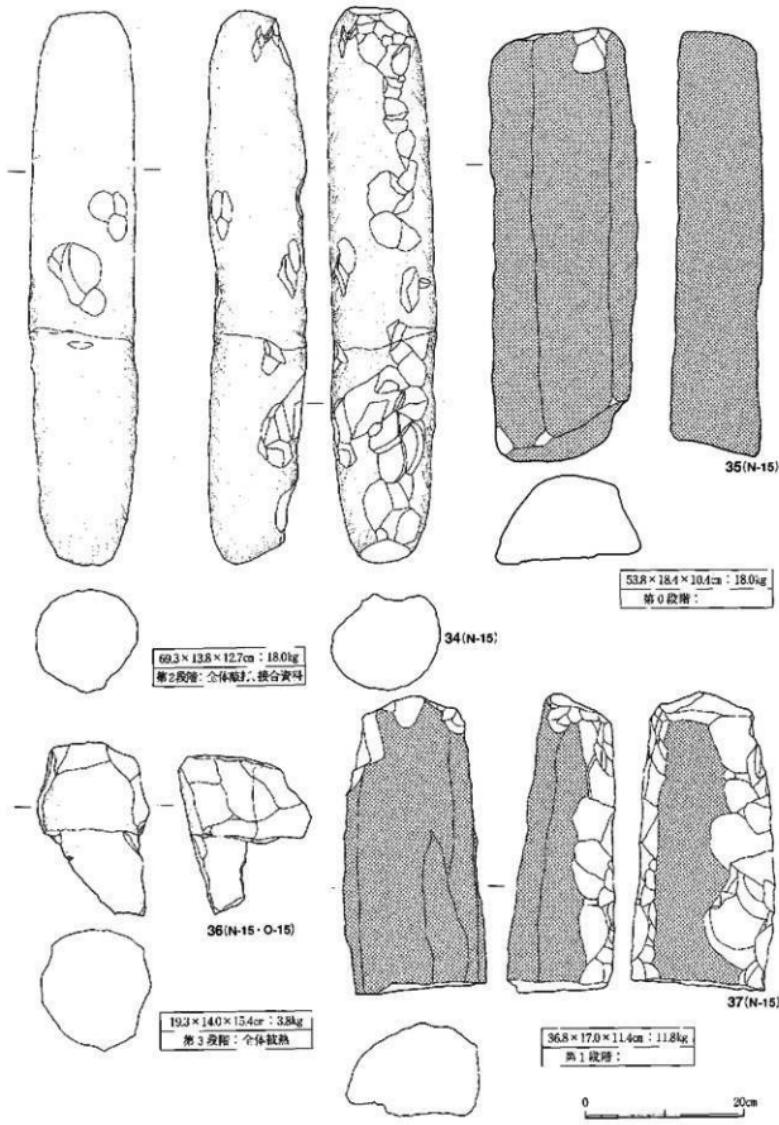


33(O-14)

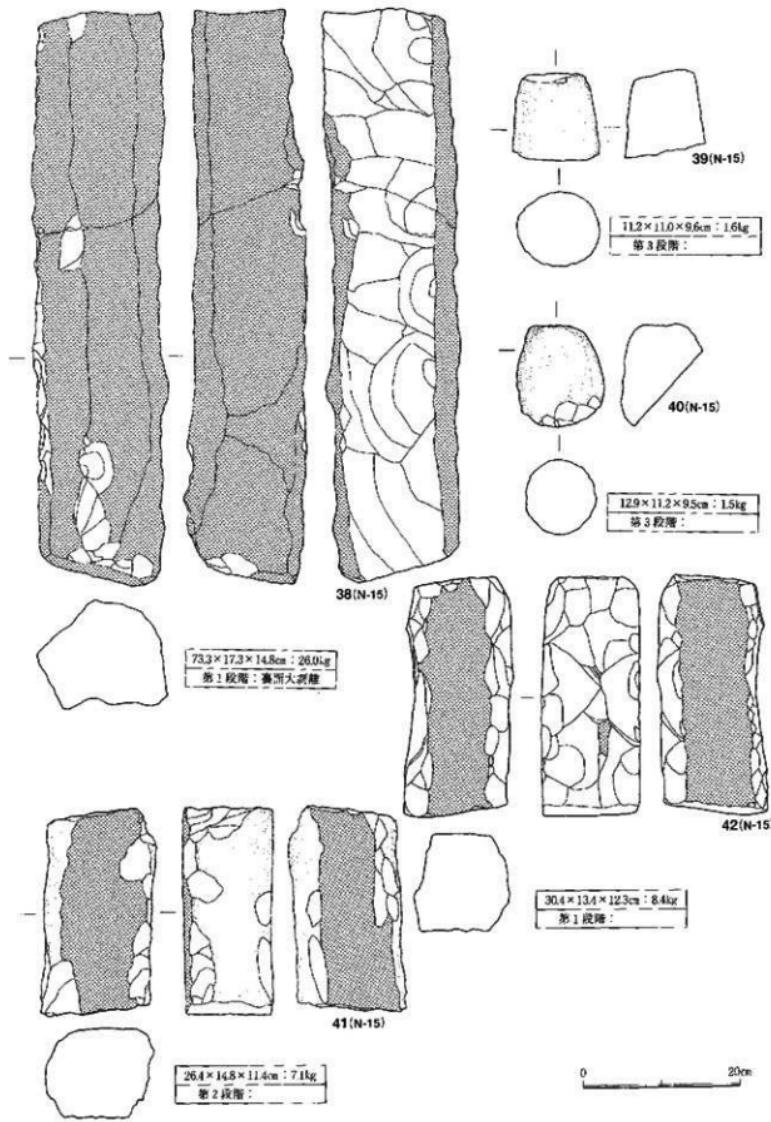
$15.3 \times 14.6 \times 13.4\text{cm} : 4.8\text{kg}$   
第2段階：風化

0 20cm

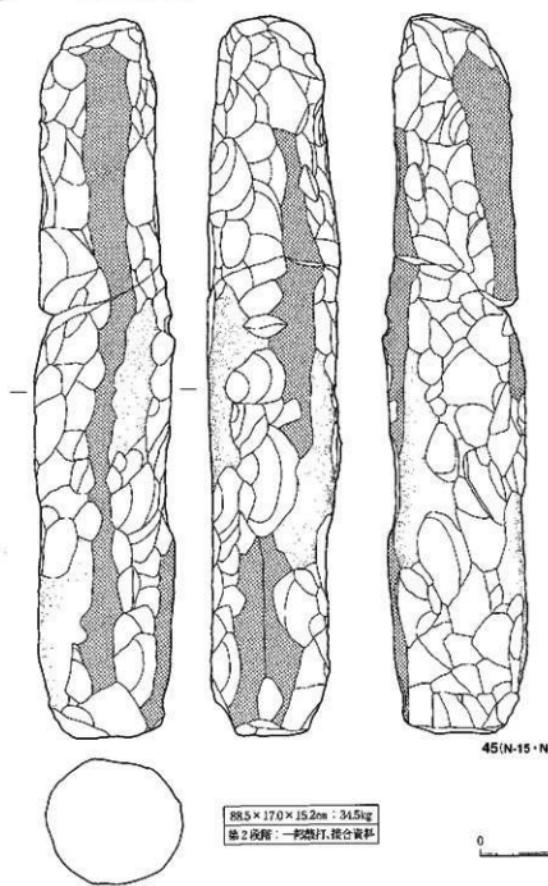
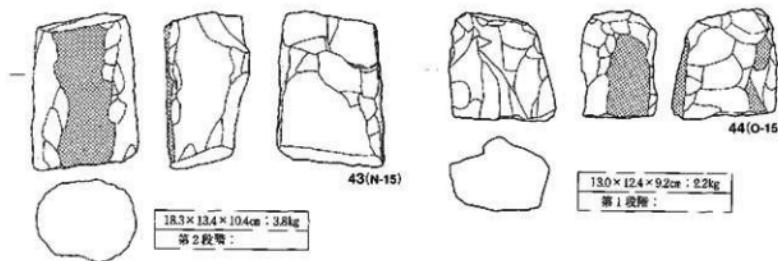
第46図 石棒実測図 (No.29~33)



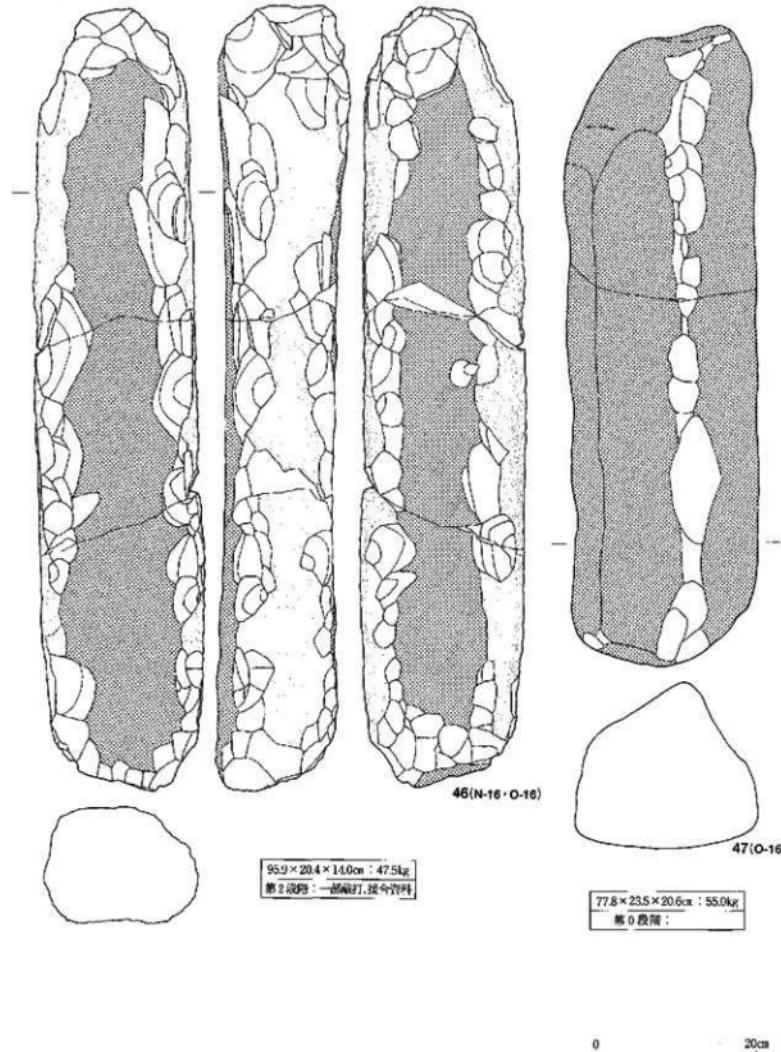
第47図 石棒実測図 (No.34~37)



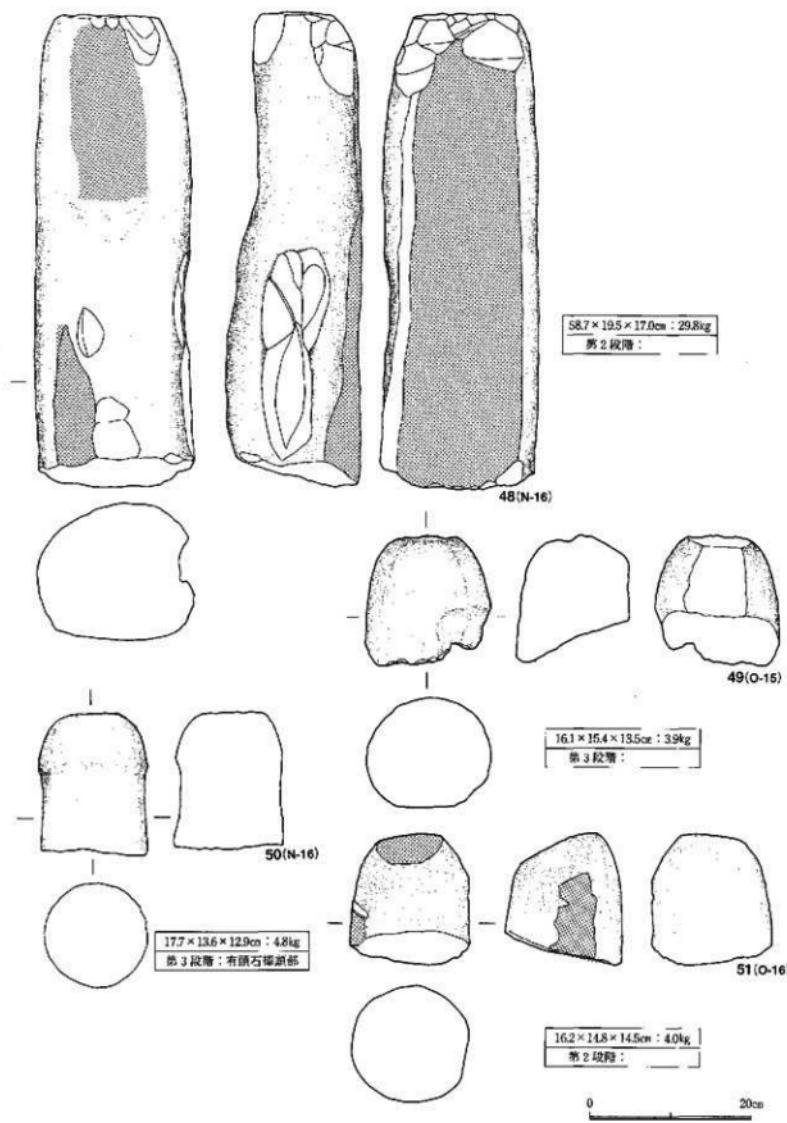
第48図 石棒実測図 (No.38~42)



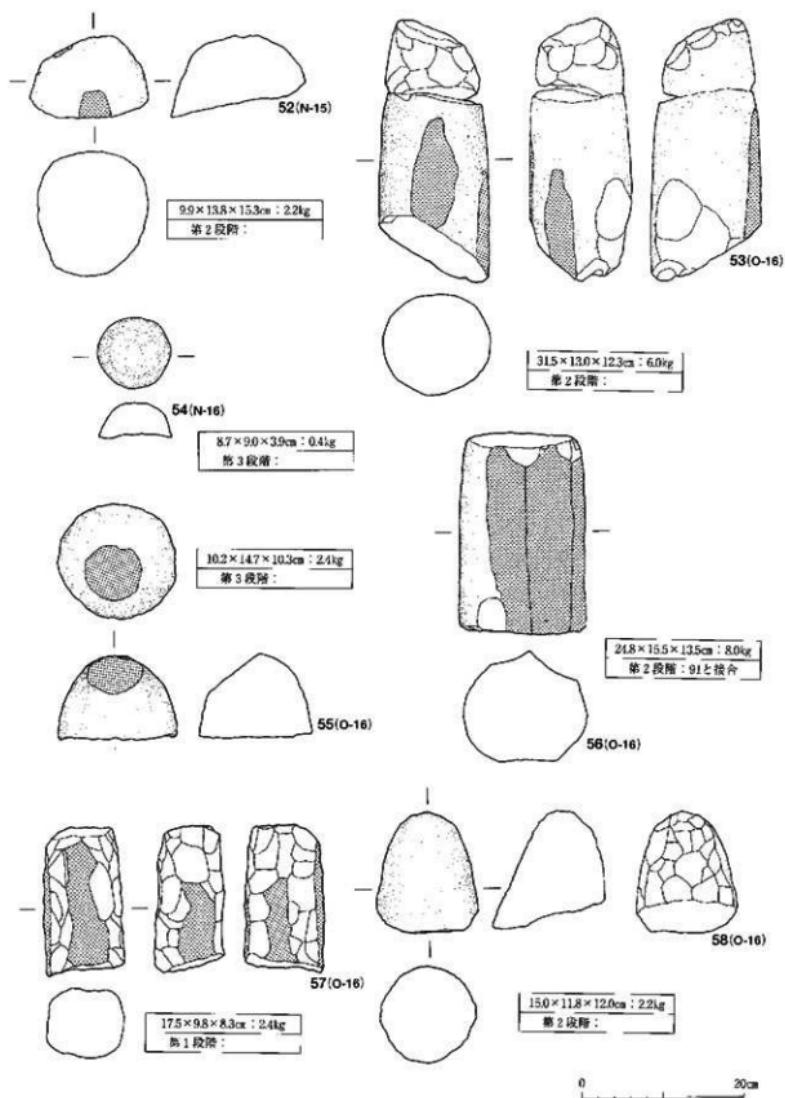
第49図 石棒実測図 (No.43~45)



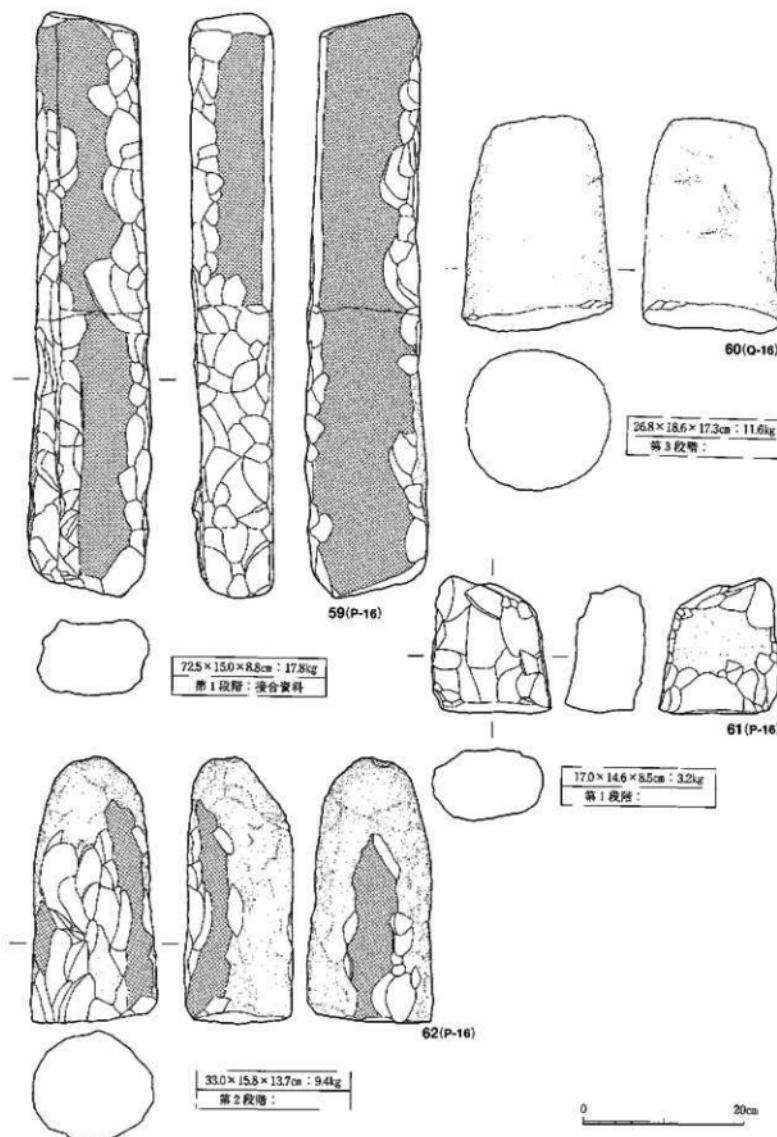
第50図 石棒実測図 (No.46・47)



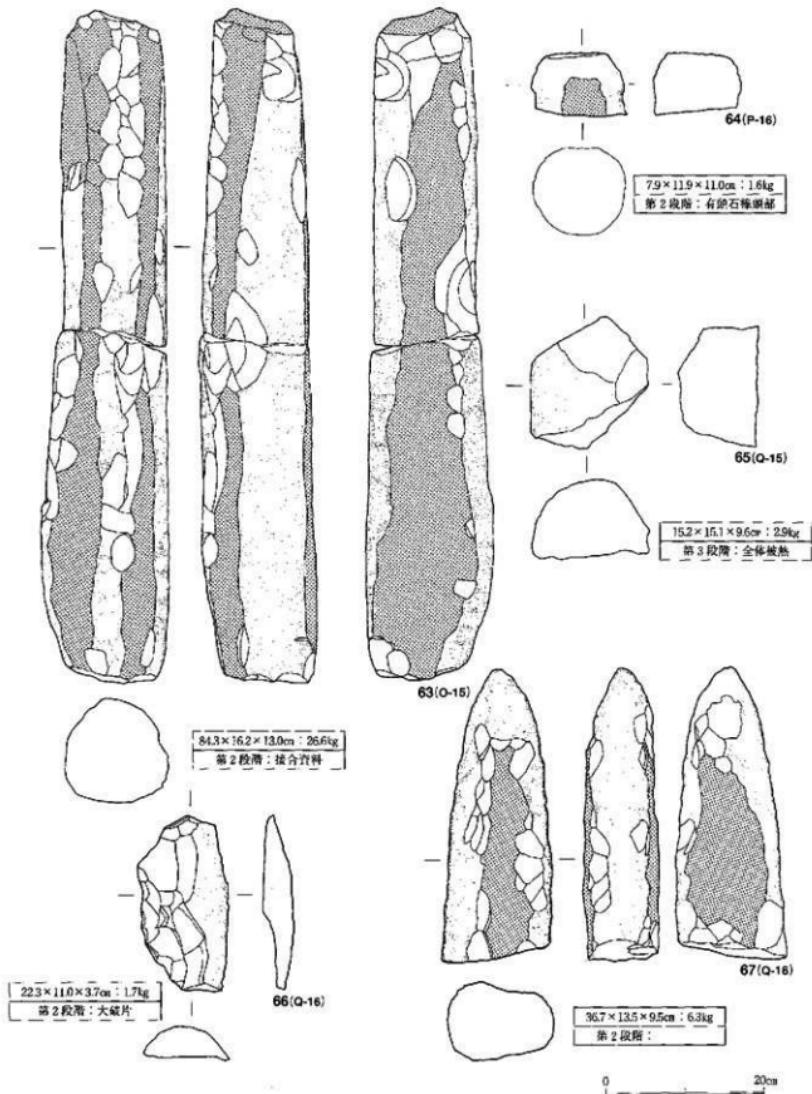
第51図 石棒実測図 (No.48~51)



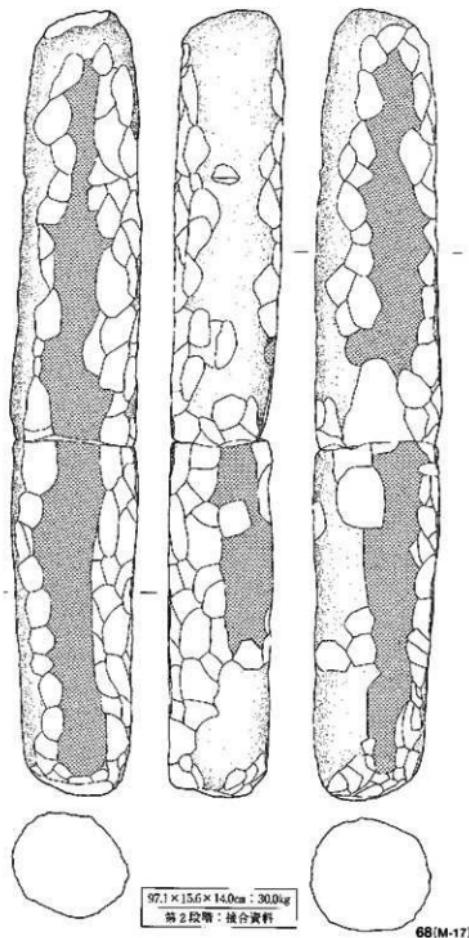
第52図 石棒実測図 (No.52~58)



第53図 石棒実測図 (No.59~62)

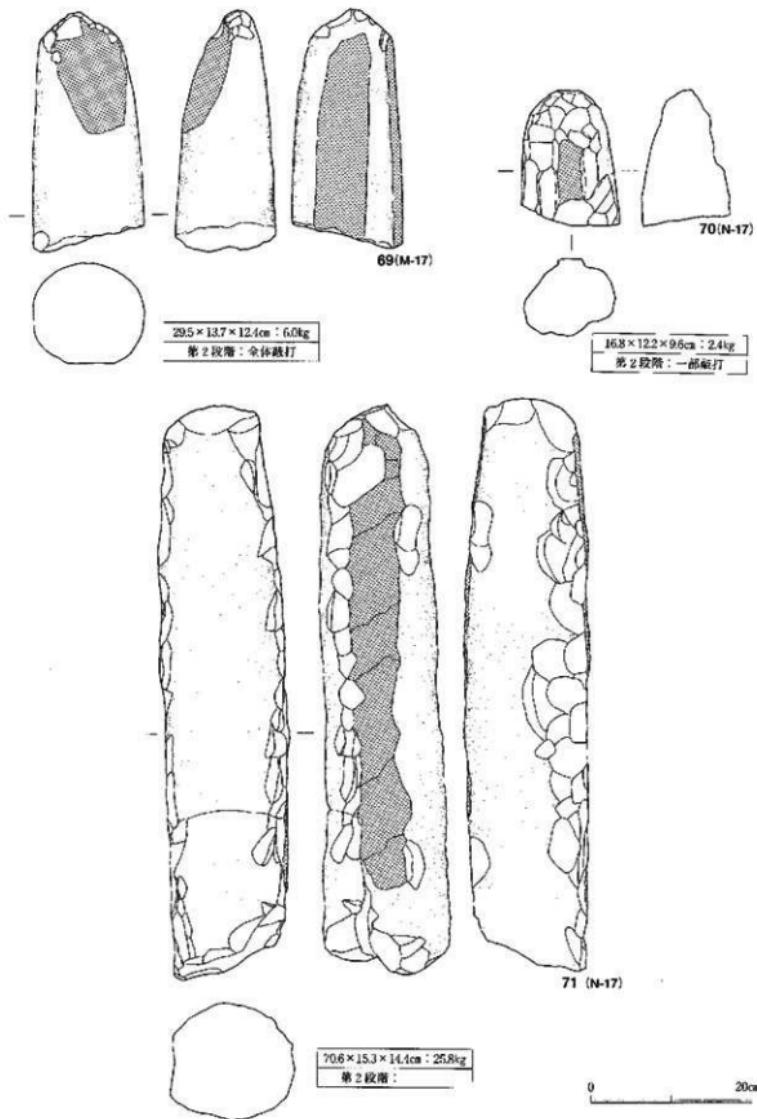


第54図 石棒実測図 (No.63~67)

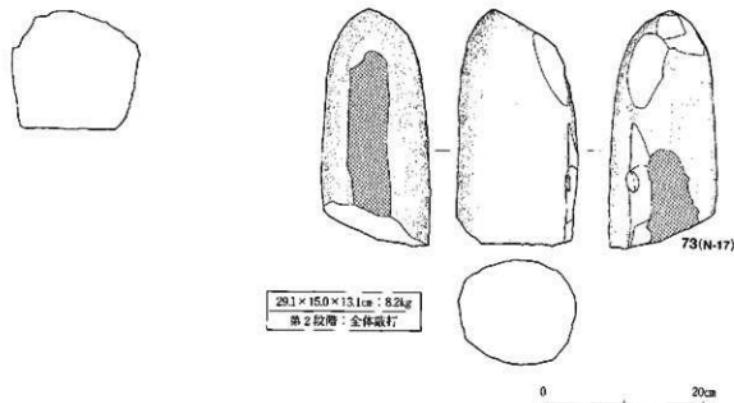
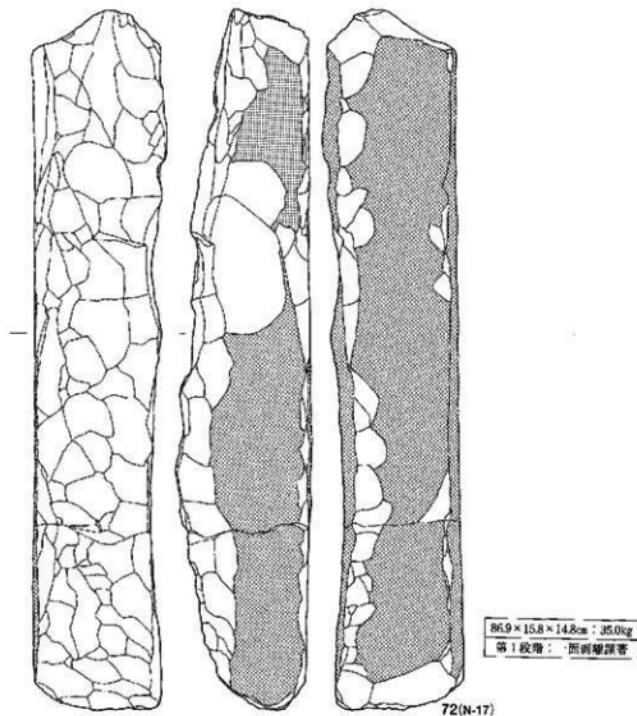


0 20cm

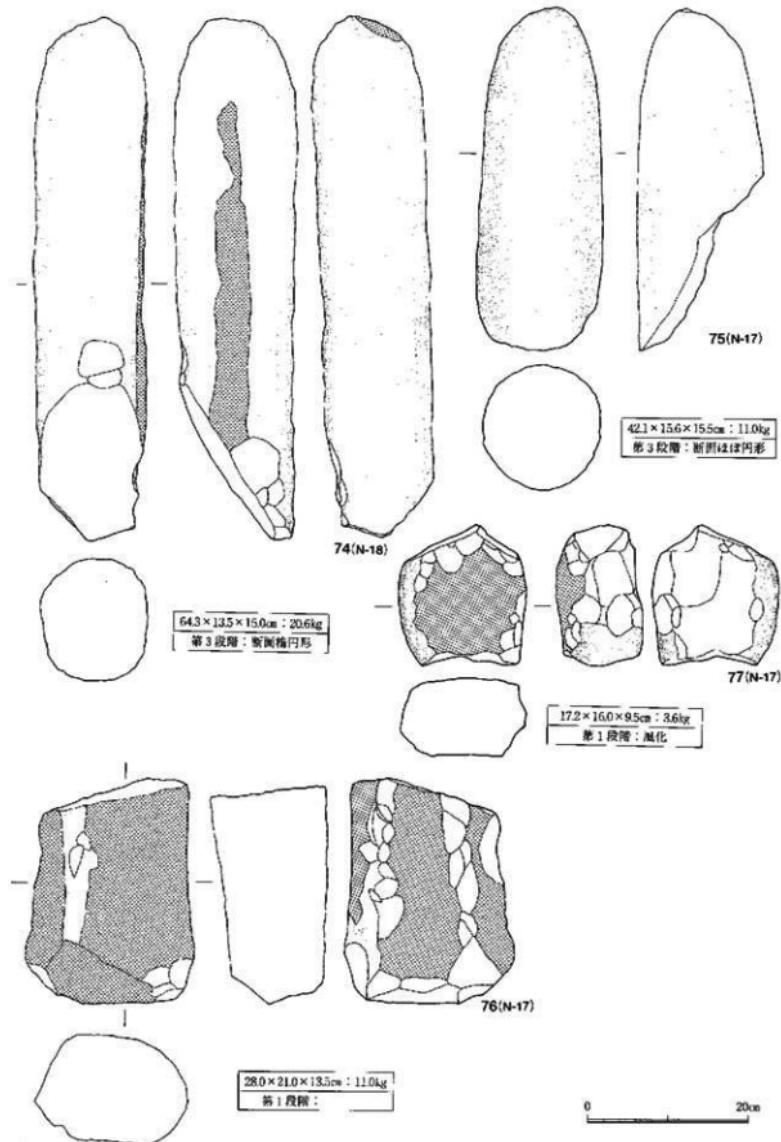
第55図 石棒実測図 (No.68)



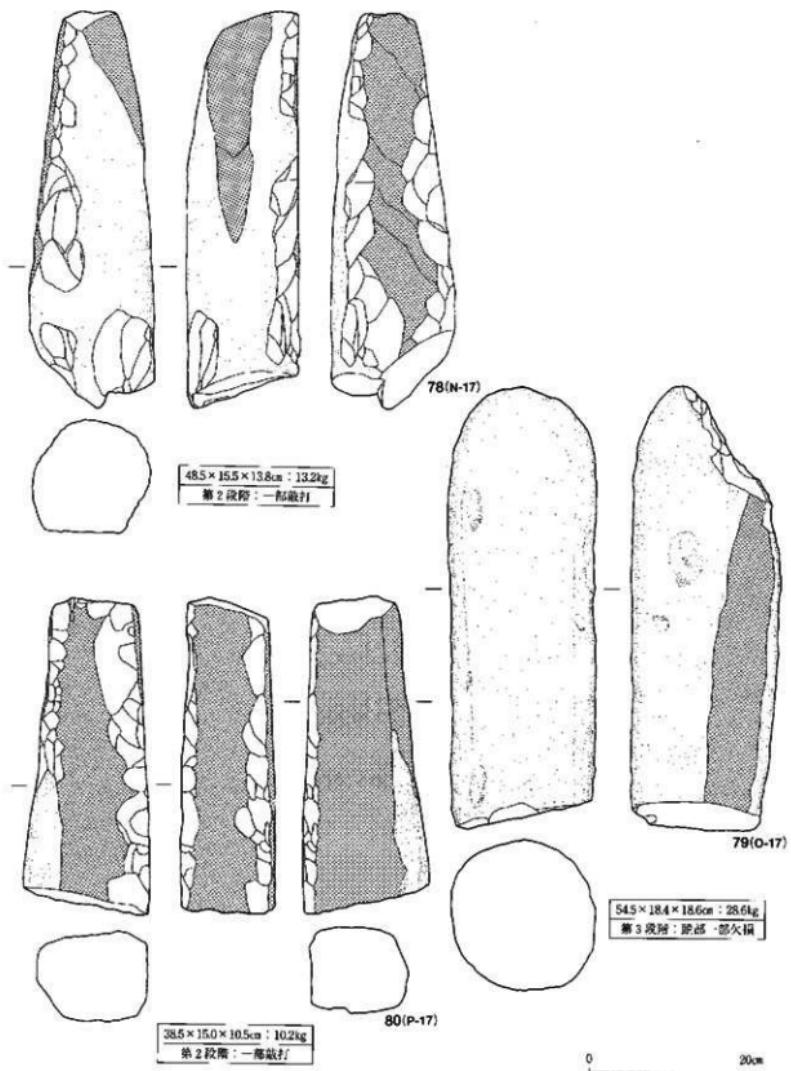
第56図 石棒実測図 (No.69~71)



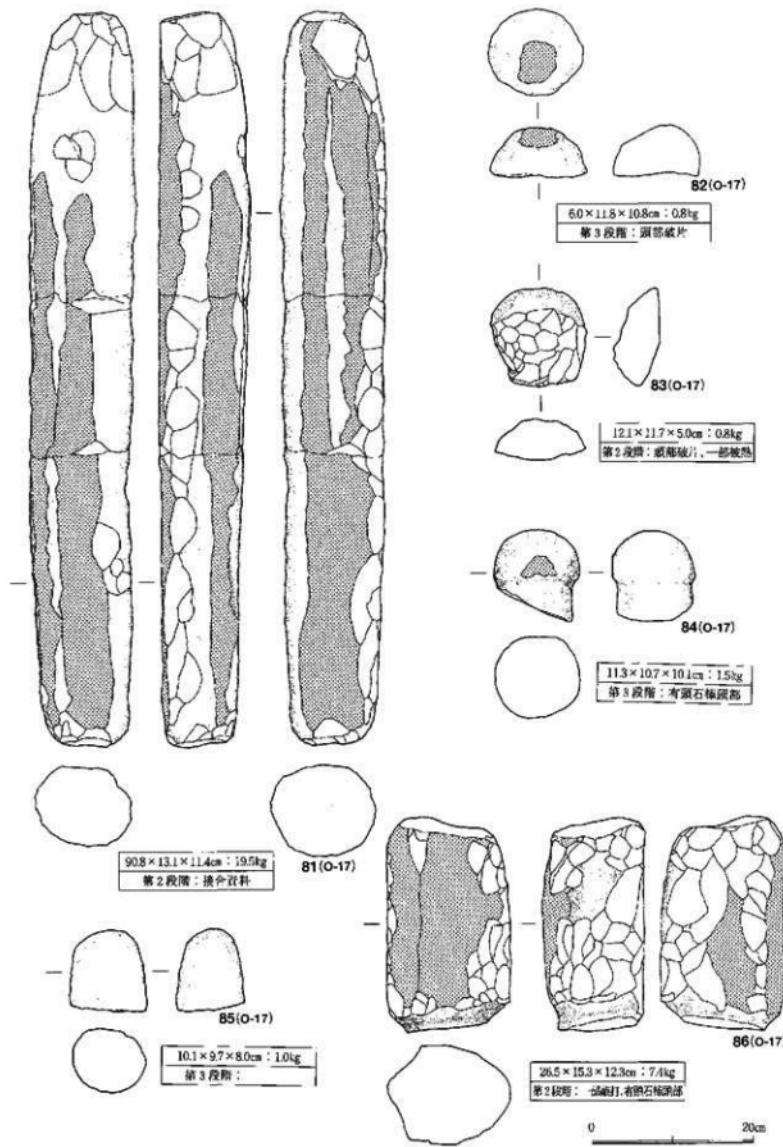
第57図 石棒実測図 (No.72・73)



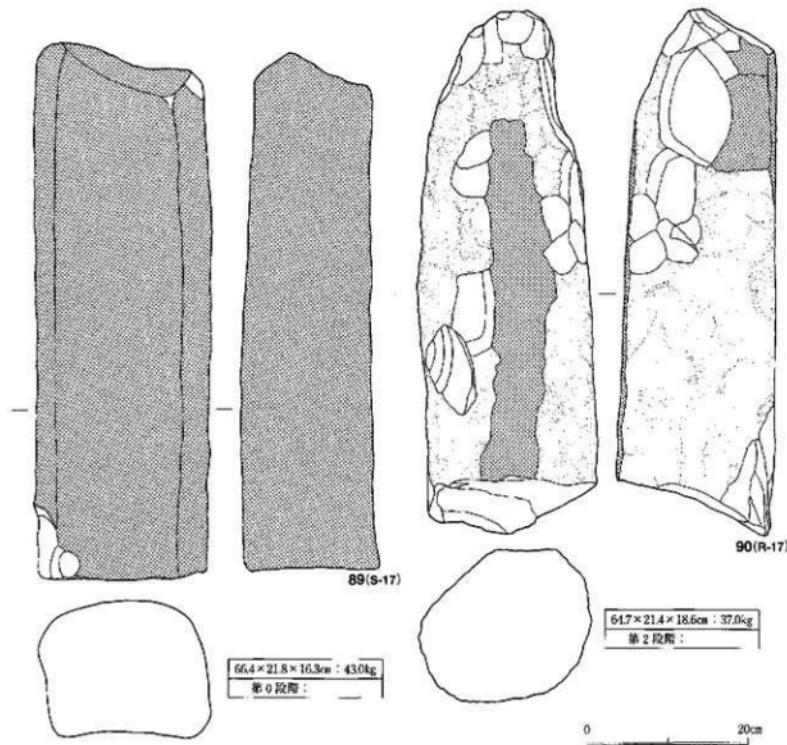
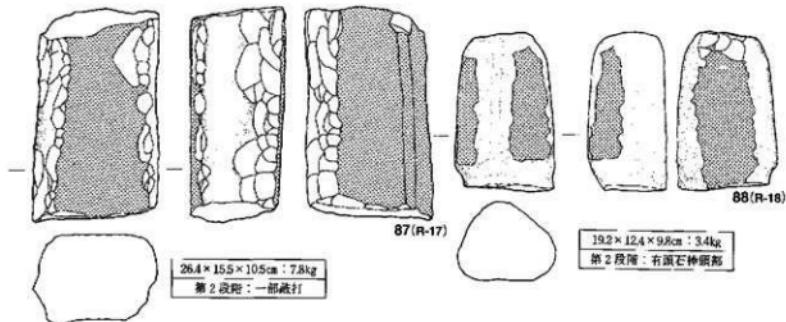
第58図 石棒実測図 (No.74~77)



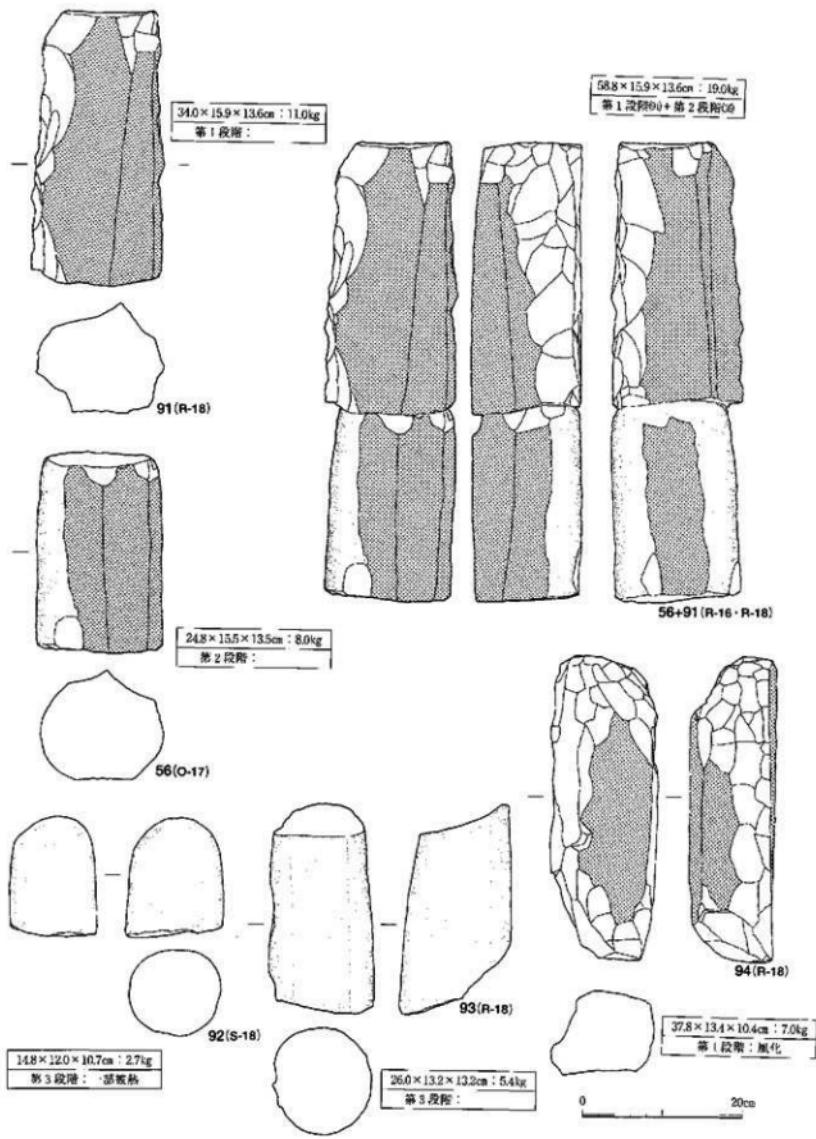
第59図 石棒実測図 (No.78~80)



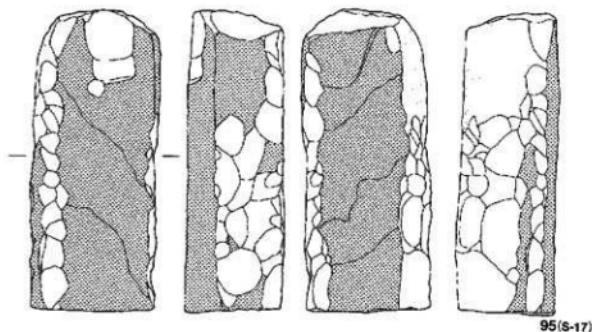
第60図 石棒実測図 (No.81~86)



第61図 石棒実測図 (No.87~90)



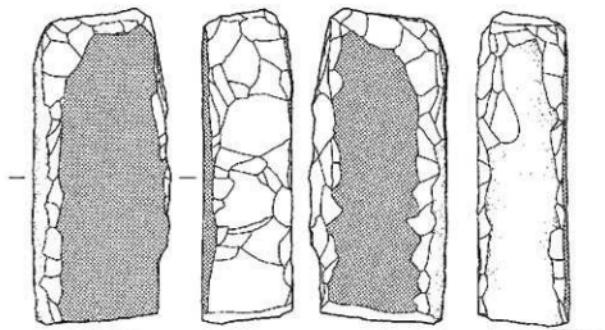
第62図 石棒実測図 (No.92~94・56+91)



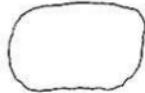
95(S-17)



37.3×15.6×11.4cm : 12.0kg  
第1段階：一部敲打か？



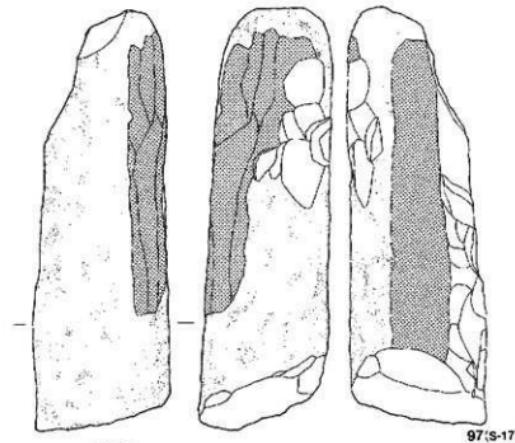
96(S-17)



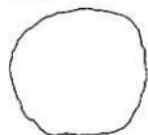
38.0×17.2×10.6cm : 13.2kg  
第2段階：一側面のみ敲打

0 20cm

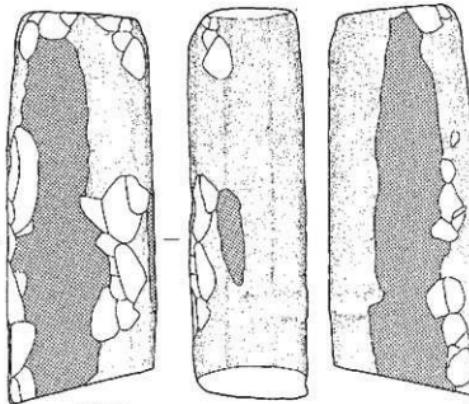
第63図 石棒実測図 (No.95・96)



97(S-17)



52.3×17.2×15.7cm : 20.4kg  
第2段階：



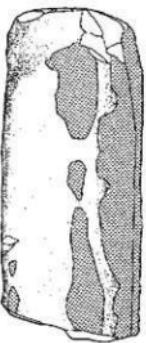
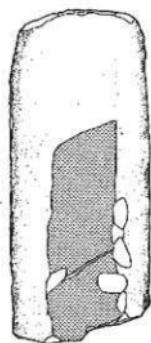
98(S-17)



49.1×18.5×13.8cm : 21.6kg  
第2段階：下部に縫らみを持つ

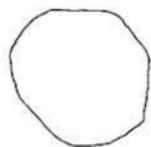
0 20cm

第64図 石棒実測図 (No.97・98)



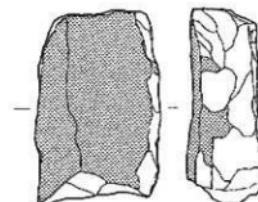
99(M-16)

41.0×17.2×16.8cm : 20.2kg  
第2段階：全体概形



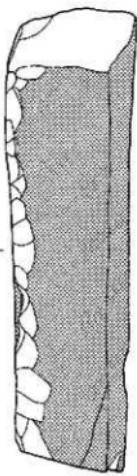
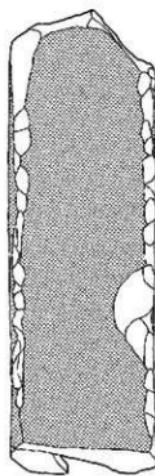
100(S-16)

9.3×10.6×6.8cm : 1.2kg  
第3段階：有頭石棒頭部

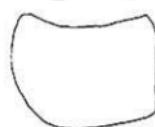


101(S-16)

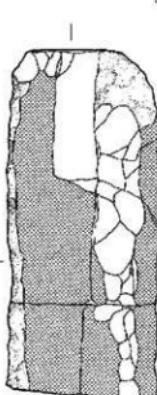
23.8×15.4×8.2cm : 4.7kg  
第1段階：



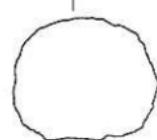
102(Q-13)



57.8×18.4×14.2cm : 26.0kg  
第1段階：角面のみ剥離



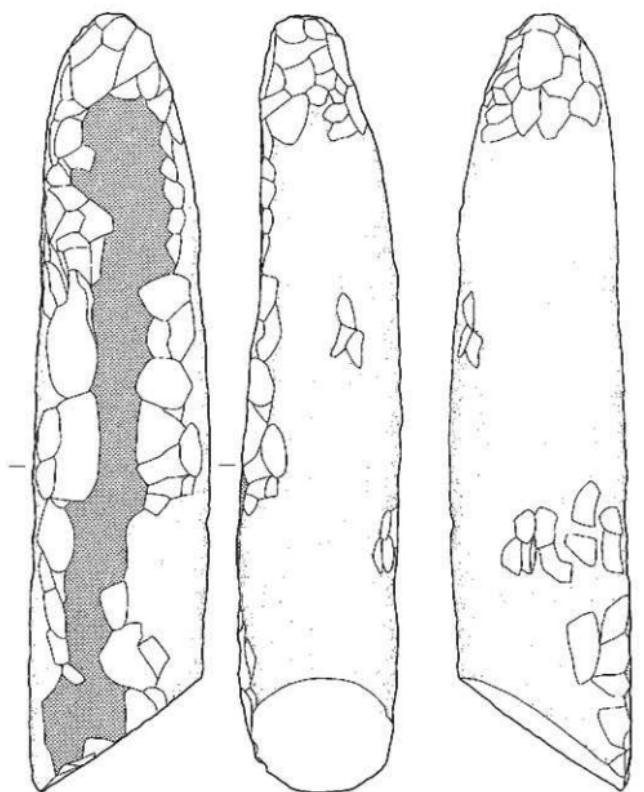
103(S-14)



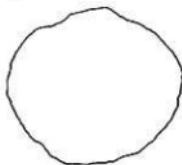
43.3×19.2×15.0cm : 21.5kg  
第2段階：

0 20cm

第65図 石棒実測図 (No.99~103)



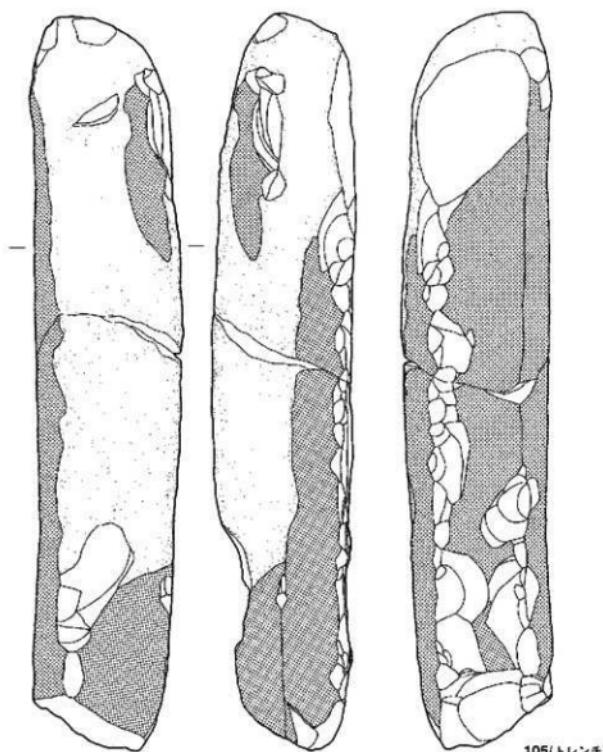
104(トレチ)



95.5×21.8×19.2cm : 53.0kg
第2段階 :

0 20cm

第66図 石棒実測図 (No.104)

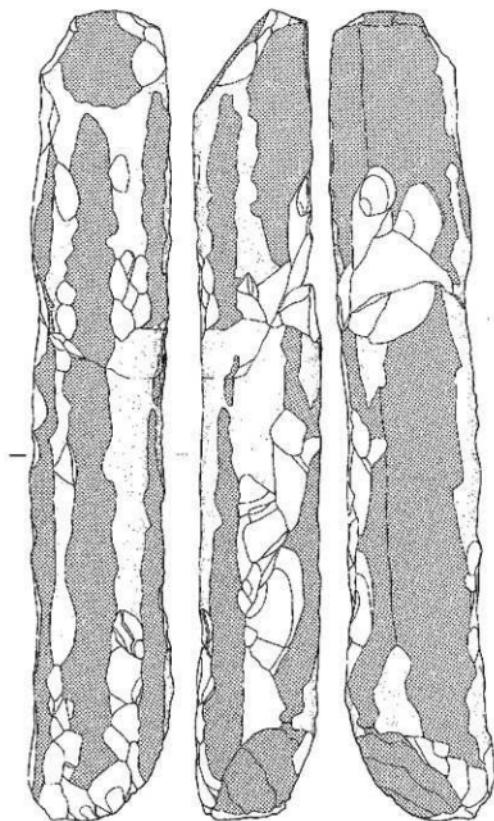


105(トレンチ)

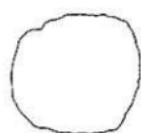
90.0×18.0×16.5cm : 42.0kg
第2段階：接合資料

0 20cm

第67図 石棒実測図 (No.105)



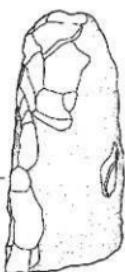
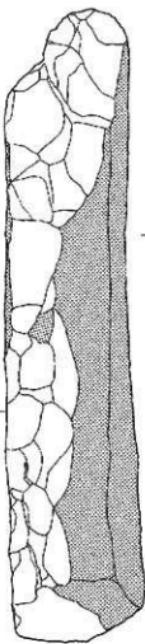
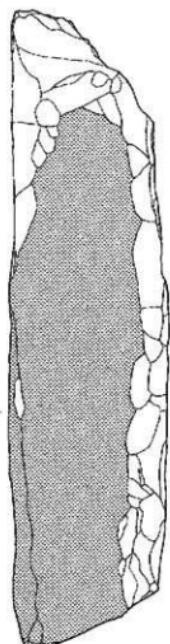
106(トレンチ)



100.0 × 17.5 × 14.8cm : 43.0kg  
墨2段階：接合資料

0 20cm

第68図 石棒実測図 (No.106)



108(トレンチ)



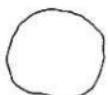
325×144×127cm : 85kg  
第2段階:



79.6×20.0×15.7cm : 41.0kg  
第1段階:



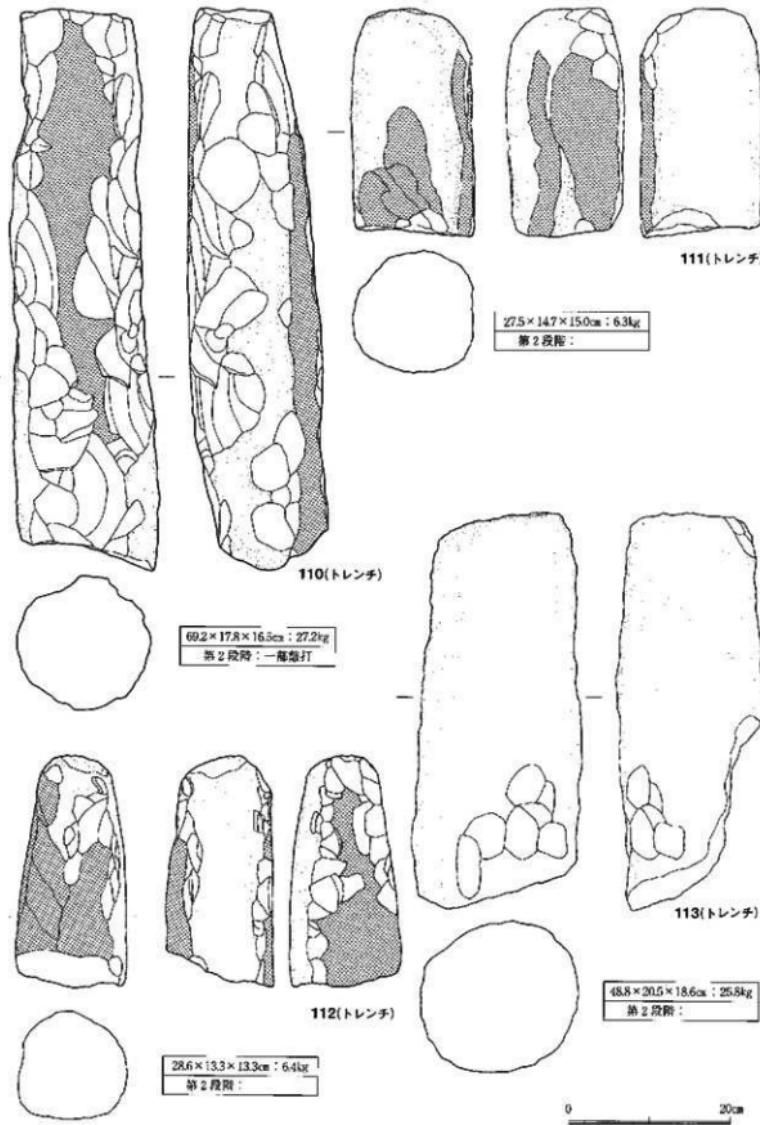
109(トレンチ)



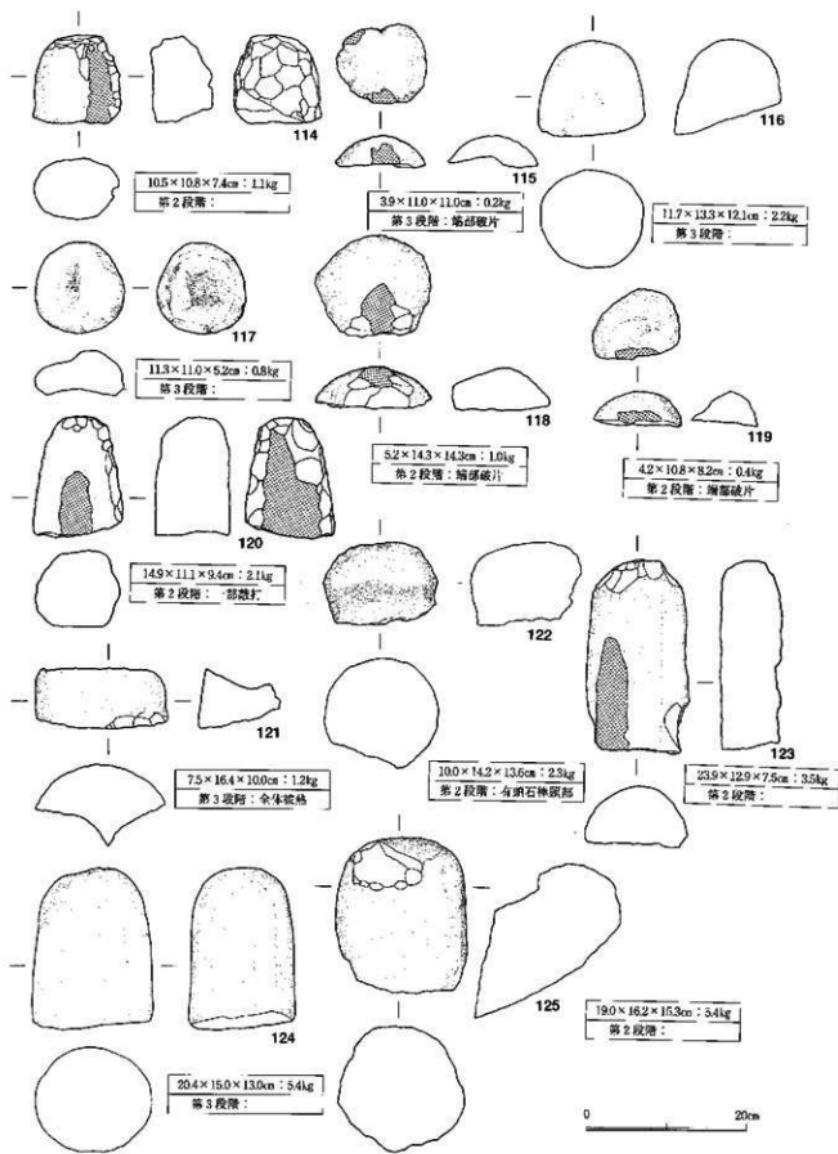
435×128×109cm : 9.2kg  
第2段階: 一部被熱

0 20cm

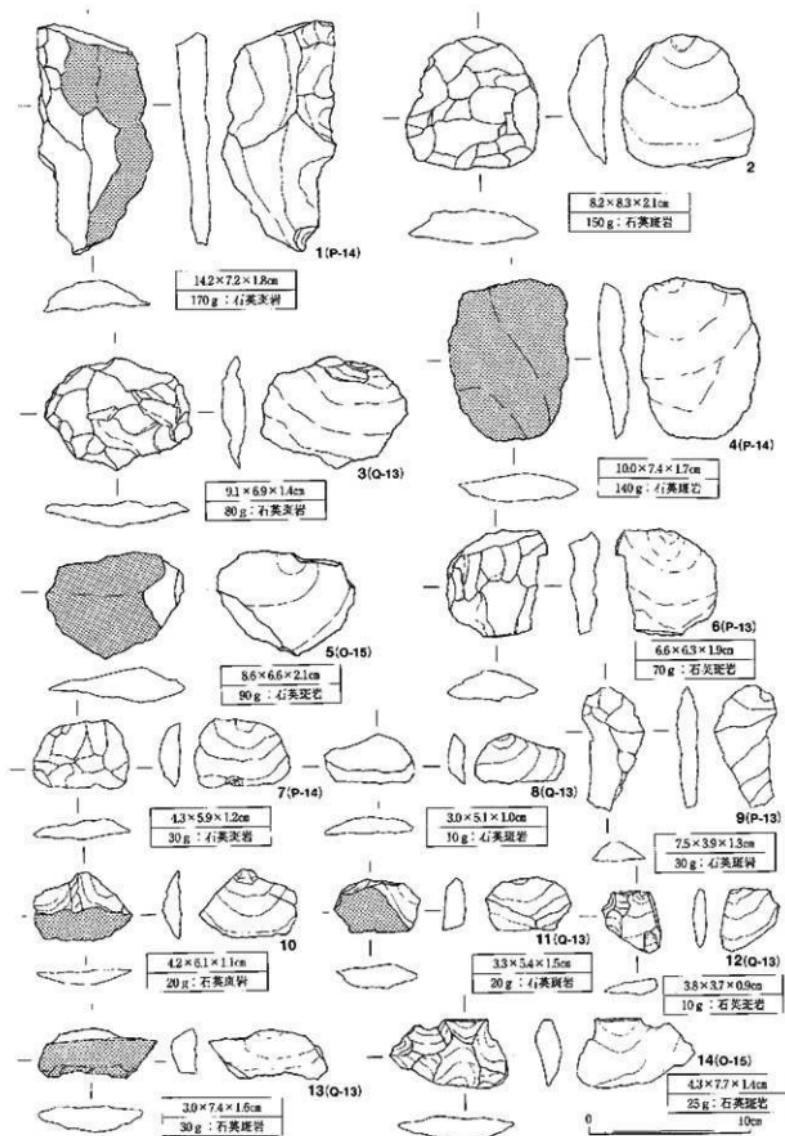
第69図 石棒実測図 (No.107~109)



第70図 石棒実測図 (No.110~113)



第71図 石棒実測図 (No.114~125)



第72図 石棒破片・剥片実測図

#### 石棒破片・剥片（第72図、図版43）

石棒の破片及び剥片としたものは、製作段階における剥離剥片と欠損した破片である。工房跡からは必然的に出土するものであるが、量的には非常に少量であった。1・4・5・10・11・13は表面に自然面を残している。大形の1は裏面に重複する剥離痕を有し、石棒破片の可能性がある。2～14については裏面に明瞭な打点が観察されるものが多く、いずれも第1段階の剥離剥片もしくは破損破片と考えられる。

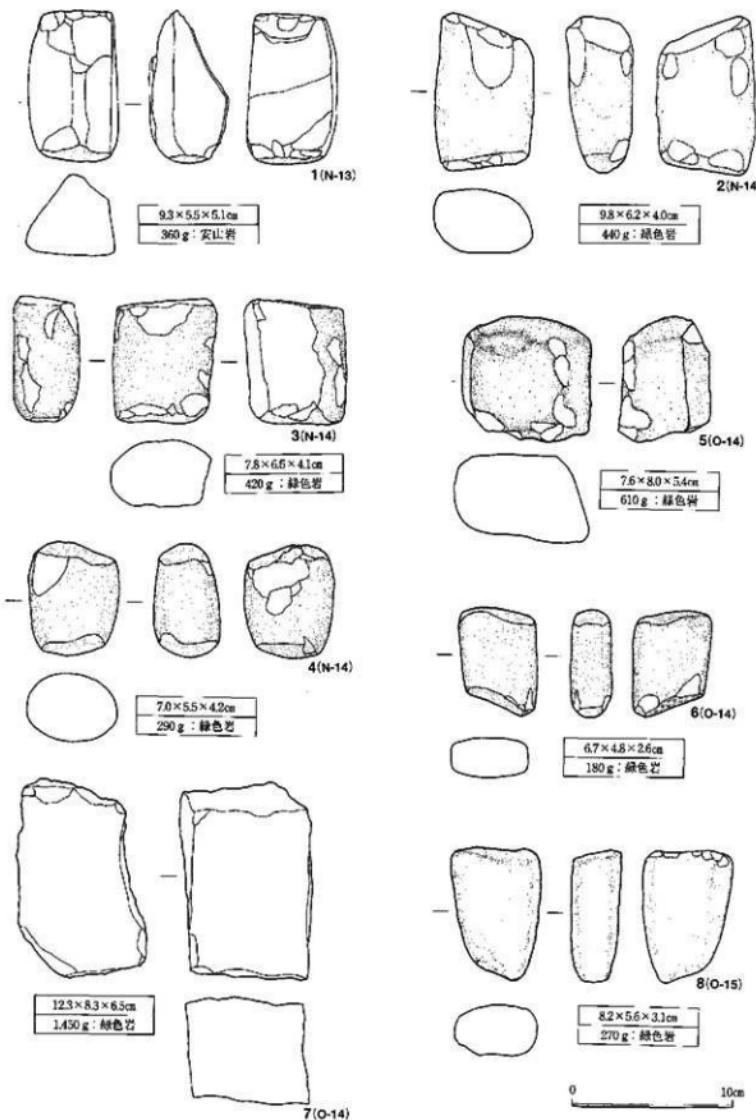
#### 敲き石（第73～75図、図版19・45・46）

敲き石は石棒同様調査区内に散在して出土し、南集石端部部分の石棒集中地点と、中央集石端部に位置する1号裡設土器付近の石棒集中地点に、比較的集中して出土している。

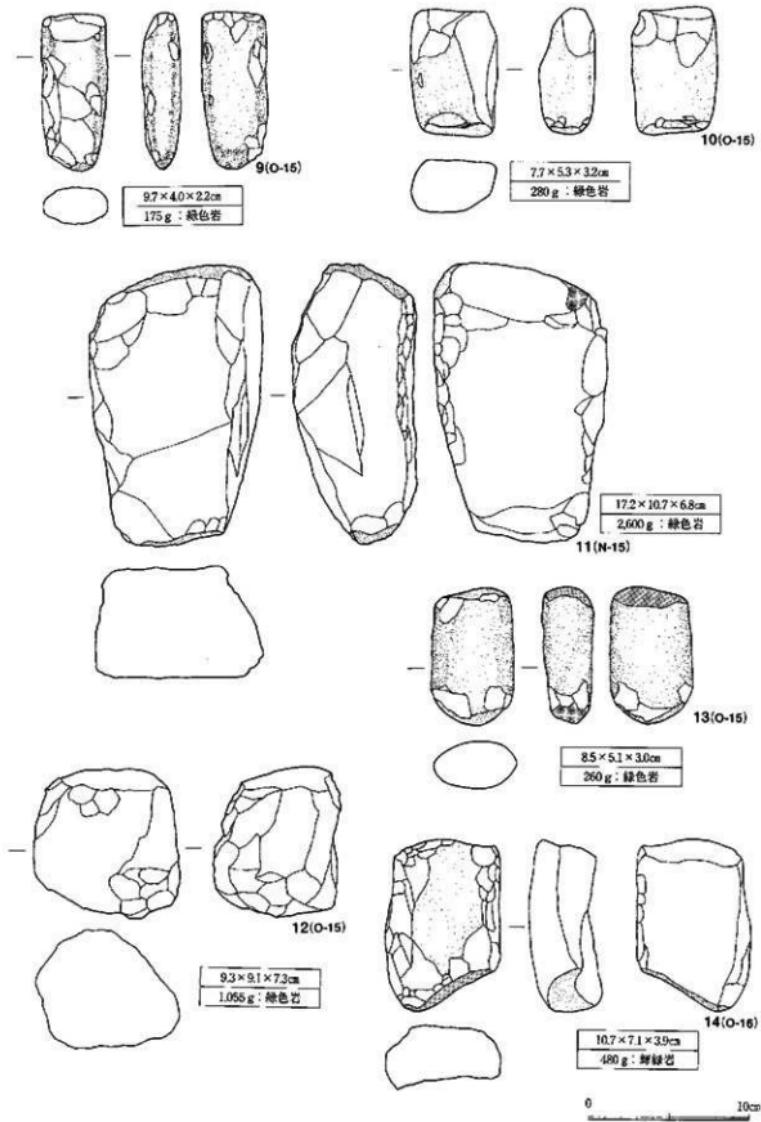
出土した敲き石は総数24点を数え、敲き石の破片と考えられるものも出土している。本遺跡の敲き石は、石棒製作専用の工具として使用された敲打石もしくは敲磨石といえるものであり、大半に敲打による顕著な使用痕が観察されている。石材は圧倒的に緑色岩を使用し、輝緑岩・硬質砂岩・安山岩が僅かに見られる。主体となる緑色岩は淡緑色～緑色を呈し、質量がある硬質な石材で、原产地は鏡川水系と考えられる。輝緑岩を含む緑色岩類は鏡川水系において磨製石斧の原材料として使用され、本遺跡でも磨製石斧から敲き石へ転用したものが日立って出土している。磨製石斧転用の敲き石は24点の内、6・8・9・16・18・19・23で、2・4・13も磨製石斧転用の可能性が高い。又、7の人形緑色岩は敲き石の原材料と思われ、原石の状態で持ち込まれたと考えられる。

1は安山岩製で下端部に使用痕を有し、側面・裏面には擦痕が観察される。2は緑色岩製で上端部を欠損し、下端部に明瞭な使用痕を有している。3は緑色岩製で下端部に明瞭な使用痕を有している。4は緑色岩製で上下端部に明瞭な使用痕を有し、断面形が橢円形を呈して石器表面は光沢を帯びている。5は緑色岩製で側面に使用痕を有している。6は緑色岩製で上下端部に明瞭な使用痕を有し、石器表面は光沢を帯びている。7は大形の緑色岩で明瞭な使用痕は見られず、側面に僅かな擦痕が観察されている。8は緑色岩製で上下端部に僅かな使用痕が観察される。9は緑色岩製の細身の磨製石斧転用品で、下端部に使用痕が観察される。10は緑色岩製で下端部に明瞭な使用痕が観察される。11は大形の緑色岩製で上下端部に使用痕が観察される。12は緑色岩製で側面に使用痕・擦痕が観察される。13は緑色岩製で上下端部に明瞭な使用痕が観察される。14は輝緑岩製で上端部を欠損し、下端部に明瞭な使用痕が観察される。15は緑色岩製で下端部に使用による剥離が見られる。16は緑色岩製で上端部を欠損し、下端部に明瞭な使用痕が観察される。17は緑色岩製で下端部に明瞭な使用痕が観察される。18・19は緑色岩製で上端部を欠損し、下端部に明瞭な使用痕が観察される。20は硬質砂岩製で下端部に明瞭な使用痕が観察される。21・22は緑色岩製で下端部に明瞭な使用痕が観察される。23は緑色岩製の磨製石斧を転用し、下端の刃部を敲打に使用している。24は安山岩製で下端部に僅かな使用痕が見られる。

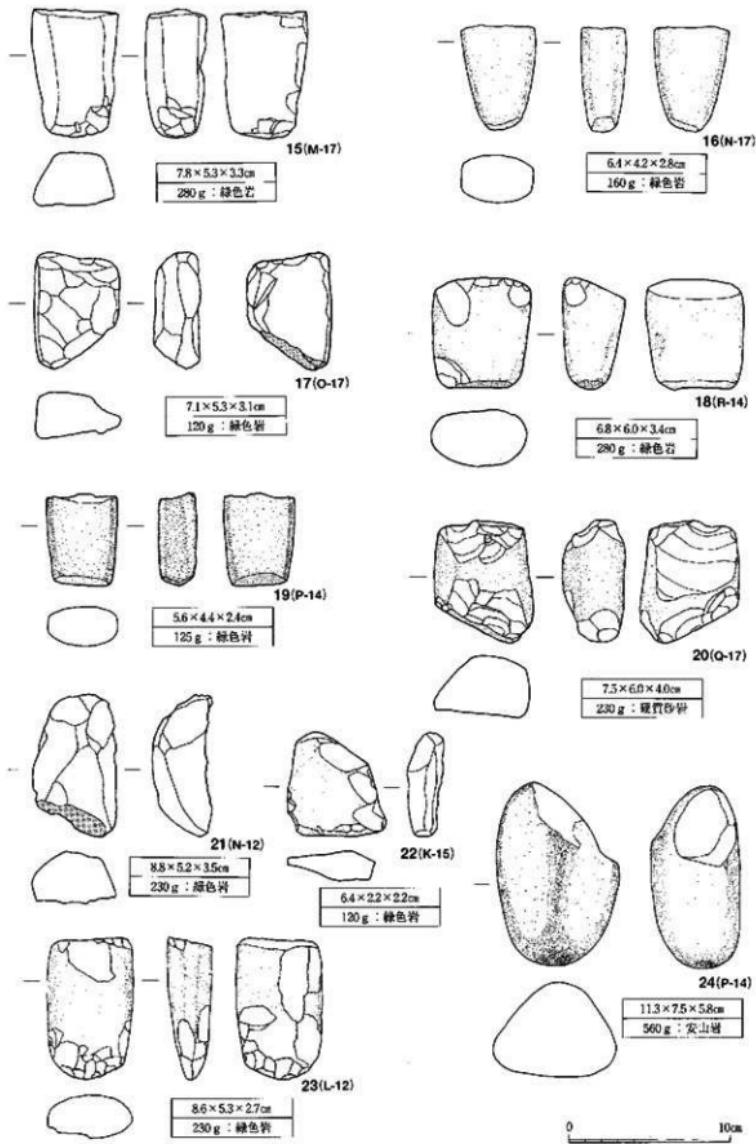
出土した敲き石は、大形（7・11・12・14・24）、小形（1～6・8・10・13・15～21）、小形・細身（9・22・23）の3種類に大別される。大形のものは第1段階の大剥離に使用し、小形のものは第2～3段階の敲打を主として、第1段階の剥離にも使用したと考えられる。小形・細身のものは細部の細かい敲打、有頭石棒の挟み部分等の敲打・成形に使用された可能性が高い。



第73図 敲き石実測図1



第74図 鋸き石実測図2



第75図 敲き石実測図 3

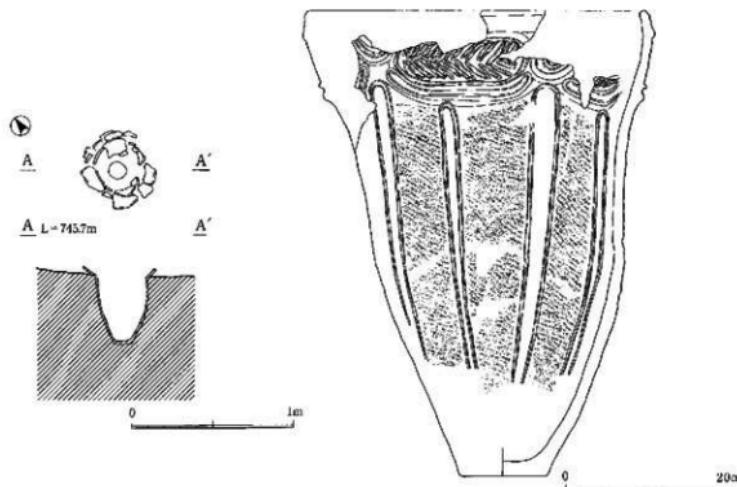
## 土 器

本遺跡から出土した土器は、屋外埋設土器1基を含む中期末の加曾利E3式・曾利系を主体とし、中期初頭五領ヶ台式と、若干量の早期条痕文系、前期间山式、黒浜式、諸鏡a式、中期阿玉台式土器片が出土している。この内、1号埋設土器の時期である加曾利E3式及び併行する曾利系の土器片が調査区全体に散在して出土しており、石棒工房に伴う時期の遺物とはほぼ断定できる状況であった。尚、出土量の比較的多い五領ヶ台式土器片は、調査区東側の比較的平坦なO-13・P-13グリッド付近からの出土が目立っていたが、明確な遺構は検出されなかった。

### 1号埋設土器（第76図、図版47）

1基のみ検出された1号埋設土器は、調査区中央部N-15グリッド東端、石棒・嵌き石の集中する地点に位置する。正位に埋設された深鉢で、底部穿孔は無く、土器内からの出土遺物も無い。本埋設土器はその設置状況から水堀としての機能を考えられ、石棒製作における水の使用が予想される遺構であるとともに、石棒製作の時期を決定する遺構と捉えられる。

土器は全高57.0cm、口径40.5cm、底径11.0cmを測る深鉢で、器形はキャリバー形を呈している。文様は口縁部に隆帯と沈線による楕円区画文、区画内には短沈線が施文される。胴部は継位の単節網文が施文され、逆U字状沈線で区画された磨り消し懸垂文が垂下している。色調は褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。焼成は良好である。時期は加曾利E3式。



第76図 1号埋設土器

グリッド出土土器（第77～83図、図版19・47～53）

グリッド出土の上器は以下の7群に大別して報告する。

第1群土器 早期後半条痕文系

第2群土器 前期前半開山式

第3群上器 前期中葉黒浜式

第4群土器 前期後半諸磯a式

第5群土器 中期初頭五領ヶ台式

第6群上器 中期前半五領ヶ台式直後～阿玉台式

第7群土器 中期末葉加曾利E3式・曾利系

第1群 条痕文系土器（1）

1点のみ出土している。胴部の破片で内外面条痕、外面に細沈線が施文される。胎土に纖維を多く含む。色調黒色、焼成は良好。

第2群 開山式土器（2）

1点のみ出土している。胴部の破片で多段のループ文が施文される。胎土に纖維を含み、色調灰褐色、焼成はやや不良。

第3群 黒浜式土器（3・4）

出土した2点を図示した。2点ともに胴部の破片で単節縄文が施文されている。胎土には多量の纖維を含み、色調黒色、焼成はやや不良。

第4群 諸磯a式土器（5～9）

出土した5点を図示した。柳齒状施文具による波状沈線・横位沈線と、円形刺突文で文様が構成される。5・6は色調淡黄色、7～9は褐色、いずれも胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。

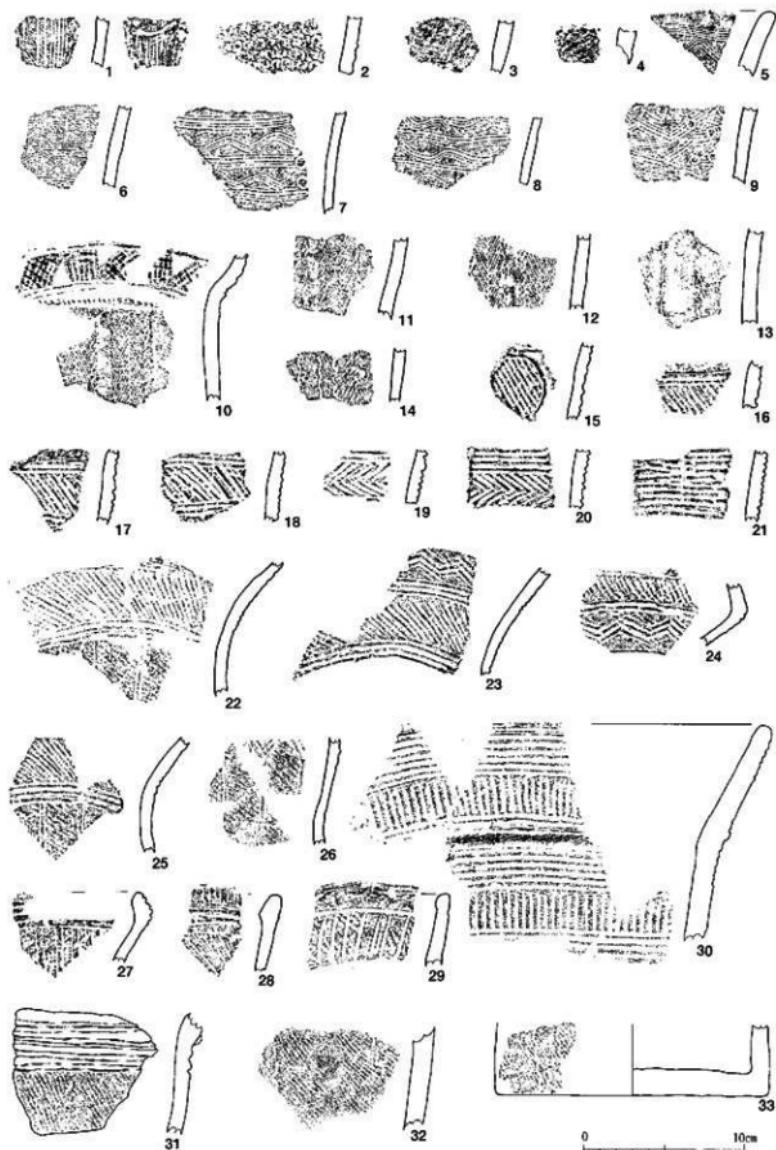
第5群 五領ヶ台式土器（10～85）

本群土器は比較的出土量が多く、調査区東側のグリッド付近に集中して出土しているが、明確な遺構は検出されていない。出土した土器の内、図示可能な76点を掲載した。

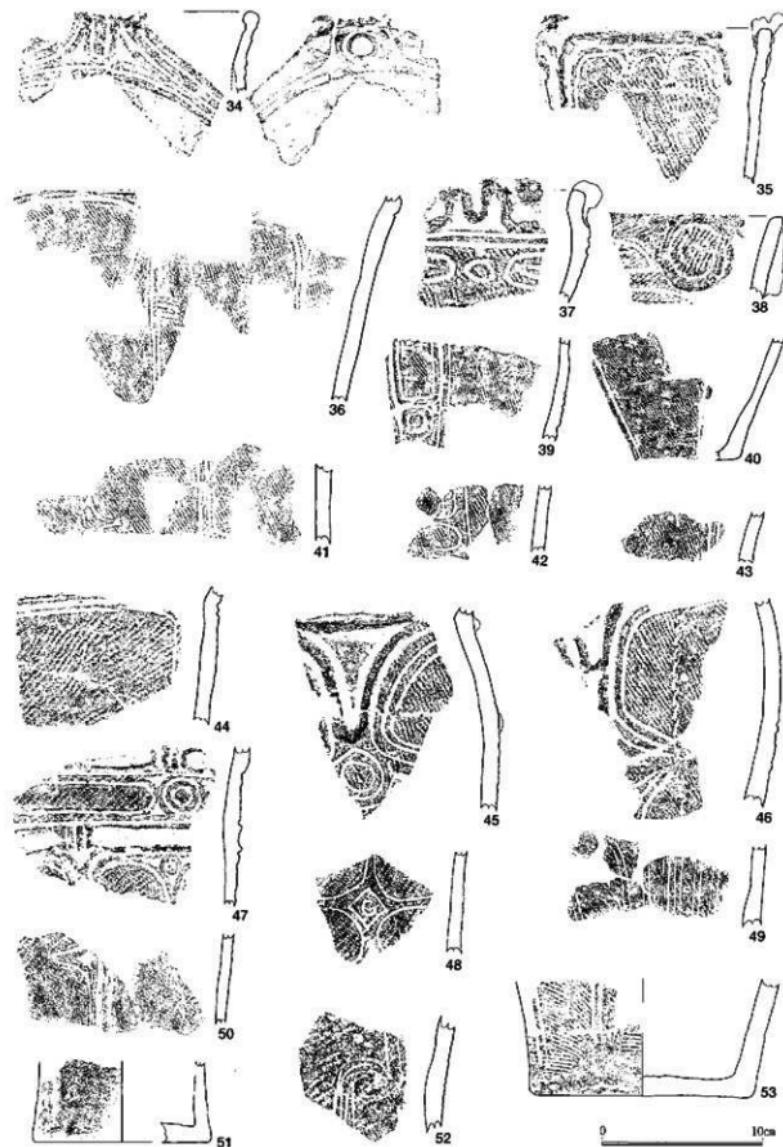
10は口縁部に集合沈線文と直行する浮線文が施され、三角印刻文が施文される。胴部との境には結節浮線が施され、胴部には綴位結節縄文が施文される。十三苦提式の範疇に入る可能性もある。11～14は胴部で綴位の結節縄文が施文される。15～30は口縁部に集合沈線文で文様が構成され、胴部には縄文が施文される。31・32・33は綴位の結節縄文が施文される。34～53は地文に縄文・綴位結節縄文が施文され、沈線と隆帯で文様が構成される。54は口縁部に短沈線と三角印刻文が施され、胴部は沈線で文様が構成される。55～59は沈線で文様が構成される。60～69は隆帯と沈線で文様が構成され、交互刺突文が施文されている。隆帯上には縄文が施文されるものが多い。70～74は浅鉢の口縁部で71～74は内面に竹管状工具による押し引き文が施文され、71・72は交互刺突文も施文される。75は口縁部の破片で肥厚する口縁部に単節縄文が施文される。76は単節縄文と沈線で文様が構成される。77～83は縄文のみ施文された胴部片である。

第6群 五領ヶ台式直後～阿玉台式（86～102）

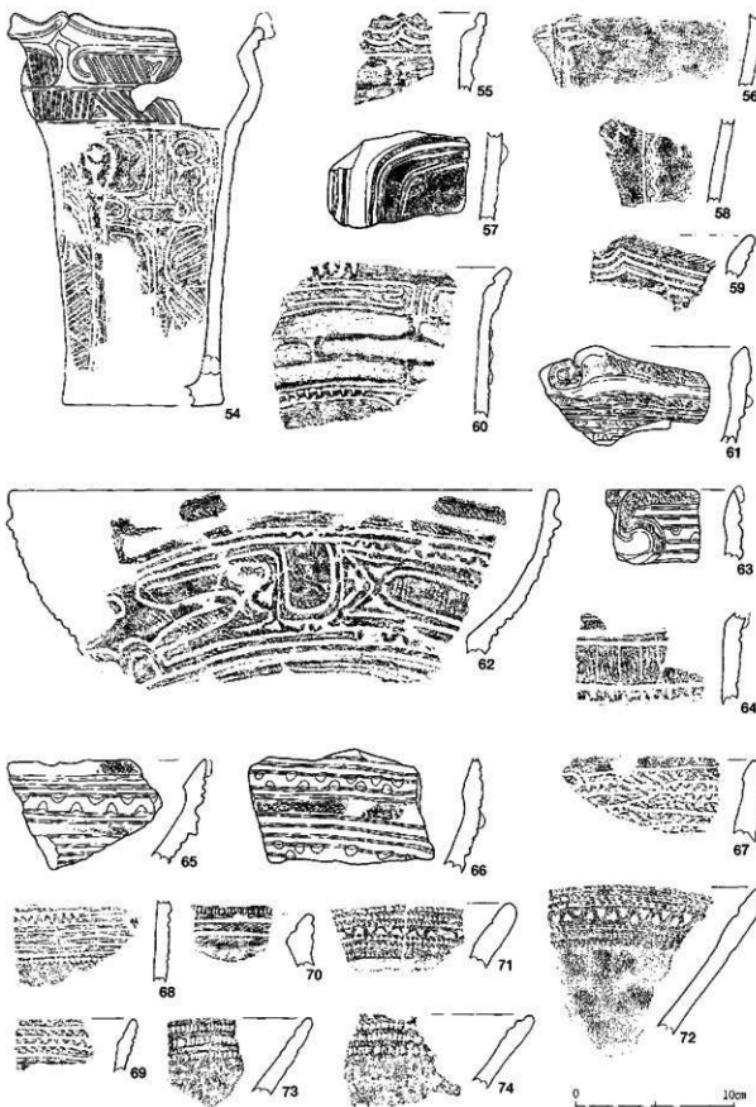
五領ヶ台式直後及び阿玉台1～2式の資料と胎土・文様等から該期と思われるものを図示した。86～99は祐節沈線文・角押文が施文され、胎土に多量の砂粒・石英粒・雲母片を含む。85～92は地文に縄文が施文されている。100～102は該期の所産と考えられる口縁部片である。



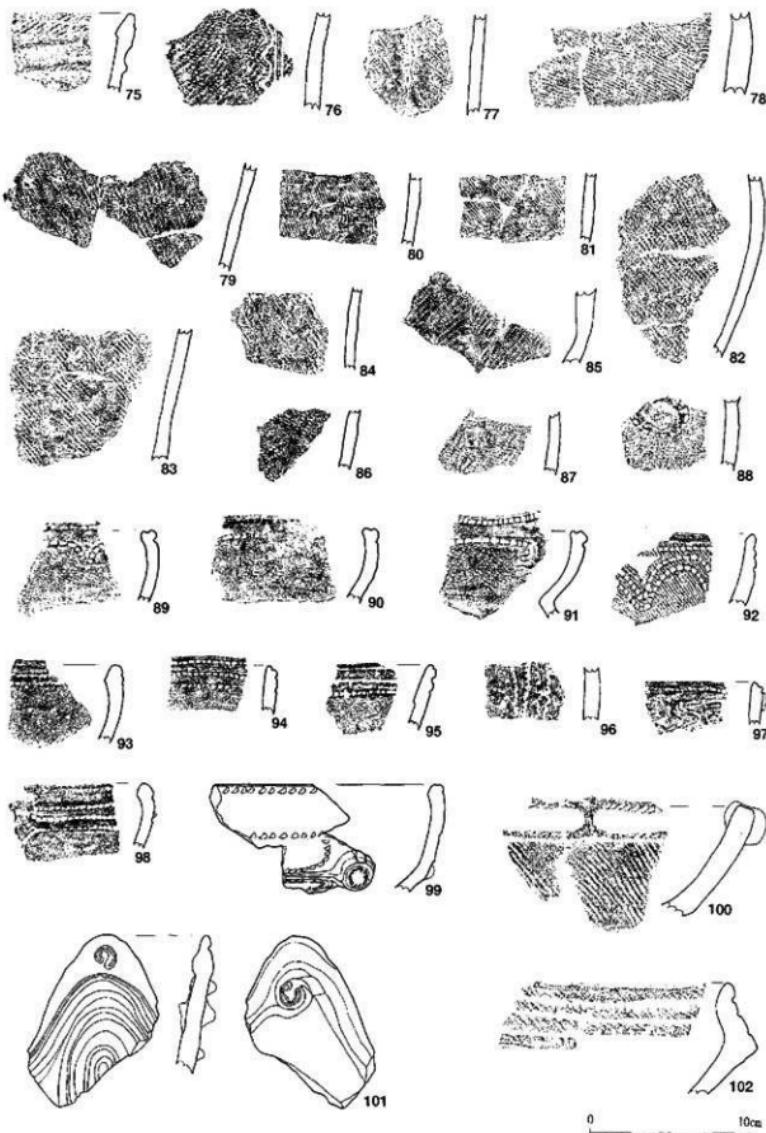
第77図 グリッド出土土器1



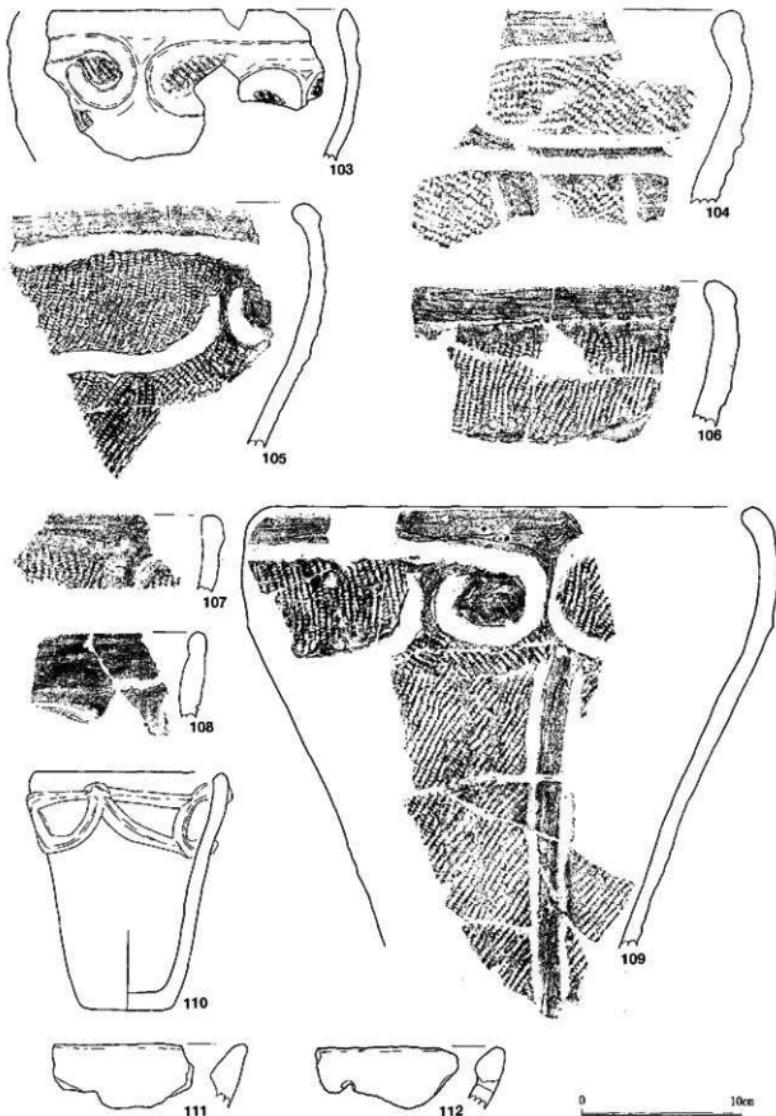
第78図 グリッド出土土器2



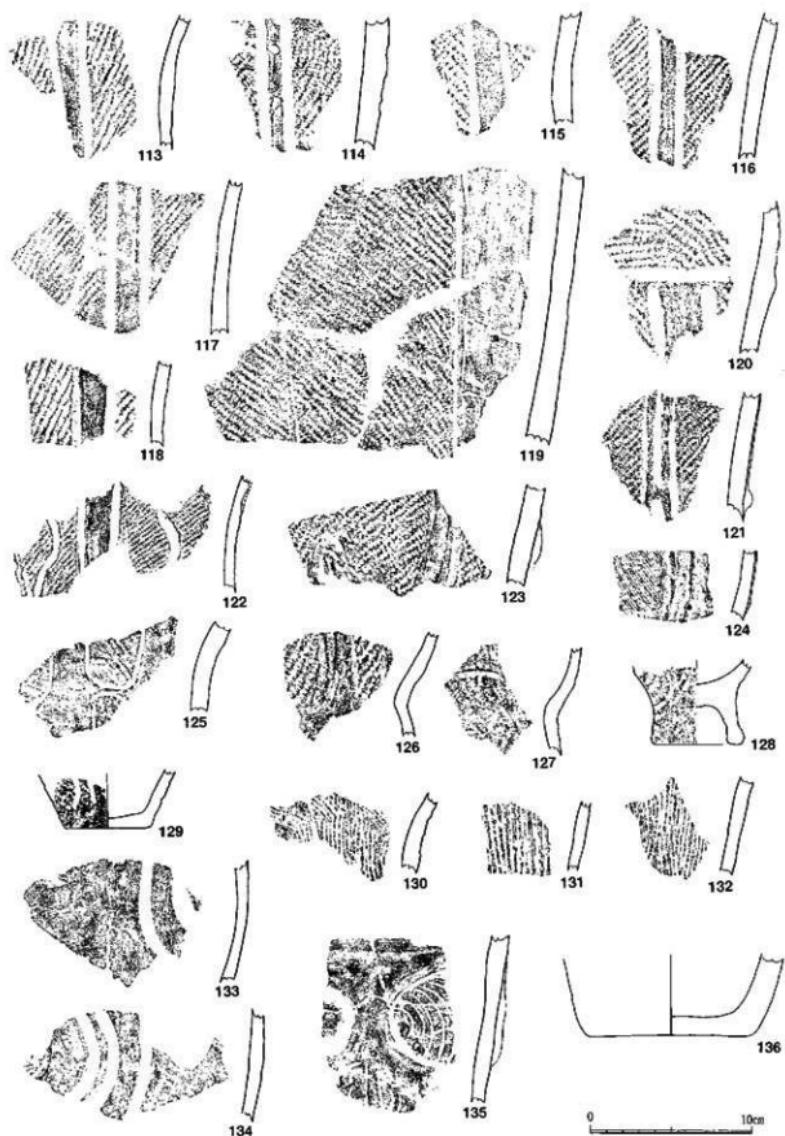
第79図 グリッド出土土器3



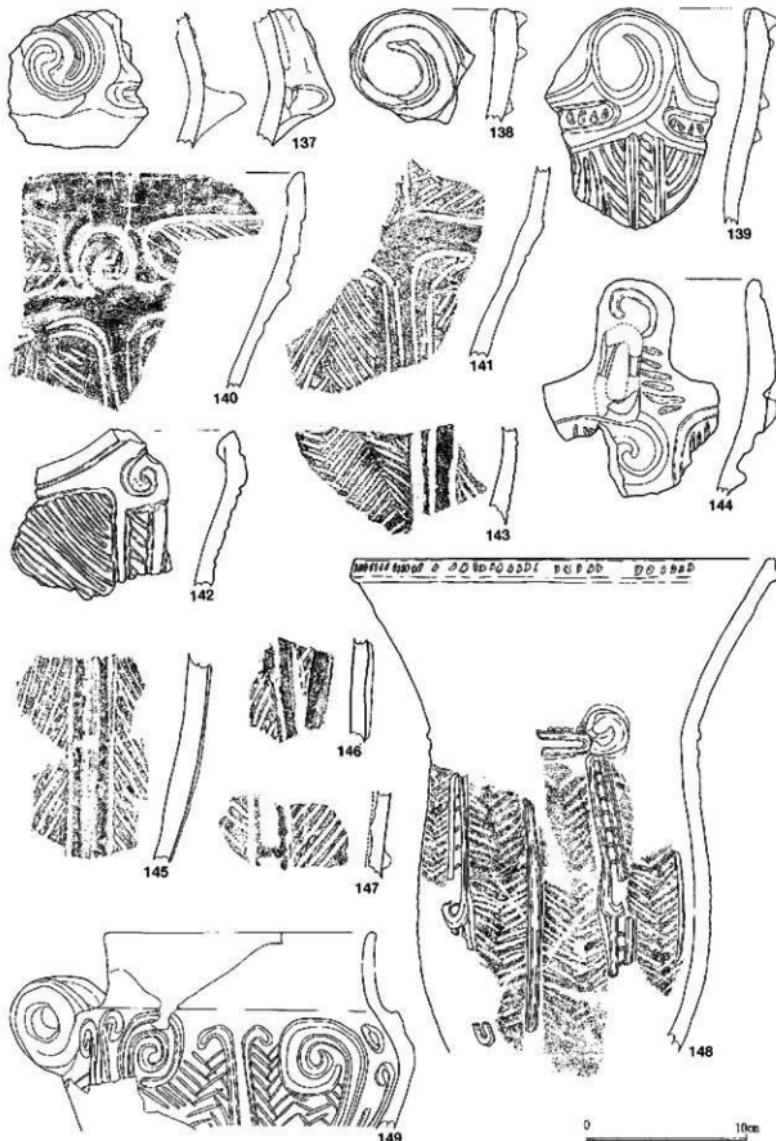
第80図 グリッド出土土器4



第81図 グリッド出土土器 5



第82図 グリッド出土土器 6



第83図 グリッド出土土器 7

## 第7群 加曾利E 3式・曾利系土器 (103~149)

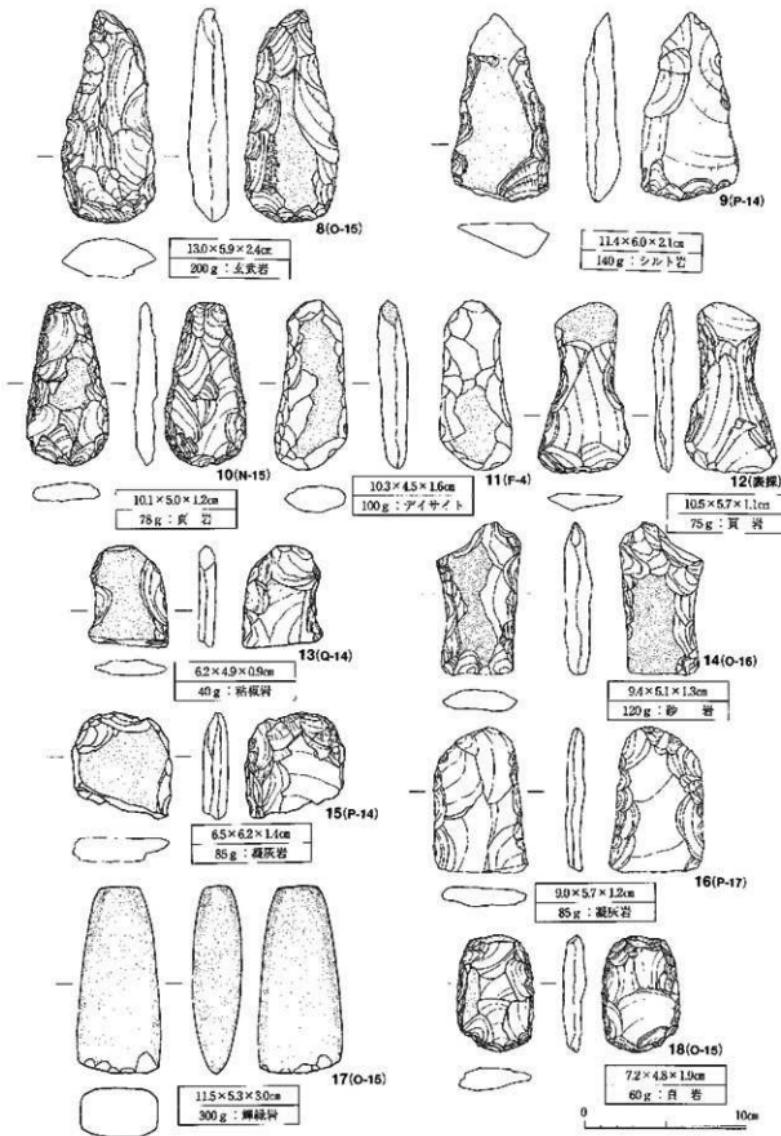
加曾利E 3式・曾利系土器は調査区全域に散在する状況で出土し、出土量も多い。1号壙設上器も該期の遺物であり、状況的に石棒工房跡に伴うとは断定できる遺物であるが、縄文のみ施文される土器の破片が多く、特徴のあるものを優先して47点を同示した。地文に縄文が施文されるものを主体とする103~136は加曾利E 3式、綾杉状沈線・麻帯等で文様を表す137~148は曾利系と考えられ、折衷様式と思われるものもある。

103~108は口縁部の破片で口縁部に退化した区画文様帯を有し、地文に単節縄文が施文される。104の胴部には磨消懸垂文が施文される。109は口縁部から胴部にかけての大破片で退化した区画文と磨消懸垂文が施文されている。110は無文の小形深鉢で口縁部は隆帯で区画されている。111・112は無文の口縁部片で、112には補修孔がある。113~120は胴部片で単節縄文と沈線で区画された磨消懸垂文が施文されている。121は胴部片で単節縄文とII状の降帯が施文される。122は沈線で区画された磨消懸垂文と縱位の蛇行沈線が施文される。123・124は地文に縄文が施文され、微隆起帯で文様が構成される。125はU字状の区画が見られる。126・127もU字状の区画が施文される同一個体の胴部片である。128は脚台形の底部片で単節縄文が施文されている。129は底部で単節縄文と沈線が施文されている。130~132は条線のみ施文される胴部の破片である。133・134は沈線で文様が描かれている。135は隆帯で区画され、半円状の沈線が密に施文される。136は無文の底部である。137は隆帯で渦巻状の文様が表現されている。138・139は隆起線で渦巻状の文様が表現され、胴部は沈線と降起線で文様が構成されている。140・141は口縁に隆起線で渦巻状文と区画文、区画内に沈線が引かれ、胴部には綾杉状の沈線が引かれている。142は降帯と沈線で文様が構成される波状の口縁部である。143は垂下沈線と綾杉状沈線が引かれた胴部片である。144は隆帯と沈線で文様が構成される口縁の突起部分である。145~147は2本の垂下隆帯と綾杉状沈線が施文される胴部片で、147はH状の隆帯になっている。148は口縁部から底部付近まで残存する大破片で口縁部に刺突文、口縁部は無文で胴部との境は隆帯で区画される。胴部は垂下隆帯、H状隆帯と綾杉状沈線で文様が構成される。149は両耳瓶形土器で口縁部は無文、胴部は蘇手状沈線と綾杉状沈線で文様が構成されている。本群土器の胎土は全体的に砂粒を多く含み、焼成は普通程度のものが多く、122・133・134・149等が非常に良好である。

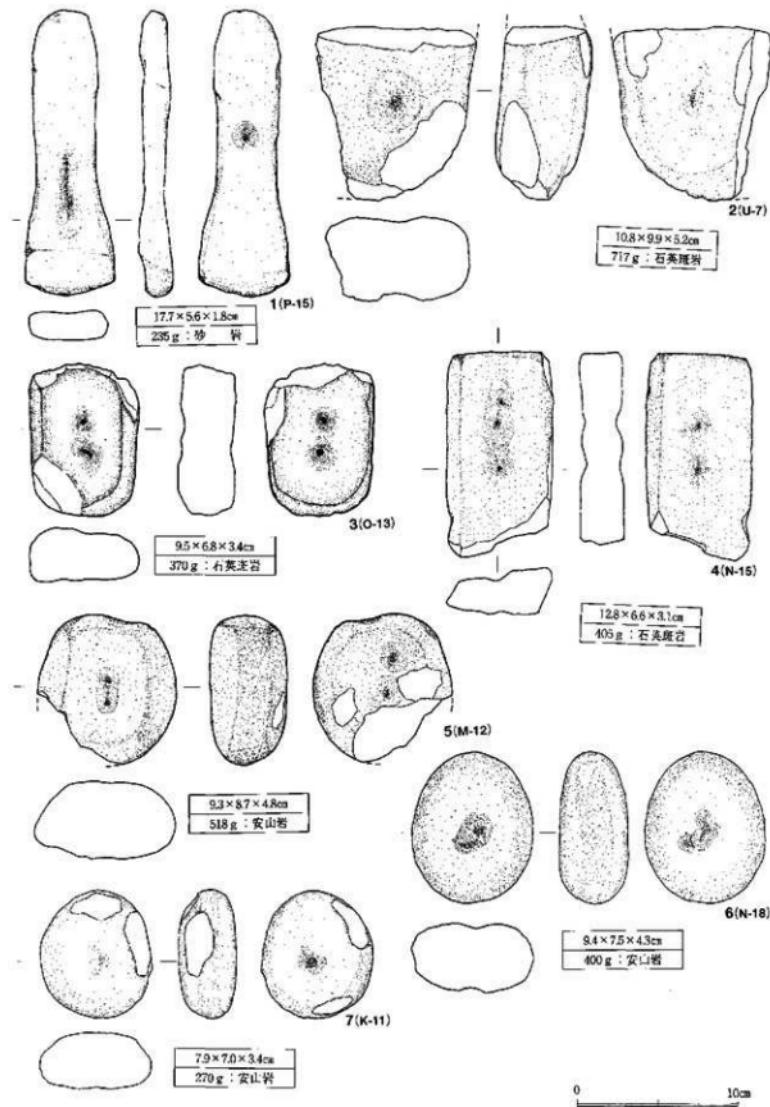
## グリッド出土石器 (第84~86図、図版19・54)

石棒製作以外の石器として砥石・打製石斧・磨製石斧・岩石・凹石・スクレーバー類・石錐・石鐵・剥片等が出土している。この内、打製石斧・磨製石斧は敲き石に転用する可能性があるが、顕著な敲打痕・使用痕のないものは石斧として報告する。

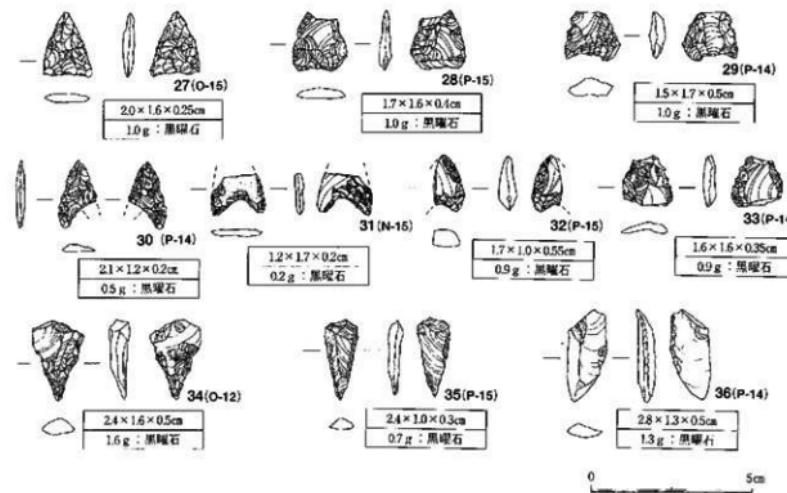
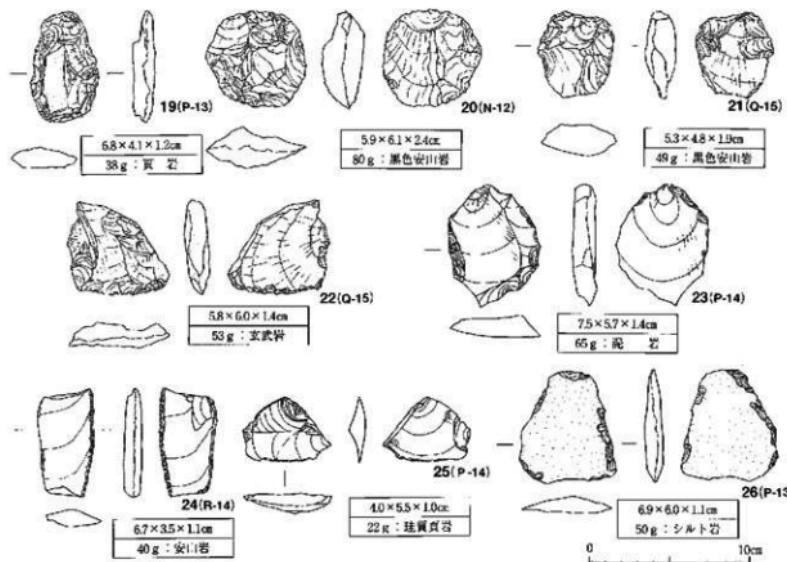
1は砂岩製の砥石で表面に溝と裏面に窪みを有している。2~4は石英斑岩の凹石で、3は磨石兼用になっている。5~7は安山岩の凹石兼磨石である。8~12は完形の打製石斧、13~16は刃部を欠損する打製石斧である。17は完形の輝緑岩製磨製石斧である。18・19は小型の石斧形を呈する石器で範状石器の可能性がある。20・21は黒色安山岩製のスクレーバー、22~26はスクレーバー類で、安山岩製の24は側縁に細かい剥離が加えられている。27~33は黒曜石製の石錐で、27・28・33は平基無茎錐、29~32は基部に抉りが入る凹基無茎錐である。34は黒曜石製の石錐で1点のみ出土している。35・36は黒曜石製の剥片石器で共に側縁に細かい剥離が加えられている。



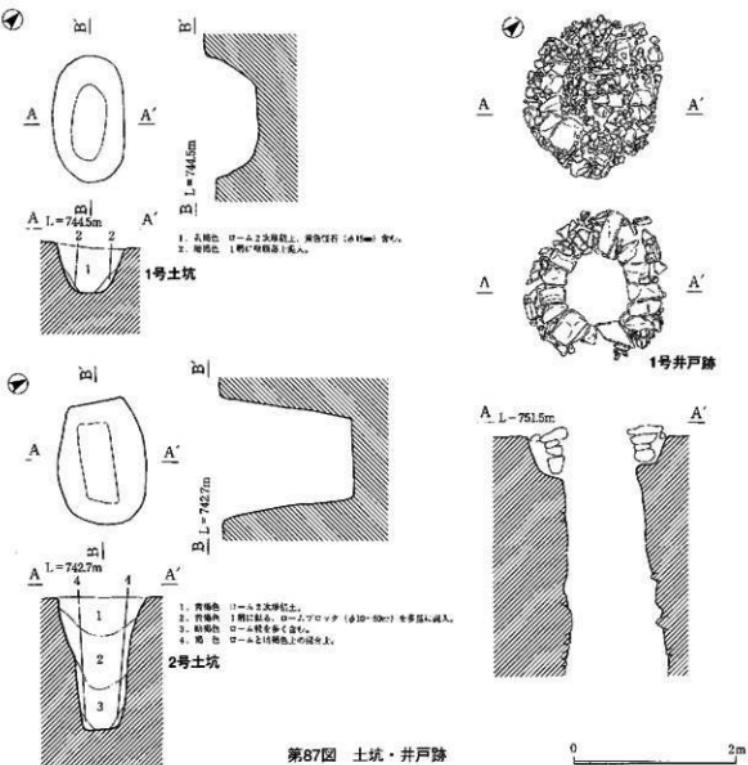
第84図 調査区内出土石器 1



第85図 調査区内出土石器 2



第86図 調査区内出土石器 3



第87図 土坑・井戸跡

0 2m

### 土 坑 (第87図、図版55)

土坑は2基検出されている。出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、形態的に陥とし穴状土坑に類似し、層位的にも縄文時代の所産の可能性が高い。

1号土坑／Q-13グリッド南端部に位置し、平面形は長楕円形、断面形はU字状を呈する。長軸1.54m、短軸0.90m、深さ0.58mを測り、長軸方向はN-44°-Wを指向する。

2号土坑／調査区南側Q-17グリッド北西に位置し、平面形は椭丸長方形、断面形はU字状を呈する。長軸1.50m、短軸1.10m、深さ1.63mを測り、長軸方向はN-67°-Wを指向する。

### 第3節 近世

#### 井戸跡 (第87図、図版55)

調査区西側J-13グリッド南東端から1号井戸跡1基のみ検出されている。柱状礫が放射状に4段組まれた石組井戸で、確認時には集石状に石・礫が充填され、埋め戻された状態で検出されている。上面石組部の径は1.80m、下面の径0.95m~1.20m、深さは3m以上を測る。明確な時期は不明であるが、周辺から近世磁器の破片が出上していることから、近世以降の所産と考えられる。尚、周辺の石・礫を排除した形跡が見られ、簡易的な道の存在が指摘される。

## 第5章 調査の成果と問題点

本遺跡を特徴付ける遺構は、発掘調査当時から注目を集めた縄文時代中期末の石棒工房跡である。本章では検出された石棒工房跡に補足の説明を加え、石棒の製作過程の復原・形態分類を試み、調査の成果を示すと共に問題点の抽出を行いたい。

調査区全域から検出された石棒工房跡からは、総数125本を数える石棒が粗密に分布する状況で出土している。分布状況を巨視的に見ると、集中出土地点（ユニット）が6～8地点存在し、調査区西側を占有する3ヶ所の集石端部付近を中心としていた様相が窺われる。遺跡内で特徴的な位置を占める集石は、当該期以前に起きた大山からの地滑り堆積物と考えられ、石棒工房に不可欠な原石の供給源になっていたものであり、出土遺物と同様に浅間D層の下位から検出されている。

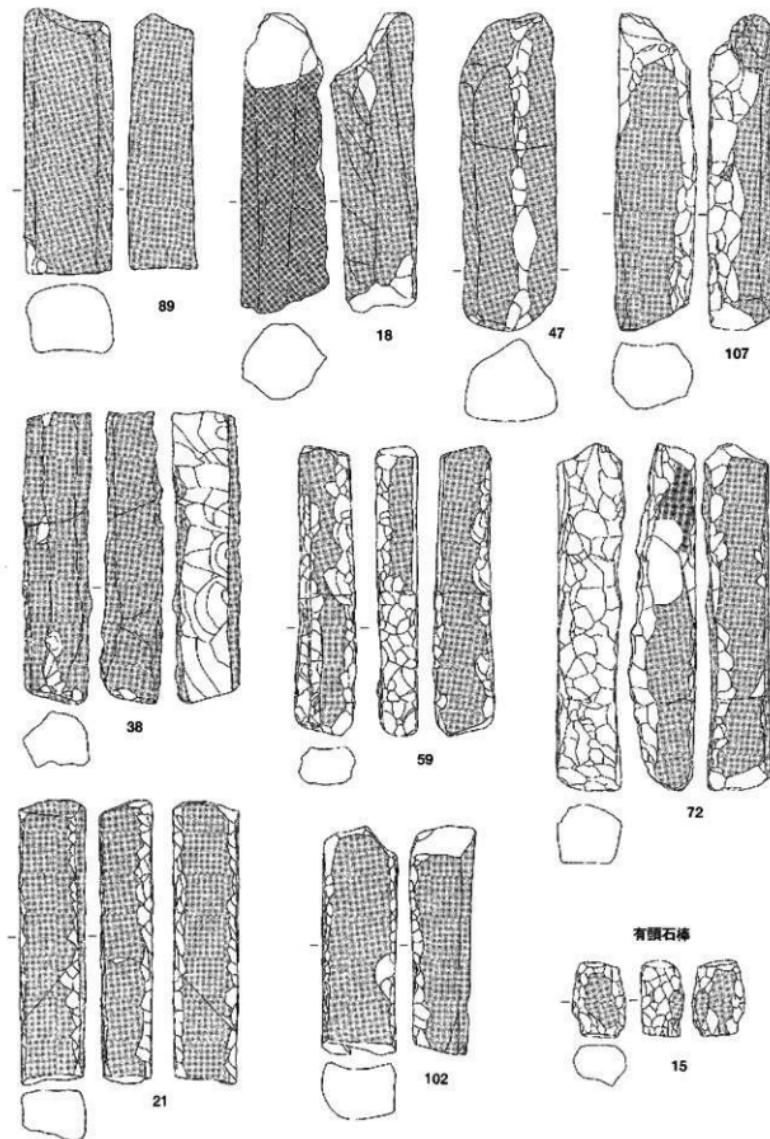
各ユニット内の遺物出土状況を見ると、径8m～10m程度の範囲に石棒が散在し、土器片・敲き石が付隨するユニットもあり、ひとつの作業空間として捉えられる状況であった。ユニット内の石棒は原石～成形段階まで存在し、段階別の作業によるユニットではなく、基本的には個体別の製作加工を行った結果のユニットと考えられる。このことからユニット数前後の工人数が想定される。同一石材による製作実験（敲き石は玄武岩と安山岩）によれば、50cm程度のものは数時間である程度石棒と認識される仕上がりになる。一概には言えないが、製作工程における分業の必要性は無いものと捉えられよう。又、中央集石端部東側のN-15・M-15グリッド地点のユニットには、加曾利E3式の深鉢が正位に埋設され、その周辺に石棒と敲き石が散在していた。埋設土器の機能については、石棒製作に係る水槽として使用されたと考えられ、石材に水を加えて敲打・磨磨が行われた可能性が指摘される。尚、ユニット間での接合関係も確認されており、特に調査区東端出土の91（第1段階）と、中央集石端部東側出土の56（第2段階）の接合資料は、製作段階の異なる資料が接合した特殊な例である。第1段階の剥離によって2個体に破損した素材の一方のみ、再加工が施されたと考えられ、破損品再加工が行われた実証例であるとともに、工房跡であることを明確に示す資料である。

### 石棒製作工程

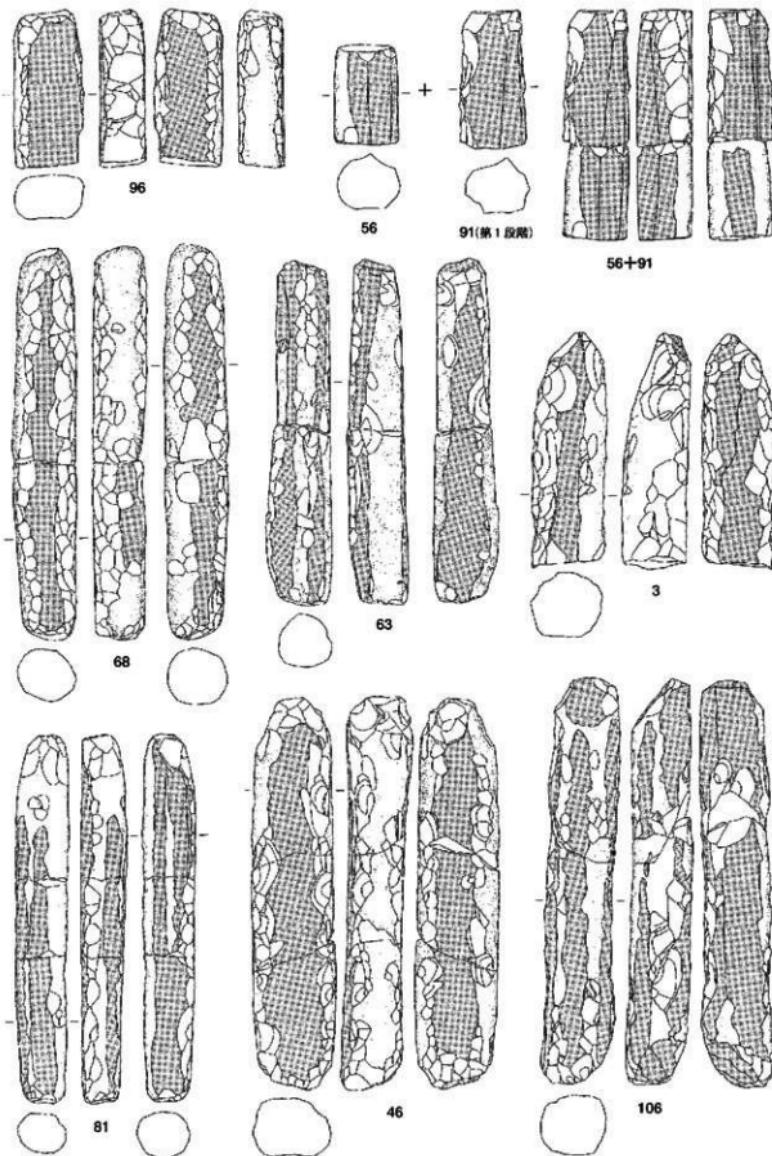
出土石棒の製作工程は前章において説明を行ったが、補足の説明と第0段階（原石段階）～第1段階（剥離段階）～第2段階（敲打段階）～第3段階（成形段階）の代表的な資料を抽出した製作段階別の集成図を本章で示す。第88図は第0～1段階、第89・90図は第2段階、第91図は第3段階の集成図である。又、第92図には工具である敲き石を分類し、代表的な資料を集成した。

第0段階とした石棒原石は、位置的に持ち込んだと考えられ、石棒になり得る形態のものを抽出した。原石は長さ50cm～1m前後、幅及び厚さ5cm～30cmを測る柱状自然石が使用され、1m前後の原石には50kgを超える重量を有するものもある。断面が長方形、台形、方形を呈するものが多く、他に三角形、五角形、不整円形、不定形のものがあり、節理面が湾曲するものが多く見受けられる。この場合、一面は外側に円形を呈し、石棒製作に好適であるが、片面は逆に内側に湾曲し、余分な角面が存在することになる。尚、剥離が不明瞭で僅かなものは第0段階とした。

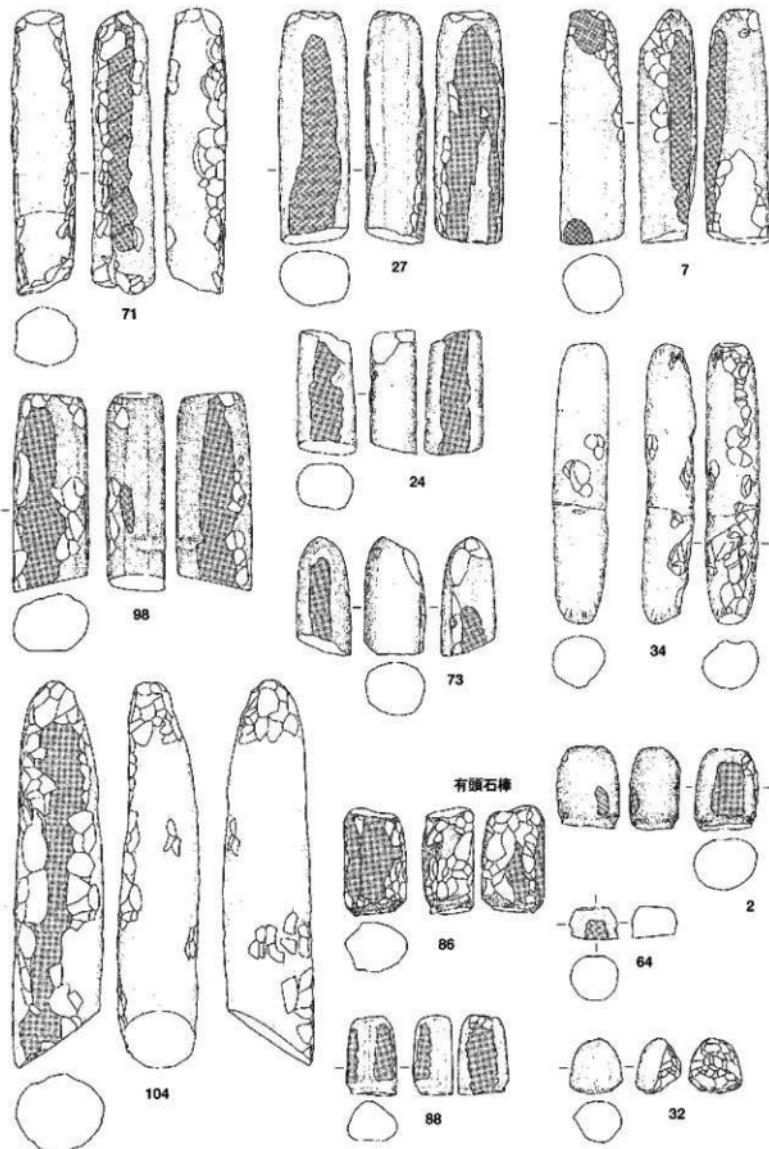
第1段階は、原石の余分な角面を剥離によって落とす剥離調整の段階である。剥離は1角面のみ剥離するものから、2角面剥離するもの、3・4角面剥離～多面剥離まで存在するが、全体的に原石の最小限の余分な角面のみ剥離を行っている傾向があり、原石の形状によっては第1段階の剥離を行わず、第2段階の敲打に入る場合もあったと考えられる。尚、最小限の剥離のみ行うのは、剥離の打撃で破損しやすい原石の性質に起因している可能性も高い。



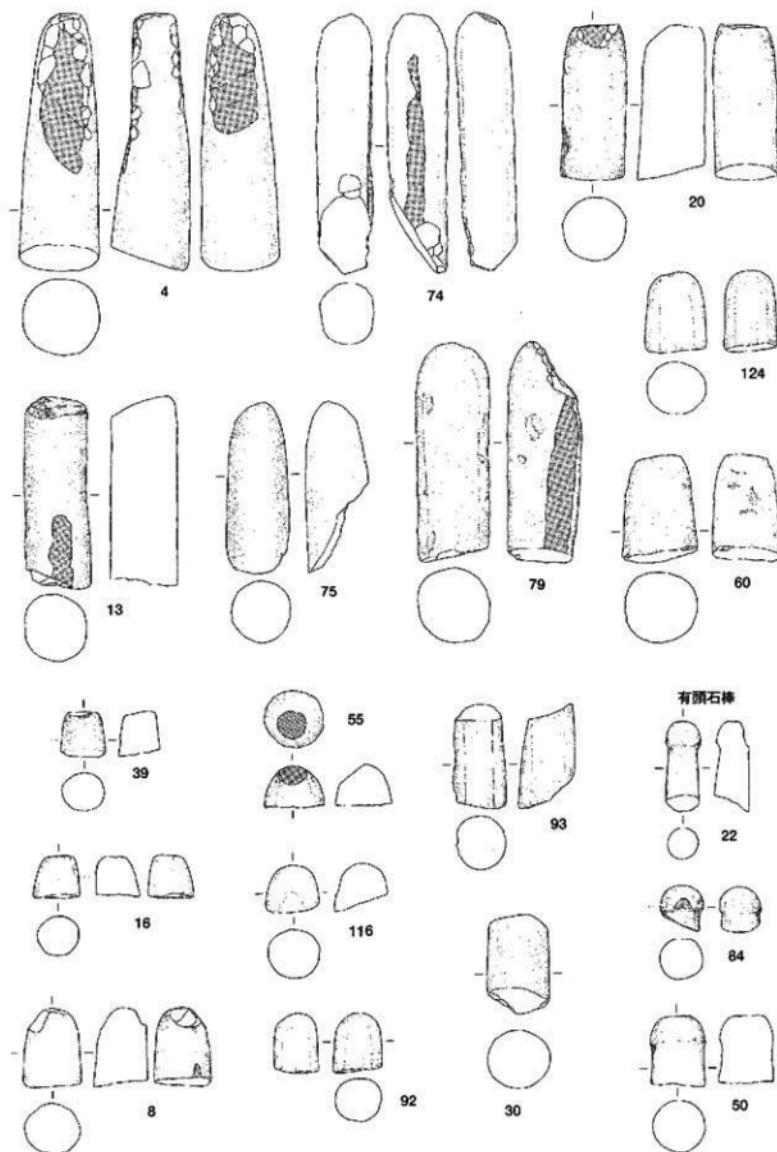
第88図 石棒集成図1 (第0～1段階)



第89図 石棒集成図2 (第2段階)



第90図 石棒集成図3 (第2段階)



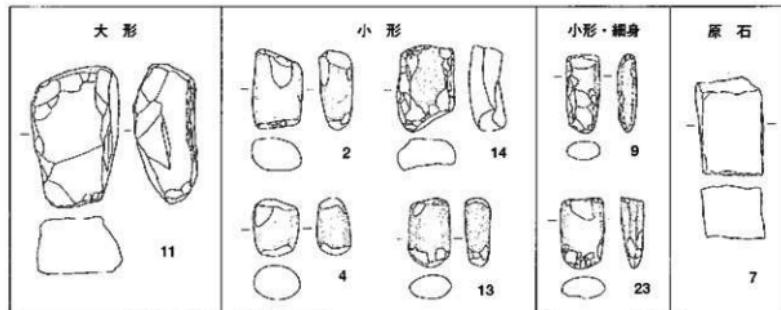
第91図 石棒集成図4（第3段階）

第2段階は敲打によって石棒としての整形を行う段階である。この段階になるとある程度石棒として認識される遺物の状態が作り出されている。製作技法的には側面から敲打を行う側面加工のものが大半を占め、他に剥離面（角面）から敲打を行う角面加工のものがある。側面加工は断面長方形の原石が多く、剥離面には表裏面から敲打が加えられ、両側面に自然面を残すものも見受けられるが、製作技法的には同様の手法といえよう。角面加工は断面方形・三角形・不定形等、剥離の必要がほとんどない原石に見受けられる。側面加工では1面づつの敲打になる為、両側面で段階の異なる96の様な未製品が出現することになり、側面から押していく加工法であるため、必然的に表裏面に自然面を残すものが多くなる。又、角面から敲打する角面加工の場合は3・4面もしくは多面的に自然面を残すことになる。さらに言えばほぼ完成段階においても一部に自然面を残すもののが存在することになり、余分な剥離を行わずに敲打で整形するため、完成品の形は原石の形によってある程度制限されるといえよう。尚、出土した石棒は本段階での破損品が最も多い。

第3段階はほぼ完成品と考えられる成形段階のもので、技法としては第2段階と同じ敲打によるものであるが、より細かい敲打いわゆる敲磨が加えられ、石棒としての形状を最終的に整える段階である。有頭石棒の頭部成形も本段階で行われるが、括れ部分は第1段階、頸部は第2段階で既にある程度の作成が行われている。尚、水を加えた敲打・敲磨は本段階で行われたと考えられ、完成品には磨きが加えられる可能性もあるが、調査区内からは出土していない。

#### 石棒製作工具（敲き石）

石棒の製作工具として抽出した敲き石は、素材として荒川水系の緑色岩類を主体的に使用し、磨製石斧からの転用品が目立っている。形態的に大形、小形、小形・細身の3種類に大別され、大形の敲き石は第1段階の荒削り・剥離作業に使用し、工具の主体となる小形の敲き石は第2～3段階の敲打を中心として、第1段階の細かい剥離にも使用したと思われ、両端部が使用によって著しく摩滅しているものも存在している。小形・細身の敲き石は第3段階の細かい敲打・敲磨に使用したと考えられ、あるいは有頭石棒の括れ部分の作成に使用された可能性もある。又、敲き石の原材料と考えられる緑色岩の原石1点が検出されていることから、現地で工具の製作を行った可能性があり、大形の敲き石の破損品を小形の敲き石に再加工する場合もあったと考えられる。尚、同様の緑色岩類を素材として磨製石斧を製作した集落が、下仁田町下鎌田遺跡から検出されている。時期的に本遺跡とほぼ同時期の加賀利E3式前後であり、同遺跡からは大山の石材を使用した石棒も数点出土していることから、なんらかの関係・流通があった可能性が指摘される。



第92図 敲き石分類図

両頭石棒	両端に頭もしくは頭部を有する。
単頭石棒	両端石棒にも無頭石棒にも入らないもので、一端に頭あるいは頭部を作り出すもの
無頭石棒	両端に頭もしくは頭部を有しないもの (頭部による類別)
両頭石棒	I型式(両端に頭を有する)
単頭石棒	T型式 (頭部を作るもの) a類 丸 b類 三角 c類 四角 d類 造り出しが明瞭でない
	II型式 (頭もしくは段を有する) a類 段、頭を有す b類 頭を作る為に溝を明確にする
	III型式(前ダレを有する) a類 丸
無頭石棒	I型式 (無頭石棒の典型) a類 平 II型式 (わずかに括れのあるもの)

「石棒の基礎的研究」『長野県考古学会紙』28より

#### 石棒の形態について

石棒の形態分類については、瀧谷・彦氏による分類がある。(瀧谷 1977・1995) それによると、石棒の形態には有頭、無頭があり、有頭を両頭、単頭に分類し、それぞれを更に細分している。

この分類によれば本遺跡の主体となる無頭石棒は、無頭石棒I型式が最も多いくことになるが、ほぼ完成品と考えられる13が、端部に僅かな括れを持つ無頭石棒II型式の範疇と考えられ、完成品の段階ではII型式も存在する可能性がある。頭部の形状は丸・平の他に、尖頭状に先端するものが存在し、基部は胴部に対してほぼ直角になるもの、斜方向に筋理が入るものと、内頭部の状態を呈するものがある。この中で両頭部の状態を呈するものは、無頭石棒のIII型式に分類される可能性があり、無頭石棒I型式に分類される中に、その破損品が含まれている可能性が考えられる。

有頭石棒は、全て単頭石棒I型式の範疇と考えられ、II型式・III型式のものは出土していない。頭部の形状としては丸形状が多く、第1段階・第2段階には三角形状、四角形状を呈するものも存在しているが、未製品段階の為に成形が不明瞭な可能性もある。

特殊な例としては、胴部の中央部と思われる部分に、頭状の高まりを残して敲打が加えられた17と98が挙げられ、なんらかの装飾が施される未製品の可能性が考えられる。

尚、石棒の長さ(大きさ)は無頭石棒の大形に対して、有頭石棒は小形の傾向を示すことが指摘されているが、本遺跡も同様の傾向を示し、無頭石棒が最大1mのものまで存在するのに対し、有頭石棒は比較的小形で、完成品段階でも小形になると思われるものが多い。

#### 石棒の搬出先について

最も問題となる石棒の搬出先であるが、現在、本遺跡で製作された石棒と認識される確実な検出事例はなく、現地調査当時の周辺市町村アンケート調査でも、検出されているものはほとんどが後期の所産と思われる小形石棒であり、中期末の大形石棒の検出例自体が少ない状況であった。

松井田町内の遺跡でも完形品の出土は無く、隣接する恩賀集落以外では、国道18号線沿いに位置する仁田・春井遺跡の表探資料のみ、材質（流紋岩）・形状から木造跡で製作された石棒と判断される程度である。尚、今回の関越自動車道に隣接する発掘調査では、新堀東源ヶ原遺跡から中期の大集落、行田梅木平遺跡から中期末～後期の配石遺構が検出され、とともに膨大な量の石器が出土している。本報告書と同時進行で整理作業が行われた向遺跡からは、新堀東源ヶ原遺跡で凹石転用のもの1点、行田梅木平遺跡からは凹石転用のものを含む3点が出土している。いずれも石棒の基部もしくは断部の破損品と考えられ、材質・形状から本遺跡の石棒と判断される資料である。この中には表裏面に自然面を残すものがあり、これらを搬出された完成品と捉えると、自然面が残っていても流通した実証例といえるが、T人による搬出品では無く、出品・伝世品である可能性も否定できない。

石棒工房を下仁田町初鳥屋遺跡（秋池 1965・1967）を含む大山全体として見た場合、管見に触れた限りでは、下仁田町、甘楽町、吉井町、妙義町等に類例が存在している様であり、下仁田町下銀田遺跡からは、大山の石材を使用した完形品を含む数点の石棒が出土している。この分布状況から、大山の石材を使用した石棒は、碓氷川水系よりも荒川水系を中心として搬出が行われていたことが窺われる。又、工具の裁き石も荒川水系の石材を使用していることから、工人自体も荒川水系に密接な係りを持った人々であった可能性が高い。

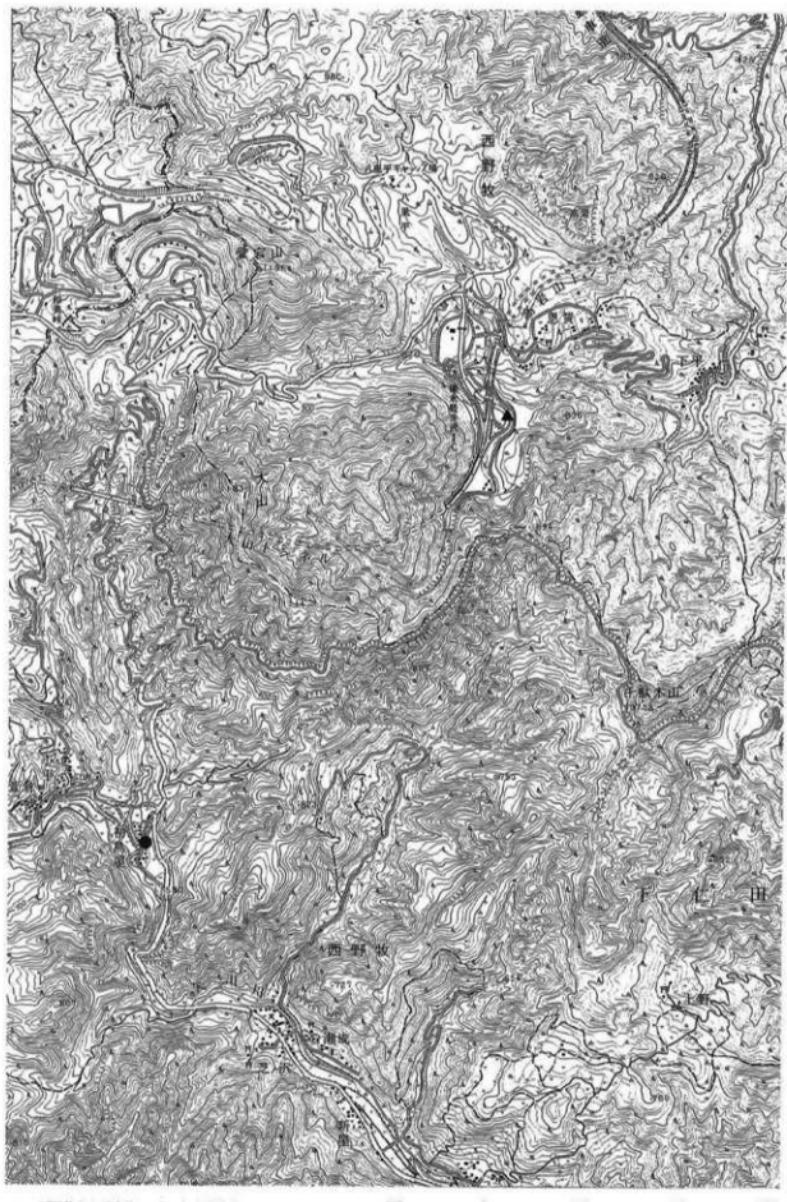
本遺跡の石棒製作は、加曾利E3式期のみ行われていた様相を呈している。本遺跡の石棒製作が終焉した原因は、地滑りによる集石という限られた供給源から原石を採集している為、蒸材となる原石が欠乏したことと、浅間D怪石による埋没も要因になったと考えられる。対して、下仁田町初鳥屋遺跡では後期初頭の上器も出土していることから、本遺跡より存続していた可能性が高い。しかしながら、荒川水系・碓氷川水系では、後期になると緑色片岩を使用した小形石棒が主体となり、大型石棒は終息していくことから、後期前半には大山周辺での石棒製作は終焉したものと推測される。本章で述べたことは、いずれも現時点での推論であり、今後の周辺調査、資料の増加によって、問題点・疑問点が明確になることを期待したい。

追記 本報告書と関連して、1995年9月23・24日に岐阜県宮川村に於いて「飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎さぐる」と題するシンポジウム（主催 岐阜県 宮川村・宮川村教育委員会 後援 岐阜県教育委員会）が開催され、筆者もパネラーの一人として本遺跡の概要説明を行い、有意義な成果を得ることが出来た。宮川村・宮川村教育委員会ならびにシンポジウム参加者各位にお礼申し上げる次第である。

#### 引用・参考文献

- 新井房夫 1979 「関東地方北部の繩文時代以降の石棒アソブ」『考古学ジャーナル』157号  
秋池 武 1965 「群馬県下：田町初鳥屋出土の石棒」『若木考古』第74号 國學院大学考古学会  
秋池 武 1967 「縄文時代における石棒について－関東・山梨・静岡を中心として－」國學院大学考古論文  
大矢昌彦 1977 「石棒の基礎的研究」『長野県考古学会報』28 長野県考古学会  
小島俊彰 1986 「獣を持つ縄文中期の大豊石棒」『大鏡』第10号 宮山原考古学会  
村上伸治 1995 「石棒の機能について－考察」『比企丘陵創刊号』 比企丘陵文化研究会  
山本暉久 1983 「石棒」『縄文文化の研究』9（縄文人の精神文化） 雄山園  
山本暉久 1996 「縄文形敷石住居と石棒祭祀」『縄文時代』7 縄文時代文化研究会  
能登 譲 1974 「群馬沼垂水郡松井田町 『松木谷遺跡発掘調査発掘』」 松井田町教育委員会  
大江正行他 1990 「仁田遺跡・春井遺跡」 群馬県教育委員会 岐阜県歴史文化財調査事業団  
岐阜県宮川村・宮川村教育委員会編 1995 「飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎さぐる」資料集  
岐阜県宮川村・宮川村教育委員会  
松井田町誌編さん委員会編 1985 「松井田町誌」 松井田町誌編さん委員会

# 写 真 図 版

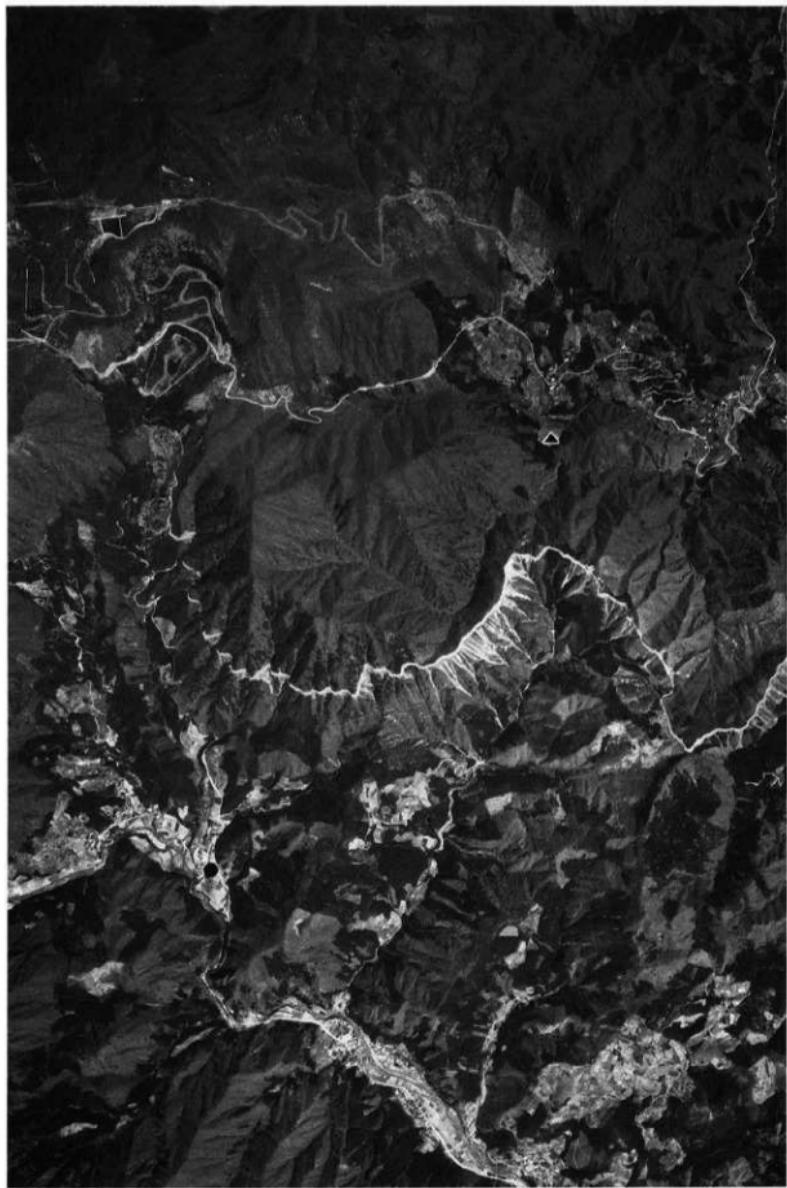


▲ - 西野牧小山平遺跡 ● - 初島屋遺跡

500m 0 500 1000 1500

西野牧小山平遺跡

図版  
1



1. 大山周辺空撮 (国土地理院1978年撮影 CB-78-7 Y C 6-15)

▲ - 西野牧小山平遺跡

● - 初鳥屋遺跡

西野牧小山平遺跡

図版  
2



1. 調査前現況



2. 同

西野牧小山平遺跡

図版  
3



1. 大山斜面部調査前現況



2. 同



3. トレンチ調査状況



4. 同



5. トレンチ設定状況（空撮）

## 西野牧小山平遺跡

図版  
4



1. 表土堤削後全景



2. 調査区全景

西野牧小山平遺跡

図版  
5



1. 調査区及び小山全貌



2. 集石全景（空撮）

## 西野牧小山平遺跡

図版  
6



1. 調査区全景（小山頂上より）



2. 斜面部トレンチ調査状況



3. 遺物確認面



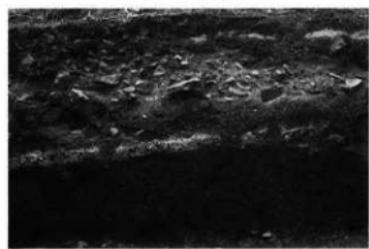
4. 調査状況



5. 作業風景



6. 調査区遠景（恩賀部落より）



7. トレンチ内基本層序



8. トレンチ石棒出土位置

西野牧小山平遺跡

図版  
7



1. 集石・石棒検出状況



2. 集石断面（浅間D軽石層）



3. 作業風景



4. 集石・石棒検出状況



5. 集石断面

西野牧小山平遺跡

図版 8



1. 石棒出土状況（空撮）



2. 同

西野牧小山平遺跡

圖版  
9



1. 石棒No. 1



2. 石棒No. 2



3. 石棒出土状況



4. 石棒No.10、13、18（空撮）



5. 石棒出土状況

西野牧小山平遺跡

図版  
10



1. 石棒No. 4



2. 石棒No. 8



3. 石棒No.10



4. 石棒No.12



5. 石棒No.11

西野牧小山平遺跡

図版  
11



1. 石棒No.15



2. 石棒No.17



3. 石棒No.18



4. 石棒No.19



5. 石棒No.21



6. 石棒No.22



7. 石棒No.23



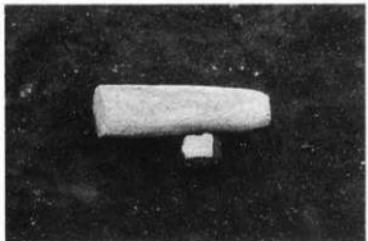
8. 石棒No.24



9. 同

西野牧小山平遺跡

図版  
12



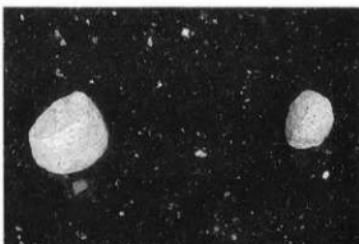
1. 石棒No.27



2. 石棒No.30



3. 石棒No.31



4. 石棒No.32



5. N-15グリット石棒出土状況（浅間D軽石層）

西野牧小山平遺跡

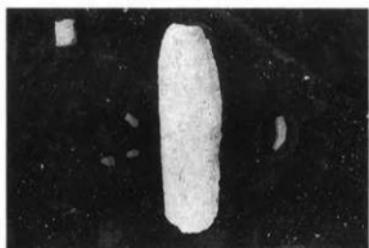
図版  
13



1. 石棒No.35、37



2. 石棒No.34



3. 石棒No.34



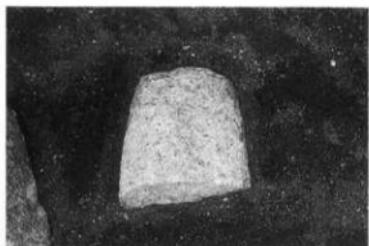
4. 石棒No.36



5. 石棒No.37



6. 石棒No.38



7. 石棒No.39



8. 石棒No.42、45

西野牧小山平遺跡

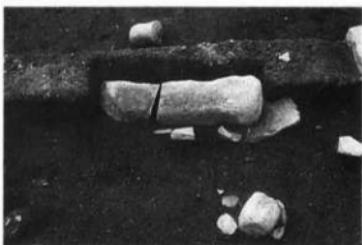
図版  
14



1. 石棒出土状況



2. 石棒No.46



3. 石棒No.47



4. 石棒No.48



5. 石棒No.50

西野牧小山平遺跡

図版  
15



1. 石棒No.59



2. 石棒No.60、66



3. 石棒No.68



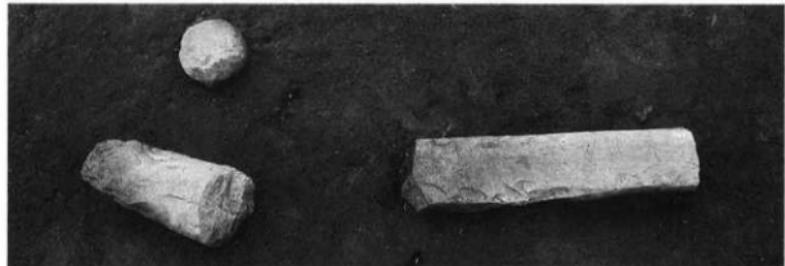
4. 石棒No.69



5. 石棒No.71



6. 石棒No.75



7. 石棒No.45・72・77

西野牧小山平遺跡

圖版  
16



1. 石棒出土狀況



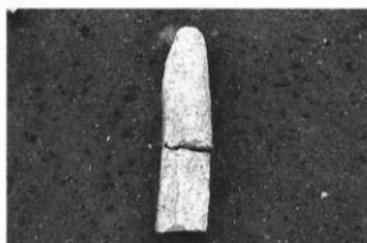
2. 石棒No.74



1. 石棒検出状況



2. 石棒No.79



3. 石棒No.81



4. 石棒No.81



5. 石棒No.84

西野牧小山平遺跡

図版  
18



1. 石棒No.88、91~94出土状況



2. 石棒No.89



3. 石棒No.90



4. 石棒No.91、93



5. 石棒No.98

西野牧小山平遺跡

図版  
19



1. N-14グリッド敲き石出土状況



2. O-15グリッド敲き石出土状況



3. N-17グリッド敲き石出土状況



4. O-15グリッド敲き石出土状況



5. O-15グリッド遺物出土状況



6. 同



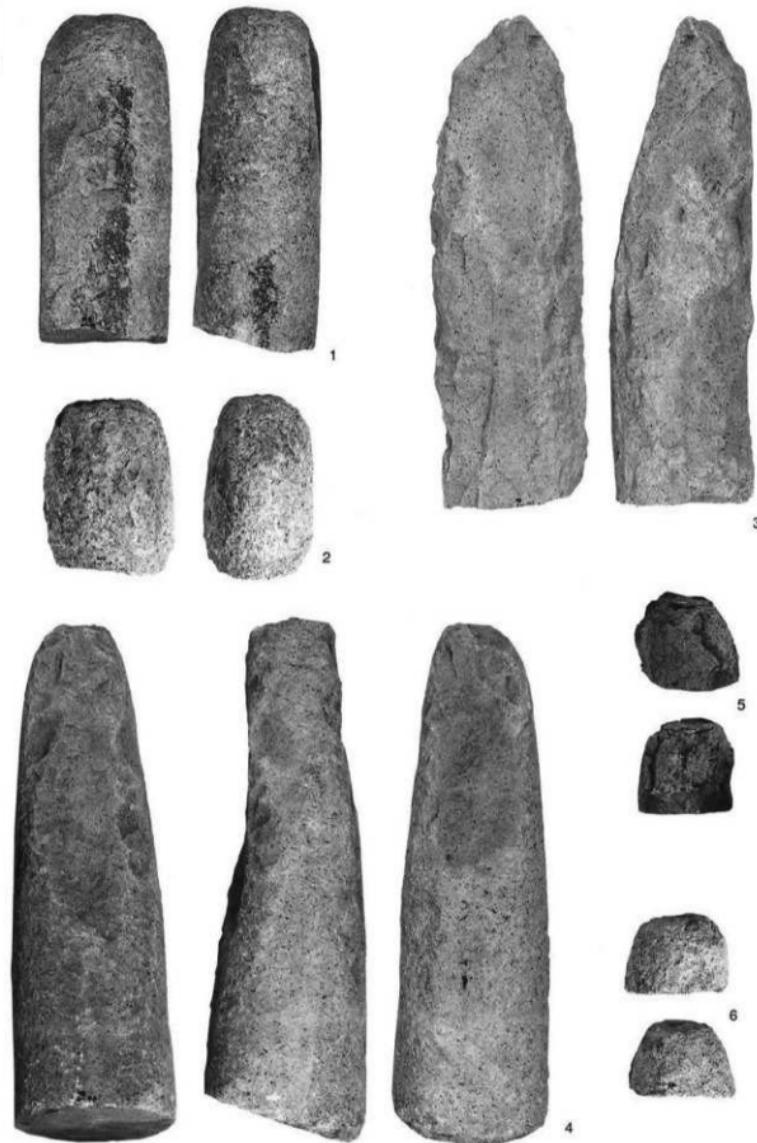
7. N-13グリッド遺物出土状況



8. N-15グリッド遺物出土状況

西野牧小山平遺跡

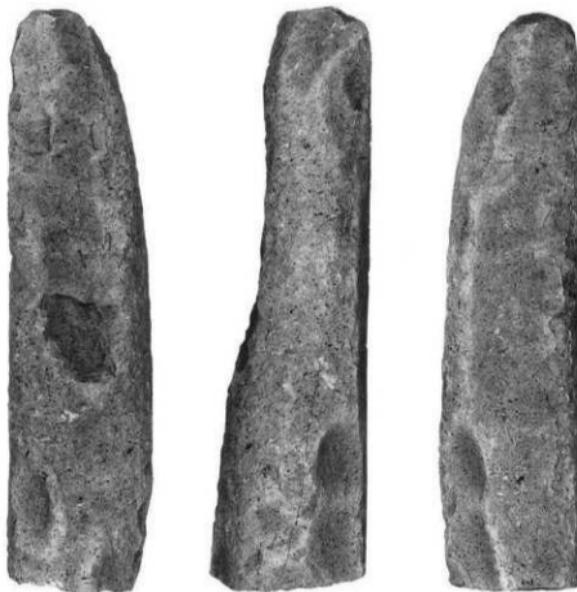
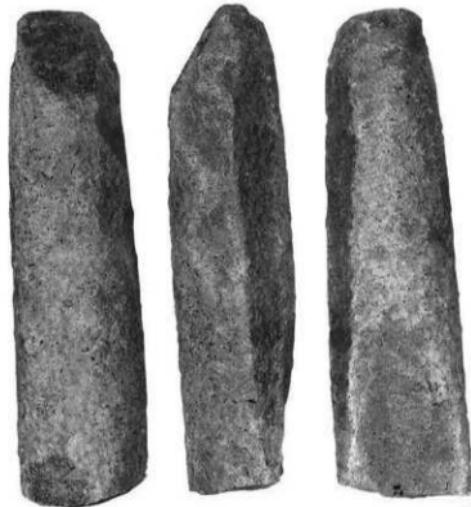
図版  
20



石棒 No. 1 ~ 6

西野牧小山平遺跡

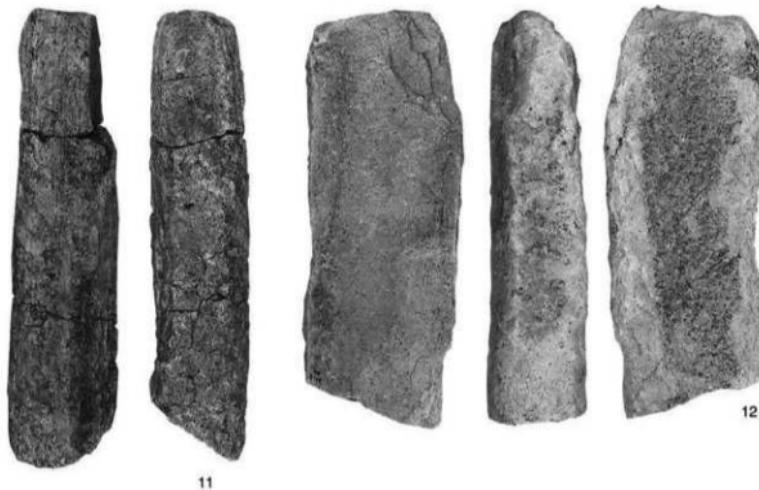
図版  
21



石棒 No. 7 ~10

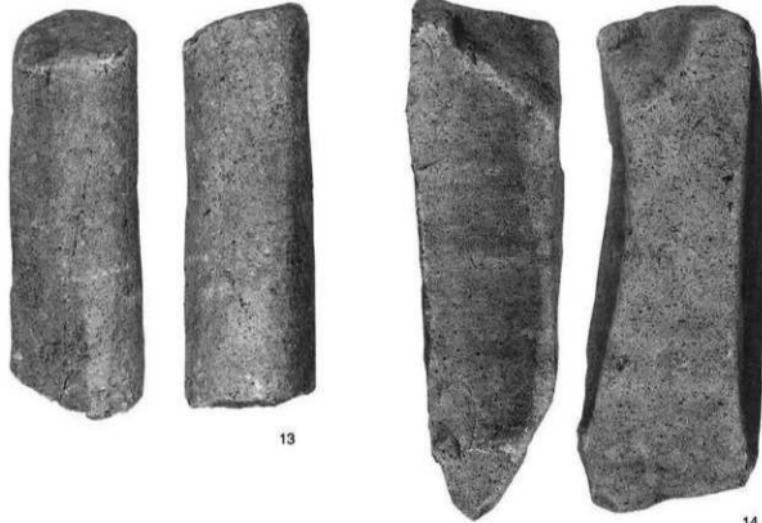
西野牧小山平遺跡

図版  
22



11

12



13

14

石棒 No.11～14

西野牧小山平遺跡

図版  
23



17



15



19

石棒 No.15~17・19

西野牧小山平遺跡

図版  
24



18



20



22



21

石棒 No.18・20~22

西野牧小山平遺跡

図版  
25



23



24



25



26



27



28



29

石棒 No.23~28

西野牧小山平遺跡

図版  
26



29



30



31



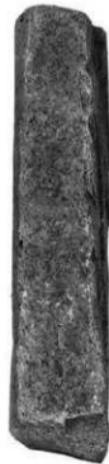
32



33



34



35

石棒 No.29~35

西野牧小山平遺跡

図版  
27



36



37



38



41



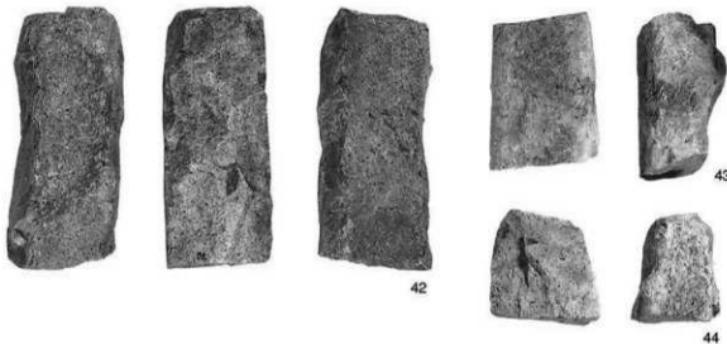
39



40

西野牧小山平遺跡

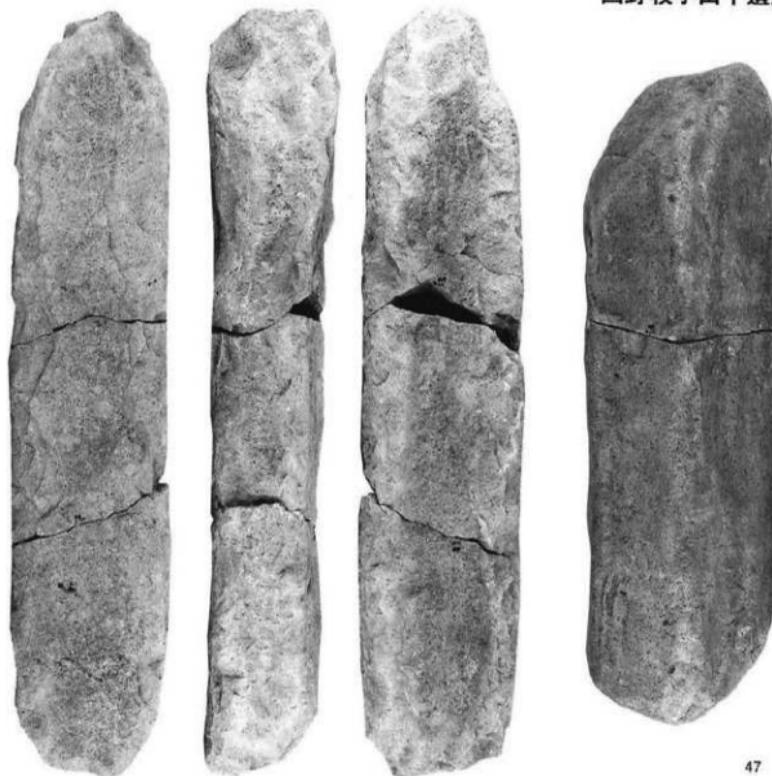
図版  
28



石棒 No.42~45

西野牧小山平遺跡

図版  
29



46

47



49

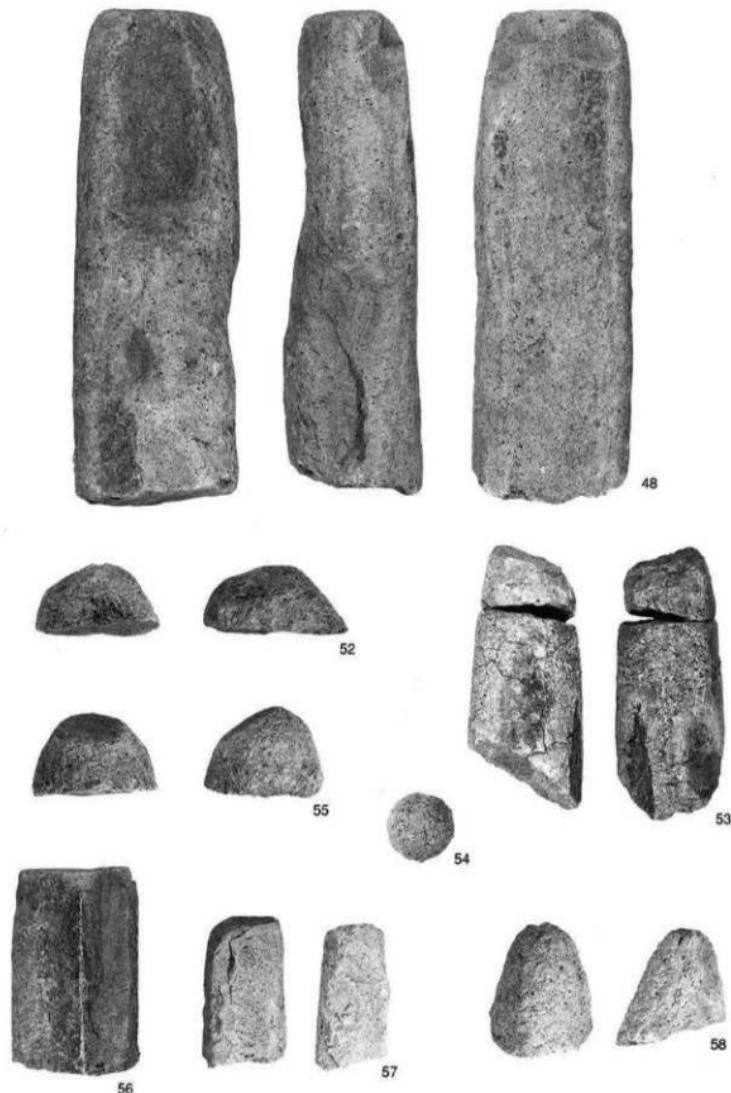
50

51

石棒 No.46・47・49～51

西野牧小山平遺跡

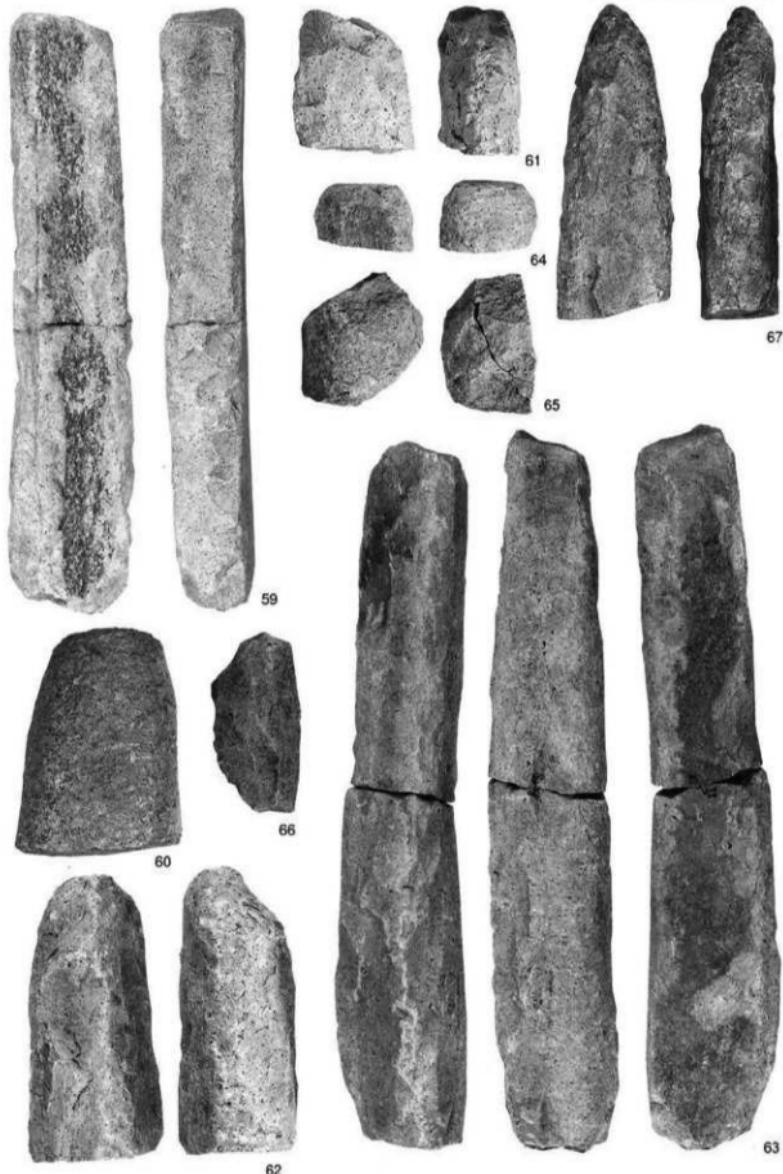
図版  
30



石棒 No.48・52~58

西野牧小山平遺跡

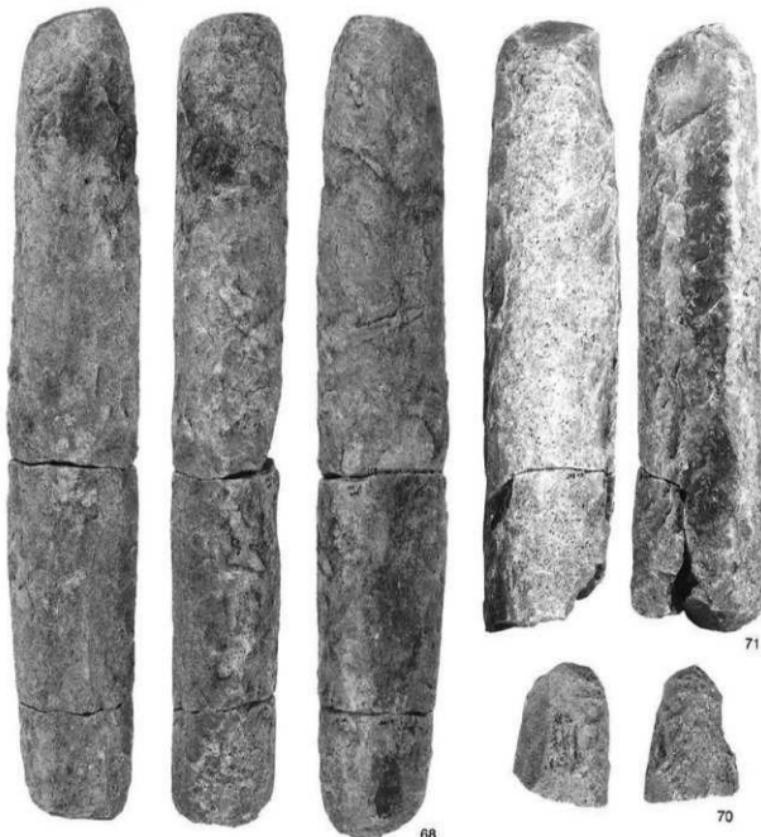
図版  
31



石棒 No.59~67

西野牧小山平遺跡

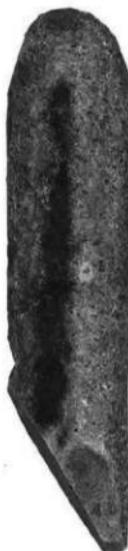
図版  
32



石棒 No.68~71・73

西野牧小山平遺跡

図版  
33



74



75



72

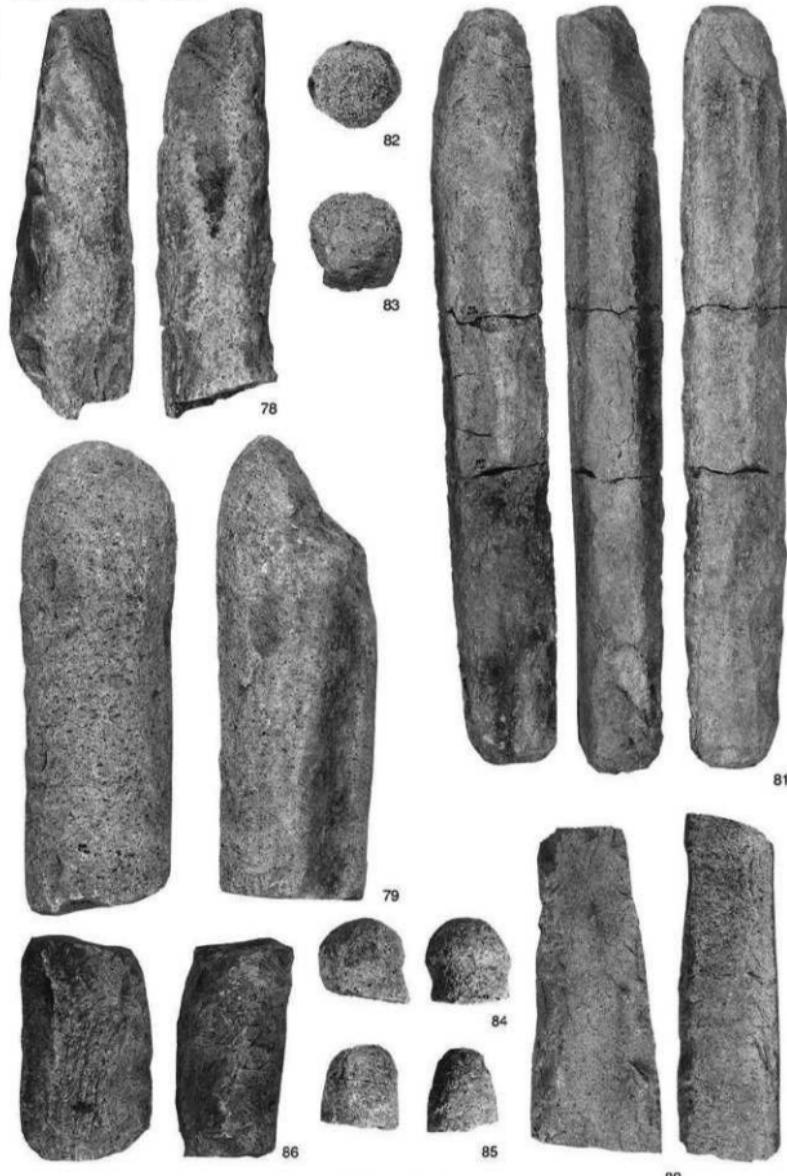


74

石棒 No.72・74~77

西野牧小山平遺跡

図版  
34



石棒 No.78~86

西野牧小山平遺跡

図版  
35

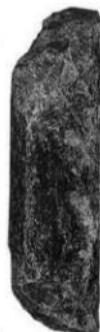


87

88



90



89



92



93

94

石棒 No.87~90・92~94

西野牧小山平遺跡

図版  
36



石棒 No.56+91、97

西野牧小山平遺跡

図版  
37



95



96



98

石棒 No.95・96・98

西野牧小山平遺跡

図版  
38



99

103



101



100

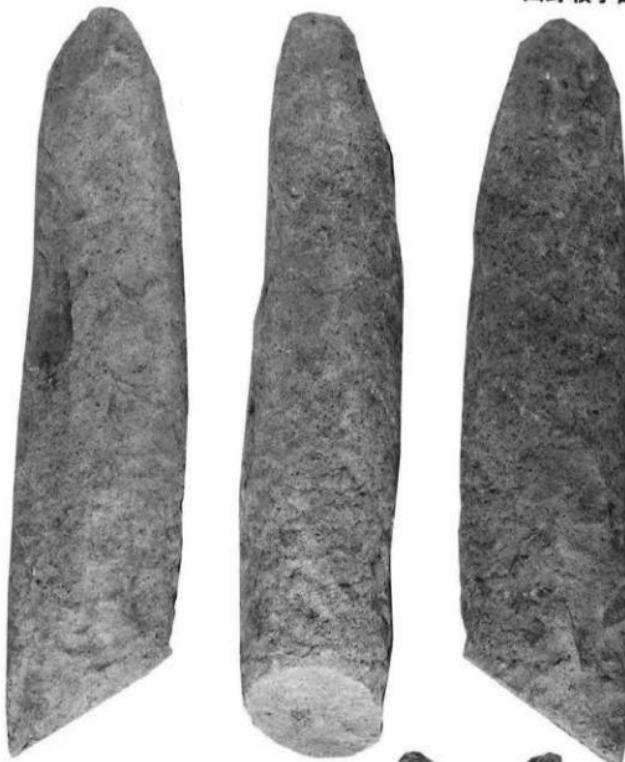


102

石棒 No.99~103

西野牧小山平遺跡

図版  
39



104



108

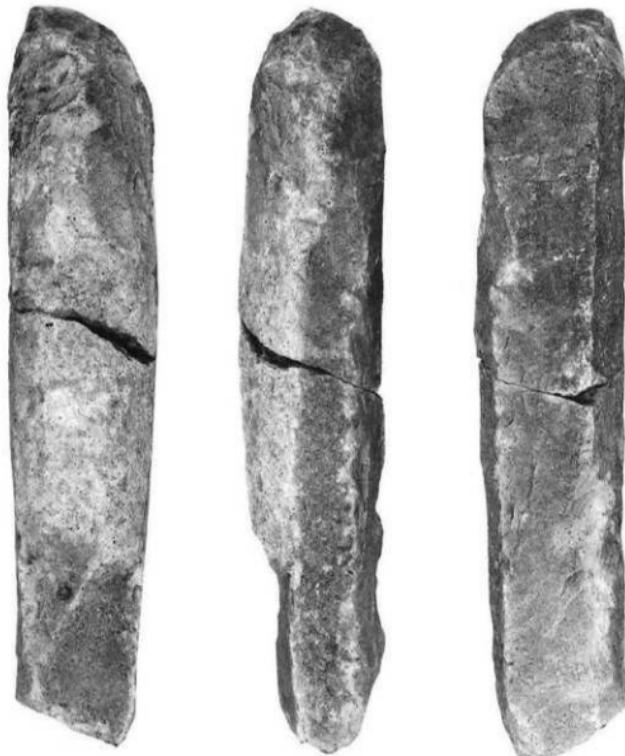


109

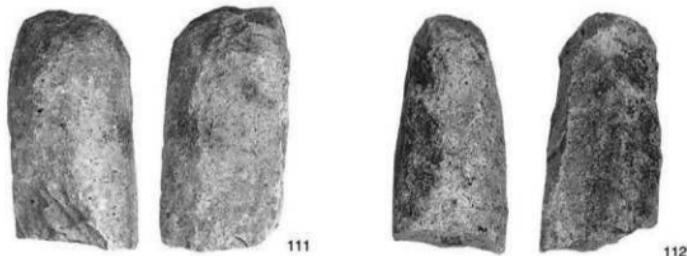
石棒 No.104・108・109

西野牧小山平遺跡

図版  
40



105



111

112

石棒 No.105・111・112

西野牧小山平遺跡

圖版  
41



107

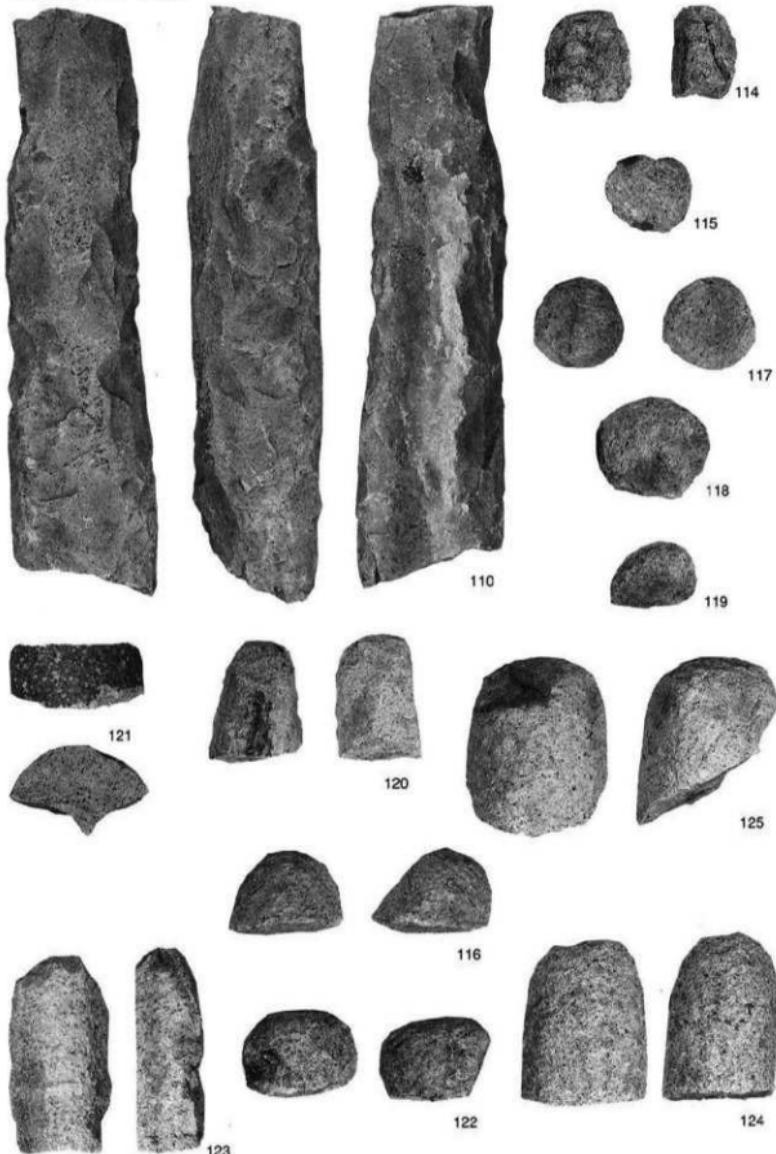


113

石棒 No.106・107・113

西野牧小山平遺跡

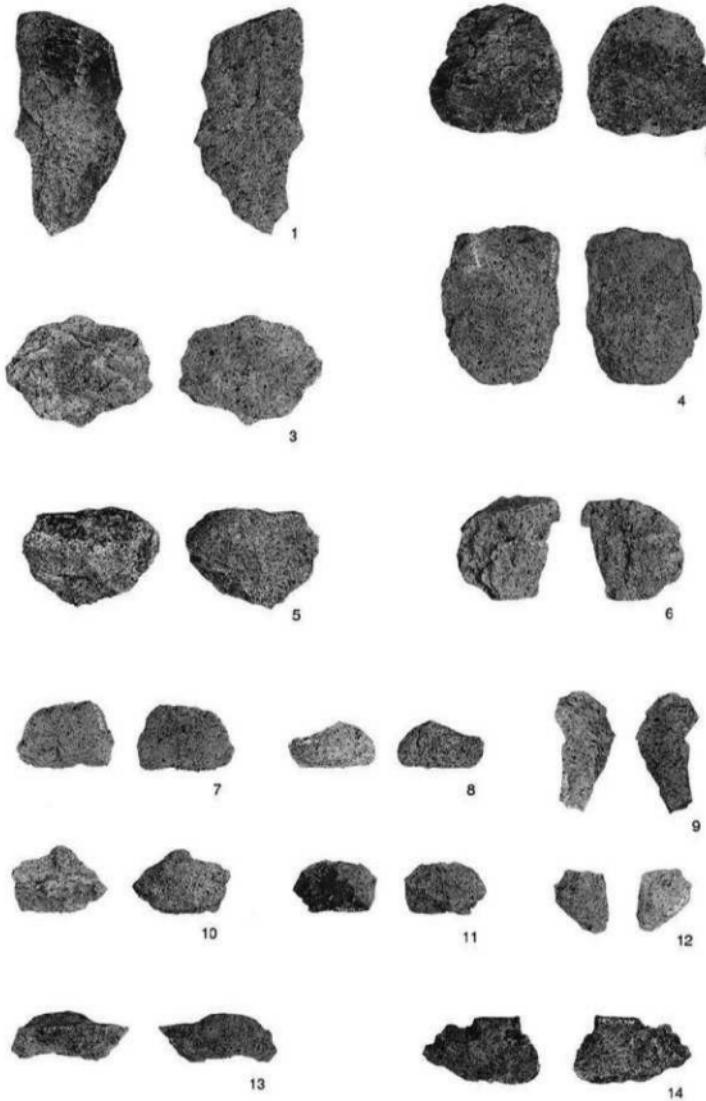
図版  
42



石棒 No.110・114~125

西野牧小山平遺跡

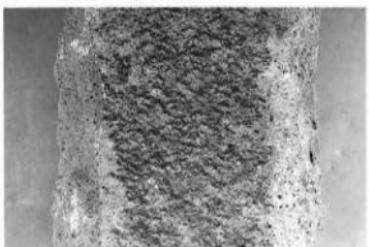
図版  
43



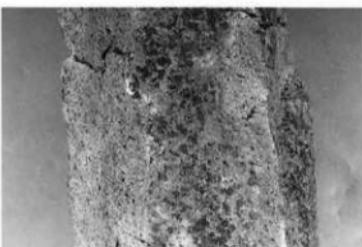
石棒破片・剥片

## 西野牧小山平遺跡

図版  
44



1. 自然面



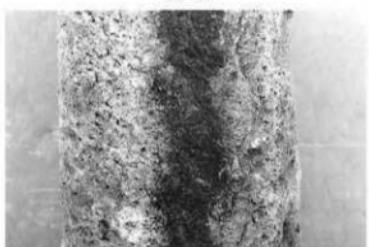
2. 自然面と剥離面



3. 同



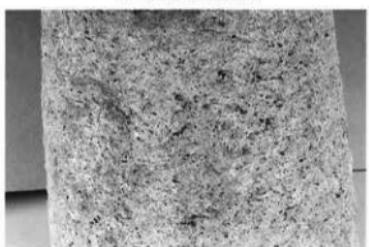
4. 剥離面



5. 自然面と敲打面



6. 敲打面



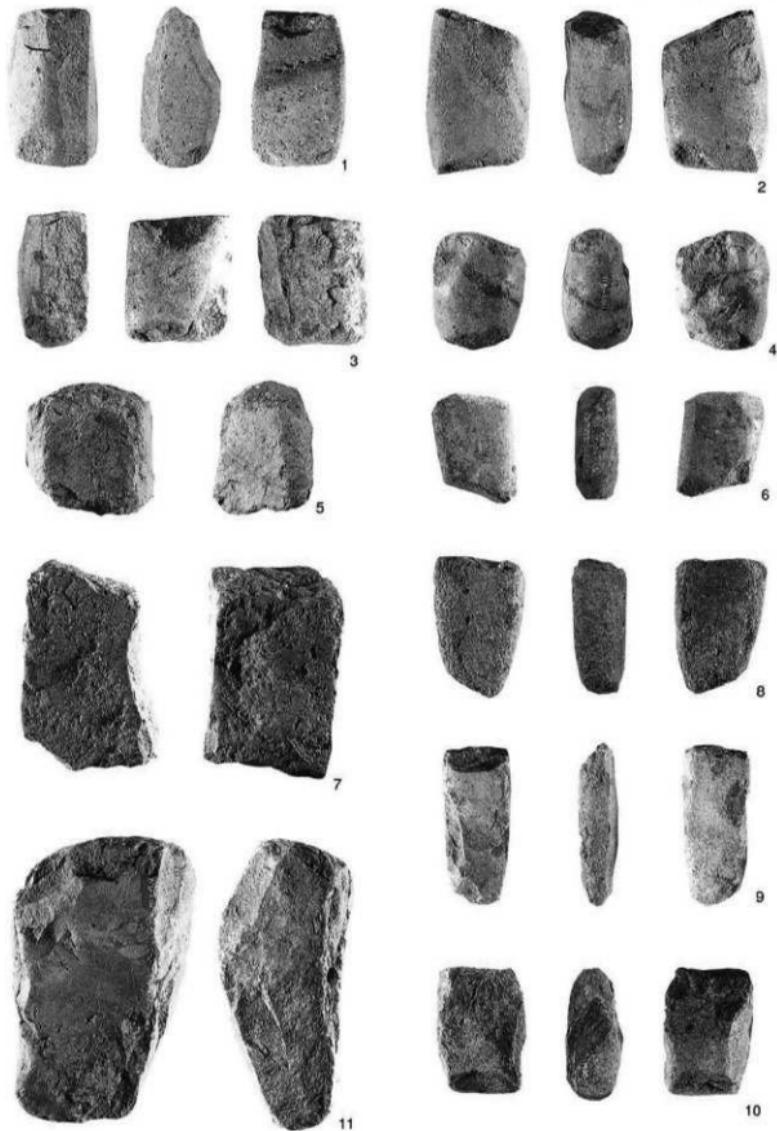
7. 同



8. 細敲打面

西野牧小山平遺跡

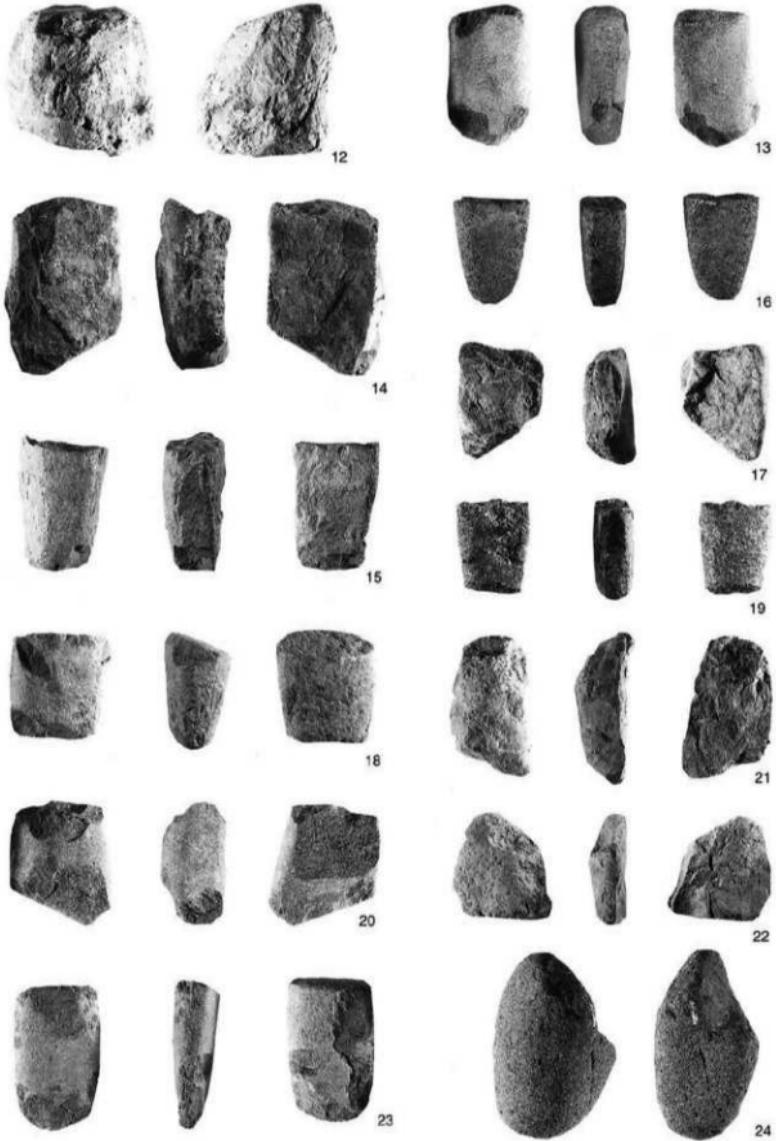
図版  
45



敲き石 1~11

西野牧小山平遺跡

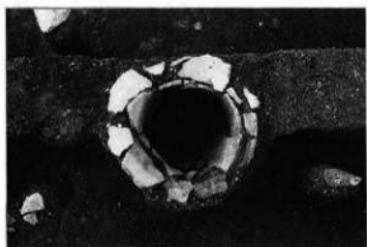
図版  
46



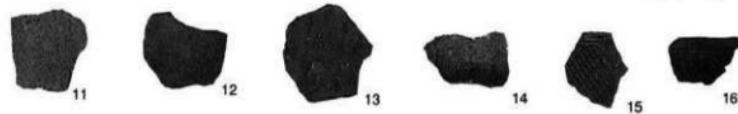
敲き石 12~24

西野牧小山平遺跡

図版  
47



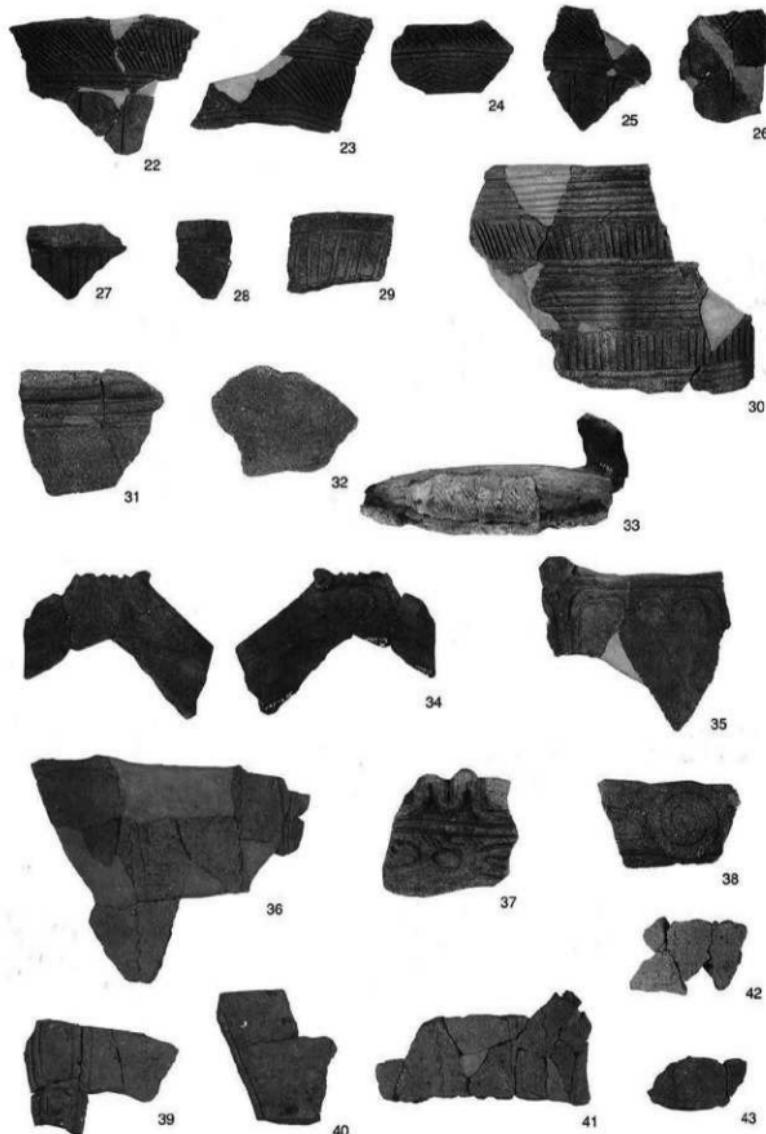
1号埋設土器



1号埋設土器・グリッド出土土器 1

# 西野牧小山平遺跡

図版  
48



グリッド出土土器 2

西野牧小山平遺跡

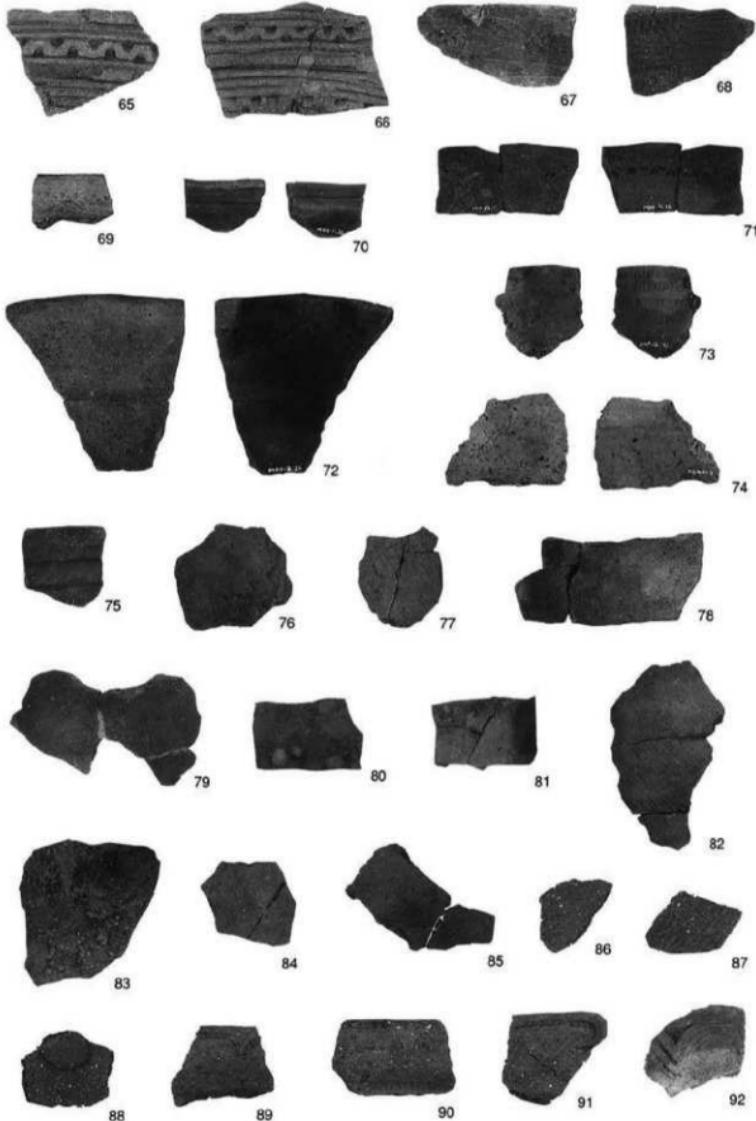
図版  
49



グリッド出土土器 3

西野牧小山平遺跡

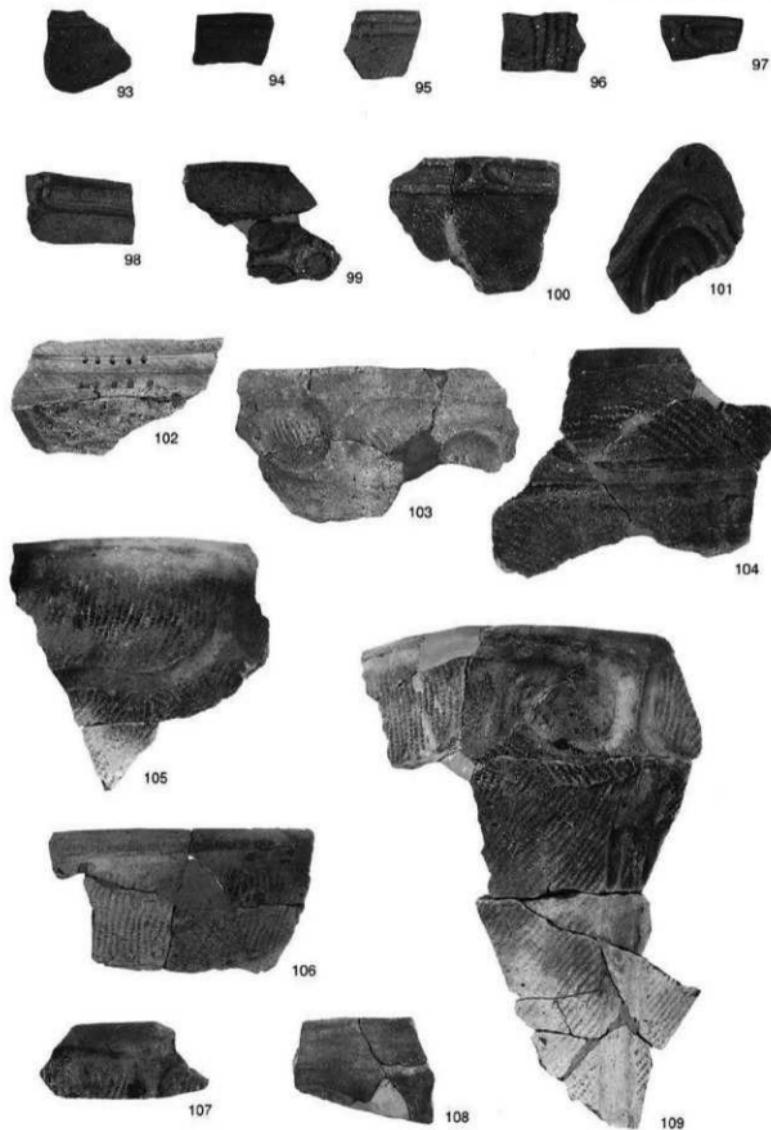
図版  
50



グリッド出土土器 4

西野牧小山平遺跡

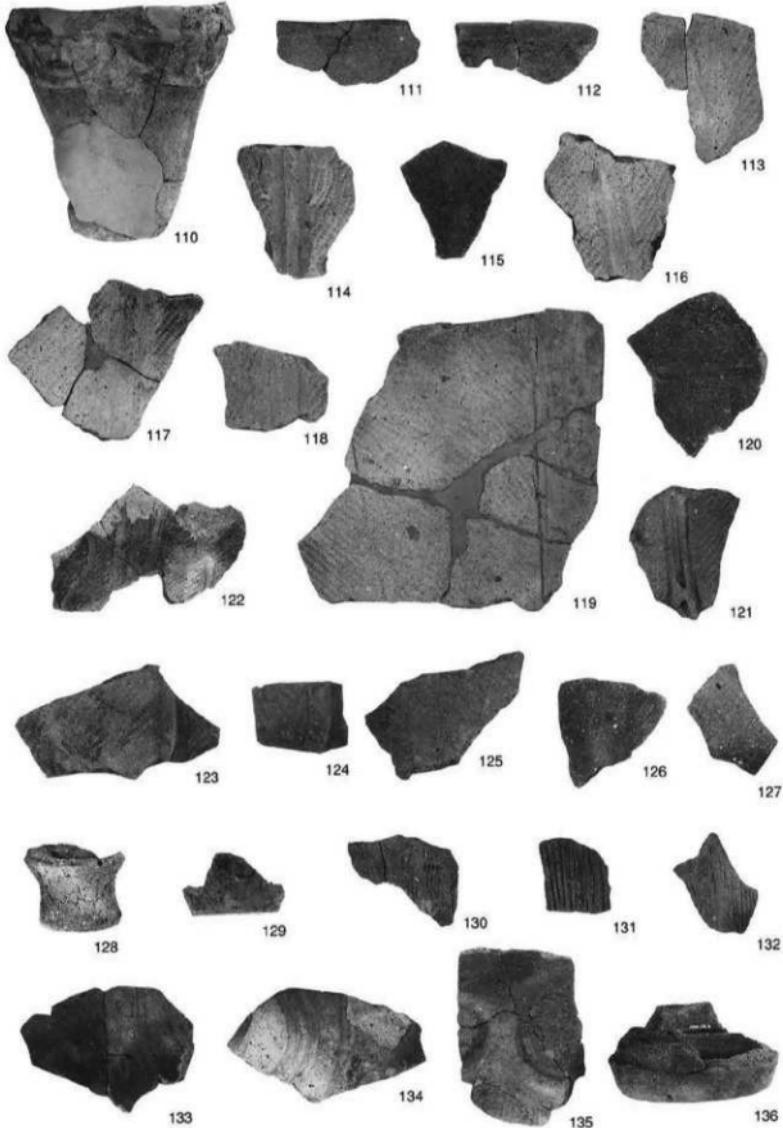
図版  
51



グリッド出土土器 5

西野牧小山平遺跡

図版  
52



グリッド出土土器 6

西野牧小山平遺跡

図版  
53



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



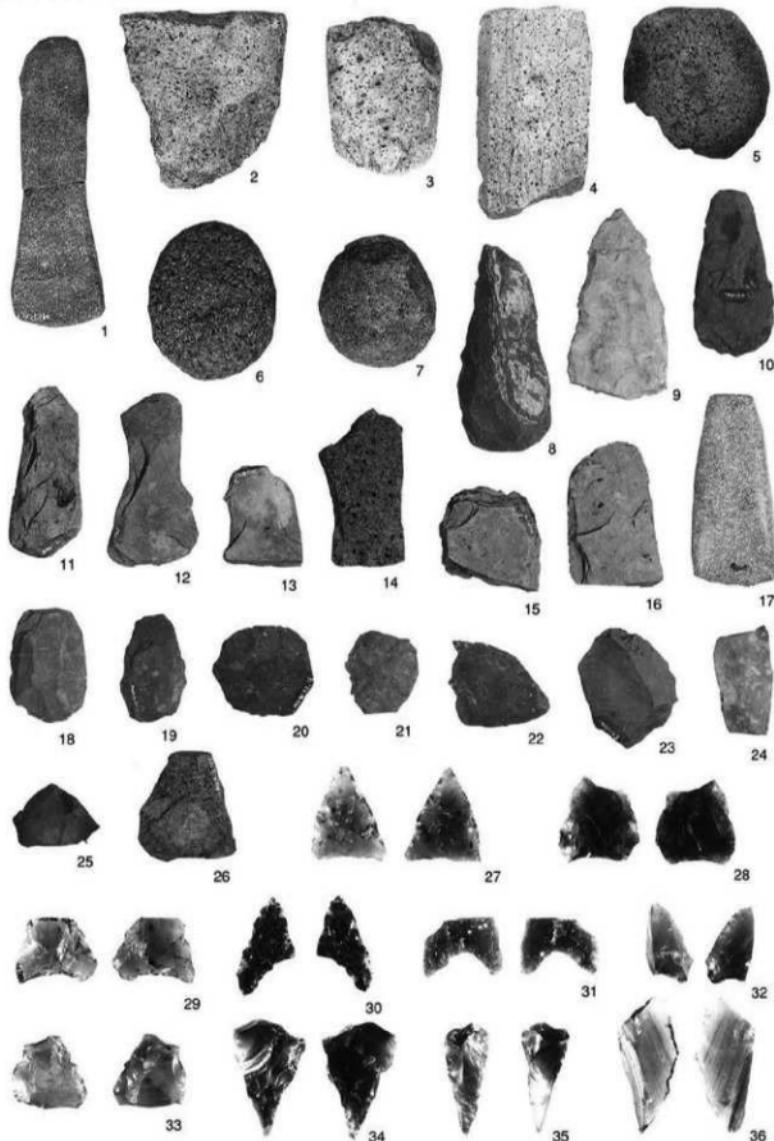
149



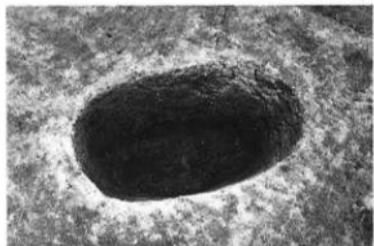
148

西野牧小山平遺跡

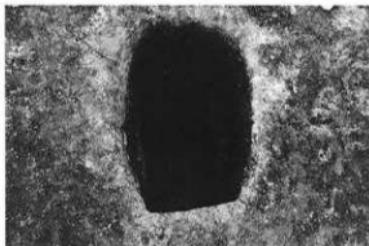
図版  
54



グリッド出土土器



1. 1号土坑



2. 2号土坑



3. 1号井戸跡



4. 石棒製作実験品



5. 恩賀集落内所藏石棒



6. 同



7. 遺跡現況（碓氷・軽井沢インターチェンジ）



8. 大山と関越自動車道

附 編

初 鳥 屋 遺 跡

秋池 武



地図1 大山周辺地形図

## はじめに

初鳥屋遺跡は筆者が大山から供給される軽石により、縄文時代中期後半の石棒を製作した遺跡として大山東にある恩賀遺跡出土石棒も含め、昭和39、41年に報告した遺跡である。この様な経過から、昭和55年度上信越自動車道建設に伴う遺跡分布調査では、当時文化財保護課職員であった筆者と西田武彦が松井田下仁田間の現地調査を実施し、先の状況から大山東山麓分を包蔵地として報告した。(注1) 昭和61年には恩賀小山平地区から石棒2本が出土し松井田町誌に掲載された。(注2)

その後、昭和63年、上信越自動車道の建設に伴い、松井田町遺跡調査会から委託を受けた山武考古学研究所が本調査を実施、西野牧小山平遺跡が石棒製作遺跡であることを明らかとした。

この様に特定の山をめぐり縄文時代の石棒製作が行われていることが知られたのは、この大山が唯一の例であることから、同トンネル西口下方にある初鳥屋遺跡との比較、検討が不可欠となり、改めて初鳥屋遺跡の状況を記すこととなった。

### 1 初鳥屋遺跡の調査経過

初鳥屋遺跡から土器や石器が出土することは、「下仁田今昔譜」に記載されたのが初見である。(注3) その後、昭和39年、当時の筆者が父を通じ西野牧小井上澁太郎氏宅からの土器の出土を知り、同氏宅に逗留し分布調査を実施した。この時、加曾利E II式、称名寺式土器、堀之内式、加曾利B式土器片、石器に混じり数本の石棒が保管されていた。周辺調査でも新たに石棒を発見しその石棒総数は15本となった。この内、土器片を昭和39年10月「砺木考古学研究No.6」に報告し、(注4)ついで、この遺跡が石棒製作遺跡としての可能性が高いと考えられたため、昭和41年1月、若木考古に「群馬県下仁田町初鳥屋出土の石棒」と題して石棒製作を行っていた遺跡であること、石棒製作の工程と技法が窺えること。石材は遺跡北東に聳える大山の安山岩で、沢中にある軽石を利用したことなどを報告した。(注5) また、その後、昭和42年には、卒業論文「関東地方の石棒について」で初鳥屋遺跡と恩賀集落等の石棒石材供給、石棒製作等について記し、大学に提出した。

今回、本報告では、当時扱った初鳥屋遺跡出土の17本、恩賀集落出土2本の石棒と、その後、同遺跡から今日までに発見された石棒及び石棒未成品14本の合計33本について報告することとした。なお、前回までと異なる主な点は、新規石棒も加え遺物の形態的、技術的相違を詳細に検討し、5段階の工程とした点であるが、その区分の比較は概ね下記の通りである。

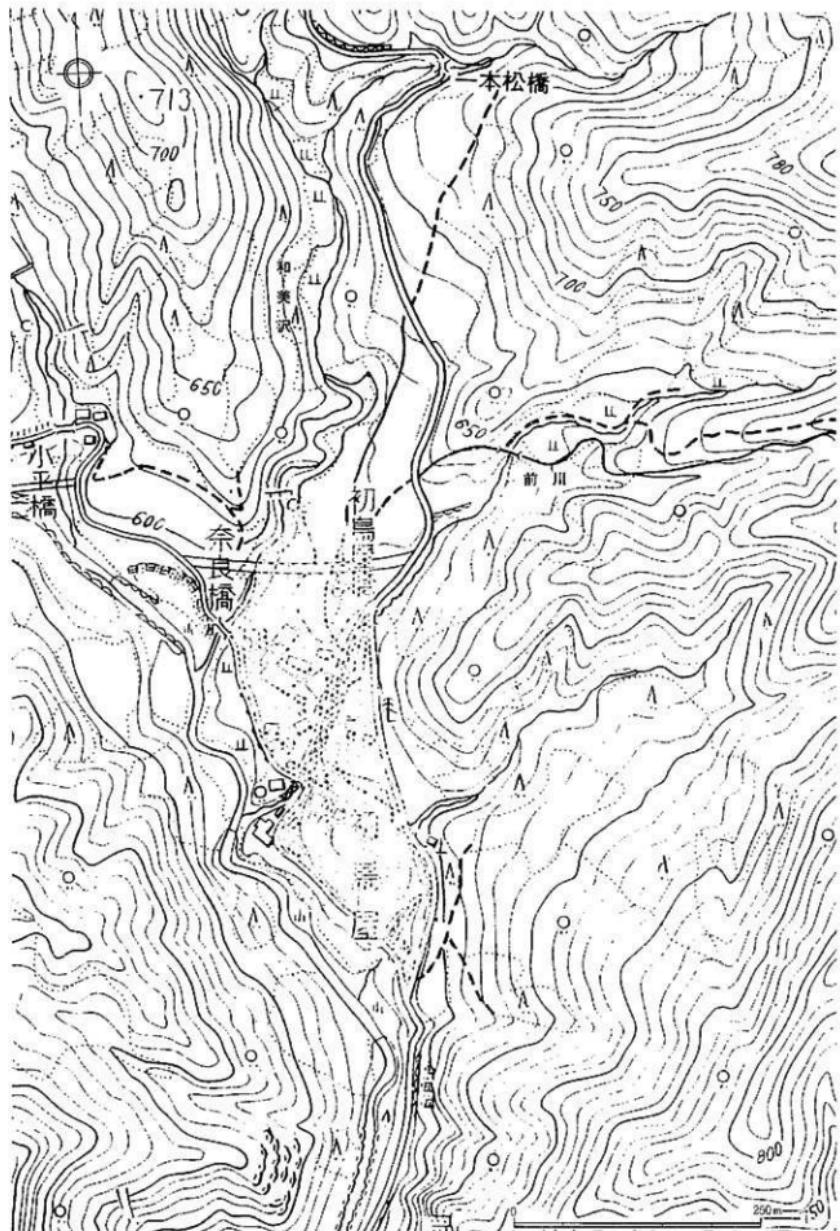
製作工程区分の経過

	区分				
	A類	B類	C類(完成品)		
若木考古	第1次加工工程	第2次加工工程	整形打工程	完成品	
卒論	第1次工程	第2次工程	第3次工程	第4次工程	第5次工程
当報告書					

### 2 初鳥屋遺跡の概要

#### (1) 遺跡の立地 (地図1 初鳥屋遺跡・恩賀遺跡位置図) (地図2 初鳥屋遺跡)

初鳥屋遺跡は、群馬県甘楽郡下仁田町大字西野牧字初鳥屋にある。この地域は、長野県千曲川、佐久平



地図2 初鳥屋遺跡

利根川支流が近接することから、表日本と裏日本を結ぶ要地として、縄文時代の岩陰遺跡千駄木遺跡、長野県側には蛭井沢茂沢石堂遺跡、古代入山祭祀遺跡があり、東山道、中山道、信越線、国道18号線、上信越自動車道、新幹線等が近くを通過する、原始古代から今日に至るまで交通上重要な地域である。また、初鳥屋遺跡の一角には初鳥屋八十八カ所靈場があり、ここに大山からの柱状石材を利用した供養塔などが石仏とともに建てられている。

遺跡は大山西南山麓で、矢川川河岸段丘を作り出した標高約600mの傾斜地にある。ここは、和美沢、前川が矢川川と合流する場所で、西側を比高差約10~20mの矢川川、北側を和美沢が区切り、西側と東側は大山山麓からびる山裾により区分され、矢川川流域の中では日当たりも良く開けた場所となっている。この遺跡中央部には大山南面に流れを発し、遺跡を貫流して矢川川に流入する急傾斜の、前川が流れ下っている。遺跡の現状は、宅地と主にコンニャク畠として利用されている。(写真2)

## (2) 石棒出土状況と時期

初鳥屋遺跡からの石棒出土は、この前川右岸と和美沢に挟まれた遺跡北よりの地域が中心である。昭和39年から41年にかけての出土品も、前川右岸にある小井土氏宅周辺から出土しており、縄文式土器、石斧、石簇、皿、石棒が同様に保管されていた。また、昭和41年夏に、窯で工場を建設した際にも加曾利E II式、称名寺、堀之内式等に属する土器片とともに有頭石棒頭部が出土し、これを実見する機会があった。これらの状況から、本遺跡の石棒は縄文時代中期後半から後期前半までの時期に位置づけすることが妥当と思われる。また、当時、前川左岸畠地からも表面採取により石棒及び石棒未成品の出土が見られ、この地域も含め遺跡

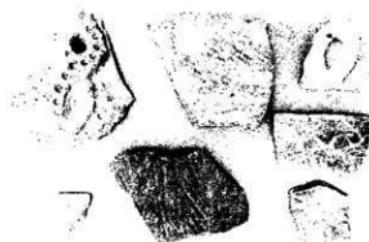
と判断した。この時石棒は小井土氏宅保管分と合わせ合計17本であった。その後、今まで、新たに13本の石棒と原石数点を確認し、同様に保管されている。この結果、初鳥屋遺跡出土石棒は現在までに合計31本が確認されたこととなる。なお、当時、同時に調査した大山東の恩賀集落内の神社入り口でも数本の石棒があり2本を図化したのでここに含めて紹介する。

## (3) 出土石棒

### ① 石棒の概要

昭和41年度で扱った初鳥屋分17本の石棒中には完成品と未製品があり、これらの中には途中破損により廃棄されたと考えられるものなども含まれている。形態的には有頭石棒4本、無頭石棒5本、形態不明8本であるが、有頭石棒中には頭部と頭部加工中のものもある。また、不明の物の中には初期加工品のため区分不能のもの、胴部のみで判別不能のものも含んでいる。恩賀遺跡出土の2本は、1本が有頭石棒完成品で、他の1本は未完成品である。また、その後、初鳥屋遺跡から出土した石棒14本につ

右上石棒頭部No.17



昭和41年初鳥屋遺跡工場建設により出土

いては、本報告書ではNo.18~31までにその概要を示したが有頭石棒3本、内1本は点紋縞泥片岩製、無頭石棒1木、形態不明10木である。他に柱状を示す岩石もあるが、加工の施されていないものについては省略した。

なお、本報告書体の所在は、次の通りであるが、両遺跡とも当時遺跡内に存在した石棒で、その後の所在が不明なものがある。小井主塙太郎氏宅19木 秋池武5木 初鳥屋遺跡7木(不明) 思賀集落2本(不明)。

## ②石棒製作

初鳥屋遺跡及び思賀集落出土の石棒は、直物に残る原石自然面、形状、加工痕等から当時の原石採取、製作工程、製作技術等を推定することが可能である。ここでは、これらを手掛かりに石棒製作工程を5工程に分類し、その工程を明らかにして行くこととする。但し本遺跡ではそれを加工する施設、工具類等については、確認できていない。

### ・加工技術

石棒に残る剥離痕、打痕を観察すると、加工段階に応じた荒削、調整打、整形打、研磨製の加工技術が駆使されていることが観察できる。ここでは、その方法について定義付けしておくこととする。

荒 削=石材を横にしたまま角、基部、先端などを斜め上方から剥離する方法で、強く施され、剥離面が広く深い。

調整打=荒削で生じた角や残された部分を剥離するための打撃で、目的の場所に連続的に行う。荒削痕と重複し打撃痕は荒削より小さく、整形打痕より荒く細長い打撃痕。打撃方向も一定していない。

整形打=荒削、調整打を受けて行なわれる後半の敲打で、連続的に全面に施す細かい打撃。調整打痕を修正しながら全体の形を整え目的の形態を作成する。やや荒い打撃と仕上げを意識した細かいものがある。

研磨製工程=調整打終了後施す磨製。表面は磨製となるが深い整形打痕が残る。

### ・加工工程

加工工程は、転石である石材に加工を施す特徴により5段階に区分したものである。最初の第1次工程は転石に対する初期の加工、最終段階に当たる第5次工程は完成品及びこれに近いものである。これらの工程の特徴を検討することにより、石棒製作方法を明らかにして行きたい。各工程の目的と形態、加工特徴等の概要は以下の通りである。

第1次工程=角柱状転石等の先端、基部に加工し上下を整えるとともに、胴部に対しては角を取り除くことを目的とする。

角柱状及びこれに準じた転石の天地を荒削りで剥離する。ついで胴部の角及び凸部を剥離する。作業後は自然面が基部から先端部にかけて帯状に残る。規格にあった転石では、先端、基部は加工が施されないものもある。

断面が隅丸方形、長方形等のものが多い。

打撃は荒削で、強く行われ、剥離痕は広く、深く残る。

第2次工程=打撃は荒削の補正と、主に削部中心に丸味を作り出すことを意識した調整打が施される。荒く剥離された胴部、角部分の補正と残された不必要な自然面の剥離を行う。

胴部各面に丸味が与えられ、断面は方形から次第に梢円形に近くなる。

基部、先端にも荒削が施される。

第3次工程=先端、基部は荒削であるが、胴部を中心に丸みを整える敲打を行う。

やや荒い敲打を加えて円柱化をはかる。胴部には荒削、調整打痕はほとんど残らなくなる。

胴部の断面は椎円形から円形となる。

基部、先端部分は荒削痕がそのまま残るものと、調整打が施されるものがある。

第4次工程=基部と胴部、頭部等全面を整形打で整える。無頭石棒と有頭石棒が工程上区分される。

全面にやや荒い敲打が施される。

無頭石棒では基部が整形打により平坦に加工される

有頭石棒では頭部、頭部、胴部の加工が敲打により行われる。特に頭部の作り出しと頭部の削除が特徴的である。

第5次工程=完成品、ほぼ完成品と考えられる石棒。有頭・無頭石棒とも整形打により最終的調整が行われる。

細かい敲打が行われる。

磨製が施されるものがある。

磨製の有頭石棒は頭部の加工が更に進み丸みをもつ。

### ③各石棒の詳細

(既報告分17本) (第3・4図 初鳥居遺跡出土石棒図 写真6・7)

遺物番号	全長(cm)	幅(cm)	加工工程	全体の形	背面	加工方法
1	40.0	16.0	1	・完形であるが未製品 ・基部が太く先がやや落くなる ・各面の角が削離されているが先端部は未加工	頭大底方形	石材の角を削離中 ・四カ所の角を窓型により剥離し調整打も施している ・先端部及び各面に平板な自然面が残る ・基部を荒削している ・自然面が多く最も初步的な加工段階 ・胴部は右有頭・荒削二程
2	45.0	14.5	1	・完形であるが未製品 ・瓦柱状 ・断面は凹凸のある円形 ・下に破損面あり	不整形 横円	右方に充てんを施し全体を調整中 ・二条の凹凸のある自然面に挟まれた部分には角の削離痕が残る ・対側には頭部板Cが施され大きな削離痕が連続して残る ・荒削板に対して調整打B、Aが施されている ・先端、基部荒削工程
3	49.0	12.5	2	・完形であるが未製品 ・頭頂部は自然面のまま ・基部は荒削のまま	台形	石材両サイドを加工中であるが、右側面の加工が先行している ・表面、裏面には約8cmの平らな自然面が残り、頭頂部で交わっている ・右側側面は荒削Dで、側面が直角になる様荒い削離を行い、自然面側から調整打Aにより調整している。調整打BはDの凹面を調整している ・右側面は左側より加工が進み整形打Cでは自然面との段差を削離する調形打Cが右方向から施され、また、頭部には深い調整打が見られる ・頭部指本有

4	28.0	11.5	2	・破損? で未製品 ・右材として使い ・基部、先端部の加工が明確でない	角の残る円形	・脚部の丸味を作る段階に入っている ・右材としては短形 ・表面に平板な自然面が残る ・自然面と真をつなぐ荒いAの剥離が乳頭からある ・裏側面は丸みを出す荒い整形打が施されている
5	33.0	12.5	2	・破損? で未製品 ・太い筋状の形態を示す(上下不均) ・基部は先削のみ	凸凹の円形	脚部の丸味を作る段階に入っている ・石材の全面を大きな荒削で剥離し円柱を作り出している ・自然面が先端部と基部に2面残る。 基部のものは粗んでいる ・荒い筋状打により荒削の凹凸を整え彫線を作り出している ・先端部にも加工をはじめている ・脚部拓本有
6	24.0	11.5	3?	・破損で未製品 ・基部と思われる ・基部は平坦に処理されている  ・完形品で未製品 ・草筋、有頭石棒か不明	円形	脚部が整えられている ・全面に敲打が施され全体として良く加工されている ・荒削の深い剥離痕が部分的に残る ・脚部拓本有  全体の形を整えた後、脚部の加工に入った。基部頭部に荒い剥離痕が残る ・やや深い敲打が施されている。
7	44.0	17.0	3	・基部が太く先端がやや細くなる ・左側縁は直線的であるが右は凹凸がある	円形	・衣装及び頭部に自然面が残る、裏面の自然面は幅8cmで、帯状に頭部まで残る ・基部、先端部は荒削痕が残る ・脚部拓本有
8	65.0	23.0	3	・完形であるが未製品 ・頭部、有頭石棒か不明 ・全体にぶつ ・原石の影響でやや歪がりがある	円形	全体の形を整えた後、脚部の加工に入ったが、基部、頭部の形状が残る ・脚部には裏面に部分的に湾曲した自然面を残す ・脚部には荒い敲打が全面に施されている ・基部は荒削痕のみ ・頭部には荒削痕が大きく残る ・脚部拓本有
9	55.0	28.0	3	・欠損、本成品 ・本造謡の中では最も太い ・左側縁に凸凹がある	円形	脚部加工中 ・原部全面に荒い敲打が施されている ・自然面は残らない ・基部、頭部は破損している
10	18.5	14.0	4?	・欠損、完成品に近い基部か ・基部が斜めに整形されている	円形	・整形打が全面に施される ・荒い敲打が施されている ・脚部拓本有
11	49.0	16.0	4	・無頭石棒未製品? ・柱状で先端部分がやや細くなり、底点、基部がが平らに処理されている	やや格円	脚部調整中である。先端部には荒削痕がある ・斜面に荒い敲打が施される。 ・幅7cmの平坦な自然面が基部から先端にかけて帯状に残る ・基部には荒い整形打が施されている ・脚部拓本有
12	42.0	13.0	4	・完形で有頭石棒未製品 ・基部から先端にかけてほぼ同じ大きさを持つが、頭部の作り出しが行われている ・基部は平面	格円形	全体の形を整えた後、頭部作り出しに着手 ・基部から先端にかけて全面に荒い敲打が施されている ・頭部には有頭石棒を意識した敲打を施し、頭部の作り出しが見える。 ・基部に荒い部分に荒削の剥離痕が残っている ・脚部拓本有

13	38.0	15.0	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>完形、有頭石棒未製品</li> <li>基部が太く先端がやや細い</li> <li>No.8同様有頭石棒製作中の可能性が高い</li> </ul>	円 形	<p>全体の形を整えた後、頭部の作り出しに着手</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>深い凹打が全面に施されている</li> <li>窪部の痕跡が一部に残る</li> <li>基部に近く表面と頭部に平板に近い自然面が残る。</li> <li>頭部にも自然面が一部残る</li> <li>頭部から石核棒に頭部作りだしを意識した加工が伺える</li> <li>頭部拓本有</li> </ul>
14	39.0	14.5	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>完形</li> <li>無頭石棒完成品</li> <li>基部から先端にかけて同じ太さをもつ</li> <li>基部は平坦、先端は丸みを持つ</li> </ul>	円 形	<p>全体の作り出し完了</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全面に凹打が施され形が整えられている</li> <li>済ませ持つ自然面が基部前面に残る</li> </ul>
15	24.0	14.0	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>破損</li> <li>有頭石棒</li> <li>横広がりの丸みのある頭部を持ち、頭部の括れば浅い、頭部に向かって広がりを持つ。その先は欠損している</li> </ul>	円 形	<p>有頭石棒完成品に近いもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>細かい凹打が全面に施され、形が整えられている</li> <li>基部は破断している</li> <li>頭部拓本有</li> </ul>
16	32.0	13.0 頭部	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>破損</li> <li>有頭石棒</li> <li>横広がりの丸みのある頭部を持つ。頭部のくびれはNo.14より強い</li> </ul>	円 形	<p>有頭石棒完成品に近いもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>細かい凹打が全面に施されている。頭部に自然面が残る</li> <li>頭部は横長の楕円、頭部が強くくびれる</li> <li>基部全体に亀裂が生じ風化が進む</li> <li>基部は破断している</li> <li>頭部が丸味を持ちNo.14より粗Tが進んでいるか</li> <li>頭部拓本有</li> </ul>
17	6.0	11.6	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>破損</li> <li>有頭石棒（頭部のみ）</li> </ul>	円 形	<p>有頭石棒完成品</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全面研磨されているが、形状打痕は残る</li> <li>頭部は破断したまま</li> </ul>

(その後確認分) (第5図 初鳥屋遺跡出土石棒図 写真7)

遺物 番号	全長 (cm)	幅 (cm)	加工 工程	全体の形	断面	加工方法	
						石材の角を剥離中	先端、基部の加工
18	85.0	27.0	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>完形だが未成品</li> <li>先端と基部は丸削で大まかに切削されている。</li> <li>未加工部分が多い</li> <li>大型品</li> </ul>	台 形	<ul style="list-style-type: none"> <li>石材の角を剥離中</li> <li>先端、基部の加工</li> <li>右側面の加工はあらかじめ10cm前後の削離で荒削が施され、ついで残されたこの間を剥離している</li> </ul>	

19	40,0	11,5	1	破損品で未成品 ・先端と基部は大きく割れ ている	三角形	断面三角形石材の左下と右上角の剥離をしている ・右下の角は未加工である ・右上では調整打抜きが右側から施されている ・胴部拓本有
20	35,5	11,0	1	・完形品であるが未成品 ・角の剥離が始まつばかりで未加工部分が多い	方形	原石の角を剥離中 ・四カ所の角を荒削により剥離している ・自然面が四面に残る ・自然面が多く最も初步的段階 ・胴部拓本有
21	25,0	12,5	1	破損品で次成品 ・先端部が破損している ・細身である	方形	右側面を荒削中 ・右側面は表裏から荒削されている ・荒削打点が残る
22	79,0	21,0	2	・完形品であるが未成品 ・胴部作り出し中で、表裏直、基部に未加工部分が残る ・大型品	自然面 平坦の 円形	胴部両側面を加工 ・胴部両側面を調整打、菱形打で丸味を形成している ・荒削痕が右側に大きく残る ・裏面がやや自然面の剥離がんんでいる ・表裏、基部に自然面が大きく残る ・胴部拓本有
23	48,0	12,5	3	・完形品であるが未成品 ・表裏面に未加工部分が残る	凹凸の ある円 形	胴部丸味を整形中 ・阿波は整形打により荒削痕はほとんど残らない ・裏面に残る自然面は未加工であるが今後加工される ・低鏡に凹凸があることから、今後全体に施される敲打により修正される ・基部の加工は敲打が施されているが、頭部は未加工 ・胴部拓本有
24	50,0	25,0	3	・破損品で未成品 ・先端が大きく割れている ・表裏と基部に自然面が残る	円形	頭部丸味を調整中 ・菱形打により全面の加工中、石よりの加工は左より荒い ・裏面自然面は、平坦のままである ・胴部拓本有
25	27,5	12,8	4	・成品で有頭石棒 未成品 ・基部が斜めに大きく破損 している	凸部を 持つ円 形	全体の形を整えた後、頭部作り出しに着手 ・頭部の形が整えられている ・圓弧と側に見られるよう頭部から胴部の敲打が行われ、頭部の作り出しが行われている ・圓弧右側には未加工部分が残る ・基部破損の為廃棄したものと思われる ・胴部拓本有
26	28,0	12,6	5	・破損品、無頭石棒? ・基部が破損している	円形	頭部線ともに整えられている ・器面の菱形打はやや荒い ・器面加工に比べ、基部の加工が見られないで破損品としたい
27	28,5	13,5	5	・破損品 ・尖りがあることから先端部と考える	円形	側面等面とも整えられている ・器面の敲打はやや荒い ・胴部拓本有

28	38.2	11.5	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>破損品、(有頭石棒)</li> <li>頭部と先端が破損している</li> <li>中央やや下方に最大径がある。</li> <li>上方破損部は頭部につながる筋らみが僅かに感じられる</li> </ul>	円 形	<p>器元全体に整形打が施されている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>底部の断面は完全に円形に仕上げられている</li> <li>やや荒い敲打である</li> <li>有頭石棒破損品と思われる</li> <li>胸部拓本有</li> </ul>
29	12.6	11.2	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>破損品、右頭石棒</li> <li>頭部はやや膨張で、腹部に近い場所に最大幅がある</li> <li>新部で成損している</li> </ul>	円 形	<p>頭部に細かい整形打が施されている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全体に細かい敲打で整形されている</li> </ul>
30	5.5	11.5	5	腹部破損品	円 形	<p>腹部に荒い整形打が施されている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>石の劣化が激しい</li> </ul>
31	30.0	13.2		<ul style="list-style-type: none"> <li>破損品、右頭石棒</li> <li>点状鉛片岩質</li> <li>茎部を破損している</li> <li>頭部が小さく、最大計が胴にある胴張り風</li> <li>投入品</li> </ul>	楕 圓	<p>全面に磨擦が施されている</p>

思賀遺跡出土（既報告2本分）（第4図 初鳥屋遺跡石棒岡中に含む）

造物番号	全長(cm)	幅(cm)	加工工程	全体の形	断面	加工方法
1	22.5	20	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>上下破損の本製品</li> <li>無頭、有頭不明</li> </ul>	長方形	<p>左右側面に調整打が施されているが、全体として丸味がない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>側面は丸味を出すために荒い敲打が施されている</li> <li>表面に自然面が大きく残る</li> </ul>
2	24.5	14	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>有頭石棒完形品</li> <li>再生品可能性有り</li> </ul>	円 形	<p>全面に整形打が施されている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>底部周辺にも加工があり、底に丸味を持つ</li> <li>底部底面を除き敲打が全面に施されている</li> </ul>

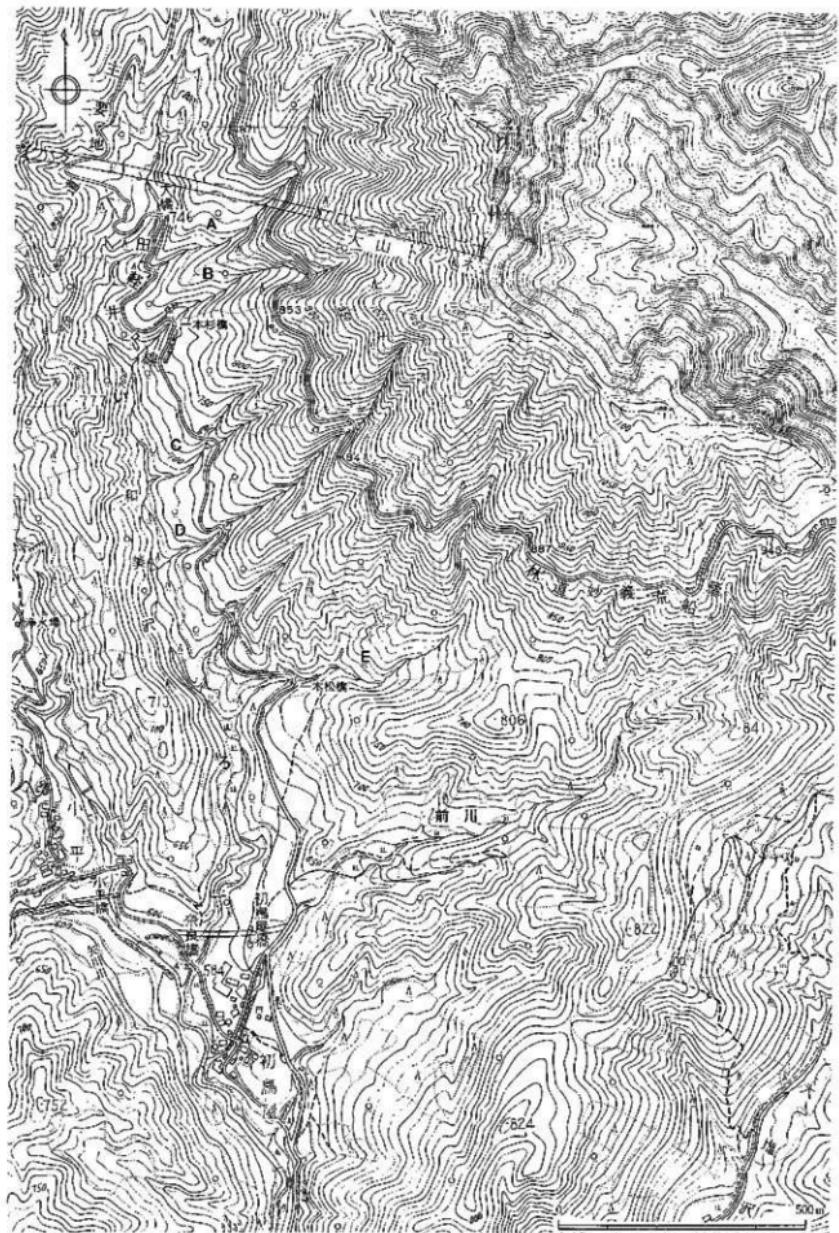
### 3 石棒原石の分布とその利用（地図3 大山から初鳥屋遺跡への石棒供給ルート図No.3・4・5）

大山と初鳥屋遺跡との距離は山腹まで約1km弱でさほど遠距離でない。しかしながら遺跡出土の石棒原石を見ると数十キロ以上の重量のあるものが多いことから、より効率的石材採取が理想とされる。このことを前提として山腹、沢、河川での崩落、運搬状況、遺跡での石棒原石、石棒出土状況等を総合的に検討すると次の3ケースが考えられる。

#### (1) 大山山麓での原石採取

大山山腹で岩盤から崩落した転石を採取し、遺跡に持ち帰り利用する。または、山麓で加工し製品を持ち帰る場合。

・大山西側から南側山腹中の転石は、適度の破碎、剥離が乏しく、新鮮な岩石が少ない。



地図3 大山から初鳥屋遺跡への石材供給

- ・この遺跡出土の石材条件を充たすものは得られにくい状況である。

## (2) 大山山腹～和美沢～初鳥屋遺跡ルートでの原石供給

### ①山腹の沢筋

鷹越自動車道上信越線大山トンネル出口下にある和美沢には、大山岩盤から崩落した転石が多量に流入している。特に、ここに架かる大橋から矢川川合流までの間約1.5kmにあるA～Eの5本の沢には、多くの転石がある。昭和50年頃までに崩落防止の為沢砂防堤が設けられた場所が多いが、依然として多量の転石が見られる沢もある。遺跡から最も近いE沢まで約700mである。

#### A沢

- ・和美沢へ大量に流入する沢の中で最も上流となる。

- ・標高約1,000mからはじまり標高約750m地点で和美沢に合流する。山腹から多量の転石があるが最大長さ150cm×太さ30cm程の角柱状転石が含まれる。

#### B沢（一本杉橋）

- ・標高約950mからはじまり標高約700m地点で和美沢に合流する。途中一本杉橋を通過する。山腹から多量の転石がある。転石の規格はA沢同様であるが、和美沢への流入量が多い。

#### C沢

- ・標高約800mからはじまり標高約650m地点で和美沢に合流する。2本の沢が途中で合流している。この沢では大型転石は少なく、風化が進み黄色のものが多い。

#### D沢（一本松橋）

- ・標高約1,000mからはじまり標高約600m地点で和美沢に合流する。途中一本松橋を通過する。ここでは砂防堤が少なく自然の崩落状態が観察できる。大型転石もある。転石の規格はA沢と同様である。

#### E沢

- ・標高約800mからはじまり標高約600m地点で和美沢に合流する。他の沢と比較すると傾斜が緩やかで大型転石の崩落は少なく、小型のものが多い。

### ②和美沢

和美沢は上記5本の沢から流入した転石を初鳥屋遺跡下まで運搬している。その概要は以下の通りである。

#### (い) 地点

- ・B沢からの流入が多く、最大長さ約150cm×太さ約30cm、約70cm×約25cm程の角が取れ始めた角柱状転石が混入している。

#### (ろ) 地点

- ・現状では砂防堤ができ石棒石材として利用可能なものは上流に比較して少ない。
- ・砂防堤が完備しない以前では5本の沢から和美沢への泡入はかなり多かったものと考えられる。
- ・遺跡の中でも石棒未成品を多く出土する遺跡下に沢があり、運搬には近距離である。

## (3) 大山～前川～初鳥屋遺跡ルートでの原石供給

- ・標高約800mからはじまり初鳥屋橋、初鳥屋遺跡を通過して標高約550mの矢川川に流入する。
- ・和美沢に直接下るA地点からE地点の沢ほど急傾斜でないが、沢底部が岩盤で流下しやすい。
- ・沢中には約60cm×約25cmの角柱状転石が多い。
- ・初鳥屋遺跡手前に石材たまりがあり、数十メートルで石材が得られる。

・最も多く石棒製品を出土している小井土氏宅前を前川が貫流している。

#### 4 各項目のまとめ

##### (1) 遺跡の特徴

当遺跡の最も特徴的な点は、大山の軽石を石材として縄文時代中期後半に石棒製作をしたもので、この時代の生産活動を示す遺跡である。この遺跡が石棒製作遺跡として成立したのは、時代的要請の中にあって、加工可能な大山の岩石が存在したこと、この岩石に自然の力が加わり破砕、剥離、研磨等が行われ良好な石材となり遺跡近隣まで運んでいたこと、石棒として完成させる技術が備わっていたこと等を理由としてあげることができる。

##### (2) 出土石棒の特徴

出土石棒を総合すると、無頭石棒と有頭石棒（単頭）がある。無頭石棒は大型石棒である。有頭石棒は当遺跡から完形品の出土はないが、頭部、頸部、胴部まで完全な形のものと、胴部途中まで丈の短いものがある。今回報告中最大の規格のものは、未完成品で第1次工程に含まれるNo.18で、長さ85cm、太さ27cmの規格を持っている。最小のものは破損品で長さ不明であるが、太さ11cmである。以下それぞれの特徴について記載する。

- ①出土石棒は完形品、完成品とも少なく未完成品、破損品が多い。完成品に近いものはいずれも敲打製であるが、有頭石棒頭部…点が磨製である。
- ②石材が新鮮なものが多い。
- ③完形品12点の規格平均は、長さ約50cm×太さ約16cmである。
- ④他の多くの遺跡で見られる、多孔石等の二次利用の痕跡が見られない。
- ⑤形態的には有頭石棒7本（すべて単頭、内1本が点状縦溝片岩裏）と無頭石棒6、不明18本である。不明のものは製作途中で判断できないものである。明らかに無頭と判断できるものに比べ有頭の占める割合が高い。これは、有頭石棒主体の生産であったのか、工程上破損率が高かったのか決め手となるものはない。

##### ⑥無頭石棒の特徴

- ・当遺跡の中で無頭石棒と判断できるものは少ない。他の遺跡出土品中には無頭のものが見られる。
- ・頭部、剝部、基部の太さの差が少なく、基部が平坦に整えられる。
- ・無頭石棒の規格は、太さ十数cm、長さ50cm程度で、長さと太さの比は二対一程度のものが多いが、安中市出土の県立博物館収蔵品のように1対1に及ぶものもある。
- ・無頭石棒中には有頭石棒製作目的の未完成品や有頭石棒の調節部破損品も含まれる可能性もある。

##### ⑦有頭石棒の特徴

###### 形態（いずれも単頭で、次の2種類がある）

- ・長径品。当遺跡から完形品出土がないが、有頭石棒では長さが60cm程度で頭部が扁平で丸味を持ち、頭部がやや大きくなっている。胴部では中央やや下寄りに最大幅がある形のものが想定できる。
  - ・短径品。頭部、頸部、胴部上半部のみのもので、胴部基部に加工が行われるもの。（再生品？）
- 頭部（通常角張りのものから加工が進み、丸味をもつものとなる）
- ・形が角張り横張のもので、太いものでは頭部のくびれが少ない。
  - ・角のとれた漫頭型のものでは頭部の括れが大きい。

・磨製のものは頭部丸みが強い。

### (3) 初島屋遺跡出土石棒製作工程 (第1図 石棒加工工程図・第2図石棒剝離打痕拓本図)

本遺跡及び恩賀遺跡出土の石棒を、転石から始まる加工工程に従い系統化したものが第1図の「石棒加工工程図」で、同様に各石棒胸部の剥離痕、打痕を拓したのが第2図の「石棒腹部打痕拓本図」である。これをもとに本遺跡出土の石棒製作工程をまとめると以下の通りである。

第1次工程 = 6本 (遺物No.1、2、18、19、20、21)

- ・角柱状石材の先端、基部と胸部の角を荒削りにより取り除くことを目的としている。
- ・基部角の剥離を行う点に特徴がある。角柱材角の剥離は、角を打点として四カ所に施される。大型のものではこの剥離は、10cm程の間隔で荒削を行い、ついで残ったこの間を剥離し、側線を整えている。(No.18) また、この加工により生じた各角を再度剥離し胸部の丸味を出す下地とする。No.18、20では未加工の角が残る。

第2次工程 = 5本 (遺物No.3、4、5、22、恩賀1)

- ・それぞれの遺物に基部と先端に荒い加工や自然面が残る。
- ・胸部には角と自然面を調整し丸味を持たせる調整打が行われる。残された自然面と既加工部分との間に残る内部に調整打を行い、連續性を図るために、断面は角柱状から円柱状に近くなってくる。(No.3、5、22) 恩賀1では胸部に丸味を持たせる加工が施されるがやや扁平である。No.3では左側はこれからこの加工が施される。

第3次工程 = 6本 (遺物No.6、7、8、9、23、24)

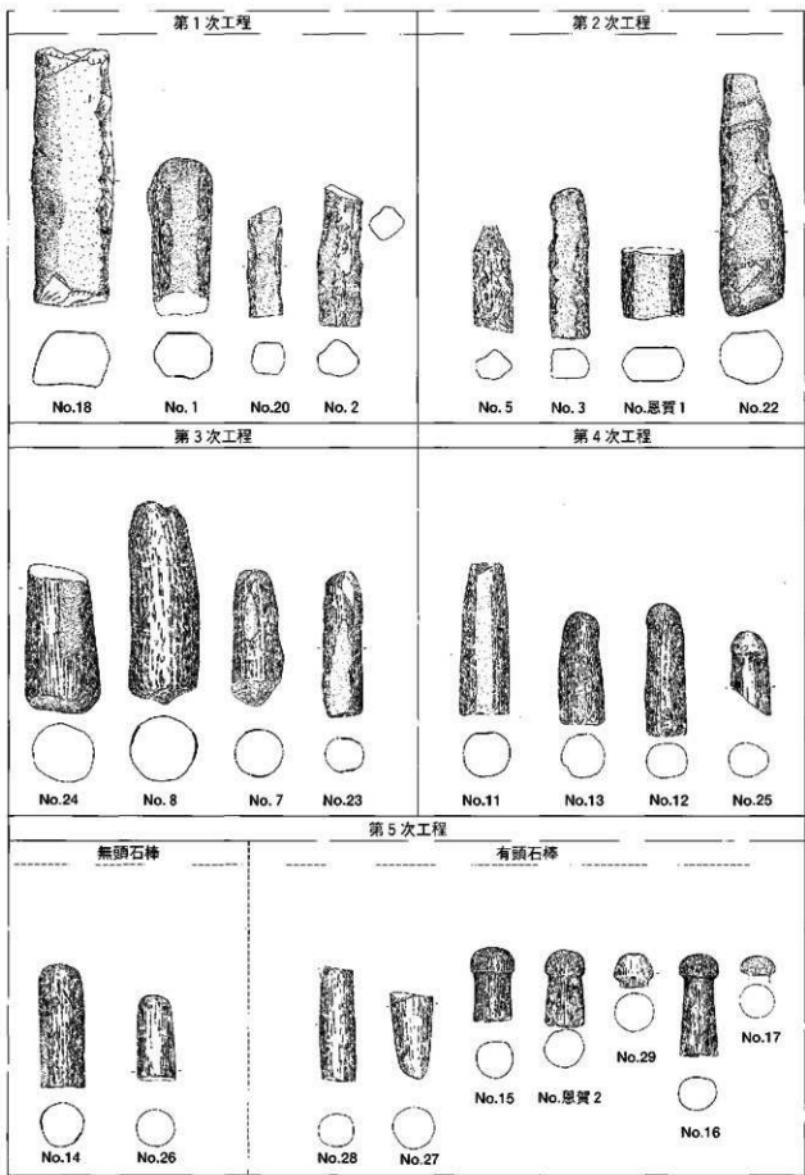
- ・凸凹のある複数ないし円形断面
- ・先端、基部は荒削であるが、胸部を中心に丸味を整える加工を行う。
- ・やや荒い敲打を加えて円柱化をはかり、胸部には荒削、調整打痕はほとんど残らない。
- ・各遺物とも、まだ自然面が表裏に残されている。No.23、24では基部に自然面が残る。

第4次工程 = 5本 (遺物No.10、11、12、13、25)

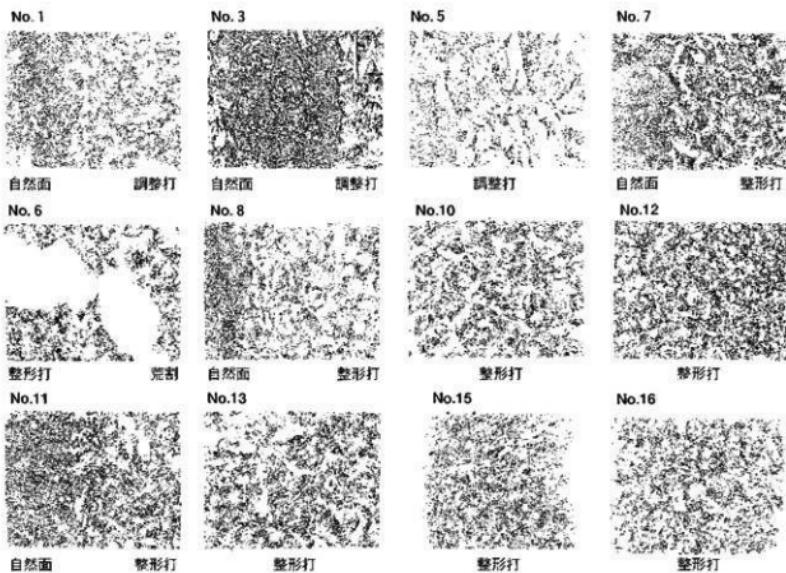
- ・円形ないし複数円形断面
- ・整形打を全面に施す。整形打は荒い敲打と細かい敲打とがあり、仕上げ時に細かいものが主に使われる。
- ・この加工で有頭石棒と無頭石棒が区別できる。
- ・No.11では基部が平坦に加工され無頭石棒の可能性がある。No.12、25では有頭石棒を作り出す為の整形打が施されている。No.25の剥離痕は荒い。剥離痕は拓本No.10、11、13が荒い敲打打痕で、No.12では細い整形打痕である。

第5次工程 = 10本 (遺物No.14、15、16、17、26、27、28、29、30、恩賀2)

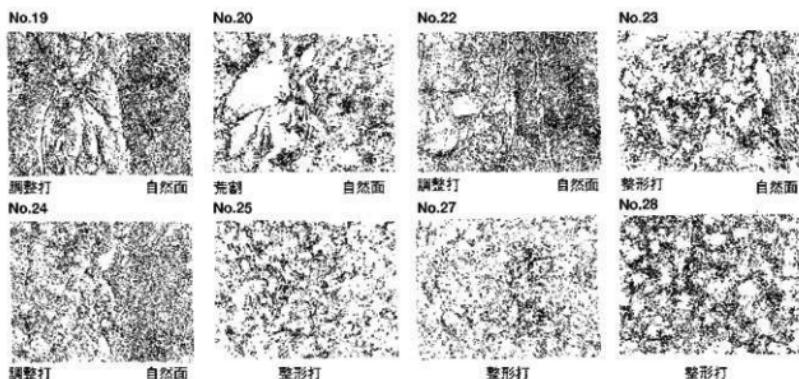
- ・断面円形
- ・加工も最終段階で完成品及びこれに近いものである。無頭、有頭石棒としての形態をなす。磨製品には敲打痕が全面に残る。
- ・自然面が残るものはほとんどない。
- ・無頭石棒では遺物No.14、26が他の遺跡から出土するものと比べると完成品に近い。
- ・有頭石棒では遺物No.15、16、17、29、恩賀2が該当する。全面に細かい敲打が行われる。恩賀2は基部加工があることから完成品と考える。磨製の有頭石棒は頭部の加工が更に丸みをもち、磨製とされる。痕は拓本No.15、16が有頭石棒で細かい敲打痕である。



第1図 初鳥屋遺跡石棒加工工程図（16分の1）



第2図 2の1 初鳥屋遺跡石棒胴部打痕拓本1 (4分の1)



第2図 2の2 初鳥屋遺跡石棒胴部打痕拓本2 (4分の1)

#### (4) 原石の供給と選択

##### ◎原石供給状況

大山の原石を初鳥居遺跡で利用できるまでには、様々な条件がある。その主な点は次の通りである。

- ・大山から供給される転石が沢等で適度の摩耗を受け適当な長さと太さを持ち、角柱ないし円柱に近い形となる。
- ・これらの作用により常に新鮮な石材が供給されている。
- ・前川、和美沢からこれらを得やすい状況があり、初鳥居遺跡の中でも両者に近い場所からの石棒出土が多い。
- ・大型石棒製作は、石材産出地に近い場所で行われる。
- ・砂防堤の無い昭和40年代以前にあっては、今日よりも多量の岩石が下流まで運んでいたことが考えられる。

以上の点を総合的に検討すると、供給ルートとして可能性の高い場所は、遺跡を貫流する前川、和美沢で、西野牧小山平遺跡のように山腹からの入手の可能性は少ないと考えられる。

##### ◎原石の状況

それでは前川、和美沢からはどの様な転石を石材として採取して来たのであろうか。遺跡に残る石材、未製品の形態と石棒に残る自然面を手がかりにそれを推定するが、その特徴からA類、B類、C類の3類の原石が想定できる。遺物はNo.1、2、3、4、5、7、8、11、13、14、16、18、19、20、21、22、23、24の計18本が該当する。

A類（角柱状で断面が方形ないし長方形の転石。=石棒4面ないし2面に平板な自然面が残る。）

1 角柱状石材で断面が方形に近いもの。No.13、20

2 角柱状石材で断面が長方形に近いもの。No.1、3、12（推定）、18、21、恩賀1

3 角柱状石材で断面が三角形に近いもの。No.19

B類（角が少なく円柱状に近い転石。断面は橢円ないし四凸のある円形。=2ないし3面に湾曲した自然面が残る。）No.7、8、14、22、23、24

C類（製品に比べ太い転石で自然面が片面のみに残る。=自然面は平板、湾曲がある。）

1 角柱状転石で断面が方形に近いもの。（隣接する凹凸の2面が残り反対側2面が剥離）No.2、5

2 角柱状転石で断面が方形に近いもの。（自然面平板）No.4、11

以上の分析により、本遺跡での理想的石材の形態はA→B→Cの順であると考えることができる。また、石材となる転石の規格は長さ約60~70cm、太さ約20~25cm程度、素直な角柱状転石が理想である。

次いで円柱状転石C類は完成品に対して転石が太い場合が考えられ、加工に手間がかかる事となる。

#### (5) 大山産石材の石棒分布

初鳥居遺跡からは完成品と思われる石棒はほとんど出土していない。しかし、他の遺跡から出土した大山産岩石の石棒は製品として流通したものと想われる。これらの製品分布については西野牧小山平遺跡のものと併せて検討すべき部分であるが、従来分布が知られていたのは次の通りである。

①矢川流域=初鳥居遺跡方面では初鳥居遺跡製作の特徴を備えた石棒は、その後、矢川流域では昭和53年西野牧小出屋で防火用水建設に際して出土した石棒1本、下仁田青倉から出土した1本がある。两者とも無頭石棒である。

②入山川流域=この時点での恩賀集落方面の出土は、恩賀集落から有頭石棒、無頭石棒各1本と數本分の破片が、松井田町小山平から2本の、坂本字入山重岡出土無頭石棒1本、同じく行沢出土無頭石棒1本等が知られている。

## 5 おわりに

今回、西野牧小山平遺跡の石棒製作遺跡の調査は、改めて初鳥屋遺跡出土石棒について報告する事となつたが、史料資料が中心で、詳細不明な点も多い。しかし、石棒の様な大型遺物の製作では、単にその岩石が存在するだけの状態では製作に結びつかず、岩盤から剥離、研磨、崩落、転石、継続的運搬等一連の自然との作業のかかわりの中で良好な石材が生み出され、効率よく利用できることが製作遺跡を成立させている点を見逃すわけに行かない。

また、大山東側の恩賀集落でも未成品、完成品（再生品）石棒が出土していることは、西野牧小山平遺跡の性格を検討する上で重要な点とともに、石棒製作に関わりがあったと考えるべきであるが、初鳥屋遺跡とは石材供給の点で差が見られ、遺物にその違いがでている。また、この地で特徴的な形態を示す大山の反対側で同様な営みを行う遺跡が存在することは、大山の持つ石材等の特性の他に、大山の名前など、山 자체が意味するものを行っていたのではないかとの考えもあるが、これを証明するものは得られていない。

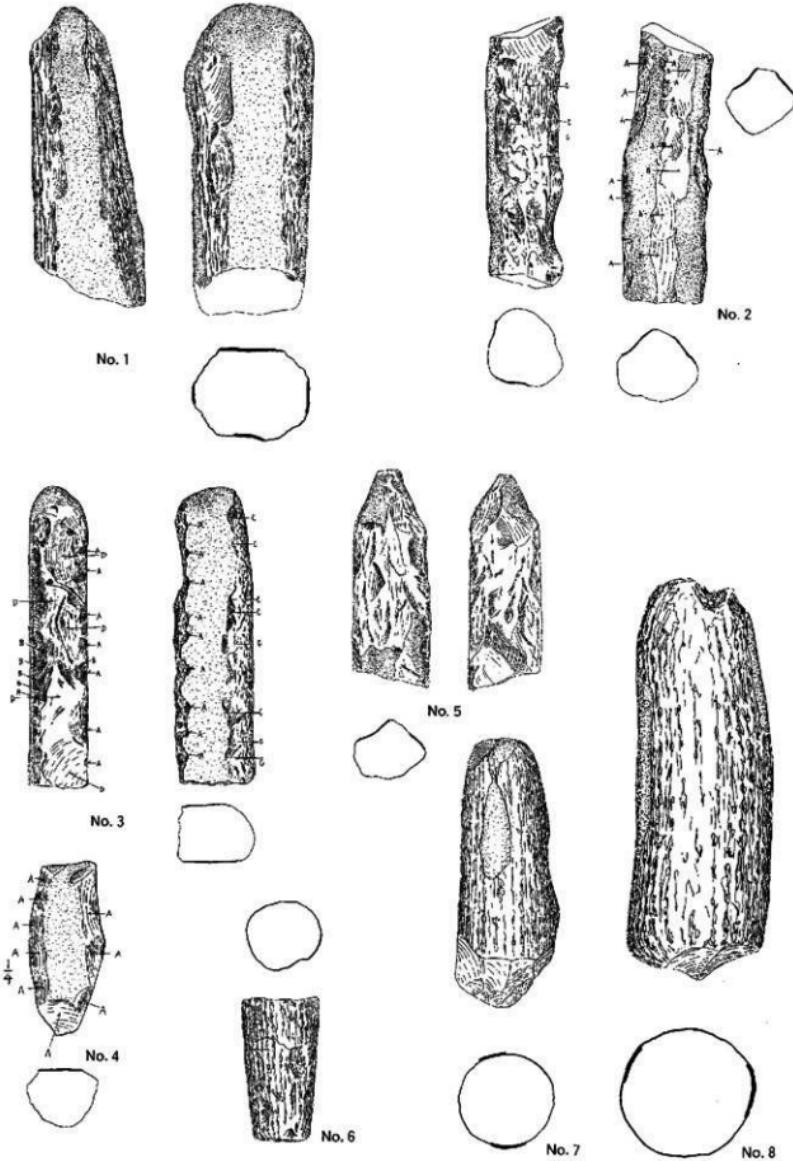
次に、ここでの石棒製作の時期と期間であるが、伴出土器から見て時期は小山平遺跡と矛盾するところはないが、出土土器が加曾利E II～称名寺式土器の時代を中心で、埴之内式土器など若干含むことから、期間的にはこれより若干長い期間製作が行われたと考えられる。また、無頭石棒と有頭石棒は時間差は無いと思われる。

なお、大山産の石棒製品の分布は碓氷川、鍋川流域に確認されているが、初鳥屋遺跡には鍋川流域の雄川竪点絵縁泥片岩性石棒1点と西野牧小山平遺跡で鍋川流域産岩石ハンマーがあることから、河川を通しての交流を何とせ、縄文時代の原石採取、加工、生産、交易の姿を示していると言える。

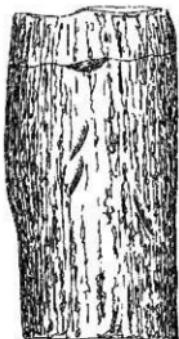
本報告は、冒頭述べたように古い時代の資料を再構成し、その後の資料を追加、掲載したものである。しかし、当時現地に存在した石棒数本の所在が明らかでないものがあり、結果として描かない学生時代の実測図を使用することになった。なお、文中使用の写真等については、一部を除き近年撮影したものである。

## 参考文献

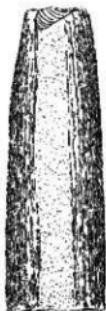
- 1 関越自動車道上信越線開通公共事業調査報告書 群馬県 昭和55年
- 2 松井田町誌 松井田町誌編纂委員会 昭和61年12月25日
- 3 下仁田今昔謡 折茂昌二 昭和34年3月10日
- 4 堀木考古学研究No.6 堀木黒岩考古学研究会 昭和39年10月20日  
「群馬県下仁田町初鳥屋出土の上製品についての考察」秋池 武
- 5 若木考古4号 國學院大學考古学会報 昭和40年1月24日  
「群馬県下仁田町初鳥屋出土の石棒」秋池 武



第3図 初鳥屋遺跡出土石棒1 (8分の1)



No. 9



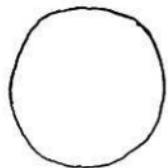
No. 10



No. 12



No. 13



No. 11



No. 14



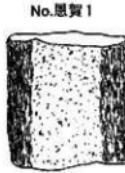
No. 15



No. 16



No. 17

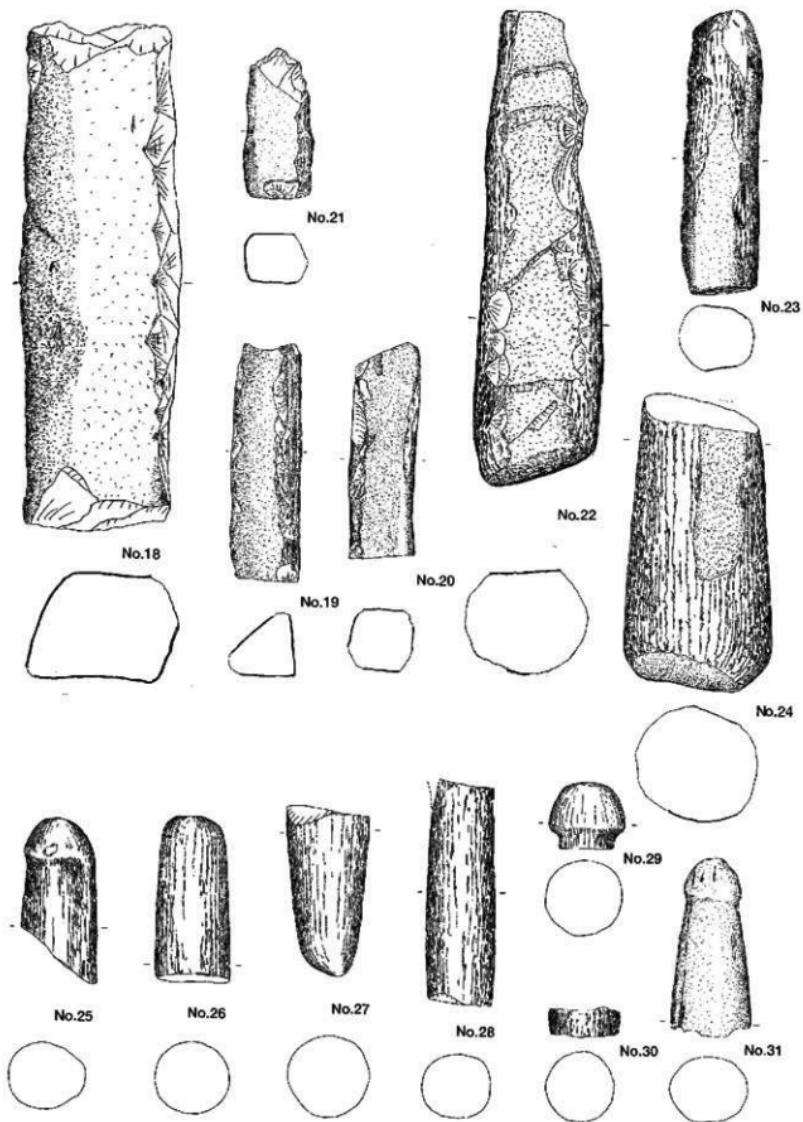


No. 18

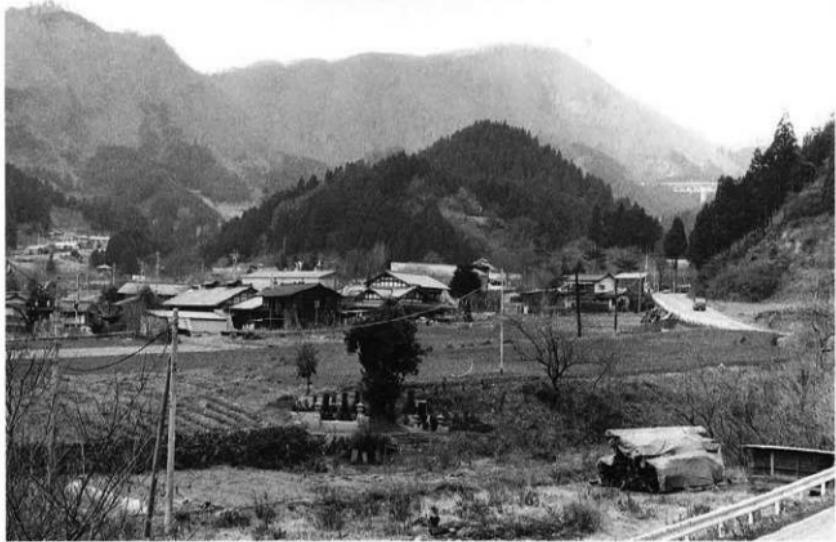


No. 19

第4図 初鳥屋遺跡出土石棒2（8分の1）



第5図 初鳥屋遺跡出土石棒 3 (8分の1)



No.1 初鳥屋道路南から北方を望む。右手奥の橋は高速道路



No.2 初鳥屋遺跡から東北にある大山を望む

## 初鳥屋遺跡

図版2



No. 3

和美沢に見られる  
転石

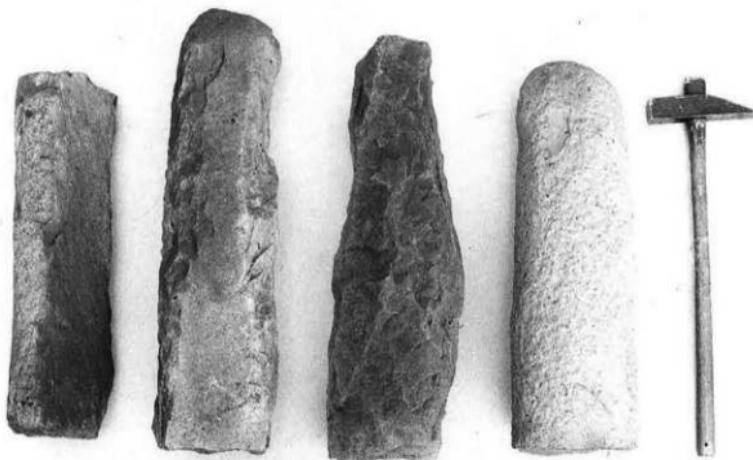


No. 4

和美沢に見られる  
B沢での転石



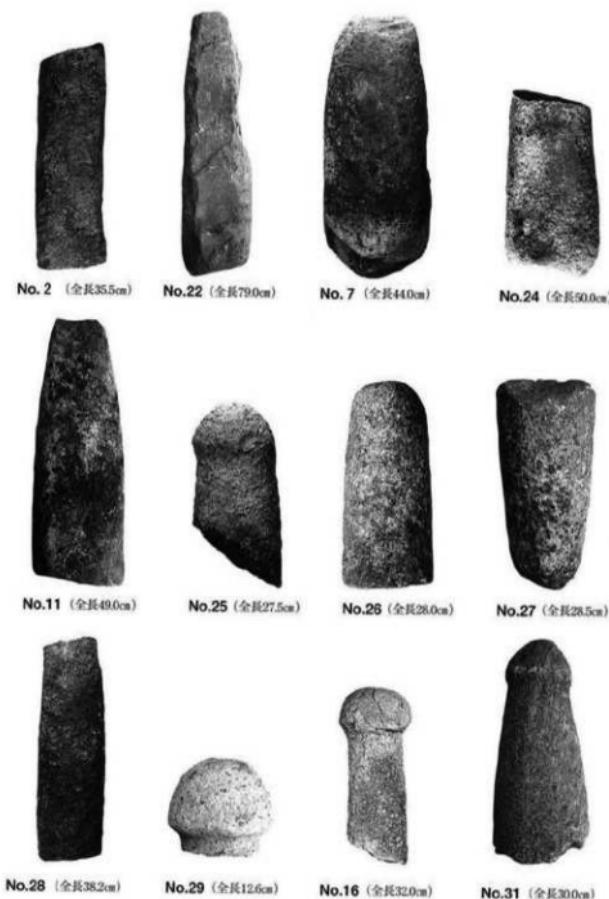
No. 5 前川での転石たまりの状況



No. 6 石棒未製品 右よりNo.12.2.3.19

# 初鳥屋遺跡

図版  
4



No. 7 初鳥屋遺跡出土石棒

横川大林遺跡  
(上ノ平遺跡)

横川萩の反遺跡  
(萩の反遺跡)

原遺跡  
(坂本遺跡)

西野牧小山平遺跡  
(恩賀遺跡)

-関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書-

印刷 平成9年3月1日

発行 平成9年3月31日

編集 山武考古学研究所

発行 日本道路公団

群馬県教育委員会

松井田町遺跡調査会

印 刷 佛文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日当台1-23-12

☎ (0476) 93-0593